ＩＳ 理不尽な翼

餅っち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ　理不尽な翼

【Ｎコード】
Ｎ２８６０Ｓ

【作者名】
餅っち

【あらすじ】
ある人物に転生憑依した人物の物語です。

ＴＳとか最強とか、最低系とかの内容を含みますので、読む方はご注意を。

アンケートの結果を活動報告に掲載してます。

後、私のブログ【餅○の趣味のブログ】というブログにて誤字や脱

字に表現を追加したりした改正版を掲載しております。
ですが、最新話はこちらに掲載されますのでよろしくお願いします。

第1話　原作をさブレイクせずに過ごそうとしても最初からブレイクされてたらどうしようもない

この春という季節は学校の入学式や始業式などの重要な行事が多い季節でもある。

そんな俺も例に漏れずに高校入学という、人生の中での節目ともいえる今日のこの日に、俺は多大なストレスを感じて入学式後の教室に座っていた。

俺が自意識過剰というわけではない、それは断じてないのだが、背中にビシバシと感じる視線、視線、視線、視線の数々。

動物園のパンダよろしく珍獣扱いとも言うべき状況下、今日室内は一種異様な緊張感にも包まれていた。

先生はまだ来ずＳＨＲが始まらない状況下、俺は【男子はたった一人】というこの空間でひたすらに時間が経つのを待っていたのだった。

何故ここに女性しかいないのか、それはＩＳ　インフィニット・ストラトスと呼ばれる兵器の登場で軍事バランスが一変したこの世界、既存の兵器が全て鉄屑となるほどの技術革新というべき兵器は、何故か女性にしか操縦が出来ないという欠陥があった。

最初こそ、その辺の欠陥で世の中に浸透するには至らなかったのだが、全てのミサイルが、何故か、日本に向けて発射された【白騎士事件】と呼ばれる出来事を通じて、世界はＩＳと呼ばれる兵器に一斉に注目して、その後、操縦できる女性の優遇政策が始まり、面白半分に報道したマスコミによって完全な女尊男卑の世界の出来上がり。

という状況になったわけだ、その上に各国は開発者が住んでいる日本に対してＩＳ技術の開示と、提供の義務化に加えて養成学校の創設までもを飲まされたのだ。

そして、ここはそのＩＳの操縦者を養成する学校といえば、もう俺の置かれた状況はわかるだろう。

そう、俺は【世界で唯一ＩＳを操縦できる男子】としてこの学校に入っているというか、入らされたというか、という状況だった。

ああ、一応自己紹介しておこうかね、俺の名前は【五反田　弾】だ、本来の原作なら主人公の親友ポジションで、平穏に暮らせるはずだった少年さ。

ＩＳ　理不尽な翼

第１話　原作をさブレイクせずに過ごそうとしても最初からブレイクされてたら意味ないよね

さて、ここで俺の状況について説明をしておこうか、俺は所謂テンプレ系転生者である。

ふざけているのかと思われるが今は聞いて欲しい、前世の俺が死ぬ瞬間とか、あのテンプレ系の極致といえる真っ白な空間で神と会話した記憶もあるし間違いはない。

因みに貰った能力は金色のガッシュの【アンサートーカー】で、デフォで色々なゲームや物語の魔法を扱えるようにしてもらい、身体能力もＦＦ７のクラウド並みに強化されている。

だが、俺はこれを貰って主人公たちと活躍する気など、全くなかった、逆に特典とか何も要らんから記憶を消して普通に転生させてと願ったくらいだし。

まあ、それは叶えてもらえなかったから、既にこの時に神の奴は俺を物語の世界に転生させることと、主人公と結構というかかなり親しい人間に転生させるということも聞いていたから、俺は貰う能

力に関しての遠慮が無くなった。
むしろもっと寄越せと言いたいくらいだったしな、主人公の近くにいるということは厄介ごとに巻き込まれるということ、だから厄介ごとの全てから逃げる為に力が必要と感じたわけだ。

無論貰った能力におんぶに抱っこという状態では限界なんてすぐに訪れるから、体も鍛えたし魔法の修行方法に関しての知識も神から与えられていたので、今ではＦＦ７ＡＣのクラウド張りのジャンプとか剣戟に、各種ゲームの逃走や補助といった魔法も問題なく使えるようになった。
ただし、アンサートーカーだけは発動条件が曖昧な上に、発動しても不安定だから使わないように自分自身で制限を掛けているけどな。

まあ、俺の置かれている状況はこんな感じで構わないだろうから、どうしてこの教室というか世界に俺しか男性のＩＳ操縦者がいないのか、原作主人公はどこに行ったと皆さんは思っているであろう。

俺はそんなことを考えて、廊下側に座っているある一人の少女へと視線を走らせる。

「……」

「……　（ニコッ）」

俺が視線を走らせた先に座っている少女、綺麗な黒の髪の毛をサイドテールにして、意志の強そうな目に均整の取れたボディラインとおっきな胸（これ重要ね）を持った少女がいる。

今は俺が視線を向けてきたことに気が付いているのか、ニコニコと笑い手を振っているのが、俺の幼馴染で名前は【織斑　一夏】そう、こいつこそが本当の主人公であるはずであり、本来の物語では男性のはずの女だった。

彼女とは所謂幼馴染の関係であり、初めて出会った時には驚いたもんだった。

何しろ知識の中では男の筈なのに、女の子だったんだから。

小学四年生のときに教室で出会い、二人切りとなった時に女ということが判明するのだが、その際に胸を触って確かめてしまったのは、今でも反省するところだろう。

だが、小学四年だというのにＡはあったのには逆にビックリという結果になったのだが、それゆえに、ジーザス、と呟いてその場に蹲ってしまったが、他の連中も分ると思うぞ、本当なら男なのに女だったという状況というのは。

まあ無論のこと、その場ではぶん殴られて気絶して、次の日から土下座で誤る勢いで誤って何とか許してもらえたのだが、後に中学生になって彼女の姉にこの事がバレて、まる２晩もの間命を掛け金とした鬼ごっこを経験したのは言うまでもない。

この時のことを考えると、未だに体に無意識に恐怖という名の感情から震えが来る。

一夏の姉は【織斑　千冬】というのだが、あの時に俺は怒り狂い阿修羅と化した千冬さんから逃げる為に、それまでに培ってきた能

力の全てを使って逃走に費やした。
　というか、逃げに徹していなかったら俺は開始数秒でフルボッコになっていただろうというのは、簡単に予想がつく何しろ、クラウドの身体能力にドラクエの魔法のピオリムを重ね掛けして、リリカルなのはの飛行魔法を駆使して逃げたのだが。

　あの人は引き離されるどころか、こっちが予想以上の力を持っていたことで嬉しそうな表情で追いかけてきたのだ、この時に俺は最初の理不尽から来る死の恐怖というものを味わった。
　何しろ俺は全ての力を使い息がゼェゼェと切れていたのに、彼女は顔を嗜虐的な笑みに歪めて息一つ切らさずにこちらを正確に追尾していたのだから。

　無論のこと、それから暫くもせずして捕まり、彼女からは意外なことに拳骨一発ですんだ。
　その理由がなあ。

『加害者は謝罪して、被害を受けた妹は既にそれを受け入れているからな、最初から拳骨一発で済ませる予定だった』

　じゃあ、あの殺気と怒気はなに!?　と大いに突っ込みたい気持ちに駆られたが、突っ込む気力さえ無くしていた俺は、千冬さんにされるがままという感じなってしまっていた。

　どうやらこの一件で、興味を持たれたらいけないウサミミカチューシャの天災女に興味を抱かれたようで、色々とあったのだが、誠

に勝手ながらここでは割愛させていただこう。

そんな出来事の全てを思い出して、今から考えるとなんで俺とこいつが仲良く出来るようになったのかは、わからないが世界の修正が入ったのかね、なんて考えてもいたりする。

そんなことを考えていたが、教室の扉が開いて教師が入ってくる。
ＩＳ学園は女子高といえる場所で、その例に漏れずに入ってきたのは女性の教師であった。

もちろん男性教師もいるだろうが、俺は正直に言って男性教師の方が良かったという思いは飲み込み。
入って来た教師を見ていた、身長は小さい上に顔は童顔で態度も

少々おどおどした様子もある教師、恐らくは教室内に漂う緊張感を感じ取ったのだろう。

自己紹介されて名前は分った、山田　真耶と言うらしい。

何も反応が無い生徒達に自分の言葉が届いていないのかと考えているらしく、オロオロして涙目になっていく山田先生の愛らしい姿、俺は彼女の様子よりもダボダボの服を着ていても激しく自己主張して揺れている彼女の胸に注目していた。

恐らくはEカップ！最高に眼福です山田先生。と考えていた俺の背筋に氷柱が差し込まれたような悪寒が走る。

ギ、ギ、ギ、と手入れのされていない錆びついたブリキ人形の如き動きで、視線を感じた方を見る。

「……（それ以上山田先生の胸を凝視したりしたら分ってるよね？弾）」

そこには阿修羅がいました、口元と顔全体は笑みの形を作っているというのに、目が全く笑っていない所か絶対零度の視線をこちらに向けてくる一夏さんが、そこにいた。

し、姉妹揃って怒らせると非常に怖いのは変わらないのね貴女達、などと考えて顔といわずに全身からダラダラと冷や汗を流していた俺は、再び錆び付いたブリキ人形と言うべき動きで顔を正面に戻す。

どうやら今は教室内にいる全員が自己紹介中の様子であったようで、一夏の奴も問題なく済ませていく。

「えーとでは、次の五反田　弾くん、お願いします」

「は、はいっ」

いつの間にか俺の番になっていたらしい、一夏に凄まれて少々（？）萎縮していた俺は、少しだけ大きめな声で返事をしていた。

俺の声を聞いた山田先生は一度ビクゥッ、と体を震わせて涙目で俺を見てくる。

え、なにこの可愛い生き物。などと思考が暴走しようとしていた俺は、寸での所で暴走は食い止められていた。

どうしてかって、一夏からの視線が怖いからさ。

「え、えっと五反田くん？　せ、先生きみの気に障ることをしちゃいましたか！？」

「え？　ああいや、山田先生なんでも無いですよ、ちょっと考え事をしていて驚いただけですから」

「ほっ、良かったです、じゃあ自己紹介をお願いします」

とっさに出てきた俺のごまかしの言葉に、山田先生は安心したよ

うに息を吐くと、俺に対して自己紹介をするように促していた。
山田先生の声に応えて、俺は立ち上がり教卓の前というある意味での特等席に座っていたため、クラスメイト全員の方を見ることになったのだが、想像以上に辛い。

このクラスには大体４０人近くほどいるのだが、それが全て女性で尚且つ彼女らの瞳は、こちらが何を言って来るのかという期待と言葉を聞き逃すまいとする様子で爛々と輝いているのだ。
緊張するな、とか楽にして自己紹介しろ、とか言うこと自体が無理な話というものだろうな。

……　原作の一夏君もこんな気分を味わっていたのだろうか？
この動物園の珍獣になった気分というものを。

「えっと、俺の名前は五反田　弾です。趣味はゲーセン巡りと楽器の演奏で、好きなものは肉じゃがで、苦手なものは織斑先生で、いってぇ！！」

「自己紹介の最中に何を変な事言っている、馬鹿者」

自己紹介の最中、俺が苦手なものを言っている時に飛んできた出席簿、それが俺の側頭部に直撃し、良い音を立てていたのだが俺には激痛が走る。
そして、まるでブーメランのように戻っていく出席簿を軽く受け取る、美女といえる女性教師、彼女こそ俺とガチンコでデスレースを行い勝利した化け物といえる女性【織斑　千冬】である。

俺が化け物と考えた瞬間、再び同じ位置に出席簿アタックが炸裂し、俺は悲鳴も上げることも出来ずにその場に蹲り、呻き声を上げることしかできなかった。

そんなこんなで、俺が蹲っている間に黄色い声が上がったりとか、千冬さんが軍隊張りの挨拶をかましたりとかあったんだが、誠に勝手ながら俺が聞いていなかったから割愛する。

そして今現在は3時間目の休み時間、休み時間の度に珍獣扱いされてきた俺のストレスはピークに達しており、何かがあれば爆発しそうな雰囲気になっていた。

その前の休み時間からストレスがたまり始めて余裕というものがなくなり始めていたが、この時2時間目が終わったときに一夏を連れて行ったポニーテールの女子生徒って、もしかしなくても篠々乃

箒だよな。

一夏が女になっているから、箒のフラグってどうなってんのやら。

「ちょっとよろしくて？」

女同士だから、禁断の百合の関係とか？　んな分けないな。

箒の目は普通に親しい友人と久しぶりに会話したい、見たいな輝きに満ちていたし。

「ちょっと、聞いていますの！？」

ふぅむ、困ったといえるのはこの状況だよなぁ、出来ることなら、あの日、一夏の胸を揉んでしまったあの日に戻って今日という日のフラグを叩き降りたい。

あの時、鈴の奴も千冬さんから貰った拳骨に便乗する形で、拳骨しやがったし。

『あ、あんた、私の胸は揉まないくせに！一夏の胸を何で揉むのよ！？』

などと言われて逆に困り果てたのを覚えている。
その上に自分の胸も揉めとか、言い出して一夏と大喧嘩を始めたから余計に困った自体にもなったしなぁ。

全く。

「ままならないよなぁ……　人生ってのは」

「いい加減にしてくださいまし！！」

「ん？」

あの時のことを思い出して少々欝というか、アンニュイな気分に浸っていた俺の机がいきなり激しく叩かれる。
まあ、気が付いて無視していたのだがな、こいつ今の女尊男卑の風潮の影響というもの顕著に受けていそうだったし。

名前は確か……

「セルシオ・アプリコット、だったけ？」

「全っ然！違いますわ！！私の名前はセシリア・オルコット、イギリスの代表候補生ですわ！！」

「へぇ……」

俺のいった名前は違っていたらしい、こいつは失礼と思いつつも声を掛けてきた少女を見る。

確かこいつも一夏ハーレムの一員じゃなかったか？　だけど今は男が俺一人しかいないから、俺に声を掛けてきたというところかね。

名前と容姿をみて初めて思い出したんだが、別に原作キャラとあんな血統まがいのことをしてまで仲良くなりたくないな、と考えていた俺は興味など元から無かったが、おざなりな返事で彼女の言葉に返していた。

「その返事は一体なんですの！？　代表候補生たるこの私の言葉を無視したばかりか、おざなりな返事を返すだなんて、私に声を掛けられたということ自体、光栄と思い相応しい言葉遣いがあるのではなくて！？」

「あ～　はいはい、光栄だからちょっと一人にして欲しいんだがな」

「……ッ！馬鹿にしていますの？　貴方」

「おう」

あ、やっべ、と思い口に手を当てて俺の視界に入った一夏も呆れ果てた様子を見せていたのだが、そんな俺たちの様子に構うこともなく。

セシリアは怒り心頭に来たらしく、白人系の白い顔を怒りで真っ赤に染め上げる。

「ここまで馬鹿にされたのは、初めてですわ……」

「ふぁ～　ん、なに？」

「どこまでこの私をコケにすれば……！！」

やばいとか一瞬考えたのだが、冷静になって考えれば、ここを追い出されれば俺の人生って逆に安泰じゃね、とか思う。

俺一人ならどこでだってどうとでも生きれるし、それに平行世界に渡る技術も俺は今は習得しているし、何かがあれば和人の世界に逃げればいいしね。

そんなことを考えて安心したのか、あくびが出て来てしまうのだが、これがオルコットの神経を更に逆撫でしてしまったらしい。

元々から怒りで赤く染まっていた顔を更に赤く染めていたのだが、その時にちょうど良く予鈴が鳴り響く。

「命拾いしましたわね！！次の休み時間を無事に過ごせると、思わないことですわ！！」

なんていう捨て台詞と共に去っていったのだが、完全に脅迫といえる内容だったのは俺の気のせいだろうか。

あ、一夏が溜息ついて頭抱えてるな。

まあ、どうにかなるだろ、なんて俺は考えながら授業を始める為に入って来た織斑先生と、山田先生の豊満な胸をストレス発散代わりに眺めようとして一夏の凄みを持った視線を感じて止めるのだった。

第1話　原作をさブレイクせずに過ごそうとしても最初からブレイクされてたらどうしようもない

……　連載を一つ抱えているのに、何を新たに連鎖を抱えようとしている。

自分にあきれを隠せませんが、まあ、生暖かい目で見守ってくれるとありがたいです。

第2話　あの天災いつかフルボッコにしてやんよ！と言いたい

行き成りだが俺は今機嫌が悪い。

まあ、休み時間にあんなことがあったんだから、無理もないと思う読者諸兄もいると思うが、俺の機嫌が更に悪くなっているというか、それを加速している言動をしている奴がいる。

「大体信じられませんわ！！男が代表などと！このセシリア・オルコットに1年もの間、屈辱に耐えろとおっしゃいますの！？」

そうあの高飛車お嬢様だ、本来ならば授業をするところだろうが、織斑先生の一存でこのクラスの代表を決めることとなったのだ。

まあ、代表というのはクラスの委員長的なもので、ＩＳを使った各クラスとの対抗試合で文字通りクラスの代表として戦う人間のことを指す。

自薦他薦は問わないという織斑先生の言葉が発せられると同時に、俺を推薦する人間が数人現れてしまうのだから始末に終えない。

恐らくは男子が俺一人という状況下が作用したんだろうな。

「大体私はここにＩＳについて学びに来たのであって、極東のサルと一緒にサーカスを行う為ではありませんわ！？」

お～お～言ってくれるねえ、なんて考えつつも推薦が上がったときには、俺は流石に異議を唱えようとしたのだが、顔面に出席簿がめり込み何も言えない状況を作られてしまう結果となった。
人体というか、頭部の構造的に物体がめり込むはずは無いんだが、俺の体ってどういう構造をしているんだろうか。

そう思いながら出席簿を抜いてめり込んだ顔も一緒に元に戻ると、とうとうお嬢様の日本侮辱というか自分以外の全ての侮辱トークはヒートアップしている様子だった。

「大体文化が後進的なこの国で過ごさなければならないということ自体、不愉快だというのに！」

「そこまでしとけや、世間知らずのお嬢ちゃん」

「な、何ですって？　今、なんと仰いまして？」

「もう一編だけ言ってやろうか？　世間知らずで無知なお嬢ちゃん」

「……　ッ！！！」

正直に言ってもう限界でした。
何しろ俺と言うか男の侮辱から始まって、日本という国とそこに

住む人たちの侮辱にまで発展したのだから。

よくもまあ、ここまで侮辱の言葉がスラスラと出てくるもんだ、なんてある意味で感心しつつもちょっと俺はキレていたりする。

確かに今は女尊男卑だろうさ、だがよ、物には限度ってもんがある。

こいつは自覚さえもしていないんだろうな、言動も表情も目も、全てがちょっと良い玩具を与えられて調子に乗っている餓鬼としか、俺の目には映らなかったんだからな。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２話　あの天災いつかフルボッコにしてやんよ！と言いたい～

俺の前には口を開いて開口一番に罵倒した俺を、怒りで顔を真っ赤にさせているお嬢ちゃんの姿。

怒りのあまり言葉にならないのだろう、口をパクパクさせて呼吸をしているかのように、尚且つ声無き声を発しているかのような様子を見せていた。

こんな剣呑な雰囲気が出始めたときの教師たちの様子はというと、まずは山田先生は涙目でオロオロと右往左往していて、織斑先生に至っては俺の発言も予想の範囲内だったのだろう、口元に笑みを浮かべて【良いぞもっとやれ】といっているようにも見えた。

教師がそんなんで良いのか、と2人に問いたい所だが、まだまだこのお嬢ちゃんに言いたいことがあるから、そっちを先にするか。

「大体、文化が後進的だと？　ハンッ、酒が無いとまともに食えない飯ばっかり作る様な国のどこが優れてるってんだ？」

「あ、貴方、私の国を侮辱しますの！？」

「あ～？　侮辱をし始めたのはそっちが先だろうが？　それともそんなことさえももう既に頭に入っていないのか～い？」

「ぐ、ぐ、ぐ、あ、あああ、貴方という男は……！！！」

「アーアー　キコエナーイ」

「……ッーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

こりゃすげえなと俺は思う、今やお嬢ちゃんは血管が切れそうなくらいに真っ赤になり。

必死で物か何かに当たろうとしているのを堪えている様子だった。

それにしても思うが、こいつって面白いなぁ、挑発してからかえばからかうだけ、こんな反応を見せてくるしからかい甲斐があるなぁ。

なんて考えてニヤニヤしている俺、視界の端には呆れ果てた表情で俺を見ている一夏の姿があったが、これぱっかりはやめらんないねぇ。

「いいでしょう決闘ですわ！！」

「おーう、別に構わんぜ？　吠え面かかせてやるよ」

完全に堪忍袋の緒は切れ果てていたのだろう、自分の机を思いっきり叩いてお嬢ちゃんはこっちを指差して決闘を宣言していた。

この言葉を聞いた俺の口には悪役が良く浮かべるような笑みが浮かんでいることだろう、自分で自分の口が変な笑みの形に歪んでいるのを自覚しているしな。

「まあ、良いでしょうイギリスの代表候補生であり、このＩＳ学園の試験官を倒した実績のある、この私が格の違いというものをお見せしてあげますわ！！」

「んぉ？　試験官を倒した？それは凄いなあんた」

「フフフッ、今更なんですの？　私の格と言うものを思い知ったのかしら？」

「いや、そうじゃない」

「ッ……　一々感に障る物言いをされるわね」

奴が言ってきた言葉は大体がどうでも良いものばかりだったのだが、その中に一つだけ見過ごせない言葉があった。

それは試験官を倒したというものである。

これは本当に凄いと思う、何しろ俺が聞いた上位実力者の試験官は。

「織斑先生を倒したんだろ？　あんた」

「……　は？　何を言っておりますの？　織斑先生が試験官としてお出でになるはずは無いではありませんか」

「あれ、おかしいな？　俺の場合はフル武装の織斑先生が殺る気満々で出て来てな、ガチンコで戦って試験時間を限界まで使って引き分けに持ち込むのが精一杯だったし」

『はぁっ！！！？』

俺の言葉を聞いた全員の口から驚愕の声が漏れる。

それと同時に視線が織斑先生へと向くのだが、彼女は戦闘中に浮かべていたあの嗜虐心に溢れているというか、サディストが浮かべる真性の笑みを浮かべて嬉々として口を開くのだった。

あれ、一夏も驚いているが、言わなかったっけか……　あ、言ってねぇや。

「本当だな、五反田の実技試験のみ私が担当した、他の教員方では

五反田に瞬時に倒される可能性が高く、データの収集も出来なさそうだったのでな」

「な、なんですって……　！？」

「弱小者と言える俺としては織斑先生と戦うのは、もう勘弁願いたい所なんですけどね」

「お前が弱小者だと？　爆笑させるな馬鹿者め、これからはここに居る以上は偶に模擬戦に付き合ってもらうぞ？」

「えっと、拒否権は「ない」デスヨネー……」

俺と織斑先生との間で交わされる会話に一夏を除く全員が呆然としていた。

一夏の奴の機嫌が悪いように見えるんだが、気のせいだろうか？

まあ、恋人という関係じゃないからヤキモチの類じゃないだろうし、気にすることは無いか。

などと考えていたら、あのお嬢ちゃんの位置から不気味な笑い声が響いてきた。

「フフフフフ……　そうですか、所詮はＩＳを手にしたばかりの素人を相手に全力で行くのは、愚かな事と考えておりましたが、良いでしょう、貴方は全力で二度と立ち上がれないくらいに叩き潰して差し上げますわ！！」

「えー……　めんどくさいな、手加減位しろよ（望むところだー受けて立つー）」

「本音と建前が逆だ、馬鹿者、そして心の内に隠された建前は棒読みで説得力というものが何も無いぞ」

少しというかお嬢ちゃんの様子はドン引きという他に無く、不気味だった。

そんなお嬢ちゃんの様子だったから、俺の返事はおざなりになるのだが、おざなりになりすぎて建前と本音が逆になってしまった。

こんな俺と織斑先生の様子『お前なんか眼中に無い』という様子で騙っているのは、丸分りなようであるようで、お嬢ちゃんはさらに肩をワナワナと震わせて何かを言おうと息を大きく吸い込む動作をする。

「オルコットと五反田の決闘は3日後になる、場所は第二アリーナを申請しておくから、各自体調を整えて万全の状態にして置けよ」

「りょ～かいっす、織斑先生」

「グッ、わ、分りましたわ……」

気勢を思いっきり削がれたお嬢ちゃんは、織斑先生の声に応えるとこっちを睨みつけて着席する。
まるでそれを見計らったように授業終了のチャイムも鳴り響いたので、先生たちは道具を片付けて教室を後にするのだった。

そして待ちに待った昼休み、全員がだらけていく中で一夏がこちらに近付いてくる。
両手には二つの包みを持って。

「全くもう、弾ってばどうしてあんなふうに挑発するのよ」

「悪いねぇ、というかちょっと場所を移動しないか？」

「う、まあ確かに、ね」

包みの一つを俺に差し出してくる一夏、どうやらこれは俺の分のお弁当らしい。

中学時代にたまに作ってくることがあったので期待できるなと、思っていたのだが、初日から味わえるとは幸運だね。

こいつは織斑先生が月に三度か四度くらいしか帰ってこないから、家事の類が得意になっていて、その中でも特に料理は一番の得意分野になっていたのだ。

一夏の料理はかなり美味く、中学時代にモテないと言うか女の影が欠片もない友人達に、嫉妬の意思を向けられてしまい一度だけおかずを一品強奪されたことがあるのだが、次の日からは一夏の弁当を見ても何も言わない所か、逆に祝福してきたことがあった。

この件は不気味だったので気にしないことにしている。

俺の机に置いたのが俺の分の弁当だということに周囲も気が付いたらしい。

嘆くもの、悔しさに身を震わせるものなどが教室中に湧いており、その上に俺と一夏の話に興味が全員あるようで、聞き耳立てる気ＭＡＸな状況でもあった。

「んじゃ、ちょうど良い場所もあるみたいだし行くとしようかね？」

「そうね、あ、ちょっと待ってもらえる？」

「おう」

「箒ー」

俺が立ち上がると一夏は箒（篠々乃と呼ぶと、あの天災も一緒に呼んでいる気がして呼びたくはない、いずれは話をして本人に許可を貰うかね）の所に行くと、どうやら昼を一緒に食べないかと誘っているようだった。

だが、箒はといえば苦笑を浮かべてやんわりとお断りの返事を出している様子であるのだが、この光景に違和感を感じる。

原作を読む限りじゃあ余裕の無い人格で、あんな笑みとかを浮かべる人物じゃあなかったと思うんだが、一夏が女だしかなりの部分で違いがあるのかね。

なんて考えていたら、入り口で待っている俺の所に一夏は戻ってくるのだが、箒の俺に向ける視線が何かに苦しめられている同士に向けるような、そんな同情というか同士を見るというか、というような変な視線が気になって仕方が無かった。

それから着いたのは、この学校の屋上である。
先程までハーメルンの笛吹きよろしく着いて来ていた女子たちは、自分たちのお昼がなくなることを悟ったのか、一部が購買に買出しに走り。
ちゃんとしたものが食いたいものは、食堂へと走っていった。

「んじゃ、いただきます」

「はい、いただきます」

弁当の蓋を開けたら定番のおかずが広がっていた。
出汁巻き卵にミニハンバーグとタコさんウィンナーと鳥のから揚げ。
標準的な弁当のラインナップである、一夏の方は女性だからか少々大きめなおかずの俺の方とは違い、小さめの弁当箱に野菜のサラダ形式で纏めた弁当にミニオムレツが入っていた。

うむ、いつも通りに美味い、なんて考えて弁当を食べていた俺の耳に呆れた様な溜息が響く。

「全く、あんな事しといていつも通りよね、貴方って」

「ん、何が？」

「……　ハァ……」

一夏がお小言を言ってくるが、今は目の前の弁当を食うのが先だ。
あくまでも今は弁当優先という俺の姿勢を見たのか、嬉しそうにしながらも呆れているという様子で、一夏は溜息をついていた。

「溜息ばっかついていると、幸せが逃げるぞ？」

「誰の所為だと思ってるのよ」

俺の言葉を聞いてまた溜息と頭痛を堪えるような様子を見せる一夏、このミニハンバーグうめぇ。

それから少ししして、俺たちは食い終わり食後のお茶を飲んでいる。
これも一夏が持って来ていた水筒のお茶を2人でのみ、まったりとしていた。

まあ、周囲には様々な学年の女子生徒たちがいて、一夏に羨望と嫉妬の感情らしき視線を向けている様子であった。

「で、大丈夫なの？」

「何が？」

「……　もう、セシリアさんとの決闘の事に決まってるじゃない」

「……　おお！」

「って忘れてたの！？」

いや、マジで忘れてた。

「あーもう！貴方って興味の無いことって人だろうと物だろうとすぐに忘れちゃうから、もしかしたらって思ったら！！」

「いやいや、悪かった一夏、ちゃんと覚えておくようにするから」

「ハアァァ……　その言葉を信じて私と鈴がどれだけ苦労させられたと思ってるのよ、まあ今は置いておくけど……　で、本題に戻るけど大丈夫なの？」

俺の様子を見てある程度は予測していても、一夏の予想を超えた位置の思考を俺はしていたらしい。

立ち上がって、信じられないといわんばかりにこちらへと詰め寄ってくる。

とりあえずはこれ以上お小言を貰うのはいただけないので、暫くの間は覚えて置くように努力することを約束する。

俺の言葉を聞いた一夏は、盛大な溜息と共に苦労の滲んだ言葉を吐き出してくる。

前半部はほとんど聞こえんかったから、分らんがはっきりと聞こえた後半部については答えられる。

まあ、答えなんぞ決まっているけどな。

「あれが織斑先生と同じくらいの実力者や、こっちがはっきりと分るくらいの覇気ともいうべき信念を持った相手なら、警戒に値するけどな、あれはそうじゃない」

「……　油断をしていると、足元を掬われるわよ」

「油断はしないさ、ただ全力で遊んで弄くり倒してから叩き潰す」

「それが余計に悪いって言ってんでしょ！？」

そう、俺はふざけているように思われるが、油断だけは絶対にしない。

油断している【フリ】はするけどな、俺が油断していると思い調子に乗って相手が気を抜いた瞬間に、ドン底に叩き落とすのが俺の流儀だからな。

あの嬢ちゃんには悪いが、俺がＩＳになれるための練習代替わりになってもらうとしようかね。

「まあ、姉さんとガチでまともにやりあえる弾なら、全く心配要らないと思うけどね……　弾」

「な、なんだ？」

あの中学の時のことを思い出したのか、少しだけ遠い目をしていた一夏だが、不意に彼女の様子が変わる。
再び感じた、あの背筋に氷柱が差し込まれた恐ろしい感覚を、そして俺は見てしまう。

口元や全体の印象では笑みの表情なのに目が笑っておらず、体全体から得体の知れない黒いオーラを漂わせている一夏の姿を。

ここで、腰の引けた言葉で一夏を呼んだ俺は悪くない、と思う。

「あの娘を戦い以外の事で撃墜したら……　ダ・メ、からね？」

ハイライトの消えた無機質な瞳をこちらに向けてそう言って来る一夏、彼女の言葉を聞いても俺は何の反応も出来ずに、体を小刻みに震わせていた。

だって、滅茶苦茶こえぇーんだもんよ。

だが、それを見計らったように授業の準備を行えと言う事を知らせる、予鈴がなったので一夏は雰囲気を霧散させて、俺も冷や汗をたっぷりとかいて、若干湿り気を帯びたシャツに不快感を感じながらも教室へと戻るのだった。

第2話　あの天災いつかフルボッコにしてやんよ！と言いたい（後書き）

感想で話題になっている一夏のヤンデレシーンですが、あれは実は消去の後書き直したシーンだったりする。

……　友人に書き終わったばかりのこれを見せたら【一夏怖すぎじゃね？】といわれたのがきっかけです。

ずいぶんとソフトな台詞と表現になったなぁ、と読み返すたびに思っております。

第3話　え、専用機ですか？　ちゃんと作ってます？　え、手抜きっすか！？

色々な出来事と厄介ごとに塗れた今日という日が終わり、俺は急に与えられた寮の自室へと戻ってきていた。

まあ、朝には大体というか原作知識で予想できていたから、準備万端に部屋に用意してきた、俺の荷物が教室で渡されたのだが、娯楽品と年頃の男の子が必要な夜のお供が綺麗に抜かれていたのは少々というか、かなりのショッキングな出来事だった。

というか織斑先生が持ってきたから、予想というか分りきってたことなんだけどな。

そんで俺は与えられた寮の部屋に行き、早速ベッドへとダイブする。

「おお！フカフカだ！！ウチの家の煎餅布団とはわけが違う！！」

そう最高にフカフカなのだ、このベッドはやっぱＩＳ学園は金の掛け方が違うねぇ。

なんて思いつつも俺は、シャワー室の扉を見つけたので、内部を確認しようと近付いたのだが。

どうして忘れていたんだろう、原作にもあったはずの【お約束】

というものを。

「誰かいるの？　シャワーを浴びてたからこんな格好でゴメンね、今開けるから」

この声が聞こえてきた瞬間、俺の体はシャワールームに続く扉の前でビシリ、と固まる。

声に聞き覚えがあったからだ、具体的に言えば昼休みに昼飯食っていたとき目の前にいた奴の声。

あ、開けないで！なんて考えつつも、思わぬことに固まっていた俺の口からは言葉が出てくることは無く、無常にも扉が開き、体にバスタオルを巻いただけの一夏が出てくる。

「へ、え、あ、ああ……　だ、だ……　ん？」

「ど、どうも……　す、素晴らしいスタイルをお持ちで……」

「へっ、あ、ああ！！」

扉が開いた先にいた人間が俺であったことが意外と言うか、予想外だったのか、一夏の方も呆然となっていた。

やはりデカイ胸にくびれた腰つきと健康的な尻、それらが風呂上りという状況下でより彼女の体を妖艶に魅せていた。

俺の言葉に一夏は我に返ったらしく、顔を真っ赤にして自分の体を隠すように抱きしめるのだが、それが余計に素晴らしい体を協調する形になっていることは、言わない方がよいだろう。

鼻の下が伸びそうになるのを堪えていると、一夏の顔が不機嫌になり。

「もっとロマンティックな状況なら兎も角……　み、見ないでよぉ！！」

「へぶぅ！！！」

素晴らしい右のコークスクリューブローが俺の左頬に炸裂し、俺はこんなことになった経緯を思い出しつつ、意識がブラックアウトしていくのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３話　え、専用機ですか？　ちゃんと作ってます？　え、手抜きっすか！？　じゃあ俺が魔改造しても良いってフラグっすね！～

全ての授業と先程ＬＨＲも終わり、全ての束縛から解放された解

放感からか、俄かに騒がしくなる教室内。
とはいっても、別の意味での騒がしさ、なんてのもあるんだろうがな、休み時間と同様に感じる視線の数々だが、俺はそんなものを気にせずに欠伸と共に体をほぐしていた。
背中や肩と言わずに全身から、小気味良い音が鳴り、こっていたことを体が教えてくれる。

「あ、五反田君、まだ教室にいてくれましたね、良かったです！」
「ん？」

とここで山田先生の登場、やはり素晴らしいおっぱいです。
授業のたびに凄んで来ていた一夏が何故か今はいないから、ガン見し放題なのは堪りませんなぁ、ゲヘヘヘ。
なんて考えながら、認識阻害系の術を使って俺は普通に山田先生と会話しているように見せつつ、ガン見しているのだが、山田先生のお言葉だけは聞かないとね。

「えっとですね、五反田君が今日から住んでもらう寮の部屋が決まりました」
「ん、俺の部屋が決まるのは、一週間後の話じゃあなかったですっ

け？　それまでは自宅から通学しろって聞いてたんですけど」

山田先生の言葉に疑問を返す俺だが、大体は予想がついていたので驚きはあまり無いのだが、やっぱ政府のお偉いさん達がいらん気を遣わせたんだろうな。

俺の疑問の言葉を聞いた山田先生は、俺の近くに更に寄ってきて息がかかりそうなくらいに近付き、耳元で囁くように口を開いた。

「ええ、そのはずだったんですけど……　五反田君は政府から何か聞いてますか？」

「いえ、何も」

俺は椅子に座っているのだが、山田先生は胸をまるで【当てているの】といわんばかりに腕に当てており、その柔らかい形が腕にあたって形が変わっているのを俺は感じ取っていた。

油断したら緩みきった顔になっているのは間違いないのだが、それを根性で抑えつつ山田先生の言葉に答えたんだが。

山田先生は困ったように眉を寄せていた。

「えっと、五反田君は事情が事情なのですから……」

「なるほど、世界で唯一ＩＳを操縦できる男だから、某国家とか亡企業とかに拉致でもされてモルモットにでもされたら大変だー　じゃあ無理矢理にでも寮に入れて保護しちゃえば良いんじゃない？って所ですか」

「そ、そうですけど……　それは身も蓋もなさすぎですよ」

俺の明け透けな言葉を聞いた山田先生は事情を見抜かれたことに対して、困ったようなそれでいて、事情を汲んでくれて嬉しそうな、そんな複雑な表情で苦笑いを浮かべていた。

と、ここで俺に純粋な疑問が生じる。

「山田先生、もちのロン俺は一人部屋ですよね？」

「え、と……　そ、それは……」

「緊急に部屋割りを変更したのだから、相部屋に決まっているだろうが馬鹿者」

そう部屋についての問題だった。

基本的にこの学園の寮は2人部屋か3人部屋の構成となっており、一人部屋というのは基本的に存在しないのだ。

無論俺は女子との相部屋でも構わないのだが、世間体というものは非常に厄介なものであるので、確実に俺は一人部屋となっただろうな、と考えて質問をするのだが、ここでターミネーターの脳内テーマに合わせて織斑先生が参上する。

「いや、世間体的に考えてもそりゃ無いというべきですかね？　織斑センセ」

「お前に世間体をどうのと問われたくは無いぞ、五反田」

「まあ、それはおいておいて、俺の荷物とかってどうなってるんです？　一応はこうなることを予測して、今朝準備だけはしてあって自宅においてあるんですが」

「それならば、私が既に取りに言っている、こいつだろ？」

「お、こいつっす、ありがとうございます！　織斑先生」

俺の荷物を取り出す織斑先生だが、ここで俺は荷物が異常に軽いことに気が付いた。

そう、まるで俺が必要としているもの（着替え以外）がごっそりと抜かれたような、そんな軽さだ。

「ああ、こいつの中に入っていた勉学に不必要な品物は全て抜いておいた」

「な、なんと言うことを！俺の生活の癒しだというのに！！」

「そのバッグの三重底の一番下にＦ１物のカバーとレーベルで偽装されていた数種類のブルーレイディスクはなんだ？」

「……　ナ、ナンノ、コトデセウ？」

「貴様、女子寮にナニを持ち込むつもりでいた？」

「オ、オトコノコノ、ヨルノキョウカショデス……」

険しいというか殺る目で俺を見据える織斑先生と、そのやり取りの詳しい内容が分らないのか、疑問符を沢山浮かべて首をかしげて、純粋に疑問を持っている様子の山田先生。

山田先生、貴方はそのままの貴方でいてください。

因みに、周りで聞き耳立てていた女子たちも山田先生と同様に分らない様子であったが、やっぱ箱入りの娘達ばっかだね。

なんてのを見ながらも殺る気に満ち溢れている織斑先生は、急にその威圧感と殺気を消し去り愉快、そう非常に愉快なＳっ家たっぷりの笑みを浮かべて、俺に対しての死刑宣告を発する。

「心配は要らんぞ、五反田……　そのブルーレイはお前の妹が『お

兄にはこんなもの必要ありません！！私がいるんですから！これは私が責任を持って処分してきます！』といっていたぞ」

「神は死んだー！！」

「あ、あの五反田君！？　どうしたんですか！！」

「クックック……　心配は要らないさ山田君、こいつは想定外な事態を悦んでいるだけ、だからな」

なんと、あの妹にバレていると言う発言だった！俺の妹についてはいずれ語るとする。

具体的には2巻くらいの冒頭でな。

という電波はさておいて、俺は血の涙を流しながら宝物たちの末路のことも考えていた。

間違いなくあの妹にバレたのなら、廃棄処分は免れまいがどこにいようとも手に入れる手段はある。

なんて考えていた俺の耳に突然、険しい表情を解き哀しげな表情を浮かべた織斑先生が囁いてくる。

「お前バレたのが私で幸運だと思っておけ、一夏にバレたのなら……　どうなっていたか、分からぬお前ではあるまい？」

「……　う、ういっす……」

「ならば良い、私としても教え子を、こんな間抜けな理由で喪いたくはないからな」

「お心遣い、感謝いたします！」

そう、一夏にバレるという最悪が二乗化された場合についていってきたのだから、俺は頷くしかなかった。

何しろ一夏は昔から俺がこういったものを持っていたら、ハイライトの消えた瞳で、俺の妹と一緒になってこれらを処分してきたからな、これを女子寮に持ち込んだことがばれれば、俺はＩＳ学園の周囲に広がる海の魚の餌になりかねない。

変な雰囲気になり始めたのだが、ここで山田先生が戸惑いがちに口を開いてきた。

「え、えっと、後ですね、五反田くんはしばらくの間は大浴場は使えません」

「そりゃ当然でしょうに、というか月に一回か二回程度で良いですから、外泊許可をもらえたら銭湯とかで、その鬱憤は晴らしますよ」

「だから、大浴場の使用は必要ない、と言うことか？」

「うっす」

それは俺の大浴場使用予定のことだった。
まあ、原作読んでいても思ったんだが、銭湯とか行けばよくね？
なんて考えていたから、これが山田先生の口から出てきたのは、好都合だった。

俺の言葉を聞いた織斑先生は、少しの間何かを考えるようなそぶりを見せる。

「良かろう、その時になれば私に言え、許可を出せるようにしておく」

「おお！ありがとうございまっす！！」

固唾を呑んで言葉を待っていた俺に織斑先生は、慈悲にあふれた言葉を掛けてくるのだが、どこか嫌な予感がせんでもない。

まあ、そんなこんながあったのだが、それから俺は部屋の鍵を貰って問題の場所へと行くと冒頭のことになるのだった。

そして、今現在俺の頭は暖かくて柔らかい何かに乗せられて、コークスクリューを喰らった頬には何か冷たいものが当てられているのを感じていた。
どうやら暖かい壁？　の方に俺は寝かされているらしく、そちらからは良い匂いがしてくる。

料理とかの良い匂いではなく、こう香水というか柑橘系の優しい香がしてくるので、もっとこの匂いを感じたいと思って俺は顔を壁？　に埋める。

「ひゃぅ！？　ちょ、ちょっと、どこに顔を埋めてるのよ……」

埋めたら、鈴の鳴る様な声で悲鳴みたいな声が聞こえてくるが、今はこれを感じたくて、よりまどろみに浸りたいという欲求が勝り、俺の意識は再び沈んでいくのだが。

「もう、いい加減にしなさぃ！」

「いっづぁーーーーーーー！！」

とここで怒声と共に俺は激痛を伴って、意識は急速に覚醒させられる。

なぜなら、右頬を何者かが指を弾く行為、つまりデコピンをかましてきたからだ。

しかも思いっきりやられたらしく、俺はゴロゴロと部屋を転がり、少し移動した場所で右頬を押さえながら、こんなことをした人間を見つける。

「……　もう、相変わらずえっちなんだから、これ、当ててね、弾」

「お、おう、了解」

そこには顔を真っ赤にして、唇を尖らせて俺を見ている一夏の姿だった。

俺は一夏からタオルとビニール袋に入った氷を受け取りながら、自分が顔を埋めていた場所が始めて分った。

どうやら俺は一夏の非常に大事な部分に近い所に顔を埋めていたようだ。

しまった！俺は最初に壁？　と思っていたものの存在を知ったと

きから、じっとしていれば良い思いが出来ていたということだ。

「なあ、一夏」

「しないわよ」

俺的にはもう一回して欲しくて、一夏に声を掛けるのだが、彼女から返ってきたのはにべもない返事だった。

顔を赤くしてプクッと頬を膨らませる一夏の姿、こうして見てると可愛いんだが、脳裏には時折現れるこいつのハイライトの消えた目を持った、あの恐い姿も一緒に浮かんでいるのだった。

それから暫く経ち、落ち着いた俺と一夏であるのだが、未だに俺の頬は氷を当てているのは言うまでもない。

「でも、弾がここにいるってことは私のルームメイトって事よね？」

「おう、そういうことになるな、織斑先生に指定された部屋の番号がここだったし」

「そっか……（まさか、姉さんがいやにニヤニヤして私に、一月以内に決めてみせろって、言ってたのはこのことなの？）」

一夏からの質問は当然のものであり、年頃の少女としては嫌なものだろう、むぅ～　という表現が適切な様子で考え込む一夏の姿を見ていた。

「だ、弾！！」

「な、なんだ？」

「わ、私頑張るから！！恥ずかしくてもきちんと頑張るから！」

「……？」

考え込んでいてどういう結論に達したのだろうか？　恥ずかしそうにしたりモジモジしたり、両手を頬に当てて体をクネクネしたりしていた一夏は、そう捲し立ててきた。

正直に言って訳が分らない、本当にこいつの中で俺との同居と言うこの状況下において、どういう想像が行われたのか大体の予想はつくんだが、聞いてしまったら何かが終わってしまうと俺の本能が囁いているから聞けない。

まあ、とりあえずは落ち着かせるのが先か、と思い俺は更に声を掛ける。

「なあ、一夏……」

「ね、ねえ弾、こ、こ、子供って何人「落ち着け」あぅ！！」

訂正、俺が声を掛けても落ち着かなかった。

それどころかより顔を真っ赤にして、目もちょっとやばいと表現できる様子で、答えてはいけないと本能が叫んでくる問いかけをしてくる。

そんな一夏に俺は、チョップを行うことで、落ち着かせようとす

るのだった。

「落ち着いたか？」

「……　え、と、うん」

「ならば良し」

外的な痛みという刺激でようやく落ち着いたらしい。

チョップをされた額を両手で押さえながら、一夏はこちらを見てくる。

因みにここで一夏の部屋着を紹介しておこう、上は薄手のピンク色のセーターと下は白いフレアスカートをはいている。

どうやら異性の俺がいることで、大分気を遣っているような格好である。なにしろ、この部屋にたどり着くまでに出会った女子たちは、まあ、眼福です。といえる格好だったし、例えばピンクの下着とか、水色の下着とか……　ムフッ。

「んじゃあ、シャワーの使用とかのルールを決めておこうか」

「あ、そうね、ついうっかりとかで空けちゃいそうだし」

「おう」

それから、俺と一夏で話し合い。
シャワーはまずは一夏が必ず１９～２０時までの間に使用して、俺は２０～２１時までに使うことが決まり。
着替えは必ずシャワーを浴びた際に脱衣所で済ませること、といったことが決定した。

「まあ、こんな所かね」

「うん、まあ分からないことも今はあるけど、それはこれから決めていけばよいよね」

「そうだな」

無事に話し合いは終わり、俺は背伸びをするのだが、背中に氷柱が差し込まれた感覚を感じて、俺の体は無意識に気をつけの姿勢をとる。

ギ、ギ、ギ、と問題の場所を見ようとする俺の行動を邪魔するように、俺の首にまるで蛇のような動きで一夏の華奢な腕が回される。
背中に、ふにょん、という効果音と共に胸が当てられるのだが、この感触を楽しむ間もなく、俺の耳元で小悪魔といえる声色で一夏が囁く。

「それにしても、弾、さっき私を落ち着けるときにチョップをした時に、何を考えてたのかなぁ？」

「な、なな、何も考えてませんよ？」

「クスクスッ、ねえ、弾ってね、えっちなことを考えると、ちょっと目元がいやらしくなるのって知ってた？」

「う、嘘ぉ！！」

「やっぱり、ねえ……　そのえっちなこと、ダレの事を考えていたのかなぁ……　ちょっとだけ、オハナシ、しようね」

その後のことは、思い出したくはない。

ただ一言言えば、一夏恐い、とだけ言っておこう。

そして、それから3日後、時間が経つのが早すぎとかの突っ込みはなしの方向でな。
この3日間のことを思い出すと、時折震えが来るから。
とにもかくにも俺はお嬢ちゃんとの決闘のために、アリーナで手抜きの俺専用欠陥ＩＳ【蒼穹】に乗り込んでいた。
何故手抜きだって、それは。

「なんで武装がハリセンだけ……？」

そう、武装がハリセン【のみ】なのだ、その上に初期化と最適化も済んでいない為に、絶対防御も発動していないこれ。
普通なら、あ、俺詰んだな、と考えそうというか最初はそう考えた。

「なんっじゃこりゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

と叫んだし。
まあ、ここまでされてはしょうがないな。

（転生した時に貰ったチートスペックをフルに使って、魔改造しちゃる！！）

などと逆に開き直って俺は、カタパルトに乗ってお嬢ちゃんとの対決の場所へと向かうのであった。

第3話　え、専用機ですか？　ちゃんと作ってます？　え、手抜きっすか！？

ＩＳが届くまでのやり取りとか、本番の決闘とかもろもろを、次回に丸投げ！

といった今回の話でした、次回でこのＳＳのタイトルの一つでもある、理不尽、というキーワードが炸裂します。

第４話　え、俺が負けたら奴隷？　んじゃあ、俺が勝ったらお嬢ちゃん俺の性奴隷ね

前半部分と後半部分のテンションの差がエライ事に……

後半部分を書いていたときに、ＰＳＰ版ペル○ナ２罪の特典ディスクの聖槍記騎士団を聞いていたからだろうか……？

第４話　え、俺が負けたら奴隷？　んじゃあ、俺が勝ったらお嬢ちゃん俺の性奴隷ね

多分俺のＩＳがこうなったのは、これなんだろうなぁ。

と俺は入学式のためにＩＳ学園の校門をくぐった日のことを思い出していた。

「ん？」

その日、俺がＩＳ学園の校門の片隅で見つけたのは地面から生えているウサミミと、一つのプラカードだった。

『引っこ抜いてあげてください　ｂｙ　不思議なウサギちゃん』

なんて書いてあったプラカードを俺は一瞥すると、他人が見たら馬鹿にしているといえる笑みを浮かべていた。

「なんだ、偽乳天災系痛い女の罠か」

と呟き全てを無視して校門の先へと歩いていくのだった。
ウサミミに漫画で良くある怒りマークが浮かんでいることも知っていたがな！

それにあの天災だけは何度か目の前に現れたんだが、食指が動かんというか、この俺があの豊満な胸を見ても主砲と本能がピクリとも反応しなかったんだよなぁ。
多分あれは偽乳だろ、なんて考えながら、クラスでの素晴らしい日々に俺は胸を高鳴らせていたのだが、結局俺は知ることはない。

「ふ、ふふふふふふふ……　そ、そっちがそうくるなら仕方が無いなぁ～　だっくん？　ちーちゃんにも頼まれたしね、アレでどこまで戦えるか見せて貰うよ～」

前髪で両目を隠して不気味な雰囲気でんなことを言っている天災がいたことなどな。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第４話　え、俺が負けたら奴隷？　んじゃあ、俺が勝ったらお嬢ちゃん俺の性奴隷ね、じょ、冗談です！冗談なんです！一夏さ！アッ……！～

あっ

という間に3日が過ぎた。

この3日間で起きたことといえば、おや、眼福な光景をたくさん拝んで一夏にお仕置きされてた光景しか浮かばないぞ？　あ、あれ、おかしいな目頭がなんか熱くなってきた。

「弾……　どうかしたのか？」

「いや、なんでもないぞぅ、箒」

ここで俺が箒と普通に会話をしていることに疑問を持った方も多いと思う、寮で初めての朝食をとった時に仲良くなったんだ。

主にあの【天災】に色んな意味で苦労を掛けさせられている者同士、意外に馬が合った。

それになぜかは知らんが、この箒って本当に対応とか人格とかが柔らかいのよね。

『以前に姉が言っていたのは貴方か、すまない、家の姉が大変なご

迷惑をおかけして』

『ゑ？』

これを聞いた瞬間、俺の心の中を支配したのは、ゑ誰こいつ？なにそれ恐い、ｅｔｃｅｔｃ……。

といった言葉が脳裏を凄まじい勢いで駆け抜けたのだからな、まあ、それからは普通に一夏を交えての自己紹介をして、篠々乃と呼ぶとあの天災も呼んでいるようでいやだから、ということで名前で呼ぶことも許可してもらえた。

だが、箒を名前で呼んだ後、一夏が少し恐かったのは何でだろう？　箒は触らぬ神にたたりなしを決め込んで、何もしてくれんかったしな、だが、まあすぐに機嫌は直ったから、良いんだがな。

「にしても、お嬢ちゃんはスタンバイオーケーなのに、こっちは専用機が届いていないから、ということで待ち惚けか……」

「仕方が無いだろう、あの姉のやることだから、ふざけ半分で届ける時間を遅らせているとも否定できないな」

「……　確かになぁ、というかそう考えた方が自然か」

「ああ」

因みに今現在俺たちがいるのは第三アリーナのAピットなのだが、一夏がいないことに疑問を持った人もいると思うだろうが、まあ、織斑先生に連れて行かれていて、俺と箒が二人っきりと言う状況にやむなくなっているという形なのだ。

既にここに来てから1時間、箒と俺はずっと待ち惚けを食らっていた。

まあ、普通の世間話程度なら箒も普通に応対してくれるから、待つこと自体は苦ではないし、待たされるがごとにイライラが募っていくお嬢ちゃんの表情を見ていると愉快度もアップするので、逆に楽しいんだけどな。

所で箒さんや、その仕方のないものを見る目は止めてくれんかね？　楽しいものを愛でるのはどこでも一緒だと思うんだけどな。

「ご、五反田くん！五反田くん！五反田くん！」

「お？」

自動扉が開いて山田先生が大きな胸を揺らしながら、駆け足でピット内に入ってくる。

眼福っす！と叫びたい気持ちを抑えているのだが、隣の箒からは軽蔑に近い視線が向けられているのは、まあ、気のせいだろう。

「んで、届いたんですか？　俺のＩＳが」

「は、はい！この先のコンテナで織斑先生と織斑さん達が待っていますので、来てください！」

そういって俺の手を掴んで走り出す山田先生と、その後を普通についてくる箒と一緒にコンテナがある場所に向かうのだった。

流石に途中で山田先生とは手を放したのだが、その時になんで山田先生は寂しそうな顔をしたのだろう。

特にフラグ立てみたいなことはしてないはずなのになぁ。

まあ、それは兎も角として、たどり着いたコンテナの所には一夏と織斑先生がいたのだが、何でコンテナが２つあるんだろうか？

原作では一夏の専用機だけだったんだが。

「来たな五反田」

「織斑先生、一つは俺のＩＳが入っているコンテナだと思うんですけど、もう一つは？」

「それは一夏の専用機も、一緒にあいつが持ってきたからだ」

「そうっすか……」

コンテナ自体も色分けされていて、俺から見て右側に蒼いコンテナと、逆の左側には白いコンテナがあることから、白い方は間違いなく一夏の専用機で恐らくは【白式】だろうな。

ということは俺の専用機はっと。

「織斑先生、俺の専用機ってのは蒼い方ですか？」

「ああ、そうだ五反田、今すぐにＩＳに乗り込んでアリーナに向かえ、初期設定と最適化は実戦の中で終えろ」

「マジっすか？」

「マジだ、というかさっさと乗れ」

「……あいさー……」

コンテナが開いた先にあったのは、真っ青な空をイメージさせる蒼穹ともいうべき色の装甲を持っているＩＳだった。

搭乗者が乗り込む位置の装甲が解放されており、いつでも乗り込むことが可能なそれに俺は織斑先生の理不尽さを感じつつも、ＩＳとの一体化作業を行う。

自分とＩＳが一つになる感覚とはこういうものなのだろう。

装甲が自身の肌となり全てのセンサーが俺の眼となり耳となる感覚、空をどこまでも飛べそうな開放感、訓練機に乗った時とは違う一体感、これが専用機というものなのだろう。

俺の口元が不敵な笑みに負が見そうになる、あの天災はやはり腐っても天才ということか、俺が初めてＩＳを起動させたのは、高校受験の当日だったから、あの日からこんな短時間で俺とここまで適合する機体を作るんだからな。

「……　弾、大丈夫？」

「心配ないさ、一夏」

「そっか、貴方が言うなら心配要らないね」

「そういうこった」

それまで黙って俺の様子を見ていた一夏が声を掛けてくる。
ＩＳに乗り込んでから一言も発しなかったから、心配になったのだろう。

搭載されているセンサーの一つが一夏の声の震えをキャッチして、俺に彼女が心配していることを教えてくれる。
俺はいつも通りに軽口で返すと、一夏の表情はやわらかい微笑となって声も同じように安心したものになる。

と、ここでＩＳからお嬢ちゃんのデータが送られてくる。

『――――――　戦闘待機状態ＩＳを確認、ＩＳネーム【ブルー・ティアーズ】中距離射撃型ＩＳ　特種装備有――――――』

ふむふむ、お嬢ちゃんのＩＳは射撃型か、だったら近接戦に持ち込めば勝率は跳ね上がるかね。
なんて考えながら俺はこのＩＳの武器一覧を呼び出すのだが、思わず叫んでしまう。

「なんっじゃこりゃあああぁぁぁぁぁぁぁーーーー！！」

「ど、どうした！？　五反田！！」

「ご、五反田くんどうしました！？」

「弾！なにかあったのか！？」

「弾、いきなり大声を上げてどうかしたの！？」

俺の大声にこの場にいる全員が何事かと尋ねて来るのだが、俺は黙って全員の前にＩＳの武装の一覧を見せる。

『武装：近接汎用兵装【ハリセン】』

「「「「……　は？」」」」

惚けたような全員の声が口から出てくるのだが、無理もないと思う。

武装がまともなブレードとかなら兎も角、ハリセンなんだし。

その上に悪いことは重なるもので、スラスターやら様々なものでさえも、全てのＩＳの悪い所をこれでもか！ってくらいに詰め込まれたような低性能だ。

……　詰んだかね？　俺って。

「織斑先生、俺にこのまま戦えって言わないっすよね？」

「逝って来い」

「んなご無体な！？　てか字が違うじゃん！！」

「やかましい、黙ってボコられて来い」

織斑先生からのご無体な言葉と共にリニアカタパルトへと、蹴り出される様にして俺はデッキへと追いやられるのだが。

（あの天災めぇ！そっちがその気なら……　魔改造しちゃる！！）

なんて事を考えながら、特典の一つであるアンサートーカーを発動させて、改造する為の道筋と俺が欲しい武装を作るにはどうすれば良いか、ということを質問し答えを得ながら、勢いよく射出されるのだった。

無論のこと、このＩＳコアがコアネットワークからの完全独立も、果たせる答えも得ながらではあるけどな。

そして俺はアリーナに着いて危なげなく着地する。
上を見れば額に青筋を浮かべたお嬢ちゃんがそこにいる。

「随分と遅れての到着ですわね、逃げたと思っておりましたわ」

「ほざけ、雑魚を相手にする戦いでどうして逃げなきゃならん？」

「ッ！いいでしょう、チャンスをあげようと思いましたが、不要のようですわね？」

『――――　警告！！敵ＩＳ射撃体勢に移行。初弾チャージ開始を確認――――』

ＩＳが警告を発すると同時に〈スターライトＭｋ?〉が俺に向けられる。

その銃口にエネルギーがチャージされていくのだが、そんな見え見えの軌道など避けるのはたやすいな。

「ハンッ、チャンス？　俺がお前さんにくれてやりたいくらいだってのに、か？」

「そうですか、ではお別れですわね！！」

不意を付いたつもりでお嬢ちゃんは、トリガーを引き銃口から真っ直ぐにビームが落ちてくるのだが。

俺は体を僅かに動かした程度の動きで回避に成功する。

「なっ！！」

「単調な射撃だな、お前さん代表候補生の訓練で何を学んだんだ？」

「減らず口を！！」

俺が完全回避に成功し、あまつさえ飛び上がって接近しようとしていることに驚きを見せるのだが。
本当にくだらないな、たとえ相手が三下といえども全力で挑むのが格上の礼儀のはずだと思うんだがな。

ここで俺の口調に疑問を感じた方に説明をしておこう、以前俺がアンサートーカーを発動すると、発動条件などが不安定になるといったことがあると思う。
その不安定さとは『発動させたら口調が変わり、珍妙なことが起きる』ということなのだよ、前回千冬さんから逃げる時に使ったときは、口調がオネエ言葉になった上に、クネクネとした体の動きになってしまったからな、無論その時に千冬さんにドン引きされたのは言うまでも無い。
まあ、発動条件も俺が心の底から願わないと発動してくれないから、とっさの時とかには確実に役に立たないと思えるしな。

今回はどうやら口調が嫌味っぽいというか、冷静系というか、そんな感じになっているようだな。

マシなもので良かったと本当に思う、ここで千冬さんの時みたいな口調と仕草にでもなったら……　うん、俺は社会的に完膚なきまでに殺害されたな。

俺が攻撃を避けただけではなく、逆に相手に既に接近していることに観客からは、歓声が沸き起こる。
お嬢ちゃんは俺の接近を許すまいと、背中にある四基のビットの内の2基を解放し、こちらへと向かわせてくる。

「踊りなさい。私、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

「流石に、こんな運動性能と機動性じゃ分が悪いな……　ん、何か言ったか？」

「こ、この……！！」

何かお嬢ちゃんがいっていたらしいのだが、自分の事に夢中になっていた俺は聞き逃していた。

何を言っていたのか別に興味も無いから、良いか。

どうやら原作と同じ様にあのビットはオールマニュアル操作で、使っている間はお嬢ちゃんは動けないというのは変わらないか。

というか、ある程度というか１対１なんだから、半自律型にでもして目標を追わせれば良いんで無いかい？　なんてツッコミは無しの方向なんだろうな。

なんて事を考えながら、同時にＩＳの魔改造も並列して行う俺も大概なもんだがな。

俺を全方位から囲んで撃ち落とそうとしているのか、上下から２基のビットがレーザーを撃って来るのだが、どの火線も単調で軌道が読みやすい上にビットの動き自体も単調といえた。

別にこのまま避け続けてもよかったんだが、流石に鬱陶しくなって来たので、ハリセンを召喚する。

その瞬間、お嬢ちゃんと観客達の時が、止まった。

「あ、ああ、貴方……　ふざけてますのっ！」

「真面目にふざけているが、それが何か？」

「ッ――――――――――！！」

「ちょいさー！」

「なっ！？」

そして俺は上から接近しつつ火線を放っていたビットの一つに接近、すれ違いざまにハリセンを一閃して、ビットの一つを撃墜する。

それを見たお嬢ちゃんの顔に、驚愕という名の感情が浮かびあがり、スタンドでも同じ様な感じになっていた。

実を言うとビットを切り裂いた俺もビックリだ、どうしてこんなので撃ち落とせたんだろうか？　ああ、このビットが脆かったかも知れないな。

驚きで固まっている内にもう一つも同じ様に撃墜すると、俺は更に接近しようとするが、我に返ったお嬢ちゃんは〈スターライトＭｋ？〉を構えてこちらに向けて放ってくる。

「もう、油断は致しませんわ……　貴方にはここで潰れていただきますわ！！」

（最後まで、油断してくれれば楽だったんだがなぁ）

そう言って今まで存在していたお嬢ちゃんの中の油断やら、過信やらが消えたのを確認した俺は、内心で愚痴りながらもより苛烈さを増した攻撃を捌いていくのだった。

所変わってここは先程まで弾がいたピットの中、一夏や他の者達が試合を映すモニターを見続ける中で、真耶が感心したような溜息をついてモニターを眺めていた。

「はぁ、凄いですね、五反田くん」

「いや、これくらいは出来て当たり前と言う所だろう」

「そうなんですか？　織斑先生」

初めてＩＳに触れてから3回目の起動だというのに、セシリアとほぼ互角の戦いを繰り広げる弾の姿に、千冬の表情に驚きは存在していなかった。

それどころか決まりきった結果しか出ない出来レースを見せられているかのように、不機嫌な様子を見せていた。

千冬の言葉が意外だったのか、箒は千冬に問いかけるのだが、そんな箒からの問いかけも即答ともいうべき速度で答える。

「当然だ、奴は訓練機とはいえ私と引き分けたのだ、これくらいＩＳの性能が低くても奴にとっては造作もないことだろう」

「そう、ですか……」

「それでも五反田くん、大丈夫でしょうか？　セシリアさんの動きが変わってから、結構被弾しているようですし……」

「それでも問題はないだろう、奴はタイミングを計っているだけだ」

「「タイミング？」」

「ああ」

千冬の口から語られる弾の戦闘能力について、箒は驚きとも困惑ともいえない微妙な表情をしていたのだが、モニターの中ではちょうどセシリアの動きが変わり、先程とは違って防戦一方に追い詰められているように見える弾の姿が映っていた。

そんな弾の姿に真耶は心配そうな声を上げていたのだが、千冬は唇の端を僅かに吊り上げると、真耶の言葉に応える。

奇しくも箒と真耶の言葉が重なるのだが、それを千冬は気にせずに頷きを返す。

「まあ、見ていれば分るだろう」

それから千冬の口から出てきたのは、はぐらかす様な答えであっ

たのだが、これ以上は答える気はないのか黙ってモニターを眺め始める。

２人も千冬が答える気がないと分った為か、モニターを眺めるのだが、ただ一人会話に参加していなかった一夏は、瞳に僅かに心配の色を浮かべながら、両手を胸の所に祈るように合わせていた。

（……　弾……　怪我だけはしないでね）

周囲で行われていた会話も気にせずに、彼女はただ弾の無事を祈っている様子だった。

それから３０分ほど経ち、状況はそれまでと変わることもなかった。
本気で向かってくるお嬢ちゃんの攻撃は、ＩＳが俺の反応についてこれていないからか数発被弾していて、シールドエネルギーも最初の約半分にまで減っていた。

「試合開始から３０分弱、所見で私を相手にここまで持たせたのは貴方が初めてですわ……　謝罪させていただきます、ここまでの実力を持つ貴方に対して無礼な態度を取り続けたことに対して」

「んな誠意の篭っていない謝罪なんぞいらん、興味もないしどうでも良い」

「……　さあ、終演と行きましょうか！」

お嬢ちゃんはビットを自分の周囲に待機させて、俺に対して賞賛の言葉を掛けてくるのだが、実際に興味なんぞ欠片も無い俺は軽く流して最後の魔改造の仕上げに集中していた。

こんな俺の姿にお嬢ちゃんは一瞬だけ何か、悲しそうな、泣きそうな顔になったんだが、すぐにそれを消して残っているビットに攻撃命令を下す。

再び攻撃が開始される中で俺は回避しつつも、反撃の機会を窺っ

ていたが、突然ビットの攻撃が止み〈スターライトＭｋ?〉からの砲撃が行われる。

「掛かりましたわね、これで、終演ですわ!!」

「チィッ!!」

俺は砲撃を避けた瞬間に嫌な予感を感じて、その場を移動しようとするのだが、ビットが動きを邪魔すると同時に、これまでの機動に耐えられなかったのか、スラスターが一瞬だけ加速できずにプスンという効果音でも出そうな感じで、何も起こらない結果になる。

お嬢ちゃんにとっては、たった一瞬であっても隙としては十分となる。

腰に残っていた2基が放たれる、こいつは【弾道型】か!そう思い回避しようとするのだが、時既に遅く俺は爆発に包まれるのだった。

ちょうど弾が爆発に包まれたとき、ピットの中では一夏が悲鳴を上げそうな表情となり、声鳴き悲鳴に近い声をあげる。
だが、千冬の様子に変化は見られず、逆にこれから起こるであろうことに期待する様子を見せていた。

「フン、ようやくか……　時間を掛けすぎだ、馬鹿者」

弾が爆炎に包まれた瞬間から、真耶と箒の顔は真剣で険しいものになっていたが、千冬の言葉を聞いて疑問符を浮かんでいた。
それは一夏も同様で、姉の方を怪訝な様子で見る。

「これからが、あの男の本領発揮ということだ」

そういった後、モニターに視線を移す千冬に続いて、全員がモニ

ターを見た時、そこには今までとは全く違う姿をしたＩＳがそこにいた。

俺は爆炎に包まれた瞬間に全ての作業が終わる。

やっとかよ、なんて考えながらもＩＳを再起動、再構築していく。

『――――――ＩＳ【蒼穹】再起動、再構築完了、これより貴方を完全なるマスターとして承認します』

その瞬間に俺が纏っていたＩＳは大きな変化を遂げる。

背中には１２基のビット兵器、俺の背中とビットの間には機動補佐用の蒼く輝く４枚の戦闘機をイメージした可変ウィング、足元も装甲の間にスラスターが追加されて、それまでのよく言えばスマー

トな、悪く言えば華奢な外見から大きく変化し、無骨な印象を与える足となる。

これでこのＩＳは完全に【俺専用】となる。この地上で誰も持ちえない俺だけの翼であり、全てのＩＳから解き放たれたＩＳともいえるもの。

全ての再構築が終わった瞬間のエネルギーの余波は煙を吹き飛ばすには十分だった、

煙が吹き飛ばされた俺を見たお嬢ちゃんの顔には、驚きという名の表情が浮かび上がっていて、何を考えているのかが手に取るように分る。

「ま、まさか貴方、今まで初期設定の機体で！」

「そういうことだ、まあ、ここからは俺のターンだ！お嬢ちゃん！！」

そう言った瞬間、俺は背面にある１２基ある遠隔射撃兵装【ドラグナー】の４基を解放し、お嬢ちゃんへと向かわせる。

「なっ！？　これはＢＴ兵器！！どうしてですの！？」

「答えると思うかい？　お嬢ちゃん」

「ビットを解放しているのに、貴方は自由に動けるというの！？」

お嬢ちゃんは咄嗟に自分もビットを開放して攻撃するのだが、それらは全て俺のビットに撃ち落とされる結果になる。

全てのビットが撃ち落とされたあと、俺のドラグナーの集中砲火に晒されているが、それでも代表候補生というべきか、回避しつつも防御して致命傷を避けているが、時間の問題か。

俺も同時に動いてお嬢ちゃんを追い詰めていくのだが、それが意外だったらしく、目を見開いて驚くのだが俺は近接用拳銃型火器【ファルシオン】を展開して、的確にブルー・ティアーズを撃ち抜いて行く。

「くっ！」

俺からの更なる放火に晒されたお嬢ちゃんは、表情を更に苦いものへと変えていく。

既にシールドエネルギーも底を付きかけているのだろう、ボロボロになりつつもお嬢ちゃんの目は死んではいなかった。

何とか勝利を勝ち取ろうと、一矢報いようと頭の中で計算を走らせているのは明白、やっぱ、代表候補生だね、お嬢ちゃん、いや、オルコットさんよ。

「まあ、お前は凄く頑張ったよ、オルコット……　俺みたいな存在そのものが理不尽でインチキをしているような奴を相手にさ……」

「え……？　な、なにを、言っていますの？」

俺の言葉を聞いたオルコットは一瞬だけ惚けた様子になるのだが、すぐに戦闘体制を取り直す。

彼女を追い詰めていたドラグナーはエネルギー補充の為に、一旦俺の元に戻っているが、再び別のドラグナー４基を解放する。

「だからこそだ、次の一撃で最後だオルコット！」

「望むところですわ！！この私、セシリア・オルコット、決して屈したりは致しませんことよ！！」

「良い台詞だ！」

俺の最後に決める言葉を聞いたオルコットは、ボロボロになった〈スターライトＭｋ？〉を構えて最後の攻撃を行う構えを見せていた。

そんな中で俺は近接戦闘用のブレードを展開、改造して俺の魔力を通すようになったブレードに魔力を纏わせ、ビームブレードといえる外見に変化させる。

「ハアアアアアアアッ！！！」

「ッは、速い！！」

それを正眼に構えた俺はウィングスラスター出力を全開にして、オルコットの懐に飛び込んだ。

そして、両手で握り締めるブレードを横薙ぎに一閃した。

次の瞬間オルコットが纏っていたＩＳはダメージ限界を超えたのか、自動解除されてＩＳスーツだけとなったオルコットだけが、その場に残った。

ＩＳが解除されて、全ての機能も解除されたオルコットは地面へと叩きつけられる運命になるのだが、さすがにそれは寝覚めが悪いので彼女を受け止める。

『試合終了！！勝者！五反田　弾！！』

この宣言が行われた瞬間、スタンドからは大きな歓声が沸きあがる。

地上に降りた俺は待機していた救護班に、オルコットを手渡した後、これから、どうしよう？　目立ちすぎたよ……　平穏な日々よグッバイ……

なんて事を考えて、ｏｒｚの体勢になろうとする体を必死で直立させて、ピットへと歩いて向かうのだった。

第４話　え、俺が負けたら奴隷？　んじゃあ、俺が勝ったらお嬢ちゃん俺の性奴隷ね？

……　今更チート過ぎじゃね？　とか考えている作者がいます。

反響が……　反響が怖いっす。

第４．５話　くそぅ、どうして俺が代表なんて面倒なことを……　こうなったら

えー　本来でしたら鈴が登場し、代表就任に関係しての話が展開されるのが５話だったのですが……

気分の赴くままに書いていたら、本編の最初の部分がこんな感じになり、こっちのインパクトが強すぎて鈴との再会シーンが印象薄くなる。
と判断しましたので、話を分けて投稿します。

５話の本編は今執筆中ですので、近いうちに投稿したい、と思います。

あと、かなりの病みの描写が入っていますので、苦手な方はこの話はスルーでお願いします。

第4．5話　くそぅ、どうして俺が代表なんて面倒なことを……　こうなったら

五反田　弾との決闘が終わり、部屋に戻ったセシリアはシャワーを浴びていた。

少々熱めに設定してあるシャワーから勢いよく滴り落ちる水滴が、この年頃の娘独特のものであり、白人特有の均整の取れたボディラインを表すようになぞって行く。

「五反田　弾……」

ただ一言、セシリアは呟くと顔は恋という名の、熱病に冒された少女の如く赤くなる。

その表情は少女とも女性とも言える娘をより魅惑的に魅せていた。

「今日の決闘……　私の敗北……」

思い出すのは今日の決闘の光景、完膚なきまでの自分の敗北であったが、不思議と悔しさといった負の感情自体は、あまり浮かんでこなかった。

それよりも逆に自分を打ち負かすほどの圧倒的な強さを持った男、という側面に彼女の意識は持っていかれていた。

「でも、最初からあの方の瞳に私は映ってなどいなかった……」

そして考えるのは弾の態度のこと、彼の目には最初から自分【セシリア・オルコット】と言う少女は映ってなどいなかった。

今から考えれば分る、冷徹でどこか冷めた目で自分を観察し、自分の内面すらも見透かすようなあの冷たい瞳を持っていた彼、そんな彼が見ていた自分という存在は所詮、ＩＳに慣れる為の踏み台、それ位にしか思われていなかったのだろう。

今まで出会ったどの男性とも違う、誰かに媚びることも無く、何かの強い意志が篭っていると言えるあの強い眼差し。

「父とは違う、強い男性……」

セシリアは思い出す。自分の父親のことを、彼女の父親は名家に婿入りした男性だった。

それ故に多くの引け目や柵があったのだろう、いつも他者の顔色を伺っていた人間で、そんな父を母も鬱陶しく感じていたらしい。

ＩＳが発表されて女尊男卑の今の社会が構築されたら、父の態度は今まで以上に加速した。

情けなく、威厳というものもプライドさえもなくなる父の姿を見て、自分は絶対に弱い人とは結婚しない、と幼心に誓ったのも懐かしく感じるほどの昔だ。

だが、そんな両親はもういない、３年前の鉄道事故で二人揃って亡くなったからだ。

どうしてその日に限って揃っていたのかなんて今はもう分からない、ただ言えるのは自分はあの日から茨の道を歩む事を運命付けられたという事だけだった。

莫大な両親の遺産を狙ってやってくる金の亡者どもから、遺産を守る為に必死で勉強をしながら藁に縋る思いで受けたＩＳ適正試験、そこで出た判定はＡ＋という非常に高い適正で、国から提示された条件も遺産を守ることにも好都合な条件ばかりだったので、飛びついて努力した。

そして日本に自分の専用機である【ブルー・ティアーズ】の稼動データを取る為に来日、そこでようやく出会えた。

「私の理想の男性……　五反田　弾……」

弾の名前を呼ぶたびに早くなる鼓動、心地よい熱を帯びる胸の内、知りたい、あの瞳に彼の中に私という存在を刻みたい。

そんな欲求が彼女の中で鎌首を擡げていく中、彼女は決意する。

弾という存在に自分を刻み付けて、自分を彼の物にして貰うのだ、と。

シャワーを終えて、明日のことを考える。
まずは今までの無礼を誠心誠意心を込めて謝罪してから、ですわね。

なんて事を考えて就寝した彼女は、次の日、気合を入れて入念に色々な準備をして教室に登校したのだが。

「お……」

「た～ちけて～……　オルコットしゃん……」

縄で簀巻きにされ顔はまるで撲殺死体のように、ボコボコに腫れ上がって教室に吊るされている弾の姿であった。

早速昨夜の決意が揺らぎかけた彼女を、誰も責められないだろう。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第４．５話　くそぅ、どうして俺が代表なんて面倒なことを……

こうなったら夜中に千冬さんの部屋に忍び込んで調教……　！？

い、いち！ぎゃあああああ！！！～

唐突だが今現在、俺は寮の壁に張り付き織斑先生への部屋に向かって、高速移動している。

あの後の話？　勝った俺が箒とか一夏とか山田先生達に褒められて、織斑先生からはもっと速く決めろとか駄目だしされて終わったさ。

でもな、その時に思い出したんだよ、あ！これって代表を決める決闘だったじゃん！となな、そこで早速俺は辞退しようとしたんだが、織斑先生の冴え渡っている出席簿の一撃が顔面に突き刺さって俺の代表が決定したんだよなぁ。

だけど代表って奴は部活の入部届けみたいな書類を出さんと受理されないのは知っていたし、昨日はもう既に受理する為の時間が過ぎていたからな、書類が織斑先生の部屋にあるのは知っているし、部屋の場所も分っている。

ならばヤル事は一つ！といわんばかりに、俺の行動は素早かった。

一夏が寝たのを確認後、黒い全身タイツに身を覆い、口元にスカーフを巻いて顔の下半分を隠し顔が分らないようにした後、夜間の可視性を高める為に暗視スコープを装着する。

そして一番重要な夜専用のジェット風船も懐に忍ばせて、忍者の如き動きを心がけて部屋を窓から飛び出した。

その直後、一夏がハイライトの消えた瞳になり、幽鬼の如き動きで起き上がったことを知らずに。

「ぐふっ、書類をオルコットの名前に書き直して、受理する窓口に置いた後、織斑先生の艶やかな寝姿も堪能させていただきますぜ……　げへへへ」

誰も聞いていないからか、俺の口からは欲望が駄々漏れに漏れていた。

寝姿を拝見した後、ちょっと暴走して風船使っても若さゆえの事故だよね！なんて考えて織斑先生の部屋にもう少しで到着という時に、俺は尋常じゃない殺気を感じて全ての体の動きが停止する。

「クスクスクス……　クスクスクスクス……　ねーえ……　こんなところでぇ、なぁに、してるの？　かな？　かなぁ？　だ～ん？」

地獄のそこから聞こえてきたと一瞬勘違いしてしまいそうになる

低く昏い嗤い声、聞き覚えの有りすぎる声を聞き、尋常じゃない恐怖で言うことを聞いてくれない体を俺は叱咤し、後ろを振り向く。

正直に言おう、振り向くんじゃあ、なかった……と。

「い、イチカサン……　そ、ソノニホントウハイッタイ、ドコカラ……？」

「クスクス……　フフフフ……　やだなぁ、弾？　ねえさんのへやに、何をしに行こうとしてたのかな？　夜の風船まで持って……」

そこにいたのは寝巻きである真っ白の浴衣を着て、両手に怪しく光る日本刀を持って、目はハイライトが消えて大きく開かれて、口元は不自然な笑みの形に歪んだ一夏の姿であった。

正直に言おう滅茶苦茶恐すぎる、白い浴衣を着て髪が下ろされている所為か、存在感が倍所か二乗レベルの恐怖感だ。

「このにほんとうのこと……　知りたいの？」

俺はとにかく話し合うことを目指して、一夏が質問してきたこと

に必死で首を縦に振っていた。
　こんな俺の様子を見た一夏の唇はますます歪み、日本刀の刀身をうっとりと眺めて口を開く。

「ほうきにね……　たのんだら……　こころよく貸してくれたの、だいじょうぶ、だよ……　ちゃあぁんと刃は潰してあるから……」

「ぜんっぜん大丈夫じゃ無いだろ！？」

「やかましい！この声は五反田か！何時だと思っている！？」

　思わず叫んでしまった俺、考えてみよう。

Q：ここはどこ？　　A：織斑先生の部屋の前
Q：俺の格好は？　　A：完全な不審者
Q：導かれる答えは？　　A：死

　ドアを蹴破る勢いで現れた織斑先生は、俺の格好と一夏の様子で、答えを察したのか、額に青筋が浮かび一夏の隣へと音も無く移動する。

「一夏、日本刀を一振り寄越せ」

「ウん、はい、姉さん」

「ふむ、刃は潰されているが、実に良い刀だな」

一夏から受け取った日本刀を数回素振りするのだが、その動きの全てが俺を冥府へと誘う動きにしか見えなかった。

今や俺は狩られるエモノになってしまった。

「ふむ、さて、こんな時間に女性の部屋に侵入しようとする、助平な男にはお仕置きをしなくてはならんな、久しぶりに姉妹の共同作業だな、一夏」

「うん、ねえさん……　がんばろぅ？」

「フフフフフフ……　さて、精々足掻き逃げ惑えよ？　五反田」

「ダッシュ！！」

そして俺は魔力に霊力と気まで遣って己の体を全力で強化、閃光といえる速度で駆け出したのだが。

後ろは殺気満々で追いかけてくる織斑先生に、瘴気を身にまとい、狂ったような笑みを浮かべて追いかけ来る一夏の姿。

無論すぐに捕まって……　そ、その後は……　お、思い出したくない……！！や、ヤメ！！

そして、気が付いたら俺はボコボコにされて、教室に蓑虫のように吊るされており。

偶然朝早く登校してきたオルコットに救出してもらうのだった。

因みに服は普通の制服になっていた……　誰が、着替えさせたんだろうか？

「それにしても、一体何があったんですの？」

「イ、イヤァ、ナンデモナイヨ！アッハハハハ！！」

「ち、ちょっとどうされましたの！？　冷や汗とお体の震えが凄いことになってましてよ！」

救出してくれて、傷の手当までしてくれるオルコットは当然の如く、俺の身に何があったのかを聞いて来るのだが。

思い出そうとした瞬間、体は猛烈な拒絶反応を見せてガタガタと体を振るわせる。

こんな俺の様子にオルコットは心配そうというか、心配しながら聞いて来るのだが、これぱっかりは事情を言えん。

言ったら俺、普通に変態扱いされるし、というか対応が柔らかくね？　オルコットの奴。

「ふう落ち着いた……　なあオルコ「セシリア、ですわ」ん？」

「セシリア、そう呼んでくださいませ、私も弾さんとお呼びさせていただきますから」

「べ、別に……　構わんが……　それにしても急だな、セシリア」

俺はそれからセシリアの謝罪を聞きながら、見えてしまったものに更なる恐怖を抱くことになる。

目が笑っていない一夏が俺を見ていたからだ、手に救急箱を持っていることから、俺の治療に来てくれたんだろうが……　ヤバイ、俺、とんでもない地雷を踏んだ？

『後で、オハナシ、しようね』

目でそう言って来る一夏に俺は少しだけ頷きを返すと、一夏はその場を立ち去っていくのだった。

第5話　一夏の白式は準第四世代型？　セシリアは第三世代ね、俺のは第蜂世代

サブタイのある一部分は誤字ではないです。

第5話　一夏の白式は準第四世代型？　セシリアは第三世代ね、俺のは第蜂世代

日も暮れてすっかりと夜の暗闇に包まれたＩＳ学園の校門前。
そこには、肩からボストンバックを下げた髪をツインテールに纏めて、勝気な瞳を持った少女がいた。

「ふぅん……　ここが、そうなんだ」

特に感情の篭っていない声が、まだ少々冷たさも感じる４月の夜風に流れていく。

「えっと、受付はどこになるんだっけ」

そういった彼女は上着のポケットから、地図と思われる紙を取り出すのだが、どうやら直す際にクシャクシャにしてしまったらしい。
何かが書かれていたであろう紙は、既に判読不能なくらいに文字が滲んでいたり、他にも大変なことになっていたりで、少々というか完全に大惨事、といえる紙面状況になっていた。

「読めないわね……　しょうがないか、入れば分るでしょ」

などといいながら校舎内に入っていく。

よく言えば、実践主義者、悪く言えば楽観的といえる少女は、足取りも軽く正面玄関へと向かっていていた。

（それに、待ってなさいよ！弾！）

だが、校舎に入ってから数分、少女【凰　鈴音】は完璧という言葉がつくくらいに、迷っていた。

先程から同じ光景の所をウロウロとしているにも拘らず、本人は進んでいると感じているのだから性質が悪い状況になっていた。

一向に姿を見せない目的地、それにじれてイライラが募っていく鈴音と、なぜか感情に合わせているようにユラユラ揺れるツインテール。

そんな状況もそれからすぐに変化を見せる。

「な、なに！？」

どこからか凄まじい、地鳴りみたいな足音が響いてきたからだ。
慌てた様子を見せて、鈴音は地鳴りのような音が鳴り響く方向を振り向く。

「だ、弾!?　……　まさか、私が来るのを知って、歓迎するつもりで!?」

そう彼女に向かって弾が走って近付いて来ていたからだ。
彼の姿を見つけた鈴音の表情は、一気に【恋する乙女】と表すべき表情となり、目をキラキラさせて頬を紅く染めて、近付いてくる弾を熱を持った視線と共に見つめる。

自身を見つめるのは優しげでいて、強くて頼もしい瞳（鈴音の妄想です。現実には血走った目、何かを耐えるように必死になって見開かれた瞳）をして。
口元は爽やかな笑みの形を取り、白い歯を輝かせ（鈴音の妄想です。現実は歯軋りをしていそうな歯の並び、完全に余裕がなくなって何かを耐えようにして限界まで開かれている唇）て穏やかというか、アメコミ風の笑い声を上げていそうな様子。
全身から漂わせる自分を大いに歓迎してくれている、嬉しそうな気配（鈴音の完全な妄想です。現実には殺気じみたオーラに気配、とてもじゃないが見れた姿ではない、間違いなく、見せられないよ！の札を全身に付けられるレベル）を周囲に漂わせている。

と妄想したのだった。

恋する乙女の乙女回路の暴走というのは侮りがたい、きちんと現実の弾が見えていれば、絶対にこんな考えは抱けないだろうから。

そんなことよりも、弾の現実の姿を一瞬だが見たというのに、どうしてこのような妄想が出来るのであろうか？　恋する乙女と言うのは不可解な面を持っているといえるだろう。

「……　弾……！」

鈴音の暴走は留まることを知らない、自分に向かって走ってくる弾の胸の中に飛び込むのだ、と言わんばかりに両腕を広げ、顔は何かを決意したものへと変化していた。

そして、２人の間の距離はゼロになった瞬間、弾は鈴音に気付くことも無く、横を素通りして、そのままいずこかへと走り去っていく。

「……　へ？」

弾が通り過ぎた後の鈴は、抱きしめられる【予定の】恋する乙女全開のポーズと言う間抜な姿を晒して、そこに呆然と立っているのだった。

因みに、弾は何が原因でこんな状況になっていたかと言うと。

（男子トイレはぁ！！！まぁだぁかぁぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーーーーーー！！！）

既に大の意思を知らせる腹の痛みはレッドアラートを示して、所謂【大ピンチ】な状況だったりする。

もう一つ因みに、その後の弾がどうなったかと言えば、大惨事は免れて間に合ったとは言っておこう。

ただし、全ての事が済んだ後に弾は、鈴音が妄想していた時とまったく同じ姿で手を洗っていたので、強ち鈴音が妄想していた弾の姿は間違いではなかったりする。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第５話　一夏の白式は準第四世代型？　セシリアは第三世代ね、俺のは第蜂世代っすよ～

それから暫くの間セシリアと談笑してからやって来たＳＨＲの時間、昨日の代表決定戦の結果発表とも言うべき時間でもある。

「それじゃあ、このクラスの代表は五反田　弾くんに決定です！皆拍手！」

嬉々とした様子で俺に言ってくるのは、山田先生である。
他の女子の皆様方も非常に盛り上がりを見せているのだが、俺の顔面には相変わらず出席簿がめり込んでいた。

そりゃぁ、辞退しようとか考えたんだけどですね、織斑先生……
問答無用はないっしょ。
それにクラスの皆なんて、既にこうなった俺の扱い方を心得てらっしゃるし。

「先生、少し宜しいでしょうか？」

「はい、オルコットさん」

顔面にめり込んでいる出席簿を抜いて、顔を元に戻した後、セシリアの奴が質問をするようで、挙手しているのだが。
なんなのかね？　質問ってのは。

「先生、これから“弾”さんはわたくし達の代表となるのですから、彼に専属のコーチを付けたいと思うのです！」

「あ、それは良い考えですね、五反田君は先日の戦闘は見事なＩＳ操作を行っておりましたが、まだまだ磨けば大きく光る面が多い生徒ですから」

「確かにオルコットの言う通りだろう、五反田の戦闘能力については何も問題が無い以上、後は操縦技術の問題だな」

それは俺に専用のコーチを付けたいとか言い出すセシリアだった。別にいらんとは思うのだが、確かに織斑先生のいうことにも一理あるな。

俺って昨日のセシリアとの戦いは大半の回避が勘によるものだし、魔改造の後なんて機体性能を利用した徹底的なゴリ押しだ。

「まあ、確かにセシリアの言うことも分るけどな、俺ってＩＳの操縦は全部勘頼りだったし」

『はぁっ！？』

「はぁ……　（やっぱり）」

「そんなことではないか、と考えていたが、まさか当たっているとは……」

俺が言った常識はずれともいえるこの言葉に、クラスの女子達全員が驚愕と言う名の感情に包まれて、一夏と箒は呆れた様子で俺を見ている。

そんな中で、俺の発言を特に驚いた様子もなく見ていた織斑先生が、全ての空気を切り裂くように咳払いをして、雰囲気を変える。

「やはりな、お前がきちんとした理論でＩＳを動かしていたとは微塵も思わんかったがな」

「……　思われてなかったんですか……」

「貴様の普段の行いを考えろ、この理不尽生物が」

「それは酷過ぎやないっすか！？」

ええい！この天然チートが！！と俺は叫びそうになるのを堪えていたのだが、俺と織斑先生以外の連中が、別の方向を向いていた。

そこを見た俺は、正直に言おう、竜虎相対するの図ってこういうことなんだ。

とやけに納得していた。

「へぇ、そんなこと言ってさ、オルコットさん……　貴女が弾の専属コーチになろう、とか考えてない？」

「あ～ら何を言っていますの、織斑さん？　貴女と弾さんは所詮幼馴染の関係と言うだけですわ、それにＩＳの起動経験自体が半年にも満たない貴女がコーチをするとでも？」

「クスクス、面白いこと言うよね……　オルコットさんって、確かに私は経験はそんなにないよ、でもさ何も私一人で弾の専属コーチをやるわけじゃないから、ね、箒？」

「わ、わわ、私もか！？」

果たしてそこにあった光景と言うのは、睨み合いバチバチと火花を散らせているセシリアと一夏の姿であった。

最初こそ、すげぇなセシリアの奴、一夏と互角に眼力でやりあっているよ。

なんて的外れも甚だしい事を考えていたのだが、ちょっとは考えて欲しい。

一夏の奴はアノ織斑先生の【妹】だ、ここで言えば分るよな。

そう怒らせたりとか、それに準ずる行為をしたら滅茶苦茶恐い眼力を持つんだよ、この娘ってさ、その事は今までの話を見てもらえれば判ると思う。

そんな眼力と言うか、俺が主にやらしい事をした時に向けられる

ものとは、比較にならない眼力がセシリアに向かって向けられているんだがな。
それを柳の風と言わんばかりにセシリアは受け流して、逆に涼風が吹いているような表情で、いるんだから、大したもんたよ。

一夏によって巻き込まれて、間違いなくとばっちりと言える箒は俺に助けを求める視線を求めてくるのだが、その視線を自然を装って逸らす。
さらなる箒からのキツイ視線が俺に突き刺さるのだが、それにはあえて気付かないフリをした。

「あら篠々乃さんがどうしたと言うのですの？」

「名字で分らない？　彼女は篠々乃　束の妹なんだよ」

「ちょ！？　一夏！！」

「な！？　あの篠々乃博士の！！」

おいおい、こんなキャットファイトと言える状況で個人情報をばらすんじゃないぜ、ベイビー
などと考えていたのだが、一夏の言葉を聞いたほかの女性とたちはというと、何故か黄色い声を上げていた。

『えっ、篠々乃さんって、あの篠々乃博士の妹なの！？』

『そうなの！！じゃあ、このクラスには有名人が三人もいるってことじゃない！？』

『そうだよ～！織斑先生に篠々乃博士の身内に、世界でただ一人ＩＳを操縦できるごたち～　もいるしね～』

『うんうん！私達は他のクラスに情報を売れるから、このクラスって本当に一粒で二度美味しいよね！』

などなど、と言った言葉の数々が女子達から大きく出てくるのだが、女子たちの騒ぎは留まることを知らず、一夏とセシリアは互いを睨んだまま、バチバチと火花を散らせる状況が続いていたのだが。

教卓をまるでというか鉄製の棒か何かで思いっ切り叩いたような音が、教室中に鳴り響き、それまで騒いでいた女子達はいっせいに静かになる。

全員が教卓の方をブリキおもちゃのような動きで見ると、そこには額に青筋を浮かべて怒っているらしい織斑先生の姿があった。

「いい加減にしろ！最初は五反田のコーチに関してのことだったはずだ！無闇に騒ぎを広げるんじゃないこの馬鹿者共が！！」

「いったぁ！！」

「なんでわたくしまで！？」

「わ、私もですか！？」

鋭い怒鳴り声一閃、突然の大きな音と大声に身を竦ませた３人娘の頭に、織斑先生の出席簿アタックが炸裂する。

それにしても本当に箒って、とばっちりだよなぁ、原作よりももっと不幸な目にあってないか？　もしかしたら、束さんに連れ回されたのかも知れんな。

そう考えれば納得はいくな、あの時に箒が頭を下げた時の雰囲気は、まるでこう言った事で何度も頭を下げてきたようにも感じる。

……　箒にはこれから何があっても優しく接してやろう、まあ明日辺りにでも有名所の店の和菓子とお詫びの品、アクセサリーの類で良いか。

それを送ってやろう……　でないと余りにも彼女が不憫すぎる。

「五反田のコーチに関しては貴様ら３人がローテーションを組むなりして対応しろ！それと織斑」

「は、はいっ」

「お前に至っては五反田と同じく決闘当日に専用機を手に入れた初心者だということを覚えておけ！五反田がＩＳの操縦を習っている時に、お前も一緒に篠々乃とオルコットにコーチしてもらえ！」

「わ、分りました……」

流石の一夏も恐怖公チフーユと呼べる織斑先生には、叶わない様だな。

なんて考えていた俺の顔面に再び出席簿がめり込む。

……　またかよ。

「五反田……　貴様、今失礼にも程がある事を考えていただろ」

「く、口には出してないっすよ！？」

「ほぉ……　肯定したか……　では今日の放課後は空けておけ、私が直々に指導（と書いて私刑と呼ぶ）してやる」

「お断りします」

「ククク……　腕が鳴るな、久しぶりに全力でいけそうだ」

「聞いちゃいねぇ……」

つ、詰んだ……　俺は織斑先生からの言葉を聞いたとき、そう思う。

周りの皆様方は織斑先生の様子にドン引きの光景であるようだが、一夏達も引きながら俺と目を合わせ様としてくれない。

だよなぁ、恐すぎるよなぁ、スイッチの入った織斑先生ってさ。

所変わってここはグラウンド、これからＩＳの操作実習があるからだ。

え？　あの後のことって？　チャイムが鳴ったら元に戻ったよ織斑先生は、それからグラウンドに集合と言ってから教室を後にしたし。

目の前にはジャージに着替えた織斑先生と、同じくジャージに着替えている山田先生、嗚呼……　ダボダボなジャージを着ているからか山田先生の素晴らしいおっぱいが拝めない。

そう俺は心の中で泪を目の幅一杯に流していたのだが、３人の女子（具体的に誰かは言わない）からの視線が白くて凄みを帯びてるのは、気のせいだな！うん。

だって他の女子は俺の山田先生への視線に気が付いてないし、本人も俺の視線の意味に気が付いていないしな。

「では、これよりＩＳの基本的操縦の一つである飛行操縦を実践してもらう、オルコット、五反田、織斑等３名の専用機持ちに実践してもらう、展開後飛んで見せろ」

「「はい！！」」

「了解っす」

織斑先生の言葉にセシリアと一夏が勢いよく返事を返し、俺が遅れる様にして返事を返していた。

それから俺とセシリアがほとんど同時に展開を完了していたのだが、一夏の方はというと左手に装着されている白式の、待機状態の腕輪が嵌められている部分に手を当てて、集中している様子だった。

だけどこりゃ力が入りすぎだ、展開できるものも出来ないぞ……

変な所で緊張するからなこいつって、しょうがない。

「一夏」

「っ！？　な、何、弾？」

「力を入れすぎだ、肩の力を抜いて一度深呼吸でもしてから、自分の体の上に上着とかを纏うイメージでやってみろ」

「……　うん！」

変に緊張している一夏に、俺は優しく声を掛けて、緊張を解そうと心がける。

俺の言葉に頷いて、それから一度深呼吸をした時に、緊張は良い具合で解れたらしい、再びイメージを集中した一夏の姿に変化が起きる。

光が迸ると一瞬といえるくらいの速度で、一夏のＩＳ白式の展開が終わっていた。

「織斑」

「は、はい……」

「お前はまだ2回目の起動だからな、次はしっかりとやれ、五反田、もしくはオルコットも同じ専用機持ちだから、面倒を見てやれ」

「了解です」

「はい、分りましたわ」

織斑先生の言葉に少しだけシュンとなる一夏だが、俺とセシリアの言葉を聞いて少しだけ嬉しそうな表情になる。

「よし、飛べ」

全員が展開したのを確認した織斑先生は、ただ一言、俺たちに指示を出す。

それから俺たちは飛び上がると垂直に上昇していくのだが、俺は先行したセシリアを追い抜き、一気にトップに躍り出る。

『何をやっている織斑、蒼穹は兎も角、白式の方がブルー・ティアーズよりもスペックは上だぞ』

「う……」

そう織斑先生から通信回線からのお叱りの言葉が出てくる。

またもしょげそうになる一夏、こいつって姉とまったく違って打たれ弱いんだよなぁ、それでいて千冬さんは厳しいし。

昔は姉妹間でちょっと壁というか、確執みたいなのがあったよな。

なんて考えながらも、俺はしょげている一夏に優しく声を掛けるのだった。

「一夏、大切なのはイメージだぞ」

「イメージ？」

「そうですわ一夏さん、ＩＳを扱う上で一番大切なのは空を飛ぶ上での自分だけのイメージを確立するのが、建設的ですわ」

「うん……　それは分るんだけどね」

「一夏さん本当の始まりは、これからですわ！わたくしもお付き合いいたしますし、弾さんも協力いたしますから」

「おう」

「……　うん！ありがとう！二人とも」

優しく声を掛けた俺に続いてセシリアも優しく声を掛けて、励ますようにしていた。

セシリアの奴も丸くなったというか、これが素なのかもしれないな、優しくて面倒見が良いという性格がな。

千冬は飛び上がって行く3人を見ていた。
その内に弾が追い越して一瞬で目標硬度に到達、待機している姿に隣にいる山田は呆けた声を上げている。

（一夏の事も心配ではある、だが、奴の弾のＩＳは『なん』だ？束でさえも推測しか立てられない性能に世代……）

一夏を心配する思いもあるが、それについてはあまり心配はしていないと言うか、一夏の隣にはずっと影ながら妹を守っていた騎士がいるのだから。

まあ、アレが騎士と言う柄か、と言う疑問はあるものの、一番疑問に感じているのは弾が今身にまとっているＩＳの事だった。

『ちーちゃん、あのＩＳはね私が作ったものじゃないよ～』

昨日、部屋で報告書を纏めていた時に掛かってきた電話、それは束からだった。

電話に出て一番に放たれた言葉を聞いた千冬に衝撃が走る。

『どういうことだ!!だとすればアレはなんだ!?』

『ど、どならないで～　ち～ちゃ～ん』

『……　ではなんだ、奴が改造したとでも言うのか?』

自分の怒鳴り声に涙声になる束、嘘泣きだろうから気にしていないが、すぐに気を取り直して情報を聞こうと一度、深呼吸して再び問いかけていた。

『その通りだね～　だっくんがなにをしてくれるのかが楽しみで、

ワザと性能の低いＩＳを送ったんだけど、予想以上の事をしてくれたよ～』

『全く、あんな低性能のＩＳだからな、そんなことだろうとは思ったが、大事な教え子を私は貴様の気紛れで失いそうになる所だったのか？』

『うーん、でもだっくんなら、戦えたと思うけどなぁ～　二世代型のなんだけ？ら、ら？』

『ラファール・リヴァイブだ』

『そう！それ、それの３割の性能は持ってたし！』

『……』

束が発していく流石の千冬も声が冷たくなっていく、下手を打てば弾が死ぬ可能性すらあったのだ、今や大事な教え子の一人でもある彼を失う可能性があったことを、見過ごすわけには行かないのだろう。

全然反省の色が見えない束の声に、千冬は実際に頭を抱えて頭痛を堪えるようにしていた。

そんな千冬の様子を無視して、束のテンションは上がって行く。

『で～も！あのＩＳはさ～　推測で多分だけど最低でも第五世代型

に相当するよ』

『なん、だと……？　各国でようやく第三世代のトライアルが始まったばかりだと言うのにか？』

『そうだよ～！それも多分だけどあってないね、性能を見る限りもっと上のはずだよ、戦った相手のレベルが低すぎたから、だっくんは必要以上の性能を出すこともなかったんだね……　それにあれは1対多数の敵を迎撃するため、かも知れないね』

『あいつの理不尽具合は今に始まったことではないがな、元はと言えば束』

『な～に？　ちーちゃん』

ドンドンと出てくる束の推測に、千冬は更に頭痛を覚えて行くのだが、これだけは言わなくてはならないと気を張り詰める。

千冬の空気に気が付いたのか、それまでの調子からちょっとだけ真面目になった束は、千冬からの言葉を待つ。

『お前が初めから真面目に作っていれば、奴は何もしなかったんじゃないのか？』

『そうともいうね～』

『それしか言えんだろうが！この馬鹿者がぁ！！』

『あ～ん！怒鳴らないで～！』

そう、全ては束が真面目に作らなかったから起きた出来事ともいえる。

実は、ここでの千冬の言葉の通りに束がちゃんとＩＳを作っていたら、弾はそれを使うつもりでいたのだから。

だが実際に送られてきたのは、低性能に輪を掛けて低性能といえる機体、怒るのも無理は無い。

『それじゃあちーちゃん、だっくんの機体については私の方でもデータとかで調べるね』

『珍しいな、お前がやる気を出す、と言うのは』

『ふっふっふー！それは勿論だよ～！だっくんは私が始めて興味を抱いた男性だよ、だからいっちゃんにもちーちゃんにも箒ちゃんにも渡さないし渡すつもりもないよ、実際に会って見て余計に欲しくなっちゃったから』

『そうか、お前の恋愛も自由だからな、私は口を出すつもりは無いが……　一夏にだけは気をつけろよ』

『ノ～プロブレム！！この束さんなら、ちゃんといっちゃんを納得

させた上で、だっくんをモノにしてみせるよ！！』

それから電話口の向こうからは更なるやる気を出した束の声が聞こえてきたが、千冬はそれを聞くことも無く電話を切る。

それまでのことを思い出していた千冬は、既に目標硬度に到着し、何かを仲良く話している3人の姿を確認した後、気を取り直してインカムから3人に指示を出すのだった。

それからもセシリアによる一夏のＩＳ操作のコーチが続いていたのだが、不意にトンでもない怒鳴り声が俺たちの通信回線に響いた。

『貴様達！何時までそこにいるつもりだ！三人ともこれより急降下と完全停止の実演を見せろ、目標は地表十センチだ！』

一瞬ビクゥッ！と一夏とセシリアは身を竦めるのだが、すぐに気を取り直した様子を見せていた。

そんな2人に俺は声を掛ける。

「了解。それじゃあ、先に行かせてもらうな二人とも」

そういって俺は先に急降下を開始、指示目標通りに地表十センチで停止する。

それを見た女子の間で歓声が上がるのだが、慣れれば皆ができることだろ、と言いたい衝動を抑えながら、セシリアも同じように軽く成功するのだが。

「し、しまっ！！」

「……　全く……」

どうやら一夏は失敗したらしい、本物の急降下と言うか墜落と言う勢いで落ちてきたから、背中のビットを6基解放しビットそれぞれがビームを放射状にはなって、菱型に近いフィールドを作って減速させて、俺が受け止めた。

俺の腕の中に納まるまでに既にビットは全て回収していたのだが、周囲は驚愕と言うか特に、隣のセシリアの様子がかなり変な状況になっていたのだが、はて？　俺って何か変な事をしたのだろうかね。

「織斑」

「は、はい！」

「誰が墜落しろといった？　五反田が助けに入らなかったらお前は、地面に激突していたぞ？」

「う……　は、はい、すみません」

「まあ、今回は五反田に感謝しておけ、それと！この場での五反田のＩＳに関する質問は一切受け付けん！特にオルコット」

「は、はい！」

「本国に報告するのは構わんが、質問は必ず私を介して行え良いな！」

「り、了解です！」

まるで般若と言うべき表情で一夏に怒っている千冬さん、俺の腕の中で一夏は恐がっているように千冬さんの言葉に答えていたのだが。

恐がっている一夏を安心させるように俺は、彼女を抱く力を少しだけ強めると安心した様子を見せて、千冬さんの言葉に頷いていた。

その場を納めるように千冬さんの言葉に辺りに響くのだが、早速俺にビットについての説明を求めようとしていたのだろう、詰め寄ろうとしていたセシリアに千冬さんが釘を刺す形になっていた。

そして、それからの実習も問題なく進んで、授業は終わるのだった。

それから、俺は織斑先生の指導に付き合ったのだが、なんでだろう。
俺は気が付いたら、自室のベッドの上に寝ていて、心配そうに俺を看ていたらしい一夏とセシリアの姿がそこにあった。

「だ、弾さん！気が付かれましたのね！！」

「弾！気が付いた！！」

「セシリアに一夏？　俺の身にナニが？」

目が覚めた俺に心配と言う感情をむき出して詰め寄ってくる一夏にセシリア、だが、俺はここで気が付く。
なぜなら、放課後を迎えて織斑先生に指定されたアリーナに向かった後の記憶が無いのだ、何故だろう？　思い出そうとすると俺の体が拒否反応を示すのは。

「落ち付いて！弾！」

「そうですわ、何も無かったのです、あんな理不尽なことなんて！」

拒否反応を示して、俺の体は震えて顔は真っ青になっていたが、2人が落ち着かせようと必死で声を掛けてきてようやく落ち着いてきた。
俺が落ち着いた所で、2人は安心した様子を見せたのだが、自室の扉が開いて箒が入ってくる。

「弾、目が覚めた様だな」

「おう……」

「まあ、あんなことがあったことだし、もう少しゆっくりしていると良い」

そういって入ってきた箒は俺に向けてペットボトルの水を渡してくる。
一夏とセシリアはそれぞれタオルと洗面器の水を替えに行ったのか、この場からいなくなる。

「これから二時間後に食堂でクラスの皆が、お前の代表就任祝いを行うそうだ、出れそうか？」

「二時間もあるなら問題ないさ」

「そうか」

ベッドの上に起きている俺に心配そうな声を掛けてくる箒だが、箒からの言葉を聞いた俺は渡された水を飲む。

起きたばかりの俺の体を気遣ってくれたのだろう、少々温目の水が俺の喉を潤していく。

水分も不足していたらしい俺の体は、水を全て一気に飲み干していた。

それから俺は一夏にセシリアと箒の三人と、時間まで雑談を楽しんでいたのだが、時間になったので部屋を後にするのだった。

内心では俺のことを祝ってくれる皆のことに、少しだけ嬉しさを感じつつ出はあるのだがな。

第5話　一夏の白式は準第四世代型？　セシリアは第三世代ね、俺のは第蜂世代

就任祝いから鈴の再会というか、教室での出来事まで入れようとしたら、長くなりすぎたので、ここで切ります。

弾のＩＳの詳しいことは、これからゆっくりと明かしていきます。

第６話　ついに再会したアイツ、その正体はサイズはＡのちっぱぐぼぅ！！（前編）

スパロ……　ゲフンゲフン、重要な用件があったので、少々遅れましたが、第６話であります。

第6話　ついに再会したアイツ、その正体はサイズはAのちっぱぐぼぅ！！

愛する男性に抱きしめられる【予定】の乙女の姿でいた鈴音は、暫くしてようやく、弾が自分に気が付くことも無く通り過ぎたことに気が付いた。

正気に返った鈴音は少しの間、呆然としていたのだが、恥ずかしさが混じった複雑な感情が自分の中に充満するのを感じる。

「と、とりあえず！初めの目的通り、受付を探さないとね」

と、一度咳払いをして自分の中にある感情を誤魔化すように、一度深呼吸をした後に再び歩き始める。

なぜか、それからすぐに彼女の目指していた場所に到着して、当初からの目的を済ませる。

「これで手続きは全て終了です、ＩＳ学園へようこそ、凰　鈴音さん」

そうにこやかに鈴音に対してそう告げる女性の言葉を、鈴音は適

当に聞き流しながら、今自分が一番気になっている事を聞いていた。

「あの、五反田　弾ってどこのクラスですか？」

「ああ、あの噂の子ね？　あの子は一組よ、凰さんは二組だからお隣さんね。そうそう、あの子ってクラス代表になったみたいよ、流石は男の子ね」

それまで黙っていた鈴音からの突然の言葉に、事務員は一瞬だけきょとん、とした様子を見せたのだが、すぐに笑みを浮かべて彼女の言葉に答えていた。

更に出てくる言葉は噂好きの女性特有のものであったのだが、鈴音は相手にするつもりは無いようで、彼女を少しだけ冷ややかに見ながら口を開く。

「二組の代表って決まってますか？」

「決まってるわよ」

「名前はなんていうんですか？」

「え？　ええと……　聞いてどうするのかしら？」

鈴音が問いかけを発した瞬間から彼女の瞳には、強い決意に似た輝きがあった。

今更ながらに彼女の様子に疑問と戸惑いを感じたのか、事務員は問いかけてくるのだが、鈴音の瞳は有無を言わさぬ様子で、彼女からの答えを知るために見据えていた。

「決まってます……　お願いするんです、代表を私に譲ってと」

その後、事務員から望みの情報も聞きだした鈴音は、寮へと歩いていく。

（弾……　今度は私も貴方の隣で、戦うから……　私の事も一夏のこともずっと守ってくれてた貴方を、今度は私が守る番なんだから！覚悟してなさいよ！！）

そんなことを考えて、彼女は寮への道を途中から走って、自分の部屋へと向かうのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第６話　ついに再会したアイツ、その正体はサイズはＡのちっぱぐぼぅ！！～

それから俺たちは時間になったから、食堂へと向かうのだが、やはり夜の寮内は男の子にとっては素晴らしいパラダイスだ！と大声で叫びたい気持ちで一杯だ。

何せそこら中に薄着の女の子や、中には下着が見えている娘もいるんだから、とっても良い目の保養になりますなぁ……　イデデデデェ！！

「弾？　どこを見てるの？　さっさと食堂に行こうねぇ」

「お、おほほほほ、弾さん？　女性にそのような視線を向けてはいけませんことよ？　特にわたくしと一夏さんがあなたのお傍にいるのですから」

わ、忘れていた。

俺の両腕はセシリアと一夏によってホールドされていることを！

俺の視線がどこに向けられていて、何の意味を持っているのかを知ったらしく、俺の両腕と両足に凄まじい痛みが走る。

悲鳴も呻き声すらも上げられない凄まじい痛みを感じつつ、チラリ、と視界に入った箒はと言うと、呆れた様子を見せているかと思いきや、何故か拗ねた様子でこちらをジトッと見ていた。

この箒の様子に、俺はおや？　という感情を抱いたのだが、俺が箒を見ていたことに気が付いたらしい一夏とセシリアは、更に剣呑

な様子になって俺を見据えてきた。

「ねえ、何で私とセシリアが腕を組んでいるのに、箒の事ばっかり気にしてるの？」

「まったく、一夏さんの言う通りですわね」

「うぐぅ……　それは悲しい男の性というか……　拗ねている女の子がいたら、ついそっちを見ちゃうと言うか……」

「す、拗ねてなどいない！？」

正直に言って両隣にいる女子２人が無茶苦茶恐い。

まず、一夏の方はといえば細められた目にハイライトの消えた瞳と低くも、それでいて妖しげともいえる声で俺に囁くように言ってくる。

セシリアはと言えば同じ様に細められたような瞳なんだが、ハイライトは消えていない普通の瞳の中に剣呑な輝きが存在している。

正直に言ってセシリアの方がまだマシレベルなんだが、俺が箒を気にしていると分った時には、更に２人は不機嫌になる。

『あ、見て見て！五反田くんだよ！』

『良いなぁ～　織斑さんにオルコットさん腕を組めて』

『う、羨ましい……』

まあ、こんなことをしていれば嫌でも人目についてしまうのは分りきったことだった。

あっというまに女子がワラワラと集まってくるのだが、威嚇するように周囲を見渡す一夏とセシリアによって近づけないと言う状況にもなっているようだった。

下手に近付けば猛獣と化した二人に噛み付かれるのは分りきった状況下、それが分っているのだろう女子達は周囲から遠巻きに俺たちの様子を窺っていたのだった。

それからすぐに食堂に着くのだが、流石に腕は解放してもらい、皆に指定された席に座ったと同時に、クラッカーが鳴らされる。

『五反田くんっ！クラス代表就任おめでとう！！』

『おめでとうだよ～！』

クラスのほぼ全員からのクラッカー乱れ撃ちと共に俺の近くに紙テープが降り注いでくる。

因みに時は既に夕食過ぎの時間帯で、俺は夕方のアリーナの出来事以降部屋で寝ていたし、起きた後も食欲が湧かなかったからか、部屋にいた。

つまり何が言いたいかと言うと、すんげぇ腹が減っている！！

「なあ、もう飯を食っても良いか？　実は腹が減ってな」

時間外ではあったのだが、誰かが気を利かせてくれたのか、俺の前には大盛りのハンバーグ定食が置かれていた。

どうやら俺が着く直前に出来上がったもののようで、ホカホカと暖かいことを知らせる湯気と、美味そうと言うか実際にこの食堂の

飯は美味いから、味も保障出来るこの定食を一刻も早く腹に入れろと、腹の虫はさっきから大声で叫んでいる。

俺の様子に一夏は呆れの笑みと共に頷いて、皆も同じと言うかニコニコして俺にすすめてきたので、遠慮なく食い始める。

『いやー、これで、クラス対抗戦も盛り上がるよねぇ』

『ほんとほんと、男子がいるのって私達のクラスだけだし』

『ラッキーだよね私達って、それに他のクラスに五反田君の情報を渡せるなんて、のもあるから本当にラッキーだよね～』

『本当だよ～！』

他のクラスの女子もいるようだが、今は関係ねぇ！とばかりに俺は目の前にある飯と凄い勢いで食べていく。

『凄い勢いで食べるね～』

『この辺やっぱ男子だよね！』

『そうそう！見ていて気持ちの良い食べっぷりだよね！』

俺が飯を食っていることの何が面白いのか、女子全員が俺の一挙一動を徹底的に見ている様子であった。
それから数分もしない内に食い終わり、手を合わせていたのだが、それを見計らっていたように一夏が食器を下げていた。

「はいはーい！こちら新聞部でーす！今、超話題の新入生である、五反田　弾くんにインタビューを行いに来ましたー！！」

「ん？」

「私は二年の黛　薫子、よろしくね。新聞部の副部長をやっているわ、はい、これ名刺」

「ども」

入り口から喧しいと言える位の大声と共に入ってきたのは、先輩と言う事をしめす制服のリボンをしている。
手にはボイスレコーダーにメモ帳、典型的だな。

なんて考えていた俺の元にやって来た先輩は、俺に名刺を差し出してきたのを受け取り、俺が確認した後、改めてボイスレコーダーをずずいと差し出してくる。

「ではでは規格外の強さを見せ付けて、代表の座を勝ち取った五反田くん！感想と、これからの目的とかについて一言！！」

「……　んじゃあ、適当に頑張って、適当に過ごします」

「え～それは適当すぎじゃないかな、五反田くん、それにもっと刺激に満ちたコメントちょうだいよ～！例えば俺に不用意に近付くと撃墜するぜ！！とかさぁー」

「……」

俺はこの先輩については非常に嫌な予感しかしなかった、というか俺が何を言おうとも、この先輩は間違いなく捏造に近い類のことを仕出かして来る。

そう俺の中の能力たちと直感が伝えてくるから、俺は無難と言うかあまりにも適当な言葉を当てるのだが、先輩は詰まらなさそうな表情で俺から更に言葉を出させようとしているのだが、俺は口を貝のように閉じて抵抗するのだった。

「これ以上のコメントは望めないか、まあ良いかどうせ最初から捏造するつもりだったし」

「最初から捏造するつもりなら、コメントを聞く必要ないじゃねぇか！？」

「そうとも言うね！んじゃ、セッシリアちゃーん！キミのコメントも聞きたいな！」

「って話を聞けよおぃ！！」

こ、このアマ！なんてフリーダムな奴だ！流石の俺も予想外だ最初から俺のコメントを捏造するつもりだったとは。

それからセシリアの奴にコメントを求めていたのだが、やはりセシリアのコメントも最初から捏造するつもりだったのだろう。

「うーん、負けた経緯とか聞くと惚気話になりそうだし、素直に五反田くんに撃墜されてベタ惚れですって書いといとくね」

「ッ！！なんですって！？　そ、それは事実ですが……　それは……」

最初から聞く気の無い様子の先輩に、何かを熱弁しようとしていたセシリアは、何かを耳打ちされただけで一度大声を出した後、しぼんでいく。

何を言われたのやら、と俺は考えていたのだが、一夏と箒の視線が何処か剣呑な光を持っているのは、気のせいだと思いたい。

「大注目の男性ＩＳ操縦者ともう一人の代表候補生、この二人のツーショットの写真が欲しいから、いっしょに写ってくれない？」

「まあ、別に構いませんがね……」

「ほんとうですの！？」

「あ、後、握手もしてくれるとありがたいな！二人が協力体制を取ってます！って意味も持たせることが出来るから！」

先輩はどうやら俺とセシリアのツーショットの写真をご所望のようで、俺たちに要求してくるのだが、先輩は更に注文をつけてくる。その注文を聞いたセシリアは更に嬉しそうにしていたのだが、一夏と箒が更に不機嫌になっていったのが、ちょっと気になる。

それから先輩の注文通りにセシリアと俺は握手をしようとしたのだが、何故か、セシリアは俺の手を大事なものを扱うように自分の胸元に抱きしめるようにするのだった。

俺の手に当てられるセシリアの胸、多分Ｄクラス！一夏には１ランクほど劣るが、それでも十分すぎるほどの大きさの胸に俺の手は当てられる。

両手で鷲掴みにして揉みたい欲求が俺の中に、ムクムクムラムラ、と湧き上がってくるのだが、俺はそれらの感情を根性で押さえつけることに成功し、なんとかみんなの前での大惨事の回避に成功する。

「それじゃあとるよー　２０２×１４は？」

「２８２８です」

「正解！」

この先輩、美味い所を付いてくる。

計算したらまさに２８２８（ニヤニヤ）という答えだったんだし。

その上に俺は数字を言わずに語呂合わせの言葉を言ったら、待っていましたと言わんばかりに答えてきたから、意外とノリも良いね。

んで、シャッターが切られるのだが。

「って、どうして皆さんが一緒に入っていますの！？」

そうなのだ、シャッターが切られる瞬間を狙ったように全員が一斉にフレームに収まるように入ってきたのだ、俺は記念にはちょうど良いかもな、なんて考えていたのだが、セシリアに取ってはそうでもないらしい。

不満そうというか、不満たらたらで全員を見据えて大声を上げるのだった。

それからについては特に特筆すべきことも無く、不満を全員にぶちまけて丸め込まれるセシリアの姿があっただけなので割愛する。
まあ、俺は最後当たりは大のサインが出てきたので、食堂を後にしたんだが、途中でレッドアラートになった時は、マジで焦った。

途中で何かとすれ違ったような気がするが、気のせいだろうな。

間に合った後、そういえば、鈴の奴がそろそろ転校してくるじきだよなぁ。
なんてことを、考えていた俺がいたのだった。

部屋に戻った俺は、ベッドの上に大の字になって寝転んでいるのだが、顔だけは一夏のいる方向とは逆に向けている。
何故ならば、今、一夏が着替えているからだ。

「なあ、一夏」

「何？　弾」

「男の前で着替えるって、恥ずかしくないのか？」

ここ最近毎日の様に疑問に感じているのだが、一夏の奴は俺がいる前で寝巻きに着替えるのだ。

正直に言って着替えている所をガン見したいし、衣擦れの音を想像するだけでも暴走しそうになる俺の体を鎮めることで、精一杯になるので、無茶苦茶気になっていたというか、一夏の奴は俺の自惚れでなかったら、俺に襲われたいとか考えているのか！と思ってしまう事態でもあった。

「……　幾ら、弾の前だって言ってもはずかしいよ、でも、私が……　な弾だから」

「？」

最初から最後まで小さすぎる声で何かを一夏が言っていたのだが、俺は何を言っているのか、正直に言えばまったく聞こえなかった。

聞き直したくても、着替え終わった一夏は顔を真っ赤にして、湯気すら漂わせていそうな雰囲気で何も答えてくれなさそうだったので、俺は喉元まで出て来ていた言葉を飲み込んで、ただ、疑問符を

浮かべているのだった。

「まあ、とりあえず、俺は寝るぞ？」

「う、うん！おやすみなさい！弾」

「おう、おやすみ」

一夏の様子から何も答えてはくれないということを判断した俺は、とりあえず、睡魔に押し倒されていたので、一夏に寝ることを伝える。

その後俺は、すぐに眠りに付いたので、分らなかった。

一夏が自分のベッドから立ち上がって俺のベッドに腰掛けると。

「相変わらず、だよね、あの時に誰にも助けを求められなかった時に、弾だけは黙って、それでいて私に気付かれないように、私をいつだって助けてくれてた……　だから、私は……」

深い位置に行こうとしていたまどろみの中で感じたのは、頬への暖かい感触と体全体を包むような暖かくて、柔らかい何かの感触だった。

そんでもって、俺は次の日に再会する。
懐かしい顔とな。

「その情報古いよ」

そう、それは。

「お前！まさか」

「久しぶりね」

「ちっぱ鈴か！！」

「あたしを！その名で呼ぶんじゃないわよ！！」

「グブゥ！！」

中学の頃に別れた友人の一人と。

第6話　ついに再会したアイツ、その正体はサイズはAのちっぱぐぼぅ！！（後

結局、鈴との再会シーンまでいけなかった……
その上に、弾の変態度も不完全燃焼気味だし。

次回ではっちゃけてやる！！なんて考えていたり

第7話　今更なんだが……　この話が原作扱いでアニメになっていたとしたら……

今回の話では、初の試みで別人物の視点を入れております。

第7話　今更なんだが……　この話が原作扱いでアニメになっていたとしたら……

カーテンの隙間から朝陽が入り込んできて、俺はまだまどろみの中にいるが半分意識を覚醒させる。

「むっ、ぬぅ……？（なんか良い匂いがする）」

半分意識を覚醒させると同時に俺は少しの違和感を感じる。
自分の横に何かの熱原体があることと、柑橘系の良い香がしているのだから。

その上に熱原体は柔らかいようで、俺が少しでも動く度に、ふにょんとかフニフニという効果音と共に、柔らかさを伝えてくる。
俺の右腕にも感じる僅かな重量、どうやら俺は何かに、多分女の子に抱きつかれているようだ。

って誰だよオイ！！

その結論に寝惚けていた俺はようやく到達し、少し慌てて目を開ける。

「……　一夏か……　まさか眠った時に感じた暖かさはこれか」

そう一夏の奴が俺の右腕を枕にして、俺の体に抱きついてスヤスヤと寝ていたのだ。

このＩＳ学園の寮で過ごすようになってから数回ほど、一夏の奴が俺のベッドに潜り込んで来るのだ。

本人はトイレに起きてから寝惚けて入った、なんて言っているが本当かどうかは分らん。

だが、この一夏の寝姿と言うのは強烈な破壊力を持っている。

一夏は何故かは知らんが俺のお古のＹシャツだけ（これを譲ったのが、鈴と蘭にバレた時は……　殺されるかと思った、俺が）で寝るのだよ、寝る前までは就寝用のスカート？　見たいなのを穿いているのに寝る時には下を脱いでるんだ。

何が言いたいかといえば、不用意に布団を捲ったりとか、俺が起きたりしたら一夏の姿が大惨事だ！と言う所である。

最初に一夏がもぐりこんでいて、それに驚いた時は凄いことになったな、一夏って寝る時はブラジャーを着けない派らしかったから、うん、なんだ、上下の嬉しいポロリがあるよ！な状態になったのだ。

無論堪能させていただいたが、起きた一夏の右ストレートの冴えていた一撃は記憶に新しいところだ。

「いつも通りに起きないとな」

なので俺は一夏が入り込んでいた際には、なるべく体を動かさずに尚且つ迅速にベッドを抜け出すのだった。

因みにベッドを抜け出た後、シャワーを浴びるのを忘れてはいけない。

『五反田、貴様から一夏が良く使う香水の匂いがするのだが、最後までイッタのか？』

『五反田君から織斑さんの匂いがするー！！』

そう、ここは共学を謳い文句にしてはいるが女子高なのだ、女子達はこの手の話題にはすぐに飛びついてくる上に、ここ最近は何故か俺と一夏をくっ付け様としているのか、千冬さんが悪乗りしてからかうように言ってくるしな。

こういった事があった日は、絶対にシャワーを浴びることを心掛けるのだった。

「……　弾の意気地なし……」

俺がシャワーを浴びている間、いつも一夏がしょぼーんとしているのはご愛嬌と言う形だろう。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第７話　今更なんだが……　この話が原作扱いでアニメになっていたとしたら……　ＯＰはどうなってるんだろ？～

それから俺たちは朝食を（因みにメニューは一夏がパンとサラダにハムエッグ、箒は日替わり定食、セシリアはクロワッサンと紅茶にサラダ、俺が紅鮭定食だ）済ませて、教室の自分の席について授業の準備を始めようとしていた。

「五反田くん、おはよー、ねえ、隣のクラスに転校生が来るんだって！この事、聞いた？」

「いや、初耳だけど？」

俺の登場を待ち構えていたのか、俺が席に着いたら話し掛けて来る女子生徒の姿。

まあ、クラスの連中とも結構仲良くなっているからか、こんな感じで良く話しかけられる。

クラスメイトとはやはり普通に会話できる程度には仲良くはして置きたいしな、俺の好みじゃないとか好みのタイプとか関係無しにな。

「珍しいと言うか、妙な時期にだな？　転校生って話も」

俺の疑問と言うか時期を考えれば当然の疑問だった。

今はまだ四月だ転校という形よりは何故入学と言う形をとらなかったのか、と言うこともあるのだが、基本的にこのＩＳ学園は転入と言う形は認めていないといっても良い。

なぜならば試験があるし、それがかなり厳しいレベルというのもそうなのだが、基本的に認められないというのは国からの推薦が必須と言う所だ、なのでどれだけ企業に認められていようが、国家からの推薦を受けられない人間は、転入できないと言って良い。

それができたと言うことは。

「そうなんだけどね、でも、噂じゃあ中国の代表候補生って話よ」

「なるほど、それなら転校の話も頷けるよな」

やはり代表候補生との言葉だった。

にしても中国と言えばアイツをちっぱいなアイツを思い出すな、元気かね。

「あら、代表候補生が来るなんて、このわたくしを危ぶんでの転入かしら」

「別にこのクラスに転入してくるわけじゃあないんでしょ？　だったらそこまで気にする必要って無いんじゃない？」

「一夏の言う通りだろう、それに代表候補生なら何人もいるからな、別にそれを意識したとは思えんぞ」

「うぐ……」

おや？　何時の間に3人は俺の近くに来たんだろうか。

全員が自分の席に座ったのを俺は見たんだけどな、女子ってのはやっぱり噂が大好きだ、と言うことなのか。

「気になるの？　弾」

「まあな」

「「……」」

一夏からの言葉にまあ俺は素直に答えるのだが、何故か箒とセシリアの機嫌が急降下した。

何で機嫌が悪くなったのやらと思いながら、俺はどうして件の代表候補生が気になるのかをいっていた。

「強かったら戦った時にすんげぇ面倒くさいし、倒すのも骨だしなぁ……」

「ハァ……　弾のことだから、気になる理由ってそんなものだろうって思ったよ」

「そういう調子では困りますわ、弾さん！来月にはクラス対抗戦があるのですから、それに向けて意識も変えておかないと！」

「今までお前を見てきて感じた通りの人格だな、もう少しは頑張ろうと言う気概を見せてみろ」

俺の表情が心底嫌そうなものだったのか、一夏は呆れ果ててしまったような表情をして、セシリアはと言うと少し怒った様に、箒は呆れと怒りが複雑に交じり合ったような、そんな表情をしていたのだった。

因みにセシリアが言っていたのは、言った単語の通りクラス間での対抗戦だな、セシリアと争ったクラス代表者、これが全クラスから出てきてのリーグマッチだ。
実際にはクラスごとの団結と、新入生達の実力を測るのが本来の目的らしいんだが、まあ、もっぱら皆の興味は学食のフリーパスに注がれているらしい。

『五反田くん、頑張って！』

『フリーパスの為にも必ず！！』

『今のところ専用機を持っているのって私たち一組と、四組だけだから楽勝だよ～！』

『それにごたち～　強いし！！』

俺たちの会話を聞いていたのか、皆がワイワイと俺に言ってくる。
まあ、期待されれば【多少】は応えなきゃならんな。

なんて考えていた俺たちの耳に、一人の少女の声が響いてきた。

「その情報、古いよ」

その声が聞こえてきたのは、教室の出入り口だった。
懐かしささえも感じる少女の声、俺たちはいっせいに教室の出入り口へと顔を向ける。

「私は中国の代表候補生、凰　鈴音、今日は宣戦布告に来たってわけ、それと久しぶりね、弾」

そこには何故かドヤ顔で不敵な笑みを浮かべた鈴の奴が、扉にもたれかかっていたのだが、何をやってんだ？　こいつ。
とも、疑問に思ってしまうな。

「二組も専用機持ちがクラス代表になったから、そう簡単には優勝させないんだから」

「……　華々しい高校生デビューのつもりカネ？　ちっぱ鈴」

「私をその名前で呼んでんじゃないわよ！！」

どうやら鈴の奴は、華々しい高校生デビューと言う奴を行いたかったらしい。

そりゃ失敬、と思いつつも俺の目は【仕方無いなぁ、この娘わぁ～】といった具合に生暖かいものに変化しているのが、自分でも分かる。

「その目……　すっっっごいムカつく……！！」

すっかり俺からの言葉と様子で調子を崩されきったらしい、右腕をギリギリと握り締め口元も怒りを堪えるようになっているのだが、なぁ。

「それとよ、ちっぱ鈴さんや」

「なによ！？」

「後ろに要注意だぞぅ」

「はぁっ！？　み〝ぎゃ！」

そう我らが恐れる最恐教官千冬さんの登場である。

見事な出席簿の一撃が鈴の頭に炸裂するのだが、その瞬間に鈴の顔は面白いものになったのはどういうことだろうか、こいつってこんなギャグキャラだったっけ？

（注：千冬は今や出席簿を振るう力を理不尽野郎である【弾】を基準にしています）

まあ、それはそれとして、凄く痛かったのだろう、声鳴き声を発して鈴は頭を抑えて悶絶しており、未だにリカバリできていない様子だった。

「ＳＨＲの時間だ、教室にもどれ」

「ち、千冬さん……　も、もうちょっと手加減してください……」

「いいから戻らんか！」

「は、はいぃ！！！」

あの様子は百％千冬さんにビビッているな、と考えている間に千冬さんに一喝された鈴は急いで自分の教室へと戻るのであった。

だが、鈴を見送っていた俺の机の周囲にセシリアと箒が突然集まって、凄い剣幕で俺に詰め寄ってくる。

「弾さん！あの方とはどういう関係ですの！？」

「弾！今のは誰なんだ、偉く親しそうだったが、どういうことだ！

？」

などと言って来るのだが、こいつらは誰が来ているのかを忘れているのかね、一夏はというとセシリアと箒にジェスチャーで伝えようとしても伝わってないからか、ちょっと拗ねてるし。

「席に着かんか！馬鹿者共が！！」

無論のこと、千冬さんの怒りを買った二人の頭に出席簿アタックが炸裂するのは、言うまでも無いことだろう。

うーん、ちょっと疑ってると言うか、考え込みすぎだよね2人とも。

なんて私、織斑　一夏はセシリアさんと箒の様子を見ながら思ってた。

まずは箒だけど、何を考えているか丸分りだね、たぶんだけど弾と鈴が仲良く喋ってたのが気に入らないのかな？　でも、何時の間にやら弾って箒と仲良くなったんだろう。

まあ、箒としては今まで束さんの妹としてか他人からは見られてこなかったからか、箒本人だけを見てくる初対面の人って言うのは、かなり新鮮に映ったみたい。

束さんが行方不明になった時にどうも一緒に連れ回されたみたいで、相応の苦労をしてきたみたい。

確実に弾に頭を下げたのは、束さんの無茶苦茶振りを知ってるというか巻き込まれてきたからだろうね。

でも箒は自分の気持ちに気が付いていないみたい、というかまだ複雑な感情なんだろうね、恋って感情を私が始めて抱いた時も似た感じだったし。

だけど箒が自分の気持ちを自覚して、それを前面に押し出しても負ける気はないしね、今はまだライバルの一歩手前だね、箒。

「篠々乃、答えは？」

「は、はいっ！？」

でも、授業はちゃんと聞いておこうよ。

今は姉さんの授業なんだからさ、姉さん厳しいから。

「き、聞いていませんでした……」

「そうか」

箒の答えを聞いた姉さんは、嗜虐的な笑みを浮かべて、出席簿を振るうのだった。

なんて言って見たけど、痛そうだよね、あれって、弾はほとんどいつも叩かれてるけど、痛くないのかな？　なんて考えてしまう。

「全く、では変わりにオルコット、答えは？」

「……　例えばデートに誘うとか、いえ、それでは効果は望めませんわ、よ、夜にわたくしの部屋に……」

「……」

セシリアさんも箒と同じ様に、集中しすぎてたみたい。
同じ様に出席簿の一撃を受けてた。

というか、ふーん……

でも……　弾、本当にチャレンジャーだよね、居眠りしてるなんて、というか目を開けたまま寝てるって、器用すぎというかどうして寝れるの？
あ、今姉さんに叩かれた。

「のっほぅ！！」

「目を開けたまま寝るなどという、無駄に器用なことをするな！この馬鹿者が！」

姉さんの言っていることって正論だよね。
私でも時々だけど、弾の事って分からないことあるし。

それから時間が過ぎて昼休みと言うか、飯の時間だ。
セシリアと箒の奴は、何か知らんが授業に集中できなかったらしく、山田先生から注意五回に織斑先生からの洗礼を三回も受けている。

「お前のせいだ！」

「貴方のせいですわ！！」

「なんで俺のせいなんだよ」

俺のところにやってくるなりセシリアと箒の奴は、俺に対してそんなことを言ってきたのだが、思わず面倒くさいと言う感情全開で

返した。
俺も人の事言えんが、織斑先生の前でぼうっとするなんざ、自分で塩コショウに焼肉のタレを持って、腹を空かせた猛獣の檻に入るようなもんだぞ。

「腹が減ったし、何か言うことがあるなら、飯を食いながらにしないか？」

「そ、そうですわね」

「仕方がない、そうしてやろう」

「じゃあ、行こうよ三人とも」

そういった一夏と俺についていく形で、他に数名のクラスメイト達に相変わらずの、笛吹き状態で俺は食堂へと向かうのだった。

「待ってたわよ！弾！！」

食堂に着いた俺たちを出迎えたのは、ラーメンの載ったお盆を片手に持った鈴の姿だった。
なにをしているのやら、なんて考えつつ俺は鈴の肩を真剣な表情

と声を発しながら優しく掴む。

「……　鈴……」

「だ、弾……？」

「ちょ、弾、何を！？」

「だ、弾さん！？」

「だ、弾、お前！？」

上から一夏にセシリアに箒の順なんだが、何を慌てているんだろうか？　何か知らんが他の女子達に至っては黄色い声を上げているものもいる始末。

その上に鈴は何か知らんが大きく何かを期待しているような、そんな表情をしている。

「食券買えんから、どいてくれ」

「……　へっ？」

「「「……」」」

この俺の言葉が放たれた瞬間、周りにいた女子たちは一斉にだあぁぁっ！！と言う様子でずっこけ、あ、白とピンクの縞々に水色に白に青にピンクか、なんて見えた下着も同時に堪能したがな。

一夏たちは呆けたような、表情で停止していた。

「そ、そうよね、こういう場でこいつに何かを期待した私が馬鹿だった……」

酷く落胆した表情で鈴は食券販売機の前からどくと、俺はカツ丼とミニうどんの食券を一枚ずつ購入したのだが、ここでようやく正気に返ったらしい。

俺と同じ様に食券を購入して、食事を受け取ると俺の左隣に鈴が、反対側に一夏、対面に箒とセシリアが隣り合って座ると、食事が開始されるのだった。

「それにしても久しぶりだな、鈴、元気にしてたか？」

「まあね、でも驚いたわよ、あんたがまさかＩＳの操縦者になるなんてね」

「それについては俺も驚いたよ」

「まあ、アンタって昔から変に理不尽な所ばっかりだったから、最初は驚いたけど、後は変に納得しちゃったけど」

「どういう意味だよ？　それ」

「アンタの今までの行いを考えなさいよ」

久しぶりの幼馴染の一人との会話はやはり良いものだと、俺は思っていた。

一夏との会話も良いけど、やっぱこいつの裏表のないさばさばした物言いは聞いていて気持ちの良いものだからな。

だが、一つだけ疑問に感じるんだが。

「そういえば、鈴は一夏とは会話をしたのか？　お前らって今日再会してから何も話してないけど」

「ああ、それね」

「実は、私たちってね、偶に連絡を取り合ってたの」

「なんじゃそりゃ！　俺ってハブられてたのかよ！？」

「ちょ、違うわよ！！」

「そうだよ、違うからね！」

鈴と一夏が何もというか驚いた様子も、会話すらしていなかったことへの疑問だった。
それに返ってきた答えは俺にとっては少々衝撃的だった。

まあ、わざとオーバーなリアクションを取って落ち込んだ様子を見せたりしたら、一夏と鈴は面白いように否定してきたからな。
こいつらも悪気があった訳じゃないんだろう、それにこいつらってやっぱ女の子同士でつるむことも多いみたいだしな。

それからはと言うと、箒たちに鈴を紹介したりして、特には変わったことなんてなかったんだがな。

第7話　今更なんだが……　この話が原作扱いでアニメになっていたとしたら……

今回で、一夏と鈴の部屋を巡ったキャットファイトまで行くだろう、なんて考えていましたが、計算したら字数が二万近くに……

途中でセシリアと箒に一夏との模擬戦の様子を入れたからか!?
なんて考えております。
どういった状況だったのか、それはまた次回にということで。

それと本日始めてアクセス解析を行ったんですが……
（Д）。。
な状況で停止してしまいました。

いずれはキリの良いｈｉｔの部分で何かを書こうかなぁ、なんて考えております。
では今回はこの辺で。

第8話　ようやく来たか！俺の部下達よ、さあ俺と共に、この学園のアガルタを

は、話が進まない……

第8話　ようやく来たか！俺の部下達よ、さあ俺と共に、この学園のアガルタを

それから時が過ぎて放課後、そこ時間が経ち過ぎだって言わない。こっちにも都合ってもんがあるんだからさあ、まあ、とにかく全ての授業が終わった後、俺たちはＩＳについてのコーチと言うか、そんな感じのことでアリーナに向かっていた。

凄く面倒だったので逃げようとしたら箒に足払いをされた所で、一夏に縛られ、それでも芋虫の如く這って逃げようとしたらセシリアにホールドされており。逃走は不可能となった。

「なあ」

「なによ」

「なんだ」

「なんですの？」

上から順に先導する一夏と箒、縛っている俺を持っているセシリアなのだが、くそぅ、俺の頭が床に近い所にあるというのに、男の子にとっての理想郷を拝めないではないか！

そう言える配置だった、ミニといえる箒と一夏が前に出て、ロングと言えるセシリアを俺の近くに配置するとは……！

まあ、見れないものはさておいて、俺が縛られてアリーナに連行されていると言うのに、周囲の女子達は引く所か一夏達を羨望の眼差しで見ており……　こいつら、本当に大丈夫か？　と言いたい光景がそこにはあった。

「何で俺、縛られてんの？」

「逃げるからよ」

「逃げるからだ」

「逃げるから、ですわ」

にべもないお言葉の数々、くそぅ……　なんて俺は思いながら、台車の上に乗せられて運ばれている。

だが、既に逃げる算段など当に固まっておるわ！と考えた俺は、その為の隙を待つのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第８話　ようやく来たか！俺の部下達よ、さあ俺と共に、この学園のアガルタを……　ち、千冬さん！？　ソレダケハ、ヤ、ヤメ！～

その状況の変化は唐突だった。
簀巻きにした弾を運んでいたのはセシリアなのだが、行き成り弾が【軽くなった】ようにと言うか、それまであった重量が突然無くなったのだ。

「きゃあぁ！！」

「どうしたの！セシリア！？」

「セシリア！何があった！？」

無論台車のような物の上に乗せて運んでいたとはいっても、一人の成人に近い男性を運んでいるのだから、当然の事ながらそれなりの力を込めて運んでいたセシリアは、重量が無くなったので前につんのめり、こけそうになった。

行き成り悲鳴を上げてこけそうになったセシリアを、一夏と箒は驚いたように振り向くのだが、さっきまで台車の上にいたはずの弾の姿が消えており。

代わりにそこには。

「ニャ～ン……」

「クゥ～ン……」

「えっと、こ、小ネコ……？」

「そ、それに小犬……か……？」

弾の代わりと言わんばかりに簀巻きにされた小犬と子猫（両方とも雑種）の姿であった。

流石に予想の斜め下を爆走したこの光景には、箒と一夏も呆然として、涙目で電柱の下に捨てられた時の姿を髣髴とさせる様子に、思考の処理速度が追いついていないようであった。

「だ、弾さんは一体どこに？」

「「っ！？　に、逃げられたぁ！！」」

「「ニヤリ」」

（こ、この２匹は本当に動物なんですの！？）

幾分か落ち着いているセシリアの指摘でようやく箒と一夏も、弾が逃げたことに気が付き、更に場は混沌としていくのだが。

唯一ある程度落ち着いていたセシリアは見てしまう、台車の上に乗る犬と猫が【悪どい笑み】を浮かべていたことに。

そして犬と猫は互いにアイコンタクトを行った次の瞬間、縄はそれぞれの口に咥えられたクナイによって切り裂かれていた。

「あ、思い出した！この子達！弾が飼ってる犬と猫！！」

「な、なんだと！？」

「ちょっと！あなた達お待ちなさい！ここは４階！」

「にゃぉーーーーーーん！！」

「わぉーーーーーーーん！！」

そして彼らは開いていた窓に向かって跳躍、セシリアが慌てて止めようと手を伸ばすのだが、時遅く、飛び出した彼らは校舎の外壁に、普通に、着地すると、そのまま地上へと走って降りていったのだった。

「「「……　本当に動物？」」」

この光景を見て呆然とする３人の少女を残して。

「幾ら忍犬として鍛えたとしても、あの動きはできるはずないわよ……」

などといって『理不尽』とかかれたセンスを持った一人の女子生徒がいることには、誰も気が付くことはなかった。

ふはははははははははははぁぁぁ！！俺の表情は今までにないくらいに緩んでいるだろうとは、思う。

何しろあの面倒なＩＳ特訓と言う時間から逃げれたのだ！！さあ、明日は祝日で休みだから今日から外出許可を貰って夜の街に繰り出すんだ！！

なんて考えていた俺は気が付かなかった、次の曲がり角で待ち伏せをしていた天然チートなあのお方の存在に。

「ぬ！？　ぐぉぉぉぉぉぉぉ……！！！あ、頭が！頭が割れる！！！」

「全く……　一夏からお前を探してほしいと言われたからな、貴様

の独特な気配を感じた方向に待ち伏せをしていたら、ビンゴか……
特訓をサボってどこに行こうとしている？」

「そ、そのお声は織斑先生!？　ど、どうしてここに!!」

行き成り俺の視界は真っ黒になり、頭を何かで鷲掴みにされて体も持ち上げられる。
所謂アイアンクローと呼べる体制になっているのだが、て、天然チートめ!普通は走っている男の頭を鷲掴みにして、あまつさえそれを何事もなかったかのように持ち上げられるのかよ!!

なんて考えていた俺の頭は更にミシミシと嫌な音を立てているのだが、逃げようにも逃げれない。
変に動いて織斑先生の胸とかに触りでもしたら……　確実に命はないな。

「一夏か？　ああ、目標の確保に成功した。今から向かう、場所はどこだ？」

「か、かんべあだだだだぁ!!」

「やかましい、貴様に発言の許しが出ていると思うな、そうか、第三アリーナかすぐに行く」

俺の体が感じている浮遊感は、移動していることを示す風の動きで、遂に一夏たちの元に連れて行かれているのだと、理解した俺は全ての体の力を抜いてされるがままになるのだった。
それから俺は千冬さんに吊るされたままアリーナに到着するんだが、セシリアに箒と思われる驚きの視線を背中に感じる。

それはそうだろう、成人に近い男が女性に吊るされて現れたんだからな。

「いって！！」

「とっととＩＳスーツに着替えろ、他の連中は既に終わっているぞ」

「うぃーす……」

「返事ははいだ、この馬鹿者！」

「は、はいぃ！！」

急かされる千冬さんに釈然としないものを感じつつも、俺は更衣室へと向かっていくのだった。

ピット内で俺はＩＳスーツに着替えるてアリーナに戻ると、俺は今いる面子を確認する。

まずは1次移行を済ませて形状が大きく変化した白式を展開している一夏、前回の決闘時と同じ形状のブルー・ティアーズを展開しているセシリアに、訓練用の打鉄を展開している箒の三人だった。

「あれ？　織斑先生は？」

「姉さんなら、職員室に戻ったよ、用事もあるって言ってたから」

「……　よかったぁ」

ちょっと俺は疑問に思うのだった、何時の間にやら千冬さんがいなくなっていることに。

俺が千冬さんを気にしたら箒とセシリアの顔が、ちょっとムッとしたようなものを見せたんだが、まあ気のせいだろう。

一夏の口から今の千冬さんの状況が語られて、俺の口からは心の

底からの声が漏れ出てくる。

「あ、弾」

「ん？　なんだ」

「後ろに要注意、だよ」

「ん？　グッハァ！！」

悪戯っぽい笑みを浮かべた一夏からの言葉に俺は後ろを振り向こうとしたのだが、凄まじい衝撃を受けてその場にうずくまることとなった。

じ、尋常じゃないこの痛み、間違いなく千冬さんだ！というか、いたのね、千冬さん。

「フン、何が良かった、だ、この馬鹿者が……　では後は任せたぞ、お前達」

「はい」

「了解しました」

「はい、分りましたわ！」

千冬さんの言葉に勢いよく返事をするお三方だが、千冬さんの言葉と表情がどこか拗ねているようなものがあったのは、気のせいだろうか？　えっと、もしかして俺って千冬さんにフラグでも立てたというのか？　か、勘弁してくれ！！俺に天然チートの旦那なんて荷が重すぎる！

だが、俺は一瞬だけ千冬さんの拗ねているような表情を見た時に、数年前に出会って、ゲーセンとかでちょっと遊んだ千冬さん激似の同い年の女の子の顔を思い出したんだが、あの娘って結局のところ誰だったんだろ？　千冬さんか一夏に聞こうと思ってたら、ほとんどその直後にあのデスレースに発展したから、忘れてたんだよなぁ……

「ど、どうしましたの、弾さん？　この世全ての絶望を見た、とでも言いそうな青いお顔をして」

「そうだぞ、何を考えている？」

（……　まさか姉さん……　後で話せば良いか）

心配そうな様子で俺を気遣ってくれるセシリア、ジトッとした目で俺を見てくる箒と何かを考え込んでいる一夏。

この少女達に俺は少しの間だけ対応に追われるのだった。

それから、俺たちは気を取り直すと、今日の特訓予定を組むためのミーティングを行うことになった。

え、逃走はどうしたって？　千冬さんが追跡に参加すると分って逃げられると思うのか？　俺では絶対に無理だね。

あの天然最強存在から逃げるなんてな。

なんて考えつつも、まずは一番問題がありそうなのに俺は声を掛けるのだった。

「一夏」

「な、なにっ？　弾」

「とりあえず、お前の1次移行を済ませたＩＳは俺も初めて目にするからな、武装とかのデータを見せてくれないか？」

「あ、う、うん！！」

一夏だ、前回でのＩＳ実習を見れば分るが、原作一夏とこの一夏はＩＳ操縦と言う面に関しては、全く同じと言うことが分ったんだよ、知識は相当なものを持っていたから、油断していた。

そうだよなぁ、知識があったって操縦のためのイメージがないと、ＩＳは思い通りに動いてくれないんだよなぁ。

まあ、1次移行を済ませた一夏の白式はやはり原作とは少々形を変えていた。

原作では全体的に鋭角的なフォルムであり、無骨さも持っていたのだが、やはり少女になっているからか所々で丸みを帯びて女性らしいシルエットになるようになっている。

ただ、武装は初期設定状態では、やはり近接ブレードのみということも確認していたから、原作と同様の武装なのは確認しなくても分るんだが、やはり確認はしておかないと怪しまれるからな。

そう思いながら、慌てた様子で武装データを表示しようとしている一夏を見ていた。

『近接特化ブレード・雪片弐型』

やはり、か。
と言うのが俺の正直な感想だった、原作と同様に一夏の武装と言うか白式の機体コンセプト自体が、近接特化に高軌道戦闘型ということか。

「雪片、か……　お前の武装は自身のシールドエネルギーを攻撃に転換して、敵に対して一撃必殺の攻撃を与えるって所か」

「ど、どうして」

「どうして分ったのか、そう言いたいのか？　一夏」

「う、うん」

「第一回モンド・グロッソ、これを言えばわかるだろ？」

俺が正確に言い当てた雪片の性能に一夏は疑問を抱いている様子なのだが、俺が出したヒントのような言葉にセシリアは心当たりがあるようで、ハッとしたように頷いていた。
一夏と箒は俺の言葉を聞いても分らなかった様子で、疑問符を浮かべていた。

「俺はあの大会をほぼ全てリアルタイムで見ていてな、深夜だったが織斑先生のバリア無効化攻撃を見ていたし、使われていた武器の名称も知っていたんだ」

「なるほどね、だったら頷けるし、弾ってあの時妙に眠そうにしてたのは、そのせいだったの」

「ああ」

俺たちの会話を聞いたセシリアと箒は納得したように頷いているのだが、一夏は別の所に呆れている様子を見せていた。

まあ、わざわざ深夜に放送されていた試合を見ていたのだから、呆れるのも無理はないだろうな。

転生したものの特権である、お話の中での試合を見れるチャンスだったから、俺は録画ではなく当時の自室のテレビで試合を見ていたからな。

千冬さんの人外っぷりもリアルタイムで、存分に見ていたのだ。

というか、性能の低いＩＳで雪片をほとんど使うこともなく優勝したあの人の凄まじさ、これが本当の天災であり天才って奴なのか。

なんて当時の俺は考えていたのだった。

「まあ、とにかく当時の試合を見ていた俺から言わせてもらえば、近接戦闘での判断力が一番物を言う武器だ」

「う、うん……」

「俺も一応は近接戦の心得自体はあるが我流に近い、確実に悪い癖も付くからな、お前は中学の頃はずっと剣なんて握ったことなんてなかったろ？」

「……そう、だね」

俺の解説に徐々にと言うか、完全にしょぼーんとなっていく一夏、俺はこんな様子の彼女に苦笑を浮かべる。

こいつは本当に厳しいことを言われたら落ち込みやすいな、まったく出会った時から世話が焼けるよ。

そう思いながらも、箒に普段の様子とは違う、真剣なものを含んだ視線を向けていた。

「だからだ、思い出すためにも箒に付き合ってもらって、正道の剣技を反射的に出せるようにしておいた方が良いな」

「そう、だね、分ったよ、付き合ってもらっても良いかな？　箒」

「ああ、構わない」

「それじゃあ、私と箒はあっちでやってるね」

そういって離れていく箒と一夏、それから少しして訓練を行い始めたので、こっちは大丈夫だろうと判断して、俺はセシリアへと視線を向けて。

「んじゃ、お前は俺との模擬戦に付き合ってもらうぞ、セシリア」

「はい！いつでも宜しくてよ、弾さん」

「良い返事だよ」

そういって俺とセシリアは飛び上がって、自分達の訓練を行うのだった。

まあ、俺もそろそろこのビットとＩＳを使って、大体どういうことが出来るのかを探りたかったしな。

弾と行われる模擬戦、それはいつかの決闘と髣髴とさせるような、一方的なものともなっていた。

「くぅっ！！（やはりこのビットは既存の技術では作られていない！それ所かわたくしのブルー・ティアーズよりも数段は上！？）」

今回の模擬戦では弾は１２基のビットを全て解放していたが、その行動は一定の数以外の動きは非常識と言えるものになっていたのだ。

解放された内の３基が自分を攻撃する為にビームを撃って来ているのに対し、３基は三角形のフィールドを形成して時折自分が放つスラーライトＭｋ？のレーザーを防御していく。

残りの６基はセシリアの周囲を囲むように展開していたが、何もしてこない挙動を疑問に思った瞬間。

「セシリア！何もしてこないビットを疑問に思うのも結構だが、こいつらにはこういう使い方もあるんだよ！！」

「なっ！！？」

弾は拳銃型武装ファルシオンを両手に展開し、セシリアの周囲に展開されていたビットへとビームを発射する、ビットがフィールドを展開すると同時に向かってきたビームを反射して、意図的な兆弾現象というべき状況を作り出していた。

その現象は全てセシリアへの命中軌道にあり、疑問に感じつつもビットからの直接攻撃のみを警戒していた彼女には、まさに寝耳に水の状況となっていた。

それを回避、防御しながらも攻撃に展開していたビットも攻撃してくるのだからたまらない、それらの回避に成功してもビットが自分の死角に回り込んで、流れ弾になったものも無理なく反射してくるのだから彼女は既に満身創痍になろうとしていた。

（本国と技術チームが、弾さんとＩＳ、もしくはそれの重要なデータを何がんでも入手しろと言っていたのも頷けますわ！なんて非常識な！？）

心の中で悪態を付きつつも、弾から降り注がれる弾幕は留まることを知らなかった。

弾自身がファルシオンで直接セシリアを攻撃したと同時に、解放していたビットもセシリアを同時に攻撃し始める。

攻撃を回避しても防御してもやまない弾幕にセシリアは、攻撃の暇を与えてもらうこともなく。

「終わりだ！セシリア！」

「くっ、この性能！理不尽すぎますわ！」

といって弾の最後の一撃の閃光に消えるのだった。

撃墜したセシリアはＩＳが解除されたようで、俺が受け止めて地上へと戻るのだが。

地上へと戻った俺を出迎えたのは、呆れ果てた一夏と箒の視線だった。

「弾、模擬戦なのにセシリアを撃墜してどうするのよ」

「いや、ちゃんと手加減はしたぞ？　明日にはＩＳの自己修復で直る程度に抑えたし」

「一夏と私が言いたいのは、そういうことではないのだが、なぁ……」

呆れからジトッとした視線に変わった二人の視線の元を辿ると、俺にお姫様抱っこの要領で抱きかかえられて、顔を真っ赤にしているセシリアの姿があった。

俺はセシリアを降ろしたのだが、なんで残念な表情をする？

「あっ……」

「ん？」

「な、なんでもありませんわ！」

降ろされた時にセシリアは残念そうな声を上げてくるのだが、俺はそこに疑問の声を投げかけると彼女は顔を真っ赤にして、慌てた

ように否定していた。
まあ、俺もちょっとこいつの体の柔らかさとかを感じれなくなって、残念な気持ちを……　ハッ！

き、気が付いたら一夏が俺を冷たいと言うか、いつもの瞳で眺めていた。
ヤバイと判断した俺は、セシリアの体の感触を急いで忘却の彼方にやるように努力し、何とか落ち着かせたときに、ようやく一夏の瞳は普通のものになっていた。

「そういえば一夏と箒も終わったのか？」

「ああ、一夏は剣道の基礎を忘れていたからな、これからは私が鍛えたいと思うが、近接戦の心得があるというのなら」

「分っているさ、俺も一夏に護身術程度の体術は教えるけど、剣に関してはそっちに任せる」

「心得た」

「うん、分ったよ弾」

そんなこんながあって、俺は自分のピットへと戻っていった。
ちょいと一夏の奴が前途多難だな、なんて考えながらではあったのだがな。

第8話　ようやく来たか！俺の部下達よ、さあ俺と共に、この学園のアガルタを

因みに、この犬と猫、名前がまだ決まってないんですよね……　私が決めるとダマとかヤストとかになっちゃうので、どうしようかな。と考えております。

名前の募集は終了しました、寄せていただいた方々には、改めてお礼の言葉を言わせていただきます。

第9話　ちくしょうちくしょう……！アゲハな夜のお姉さまたちとの一時が……

特訓も終わってから着替えた俺の更衣室の扉が開く音がする。

「弾！お疲れ様、はい、タオルと飲み物、スポーツドリンクで良かったよね？」

「お、ありがとよ」

扉が開いて勢いよく入ってきたのは鈴の奴だった、
ありがたいことに鈴の奴は俺に、差し入れを持ってきてくれたらしい。

正直に言って汗をかいて不快な感じになっている所で、汗を拭えて水分補給が出来るというのは、たまらんねぇ。

「本当はキンキンに冷えたのが良かったんだがなぁ」

「なにバカ言ってんのよ、運動した直後に冷たい飲み物って言うのは体に悪いんだからさ、こんな所でも気遣いをする私に感謝しなさいよ」

「へいへい、ありがとぉーございまぁーす」

「あんたって奴は、ほんっとうに変わらないわよね」

なにが嬉しいのか、文句をブー垂れる俺を窘める言葉を言っている鈴の奴は、ニコニコと本当に嬉しそうに笑っていた。

ドリンクも飲みきったのをゴミ箱に入れて、顔にまだ浮かんでくる汗を拭う。

「ふぅ……　ん、どした？」

「な、なんでもない！なんでもないわ！（な、何かこいつって、運動の後ってこんなに格好良かった！？　ううう……）」

汗を拭っている俺の姿を鈴のやつは何でかしらんが、凝視、そう俺に穴が開きそうなくらいに凝視していたのだ。

こんなこいつの様子を見ていて、疑問しか浮かばなかったのだが、鈴が時々変になるのは中学の辺りからだったか？　その辺からのデフォだしどうでも良いか。

なんて考えていたんだが、時計を見たらもう夕食に行くには良い時間だったから、立ち上がり何処かへと旅立った様子を見せる鈴の頭に、右斜め４５度の角度でチョップを浴びせる。

「いった!?」

「何時まで旅だってんだお前は、とりあえず、皆と一緒にこれから飯を食うんだが、お前さんもどうだ?」

「い、行く!行くわよ!」

「んじゃ、決まりだな」

顔を真っ赤にして慌てて同意してくる鈴の姿に、ちょっとニヤニヤしたい気分になるのだが、それをこらえて完全に着替え終わった俺は、鈴を連れて更衣室を後にする。

「あ、弾どうしてお……」

「どうかしましたの?　一夏さ……」

どうやら俺が出てくるのを待っていたらしい、俺がいた更衣室の扉の近くにいたセシリアと一夏が、こちらを見るんだが……　鈴と一緒に出てきたのを確認すると、彼女たちの言葉が不自然に途切れる。

改めて思う、どうして俺は逃げなかったのか。

とな。

「「ちょっと、お話をしましょうか？」」

「……　そうね、そういえば私もあんたに話があるんだったわ」

ハイライトが消えた瞳で俺の腕に自分の腕を絡めてくる一夏、反対の腕に同じ様な雰囲気で腕を絡めてくるセシリアの2人と。

背後には、ゴゴゴゴゴ……　と効果音が着きそうなくらいに怒り狂っているであろう鈴の感情の波が伝わってくる。

……　もしかしなくても……　詰んだ？

なんて考えながら、俺は3人に引き摺られて食堂へと向かうのだった。

因みに上記の騒ぎにこそ参加しなかった箒さんだが、しっかりと俺に対して険しい視線をビシバシと向けてきていて、それらが突き刺さって俺の精神を更にガリガリと削っていたりするのは、言うまでもない。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第９話　ちくしょうちくしょう……！アゲハな夜のお姉さまたちとの一時が……！？　い、イチカニリンサン、や、やだなあ、そんな所にイクワケナイジャナイカ！このマッチは何って？……　し、シラナイヨ？～

それから食堂に着くちょっと前の所で説明するから、と言う俺の必死の説得が実ったようで放してくれたんだが、俺が針のむしろと言うべき雰囲気は変わる事はなかった。

そんで俺はマーボーカレー（……なんでこれが普通に食堂のメニューにあったのだろうか？　もしかしたらだが、この世界にはテイ〇ズがなかったから、その影響か？）を注文して、鈴は今日は豚骨ラーメンに一夏と箒は日替わり定食で、セシリアはクリームシチューを注文していた。

「それでは弾さん？　どうして鈴さんといっしょに更衣室から出てきたのか？　それを説明していただきますわ」

「そうだな、何故お前と鈴が一緒に出てきたのだ？」

剣呑な色を持って俺を見抜いてくる二人の瞳、俺は喉がカラカラに渇いて行くのを感じて、水を飲もうとコップに手を伸ばしつつ、俺に詰問をしてこない一夏と鈴がちょっと気になったので、そっちを、ちらり、と見たのだが。

「そういえば一夏」

「どうかした？　鈴」

「面白いことを噂で聞いたのよね、私って」

「へぇ、何か気になるな、その面白いことって」

「あんたと弾が同じ部屋に住んでいるってことを……　ね」

「ふぅん、だとしたら、どうするの？　これ一応は姉さん、織斑先生も許可済みなんだよね」

「へぇ、千冬さんも……　それって職権濫用ってやつよね？」

「さあ、ね、弾の立場って複雑でしょ？　だから、最初はせめて顔見知りであり幼馴染でもある私と一緒にした方が良いかな、なんていう判断だと思うけど？」

「それでいくとさ、もう一人は大丈夫な人間っているんじゃない？」

「クスッ、何が言いたいのかな？　鈴」

「分っているでしょうに、昔からあんたって油断ならない人間の筆頭だし」

「「クス、クスクスクスクス……」」

正直に言おう見るんじゃあ、なかった。

俺はチラリと見て彼女達の空間さえ軋んでいそうな言葉と、視線のやり取りを見て後悔と言う感情に包まれたのは、言うまでもない。

恐いやり取りを行っている二人を何とか視界の端にやり、自分のカレーをとっとと食ってしまおうとスプーンを改めて握ろうとしたら。

その手をセシリアと箒の手につかまれる。

「一夏と鈴さんのことが、そんなに気になるのでしょうか？」

「質問に答えていない内に、他の女子に注意と視線を向けることはマナー違反だとは、思わんのか？」

おねがいですどうか、だれか、だれか、誰か、助けてください。

そう俺は心の中で無意識に助けを求めつつ、自分の中に存在する勇気と言う感情をかき集めて、総動員して事情を説明しようと俺の口に渇を入れるのだった。

「えーと、一緒に出て来た訳は」

「「「訳は？」」」

「あ、アハハハ、一夏さん……　鈴との会話は、もう宜しいので？」

「良くないけど、それ以上に気になることあるし、これは弾の口から真相を聞きたいなぁ……」

「私が言っても、聞いてくれないのよ……」

ここで俺は更に追い詰められることとなった。

なぜなら、一夏もこの会話に参加してきたからだ、鈴の奴はと言えば既に説明を行ったようなのだが、信じてもらえなかったらしい。

呆れを滲ませながら、自分のラーメンを食べつつそう言っていた。

「鈴の奴が、俺に差し入れを持ってきてくれたからだ、ほらタオルとか準備できなかったしな、俺」

「そうよ、弾の奴って準備が悪いから、私と一夏でいつもフォローしてあげてたじゃない？　それを思い出してさ」

「そういえば、弾は織斑先生に捕獲されてアリーナに来たから、用意している暇はなかったな」

「考えて見れば……　そうですわね、出て来た時に持っていたなかったはずのタオルを持っていましたし」

良く言った！良く説明できた俺！と自分の中で俺は自分自身を褒め称えていた。

この言葉が功を奏したのか、箒とセシリアは納得した様子を見せて、数回頷いていた。

「すまなかった」

「へっ？」

「変に疑ったり、怒ったりした事を、だ」

「お、おう……」

「わたくしからも謝罪させていただきますわ、弾さん、申し訳ありませんでした、わたくし達も注意すべきことでしたのに」

「い、いや、気にしなくても良いぞ、気が付いた奴がするべきというか、俺が準備して置かなかったのが一番悪いからな」

まあ、怒りを向けられたこととかは別に気にしてないから構わんのだが、ここまでしおらしくなられるとちょっと調子が狂うな。

だけどまあ、こんなことになれば一番落ち込むのが、一夏な訳でして、さっきまでの様子はどこに行ったのやらといった様子でしょぼーんとしていた。

「ごめんね、弾……　ＩＳの訓練をやるんだから、タオルとかいるよね……　忘れてて、ごめんね」

「……　まったく」

落ち込んでいるらしい一夏に俺は近付いて頭を撫でてやると、一夏は驚いたように俺を見上げてくる。

ちょうど上目遣いで見上げてきて、その上に少しだけ涙目になった一夏の破壊力は、結構凄いものがあるからな、もしもこれが２人きりで部屋にいる時にやられたら、危ないな。

俺の理性が。

「さっきも二人に言ったがな、準備を怠っていた俺が一番悪いんだ、だからお前が気にすることじゃないさ」

「でも……」

「良いんじゃないの？　次にちゃんと準備してあげてればさ、勿論、私もあんたに負けないように準備しているからね一夏」

「う、うん……　ありがと、鈴」

「どういたしまして」

雨降って地固まるって所かね、なんて考えて、その後からは和やかな夕食の風景と言える状態になったんだがな。

俺は忘れようと思っていたのかもしれない、一夏と鈴の会話の決着は付いていなかったと言うことにな。

それから俺と一夏はシャワーを浴びた（今回は俺が先に使わせてもらえた！ラッキー）後、緑茶を飲んでまったりとしていた俺たちの部屋が突然ノックされる。

来客を出迎えようと俺が立ち上がり、扉を開けた先に何故か鈴が、そこにいた。

「鈴、こんな時間にどうした？」

「ちょっとね、さっき千冬さんと話してきたのよ」

「……　嫌な予感しかせんが、言ってみろ」

「フフフフ、一夏！！」

「なに？」

正直に言ってはいってきた瞬間からの鈴は、無茶苦茶恐かった。

体全体から漂ってくる殺気に怒気、部屋に入ってきた時から鈴は俺を見てはおらずに、一夏だけを見ていた。

対する一夏はといえば、鈴をハイライトの消えた瞳と、平坦な言葉で迎え撃つ。

竜虎っていうか、どう表現すりゃぁ、良いんだろうか？　これって、なんて考えていて呆然としていた俺を無視して二人は話を進めていく。

「次のクラス対抗戦で、私の組が優勝したら、弾の部屋には私が住むことになったわ！」

「！？」

「今、私が言いたいのはこれだけよ、一夏」

「そっか、これは完全な宣戦布告だね、鈴」

「ええ」

こわい、恐いよぉ……　そう俺は部屋の片隅で二人を見ないようにして震えていた。

２人の殺気が物理的圧力になってさえいるのか、周囲の壁とかがミシミシとか軋む音を上げており。

こいつらって、人間だよな？　と俺は考えていたのだった。

「弾と一緒の部屋に暮らしていられるのは、今の内だけだからね」

「おもしろい、冗談だね」

「冗談なんかじゃ、こんなことを言わないわ……　それに」

「ぬっ！？」

「あーーーーーーーー!!何やってるの!?　鈴!」

ゴゴゴゴゴゴ、と言う効果音で満たされた室内の中、俺は床に敷かれているカーペットの毛の数を数えて恐怖と言う感情を誤魔化していた。

そのうちに鈴が近づいてくるのが分ったが、ここで避けたりとかすると、よりこじれるのは目に見えていたから、なすがままにしていたら。

頬に暖かい感触を感じた。

たぶんと言うか確実にというか確定的に鈴に頬にキスされた。

何を言っているのか分らねえと思うが、俺も一瞬何をされたのかが分らなかった!デレデレにデレた鈴だと!?　ここで登場したのか!?

なんて阿呆なことを考えながら、一夏の悲鳴としか言いようの無い声も一緒に聞いていた。

「と、とにかく!次のクラス対抗戦で、私は必ず弾に勝って一緒に暮らすわ!」

「こ、こっちだって弾は強いから鈴に負けないよ!!」

俺にした行為がよほど恥ずかしかったのか、鈴の奴は顔を真っ赤にして蒸気を出しながら、捲くし立てて俺たちの部屋から出て行くのだった。

それから残されたのは、キスされた頬を呆然と押さえている俺と、むぅ～！！と言った様子で剥れている一夏の姿だったのだが。

鈴にされた方とは逆の方に、今度は一夏にキスされた。

「い、いいいいいい！一夏！？」

「か、必ず勝てるようにっていうおまじないだよ！」

一夏も恥ずかしかったらしい、顔を真っ赤にして俺に捲くし立てると、既に寝巻きに着替えていたからか、ベッドにいそいそと入っていくのだった。

まあ、暫くの間呆然としていた俺だったが、良い時間になったから、寝たんだが、その日は良く眠れなかったのは言うまでもない。

何しろ、２人の幼馴染の女の子に頬とはいえ、キスされたんだからなぁ。

なんて考えながら。

第9話　ちくしょうちくしょう……！アゲハな夜のお姉さまたちとの一時が……

さ、砂糖を砂糖を吐きそうだ……

第１０話　そういや原作で一夏が鈴としてた約束を俺ってしてないな……もしかして

そんでもって今日は昨日あんなことがあった翌日である。
俺たちは既に日課となっている特訓のために、いつも使っているアリーナにいた。

「今日は、近接戦関連を主軸にするかね」

「では、私が相手になるとしよう」

「だな」

以前セシリアと決闘した時に魔改造したと俺は言っていたのだが、その時に魔改造するための作業に集中して遅れていた武装があったのだ。
それは魔改造する前に搭載されていた、最適化後の機体専用の近接用ブレードで、決闘の最後に使ったアレは、実は元々登録されていたものをちょこっと弄っただけだったりするものなのだ。
なので本当に使用する為の専用ブレードが遅れていたのだよ。

「それがお前のＩＳの近接ブレードか？　前に使っていたのとは形

が変わっているようだが」

「そうですわね、わたくしとの決闘の際にはクレイモアの形状をしていたブレードだったんですが……」

「普通の材質で出来てたんなら、まだ使えたんだがなぁ……」

「使われてた材質が普通じゃなかったって、そう聞こえるけど？」

含みをもたせた俺の言葉に一夏が疑問を投げかけて来るんだが、聞けば驚くだろうよ。

何しろ。

「鉛で出来てたし……」

「はぁっ！？」

「そ、それは一体どのような冗談ですの！？」

「それって、普通に剣じゃないよ……」

だよなぁ、こうなるよなぁ。

……　ビームソード状にしたら形が戻らなくなった上に、前衛ア

ートのような形で固定されてしまったからな、二度と使えん。

なんて考えていた俺は当時の武装スペックを思い出しながら、心の中で涙を流すのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１０話　そういや原作で一夏が鈴としてた約束を俺ってしてないな……　もしかしたら鈴と一緒に過ごした一夜が原因か？　危うく本番を……　アノイチカニホウキトセシリア、ドノヨウナヨウジデショウカ？～

「ふぃ～、食った食った……」

特訓も終わり夕食も皆で済ませた俺は、一夏たちとは別れて部屋へと向かっている。

何で別れて向かっているのかって？　男子トイレに行っていたといえばわかるだろ。

遠いのがやっぱり不便だよなぁ……　何しろ生徒の寮を一回出てから男性教員専用寮まで行かなきゃならんし。

まあ、千冬さんに先週直談判して来週までにはトイレをつけてもらえることになったから、それまでの我慢だよなぁ。

（尾けられてるよな、やっぱ）

なんて考えつつ寮に入った俺だが、男性教員専用の寮を出た辺りから、気配を完全に消した何者かに尾行されている気配を感じ取っていた。

完全に気配を消すなんてこいつ尾行がなっちゃいないな、気配を殺すんじゃなくて身の回りにある全ての気配と完全に融合して違和感を消して（注意：こんな芸当は全うな人間なら、どんなに訓練を受けようとも移動している状態では出来ません）から追って来いよ、なんて考えつつも撒くか、と、一瞬で判断した。

それから寮に入りロビーを抜けた最初の曲がり角でダッシュする様子を、曲がる直前で見せた後、隠れるのだった。

男性の教員寮から出て来た弾を追いかけていたのは、扇子を持ちＩＳ学園の制服を身にまとっており、リボンの色から二年生と言う

ことが分る少女だった。

彼女は気配を消して弾との距離は着かず離れず、と言った微妙なラインを常に維持していることから、素人ではないことをうかがわせる。

（五反田　弾くんね……　過去の経歴に不審な点は特に……　無いとは言い難い面はあるけど、学園での生活ぶりは普通？　とも言えるわね）

弾に観察するような視線を投げかけつつも、足音が全くしない歩き方で歩く彼女の姿は、くノ一にも似た雰囲気を感じさせている。事実彼女は暗部、つまり昔風に言えば間諜の役割を持った少女であり、この程度の芸当は朝飯前、と言う様子でもあったのだが。

（あの、織斑先生が全力で挑んでようやく五分で戦える実力者であり、正体不明のＩＳを駆る男子生徒、私に役割が回ってきたのは必然、か）

弾を追いながらもまだ思考はやまずに、観察しつつ追いかけている。

冷たくも無く、暖かくも無く、かといって他人に不快な印象を与

えない雰囲気を持った少女。

弾が寮の中に入って行くのとほとんど同時に寮に入るのだが、ロビーを過ぎた所でいきなり状況が変化した。

（!?　気づかれてたと言うの!?）

そう、弾がいきなり走り出したからだ。

これは明らかに彼女の尾行に、前から弾が気が付いていたことを意味している。

彼女も慌てながらも足音に気配を消したまま、曲がり角に到着したのだが。

「やられた……」

そこは両側が壁の直進通路で、隠れるような場所も部屋も障害物も何も無い通路で、二十メートル先に階段があるだけの簡素な造りの廊下なのだ。

常人ならば、走っている姿くらいは確認できそうな弾の姿はどこにも確認できず、逆にこの場にある静寂と完全に見失った気配が、自分の今の状況を教えてくれていた。

「やられたな……　ここまでの実力者だったなんて、これはなんとしても接触しないとね」

そう言って少しだけ気落ちしたように立ち去っていく少女、彼女の姿が消えた後、廊下のある一部分が不自然に人の形に盛り上がっているのが確認できる。

「忍法【北風と太陽の術】なんつって」

壁紙と同じ布で擬装していたのは弾である。

というか、どうしてこれであの少女が気付かなかったかと問いたいが、弾はやはりと言うべきか、何らかの方法を駆使していたようである。

「……　確か、あれって生徒会長？　だったよな……　見た目は確かにすんげぇ良いんだが、本能は手を出したらトンでもない事になるって言っているからなぁ……　これからは逃げるが吉だな」

などと言いながら、部屋に向かって歩いている弾の姿があるのだった。

そんで持って1週間が過ぎて試合当日。

え？　トーナメントの相手が描写されてないって？　んなもん話の流れを考えたら分るだろ。

相手は鈴だよ、それもやたら張り切って殺る気に満ち満ちた、なんていうとんでもなく面倒な状況でもあるな。

まあ、とにかく試合を行う為の準備も整った俺は鈴の前に行くんだが、やっぱ鈴は殺る気に満ちていた。

彼女の左右に浮かぶ非固定浮遊部位がやたらと刺々しいのは気の

せいだろうか？　スパイクアーマーとも言うべきもの、それでショルダータックルでもされたらすんげぇ痛そうだな。
なんて事を考えていた。

「ねえ、弾」

「なんだ？」

「アンタの背中にくっついているビットの数って、報告じゃ１２基って聞いてたんだけど」

「そうだぞ」

「なんで４基しかないのよ！？」

そう、鈴の指摘通り俺の背中にいつもくっ付いているビットが、今は四基しかないのだ。
一応はちゃんとした理由はあるのだが、これは未知数と言えるし言っても信じてもらえない事だろうから、黙っておいた方がよいか。

「まあ、理由はあるんだが」

「なによ？」

「ちょっとな、整備せずに使っていたからか、ガタが来たんだよ、そんでもって今修理中な訳さ」

「バカじゃないの？」

呆れたと言うか侮蔑に近い鈴の瞳、なんかゾクゾクとする不思議な感覚を感じる。

……俺ってMじゃないはずだよな？　Sだって自覚しているつもりなんだが。

そんな風に呆れていた様な侮蔑していた様な鈴なのだが、不意に表情は引き締まり真剣で不敵なものを含んだ表情へと変化する。

そう、油断も驕りも全く無い目の前の敵を打倒する為にある戦士としての表情にな。

いつの間にかこいつも成長してたんだな、なんて感慨深げに考えていた俺も意識を戦闘のそれへとシフトする。

セシリアの時のようにふざけ半分で挑んで良い相手じゃないな、真剣に、一切の情も排除してコイツに挑むとしようか、こいつもそれを望んでるだろうし。

「さてと、私がアンタの位置にどれくらい辿り付けたのか、この試合で試させて貰うわ！！」

「あの日の夜みたいに切なげに鳴き叫んだりするなよ」

「んなっ！！んななななぁ！！！」

因みに今までの会話は開放回線、所謂オープンチャンネルと言われてるもので会話をしてたんだが、一瞬だけログにも記録されないくらいの一瞬だけ解除して、鈴にだけ聞こえる声でそういっていた。
鈴の方は解除されていなかったので、いきなり顔を真っ赤にして蒸気まで噴き上げて叫びだした鈴の姿に、観客達は一様に疑問符を浮かべて見ていた。

慌てている鈴の様子が最高潮に達している状況をニヤニヤしてみていたら、背中に氷柱を差し込まれたような感覚を感じる。
それも3人分だ、もしかしたら俺のピットにいたあの三人が……？　なんて考えたのだが、気を取り直した鈴は真っ赤な顔で頬を膨らませるように睨んでくる。

「ま、まあ良いわ（同じ部屋になったら、い、いつも……）」

『それでは、両者試合を開始してください！』

何かを続けて言おうとした鈴の言葉を遮るようにして、試合開始のアナウンスが流れる。
俺は既に展開してたファルシオンから放たれる、連射式のビームを鈴は危なげなく三次元跳躍旋回を駆使して回避していく。

その間に俺も鈴を打ち抜くための最適なシュートポイント目指して移動する。俺の動きから一方的に撃たれる事を懸念したのだろう、鈴は既に展開していた近接用の武装の異形としか言えない青竜刀を両手で握り締めて、こちらに接近してくる。

「やあぁぁぁ！！」

「ちっ！！（やっぱ重っ！！）」

こちらに接近してくるのが予想外に早かった為に、俺はファルシオンをクロスさせて青竜刀を受け止める。接近されたときのシールド代わりにもなるように、コイツを設計したのがちょいと助かったな。

だが、受け止めた時に伝わってくる衝撃は予想以上のもので、思わず心の中で本音が出てくるのだが、これを口に出してしまうと俺は地獄を見てしまうのは間違いないだろう。

鈴が更に押し切ろうと力を込めてくる為の一瞬の隙、それを見逃さずに俺は鈴の青竜刀を受け流して、体勢を崩させて脇腹に蹴りを入れる。

「いった！！こんのぉ！！」

（衝撃砲か！！）

蹴りを入れられて落下していく鈴は、片方の非固定浮遊部位を解放する。

それは間違いなく衝撃砲だろう、ＩＳのハイパーセンサーではほとんど捉えられていないが、肉眼で確認すれば良く分る空間そのものの揺らぎがあり、その揺らぎの方向は発射する方向にどうやら集中的な揺れが発生するらしかった。

既に発射されて、直線軌道で俺に向かってくる衝撃砲の砲弾を、少しチャージしたファルシオンのビームで撃ち抜くのだった。

ここは弾が出て行ったピット内、そこのリアルタイムモニターに映る弾の姿を、一夏に箒とセシリアが真剣な表情で眺めていた。

「……　戦いは始まったけど、気になること、弾が言ってたよね」

「そうですわね……　大変に興味深い一言でしたわ」

「ああ、そうだな……　大変に興味をそそられる内容だな」

見目麗しい彼女達の姿をどう表現すべきだろうか、夜叉、もしくは修羅、鬼、とも表現できそうな雰囲気でモニターを眺める少女達の姿、まかり間違っても近付きたくはない光景であった。

「だけど、全部が終わってから弾と鈴に聞けばよいよね？」

「そうだな、今はこの試合に集中するとしようか……　だが、今弾が迎撃したあの武器は一体？」

「あれは恐らく衝撃砲ですわね」

「「衝撃砲？」」

それまで一夏と同じ目をしていた箒は、気を取り直したように言ってくる一夏に同意するように、雰囲気を本来のものに戻していた。

それに合わせたのかセシリアも同じ様に、それまでの雰囲気を霧

散させて箒の疑問に答える。

彼女の口から出てきたのは、聞き慣れない武装の名称であり、疑問符を大量に浮かべた表情で問いかけた。

セシリアは彼女達の様子を確認すると、頷いて真剣な表情になりながら言葉を続けていく。

「ええ、空間自体に圧力を掛けて砲身を生成して、そこから余剰に生じた衝撃それそのものを砲弾として打ち出す、ブルー・ティアーズと同じく第三世代型の兵器ですわ」

「空間に砲身を生成するって……　射角限界とか無いって事？」

「そういうことになりますわね、空間そのものに砲身を生成するのです、ですから」

「前後左右上下、それこそ真後ろだろうが真下だろうが、場所を選ばずに発射できると言うことか」

「箒さんの言う通り、ですわ」

セシリアの説明を聞きながら合点がいったというように、補足するように質問するような確認するような箒の言葉を聞いて、セシリアは満足げに頷いていた。

だが、彼女達の目の前のモニターでは弾はというと、危なげなく

迎撃に成功しているのを見ていると、一夏の心に疑問が湧き上がって来ていた。

「でも、弾って、ほとんど完全に回避したりとか迎撃できてるみたいだけど、どうしてだろう？　セシリアの言葉を聞くとかなり難しいように聞こえるんだけど」

「それは……　恐らくと言うか推測になりますけど、弾さんは衝撃砲の発射タイミングと角度をもしかしたら、発射の直前の空間の揺らぎで判断しているのかも、しれませんわね」

「まさかそれは……　普通はありえないと言えてしまうのだが、あの男ならありえると言えるところが恐ろしい所か？」

「えーと、多分だけどセシリアの言っていることって、あってると思うなぁ……　弾って動体視力とか物凄く良かったし」

質問してきた一夏の言葉に答えて行くセシリアだが、その言葉は完全に自信のないものに変わっていくのだった。

自分で発言しつつ、ありえねぇよ、なんて考えてしまったのだろうが、目の前のモニターに映っている男の方は理不尽が服を着て歩いている。

なんて過去にいわれたことのある男である。

この説明を聞いた時点で幼馴染である一夏は、セシリアの答えに苦笑いを浮かべながら肯定しているのだった。

一夏の肯定の言葉を聞いたセシリアと箒だが、信じられるような、信じられないようなといった様子で彼女の言葉を聞いた後、皆一様に表情を少々顰めるのだった。

はっきり言って常識で物を考えてはいけない、と言う事例だろうが、彼女達は忘れている。

教師たちがいる場所には、弾と同じかそれ以上の事が出来る天然チートと言える人物がいることを。

数回ほどは発射のタイミングが分らなかったから、衝撃砲の砲弾を幾つかは防御もしたんだが、今は避け方も発射された後の機動を見切るコツも見えたな。

原作での描写が凄い強力な兵器だ、見たいな感じだったから暫くは見極めるように見ていたんだが、これって発射寸前辺りになると方針の角度変更が出来ない上に、砲弾自体も実体弾で言えば徹甲弾に当たる弾種しか生成できないことも分った。

つまり広範囲面制圧用の榴弾とか徹甲榴弾とかの弾種は出来ないから、必然的に生成した砲身の角度さえ判断できれば攻撃機動も丸分りになる。

なら、そろそろ来る頃だろうしな、動くとするかい！

「くっ！どうして当たらないのよ！？」

「徹甲弾しか生成できないなら、砲身の角度さえ分れば避けるの簡単だし」

「あ、アンタ……　まさか、衝撃砲の砲身の角度とか分って避けてるわけ！？」

「おう」

「こ、この理不尽野郎！！」

「なにその言いがかり！？」

なんて言いがかりだ！？　鈴の奴は、俺のどこが理不尽だよ千冬さんの方が理不尽だろうが！と叫びたい気持ちを必死で抑える。

間違いなく声に出して叫んだら、俺は明日の朝日を拝めないからな。

まあ、それは置いといてファルシオンを粒子変換した後、俺は新

型のブレードを展開する。

「それがアンタの近接用の装備？」

「まあな、切れ味やらどういった性能かは、お前の体で確かめろよ！！」

「上等じゃない！！」

俺は両手で近接用複合剣を構えて、四枚の翼のスラスターを全開にして向かっていく。

刀身の長さは４ｍ近く幅は２．５ｍというサイズに、装飾と言った類のものはほとんどない外見をしている。

該当するものがあれば、るろ剣（この世界にも有った！ＩＳが出来て女尊断碑になる前の作品だったみたいだな、発売直後にＤＶＤＢＯＸを新品で購入しましたが何か？）の斬馬刀が該当するだろうそれを、俺は一気に鈴へと振り下ろす。

鈴は瞬時加速にも匹敵するスピードで接近してくる俺に、少しだけ驚いたのか回避するには反応が遅れてしまい、防御する。

こいつを待ってたぜ、鈴！

俺はそう考えた瞬間に、顔は自分でも分かるくらいにニヤリ、という形に歪むのが分る。

表情がと言うか、嫌な予感しか連想しない俺の表情を見た鈴は、

受け止めた体勢から無理矢理離れようとするのだが、俺の持つブレードに変化が起きる。

「なっ！？　け、剣が分離！？」

そう、いきなり巨大な近接用ブレードがバラバラに十本近くの小型ブレードに分かれたのだから、鈴の驚愕も無理はない。

実際にこれを始めてみた時の箒の表情と言えば、凄く間が抜けたというか、そんな感じの表情をしていたし。

完全に呆けて、ありとあらゆる事への対応が明らかに遅れている様子を見せる鈴、そんな鈴を確認する間もなく、俺はスラスターを再び全開にして周囲にある剣を使い攻撃していく。

「くっ、この！」

鈴はここでようやく対応しようともう遅いぜ、一つ一つで全身を切り刻んで行く俺と、防御しようと回避しようとする鈴、彼女のＩＳのシールドエネルギーがどんどん削られていくのが分る。

そして、鈴はなす術もなく全てのシールドエネルギーを削られきって、ＩＳ強制解除後に地面に着地した瞬間に、それが現れたこと

を知らせる警告音が俺のハイパーセンサー内に鳴り響いた。

さて、ここで種明かしと行こうと言うか俺が、本当に警戒していた存在について触れよう。

四基しかなかったビットの残りがどこに行っていたのかといえば、ずばりＩＳ学園上空に待機していたんだ。

うん、あの無人ＩＳ襲撃に備えたのさ。

原作じゃああの天災は関わってなかった、とか言われてたけどどうか分らんしな。

それにＩＳ学園上空から降って来たのは丸分りな状況だし、そこにステルスサーチモードで展開していたビットからの緊急連絡が入ったわけだ。

俺のセンサーはビットと同調しており、こちらへと真っ直ぐに降りてくるＩＳの姿を確認していた。

それを見たと同時に、俺の表情は再びニヤリと歪んで、ある一つの武装を展開する。

「は、ハリセン？……　あんた、それで一体何をする気なの？」

「まあ、見てろ」

そう、ハリセンだ！しかも！あの決闘の時とは違って、今回のは特別仕様！なんと全長７ｍに全幅４ｍというビッグなハリセンなのだ！！

そして、アリーナのシールドを破ったＩＳ、そのまま落ちてこれると思うなよ！

「ちゃーしゅーメーン！！」

そんな巨大なハリセンを俺はまるでゴルフクラブを振るように、振るった瞬間に確かな手応えを感じる。

「よっしゃぁ！！ホールインワン！！」

『……』

哀れ、無人ＩＳは自分で破ったアリーナのシールドから、再び上空へと打ち上げられるのだった。

無論のこと、常識では測りきれなさ過ぎる光景に、観客と鈴が口をあんぐりと開けた上に目を丸くしていたのは、言うまでもないな。

第１０話　そういや原作で一夏が鈴としてた約束を俺ってしてないな……もしかして

無人機ェ……

今回の話では戦闘にさえならなかった無人機くんに、幸あれ……

第１１話　なあ鈴……　俺は後何回一夏の恐怖を味わえば良い？　蒼穹は何も答えない

その後、試合中止のアナウンスが流れて、無人ＩＳはいないのにアリーナのシールドとかがハッキングを受けて、レベル４に設定されるなんて言う間抜けな状況下のなか。
俺と鈴が何をしていたかと言うと。

「ほい、王手飛車取り」

「にゃ゛!?　ちょ、ちょ「待ったなしな」えー!!」

将棋をやっていた。
それも旅行先とかでやるような簡単なマグネットタイプな奴な！
何でそんなものを持ってるんだって？

それは秘密って奴さというか、最初からこうなることって予想出来てたしなぁ、暇つぶしの道具として持っていたのだよ。

「それにしても、どうして私達は将棋なんてやってるの？」

「暇だからだろ、飛車いただきぃ！」

「ていうか！ちょっとは手加減しなさいよ！？」

「……　鈴の攻め方って読みやすいんだよなぁ、夜の方はややこしく攻めないといけないくせに」

「――――――――――――――――――――――――っっっっっっっ！！！！」

つーか、こいつの攻め方って本当に直情思考の奴そのままなんだよな、何しろ防御とか迎撃を捨てて、攻撃に専念って、ある意味で清々しいわ。

鈴の苦し紛れというか逆切れともいえる言葉なんだが、あの夜のことを持ち出すと途端に羞恥心で顔を真っ赤に染め上げていた。

無論のこと、声鳴き悲鳴と言うべき声を上げつつであり。

俺のほうには氷柱が差し込まれた感覚がしたがな！

「まあ、それはそれとしてだ……　鈴、お前が中国に帰らんといかんかった、あの日の事を見れば分るがやっぱ……」

「うん……　結局は離婚、したの……　弾が色々してくれて、私にも勇気までくれたんだけどね……　二人を止められなかった」

「そうか……」

「だ、弾？」

突然真剣な表情になった俺に、真剣な質問が飛び出してくると思ったのか、鈴も同じ様な様子に変わる。

俺の質問に悲しそうに泣きそうな表情で答えていく鈴の姿、それを見ていられなくて鈴を俺の胸に抱き寄せる。

驚いたように恥ずかしそうに、鈴は少しだけ身じろぎするのだが、俺はちょっとだけ力を強めると小柄な鈴の体はすっぽりと収まってしまう。

何でかしらんが、俺ってこいつと一夏にだけは甘いんだよなぁ。

ほかの女がこんな様子を見せても、知らん泣くなら他所で泣け、で済ませるってのに。

「泣いとけ、今は角度的にも誰にも見えないようにしてある、あの日もお前さんは我慢してたしな」

「うん……　う、ん……」

そういって静かに泣き始める鈴、頭を撫でてやりながら俺はチラリと上空を確認していた。

うん、真っ黒な花火が今咲いた、撃墜完了ってか。

ビットからの連絡も、それを示してるしなぁ、まさか本当に敵機の自律迎撃と撃墜が可能だったとは。

そんでもってアリーナのシールドに残骸が乗っかっていく様を、俺は眺めつつ鈴の頭を撫でてているのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１１話　なあ鈴……　俺は後何回一夏の恐怖を味わえば良い？

蒼穹は何も答えてはくれない……　教えてくれ！鈴……　一夏に迫られたんだが、ヤっちゃったんだＺＥ！なんてことにならないようにしたい……　手を出せればどんなに楽だろうか～

そんでもってアリーナのシールドとか解除されたんだが、泣き止んだ鈴を小脇に抱えて逃げようとした瞬間、俺はとっくに逃げ遅れていたことに気が付いた。

「あら、弾さん、そんなに慌ててどちらへ行きますの？」

「少し話があるのでな、私達に付き合ってもらうぞ」

逃げようとした瞬間に俺の足元に打ち込まれるレーザー、恐る恐るレーザーが来た方を見れば、定番の怒りマークを浮かべているセシリアと箒の姿があった。

そんな2人の後ろからラスボスが姿を現す。

「クスクスクス……　ねえ、ちょっとオハナシ、聞かせてね」

「……　ハイ」

そう一夏だよ、瞳からはハイライトが消えて三日月形に吊りあがった口元に、まるで死神の鎌とも言えるような形状になった雪片弐型を展開っていうか。

形、変わってね？

なんて考える。

実は一夏に内緒で白式を弄くったんだが、それが原因なのか！？

まだ一夏には弄くったこととか、雪片の燃費効率を４０％向上させて、かなり使い勝手の良いものにしたとか言っていないはずなんだが……　使えてやがる。

ＩＳ側が使えるようにしたのかも、知れないなぁ。

なんて考えつつも現実逃避気味だった俺を現実に呼び戻したのは、小脇で身動ぎする鈴の存在だった。

「う、うわぁ……　一夏は相変わらずだし、あのセシリアって奴も箒も中々やるじゃない、一夏並みの迫力を出せるなんて」

「それシャレになってないんで！ッ！？」

鈴が深刻そうに呟いた言葉は流石に看破できないものだったから、ツッコミを入れた。

のだが、次の瞬間、俺の顔数ミリの所をレーザーが通過して俺の頬に熱さを伝えて、一夏は既に展開していた雪片のシールド無効化攻撃の、刀身部のみを投擲してくる。

「のぅわぁ！！！」

「キャア！！」

流石に雪片はまずいと思った俺は、鈴を手荒く降ろしてブリッジの姿勢で回避する。

落とされた鈴は悲鳴を上げてこちらを睨んでくるのだが、既にそんなことが出来る時間など俺たちには残されていなかった。

「弾、鈴」

「は、はいっ、ナンデショウ、イチカサン？」

「な、何？　一夏？」

「正座」

「あ、あの、ここ「正座、だよ？」ハイ……」

いつの間にか俺と一夏を包囲したのか、３人は円陣を組む様に俺と鈴を囲んでいた。

ニコニコと目が全く笑っていない一夏に、険しい表情と視線を向けてくる箒と一夏と同じ様な表情のセシリア。

正直に言おう、箒の表情の方が感情が出てきている分だけ、ありがたく感じてしまう。

他の２人は、はっきり言って恐すぎる。

そんでもって一夏たちの迫力に屈した俺と鈴は、正座するのだが、ついうっかり、俺は早速口を滑らせてしまう。

「……　なにを気にしているのかは知らんが、俺と鈴とは本番はしてないぞ？」

「あ、このバカ！！」

「「「へぇ、それはどういう意味？」」」

「ん、ヒィ！！」

恐怖心で何処か俺の言語中枢はイカれていたのか、何も問いかけられてないと言うのに勝手に自爆してしまう。
俺はどうやら踏み抜いてしまったらしい、それも核地雷級の地雷をな。

イヤに平坦な棒読み台詞になった三人の声を聞いてそっちを向くと、俺は思わず悲鳴を上げてしまう。
そこにいたのは阿修羅すら凌駕する存在のお三方であった、見た瞬間にちびりそうになったのは秘密だ。

鈴は俺の迂闊すぎる発言を何とか止めようとしたような様子なのだが、彼女は箒に詰め寄られており、援軍は期待出来なさそうだ。

そして残る俺に修羅二人がやってくる。

「さあ、弾さん、お話してもらいますわ……　鈴さんとどのような行為をしたのかを」

「そうだね、弾、興味深いなぁ……　鈴と何をしたのか」

そういった2人は凄みを利かせて俺に詰め寄ってくる。
そして、俺はこう言うのが精一杯だった。

「や、優しく攻めたんだＺＥ☆」

「「……」」

次の瞬間、俺は白と青の閃光に包まれるのだった。
視界の端にはニヤニヤとして鈴を弄くっている箒と、弄くられて今や蒸気を発して熱暴走を起こしている鈴の姿を視界に収めながら。

俺の意識はブラックアウトするのだった。

ゆっくりと、自分の意識が覚醒していく感覚がする。
自然に寝て目が覚めた感覚ではない、誰かに気絶させられて覚醒

するあの感覚だ。

「ここは……」

ゆっくりと自分の体を起こし、頭を振って状況を確認していたのだが、俺のベッドの周囲はカーテンで仕切られていた。

それの一つが勢いよく開かれて、一人の女性が姿を現した。

「気が付いた様だな、五反田」

「あれっ？　織斑先生、何でここに？」

「なに、場所を弁えずにあのような阿呆なことをしでかした愚妹と愚か者共の説教が終わったのでな」

織斑先生はそういってカーテンを全て開いた先には、正座させられて頭にたんこぶを作ってしょぼーんとしている一夏に箒とセシリアがいた。

そのたんこぶからシュウシュウと何か蒸気みたいなのが上がっているから、されたばっかりなのだろう。

冷静になって考えてみれば、織斑先生が怒るのも無理はないか。

「まあ、それはそれとしてだ、五反田」

「なんっすか？」

「今回のクラス対抗試合は全て無効試合となる」

「まあ、そりゃぁ、そうでしょうね、あんなことがあったんですから」

「……　私は回りくどく聞くのは趣味ではないからな、単刀直入に聞く、貴様知っていたのか？」

織斑先生から告げられていく内容は極当たり前のものだ。

つーか、当たり前だろう。

俺があのＩＳを迎撃した後にアリーナの遮断シールドレベルが最大のレベル４になり、その上にハッキングまで受けたのだろうから。

そしてと言うかこれが本命なのだろう、織斑先生は表情を険しくして、俺に問いかけてくるのだが、正直に言えば心当たりと言うか犯人でさえも推測は立てられるんだよなぁ、それに気が付いていない千冬さんじゃないと思うが。

まあ、俺が関与していたと言うことも考えられるだろうから、と言うところだろうな。

「知っていたと言うか、こんな仕掛けるには面白そうなことをアノ天災が見逃すとお思いで？」

「……」

「俺はそうは思いませんね、アノ天災は人の都合なんて知ったことじゃないでしょうから、間違いなく仕掛けてくると判断していたんですよ」

「だからお前のビットを上空に待機させていたと言うことか？」

「うぃっす」

俺に対して詰問のように問いを浴びせてくる織斑先生に、俺は答えていくんだが彼女の目からは疑いと言うか、そんな色が消えることはないな。

と言うかそんなに俺の普段の行動って、問題あるのかね。

よし、自重していたんだが解こうかな。

「ふん……　筋は通っているな」

「というか、俺とアノ天災が手を組むなんてありえないっすよ」

「それもそうか、お前はアイツを嫌っていたからな」

「俺の天敵っす」

最初の織斑先生の言葉に流石に我慢の限界を迎えたのか、一夏が立ち上がって何かを言おうとしたのだが、すぐに織斑先生の拳骨が一閃！たんこぶの出来ていた箇所に当たったようで、激しく悶絶していた。

い、痛そうだなぁ……　と俺は顔を引き攣らせていた。

セシリアも箒の同じ様子になっていたことから、威力の程が窺える。

「まあ良いだろう、この件に関しては口外は厳禁とする、お前も理由は分るだろ？」

「ええ、まあ」

「では、これでこの話は終了だ」

何とか納得はしてくれたらしい、織斑先生は表情をフッと緩めると続いて悶絶中の一夏を含めた三人へと向き直る。

無論その際に一夏を無理矢理正座させたのは、ちょっとやりすぎジャネ？　とか思ったんだが、何をするつもりなのやら。

なんて思いながら見ている。

「「「ゴメンなさい！！！」」」

「ん？」

ザ・土下座！と言わんばかりの見事な謝罪と土下座を三人は披露してくれた。

はっきり言って俺にこんな事をされる心当たりがないんだが、なんてだろ？

なんて考えていたら、呆れたような表情の織斑先生が溜息をつきながら補足してくれた。

「この阿呆共は、ＩＳの無断使用の上に、展開していない人間相手に攻撃したんだ、相応の罰がなければな」

「いや、まあ、俺もあのことに関しては話すつもりがなかった上に、誤解されるようなことばっかり言ってたのも責任あるかと」

「だが、自制する事もなくやってしまったのはこの二人だ、こちらの馬鹿者に至ってはからかう事に夢中だったと言うのだから救いようがない」

「う」

「あぅ……」

「ううっ……」

土下座している三人の頭をゴツゴツと何時の間に出したのか、出席簿で叩きながらそう言っている千冬さん、こんな事をされて三人は更にしょぼんとしていく。

まあ、俺もふざけ半分で一夏たちを挑発していたようなもんだしなぁ、ある意味では同罪だよなぁ。

なんて考えていた俺だが、様子を見ればキチンと反省しているし、何より女の子を土下座させているのが見た目に悪い。

「まあ、頭を上げてくれ三人とも」

「「「……」」」

「んじゃあ、俺からの罰を与える、良いですよね織斑先生？」

「「「っ！？」」」

「ああ、思い切りやってやれ」

「うぃっす」

俺の言葉を聞いて顔を上げた三人なのだが、その顔はなんていうか、悪さをして罰が与えられることになった犬のウルウルとした表情そのものだった。

まあ、その後のことをちょっと言えば、俺からのお仕置きは全力デコピンをそれぞれに一発と、俺の頬にチュウ（無論こっちが本命だ！！）をしろ！！といったんだが、織斑先生に実力行使で止められた。

残念すぎる！！

その直後に、残りの罰を与えんとな、といった織斑先生に三人は連れて行かれて、ドナドナの歌が聞こえてきそうな光景を見せつつ、医務室を後にするのだった。

彼女達と入れ替わりではいってきた鈴と一緒に飯を食ったりとか、今度の休みに2人で出かけようといった、約束をして俺は、部屋に帰って泥のように眠るのだった。

気づく人は気づくと思いますが、サブタイの表示が違うのは仕様です（苦笑。
入らなかったから、分けちゃった形になります。

ただ、最近になってこのＳＳの設定を整理していたら見つけてしまった。
初期の設定にだけいたオリキャラ？　というか憑依転生者を……
全部の魔法とＩＳの武装が尻からでる。
なんていうキャラを、しかも女の子……　当時の私の頭に何かが湧いていたとしか思えない設定です。

無論のこと、没にしましたが……　最近はどうして没にしてしまったんだろう……　なんて考えている自分がいる。

第１２話　え？　引越しだって？　誰が？　ふぅん、一夏がねぇ、これで夜寝る

ここはＩＳ学園の地下五十メートルに存在する区画、ここに立ち入るにはレベル４と言う、ほぼ最大の権限を有してなければ立ち入れない秘密区画に、千冬と真耶の姿があった。

弾によって戦闘をさせてもらえることもなく破壊された無人ＩＳは、残骸をこの学園の暗部と呼ばれる者達によってすぐに回収されて、ここに納められて解析作業が実施されていた。

無人ＩＳは弾によってアリーナの外へと追い出されたのだが、学園側の映像記録まで追い出せてはいなかった。

「……」

解析作業が始まって既に二時間近くが立とうとしていたのだが、千冬はその場を動くこともなく、弾のビットによってなす術もなく撃墜されてしまう無人ＩＳの映像を眺めていた。

室内を照らすのはディスプレイの明かりのみであり、室内は非常に薄暗かったのだが、ほとんど唯一といって良い明かりに映し出される千冬の表情には、表情と呼べるものがなく、冷たい色を浮かべてディスプレイを眺めていた。

「織斑先生、あのＩＳの解析結果が出たと報告がありました」

真耶からの言葉に千冬は彼女の方に視線を向けて続きを促すように、彼女の方を見ていた。

「あれは無人ＩＳだそうです」

「やはりな……　この戦闘映像を見る限りでも、五反田のビットに迷いと言うものがない、あれは最初から無人だったと考えた方が自然か」

映像の中の弾のビットは容赦のない苛烈な攻撃をＩＳに向けて行っていた。

複数のビットと連携をとっての大出力ビームの掃射、有人であれば間違いなく人体急所と呼べる位置への一斉攻撃、これらの映像を見ていた千冬の頭に浮かんでいた仮説と、真耶が言ってきた仮設が一致した瞬間だった。

だが、ＩＳ学園にとっては青天の霹靂ともいえるような事態でもある、未だに完成を見ないＩＳ、それもＩＳそのものの遠隔操作と独立稼動、これらのどちらかか両方かを兼ね揃えた機体がつい数時間前まではＩＳ学園上空にいたのだから。

どこの国でさえも開発できていない技術が使われていることが決まったこのＩＳに関しては、すぐさまこの件に関わって知っている

者達全員に緘口令が敷かれたほどである。

「どのような方法で動かしていたのかは、不明です、五反田くんのビットからの攻撃によって機能中枢が焼き切られたらしく、解析は不可能です、同様に修復も不可能と思います」

「コアはどうだった？」

「それが……　登録がなされていないコアでした」

「そうか」

小声でやはりな、とそれから千冬は呟いていたのだが、真耶には聞こえていたらしい。

疑問を浮かべた表情で千冬の方を振り向いていた。

「織斑先生、心当たりが？」

「いや、ないさ、今はまだ――――――――な」

そういった後、彼女は再び弾のビットに蹂躙されている無人ＩＳの映像を眺めていた。

彼女の表情は険しく、いつもの教師としてのものではなく、一人の屈強な戦士のそれである。

それは、まさに過去に最強と呼ばれた千冬そのものと言える表情だった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１２話　え？　引越しだって？　誰が？　ふぅん、一夏がねぇ、これで夜寝る前に自家発電ができる！！……　え、い、一夏に鈴！？　へ、部屋に戻ったは～

そんでもって次の日、予定されていた試合は何事もなく終了したのだが、やはり話に聞いていた通りに一回戦の一年の試合のみ行われて、二年と三年の試合は全て中止となってしまった。

まあ、俺は織斑先生に呼び出されて昨日の事での取調べに加えて、あのＩＳの事を口外しないといった旨の誓約書も書かされたから、試合は見れなかったがな。

ていうか、休みになったみたいなもんだから、寮で一日中ゴロ寝しようと、千冬さんの呼び出しを無視して張り切ってベッドに入ったんだが、千冬さんの襲撃を受けて気絶して、気が付いたら取調室にいた。

何を言っているのかが分らないと思うが、俺も何をされたのかが分らなかった。天然チートの真髄って奴を味わった気分だった。

「マジ千冬さん天然チートだわ……　俺が全力で抵抗して数秒しかもたなかったって……　ていうかあの人、数年前と比べて明らかに強くなってないか？」

今はとっくに日も暮れて、夜と言える時間帯。
ほとんど丸一日を取調べとかに費やされた俺は、部屋に向かって歩いていた。

鈴の奴は昨日の内に済ませておいて、俺が今日になるなんてな。
なんて考えていたら、何時の間にやら部屋に到着したので、扉を開けて中に入った俺の鼻に良い匂いがダイレクトに伝わってくる。

「お帰り、弾」

「おう、一夏……　ところで、それは？」

「たまには良いでしょ？　それに初日に弾にお弁当を作ってあげたっきりで、何もしてなかったからね、弾の勝利のお祝いみたいなのも兼ねてって事で」

「へぇ、でも大変だったんじゃないか？」

「ううん、そんなことはないよ」

部屋に入って見えたのはテーブルの上に置かれた食事の数々だった。
ご飯に筍と里芋の煮物に、ほうれん草の白和え、恐らくは具にア

サリの入っている味噌汁、これらがホカホカと湯気を立ててテーブルの上にあったのだ。

朝からほとんどというか、昼食にパンを一個食べた位の俺の胃が激しく自己主張と共に、一夏が用意してくれた食事を食べろと催促してくる。

「それに姉さんから、終わる大体の時間を聞いていたから用意してたの」

「なるほど、だから俺が帰ってくる時間に合わせて待ってた、ってところか」

「うん」

手を洗ったりとかして一夏の対面になるように設置された椅子に座った俺は、一夏からの言葉に答えると、微笑を浮かべて彼女は頷いていた。

それからは一夏と談笑しながら、食事をしていたのだった。

食堂で皆と一緒に食うのも良いんだが、こういうのも良いよなぁ。

なんて考えながら一夏と和やかに食事をしていた時、他の連中はというと。

「遅いわね……」

「遅いですわ……」

「確かに弾が遅いのは気になるんだが、先に食べていた方が良いのではないか？」

「そうしましょ」

「そう、ですわね」

とかいって食事していたのは言うまでもないのだが、後でこれがバレたら、トンでもない怒りの言葉を俺が浴びたんだが、理不尽だ。と言いたい状況になったのも言うまでもない。

それから食事が終わり、俺が食器を洗って食堂に返却（これも一夏が自分で俺の分もやる、とか言ってたんだが、作って貰ったのにそんなことをしてもらうのは、悪いと言う理論で押し込んで座ってもらった）した後、帰ってきた俺は一夏が淹れてくれたお茶を飲んで2人でまったりとしていた。

2人して部屋に備え付けのディスプレイでバラエティ関連の番組を見ていた時に、来客が現れる。

「あのー、五反田くんと織斑さんはいますかー？」

「はい、居ますけど？」

「じゃあ、入りますけどいいですか？」

「どぞ」

このちょっと抜けたような、それでいてとぼけたような声は山田先生か。

どうしたんだろうか、こんな時間に。

それは一夏も同じ様に感じていたらしく、首をかしげていたのだが、俺の了承の言葉を聞いて山田先生が入ってくる。

うん、相変わらず素晴らしいおっぱいです。

なんて考えていたら、俺の横顔に物理的圧力さえ持ち出した一夏の視線が突き刺さったので、自重する。

「でも、こんな時間に何か用ですか？　山田先生」

「はい、お引越しです」

「それは、是非とも……　大歓迎です、山田先生」

「ふ、ふぇ!?　ち、ちちちち、違いますよ!!?」

主語が抜けまくった山田先生の言葉に、俺は一瞬だけだが、本気でそう考えてしまっていた。

だが、一瞬だけでもそう考えてしまったら俺の脳みそは止まらない、瞬時にピンク色な妄想で満載となる俺の頭の中、一夏は俺がナニを考えているのかが分ったらしい。

「だん、ちょっと、黙っててね……　それと山田先生?」

「は、はい！何でしょう!!」

ハイライトが消えた瞳に変わり、俺の肩に手を置いてくるのだが、肩がミシミシと音を立てているのは、気のせいと言うことにしておこう。うん。

そして、一夏は一見した限りでは微笑んでいるのだが、目が全く笑ってない笑顔で山田先生の方を向いていた。

そんな一夏の視線をもろに浴びた山田先生は完全にビビッており、涙目で震えながら直立不動という結構可哀想な雰囲気となっていた。

「主語を入れて、喋ってくださいね」

「わ、分りました！」

小動物が捕食される（性的じゃなくて、命の危機的な感じだな）間際といった様子の山田先生は、平坦な声で言ってきた一夏の言葉に頷いた後、一度深呼吸をして口を開くのだった。

「えっと、部屋割りの調整が終わりましたので、織斑さんが他の部屋にお引越しになります、なので出来ればすぐに準備を始めてもらいたいんですけど……」

「え？」

山田先生の言葉を聞いた一夏は呆けた表情となっていた、それはそうだろう。

今すぐに引越しを行えと言うのだから、流石の一夏も何かを言おうとしたのだが、入り口から更なる人物の声が聞こえてくる。

「織斑、私がお前につけた条件は、一月以内というものだったはずだ、忘れたわけではあるまい？」

「織斑先生……　わかりました、ではお2人とも、手伝ってもらえますか」

「はい！分りました！」

「誠心誠意喜んで（間違っていろんな物に、例えば下着に触っても手伝いの範疇で合法だよね！）お手伝いいたします」

「貴様は外に出ていろ！！」

「だ、弾！？　弾はダメ、部屋の外に居て！」

「五反田くん！？　織斑さんは女の子なんですからね！見られちゃ困るものもあるんですよ！？」

ふぅ～む、なにかの約束事みたいなのを織斑先生としていたらしいな。

隣で山田先生も首をかしげて疑問に感じている様子なので、山田先生も知らないんだろう。

まあ、気を取り直して一夏が引越しの準備の手伝いを二人に依頼したんだが、俺も参加しようと極自然に動こうとしたら、織斑先生のアイアンクローを喰らって廊下にたたき出されて、一夏と山田先生からはメッ！という感じで怒られるのだった。

それから一時間も経たずに引越しの準備は完了し、慌しく一夏は新しい部屋に先生方の案内で連れて行かれるのであった。

「ふぅ〜む、ここは、こんなに広かったんだなぁ」

一夏が居なくなって、今居るこの部屋の広さが倍になった錯覚も感じる。

やっぱり人が居るってだけで、こんなに違うもんなんだなぁ。

とか考えていたら、部屋をノックする音が聞こえた。

「どちらさまっすか？」

「夜分にすまないな、弾」

「箒じゃんか、どうかしたのか？」

扉を開けた先にいたのは、箒だった。

予想外の珍客に俺は一瞬止まるのだが、箒の様子がおかしいこともちょっと気になっていた。

頬を紅く染めて両手は腹の辺りで組まれているのだが、それもどこかモジモジとして様子であり、口元も何か恥ずかしいことを言おうとしているように、尚且つ、言いにくそうにモゴモゴさせている。

立ち話もなんだからということで、部屋に誘ったのだが断られてから、少しした後、意を決したように箒が顔を勢いよく上げた。

「ら、来月の学年別個人トーナメントだが……」

「おう」

「わ、私が優勝したら、一日買い物に付き合ってもらう！！」

「良いぞ」

来月末に行われる個人トーナメント、これは昨日までやっていたものとは違い生徒の完全自主参加型のトーナメントなんだが、それに箒は参加するらしい。

まあ、それはこんな宣言をしてくることからも間違いはないんだがな。

俺はそれに了解の返事を返すと、箒は露骨に安心したような表情をしている。

「そ、そうか、そうかそうか、この約束を忘れるなよ！」

「分った」

「で、では！今日は失礼する！」

俺の返事を聞いた箒は一方的にそうまくし立てると、顔をより真っ赤にさせて立ち去ってゆくのだった。

まあこんな約束せんでも、誘ってくれたら買い物にくらい付き合うんだがなぁ……　とか考えていたんだが、野暮なんかねぇ、こんな事を考えるのは。

なんてニヤニヤしつつ箒を見送るのだった。

第１２話　え？　引越しだって？　誰が？　ふぅん、一夏がねぇ、これで夜寝る

因みに自分の呼び出しを無視すると予想していたちーちゃんは、弾の部屋の扉に耳を押し付けて中の様子を伺っていたのは、デフォです。

第１３話　突然だが俺はシスコンです、だけどそれは兄妹としての気持ちであって

「これより、第４１２回お宝ビデオ保存会を開廷する」

そういって所謂ゲンドウスタイルで、円卓（卓袱台）に格好つけているのは、俺こと、弾である。

ほかの参加者はといえば、犬と猫、両方とも俺のペットであり、実に優秀な部下でもある者達で、犬が佐助、猫が小太郎という。

因みに名前は蘭が決めた、俺は決めるのも面倒だったから、犬に猫と呼んでいたら蘭に怒られて、いつの間にか名前が決まっていた。

彼らも俺と同じくゲンドウスタイルで着席しており、一種の緊張感を醸し出していた。

「では、現時点までの報告を聞こうか」

「ニャ」

俺の言葉に答えるように一つのブツを取り出してきたのは、小太郎だった。

彼が差し出してきたのは、一つのブルーレイであり、これしか確

保できなかったことを意味していた。

「やはり自宅に残してきたものは全滅、したということか？」

「ニャニャ」

「そうか、ご苦労だった」

「ニャアァ～」

このブルーレイにはいっているのはナースモノのかなりの激レアといえる物だったので、これだけでも蘭の手から守れたのは僥倖といえる。

一番のお気に入りを守ってくれたこいつに俺は、報酬のカツオ節一本をあげると嬉しそうな声を上げていることから、今回はこのチョイスで間違いはなかったのだろう。

そんでもって俺は佐助の方へと振り向き、報告を受ける体勢を取る。

「お前さんには、隠れ家からの輸送を指示してたと思うが……どうだった？」

「ワゥ」

「お、お前という奴は！良くやってくれた！！」

「ワフ」

こいつには俺が隠し持っている隠れ家、というか祖父さん名義のアパートに、保管しているお宝ビデオの輸送指示を出していたんだが、この学園には天然チートなあのお方が居るから期待はできんだろうな。

と考えていたら、数本のブルーレイを出してきた上に、お宝本まで出してきたので、予想外な戦果を見せてくれた佐助を思わず俺は、思いっきり撫でていた。

まあ、多少は癒そうにというか、そんな様子を見せていたんだが、こいつにも報酬のほねっこにプラスして犬缶を数個付ける。

同様にすんげぇ喜んでいる様子を見せてくれることから、これも間違いじゃなかったんだろう。

まあ、それはそれとして、目標は全て果たしたしな。

「予想以上の戦果だったよ、お前達……　それでは新任務を与える」

「ゴクリッ」

「ゴックン」

ためを持ち、もったいぶって言っている俺に二匹は、唾液を飲み込む音を部屋に響かせる。
表情からも早く言えといわんばかりの様子を見せるこいつらを見て、俺は厳かな雰囲気を心がけながら、一つの言葉を放つ。

「先日、俺を尾行していた女子生徒を探れ」

「ニャニャニャン」

「ワゥワゥ」

「分っている、報酬は探ってきた情報によりグレードが変わる、だが、今回は最低ラインでも今回渡した報酬となるぞ、情報の質がよければ、それ以上になる」

「「……」」

俺が言ってきた言葉に、疑問というか、不満みたいなことを言っているらしい二匹だが、俺の言葉に危険度というものを考えているのだろう。
少しの間黙っていたのだが、決意を決めたのか、堅い決意を秘めた表情で顔を上げると、頷いていた。

「どうやら腹は決まったようだな、では、行け！お前達！！」

「にゃあぁーん！！」

「わぅぅぅぅん！！」

俺の合図と共に勢いよく窓から飛び出していく二匹を見ていたのだが、本当にどうしてあんな感じに育ってしまったんだろうかね。

俺が拾ってきた小さい頃は、本当に普通の犬と猫だったんだが…

…　いつの間にかあんなことが出来るようになってたんだよなぁ、今は結構便利だし、なんて考えているが、本当に何でだろう？

なんて考えているのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１３話　突然だが俺はシスコンです、だけどそれは兄妹としての気持ちであって、恋人とかに向けるものじゃないんだが、妹がマジだった場合は、本当に如何すれば良いんだろう？～

本日はＩＳ学園だけじゃなく他の大概な皆様も休みな日曜日、俺はなにをしていたかと言えば、先日約束した鈴と二人で買い物に出かけてそこそこに楽しんでいたりする。

だが、やはり楽しい時間というものは早々と過ぎ行くもののようで、結構朝早く出掛けたと言うのに既に時間は昼を結構過ぎた時間となっていた。

「ふぅ、お腹空いたね、お昼どうする？」

「ふむ、そんじゃあ、俺の家に行くか？　この時間なら空いてるだろうし」

「あ、いいわね、それ、久しぶりに弾のお祖父さんの業火野菜炒めを食べてみたいしね」

「んじゃ、決まりだな」

まあ、俺の家にしたというのは他でもない、金が掛からんからだ！！

原作と同様に俺の家は、食堂を経営していてな、俺が帰ってきた時に友達を連れていたりすると、ただで食えるのさ。

ま、その後に食器荒いとか手伝わなきゃらならんがな、一夏と鈴も良く家に食事しに来て、特に一夏は祖父さんと親父に料理を習ったりもしていたからな、馴染みは深い上に、今日は事前に鈴と一緒に行くかも、とか連絡していたから準備は出来てるだろうし。

「それにしても、丸一年ぶりよね、私があんたの家の食堂に行くのって」

「そうだな、この前連絡した時に伝えたんだが、祖父さんや親父達も会いたがってたぞ」

「そっか、お義父さんやお義母さん達にも会いたいなぁ」

「……　まあな、蘭はなんか嫌そうな声出してたけど、なんかやったのか？　お前」

「してないわよ、ただ、そうね、あの娘とはライバルってところかしら？」

「なんじゃそりゃ？」

鈴の口から出てくる親父達の呼称がどこかおかしいように感じたのだが、本能は気にしたらいけない！という旨の危険信号を発してくるので、何も聞かずに話を進めていく。

以前俺が今日帰ることと、鈴が帰ってきたことを伝えたときに聞こえた蘭の、凄く嫌そうな声のことも突っ込んだんだが、鈴からは何かをはぐらかすようでいて、尚且つ獲物を狙う猫のような視線も同時に感じた為に、この話題は危険と判断して打ち切るための話題を俺の灰色の脳みそは探っていた。

それから、ニ、三の会話の後に俺の実家である【五反田食堂】に付いた時、俺たちを一つの影が覆うのだった。

「お兄～！！」

「ら、蘭！？」

そう、俺の可愛い妹である蘭が、二階部分から降ってきたのだから。

今まで結構なダイブを味合わされた俺だが、これは初めてだった。

やはり二ヶ月近くも帰らなかったのが、効いたのか？　と思いながらも、俺は降って来た蘭を危なげなく受け止めるのだった。

俺が蘭を受け止めた瞬間、鈴の目はまるで仇を見るような色となり、蘭の方は不敵な笑みを浮かべていた気がするんだが、き、きき、気のせい、だよな？

「あら、蘭じゃない、久しぶりね」

「ええ、お久しぶりですね……　鈴さん」

「お義姉ちゃんって呼んでも良いんだけど？」

「面白い冗談ですねぇ、それ」

「あはははははは……」

「ふふふふふふ……」

俺の腕の中にいて鈴に視線を向けながら会話していたんだが、気のせいと思いたいが周囲の温度が数度ほど下がって、しかも2人の間にはバチバチと火花が散っているのが見える。

正直に言おう、メッチャ恐い。

それにさっきから思うんだが、鈴の奴って姉、とかその辺の発音が違う気がするんだよな。

ツッコミを入れたら引き返せない何かに足を入れてしまうような気がして、言えないんだが、そこんとこどうなんだろうかね。

なんて考えていた俺に、鈴は鋭い視線を投げかけてくる。

「んで、アンタは何時まで蘭を抱きしめているつもりなのよ？」

「ん、おお」

非常にドスの効いた声で俺にそういってくる鈴、彼女の迫力に負けた訳ではない、負けたわけじゃないよ！

ダイブして受け止めた時に抱きしめる形になっていた蘭を放そうとしたのだが、蘭はそんな俺の動きを無視するようにするりと動いて、俺の右腕に自分の腕を組んでいた。

えーと、こいつって何時の間にこんな動きが出来るようになったんだろうか？　この前までは普通の女の子の動きしかできなかったはずなんだがな……　それと何故だろうか？　あの天然チートなお方の不敵な笑みが脳裏をちらつくのは。

まさか、こいつ……　千冬さんに何かを仕込まれたのか？　恐ろしい予想というか未来予想図が俺の脳内に展開されて、体が勝手にブルリと震えるのだが、それを意識の奥へとやる。

「ちょっと、蘭？」

「いいじゃないですか？　鈴さん、私達は兄妹ですし、仲が良いのは当たり前ですよ」

「へえ、言うじゃない、じゃあさ私は幼馴染なんだしこういうことしても文句はないってわけね？」

といって鈴の奴はなんと、俺の左腕に腕を回してきたのだ。

いつかの一夏とセシリアと同じ様に両手に女の子が腕を組む形となった。

ただ、あの時と違うのは鈴と蘭の二人が互いを牽制しあうように、バチバチと火花を散らせていることで、２人にモロに挟まれている俺にとっては、少々地獄と言える状況となっていた。

「ま、まあまあ、落ち着けよ２人とも、とりあえず店の中に入らないか？」

「……　そうね」

「うん、わかった」

俺の言葉に２人はとりあえずは、矛先を収めたようで大人しくなる。

それを見計って２人のホールドから、するりと抜け出して先に店の中へと入っていく。

「んじゃ、先行ってるな」

「あ、ちょっと待ちなさいよ弾！！」

「待ってよ！お兄！！」

俺が極自然な動きで抜け出したことに、2人は少しの間呆然としていたのだが、すぐに気を取り直して追いかけて俺に続いて入ってきた。

やっぱお昼時を避けて正解だったな。
ほぼ全ての席が空いていて見える客も一人か2人という状況であるので、適当な席に座ろうとしたときに、俺たちに近付いてくる影があった。

「あら、弾じゃない、今来たのね」

「おっす、お袋」

五反田食堂の文字が入ったエプロンをして俺たちに話しかけてきたのは、俺の母である【五反田　蓮】だ。

蘭と一緒に五反田食堂の二枚看板娘とか言っているのだが、正直に言って、歳、考えろよ。

なんて考えてしまうのだが、んな事を考えたらどこから取り出すのか分らない包丁が出てくるから、迂闊には考えられない恐ろしい母親である。

まあ、それは良いとしても母親を見たと同時に、鈴の顔は余所行きの丁寧な対応となる。

「お久しぶりです、お義母さん」

「あらあら、鈴ちゃんじゃない！久しぶりねぇ～！元気にしてた？」

「はい、お義母さんもお変わりないようで嬉しいです」

それから鈴とお袋とでのトークが行われるのだが、鈴のお袋を呼ぶ発音が相変わらずおかしいのは気の所為かね。

そのおかしいはずの発音にお袋はツッコミを入れないばかりか、逆に嬉しそうに笑っているのも気のせいだろう。

それとは逆に蘭の機嫌が急降下していくのも、気にしないほうが良いだろう。

「おっす、祖父さん、久しぶり」

「弾か」

まあ、そんな三人を無視して俺は、こっちの方に顔を出そうとしていた祖父である【五反田　厳】の方に近づいて片手を挙げて挨拶していた。

相変わらずの鉄面皮に齢八十を越えたとは思えないほどの筋骨隆々とした筋肉に包まれた体だこと、過去に喰らった祖父さんの拳骨はすんげえ痛かったのをはっきりと覚えている。

だが、久しぶりに顔を出した孫が嬉しいのだろう、ちょっと本当にちょっとだけ顔が綻んでいるからな、これだけは顔を出して良かったと思う。

前世じゃこんな風に顔を出せる家族もいなかったしな。

久しぶりに会ったからか、懐かしさにちょっとだけ回想しようとしたが、祖父さんの後ろから予想外な人物が姿を現す。

「やっほ、弾」

「って、一夏!?　お前どうしてここに!?」

「えへへへへ、来ちゃってたんだ、久しぶりに厳さん達に会いたか

ったし」

これは本当に驚いた。

祖父さんの後ろから一夏が姿を現したのだから、悪戯っぽい笑みを浮かべてながら、汗をちょっとかいてエプロンをしていることから、店を手伝ってくれてたんだろうか、一夏の奴は中学の頃から俺の食堂を良く手伝いつつ、自分の料理の腕も上げようと努力していたからな。

そこを考えたら不思議じゃないが、どうして今日はタイミングよく来ていたのだろうか……　よく見たら目の奥がまったく笑ってない。

俺を問い詰めたいが爺さんたちがいるから、自重していると言う様子がちょこっとだけ見える。

「それにしても、弾は鈴と一緒にどこに行ってたの？」

「鈴のやつは丸一年ぶりの日本だろ？　だから、この町の変わった部分とかを案内してたんだ」

「そうなんだ……」

その内に一夏の方から問い掛けがあったから、俺は応えていたんだが、一夏は顎に手を当てて何かを考え込んでいるのは気のせいだ

ろうか。
小声で『やられた』とか『何時の間にそんな約束を』とか言っているのは、気にしないことにしておこう。
まあ、そんな会話をしていたら、鈴と蘭も気が付くわけで。

「い、一夏!?　何であんたがここにいるのよ!?」

「一夏さん!?　どうして!侵入した気配はなかったのに!!」

「クスクスッ、二人とも甘いよ」

鈴は兎も角として蘭も気が付いてなかったのかよ、というか、祖父さんが黙ってたんだろうな。
何気に祖父さんは一夏と鈴に蘭の三人には甘い所があるからなぁ。

「とりあえず飯にしたいんだけど、祖父さん、何か余ってる物ある？」

「フン、久しぶりに帰ってきたバカ孫の食卓だ、きちんとしたものを作ってやる、鈴の嬢ちゃんと一緒に待ってろ」

そういって祖父さんは厨房へと戻っていく。
そんでもって出てくる料理を待つために俺は、手近な所にあるテーブルに着席する。

俺についてくるように鈴も着席するのだが、一夏といえば、厨房に入って言ったので、どうやら祖父さんに厨房に立ち入ることを許されている腕前になっているようだ。
蘭はといえば、水を取りに行ったから、この辺は流石に弁えている言うことかね。

それから、対面に鈴が座り、料理が届いた俺の隣に蘭が座ったのだが、ここからが大変だった。
なぜなら。

「はい、お兄、アーン」

「いや、自分で食えるから別に「アーン」だから……」

蘭が俺の箸をいきなり掴んだかと思うと、俺に向かってアーンをしてきたのだ。
これを見たと同時に鈴と厨房にいる、一夏からの視線がヤバイことになったのだが、そっちに視線を向けたくても向けてしまえば。

「お兄、アーン……」

蘭が涙目になって俺を見てくるのだ、こんな状況を見た祖父さんは俺に『蘭を悲しませるんじゃねえぞ』といわんばかりの視線を向けてくる。

その上に鈴と一夏は『そのまま食べたら、分ってるんでしょうね（よね）』なんて言葉が秘められたような、そんな視線を向けてきていた。

「……　アーン」

「美味しい？」

「うん、美味い」

涙目で今にも零れ落ちそうな蘭の目に屈した俺だった。

これを見た瞬間から、鈴と一夏の視線は完全に人を殺せる視線となり、お袋は面白そうにこちらを眺めているのがわかるし、祖父さんは満足げに頷いているのが分る状況だった。

「「弾！！」」

「は、はいぃ！！」

それから俺は、自分の所にある飯を鈴に蘭と一夏の三人に、食べさせられるのだった。

はっきり言って、地獄でした。

特に三人が一斉にこっちに箸を向けてきた時など、冷や汗が止まらなくなって背中が完全に濡れてしまったのは、言うまでもない。

第１３話　突然だが俺はシスコンです、だけどそれは兄妹としての気持ちであって

……　例の二人が出てくるところまで進めなかった。

次回こそは必ず！

第１４話　え、優勝した娘が俺と付き合うって！？　勿論大歓迎っす……　え、

ちょっと、後半部が受け入れてもらえるかが微妙だ……
そして、後半部の弾のうさぎ関連の台詞はネタとして入れてますので、仕様です。

書かずに誤字と判断される紛らわしかったことを謝罪します。

第１４話　え、優勝した娘が俺と付き合うって！？　勿論大歓迎っす……　え、

そんでもって、数日後の朝に俺は一夏と鈴に箒と共に食堂へと向かっているのだった。
因みにセシリアはといえば今日は用事があるとかで、ここには居なかったりする。

だが、何でだろう、セシリアがいないことにちょっとだけ寒気がするのは。

「ねえ、聞いた？」

「聞いたよ、五反田君のことだよね！」

「それも私達にとっては最上級に良い話だよね！」

やっぱり女子しかいない所為か、この食堂内の騒がしさは相変わらず姦しいものだった。
だが、いつもの日常と化している姦しさの中でも、異様な光景というのはあるわけで、二十人近くもの女子がスクラムをがっちりと組んで固まっている。
何かを噂話でもし合っているのだろうか、という状況が奥の方のテーブルにて行われていた。

「なんだ、ありゃ？」

「うーん、多分占いか何かをしていると思うけど……」

「ま、別に気にする必要なんてないんじゃない？」

俺が疑問に思った集団を一夏はどこか訝しんでいる様子で応えて、鈴はといえば全く気にしていない様子で応えていたから、気にしないことに使用とも思う。

箒も鈴の言葉に頷いている様子を見せているしな、だけど、どうしてだろうか、俺の本能は今すぐにあの集団の中に入って、彼女達が噂している事を否定しろ！なんて叫んでいるのは。

だが、ちょっとだけ気に掛かるのはどうして箒の奴は冷や汗を少しかいているんだろうか？　なんか、自分の言動でとんでもない事になってしまった。

見たいな雰囲気を感じるんだが、その上に鈴と一夏も味噌汁を綴りながら箒を怪しそうに見ているから、かなり箒の雲行きは宜しくないものになっている。

まあ、気にしないようにしながら、俺は朝食を素早く済ませて教室へと急ぐのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第１４話　え、優勝した娘が俺と付き合うって！？　勿論大歓迎っす……　え、ちょ、あの、ミナサンナニカヨウ～

そんでもって教室についても、やはり女子というのものはワイワイガヤガヤとやっているようで、今度は噂話ではなく、ＩＳスーツのカタログを見ている様子だ。

「やっぱり、ハヅキ社製のが良いよね～」

「でも、あそこのってデザインだけって気がしない？」

「そのデザインが良いんじゃない！」

「私は性能とかを見たら、ミューレイのが良いなぁ、特にスムーズモデル」

「でもさ、確かにモノは良いけどさ、あれって結構高いよね？」

等等、俺は世界でただ一人の男子だからと言うことでか、ＩＳスーツは何処かの会社が作ったスーツを別のラボが作ったものをくれたからな、別に気にもならんかったが、他の女子達にとってはそうでもないらしい。

教室に俺が入ってきたことを確認したのか、それまで話し合っていた女子達が、カタログ片手にこっちへとやって来た。

「ねえねえ！五反田君のスーツってどこのを使ってるの？　見たことのない型だよね」

「ああ、あれね確か……」

「弾のは特注品みたいだね、元になったのはイングリド社のストレートアームモデルだって聞いたよ」

「……　というか、何故、一夏がそのことを知っているんだ？」

俺は記憶の底からＩＳスーツが作られた経緯とかを思い出そうとしたんだが、横から一夏がスラスラと答えていく。

確かに覚えてなかったんだから、ちょうど良かったんだが、俺は話した覚えはないのにどうして一夏は知っていたんだろう？　まあ、千冬さんに聞いたかもしれないな。

なんて考えながら背中にちょっと浮かぶ冷や汗と、苦笑いに近い笑みを浮かべて一夏に問いかける箒、だが、周りの女子達は別に気にならなかったらしく、感心したように聞いていた。

「それにしても、ＩＳはスーツなしで動かしたら反応が鈍るとか聞いたんだが、何でだろ？」

「ＩＳスーツは肌表面の微妙な電磁差を検知することによって、操縦者の動きをダイレクトに伝達し、ＩＳは必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れてますので、一般的な小口径拳銃の弾程度であれば、受け止めることが出来ますが、衝撃自体は消えませんので、あしからず」

スラスラと説明しながら現れたのは、山田先生であり。

この説明を聞いていた俺たちから、オオーという歓声や関心にも

似た声が上がっていく。

「山ちゃん詳しい！」

「一応先生ですから。って、や、山ちゃん？」

「山ピー見直したよ！」

「今日が皆さんのＩＳスーツ申し込み開始日ですからね、ちゃんと予習してきてあるんですよ、えへん……って、や、山ピー？」

皆から弄ばれる山田先生、この人って弄くると可愛い反応してくれるから、弄りがいがあるんだよね。

それに微妙に胸を協調する体制になっているせいか、たわわに実った果実が揺れていて非常に良い目の保養ともなっている。

心の中で鼻の下を伸ばしていたら、あの寒気を感じる。

まずは一夏を見たら、うん、見なけりゃ良かった。

威圧感を感じる上に全く笑っていない瞳の奥、周囲にはブリザードかなんか吹いていそうなオーラを放っていたのだから。

続いて箒の方を見れば、こちらは表面上はにこやかに笑い雰囲気自体も変わらないもののように見えるのだが、両手に作られた拳がギリギリと音を立てているから、こっちも危険ラインということか。

セシリアは今教室に着たばかりなのか、状況が飲み込めてないことが救いかね。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまで山田先生を弄くって、きゃあきゃあ言っていた女子達もこのお方の登場と同時に、軍隊式整列とともに挨拶の大合唱を行う。

まあ、本当にやってるわけじゃあないんだがな。

そんな我らが担任であり最凶教師千冬さんの登場である。

迅速に自分の席について織斑先生の言葉を待つ俺たち、よっく見たらスーツが夏物に変わっている。

どうやら昨日一夏の奴も俺と同じく自宅に一回帰ったようなので、その時に一夏が出したんだろう。

織斑家の家事を全て取り仕切っているのは一夏だからな、結婚できる男は幸せ者だろうな、料理は美味いし家事も出来るし、性格にちょっと難ありだがそれがたまらんと言う人間であればきっとうまくいくだろう。

……　どうしてだろう、将来一夏に捕まる己のビジョンが鮮明に思い浮かぶのは……　気にしないことにしておこう。

まあ、それはさておいて俺たちの制服も今月下旬の学年別トーナメント過ぎには、夏服に変わるとの事なのだが、楽しみだねぇ……

女子達のブラチラとか薄着になってちょっと無防備になって開放的になった女の子達とかね。グフッ。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練ではあるが、ＩＳを使用しておこう事から各自気を引き締めて行え、各人のＩＳスーツが届くまでは学校指定のものを使うように、忘れたものは学校指定の水着で行ってもらう、それさえも忘れたものは、まあ下着で構わんだろう」

いやいや、普通は構うだろなんて考えながらも、俺は全然ＯＫっす！と言いたい己の口を塞ぐのに必死だった。

その瞬間、俺の顔面に出席簿がめり込んでしまい、逆に手助けされた結果になる。

「いや、構うか、ここにはケダモノが居ることだしな、忘れたものは正直に申告しろ、良いな」

『は、はい！』

織斑先生の攻撃で俺が何を考えていることが分ったのか、一夏とセシリアに箒と思われる物理的圧力を持った視線が俺の背中にビシバシと突き刺さる。

それと同時に、背筋に感じるぶっとい氷柱を差しこまれた感覚、出席簿を顔面から抜きながら、俺は体を震わすのだった。

まあ、ここでちょっと説明だが、実は専用機持ちはＩＳスーツを着なくてもＩＳを展開できたりするし、何よりＩＳの展開時に自動でＩＳスーツも展開できるというメリットがあったりする。

つまりはどこぞの魔法少女みたいな、ピカっと光って変身シーン！が可能だったりする。

……　どこぞの魔法少女で思い出したんだが、小さい頃に本当に魔法とかが使えるか疑問だった俺は、ディバ〇〇〇スターをほぼフルパワーで撃って近くの山の上半分を消滅させたことがある。

人がいないことを確認して撃ったんだけど、いやあ失敗☆失敗☆！なんて言ってしまいそうになる出来事だった、これが俺の所為だとはバレていない。

というか、その直後にＩＳが発表されたから、あの天災が武装実験をしていた痕跡！見たいな扱いになっているから俺にとっては無問題だし。

あの当時は天災と関わり合いになるなんて考えちゃいなかったかし、それからはキチンと自重して、なるべくこの手の力は使わない事を決めたし実行もして来たから、どうにかなると考えたんだが。

関わり合いになっちまったし、これがあの天災にバレたらどうなるんだろうか……　あの当時は結構マスコミから好き勝手に言われてたしなぁ、悪魔の女とか、大量破壊兵器を生み出した魔王とか……　でもあの声聞く限りじゃ、魔法って呼称は逆に似合うと思ったのは俺だけだろうか？

強制的に責任とらされて人生の墓場に連れて行かれるかもしれない……　文字だけの意味じゃなく、本当の意味でそうなりそうだか

ら滅茶苦茶恐い。
やっぱ本格的にこの世界からの逃走を考えた方が良いだろうか……

なんて考えながら、ＨＲを開始する山田先生の姿を眺めているのだった。

全ての連絡事項を終えた織斑先生から、山田先生にバトンタッチされてから始まるＨＲの時間。
完全に気を抜いていたのか、メガネ拭きでメガネをのんびりと拭いていた山田先生は、慌ててメガネを掛けて教卓へと上がっていく。

……　どうして、この人は仕草が一々小動物っぽいんだろうか？
かなりの愛らしさを感じてしまうのだが、本当に成人しているのか？　まあ、未成年なのに三十代とか勘違いされる人も世間にはい

るから、この手の類なんだろうな。

「ええとですね、本日は転校生を紹介します！それも2人です！」

「ん（あれ？　この時期だったけ？）」

『えええええー！！！』

驚きに包まれる教室内、なんていっている俺も驚いていた。

確かにクラス対抗戦の後に転校生がやってくるのは覚えてたんだが、時期までは覚えちゃいなかったんだよな。

というか、既に十年以上前の知識だし原作に食い込まずに、一介のモブとして生きる気満々だったから、積極的に原作知識を忘れようと努力しちまったんだよな。

その所為で大きな事件はやっとこさで思い出せるのだが、小さい出来事とかは完っ璧に忘れてしまっているんだよな。

まあ、それは置いといて、他の女子連中も皆一様に驚きに包まれていたりする。

噂が好きで独自の情報網を構築している十代の彼女達の、網をかいくぐってやってきた転校生という存在は、興味の対象になるのは十分といえるものだろう。

「それじゃあ、2人とも、入って来て下さい！！」

「失礼します」

「……」

という山田先生の言葉に教室の扉が開いて、件の転校生が入ってくる。

だが、二人が教室に入ってきた瞬間、教室は静寂に包まれていた。

なぜか、一人はチビッこい外見をしている【女子】なのだが、もう一人が問題だった。

「お、男……？」

そう、このクラスの（確か鷹月さん？）が呆然とした様子で放った一言で、他の皆も状況を理解したらしい。

騒ぎそうだな、なんて考えた瞬間に男子の方が一歩前に出て、自己紹介をしようとする様子を見せたので、全員がそれを聞こうという体勢に入っていた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことが多く何かと面倒をかけると思いますが、よろしくお願いします」

「ふむ、男ね……」

自己紹介が終わった時を狙って、聞こえるように呟いた俺の言葉を聞いた彼女は、一度頷くと、にっこりと微笑みをこちらに向けていた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方がいるとの事でしたので、本国からて『きゃあぁぁぁぁぁ！！』」

見た目というか、今一見した限りでは完全に男としか見えない口調に仕草だった。

中性的で髪は長いのか、結んで後ろに束ねていて、人懐っこそうな笑顔に礼儀正しい仕草に、スマートさを持ち華奢とも言える外見、まさに【貴公子】と呼べるものだった。

……　これで本当に男だったら藁人形に釘を打ち込んで、呪いを送りたいくらいにな。

まあ、そんな俺たちのやりとりを見ていたクラスの女子達はといえば、一斉に騒ぎ出すのは当然という訳で。

「男子よ！男子！しかもうちのクラスに」

「しかも二人目だよ！！」

「それも守ってあげたくなる美形タイプの！！」

「五反田くんみたいな肉食系も良いけど！草食形も良いわ！！」

「お母さん私を生んでくれて、ありがと～～～～～～！！！」

等等、一瞬衝撃波を感じた時みたいに耳がキーン！という独特な音共に痛みも覚えたんだが、続いて出てくるのは女子達の嬌声であった。

元気が良過ぎるこの声は、入学式初日みたいな活気に満ち溢れていて、この学園の恒例行事みたいにも感じるな。

こんな大騒ぎをすれば、他のクラスにも聞こえていそうなのだが、今は覗きに来る気配はない。

各クラスの先生達が頑張っているのだろう。

「あー、騒ぐな、静かにしろ」

凄まじく面倒くさそうにぼやくように言っている織斑先生、この十代の少女特有の反応が鬱陶しいのだろう。

一夏の話では学生時代も何処かストイックな連中（例えば筋肉を鍛えることしか興味がない女とか、柔道一直線な女とからしい）と友人だった、とか聞いているし。

「み、皆さんお静かに～！ま、まだもう一人の自己紹介が済んでいませんから～！！」

とここで、全員の視線はもう一人へと注がれる。

特徴的な銀髪に眼帯と、まるで軍服のような形に改造されている制服。

その上に威風堂々たる振る舞いを見せる姿、それらの姿は全て【軍人】と評すべき姿であったので、全員がどう扱って良いものか分らないのだろう。

「……」

全員から視線を向けられている当人はといえば、口を開くこともせず、だたじっと立っていた。

まあ、こちらにいる全員に対して侮蔑に似た視線を向けていることから、あまり良いというか彼女自身は、ここにいるほぼ全員に対して良い感情を抱いていないのだろう。

ただ一人を除いて。

「挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

織斑先生の言葉にいきなり佇まいを直して、素直な返事を返す転校生にクラスの連中は皆、一様に重苦しい雰囲気の中で居心地悪そうにしていた。

ドイツ軍の陸軍式の敬礼だろうか？　それを向けられた織斑先生はというと、うわ、ものスンゴイ面倒くさそうな表情をしている。

「ここではそう呼ぶことは許さん、私は教師でありお前は一般生徒だ、これから私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

ピシッと伸ばした背筋に踵をキッチリと合わせた、気をつけ！の姿勢を見れば一目瞭然の通りに、軍人の少女。
千冬さんが一年間の間、教官として出向していたドイツ軍の人間に間違いはないと言うか、こいつの事、忘れてた。そういやいたな、こんなの。

なんて考えているが、俺は過去の一夏に起こった出来事を思い出していた。
第二回モンド・グロッソで、一夏は原作の通りに千冬さんの応援に行ったんだが、俺も【生で試合を見たい】と言って付いていったのさ。
そこの決勝戦で起きる一夏誘拐、俺はとある仕掛けを施すことに決めた。

当日の朝に一夏の飲んでいるコーヒーに、丸一日は寝ていられる強力な睡眠薬（アンサートーカーで作った、副作用も起きた時の不快感も全くない奴）を投入、一夏が眠ったのを確認後、リリカルやオカルトパワーを全力全壊で発揮して一夏の偽者を作成し、それを誘拐させる。

奴らが拠点としている場所で自爆させて、原作の幹部連中を一網打尽にしたかったのだが、結局は建物を全壊にして、末端がやられた程度で終わってしまった。
ＩＳを装備した幹部連中に逃げられたのは痛かったな、無論のこと、一夏を救えなかったとか言っていた千冬さんと、涎を垂らして気持ち良さそうに寝こけている一夏が対面したのだが、事情を知った千冬さんに手厚くお礼を言われた時に、思わず本気で気味悪がってしまい、半殺しにされたのは良い思い出だ。

というか一夏の偽者が自爆した瞬間に現場にいたらしい……　俺が何かをしたというのは分っていたが、凄まじい速度で現場に到着していたのね千冬さん。

俺が偽者を自爆させたのって、奴らの本拠地に偽者が運び込まれて、監禁部屋に入れられて三十分くらいたった頃だったんだがなぁ……

まあ、俺のそんな回想はさて置いて、ラウラと呼ばれたチビッ子は一歩前に出て来る。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

『……』

一言、だた一言自分の名前を言った後、チビッ子は貝のように口を閉ざしてしまう。

未だに続きの言葉を待つクラスメイトと、転校生のシャルルや山田先生たちを無視しているその姿は、堂々としていた。

「あ、あのー、以上……　ですか？」

「以上だ」

い、いやいや流石にそれはないぜよといいたいが、涙目になって必死で涙を堪えている可愛い山田先生の姿を見ていると、何故か癒されている自分がいる。

だが、そのうちに一夏とチビッ子の目が合った瞬間、チビッ子の目は一瞬だけ見開かれる。

「ッ！！貴様が！！！」

そういって一夏の元へとつかつかと、お子様にはお見せ出来ない形相で歩いていくチビッ子、思い出した。

この次の展開って、一夏の奴は殴られるんだったっけ。

……しょうがないか。

そして、俺は一夏に平手打ちを食らわそうと、腕を無駄のない動きで振りかぶったチビッ子の横顔へと向けて、消しゴムを指弾の要領で打ち出すのだった。

俺の手から放たれた消しゴム、対暴徒鎮圧用ゴム弾には僅かに及ばないものの、それでも近い威力の消しゴムが、大凡消しゴムが当たった時の音ではない音を立てて、チビッ子の横っ面に着弾する。

「ヘイヘイ！そこのチビ黒う詐欺さんよい、何をやろうとしてんだ？」

「――――――ッ！ッ！ッ！！！」

あまりの痛みに声にも悲鳴にもならないのだろうが、撃ってきた俺を確認して涙目になりつつも睨んでいるのは、流石は軍人と言うところかね。

「……　あまり目立つことをするな、五反田」

「そうは言いますがね、織斑先生、そこのチビッ子は鍛え上げられた軍人でしょうに、そいつの力で思いっきり、構えてもないヒヨッコが殴られたら、どうなるか分るんじゃないっすか？」

「ふむ、まあ、それもそうだな……　ボーデヴィッヒ、後で私が話を聞く、放課後に職員室に来い」

「っく！了解しました、織斑先生」

頭を抑えるような様子で俺に注意をしてくる織斑先生だが、逆に反論した俺の言葉に考える様子を見せた後、チビッ子に職員室息を命じていた。

チビッ子はと言えば、ようやく喋れて歩けるくらいに回復したようで、織斑先生の言葉に了承の意思を伝えてから着席する。

同様にシャルルも着席したのだが、セシリアと箒はポカンとした様子で、他の連中も同じ様な様子であることから、一夏が具体的に何をされようとしたのかが分っていないのだろう。

ただ、俺と織斑先生のやり取りでチビッ子がなにをしようとしていたのかが分ったらしく、クラスメイトの中には（具体的には箒とかセシリアとか）険しい視線を向けて、睨みつけている者もいた。

そりゃあいきなりクラスメイトが殴られそうになったのなら、怒るのも無理はないと言う所だろう。

まあ、俺には関係ないか。

なんて、考えているのだった。
これから数日くらい後に、俺はちょいと後悔してしまう出来事が起きるんだがな。

第１４話　え、優勝した娘が俺と付き合うって！？　勿論大歓迎っす……　え、

ようやく皆が大好きなお二人の登場です！

でも片方はしばらくの間は不遇な扱いかも、と言う感じです。
私は彼女が嫌いじゃありませんよ？　逆にデレた後は好きですね。

ただ、この頃の彼女をガチで描こうとすれば、こういう扱いになっちゃいますので、ご容赦を、と言った感じになります。

第１５話　山田先生やっぱ素晴らしいおっぱいです、それじゃあ今は人気の少な

正直、今回は微妙な出来に……　もしかしたら書き直すかもしれないです。

第１５話　山田先生やっぱ素晴らしいおっぱいです、それじゃあ今は人気の少ない場所に行きましょうか。

突然だが、俺とシャルルは追っ手から逃げている。
え、訳が分らんって？　完璧に生物学上の男である俺と、見た目は美少年であるシャルルが揃えばどうなるか、想像が付かないわけじゃあるめえ。

「こっちにいたわ！！」

「それも二人とも揃ってるよ！！」

「者共！出会え出会えぃ！！」

「あ、あうぁぅあうぅ……」

俺はシャルルを横抱きに抱えて移動しており、俺の腕の中にいるシャルルは顔を真っ赤にさせているのだった。
……　男装していることを隠す気があんのかねぇ、俺の疑問も尤もだがなあ、正体をしらんけりゃどうなるかは分りきったことで。

「美少年をお姫様抱っこする五反田くん……」

「アリね！！」

「次の夏はこれで決まりよーーー！！！」

「弾×シャルル……　凄く良い」

「たまりませんなぁ！！ぐふふふふっ！」

聞かない方が良かった台詞の数々、流石にこれはシャルルの耳には届いていない様子なのだが、聞かれる心配もないのが救いかね。

その内にというか、俺は最初から脱出の手段など考えていたのだ、佐助と小太郎に一つの窓の開放を指示していたので、もう見えてくる頃だな。

見えた！

「あ～ばよ！とっつぁぁぁん！！！」

「ちょ、ここ！さんか！！」

一つだけ全開にされた窓から俺は後ろと前から挟み撃ちにするように迫ってくる女子達を置き去りにして、空中へと躍り出ていた。

「ひゃぁっほぅぅぅぅーい！！！」

「キャアアアアアアアアアアアアアアア！！」

俺は空中に出た時の開放感と気持ちよさから、シャルルは恐怖から声を上げたんだが、本当に隠す気あるのかぃ？　シャルロットちゃんよ。

なんて考えてしまうのも無理はなかった。

だが。

「ねえ、一夏」

「ん？」

「今さ弾が抱えてたのって、アンタのクラスに転校してきた男よね？」

「そうだね」

「女の子みたいな悲鳴上げてなかった？」

「……　それに直前の言葉も同じ様に女の子にしか聞こえなかったね……　どういうことだろ？」

なんていっている二人組みがいたことなんて、俺は知る由もなかったんだがな。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１５話　山田先生やっぱ素晴らしいおっぱいです、それじゃあ今は人気の少ない保険室のベッドの上でつづき～

そんでもって普通に着地した俺は、急いで男子更衣室となっている場所に入ると、よくアニメとかであるような、服の肩辺りを掴んで華麗に変身！を実行して文字通り一瞬で、ＩＳスーツに着替える。

「へ？」

流石にこの光景にはシャルルは驚いた様子を見せていた。
だが、あの女子達を撒くのに時間が思ったよりも掛かってしまったので、時間は残されていないのだが、シャルルはと言えばまだ着替える様子がない。

「ん？　着替えないのか？」

「き、着替えるけど……　弾って、どうして、そんなことが出来るの？」

「慣れと憧れだ！」

シャルルからの疑問の声に俺は胸を張ってはない気も荒くそう言ったのだが、良く分らない顔をされた。
やっぱ男と女の憧れの違いって奴かね。

なんて考えながらも、自然を装ってシャルルからは視線を外して彼女を着替え易くさせて、俺たちはグラウンドへと行くのだった。

「よし、全員が揃ったな、本日より格闘と射撃を含む実戦形式訓練を開始する」

『はいっ！！！』

本日は二組との合同なのでいつもの二倍の人間がグラウンドに集まっている。
その中でも変わらずに響き渡る織斑先生の言葉に、二倍の女子達の返事が轟いていた。

だが、どうしてだろうか？　一夏と鈴がシャルルに対して観察するような視線を向けているのは。

「今日は戦闘を実演してもらうとしよう……　織斑！凰！オルコッ

ト」

「は、はいぃっ！」

「は、はい！？」

「はい！」

「前に出ろ！専用気持ちはすぐに始められるからな、お前達三人に実演してもらう！」

そういった織斑先生の言葉に、慌てた様子の一夏と意外な声を上げる鈴に、勢いよく返事を返すセシリア。

対照的過ぎる光景がそこにあった。

「それで、相手はどちらになりますの？　なんでしたら、二人同時でも構いませんが」

「言ってくれるじゃない、私と一夏の連携を甘く見てるんじゃないでしょうね？」

「そうだね、なんだったら見せてあげようか？」

それぞれが前に出て行き、各自ＩＳを展開したのだが、肝心の対

戦相手がいないことにセシリアが問いかけて、小規模のキャットファイトと言うか舌戦といえる状況になった。
だが、俺はさっきから頭上、それも俺の頭の直上から響く音が気になって仕方がないのだ。
三歩ほど左横に避ける。

「あ～～～～っ！！！ど、どいてください――――――――！！」

俺の予想通り山田先生だったのだが、どうして俺が避けた方向を精確に追尾してくる！？　世界の修正力という奴なのか！？　と考えつつも俺は砲弾と化している山田先生の直撃を受けるのだった。

俺は山田先生が直撃する直前にＩＳが瞬時自動展開したらしく、痛みも何もないのだが、右腕が柔らかいマシュマロみたいなものを鷲掴みにしているのを感じた。

「ふむ……（こ、これはＦに近いだと！な、なんて戦闘力だ！？）」

「あ、あのぅ……　ご、五反田くひゃぁぅ！！」

正直に言おう、俺は山田先生の大きさに驚愕していた。
俺が揉んだある一部分が彼女にとって一番の部分だったらしい、甲高い声とメスの色香を持った表情を見た俺は、熱きリビドーが迸るのを感じたのだが。

「ぬぅん！！」

急いで山田先生から体を離した瞬間、数秒前まで俺と山田先生が密着していた空間をレーザーが走りぬけた。
ギ、ギ、ギ、と油の切れたブリキおもちゃの如くそちらを見れば、ハイライトの消えた瞳で俺に向かってスターライトＭｋ？を構えて

いるセシリアがいる。

「せぃ！！！」

その上に鈴の奴が双天牙月を連結させて、こちらへと投擲してきた。

俺の右腕を狙って投げられたそれを避ける。

だけど一夏がニコニコと笑っているのが一番恐かったんだが、気にしないことに決めないと俺の精神が持たない。

返し刀というべきか、ブーメランのように鈴の手元に戻っていくときに、俺に一撃を与えるのが明白な軌道になったときに、突如それは撃ち落とされる。

「はっ！！」

短くもキレのある声と共に、独特の炸薬の炸裂音が響くと鈴の双天牙月は撃ち落とされる。

少しと言うよりもかなり驚きながら、山田先生を見れば、上体を少しだけ起こした状態で正確な射撃で双天牙月を撃ち落とし、その上に表情も歴戦の兵と言うべきものになっていたことだ。

『……』

この山田先生の豹変とも言うべき変化に驚いたのは、俺だけじゃない様子で一夏や鈴にセシリアたちも同じ様に驚いていたのだった。

「山田先生は元代表候補生だからな、今程度の射撃など造作もないぞ」

「む、昔の話ですよ！昔の！！」

一瞬でいつもの山田先生に戻る。

メガネをワタワタと戻す仕草とかが、やっぱ小動物に似た雰囲気だから、完全に癒し系だよなぁこの人。

「さて、小娘共、何時まで呆けているつもりだ？　お前達三人の相手は山田先生だ」

「え、えっと……」

「その、流石に」

「三対一と言うのは……」

「安心しろ、貴様らではすぐに負ける」

織斑先生から放たれたこの言葉に三人ともムッとした様子を見せ、怒りと闘志を漲らせているのが見える。

まあ、それぞれにプライドってもんはあるはずだからなぁ、なんて考えていたら。

「では、始め！！」

その言葉と同時に山田先生が空中へと飛翔し、彼女を追いかけるように三人とも空中へと躍り出ていくのだった。

結果、三人揃って惨敗。

これが山田先生と三人の戦果である。

面白いように鈴と一夏は回避と攻撃のタイミングでさえも誘導されて、セシリアにいたってはビットの展開すら許してもらえずに真っ先に撃墜される。

その後、山田先生を強敵と認識して、即興の連携を組んで一夏と鈴は挑むのだが、時既に遅く、山田先生によってものの数分も掛からずに撃墜されていた。

「きゅぅ～～～～」

「うっぐぅ……」

「……」

上から順に一夏、鈴、セシリアの順であるのだが、三人とも折り重なっていると言うか、セシリアの上に二人が降ってきてしまったので、セシリアの奴は気絶してるんじゃないのかね。

例によってシャルルが山田先生が使っているＩＳの説明をしてい

たんだが、途中でセシリアが撃墜され、終わった直後に残りが撃墜されたからな、全員の頭に入っているのやら。
なんて思わずにはいられない光景だった。

「くっ、くうぅぅぅ……　こ、このわたくしが不覚を取るとは！！」

「アンタねぇ！なに真っ先に撃墜されてんのよ！！」

「り、鈴さんこそ！わたくしがビットを展開したときからは無防備だと知っているでしょうに、援護してくれないと困りますわ！！」

「ま、まあまあ二人とも、落ち着こうよ……」

この中で一番の被害者は一夏だろうな、二人がセシリアの上からどいた後、きゃいきゃいと鈴とセシリアは言い争いだす。
自分を挿んで喧嘩を始めた二人に逆に冷静になれたのか、一夏は二人を宥めているのだが、こうかはほとんどないようである。

なんというか、非常に残念な様子としかいいようのない事態である。
専用機持ちと代表候補生と言う株というか、品格的なものが下がっていくのを感じるねぇ。

結局、その後は二組の女子からクスクスと笑い声が聞こえてきた

ので、彼女達の言い合いは中止になり。
実習に入ったのだが……　ここで原作と同じようなミスをしてくれた女の子がいて、俺がお姫様抱っこで運ばんと行かなくなったのは、完全な予断である。

一夏達が怖かった……　箒は悦に入ってて何もフォローとかなかったし。

授業が全て終わり、実習用のＩＳも直し終わった俺は、自分のＩＳのメンテがあるというシャルルと別れて着替えていた。
着替えが終わったときに部屋の扉が開く音が聞こえて、そちらを振り向いたのだが、何故か山田先生がそこにいたのだが、彼女の頭に青筋が浮かんでいる。

何かやったかね？　全てバレないようにしていたんだが……

「五反田くん」

「なんでしょう？」

「これ、な～んだ？」

「って、こ、これは！？」

恐ろしい笑みを浮かべて山田先生が出してきたのは、コンビニでビールを買う俺の姿であった。

しまった！前回の銭湯外出の時に撮られていたのか！？　風呂上りに飲むビールってたまんないよね。

なんて考えた瞬間、山田先生の怒りのオーラはそれはもう凄いものとなった。

「そこに正座してください、五反田くん」

「は、はい！」

目が笑ってない山田先生に正座された。

そして始まる地獄とも言える説教タイム、ガミガミガミガミ！！！と山田先生からの厳しいお言葉を聞きつつも、右から左に流すという無駄に器用な事をしていたのだが、再び扉が開く音がする。

「えっと、弾が何かしたんですか？　山田先生」

「なんでもないですよ、デュノアくん、ただちょっとオイタを五反田君はしてましたので、それでちょっとお話してたんです」

「そ、そうなんですか……」

そういって俺たちの邪魔をしないように、と言う配慮なのか見えない位置に行って着替えるシャルル、そんでもって再開される説教。

涙目になって顔を紅くしてプンプンという感じで怒っているから、何気に罪悪感を刺激されるんだよな。

こんな怒り方をする人っていなかったから、余計に堪える。

「ですので！！五反田くんは未成年なのに飲酒をする、という問題行動を起こしましたので、断っていた大浴場の使用調整を行います！！」

「え゛！そ、それ「何か文句があるんですか！？」いえ、なんでもありません……」

ああ……　数少ない癒しが……　なんて考えていても既に決定事項なのか、山田先生は更衣室をいそいそと出て行くと、入れ替わりに織斑先生が入ってくる。

「ぬぐほぅ！！」

「この馬鹿者が、阿呆なことをするならバレないようにやれ、まったく」

「すいません」

「お前が普通の立場の学生だったならば、退学ものだぞ、世界でただ一人の男性ＩＳ操縦者と言うことに感謝しておけ」

「うぃっす……」

頭を抱えながら俺に出席簿の一撃を行った織斑先生は、疲れ切った声でそういってくる。

まあ、確かに普通の学校ならば退学処分が適当だよね、なんて考えつつもどうやって再びあの癒しの時間を手に入れようか、俺の灰

色の脳みそはフルに回転しているのだった。

おまけ

千冬も弾への説教を行い、更衣室を後にしようとするのだが、不意に立ち止まり。

「そうだ五反田」

「なんでしょう？」

「最近整備科の連中から、資材が足りないはずなのに帳簿上ではあっていると言う、不可思議現象が多々報告されているんだが……何か知っているか？」

「いえ、べつになにも、いやぁ、ふしぎだなぁ」

「……　そうか、なにも知らんと言うことならば構わん、それではな」

あからさまと言うか、完全に棒読みの弾の台詞に、千冬は怪しいものを見る目を一瞬向けるのだが、すぐに気を取り直して応えると、更衣室を後にするのだった。

「やべぇ、資材をパチってたのもバレかけてーら……　ちょっと自重するかね」

なんて呟いている弾がいたのだが、誰も知る由はなかった。

第１５話　山田先生やっぱ素晴らしいおっぱいです、それじゃあ今は人気の少な

最後のおまけにチラっと、今後の伏線みたいなものが登場、これが何なのかは、お楽しみにと言うことで。

第16話　ふむん……　俺とシャルルが同じ部屋か……　嫌な予感がするのはど

山田先生と織斑先生たちのありがたい説教から、ようやく解放された俺は、屋上へと向かっていた。

『そろそろ説教終わったでしょ？　昼休みに屋上で皆と一緒にご飯食べることになったから、アンタも絶対に来なさいよね！！』

というメールを頂戴したからだ、あの実習が一時間目から二時間目まで行われていたから、俺の説教はガチで二時間近くも行われていた計算になる。

まあ、俺がやってたことも相当な問題行動だからなぁ、これからちょっとの間は自重するか。

なんて考えながら、途中で食堂に行くのか、大量の女子に後を付けられているシャルルを捕まえて、後ろの女子達を撒くコースで屋上へと向かうのだった。

「よっすー」

「ええと、僕まで同席しても良いのかな？」

購買で適当な物を二人で買い、屋上に到着した時には一夏に鈴、セシリアと箒達が到着しており。
一つの大型テーブル席を確保してくれていた。
このＩＳ学園は通常の高校とは違い屋上が開放されていて、自由に使えたりとかするんだよな、だけど本日の屋上は閑散としている。
間違いなくシャルルに会おうと食堂に殺到したのだろうねぇ。

「全然平気、大丈夫だよ」

「まあ、デュノアも座りなさいよ、食事は大勢で食べた方が美味しいに決まってるでしょ？」

「そうですわ、同じクラスメイト同士なのですから、遠慮する必要はありませんことよ」

「そうだ、軽い親睦会みたいなものだ、遠慮せずにしてくれた方がこちらとしてもありがたい」

「……　ありがとう」

遠慮がちにしていたシャルルだったが、一夏達の暖かい言葉を聞いてちょっと感激している様子を見せている。
この時期は確か、なんかの理由で辛い目にあっているんだったけ

？　あまり思い出せないから分らん。

けど、一夏と鈴の瞳の奥が笑っていないのがちょいと気に掛かる。

付き合いの長い俺くらいしか気付けないレベルのものだから他の連中も気が付いていないんだが、どうしてだろう？

なんか、嫌な予感もするのは。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１６話　ふむん……　俺とシャルルが同じ部屋か……　嫌な予感がするのはどうして？～

そんでもって始まった昼食会とも言うべき状況、一夏と箒が合作の弁当を俺の前に置いて、俺が買っていた惣菜パンが強奪される。
鈴も酢豚が入っているタッパーを置いてきたんだが、量が少々少なめになっているのは、一夏と箒たちと一緒に作業した形跡が窺える。

だが、ここで意外な人物が俺の間に手料理を出してくる。

「弾さん、今朝はわたくしも偶然、そう偶然に！目が覚めましたの！ですので、よろしければお一ついかがでしょう？」

「サンドウィッチね……」

そうセシリアだ、今まで一度も手料理なんてものを作ってこないうえに、本人も得意ではないなんて言っていたのだが、どういう風の吹き回しだろうか？

……　どうしてだろう、これを見ていたら、何か致命的なものを忘れている気分になるのは。

まあ、アンサートーカーを使うほどじゃないし、気にしないことにしよう。

「珍しいな、セシリアが料理なんてな」

「え、ええ……　どうでしょうか？　弾さん、サンドウィッチはお嫌いでしたか？」

「いや、別に嫌いじゃないし、お前さんの料理は初めてだからな、最初に貰うけど良いか？」

「は、はい！！」

気にしないことにした致命的なものは、一夏達の表情を見た瞬間に再燃する。

彼女達の顔が【選んじまったよ……　冥福だけは、祈ろうか】的な感じで哀しげなものになった上に、黄昏たものに変わったからだ。

かといって既にタマゴサンドを手に取ってしまった以上は、俺の今までの言動と行動を翻すわけにもいかないために、一口頬張る。

その瞬間、俺の口の中を衝撃波が駆け抜けていった。

「――――――――ッ！！？」

な、なんじゃこりゃ！？　と言うのが俺の感想だった。
タマゴサンドなのに味が苦くてすっぱくて辛い！！タマゴサンドの味が全くしない所か、殺人兵器並みの味覚攻撃だと！？　さ、流石は代表候補生……　その真髄って奴を味合わされた気分だぜ。

なんてアホなことを考えていたのだが、他の連中はどうやら俺よりも早く、これの餌食になっていたらしい、水を用意している一夏に、こっそりと非常時のエチケットボックスを用意している鈴がいるから分る。

「……」

……　けどな、これが普通の男だったら、彼女を傷つかせまいと誤魔化して行動するんだろうが、俺は今は定食屋の子供だ！こんな料理は許せん！！

「セシリア」

「は、はい！」

「あーん」

「「「!?」」」

「だ、弾さん、それは……」

「いいから、あーん」

俺は一口だけかじったタマゴサンドを、セシリアに向けると食べさせる為に口元に持っていくのだった。

一夏たちは一瞬驚愕の表情を浮かべた後、何か羨ましそうなもの欲しそうな、でもそれでいて嬉しそうな、なんていうあまりにも器用な表情を浮かべていた。

「あーん……　ッ――――――――――――――――――――――――――――――――!!!!!?」

俺が食べさせたタマゴサンドを租借した瞬間、彼女は面白いくらいに顔を歪めて、口元を押さえた上にスカートを握り締めていた。

自分で作ったものの酷さが分ったのだろう、必死でセシリアは耐えており、体もプルプルと震わせながらゆっくりと租借していく。

「セシリア……　辛いんなら、トイレに行って出して来い」

「――ッ!?（で、出来ませんわ!!弾さんと間接キスをしたものを出すなんて!!）」

俺の言葉を聞いた瞬間、拒否するように首を横にブンブンと振るセシリア、なんか、別の意味での必死さも感じるな。

そんなに無理して食わんでも……　なんて考えていたら、何か実にイイ笑顔を浮かべた鈴と一夏がエチケットボックスと水を片手にセシリアへと動き出す。

「ほらほら、セシリア、無理しないで出した方が良いわよ、アンタは弾と違って胃の方は普通の人間なんだし」

「そうだよ、ちょっと中に入って人のいない所で出しちゃおう、ね？」

「ッ!?（ブンブンブン!!）」

彼女達は表面上は優しい言葉をかけているはずなのに、どうしてだろうか？　ちょっと怖い。

味が凄すぎるのか、涙目になって必死で堪えているのが丸分りなセシリアを、一夏と鈴はあくまで優しく立ち上がらせて、嫌がっているセシリアを連れて校舎内に入っていくのだった。

普通に考えてイヤだろ、男の前で口の中にいれた物を出すとか、

平気で会話させられて連れて行かれるなんてのは。
なんて考えつつ見送るのだった。

それから残されたのは、俺とシャルルと箒である。

「優しいね、弾は」

「そうか？」

「普通はあのような反応をした物を食べようとは思わんぞ」

そう、俺はまずはセシリアの作ってきたサンドウィッチを全部食したのだ。

数が少なかったのが救いか、タマゴサンドを含めて3つしかなかったので、ある意味では簡単に完食できた。
どこか感心したように俺を見ているシャルルと箒が気になるが、まあ良いか。

だが、俺の口の中は壮絶と言う言葉が生温い状況だ、甘み、苦味、辛味、酸味、エグ味、これらの味が絶妙なハーモニーを醸し出して俺の口の中で蠢いている。
早急に口直しをせねば、とばかりに水を飲んで、箒と一夏の合作弁当の包みを開けるのだった。

「お！凄いな！」

「そ、そうだろうか……　一夏にも習いながら作ったからな、私はそこまで作っていないが……」

弁当箱の蓋を開けた俺の目に飛び込んできたのは、定番と言えるメニューだった。
ホウレン草の白和えに鶏の唐揚げ、きんぴらゴボウに出汁撒き卵、ピーマンとキャベツの野菜炒めといったメニューが並んでいた。

同じ様に開けられた箒の弁当箱にも同じメニューが収められていて、一夏の分にも同じものが詰められているのが分るな。
ただ量自体は俺のとは違い、彼女達のは少な目と言う違いがあるがな。

「でだ」

「ん、なんだ？」

「箒が作ったのはどれだ？」

「う、あぅ……　その唐揚げだ」

「ふむ、こいつか」

照れているのか、顔を赤くしてモジモジとしてこちらを窺っている箒、ニヤニヤとしつつも愛でたい気分に駆られるのだが、それでは埒が明かない。

そのために俺はまずは箒が作ったといっていたから揚げから、食べることに決めるのだった。

箸で握り、俺が口に入れて租借している所をガン見している箒の姿、自分が作った料理がどのような評価が下されるのか、それが気になっているのだろう。

俺も初めて祖父ちゃんに三代目修行として、料理を作らされた時も同じ感じになったしな。

「ど、どうだ？」

「うん、大したもんだよ、普通に美味いぜ！」

「そ、そうか……　口に合って何よりだ」

緊張していたのだろう、俺がそういった瞬間に箒の顔は一気に安堵の色が広がり、今はホッとした様子を見せていた。

シャルルはと言えば、微笑ましいものをみる目で俺たちを見ていて、ニコニコとしていたりする。

それから暫くしてセシリアが戻ってきて、俺が残りのサンドウィッチを片付けていたことに、嬉しそうでいて、申し訳なさそうな雰囲気になったりしていた。

まあ、今日の昼食もそれからは何事もなく終わったって感じかね。

それから放課後になり、俺はシャルルと共に部屋に帰ってきていた。

まあ、男として学園に通っているから俺と同じ部屋になるよな。

「そんじゃ、今日からお前さんと俺が同じ部屋になるんだが、よろしく」

「うん、こちらこそよろしく」

「そんじゃ、シャワーの使用する順番とかのルールを一応決めとくかね」

「そうだね、僕はシャワーは後で大丈夫だよ？」

「ん？　大丈夫なのか、今日みたいな実習があった日とか結構汗かくぞ？」

「僕はあまり汗をかかない体質なんだ、だから大丈夫だよ」

挨拶もそこそこに俺とシャルルはこれからのことを決めていく。
やはりシャワーを後で浴びると言うのは、俺が誤って侵入しないようにするためだろうな。

シャルルが後から浴びると決めていたら、まずは俺が浴びて、それからと言う形になるからな。
先に浴びたけりゃ予め言っておくことで、バレる確立を少しでも減らしたいと言うのが、本音なんだろうな。

まあ無理矢理正体を暴く気はないしな、暫くはこのまま過ごしていけば良いかね。

なんて事を考えながら、他の事も決まった俺たちは暫くの間談笑していた。

「へぇ、弾の家ってお店をやってるんだ」

「まあ、住宅街の小さな店だけどな」

「でも興味あるなぁ、日本のそういうお店」

「そんじゃあ、近い内の日曜にでも連れて行こうか？　他にも案内したい店とかあるし」

「いいの！？　本当に楽しみだなぁ～　僕、日本に来る時にそういうお店とか行ってみたいって思ってたんだ！」

「おう、そんくらいはお安い御用だ」

話題は主に俺の実家についてとか、街にはどういった店があるとかって感じの話題なんだが、やっぱ前知識なくてもこいつ女にしか見えんわ。

まあ、今まで普通に過ごしてきた女の子がいきなりこんな事をさせられてるんだ、適応できないのが普通だよな。

なんて事を考えていた、だけどこいつの背後関係も大分思い出せてきた、確か父親が強制させてるんだっけか？　このＩＳ学園に男装して入学することについてはな。

どんな奴かを考えても、録でもない奴だったんじゃないかと言う記憶しかないし、実際にこんな真似をシャルルにさせている時点でまともな神経の持ち主でもないのだろう。

暫くは様子見と言うところかね、俺が出て行ってリスクを背負ってまで、こいつの事を助けたいのか守りたいのかも分らんし。

下手に動けば、一夏たちにまで被害が波及する恐れもあるから、ここは慎重に動かんとなぁ。

なんて事を考えつつ、俺たちは眠り始めていた。

それに自然に過ごしていたら、ちょっとムフフな展開があるかもしれないね！

「な、なんだろう……　今、悪寒が……」

なんて考えてたら、俺の背筋から悪寒がしたんだが、一夏と鈴の奴が何か良からぬことを企んでいるのだろうか？　それともあの天災か！？

それからは落ち着かない一夜となってしまった。

そんでもって一週間ほどが過ぎたある日の放課後、俺たちは全員揃ってアリーナに来ていた。
無論のこと、ＩＳの特訓の為だ。

逃げようと思っても、最近は俺の行動が読まれているらしく、いつの間にか誰かが俺の横に来て、腕をホールドしているから逃げられない状況になるんだよな。

いい加減に諦めろよ、なんていう雑音も聞こえてきそうだが、俺は諦めんぞ！今度の休みの前の日は必ず逃げ切ってやるぜ！
なんていう決意を漲らせるのであった。

「えっと、織斑さんが弾にオルコットさんや凰さんたちに勝てないのは、主に射撃武器の特性を把握していないからだろうね」

「うーん、一応は分かってるつもりではあったんだけど……」

本日は華の土曜日なんだが、俺達はシャルル先生のＩＳ操縦講座を受けていたりする。
原作通りにまた分りやすいんだ、これがな。

「知識だけで、実践した事はないって感じかな？　さっき僕と模擬戦したけど、ほとんど距離を詰めれずに終わったよね？」

「あ、あうぅ……　確かに【瞬時加速】も発動タイミングと軌道まで予測されてたみたいだし……」

「織斑さんのＩＳは近接オンリーだからね、だからこそ、射撃武装を主体としたＩＳと戦う時には、より深く射撃武装の知識を知ることも大事だけど、瞬時加速自体の軌道は直線だからね、実際に対応するのは、そんなに難しいことじゃないんだよ、軌道予測もしやすいから」

「直線的、か……」

「あ、でも瞬時加速中は無理に軌道を変えようとか考えちゃダメだよ？　あんな速度の状態で無理に軌道を変えようとしたら、最悪の場合は骨折しちゃうこともあるみたいだし」

「……なるほど」

……　直線的だから対応がしやすいね……　織斑先生はそこを考えればチートだよ。

つーか瞬時加速状態で、楽々と直角にしかも空中で軌道修正とかしてたし……　今から考えたらドンだけバケモンなんだよ、あの人は。

その技能を駆使して第一回モンドグロッソを戦ってたからな、対戦相手が可哀想になったほどのワンサイド・ゲームの試合ばかりだったよな。

特に第一試合のナターシャ・ファイルスだったっけ？　その人との戦いなんてナターシャさんの哀れぶりに涙で画面が見えなくなったし。

まあ、それは置いておくとしてだ、一夏はシャルルの指摘に考え込むように頷いており、しっかりと納得しているの明白だった。

というか。

『こう、ガキッとして、ズバーン！と言う感じに打ち込め！！』

とか。

『避けるタイミング、当たると思ったときの勘よ！！』

とか。

『そこで左に五度と三歩分飛んで、右斜め二十度に上昇ですわ！！』

なんて訳の分らん自称コーチたちの教えだったものだから、一夏は毎回納得していない様子で取り組んでいたりする。

俺？　勿論のことシャルルと同じ様に、分りやすく噛み砕いた解説を交えつつ、説明していましたが何か？　初心者に箒の効果音や鈴の適当な解説、セシリアの論理的過ぎる解説なんぞ分るわけがないだろ。

その所為か一夏は俺に解説を聞きたがるのだが、何かセシリアと鈴に箒が邪魔してくるから、中々時間が取れてやれないんだよな。

同じ部屋だった時にはこの辺が結構自由に取れて、二人で勉強しつつ覚えられたんだが、ちょいとそこが不便かね。

「だけど、織斑さんのＩＳって『後付武装』がないんだよね？」

「う、うん……　弾の話では確実に零落白夜の使用の為だけに全領域が消費されて、使えないだろうって話だけど」

「そうだろうね、多分だけどワンオフ・アビリティーである零落白夜を使用する為に、全拡張領域が使われてるんだろうね」

「わんおふ・あびりてぃー？」

「言葉通り唯一仕様の特殊才能のことだな、一夏の場合はシャルルの言った通りの状況で間違いないな」

「ん？」

分りやすい解説を行っているシャルルの言葉に合わせるように、俺は発言すると一夏は更なる疑問顔になり、シャルルは納得した様子を見せていた。

？マーク全開で首をかしげる一夏、ちょっとだけ萌えるが、それを俺は意識の奥にやると、更に発言していく。

「というか、白式自体が零落白夜を使うために生み出されたと言っても過言じゃないだろうしな」

「そうだね……　弾の解説で間違いはないよ、他の武装が使えないという状況を説明できる点でも僕もそう思うし」

「そーなのかー」

「「……」」

「ちゃ、ちゃんと聞いてたよ!?　ほ、本当だよ!!」

真剣に解説をする俺たちだが、一夏が突然、適当な返答としか思えない返事を返してきたため、シャルルは『本当に聞いてた?』と言わんばかりの視線に、俺はと言えばちょっとビックリしたから、黙ってしまう。

東方Ｐｒｏｊｅｃｔって、この世界にはなかったはずだよな?
何で一夏の奴はルーミアと同じ台詞を!?　というか、何気なく言っただけだろうな。

「まあ、一夏がちゃんと聞いていたとかは置いといて」

「お願い!置いとかないで!?」

「うん、それは置いて置こうか」

「デュ、デュノアくんも!?　うあぅ～」

気を取り直して俺は、シャルルに向き直れば彼女も同じ様に気を取り直したらしく、一度軽く咳払いをして清々しい笑顔と共に、ズバッと切り捨てていた。

「ねえ、あれって……」

「嘘でしょ！？　ドイツの最新の第三世代型……」

「正式採用に向けて、まだトライアル段階だって聞いてたけど……」

いきなり騒がしくなるアリーナ内部、俺達がそこに視線を向ければシャルルと一緒に入ってきた転校生であるチビッ子がそこにいた。

それもＩＳを身にまとい、殺気だった様子であるからして碌な用事ではないのだろう。

俺はＩＳの武装を何時でも発射できるように全ロックを解除し、不測の事態に備えて警戒しつつ、チビッ子の殺気に当てられて震えている一夏を極自然に俺の背中に隠すようにして隠していた。

「おい」

「なんだ、チビッ子」

「フン、貴様に用は無い、尻軽男が……　私が用事があるのは貴様が後ろに隠している女だ」

「え、えっと……」

睨みあって、火花を散らす俺とチビッ子の姿に、鈴とセシリア達も敵意を感じたらしく、いつでも戦闘に移れるように体制を整えて、ＩＳ武装のロックも解除している様子を見せていた。
それは隣にいるシャルルも同様で、一見すれば笑っている様子であるのだが、実際には目元は笑っておらず、冷たい雰囲気を全身から放っていた。

一夏はと言えば、突然すぎる状況の変化に少々追いついていない様子であったのだが、ようやく思考が追いついたようでおずおずと、俺の後ろから出てきてチビッ子に声を掛ける。

「な、何か用？」

「貴様、専用機持ちだそうだな、私と戦え」

「こ、こっちには戦う理由なんて無いんだけど……」

「貴様に無くても、私にはあるのでな」

一夏の言葉をばっさりと遮って言ってくるチビッ子、読めたな。
こいつが一夏にこだわる理由がな。

「ハッ、大好きな教官殿の連覇を阻止した愚かな妹への復讐ってか

？　クソチビ」

「……　なんだ？　いたのか貴様」

「まぁな……　だけどよ織斑先生が連覇を達成していたら、お前さんはここにいなかったのに、なぁ、出来損ないの遺伝子強化試験体」

「……　ッ！！！き、貴様ぁ！！？」

アンサートーカーの能力に問いかけたこいつの『生まれ方』の答え、これを言った瞬間、チビッ子の顔は一瞬で面白いように変化していた。

怒りと憎悪を含めた種々の不快な感情を身にまとい、俺にレールガンで攻撃を仕掛けようとした瞬間。

「……　こんな密集空間で、いきなり大火力戦闘を行おうとするなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いものだね、ビールだけじゃなくて頭もホットになっちゃってるのかな？」

「俺が黙って撃たれると思うなよ、チビッ子」

「貴様達……」

俺は全ビットを展開と同時にチビッ子に砲門を突きつけ、シャル

ルは瞬時切り替えにより両手に突撃機関銃を出現させて、目標に照準を合わせていた。
俺達の一瞬の内の展開劇に、チビッ子は展開されてから気が付いたらしく、苦虫を噛み潰した表情をしていた。

『そこの生徒!!何をやっている!!!学年とクラス、出席番号を言え!!!』

この騒ぎを誰かが先生に言ってくれたのだろう、スピーカーから担当教師の怒号が響いてくる。

「ふん……　今日は引いてやろう」

何度も横槍が入ったことで、今日が削がれたのだろう、チビッ子はそういって去っていく。
去って行く所はまるでモーゼのようだと言うのは、言っちゃいけないのかぁねぇ。

「だ、弾……　えっと、ありがとう」

「気にすんなよ……　俺の近くにいる内は、守ってやるよ」

「う、うん」

一夏はチビッ子の様子に恐怖を感じていたのか、震えていたのだが、俺が頭を撫でることで落ち着いたらしい。

今は照れくさそうでいて、ちょっとだけ悔しそうに、顔を俯かせていた。

だけど、こんな俺達をシャルルがちょっとだけ羨ましそうに見ていたのが、ちょっと気になるけどな。

「それじゃあさ、今日はもう上がりにしない？　あんなのの横槍も入ったし」

「そうだな」

空気が落ち着いた所で、鈴が努めて明るく言ってくれた言葉に、全員が頷くと着替える為に、それぞれの更衣室へと歩いていくのだった。

無論、シャルルは俺と別れて、だけどな。

だけど、これから少し後に、俺は後悔してしまう。
どうしてこの時にチビッ子と決着をつけなかったのか、と。

「アッハハハハハハハハハハハハハハハ！！！！なんだ貴様！
あの男がいなければ、なにも出来ないのか！？」

「い、いや、いやいや、いやぁ！！助けて！！弾！！！」

「貴様のような奴に教官はぁ！！！」

こんな場面を招いちまったんだからな。
……　潰してやるよ、チビッ子……　俺のダチに手を出したらど

うなるか……　後悔させてやる！！

第16話　ふむん……　俺とシャルルが同じ部屋か……　嫌な予感がするのはど

次回から少しの間はちょいと重い話になるかと……　どうしても、
この辺のことに関しては重くなりがちだ……

こんな話になりそうですが、お付き合いいただけたら幸いです。

第17話　いやぁ～　シャッチョウさんは俺とは良い取引しましたなぁ～　だが

そ～んでもって、着替えとかが済んだ後に蒼穹の所有に関する書類なんかも書き終えた俺は、部屋への道を歩いていた。

あのチビッ子の第一回目の襲撃の後、な～んかイベントがあった気がするんだが、原作知識なんぞもう頼りにならんし気にしないことにしよう。

などと考えていた俺は、部屋の扉を開ける。

「ふむ……　確かシャンプーが切れてたっけ……　嫌な予感はするがシャワー室と洗面室を区切る扉の所に置いとけば問題ないだろ」

シャワー室から水の音が聞こえるから、シャルルが浴びているんだろう。

そういえば昨日シャルルが使った時にシャンプーが切れたとか言っていたから、届けに行ってやるか。

なんて考えつつも嫌な予感がする中、詰め替え用のシャンプーを持って洗面所への扉を開けた瞬間、向こう側の扉も同時に開く。

「……」

「へっ？　だ、だ、だ、だ……　ん？」

「おう」

「え、ええと」

瑞々しくて将来が非常に楽しみなお体でっす！！と叫びだしたい気分になる。

予想通りシャルルはシャルロットちゃんで、しかもすんげぇ美少女です。

俺は今、下手なリア充よりも良い目を見ている！！なんて考えてシャルルにシャンプーを手渡すのだった。

「ほい」

「へっ？」

「シャンプーだっぞう、昨日切れたって聞いたからな」

「そ、そうじゃなくて！ああ、もう！！なんて言ったら良いのこういう時！？」

いつも通り過ぎる俺の反応に、彼女は戸惑いしか感じなかったのだろう。
戸惑いから混乱になっていく過程を見ているのも面白く、素晴らしい目の保養にもなっているので文句は無いのだが。
タオルが無いから、手で大事な所を隠しているのが逆にエロくてとっても良いでっす。
もうちょっと眺めていたいが、多分後数秒で俺のリビドーは限界を迎えて彼女を襲っちゃう。
そろそろ一声掛けるかね。

「シャルル」

「な、なに？」

「……　上から順に８ブルゥアアアァア！！！」

「で、出てって！！！！」

冷静に、努めて冷静に俺はシャルルに言葉を掛けていくのだが、俺は選択肢を間違えたらしい。
それまでの熱気とはまったく違う形で、羞恥とか諸々で顔を真っ赤にさせたシャルルは、左手にＩＳを部分展開させて、俺をブッ飛ばすのだった。

受身取れたし問題が無かったな、それにすんごっく良いもの見れたし……　今夜のお供は……　決まりかな。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１７話　いやぁ～　シャッチョウさんは俺とは良い取引しましたなぁ～　だがよ、これで用意は整った……　潰してやるよクソチビ～

シャルルが出てくるまでのしばしの間、俺は座禅を組んで賢者モードに入っていた。

……　ハッキリ言って油断したら自家発電しちゃいそうだから、こうしてないと自分を抑えきれる自信が無い。

この時に一夏か鈴が入って来たらマジヤバイ、完璧に襲う、なんだかんだでシャルルがすぐに入ってきたから、溜まってるモノを解放出来てないんだよな。

久しぶりだ、この感覚。

あ、どうやら上がったらしい。

「あ、上がったよ……　なにやってるの？」

「座禅」

「床に頭をつけて、組んでる足が空中にあるのが……　ざぜんっていうの？」

「おう」

わけが分らないと思った方に説明しよう、俺は確かに座禅を組んでいるといっていたが、普通の座禅じゃない。
座禅の体勢が上下反対なのだ！つまり頭が床にあり、胡坐を組んでいる足は空中に浮かんでいるんだな。

普通の人はやっちゃいけないよ？　結構危険（というか、弾にしか出来ない）だし、お兄さんとの約束だ！！よく考えたら、シュールじゃね？　とか思ってしまう。

「よいしょっと」

シャルルが自分のベッドに腰掛けたのが気配で分かると、俺は両手を使って立ち上がるとそこには、女子がいた。
コルセットとか、諸々の男装用の道具を外したんだろう。

だが、さっきから視線は中空をウロウロし、迷っている様子を見せている。
バレちまったからな、自分の秘密を喋ろうかどうかって言う迷いなんだろう、こういうときは黙って待ってやるのが一番良い。
無理をして引き出させても、悪い結果になりやすいからな。

「シャルル」

「あ、ぅ、な、なに？」

「緑茶とコーヒーどっちが良い？」

「じゃ、じゃあコーヒーで……」

「了解」

だけどな、少しは落ち着かせんと話せる事も話せないだろう。

だからこそ、俺はコーヒーにミルクと砂糖を入れて、あえて甘めにして彼女に手渡すのだった。

それから俺とシャルルはコーヒーと緑茶を飲み終わり、シャルルはそのままの体制で、まだ迷っている様子を見せていて、俺はこっそりと持ち込んでいたモバイルパソコンでネットの動画サイトを覗いていた。

「どうして、聞かないの？」

「聞いて欲しいのか？　お前さんがどうして男装していたってこととか」

「そ、それは……」

「まあ、話は聞くさ……　お前さんくらいの年で、こんなことしてたんだ相応の理由、あるんだろ？」

「う、うん……」

それからシャルルの独白が始まった。

要約すればこうとなる。

生まれてからシャルルは普通に暮らしていたが、母親の死と共に父親が判明、それはＩＳメーカーの大手デュノア社の社長だった。

だが、自分は愛人の子供だったが、それの世話になるために連れて行かれた場所では、自分を道具としてしか見ない父親、自分を汚物でも扱うようにして接してくる本妻、父親の命令でＩＳ適正試験を受ければ、高い適正を持っていたことも発覚し、デュノア社のテストパイロットとして極秘裏に登録されて、表には全く出されない影の人間としての存在を強要される。

それから訪れた、デュノア社の経営危機、それに直面した社長のとった判断は。

「父親は僕に命令したんだ、男装して、ＩＳ学園に向かえって」

「理屈は分るな、男性のＩＳ操縦者がもう一人見つかった！とでも言えば、広告塔としての役割は十分だ、しかも」

時折彼女の独白に俺は相槌を撃ちながら、聞いていた。

それから、何処か俺に答えを言ってほしい様子を見せて、言葉を切った彼女の言葉を聞き、俺は少しだけ考えた後、そういっていた。

彼女はそれを聞くと頷いて、俺から視線を外して、形の良い唇を苛立たしげに少し歪めていた。

俺の目も同じ様に歪むのが分る、デュノアの社長に対する怒りに似た感情で、だ。

「それに同じ男性なら、特異ケースの日本人とも接触しやすいから、本人のデータとＩＳデータの両方を取りやすいから、つまり」

「データの採取を行える、か……　それだけじゃないだろ？　そんなことを平然と出来るような奴が言ってくることも理解できる」

「……　うん、本来の性別も関係が円熟を迎えて仲良くなった時に明かして、篭絡しろ、ともいわれたよ」

「……　クズが……」

「だ、だん？」

「なんでもないさ、そんなことを平然とやれるクズ野郎に、腹が立っているだけだ」

やはり原作で話を見ているのと、現実に目の前で彼女の表情を逐一見ながら聞くのとは全く違う、腹の底から浮かんでくる怒り。

年端も行かない子供を平気で利用し、しかも、話を聞く限り道具以下の扱いをしてきたようなデュノア社長を含めた、周りの大人たちの行動。

これが18を過ぎて立派に独り立ちできる人間が利用されたとかだったら、別になにも感じはしない。

法律でも他の決まりごとでも、何であっても絶対は無い。

だからこそ幾らでも取れる手段があるから、それを講じない奴はただの堕落した人間だからな。

だが、シャルルは違う二年前と言えば日本で言えば、中学校に入ったくらいの本当になんの力も無い子供だ、それも唯一の肉親が亡くなりショックを受けている時に、付け入って利用したのだから、余計に腹が立つ。

「弾？」

「お前はここにいろ、シャルル、というかフランスに戻るのは俺が許さんからな……　俺たちがいる、ここにいろ！少なくとも俺はお前をここに留める！」

「へ、へぅ！？」

気が付けば俺はシャルルを抱きしめて、頭を撫でながらそう言っていた。

俺の突然の言葉にシャルルはビックリした様子を見せているが、俺は更に言葉を連ねていく。

「それにだ、ＩＳ学園の特記事項も利用できる」

「えっと、確かＩＳ学園に在籍中はどの国家、団体、企業のどれにも属さないものとして、原則として外部の介入が出来ないっていうあれ？」

「ああ、それを利用すればお前さんのこれからの立場を改善できる見通しも立つし……　他人を好き放題に利用してきた輩は、そろそろ報いを受ける頃だろうしな」

「ほ、本当に出来るの？」

ＩＳ学園の特記事項の一つをシャルルが言うと、俺は一つ頷いた後、後半の所を小声で言っていた。

後半の所は、小声だったから聞こえなかったらしい、歓喜と言う感情を滲ませて涙めてそういってくるシャルルに俺は頷いて答える。

「だが、お前さんは、一段落経てば代表候補生としての資格は剥奪される上に、今の専用機も持てなくなるし、日本での暮らしを余儀なくされるけど、それでも大丈夫か？」

「う、うん……　フランスにはお母さんのお墓参り位に行ければ良いし、代表候補生としての資格もＩＳも別に要らないから大丈夫、だけど」

「そうか、なら決まりだな」

「だ、弾？　何をする気なの？　無茶だけは絶対にしないで」

「無茶じゃないさ……　俺の全力全壊！でお前さんに自由を齎してみせるさ、お前さんみたいな美少女を助けるのは、将来への投資の一つだ！」

「び、びしょ！？」

それから後は、セシリアが訪ねてきて、食事に連れて行かれて、シャルルに食事を食べさせてあげたりしたんだが、誠に勝手ながら、割愛させていただこう。

あ、後、ちゃんと本名も聞いたよ。飯食わせている間に、だけど

そして、今現在の時刻は真夜中の一時、日本では一時だがフランスでは17時辺りかね。
ついさっき俺が匿名で、標準的な第三世代型ＩＳ設計データを送信したから、緊急の役員会議が行われているだろう。

因みに、シャルロットは睡眠系の魔法を使って眠らせてあるので、朝まで心配は無いだろう。
俺が特定人物意外に認識できなくなる認識阻害の魔法を使い、屋上に立っていたら扉が開く音が聞こえる。

「待たせたか？　弾」

「待ってませんよ、千冬さん」

俺の待ち人は千冬さんだった。
今は生徒としてではなく、妹である一夏の友人として扱う、と言う意思表示なのだろう。
俺を名前で呼んできたので、俺も彼女を名前で呼び返す。

「こんな時間に呼び出すとは……　デュノアの件か？」

「やっぱりお見通しでしたっすね……　流石です」

「当然だ、フランス、特にあの大企業社長には息子など存在しない、娘ならば兎も角な」

「そこまで見抜いていて動けなかったのはやはり……」

「デュノアに私が信用されていなかったんだろう、話を聞けなかった、こういう時に自分の無力さを感じるよ、過去の一夏についてもな」

やっぱこの人は天然チートだわ……　俺は原作知識がなかったら間違いなくシャルルは男だろうと思ってだろう。

だけど千冬さんは完全に見抜いている様子だったよ、敵わないよ、この人にはなぁ、やっぱ俺があこがれた人だし、目標にもしている人だよ。

だけど千冬さんはシャルロットからは信用はされていなかったらしい、俺が知らない時にも積極的に彼女に接していたらしいが、彼女の信用は得られなかったようだ。

けどよ、この人には、こんな悲しそうな表情なんて似合わないな、一夏も皆も、後ろで派手に背中を蹴りだしてくれる、この人がいるから安心できる。

俺もこの人のいる位置にいずれは行きたいもんだしな、それに前世と合わせて少なくとも千冬さんよりも微妙に年上なんだからな、

シャルロットのことは必ず助けたい。

「……　まあ、それは近い内に纏めて聞きますよ、なんならコレのお相手もしますけど？」

「ふん、ませガキめが……」

励ます意味で俺はそういって、飲みに誘う時のあの手の動きのジェスチャーもしながらそう言っていた。

千冬さんは苦笑しながらも、明るい表情に変わったから、俺の選択は間違いじゃかったんだろうな。

一頻り苦笑いの表情でいた千冬さんだが，不意に真面目な表情になると、俺を見据えながら口を開いた。

「それで、お前の要求は、これからお前がすることを私が見逃すことに加えて、私がそれの後始末と同時に、あの小娘のことに関することだろう？」

「全部合ってます……　どうして」

「お前と何年の付き合いだ？　お前の考えていることなど分るさ……」

「お見それしました！！」

俺の気持ちは最後の言葉に全て集約されているだろう、
というか、この人が敵に回ったら俺勝てる気がしないんだけど！？　なんて事を考えていたのだった。

「デュノアを助けるのだろう？　ならば行って来い！後ろのことは私がフォローする、お前の背中くらいは守ってやる」

「ありがとうございます！！！」

発破をかけるように行ってきた千冬さんに、俺はそう応えると、長距離転送用の魔法陣を展開し、一瞬で転移するのだった。

「……　相変わらずわけの分らない男だな……　束や一夏たちにもそろそろ布告をしておくか」

なんて楽しそうに、恋する乙女の少女が浮かべる表情で、そう言っていた千冬さんがいることなん知ることも無く。

次の日の朝、シャルロットは自身の携帯が奏でる単調な電子音に睡眠を妨げれる。
この着信音は自身が所属しているデュノア社用に設定しているものであり。
電信音の単調なメロディーは少なくとも寝起きの頭では聞きたくないものだった。
彼女は不機嫌な様子を隠すように、通話のボタンを押すのだった。

「は、はい……」

『私だ……』

相手は自身の父親でもあるデュノア社長であった。
それから始まったのは嫌味に侮蔑、これらの感情が混じり切りドロドロとした言葉の数々であった。
ただでさえ、寝起きを叩き起こされたと言うのに、聞かされたのがこれであったので、シャルロットは相槌すらも打たずに黙って聞いていた。

時折、弾が寝ていることを確認して、安堵の表情を浮かべながら、彼女は黙って社長の嫌味にじっと耐えていたのだが、いきなり肩を軽く叩かれる。

「？」

それに疑問を持って振り向けば、何時の間にやら、弾が起きており。
しかも【電話を自分に代われ】とジェスチャーでそういっているのだった。

シャルロットは少々拒否の様子を見せるのだが、弾は彼女から無理やり電話を奪い取る。

「ハロ～　デュノア社長、ご機嫌麗しゅう」

『あ、あああああああああああああ！！あ、あなたは！M

r．Dいいい！！！』

彼女の耳に届いたのは、父親とだけ認識している男の恐怖に包まれて、耳を劈くような悲鳴だった。

実を言うと俺は、デュノア社から帰ってきて、ずっと起きていたのだよ。

シャルロットに社長が電話をかけてくる所を見なきゃならんし、その上に更に脅しをかけなきゃならんしな。

全くあの会議に参加していた奴らはピーチクパーチク煩いのなんの、俺に対して第四世代型のデータを寄越せ、と言うのは可愛い方だけど、俺が参加しないと一夏と鈴がどうなるか、なんていった奴もいたし。

一夏達のことを言った奴らは無論のこと、身の程ってもんをオカルトパワー全開！で味あわせたから、トラウマになったのは確実だろう。

そんなことがあったもんだから、俺に敵わないと悟ったんだろう。だから攻撃の矛先をシャルロットへと向けた、今俺の前には表情を失い、涙を静かに流しているシャルロットが居る。

歯を食いしばっている彼女の姿を見たとき、俺は一度彼女に拒否されるものの、無理矢理電話を奪い取って電話を代わるのだった。

「で、俺の要求は、シャルロットはデュノア社とは関係なく、育った人間でおたくらが利用する為に適当にさらってでっち上げた息子と言う設定だって、なるように言ったが、どうなってんだ？」

『そ、それは……』

「ふん、こっちは準第四世代型の情報まで貴様らに流してるんだからな、約束を反故にする気かよ？　俺に対してあんな発言をした役員みたいになりたいのか？　それともっかい海の底、行ってみる？　加減間違えて境界線の向こう側に逝っちゃうかもだけど」

『ヒィッ！！ほ、反故にするつもりはありません！神に誓ってそれはありえません！！』

「なら、今すぐに実行しろ！」

『は、はいぃ！！』

そんでもって電話の向こうから騒がしい音が聞こえて、電話が切れるのだった。
結構な足音が聞こえたから、役員連中も傍にいたんだろうな。

ケケケケ……と表情が不気味なものに変わりつつあったが、ここでシャルロットの様子に気が付いた。

呆然としている。
当然だろう、先程まで偉そうにふんぞり返った口調の男がいきなりへりくだったのだから、誰でもビックリするに決まってる。

俺はまだ涙が流れているシャルロットの目元を手で拭い、顎を持って上を向かせる。

「まあ、そういうことで、お前さんはこれからは自由の身になれるぞ」

「え、えと、どういうこと？」

「つまりだ、一息に説明する相槌は聞かん、お前さんの説明を俺が聞き、怒った俺デュノア社の役員会議が行われていた会議場に乱入、社長を含めた役員一同にＯＨＡＮＡＳＩとＫＹＯＵＨＡＫＵを実行、俺の要求を飲ませた後、標準的な第三世代型ＩＳの設計データと第四世代型に使われる基本的なデータも提供という報酬も支払った。
お前さんの扱いはデュノアとは関係なく過ごしてきた女の子で、自

分たちが追い詰められた時に使えると思い極秘裏に登録していたパイロットである、ということになったな、それにフランスと日本、両政府にも根回しは済んでいるから安心しろ！」

「な、な、な、な、なな」

俺が一息に説明したこと、後で落ち着いて考えたらちょっととんでもないな。

まあ、デュノア社は間違いなく今まで通りには行かないだろう、フランス政府に適度に嘘を交えた真実を話しているがまあ暗示とかも使ったが、だがこの女尊男卑の時代だ、年端も行かない少女を、しかもＩＳパイロットと言う立場の少女を道具のように扱うということが、どういうことなのか、分るだろ？

第三世代機の設計データに第四世代の基本データまで手に入って喜んでいた豚共だったが、自分たちの状況も破滅に向かっていると理解してないんだろうな。

フランス政府にも同じデータを渡しておいたし、何よりも政府がシャルロットが男子じゃなく女子だったと言うことにも怒りを持って言った様子なのだが、ちょっとお話してシャルロットはフランス国籍の抹消を行ってもらった。

日本政府への根回しは、気化した日本人としての国籍の取得に加えて、ＩＳ学園に専属で所属している教師志望のＩＳパイロットとしてもらえた。

というか、日本政府への交渉の方が簡単ってどうだろ？　千冬さんの名前を出して彼女が許可してるって言ったら、一も二も無く頷いていたし……　責任回避の存在があったからか？　まあちょっと

暗示とかの技能は使ってたんだがなぁ……

まあ良いや、俺はシャルロットを改めてみれば、目は見開かれて口はあんぐりと開いている。
その上に全身がプルプルと震えていて、何かを我慢する様子を見せていた。

その内に、爆発した。

「なにをやってるんだよ！？　無茶はしない？　十分すぎる！ううん、それ以上に無茶すぎるよ！！上手く行ったから良かったけど下手したら、弾が無事じゃなかったんだよ！？」

「気にするな、俺がやりたいからやったし、俺には力もあった……だからさ」

「ううん、そうだとしても無茶すぎるよぉ……」

シャルロットの怒りは尤もだろう、俺のやったことは普通の人間であれば無茶すぎる。
恐らく与えられたこれらの力が無かったら、俺はどれも出来なかったに違いない、それ処か原作一夏のように先生達へ投げっ放しジャーマン！な展開になった可能性が高すぎる。

まあ、千冬さんが完全なバックアップに着くと分っていたから、

俺はガンガン行こうぜ！な感じで実行できたんだがな。
努めて飄々としている俺に毒気を抜かれたのか、言葉が萎んでいきデッカイ溜息を吐いているシャルロットの姿。
何でだろう、こんな姿が似合っているのは。

「まあ、とにかく千冬さ……　織斑先生も動いているから、心配はないぞ」

「織斑先生まで……　わかった、じゃあ僕は待てば良いんだね？」

「ああ、後は先生達、大人の仕事になるからな、動かんでじっとしてた方が良いだろうしな、今月中には解決するんじゃないか？」

「う、うん……」

織斑先生からしたら、今は明かすべきときじゃないから極秘裏に事を運んでいるはずだ。
俺達の部屋に彼女が来ないことがそれだ、普通ならばこんなことをしでかした俺達の部屋に飛び込んでくるのが、あの人の対応だし。
落ち着く暫くの間はこのままで過ごしていた方が無難だな。なんて考えていた。
特にＩＳ学園も試合を控えているからな。

「でも」

「なんだ？」

「それだとＩＳも乗れなくなっちゃうけど……　どうするの？」

「ああ、それか、大丈夫だ問題ない、放課後に分る」

「？」

そうだシャルロットは今の時点からフランスの代表候補生（極秘裏の登録で一般には周知されていなかったようだがな）としての資格も剥奪されているから、もう彼女の専用機には乗れないのだが。

それについても用意は出来ているが……　まさか日曜大工のノリで作ってたアレを、ここで使うとは、世の中やっぱ分らんね。

なんて考えて時間になったので、俺とシャルロットは部屋を後にするのだった。

第17話　いやぁ～　シャッチョウさんは俺とは良い取引しましたなぁ～　だが

弾が何を用意しているのかは、次回ということで。

長くなったから切っちゃいまして、ラウラへのお仕置きタイムも次回にって感じです。

シャルロットにも変なフラグが立った事になる……　悲惨なことにならないようにしよう……　ラウラが。

第１８話　枯れ井戸な杖を昔拾ったんだが、一夏が大変なことになったよな、こ

明日から、来週まで時間が取れなさそうなので、本日は二話更新でっす。

感想のレスに関しては行うように時間をとりますので、誤字の指摘や感想などありましたら遠慮なく書き込んでくださいませ。

第１８話　枯れ井戸な杖を昔拾ったんだが、一夏が大変なことになったよな、こ

それから放課後、俺たちとシャルロットはこっそりと試作機やらを実験するアリーナに来ていた。

今日一日は何か変な日だったなぁ、クラスの女子連中は何か浮ついた様子だったし、一夏も鈴もセシリアでさえも何か噂している女子の中に混じってたな。

その上に俺がこっそりと耳をダンボにしていたら、一夏か鈴のどっちかが気が付いて誤魔化してくる。

箒の様子も気になった。

なんか、とんでもない事態になった。

て言う感じで頭を抱えてたが、まあ良いか。

「でも、弾」

「なんだ？」

「ＩＳがなくなっても大丈夫って、どういうことなの？」

「それはアリーナに行けば分るさ、織斑先生にも説明しときたいし、一緒に説明する」

「むぅ……　分った」

よほどこのことが気になるのだろう、先程から結構な頻度で聞いてきているのだが、俺はそれらを全て誤魔化していた為、ちょっとだけ拗ねたらしい。

そんなシャルロットを宥め賺しながら、アリーナに着いた俺たちを出迎えたのは、いつものスーツ姿の千冬さんだった。

いつもながらサマになったお姿ですなぁ、と考えつつ俺は周囲に人払いの結界を張り巡らせて、これから暫くの間、俺たち以外の誰かが入ってこないようにしていた。

「五反田、お前からの頼みだが、今の所は全て順調に行っている、そう時間も経たない内にデュノアの処遇もお前の要求通りになるだろう」

「やっぱ凄いっすわ、織斑先生……　俺がやったらどうしても力づくでやってくしかありませんので、本当に感謝です」

「ふん、私とてお前が動かんかったら何も出来なかったからな、逆に動いてくれて助かったよ」

「まあ、それは今は置いておきましょうかね」

「そうだな、今回私もここに呼び出したのは、デュノア関係か？」

「うっす」

表情が幾分か柔らかい千冬さんと色々と会話していたのだが、シャルロットがさっきからソワソワしている。
なんぞ？

「あ、あの、二人ともあ「却下だ」え……？」

意を決したようにシャルロットは口を開こうとするのだが、俺はそれを却下する。
何を言おうとしたかなど分るからな、だけどそれはまだ早いってもんだぜ、まだ終わってないんだしな。
哀しそうな表情を浮かべたシャルロットに、俺は更に言葉を重ねていく。

「そいつは全部が無事に終わり、お前さんが元の姿で暮らせるようになってからだ」

「そうだデュノア、むしろ今から暫くの間が一番難しい時だ、それらの全てが終わってから改めて、礼を言うなら言って欲しい」

「ふ、二人、とも……　ッ！！」

「お、おわ！？」

俺達の言葉を聞いたシャルロットはより嬉しそうな表情になって、俺にいきなり抱きついてきた。

俺の胸の中で泣き始めているシャルロットを引き剥がすわけにも行かず、ちょっと困ったのだが、織斑先生はニヤニヤとこっちを見ているし助けるつもりは無いみたいだな。

そんで、暫くの間彼女は俺の胸の中で泣き続けているのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第１８話　枯れ井戸な杖を昔拾ったんだが、一夏が大変なことになったよな、これは俺の胸の中に大事にしまって置こうか、当時の写真もＨＤ画質で残してあるし～

それから暫くして落ち着いたシャルロットを一度、少し酷いことになっていた顔を洗わせた後、改めて本日の用件を伝えていた。

「まずはシャルロット」

「なに？」

「お前さんの専用機を織斑先生に渡してくれ」

「う、うん」

「……　確かに受け取った、これは私が責任を持ってフランスに返

却する、だが、今度のトーナメントはどうする気だ？　デュノアの分については五反田、お前の希望で取り消していないのだが」

シャルロットの手から織斑先生に手渡されるシャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？、これは今日中にはフランス大使館の人間を通じてデュノア社へと返却される。

これでシャルロットはデュノアの手から逃れられた第一歩となるのだが、まだ問題はある。

これからのシャルロットの機体だ、日本に対してもフランスに対しても教師志望という元代表候補生の生徒が、専用機なしと言うのはいただけない。

だけどオリジナルのＩＳコアには、これ以上専用機を作るような余裕が無い。

だったら、後は分るな！（キリッ！

「あ、ちょっと後ろ向いてもらえます？　それを解決するモノを出しますんで」

「う、うん……」

「ああ……」

俺の言葉に渋々と言った様子で後ろを向く二人だが、何故か二人から胡散臭いものを見る目で見られた。
織斑先生は兎も角、シャルロットの視線が心に効いたよぅ……
シャルロットみたいな女の子にあんな目で見られたら、キツイです。
そんで、完全に後ろを向いたことを確認した俺は、作業を開始する。

「魔法の呪文！ゴタゴタダンダン！！」

そう叫んで某龍珠の合体ポーズの最後のポーズまで決めて言った瞬間、二人が頭から地面に向かって派手に突っ込んでいた。
効果音もドゴォ！とか付いていそうだ。

立ち上がった二人はすぐに俺に詰め寄ろうと言う様子を見せるのだが、ポーズを解いていた俺もちょっとビックリする光景があった。

『はいはいはーーい！！皆さんお待ち兼ねのカレイドルビー参上ですよ！！マスターの命令により、これからシャルロットさんを立派な魔法し「帰りやがれぇ！！」ま、待ってくださいマスター！私の出番ってこれだけですかぁ！？』

「やかましい！何でお前が出てくんだ！？　お呼びじゃねぇんだよ！！」

『あ、ああ、イヤです！！あんな辛気臭い空間にまた押し込められるなんて！！そっちの女性は一夏さんのお姉さんですよね！！せめて彼女を魔法じ』

「ふぅ」

目を点にしているシャルロットと織斑先生、それはそうだろう。魔法少女ものに出てきそうなファンシーな杖が喋って、俺と喧嘩（？）みたいな事をしているのだから。

某スキマさんが使っているのと同じ空間にルビーを俺は押し込むと、俺は安堵の溜息を吐くのだった。

因みに。

「……ッ！？」

「ちょっと、一夏どうしたのよ！？　顔が真っ青になってるわよ！！」

「本当に大丈夫ですの？　一夏さん、具合が悪いのでしたら保健室へお連れしましょうか？」

「本当に大丈夫か？　一夏」

「な、ナンデモナイヨ！！あ、アハハハハハ」

なんてやり取りが第三アリーナであっていた様子であった。

二人は忘れることにしたらしい、一度俺を含めてアイコンタクトを行うと、俺に改めて、さっきの答えを求める視線を向けてくる。

「大変なお目汚しをしました」

「本当にな」

「なんだったんだろ？アレ」

「気にしない方が良い、五反田は理不尽なナマモノ、その程度に考えておけデュノア」

「それ、酷くないっすか！？」

「そうします」

「シ、シャルロットまで！？」

俺は二人からの冷たいお言葉に心の中で涙を流しながら、え、目から流れてるのは何って？　ただの水だよ！！

それはそれとして、気を取り直した俺は二人の前で、空間を開いてあるものを取り出した。

それの正体ってのは。

「あ、ＩＳ？」

「……」

そうＩＳだったのだ！日曜大工のノリで作ってたら、いつの間にか完成していてな、他の連中は代表候補生だったりするし、フリーみたいな感じだった一夏にも、あの天災からのプレゼントみたいなＩＳあったしな。

だから、シャルロットのこの騒動に関しては、渡りに船だったんだ。

「コアはどうする気だ？」

「……　織斑先生にシャルロット、このことは内密に願います」

「なんの事だ？」

「こいつのコアのことですよ」

「やはりな、どういうことだ？　詳細を知らなければ、私も庇い切れんぞ」

「疑似ＩＳコアと言えば大体は把握できるかと」

「なっ！？」

「ま、まさか！？」

真剣になった俺に吊られるように真剣な表情を浮かべるシャルロットと、織斑先生だが、俺の言葉を聞いた瞬間に驚愕と言う感情を浮かべる。

「オリジナルが俺の手元にありましたからね……　解析したんですよ、そしたらコアの中心部に使われている、複数のレアメタルを俺でも入手可能な物に変更することで、出来た代物です」

「この事を他の誰かには？」

「言っていません、これを言えば世界には混乱処か害悪にしかならないような技術ですね、この疑似ＩＳコアであれば、俺以外の男でも容易に起動が可能という事も実は知ってるんです、これがバレたら世界は割れて男と女だけの社会が出来る、という騒ぎで済めば、まだ良いでしょうね」

「お前と言う奴は……　疑似と言っていたがオリジナルとの違いは？」

「基本的な性能については違いはないです、ですけどシールドエネルギーの発生理論が基盤から違いますし、エネルギーに関してはこっちの方が潤沢に使えますから、逆にこっちを使った方が堅牢な防御力を持つＩＳが完成するでしょうね」

「なんて物を作ってくれたんだ貴様は……」

俺の説明を聞くにつれて、頭を抱えて完全に頭痛を感じている様子の織斑先生、シャルロットに至っては思考を放棄したらしく、呆然としていた。

こいつ、中遠距離タイプで、白式以上の超高軌道・大火力型だから仮の名前で【アルテリオン】とでも言っておこう。

これのエネルギーに関してはぶっちゃけて言えば、００のオリジナルＧＮドライブと疑似ＧＮドライブの関係とでも言おうか、そんな感じなのだ。

何しろ大気中に含まれる魔力をＩＳのエネルギーに変換し、それをＩＳのエネルギーとして使えるようにしているからだ、だからこいつのシールドエネルギーの上限自体は低い。

だがこれにも理由がある、ＩＳの周囲にそれ自体を保護するバリアフィールドを発生させて、シールドエネルギーを含めたＩＳと操縦者保護を行うことを目標としている。

まあ、例を出せばアルヴァ・アロンやら、極論を言えばターンタイプみたいな戦闘が可能になるように出来ている、このフィールドを貫こうと思えばかなりの硬度を持つ実体剣でなければ貫けないだろうな、だけど現行のＩＳでフィールドを貫ける程の硬度を持った、実体剣は存在しないから事実上こいつは俺の蒼穹と共に、世界最強の座に極秘裏に君臨したことになる。

つまり、極々基本的な性能には全く違いはないが、戦闘中にエネルギーのチャージが可能であり、今のＩＳでは不可能な技術も展開出来る優れものになっているのだ、この例えで言えばオリジナルが俺が作った奴で、疑似の方が天災が作った奴な。

「聞いておく、どうして作った？」

「オリジナルのコアを解析していたら、数箇所に使われていたレアメタルを俺でも入手可能なものに変えたら、作れると言ったことはさっき言った通りです」

「……　続けろ」

「擬似的にでもＩＳのコアを作ってしまったら、後は本体を作るのみでしたので、作ってしまったって所です」

「貴様と言う奴は……」

俺の言葉を聞いてより呆れた様子になった織斑先生、まあ、俺が彼女の立場だったら呆れるかどうかするだろうしな。

この反応は当然だろう。

だが、彼女は不意に覇気を漲らせた表情となり、口元も不敵なものと変わる。

「フン、やはりお前は面白いことをしてくれるよ、よかろう……そのＩＳもデュノアも、お前も私が何があっても守ろう」

「……　ありがとうございます、織斑先生」

「初めてだな、お前が私に心からの礼を言ってくれたのは」

ハッキリ言って涙が出そうだった。
こんなものを作った俺を気味悪く思わずに、織斑先生は俺まで生徒として守ってくれる。
そう言ってくれたんだからな、嬉しいよな。
こう言ってくれる人がいてくれるって。

「ふぅ、やっぱり弾って凄いと言うか、本当に理不尽っていうか、だね」

「……　酷くね？」

「クスクスッ、そういう反応を見ても弾だなって思うよ、僕のううん、僕達の知ってる弾だなって」

「……　ＯＨ」

シャルロットの言葉の意味を聞きたいが、彼女の楽しそうな笑みを見れば、碌な答えが返って来そうに無い。
ちょっと落ち込んだ俺は、その場にｏｒｚな体制になるのだが、彼女は俺の頭を愛おしそうに撫でると、操縦者を待つように開いたコックピットの位置に体を預けて、最適化と一次移行を行っていた。

「……　凄い少し触れただけで分るよ……　今までのＩＳ以上の性能だって」

「それは光栄だな」

「うん！これなら今までとは違う！僕が本当に望んだ姿で飛べる！！」

本当に嬉しそうなシャルロットの声、原作がどうだったかはもう思い出せないが、こっちでのシャルロットは専用機が彼女の動きとイメージに付いて来れていなかった。

その所為か彼女は俺との模擬戦の際も、苛立ったような様子を見せることが多々あったからな。

模擬戦なら兎も角、実戦では機体側の反応の遅れは致命的となる場合がある。

これを見た俺が急遽こいつをシャルロット用に作り直した経緯もあるし、あのチビッ子へのカウンター代わりに用意した経緯もある。

ん？　これからのシャルロットへの危険材料にならないかって？

大丈夫、他の人にはその時が来るまで、不自然と言うか危険材料に見えない姿に見えるように認識疎外を掛けてあるから！

「シャルロット、一応武装の一覧にはビーム兵器もあるけど、ＩＳ

側から許可が無い限り使うなよ」

「え？　どうしてなの？」

「どういうことだ？」

「そいつの扱いに慣れないうちにビームを撃てば、有毒物質をばら撒くからですよ」

「「なっ？」」

そう、こいつには困ったことにコアとの接触経験が浅い内は、ビーム系統の武器に有毒物質が混ざることが分ったんだよなぁ。

実弾系であれば問題ないけど、ビームになったら放射能とは比べ物にならないくらいの有毒具合だしな。

流石にこの言葉には二人とも絶句している様子なのだが、すぐに持ち直している様子だった。

「デュノア」

「は、はい……　確認できました、弾の言っていることは本当ですね、なに、これ……　有毒物質を使ったら、放射能なんて比較にならないですよ！？」

「そいつの操縦が一定の時期に達したら、ＩＳ側でビーム兵器の圧

縮率を覚えますから、それからは操縦者の意思一つで、切り替えが可能です」

「……　わかった、有毒物質を交えたビーム兵器を決して使うなよ、デュノア」

「分りました」

もう少し時間があれば完全に解決できたんだが、これだけはもう時間がなかったから、そのままになった大き過ぎる問題点の一つだ。その上に有毒物質を除去した攻撃が可能になった後も、操縦者の意思一つで有毒物質を含めることが出来るなんていう、そんな危険極まりないものだったしな。

確実にシャルロットは使わない、と言えるから俺は今渡したんだが、彼女にとっての重荷にならないと良いけどなぁ、なんて考えていた俺だが、シャルロットは人を魅了する笑みをいつの間にか浮かべていた。

「絶対に使わないよ、この有毒物質を含めた攻撃は、弾は私が使わないって、そう思ったから渡してくれたんだよね？」

「……　ああ」

「じゃあ、決まり、絶対に使わない、ううん、誰の命令があっても

僕は絶対に使わないって決めるよ」

「……　俺の方が諭されたか、安心したよシャルロット……　正直に言って不安だったからな」

「それはそうだよ」

俺の表情に含まれていた不安に気が付いたんだろう、彼女は安心させるように俺に対してそう言っていた。

その言葉を聞いた俺は、苦笑いと共に頷くと、ハッキリと彼女に対して微笑を向けた。

まあ、それからは暫くの間、誰もが無言になり、俺はシャルロットのＩＳの最適化などを行って、シャルロットも性能を把握することに努力して、織斑先生は俺達の様子を真剣な表情で眺めていた。

俺達の作業が終了した頃に、山田先生がアリーナに入ってくる。
作業が終わった瞬間に、緊急の案件であれば誰かが入っても良いように結界を弄ったので、山田先生が入ってきたんだろう。

「織斑先生！！」

「どうした！？」

だけど、ここに入れる条件が【人の命に直接関わるほどの緊急事態】だったから、俺は少し嫌な予感がしていた。

「ボーデヴィッヒさんと織斑さん達が模擬戦をしていたのですが！！ッ五反田くん！？」

「待て！！五反田！！！」

「弾！待って！！」

山田先生の口から出てきた言葉は、最悪の事態が起こったことを表していた。

あのクソチビが一夏たちと模擬戦だと!?　クソッ、どうして、こんな重要なことを忘れていたんだ!!

一夏たちに今日、明日は特訓を休めと、何で伝えるのを忘れていた!?　クソったれが!!

そう思った瞬間に俺は、先生やシャルロットたちの制止の声を聞かずに走り出していた。

そして、俺はたどり着いた。

一夏達が特訓をいつも行っている第三アリーナに、そこにあったのは。

「アッハハッハハハハハハハハハハ！！！どうした！？　抵抗してみろ！」

「い、いや！いやぁ！！」

狂ったような表情でＩＳが強制解除されている一夏を、狂笑と共に殴りつけるチビッ子に、大粒の涙を流して、必死で自分を守ろうとしている一夏。

周囲にはＩＳも強制解除されボロボロにされて気絶している様子で、ぐったりと地面に転がっている鈴にセシリアと、箒たちの姿だった。

「……　つぶす」

その光景を見た瞬間、俺は自分への怒りチビへの憎悪、自分の不甲斐なさに対する不快感が全身を駆け抜ける。

「あんな下らん種馬がいなければ、貴様は何も出来ないのかぁ！？」

「いや、いやぁ！！いや！助けて……　弾！助けてぇ！！！」

「クソチビィィィィ！！！」

「なっ！！」

助けを求める一夏を見た瞬間、俺は既に生身で空中に踊りだしていた。

ＩＳなんぞいらん！神秘や俺自身の力の秘匿もどうでも良い！！
また目の前で理不尽な暴力で泣かされている少女がいる。
俺が力を振るう理由なぞそれだけで十分だ！！！

「な、生身で私のＩＳを！？」

「しね」

虚空瞬動と飛翔魔法を併用して一瞬で接近し、一夏とチビを引き剥がした俺は、右腕でギガンフィストを放ちチビを吹き飛ばすと、部分展開でビットを解放、一夏たちを保護させて俺はチビに地面にクレーターを作るほどの踏み込みで接近、上段蹴りを放っていた。

「がっ！あ！！」

俺の蹴りをまともに受けて、地面をバウンドして転がっていくチビの姿、途中で脳震盪でも起こしたのか立ち上がろうとして、再び地面に倒れこもうとした時を狙い俺は動く。

「全く、落ち着かんか！この馬鹿者が！！」

「ぐぅっ！？」

チビに追い討ちを掛けようとした俺は、目の前に現れて強烈な右ストレートを放ってきた千冬さんに吹き飛ばされる。

吹き飛ばされる俺をシャルロットが、優しく受け止めてくれたんだが、俺は千冬さんを睨みつけるように見ていた。

「落ち着け！この愚か者が！！ここで、貴様がやって来た事の全てを吹き飛ばすつもりか！？」

「ッ！？　申し訳ありません、織斑先生」

「……　納得はしないだろうな、五反田、こんな事を言っている私自身も納得はしていない」

「……　はい」

いつものように落ち着いているように見える織斑先生だが、実際には俺と同じ心境なのだろう。

彼女の手は難く握り締められて、震えていた。

俺を睨み付ける様に見ていたが、チビにも同じ、否、あれはそれ以上の視線を向けたままで、彼女は有無を言わせないように言葉を放つ。

「来週の対抗戦に備えて模擬戦を行うのならば構わん、だが、人を殺傷するような事態になれば話は別だ！！！今日、この日から対抗戦終了まで生徒の訓練以外のアリーナ使用を厳禁とする！！訓練をする際には必ず担当の教師の立会いのもとで行え！！これらを無視した者達には厳しい罰則を与える！！以上！解散！！！」

そういって拳銃の発射音の如き音と共に拍手を織斑先生はすると、周りにいた生徒達は尋常じゃない様子を感じたのだろうか、慌ててアリーナを後にするのだった。

俺はストレッチャーに乗せられて運ばれていく一夏達を見ながら、皮を破るほどに拳を握り締めていた。

自分自身への不甲斐なさと怒りを覚えながら。

第１８話　枯れ井戸な杖を昔拾ったんだが、一夏が大変なことになったよな、こ

ラウラ、ＶＴシステムを起動させた後、生きていられるのかな……

この弾はボコボコにできる最高の理由だぜ！！とか言い出しそうで困ったなぁ。

どうしようクマー

第１９話　今回は戦いにギャグは無しだ、徹底的にやってやる（前書き）

長くなってしまうので、分けました。
続きは本日中に掲載します。

第１９話　今回は戦いにギャグは無しだ、徹底的にやってやる

場所は保健室、今はあれから大体二時間近くが過ぎた所だ。
つい三十分ほど前に起きた鈴にセシリアと箒たちは、さっきまで俯いていたのだが、自分達よりも重傷と言う状況の一夏を心配そうに見ていた。

このＩＳ学園は軍事兵器でもあるＩＳの操縦者を育成する為の場所でもある、その為に保健室を含めた医療施設には、国立病院並の医療設備が存在している。
それらの設備による治療を怪我したらタダで受けられるのだから、ＩＳ操縦者と言うものの重要性も窺える。

さっき診断された一夏の怪我の状況は、数箇所の打撲や切り傷などで、安静にしていれば一週間もあれば治るという診断だった。

「……　ゴメン……　弾」

「どうしてお前が謝るんだ？　鈴」

「あたしが付いていたのに、一夏を守れなかったから……　本職の軍人の強さを私、知ってたはずなのに……」

「お前が気にすることじゃないさ」

目に涙を浮かべて、まだ眠っている一夏を見た後、俯いてそう言って来る鈴。
他のニ人も同様の心境なのだろう、深刻な表情で俯いていた。
俺は出来るだけ柔らかい表情で笑みを浮かべると、鈴の頭を撫でていた。

「やれやれ」

「な、何よ!?　……弾？」

「確かに本職の軍人って奴は強いさ、特にアイツは千冬さんの教え子なら、特殊部隊の出身だろうし尚更だ」

「な、なら「だからこそだ」え？」

「だからこそ、俺はアイツを許さない」

この場にいる鈴にも、セシリアにも、箒にも罪は無い。
ここにいる連中は皆、ある意味で【スポーツ】と言えるＩＳ操縦訓練を受けた者達だからだ、小さい頃、それこそ生まれた時から戦うことを宿命付けられて、訓練付けの毎日を送ってきた人間と比べるのもおこがましいと、そう言えるくらいに実戦経験の差などは致命的だ。

だからこそ、その力を、今からが大事な力の無いヒヨッコ、それもまだまだタマゴでしかない人間に本気で振るうということ、それがどういう結果を招くのが分ってない、

奴は【覚悟も無い人間が選ばれたＩＳ操縦者になっている】事が気に食わないんだろう、だったら覚悟を奴は決めているんだろうな、逆に理不尽な力で叩き潰される覚悟ってものをよ。

「弾？」

「ん、ああいや、なんでもないさ」

俺の変化に気が付いたんだろう、セシリアも箒も鈴も誰もが不安そうな目を向けてくる。

俺は感情を思わず出してしまった自分に苦笑していたが、それを心の奥に押しやって応えていた。

安心した様子を見せた彼女達、だが状況と言うものはいつも唐突に動き出す。

「……　いゃぁあ、いや！いや！いやあああああああぁ！！！」

「一夏！」

「い、一夏！どうしたの！？」

「織斑さん！？」

「しっかりしてくださいませ！一夏さん！！」

「一夏！しっかり！」

それまで普通に眠っていた一夏の寝顔が急に歪み、悲鳴を上げてベッドの中で暴れ始める。

俺は名前を呼んで彼女を抱き起こして僅かに拘束、彼女を正面から抱きしめて落ち着かせようとした。

暫くの間抱きしめて頭を撫でていたら落ち着いてきた様子を見せる、しゃくりあげて泣き声をあげていたが、それが落ち着いてきたからだ。

呼吸も通常時のそれとなり、再び落ち着いた寝息を上げ始めた一夏、俺は安堵の息を漏らして彼女を再び横たえる。

「たすけ、て……　弾……」

落ち着く寸前に聞こえたこの言葉、俺はそれを聞いたと同時に決意する。

確実に完璧に叩き潰す、と、一夏は弱い、原作の一夏とは性別の違いも大きいだろうが、一番の違いが精神面だったからだ、彼女の精神は普通の人間に比べて脆く、崩れやすい。

それが顕著に現れたのが小学生の頃にあった彼女へのイジメだった。

その後にあった鈴の時は、直接的な暴力を駆使したものだったか

ら、まだ対処がしやすかったが、一夏は女尊男卑の風潮の急先鋒といえる女教師の主導でイジメにあっていたからだ。

あの女教師の思い上がりきった言葉は覚えている『織斑さんのお姉さんは私達のような、虐げられている女性を救うために立ち上がった救世主なのよ！そんな素晴らしいお方の妹である貴女がどうして立ち上がろうとしないのかしら！？』『織斑さん？　私はね、貴女を好きでイジメを主導しているわけじゃないの、私の言うことに首を縦に振って、他の女子の皆を救済して欲しいのよ』『慈悲深い私でも我慢の限界はあるのよ、いい加減になさい！！』これが当時、一夏が担任だった女に言われた言葉だ。

無論この教師は潰した、それも二度と立ち上がれないくらいに徹底的にな、今頃まともな人としてさえも扱って貰えない環境に置かれているだろう。

この時の映像を物的証拠として録画して置き、千冬さんに見せたしな、その前に奴の両親も同じ様な人間だったけど、両親にあの女のスキャンダルが世に露出し破滅して財産なども完全に失った所で、最強存在である千冬さんを完全な形で敵に回した。

これがどういう結果を招くのかは、簡単に分るだろう。

世界を代表するＩＳ操縦者の妹に対するイジメの先導に加えて、思い上がった罵詈雑言と言うべきの言葉の数々。

子供を正しく導かなければならない教師の行ったこのようなことは、世論だけではなく日本政府をも動かす理由も十分だった。

その後のことは知らん、何でもオーストラリア辺りのマフィア経営の裏炭鉱で両親共々【ボランティア】をさせられている、とか内戦地帯で地雷除去の【ボランティア】をさせられているとか聞いた

が、正直に言って興味など無い。

ともかく、そのイジメの最中に一夏の精神は壊れかけようとしていた。

当時の千冬さんは忙しく、家には中々帰れない生活をしており、二ヶ月に一回家に帰れれば良い方と言える生活だった。

頼れるものがいない状況下で彼女が助けを求めたのが、当時彼女から大きく嫌われていたはずの俺だったのだから。

以前、転生した俺は一夏が女であったことに対してショックを受けて、胸を揉んで、ジーザス！と叫んだのは言ったと思うが、それが原因で当時は嫌われていたのだよ。

まあ、この出来事があったのが、イジメに合う前だったのも俺が印象に残っていたことだったんだろう。

『お願い……　助けて…　私を……』

泣きながら、縋りつくように言ってきた一夏の言葉を聞いて、俺は頭を鈍器で殴られたような衝撃を受けた。

心の中で、何処か油断と言うか安心みたいなのがあったんだろう、一夏は原作で言えば主人公だから本編が始まる前までは、何もそれこそ心を壊すような出来事なんて無いだろう。

千冬さんの重圧に負けずに生きていけるだろう、なんていう油断

と言うか俺自身も傲慢だったと言うか、この世界で俺は生きてなんていなかったんだろうな。

目の前でポロポロと大粒の涙を流して俺に助けを求めてくる一夏の姿を見て、俺はようやく動いたんだよな。

それに、この時からようやく俺は、この世界に生まれた、と言えるんだろう、この時まで持っていた人を観察するような感覚も、何処か上から見ていた感じも無くなったから。

その後は俺の家に一夏は暫くいてもらい、祖父ちゃんたちに事情を説明した上で、心のケアをしてもらったりとか、女教師との闘いといえるものも始まったんだが、今は割愛する。

弾の腕の中で落ち着きを見せる一夏の姿を見ていて、私は悔しさを隠しきれなかった。

小さい頃から、なにかとしょげやすかった幼馴染で、男子からも女子からも良く苛められていた一夏、私と同じ学校にいた頃は私がよくイジメに来た連中を追い払っていたのだが、これを見る限りいなくなった後にもイジメか何かあったんだろう。

弱々しい声で弾に助けを求める一夏と、悔しそうに怒りを堪えている弾の姿を見て、力が欲しい。

そう思った。

今回は弾が間に合ったから良かったものの、もしも弾が間に合わず、最悪な事態が起きていたらと思うと、ゾッとする。

私も現場にいたにも拘らず、あの女に手も足も出せずに敗北し、無様に気絶までしていた時に一夏は嬲り殺しの目にあっていた。

力が、力が、力が欲しい……　あんな理不尽に暴力を振るう事しか能のない輩から、今度こそ大事な友や皆を守れる力が。

「専用機……」

だけど、今の私ではそんな力など無いことは分っている。

理由の一つが専用機の存在、あの女が持っていたのはドイツの第

三世代型の最新型ＩＳで、私が使っていたのは第二世代型の、それも訓練機だ。
技量では、まだまだな私がそんな勝負で適う筈も無いのは明白だった。

せめて、専用機があればと思う、相手が相手だったから打倒することはできないが、一夏が逃げる時間か、弾が駆けつけてくる時間を稼げたはずだ。

そう、私は思ってしまう。

「……　姉さん」

こんなときに、あの人を頼ってしまう自分が嫌になる。
一夏と離れてから三年ほどの間、あの人に連れ回されていろいろな所に迷惑を掛けて、それのお詫びとかで頭を下げた日々、正直、それらの件で私の人当たりは改善されたのだが、あまり嬉しいことじゃないのは確かだ。

あの人に連絡を入れれば、私はすぐにでも力が手に入るだろう。
それも極上の力が、だけど、怖い。

また、自分の心が力に飲み込まれてしまいそうで、でも、手にしなければ、また私は守れない。

「どうかしたのか？　箒、具合悪いんなら先生を呼ぶが？」

「いや、心配を掛けたな、弾、私は大丈夫、ああ、大丈夫だ」

私の様子がおかしいことにも気が付いたのだろう、弾はこちらを気遣うように問いかけてくる。

彼の言葉に私は安心させるように、自分に言い聞かせるように、応えていた。

それから俺たちは、後のことは任せろ、と言って現れた織斑先生に任せて保健室を後にしたら。

寮に通じる通路で大量の一年女子達の襲撃を受けた。

暴力的な感じで襲われたわけじゃなく、なんか今回の対抗戦が若干変更になり、トーナメントはタッグマッチになったと言うのだ。
それで二人と言う希少性が高すぎる俺たちに、ペアになってもらおうというのを表情に込めて、必死な形相で現れたのだ。

まあ、こうなるのは読めていたから、俺はシャルルとペアになる。と言うことを伝えると女子達は、渋々と納得した様子を見せて戻っていくのだった。
若干俺の様子がおかしいことも、彼女達があっさりと引いた原因なのかもしれない。

「やーや～　ごたち～にしゃるる～ではないか」

「お、のほほんさんじゃないか、どしたの？」

「え、えっと、布仏さん、何か用？」

「今から、ご飯一緒にどうかな～って思ってさ」

「ん？」

「どうしたの？　弾」

「どうかしたの、ごたち～？」

「……　布仏って誰？」

クラスメイトののほほんさんだった。
本名は分らない（キリッ！）俺の原作知識はアニメ版全部とラノベが三巻までだからだ！
だから彼女の本名自体は知らないんだよな、シャルロットの言った布仏という言葉に聞き覚えが無かったからな。
つい問いかけたんだが、シャルロットの冷たい視線と、涙目になったのほほんさんがそこにいた。

「ひ、酷いよ！ごたち～！！あだ名で呼んでたから、私の本名知ってると思ったのにぃー！」
「弾って、サイテーだよ」
「えっ！？　ま、まさかのほほんさんの名字なのか！？」
「そうだよ～！」

シャルロットとのほほんさんに責められる俺は、たじたじとなり、その後はのほほんさんに謝罪した後、食堂の食事を奢らされたんだが、以外に食うんだな。
のほほんさんって、デザート関連をかなり奢らされて、財布が軽くなったことに俺は心の中で涙を流すのだった。
何気にシャルロットまで俺に奢らせたのが少々気になったが、気

にしないことにした。

だけど、何でだろうか……　俺の本能は叫んでるんだよな、彼女のお姉さんはお前の運命の人（？）カモ、しれない！！と、これも気にしない方が良いのだろうか……

少々涙を流した夕食は終了し、俺とシャルロットは共に部屋に帰ってきていた。

シャワーも浴び終えて後はのんびりと過ごすだけの時間、だが、俺は一夏達がチビッ子と戦っていた時の映像を、こっそりと全ＩＳからコピーしていて、それをじっくりと観賞している所だった。

「ボーデヴィッヒさんのＩＳ【シュヴァルツェア・レーゲン】はドイツの最新型ＩＳだね、一番の特徴はＡＩＣと呼ばれる特種武装にあるみたい」

「映像を見る限り、対象とした物体の慣性を停止、もしくは制御する兵器か？」

「慣性の停止が目的の兵器だよ、流石に現行ＩＳで対象の慣性制御まで行えるような規格外は存在しない」

「……」

「ん、弾、どうかしたの？」

「いや、ベツニ」

「変な弾」

シャルロットの解説を聞いていた俺は、彼女が言った規格外と言う言葉に、一瞬ドキッっとするのだが、不思議には思われたようだが誤魔化すことには成功していた。

あ、危ねぇ……　一瞬俺のビットが慣性制御が俺が意識を集中させなくても楽に出来る。

なんていう所だった。

まあ、今の会議と言うかミーティングには要らない情報だから、黙ってよう。

「だが、映像を見る限りは停止させようとするのならば、対象に意識を集中させた上に本体も動けなくなるようだな」

「うん、この映像を見る限りオルコットさんが先に停止されてダメージを負った後、他の皆もがんばってはいるけど……」

「……　本体が動けなくなろうが、相手は素人に毛が生えたような人間だからな、一夏と箒の連携ではチビに弱点を一瞬で見破られて吹き飛ばされているな」

「その後は一方的なジェノサイド・ゲーム、だね……」

「……」

その後の一部始終、全員のＩＳが強制解除されて地に倒れ付して、一夏には苛烈な暴力が振るわれるシーンを俺は、眉一つ動かさずに見ていた。

シャルロットが俺を気に掛けている様子を見せたが、それを無視して映像を切った俺は、シャルロットへと向き直る。

「シャルロット」

「なに？」

「これからトーナメントまで幸いにして一週間は時間がある、それまでにお前にアルテリオンで出来ることを教える」

「うん」

真剣な表情で、そう言った俺にシャルロットも真剣に答えていた。
それから二つ三つほど話した後、それぞれのベッドに入って、夜は更けていった。

それから一週間が経ち、試合当日の朝。
俺たちは男子専用に与えられた更衣室の中にいた。

やはり年間を代表するトーナメントの一つと言うだけ合って、熱気は凄まじいものだった。
来賓もそうそうたるメンバーと言える、各国の政府関係者に加えて、研究機関に企業のエージェント等等、これらが来賓席にズラリと揃って座っているのだから。

「三年にはスカウトに、二年には一年間の成果の確認に人がたくさん来ているからね、一年でも上位入賞者には早速チェックとかが入ると思うよ」

「……　ご苦労なことで」

正直に言って利権しか興味の無い連中など、どうでも良かった。

昏い喜び、粘着的な何かが俺の中を駆け巡っていた。

やはりセシリアも鈴も箒も一夏も全員が出場停止を言い渡された、箒は体のダメージが予想以上に深かったことが原因で、他の三人はＩＳのダメージに加えて、体のダメージも大きかったのが上げられる。

一応は日常生活を送る程度は支障の無い程度に回復している。

だが一夏と箒は兎も角として、鈴とセシリアにいたっては、これからのことが少しだけ心配にもなる。

彼女達はそれぞれの国の代表候補生と言う立場、言わば一国を代表している人間だ、それが試合前の私闘で怪我をして出場できなくなりました。

と言うのは、事情を知らない他人が聞けば、格好の攻撃材料だからだ。

これから先の情報収集を怠らないようにしないとな、と考えながら目の前のウィンドウに出されている、対戦相手を眺めていた。

『Aブロック・一年の部・第一試合・ラウラ・ボーデヴィッヒ&ティナ・ハミルトンペアVS五反田　弾&シャルル・デュノアペア』

口の端が誰にも分らないくらいに吊りあがるのが、自覚できる。
右手が握り締められて、震えているのも分る。

待ったよ、この時をな、チビ。

それから俺とシャルロットはアリーナ内に移動する。
目の前にはチビと、抽選で当たったんだろう、かなり哀れな表情をしている金髪の少女がいた。

「まさか一戦目から当たるなんてな、待つ手間が省けたと言うもの

だ」

「フン」

「……　あの女を始末するのには、まずは貴様を殺らんことには、どうにもならん事にも気付かされたからな」

「御託はどうでも良い」

「なに？」

「潰す」

「アッハハハハハハハハハ！！！やってみろ！種馬！」

チビの高笑いが響くと同時に鳴り響く開始のゴング、俺は確認すると同時に一瞬で近接ブレードを展開し瞬時加速で接近していた。

「……」

「フン」

チビが俺に右手を向けた瞬間、ビットを8基解放し停止結界の範囲外に飛ばすと同時に、ビームの一斉掃射を行う。

これをみたチビは慌てて結界を解除し、回避に専念する様子を見せていた。

プラズマブレードやアーマーなどを駆使して回避、もしくは防御していくチビ。

「ちぃ！（あの女のビットとは全く動きも何もかもが違う!?　これが正体不明とも呼ばれるＩＳか!?）」

心の中では大方俺のビットの動きにたして毒づいているのだろう。
俺は横目でシャルロットを確認すれば、既に勝負は終わっていたのが確認できる。

回避と防御に専念し、俺への対処が遅れがちになり始めた瞬間を狙い、一つの兵器を物質化させる。
新しい射撃武装であり、ビームカノンとも呼べる【グングニール】にエネルギーチャージを開始する。

俺はまだ背中に残っている４基のビットを解放、俺の周囲に展開する。

「ビットアンカー解放」

グングニールは反動が凄まじく、普通に撃てば自分も反動で吹き飛ばされるほどの威力を持っている。
だからこそ、自身の体を固定しなければまともに撃てないのだ、だが、それだけのリスクを背負ってでもこいつの威力は凄まじいものがあるのは、確認済みだ。

こいつの試射を三日前に行った時に、相手になってもらった山田先生がビームの奔流に飲み込まれたのだから。威力は満タンだったシールドエネルギーが一瞬でなくなったほどだ。
その後に山田先生に大泣きされたので、流石に罪悪感が凄かったのだが、これもチビを潰すためということで心の奥へと押しやっていた。
織斑先生が、こちらを険しくも悲しげな顔で見ていたのが印象的だった。

ビットが周囲の地面にアンカーを撃ち込み、体が固定されたのを確認して、シャルロットが金髪を避難させたのを確認した時に、目の前のセンサーに文字が表示される。

『敵性ＩＳシュヴァルツェア・レーゲンを捕捉、射線上に味方ＩＳなし、エネルギーチャージ完了！何時でも発射可能です！！』

「発射ぁぁ！！」

「な、なに！？これほどのビームの奔流だと！？」

発射準備完了の文字が表示されたと同時に俺は引き金を引く。
それと同時に襲い掛かる反動、それは凄まじく俺の体がアンカーで固定されているにも拘らず後退を余儀なくされるもので、数メートルもの距離を地面をえぐりながら後退して停止する。

発射が終わったと同時に俺はチビを確認すれば、どうやらあれから逃げられていたらしく、少々ボロボロになっているが、既に俺に向かってプラズマブレードを展開して迫ってきていた。

「それを発射したら動けないようだな！もらったぞ！！」

「だからお前は二流なんだよ」

「何？」

「僕のことを忘れないでもらいたいね？」

「お、お前は！？」

歓喜に満ちているチビの顔、俺を一方的に叩ける状況になったと言うのが、よほど嬉しいのだろう。
だが、奴は忘れている。

俺たちは『チーム』だと言うことをな。

シャルロットが瞬時加速に近い急加速を駆使して接近した時に、ようやく気が付いたのだろう。
チビの顔には驚愕と言う感情が張り付いている。
そしてシャルロットは右肩の非固定浮遊部位を解放する。

「そ、それは！？」

「クロス・クレイモア！この距離なら外さないよ！！」

「くっ！新装備か！？」

新装備と言っていたがシャルロットのＩＳそのものが、新型なのだから、どうにでも誤魔化せる。
クロス・クレイモアは前世でやっていたとあるゲームに出てきたロボット、直訳すれば古鉄、と言う意味の機体に搭載されていた武装を参考にしたものだ。

肩に搭載されていた鋼鉄製のボールベアリング弾を発射する、あの武装を俺のＩＳに搭載しようとしたのだが、既に領域が無い上にこいつを付けようとすれば、何か武装を外さないといけなくなったから、仕方なくお蔵入りになっていたものだ。
見た目はラファールの非固定浮遊部位と鈴のそれを、足して二で割ったような外見をしている。

だが、威力は折り紙つきだ。

射程が短くほぼゼロ距離でしか使えないこと、これが唯一の弱点と言えるだろうが、ゼロ距離に接近した際にこの武装が解放されれば、絶大な威力を発揮する。

「ぐっ！あああああああああ！！（ま、ける？　この私が！？）」

1秒間に数百と言うベアリング弾が発射されて、それが十秒間近くに渡って掃射され続けるのだ。

それの威力は絶大なものだと言うのは言うまでも無いだろう、掃射が終わって吹き飛ばされるチビ、数度地面をバウンドして転がっていって、停止したら立ち上がる。

だが、その様子はおかしさに満ちていた。

焦点の合っていない目、微弱に震える体、だらしなく半開きになった口。

それらの全てが、あれ、が起動することを示していた。

「アアアア

起こる異変、ドロドロにＩＳが溶けて再構成されていく。
そして出来の悪い粘土細工の人形が出来上がっていくのが分る。
その手に持っているのが、雪片だと言うこともな。

待ちわびたよ、チビ、この時をな！

「な、なにあ「シャルル」っ！？　な、なに？」

「ここからは一切手を出すな」

「い、いきなりなにをい「あれは、俺のエモノだ」っ！？」

俺の声に一瞬驚いた様子を見せたシャルロットは、俺が浮かべている表情を見て一瞬恐怖と言う感情を浮かべる。
憎しみ、怒り、悔しさ、これらの感情が俺の中をグルグルと蠢いていて、正直に言って抑えはもう効きはしない。

アリーナのシールドが降りていき、ここが隔離されていくなか。
俺は、蹂躙と言う名の戦いを開始した。

第２０話　二人にこんなこと言わせた俺って、最低だよな……　特に一夏には

「だ、ダメ！弾、絶対にダメ！」

「あのバカ！何を考えてるのよ！！」

そう言って一夏と鈴が観客席を飛び出していったと同時に、セシリアと箒の二人は共に観客席を飛び出していた。

先程から爆音と凄まじい振動がアリーナを包んでいるから、正体不明となったラウラと弾が戦っているのだろう。

戦いと呼べるような状況ではなく、一方的な蹂躙であり、詳しい状況を知らない二人には、まるで分けが分らない状況となっていた。

「一体何が起こっていると言うんだ？」

「分りませんわ、あの方のＩＳが変化した時に、弾さんの様子もおかしかったので、それで何かがあったというべきでしょうが……」

そう言って走る二人の前に、千冬が立っていた。

その姿は、ここから先に行かせないという気迫に充ちて表情も険しいものであり、穏やかではない事がこの先で起こっている事は明

らかだった。

「お前達はここで止まれ」

「織斑先生!!」

「お前達では、ああなった五反田に声は届かん」

「どういうことですの!?」

剣呑な気配を放つ二人に動じることも無く、千冬は冷静に二人からの言葉を切り捨てるように言っていた。

セシリアの問いを聞いた千冬は、眉を顰めた後、重々しく口を開いた。

「呑まれた、ただ、それだけだ」

「？」

「それは、どういう意味なんですの？」

「今は知る必要はない、時が来たら五反田がお前達にも教えるだろうからな、私と共にここで状況を見守れ、それが今お前達に出来ることだ」

「「……」」

疑問符を浮かべる二人に哀しげな表情を浮かべて言っている千冬を見た二人は、納得はしていないだろうが、展開された空間ディスプレイを見るのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２０話　二人にこんなこと言わせた俺って、最低だよな……特に一夏にはとんでもない事を言わせちまったし～

一方的な蹂躙、ただそれだけだった。

ビットを全て解放し、俺を止めようとしたシャルロットを二基のビットで拘束し、四基のビットで教師部隊の突入を阻止、残りを使いチビに攻撃とファルシオンでの同時攻撃を行っていた。

「……」

目の前にはとっくに弱り果てているＶＴシステム起動後のチビ、それに向けて俺は容赦なく苛烈とも言える攻撃を撃ち続けていた。

「弾！やめてよ！！さっきからどこかおかしいよ！どうしちゃったの！？」

地面に倒れ伏すチビ、俺は原作と同じ様に力を持っているのに油断して、負けそうになったら安易に手に入る力を求めるこいつが許せなかった。

俺も安易に手に入った力に最初は喜んだ、だけど、待っていたのは地獄だった。

制御できない凄まじい力を制御する為の努力、答え与えしもの、この力が無ければ、俺は間違いなくとっくに死んでいただろう。

だからこそ、自分が負けたら安易な力を求めるこいつが許せない。

そして、あのタイミングで求めたと言うことは一夏と鈴達を蹂躙するのは良くて、自分はダメだ、と言っているのに他ならないのだから。

「すまないな、シャルル、もう少しで終わる、それまではそこにいてくれ」

「目を覚ましてよ！！本当にどうしちゃったの！？」

「じっとしていろ」

更にビットを向けてシャルロットを拘束し、既に声も聞こえないくらいに拘束を強める。
彼女自身に苦痛が行かないように配慮しながらではあったがな。

もう戦う力は愚か、立つ力さえ残っていないのだろう。
倒れこみ、立ち上がれることさえ出来ないソレに向けて、ファルシオンの銃口を向ける。

「消えとけ」

俺はそういって引き金に手を当てた、その瞬間。

「やめてぇ!!」

「その手を下ろしなさいよ!だぁあん!」

その声を聞いた瞬間、俺の指は止まり体は何かで拘束されたかのように動かなくなった。

静かに俺はチビを庇うように前に出ている声の主たちを見る。

「一夏、鈴……　そこをどけ」

「どかない！弾、なにを、何をしようとしているの！？」

「一夏の言う通りじゃない！アンタ、こいつのことを許さないって言っておきながら、今なにをしているのよ！？」

「……」

「あたしと一夏がこいつにされたことと、全く同じ事をアンタはしているじゃない！？」

「私は嬉しくなんて無いよ、弾、もう止めて！！こんなの、こんなの弾らしくないよ！！」

「分っているさ、そこをどけ、一夏、鈴、三度は言わん」

「……　弾、あんた」

怒りのあまりに涙目になっている鈴と、悲しげな表情を浮かべて必死に訴えてくる一夏。

俺の言葉を聞いて怒りとも呆れとも言う表情を浮かべている鈴、意識が鈴の方に集中していた時に横から衝撃が来た。

「もう、もう止めて……　やめて……　いつもの弾なら、飄々として笑って解決できるはずだよ……　今の弾は見たく、ないよ……弾にそんな表情は似合わないよぉ！」

「……　一夏」

「一夏の言う通りよ、弾、もう止めて……　こいつが一夏をこの世から消してたんなら、止めないし、いいえ、あたしも全力で参加するわ、でも！あたしと一夏は生きてる！それにこいつが今は間違えてたって、あたし達みんなで過ごしていけば、間違いに気付かせられる事だって出来るはずでしょ！？」

「……　鈴」

「姉さんとも鈴とも話し、合ってたの……　弾の様子が最近おかしかったから、もしも最悪な事態を弾が引き起こそうとしてたら、止めようって……」

「……」

「だから、元に戻ってよ！私に、私に出来ることなら、何でも、何でもするから！だからお願いだよ！こんなのもう止めて……　止めてよぉ……」

大粒の涙を流して言ってくる必死な一夏と、鈴の声を聞いていた俺は、何をやってるんだよ。

と自分で自分に呆れていた。

ちょっと考えれば分ることだった、一夏達がこんなことを望むわけが無いこと、

そして俺がこんな事をしてしまえば、彼女達にチビの命なんていう不要なものまで背負わせてしまうこと、そこまで考えが行き着けば、俺の指は自然と引き金から離れてファルシオンは量子化していた。

ただの八つ当たりだったんだな、これは。

一夏と鈴が、あんな目にあってたのは俺が、あの日しっかりとしてたら起きなかったことだし、事前にチビにも警告、もしくは脅迫ぐらいしておくべきだったんだ。

それらを忘れて安穏としていた俺自身への怒り、それがここで実を結んじまったんだろうな。

俺は抱きついている一夏を背中に手を回して抱きしめて、耳元で囁く。

「ごめんな……　お前らを守れなかった俺の八つ当たりで泣かしてしまって」

「……　弾」

「こんなの、俺らしくないわな！」

「……　まったく、世話の焼ける幼馴染ね、あんたって」

「鈴も、ゴメンな」

「良いわよ、でも、今度私と一夏に駅前のカフェでデザートでも奢ってもらうかしら？」

「了解だ」

いつもの俺に戻ったと、分ったんだろう。

安心した様子を見せる一夏と鈴に、俺は笑みを浮かべて、シャルロットを拘束しているビットに指示を出して、彼女を解放させる。

「良かったよ、このまま弾が取り返しの付かないことをしてしまうんじゃないかって、僕も怖かったんだからね」

「ゴメンなシャルル」

「良いよ、でも、僕にも心配を掛けさせてあんな事した罰で、今度遊びに行く時に何か奢ってね」

「了解」

いつもの調子で行える軽いやり取り、彼女たちの言葉を笑顔を見て、やっと俺自身がいつものペースに戻れたと自覚する。

そして俺は一夏を放すと背後に人の気配を感じた。
背後に立っていたのは、何時もの凛々しい姿な千冬さんだった。

「ようやく、いつもの調子に戻ったようだな、五反田」

「ご心配をおかけしたようで……」

「まったくだ、貴様のような力を持った奴が暴走すれば、どうなるか、分らぬわけではあるまい？」

「はい」

「以後は自制しろ、考え無しに暴走すれば悲しむ者がお前の傍には居る、それをいつも心の中に留めておけ！」

「はい！」

やはりこの人には敵わないな、精神年齢が上の俺よりも遙にしっかりしてる。

自分の持つ力と立場、これらをきちんと自覚して自制していたんだから、俺よりも織斑先生のほうが、チビをボコボコにしたかった筈だ。

自分と血を分けた唯一人の家族である妹に、あんなことをしていたのだから。

だけど、この人は自制して耐えて逆に俺を気遣う様子さえも見せていた、一夏の心のケアも、この人が一夏が落ち着くまで寮長室で寝泊りさせていたから、この辺でも敵わない。

本当なら、俺も一夏を気にかけなけりゃならんかったのに。

「だけど、どうするの？　アレ」

「そうだな、五反田、内部に居るボーデヴィッヒの救助は可能か？」

「可能か不可能かでいえば、可能ですね」

「では、お前に任せる、アレでも私の大事な教え子の一人なのでな……」

「了解しました」

そして俺はチビへと向き直る。
出来の悪い粘土細工の人形みたいな形をしているそれを、俺は見据える。

それと同時に右腕に近接ブレードを展開し、一夏達に下がるように指示を出すと、シャルロットが俺の隣に進み出てくる。

「弾、一応あれは織斑先生を模倣しているからね、弱っていると言っても油断は出来ないから、僕が牽制するよ」

「ああ、その隙に俺が奴を切り伏せる」

「うん、それじゃあ行くよ！！」

勢いよくシャルロットはそういって、６５口径突撃銃：アサルティアを呼び出して、接近しつつ弾をばら撒いていく。
いきなり強烈に展開された弾幕を、模倣雪片で捌きつつも回避していくチビ、やっぱ織斑先生のコピーとは言っても凄い動きだなぁ。
なんて考えつつも俺は、魔力と霊力を刀身に通して蛇腹状の剣へと変えて、それを一度だけ振る。

「シャルル！！」

「うん！」

俺の声を聞いたシャルロットは、その場から後退し、俺はその剣を持った状態で近くまで接近した所で、一閃する。
雪片で弾こうとしたが、蛇腹状になっている剣は弾かれても柔軟に目標を捕捉していた。

胴体に剣の一部が触れた瞬間を狙い、俺は更に剣その物を一回転させるようにして振るい、全身を切り刻むように一閃する。
全身に罅が入り、限界を知らせるそれに俺はブレードに戻した剣を一閃して、外側に展開されているＶＴシステムの粘土細工人形と言えるそれだけを、一刀両断に切り捨てるのだった。

「まあ、他ならぬ織斑先生の頼みだ、これ以上、ブッ飛ばすのは勘弁しておいてやる」

全身が粉々になり、中から無傷のチビが倒れ込むようにして出て来るのを抱きとめると、俺は聞こえてなんていないだろうが、そう言うのだった。

私は……　負けたのか……　何も光の無い暗い空間で、私はそう思うのだった。

ここに入る時に雑音のような音と声が聞こえていたが、もう聞こえなくなっていた。

『なーに閉じこもってんだか』

突然聞こえたその声に、私は驚かされる。
あの男の声だったからだ、だけど、今まで私に向けられていたものとは違い、暖かさを感じるのはどうしてだろうか？

『正直に言って、俺はお前さんを許すわけにはいかんさ、力の無いもの、それも今からお前さんの言う覚悟を決める連中に対して、お前さんはやっちまったんだからな』

……　それは冷静になれた今なら分かる。
私はかつて戦う為に生み出されて、最強と呼ばれ、転落し出来損ないと呼ばれて嘲笑と侮蔑に満ちた日々を過ごしていた。

教官のおかげで最強の座に帰りついた私は調子に乗っていたのだろうか、戦う為の訓練を受け始めたものに覚悟が無い、当然だ彼らは実戦など経験したことが無いのだから。
ましてや教官の妹は今まで普通に暮らしていたと聞く、余計にそんな覚悟などあるはずが無いことなど、分りきったことだった。

あの少女への罪悪感と、目の前にいる男に気づかせてくれた礼に謝罪したいと言う気持ちが湧き上がってくる。

『言っておくが、俺に礼とか謝罪されてもお門近いだ、俺はお前さんを、殺すつもりだったんだからな、俺の大事な幼馴染二人に、あんなことをしたお前さんをな』

目の前の男、確か五反田　弾といったか、彼の言葉は胸の中にストンと入ってくる。

当然だ、親しい人間にあんなことをした人間を許すはずも無い、私がもしも親しい戦友が同じ様にやられたら、許す自信は無い。

いや、確実に彼以上の行為をしてしまうだろう。

『礼とか謝罪とか、織斑先生と一夏や鈴にしておけ、俺を必死で止めてくれたのがあいつらだからな』

教官の妹だけではなく教官まで……　どうして、とも一瞬考えたが、恐らくはこの男に人殺しと言う荷物を背負って欲しくなかったのだろう。

あの女がこの男に向けていた視線は、恋する少女のそれ、私は羨

ましかったのかもしれない、世界最強と呼べる教官に守ってもらいながら、安穏とした日々を過ごしてこの男に恋をする。

というごく普通の生活を送っているあの女が、だから、爆発してしまったんだろう、それも彼女は未だ守らなければならない、新兵とも呼べないものだと言うのに。

自身への自己嫌悪と、目の前にいる男への興味と羨望に近い感情が湧き上がる。

どうして、お前はそこまでの力を持ち、強さまで持っているんだ、と。

『俺は確かに力はあるけどよ、強くは無いさ、いつも情けない男だよ』

嘘をつくな、その感情を感じ取れたのだろう、目の前の男はより苦笑を深めて、頭の後ろを書きながら更に言葉を続ける。

『なーんかお前さん勘違いしているな、俺が言ったのは精神面さ、俺は大切な人に何かがあれば力付くでブッ飛ばすことしか思いつかん、織斑先生のように交渉や駆け引きで相手をノスなんて出来ないしな、だからこそ、強さってもんを手に入れるための修行中の身の上さ』

苦笑しつつそういっているのだが、教官と比べられたら、誰もが未熟と言う言葉で当て嵌められるんじゃないか？　と思うのだが。

『まあな、だけど、いいや、だからこそ俺の手の届く所にいる人々は守って見せる、最悪、俺がいなくなる可能性があるとしてもな』

それでは、まるでお前は。

『独り善がりにそう思うんじゃないさ、一夏達が力をつけたら一夏達と一緒に皆を守る、人が一人で出来ることなんて、たかが知れているからな』

そうか、私とは違う考え方だ。

『だからこそ、だ、チビ、いやラウラ・ボーデヴィッヒ』

？

『お前さんにも俺の周囲にいる人間を守ってもらうぜ、それがお前さんの出来る償いだし、俺が与えたい罰だしな、それにお前さんが持つ力も有効だからな、俺の大切な人を守る為にお前さんが欲しいのさ』

この言葉には衝撃を受けた、初めて言われたのではないか？　私が必要だ、と。

ニヤリとした笑みと共に言ってくる五反田の顔に、私は自分の顔が熱くなり、胸の鼓動が早くなるのを感じる。

これが、クラリッサの言っていた【恋のドキドキ☆な鼓動！】と言う奴だろうか！？　クラリッサが言っていたな、日本の男性は自分が気に入ったりした異性を嫁にする、と。

決めた、私をこいつの……

なんて考えていたら、五反田はさっさと踵を返して歩き始める。

私は待って欲しくて手を伸ばすが、その手が届くことは無かった、だが、彼は立ち止まってこちらを僅かに振り向くと。

『先に行く、立ち上がれる様になったら追って来い、お前には立派な足と覚悟があるだろう？』

微笑さえ浮かべてそういった彼に、私は力強く頷きを返して立ち上がると、必死の思いで後を追うのだった。

まるで深い水面から、飛び出したかのような感覚でラウラは意識を取り戻す。

酷い気だるさを感じつつ周囲を見渡せば、そこはＩＳ学園の医務室であり、自分の近くに千冬が椅子に座っているのが確認できた。

「気が付いた様だな」

「こ、ここ……？」

「寝ておけ、無理はするな」

近くにいる千冬の言葉に答えようと、彼女は体を起こそうとするのだが、それは千冬によって妨害される。

だが、彼女はそれに首を横に振って拒否の意思を示すと、体を起き上がらせる。

上半身だけでなく全身から激痛が走り、顔が歪みに満ちるが、彼女は真っ直ぐに千冬を見ていた。

「何が、起きたのですか？」

誤魔化しは許さない、という真っ直ぐな強い視線に千冬は溜息を吐いた後、重要機密だから、と前置きすると同時に口を開く。

「ＶＴシステムは知っているな」

「はい、正式名称はヴァルキリー・トレースシステム、過去のモンド・グロッソ部門受賞者の動きを模倣するシステムで、確かアレは……」

「そうだ、あれはＩＳ条約により、どの企業、国家、組織であろうとも開発、研究、保有が禁止されているシステムだ、それがお前のＩＳに搭載されていた」

「……」

「巧妙に隠されてはいたがな、機体の蓄積ダメージに搭乗者の意思……　この場合は願望といった方が正しいな、それらが一度に揃った時に発動するようになっていたようだ」

「私が望んでしまったから、ですね」

千冬の言葉を聞いていて、ラウラはベッドのシーツを握り締めていくのだが、瞳には何かの強い力が芽生えているのを千冬は感じ取っていた。

何かを言おうとして、口を噤んでいる彼女を千冬は見守っていた。

その内に何かを決意したのだろうか彼女は勢いよく顔を上げて、千冬に向かって口を開いた。

「教官」

「なんだ？」

「私は、他の誰でもなく、ましてや貴方でもない、私だけのラウラ・ボーデヴィッヒになれるでしょうか」

「……　フッ、何を言い出すかと思えば……」

「教官？」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

「は、はい！」

見守っていた千冬を少しの間だけ、目を点にする言葉をラウラは突然言って来た。

これもあいつが何かをやったのか？　理不尽存在め、と小さく呟く様にして言っていたのだが、ラウラには聞こえなかったらしい。

疑問符を浮かべた彼女に、多少微笑みつつではあったが、力強く千冬はラウラに対して呼びかける。

突然の千冬からの大声に、ラウラは背筋をピン、と伸ばして答えていた。

「お前が誰かになど慣れはしないさ、それにここには三年間も在籍しなければならんのだ、その間にお前が望むラウラ・ボーデヴィッヒを見つけろ、ここに居る間に見つからなければ一生悩め、それがお前達の特権だ、良いな」

「は、はい！」

千冬の口から出てきた励ましの言葉、これを聞いたラウラの瞳に、涙が浮かぶ。

意外だったからだ、彼女の妹にあんなことをした自分に対して、励ましの言葉までくれた千冬が、だからこそ嬉しさや色々な感情がせめぎあって、彼女の表情はクシャクシャになっていた。

千冬はハンカチを出して顔に押し付けた後、自分で顔を拭っているラウラを残し、出口へと向かっていく。

「何があったのかは知らんが、これからが大変だな、もしも、ほんとうに、も・し・も！だが、アレに惚れたのならば、一夏には気をつけろよ、小娘」

「構いません、障害物の無い路なんて面白くありませんし、それに貧乳はステータスだ！希少価値だ！と部下も言っていましたから、負けるつもりはありません！」

「どういう部下だ！それは！？」

ラウラのぶっ飛んだ言葉に、流石の千冬もいつもの調子を完全に崩してツッコミを入れていた。

こんな言葉がラウラの口から出てくること自体が、異常といえるだろうからだ。

疲れた様子になった彼女は、微笑みに表情を改めて出て行くと、ラウラは一人夕焼けの空を見上げる。

「こんなにも、景色が変わるものなのだな……　誰かに、恋をする、というのは」

彼女の顔は明らかに夕焼け以外の赤みを帯びていて、口元を人差し指でなぞり、弾の名前を口にする。

その後は、ベッドの中に入り、意識を眠りにつかせるのだった。

今日は良い夢が見れそうだ、なんて考えながら。

第２０話　二人にこんなこと言わせた俺って、最低だよな……　特に一夏には

ふぃ～　これでラウラとの戦いは終了です。

でもどうしてだろうか、まだ登場していないクラリッサが濃いキャラになった気がする……　原作でも似たような感じだから良いか（ヲィ

これから、ラウラはかなり原作から乖離する可能性が高いです、クラリッサからしてあんなんですからｗｗ

～番外　没シーンとか番外とか～

没シーン、その一

あの嬢ちゃんには悪いが、俺がＩＳに慣れる為の練習台替わりになってもらうとしようかね。

「まあ、姉さんとガチでまともにやりあえる弾なら、全く心配要らないと思うけどね……　弾」

「な、なんだ？」

あの中学の時のことを思い出したのか、少しだけ遠い目をしていた一夏だが、不意に彼女の様子が変わったことに気が付いた。
疑問に思い彼女を視界におさめようとしたのだが、先程までいたはずの席から姿が消えており、俺の首に華奢と言えてしなやかともいえる腕が回された。

「あ、あの……　い、一夏、さん？」

「あの娘をね……　戦いだけのいみいがいで、撃墜しちゃ……　だめ、だよ」

背中に氷柱が差し込まれた感覚に加えて、耳元で一夏が冷たい声で囁いてくる。

恐らくは目もハイライトが消えているのだろうな……　それにさっきから、本能と言うか能力の一つが『鉈』とか『鋸で首チョッキン』とか怖すぎることを呟いてるんだが……　き、気のせい、気のせいだよね……？

俺は、少ない勇気を振り絞って何とか口を開く。

「も、もしも……　撃墜しちゃったら、僕は……　ドウナッチャウノデショウ？」

「クスクス……　くすくす……　クスクスクスクスクス」

俺の言葉に返って来たのは、本能的に危険を感じる笑い声、これだけだった。

むっちゃ怖いんですけど……　に、逃げられるものならば、逃げ出したい！

作者コメ：没シーン第二話の最後の部分です。以前感想に書いた、没シーンと言うのがこれだったんです……　ですが、一夏の性格も弾の性格も読者が把握していない内にこんなシーンを見せたらドン引きかも、と言う考えと友人の『一夏怖すぎ！』という声によって没になったシーンです。因みに鉈というのは私の脳内再生イメージのいっちゃんの声でして……　ここまで言えば！分るな！（キリッ！

そうなんです……　テ○○ナやレ○な中の人の声を私の脳内再生イメージとしているので……

没シーンそのニ

ここはフランスのＩＳ開発企業デュノア社本部の役員会議室。
今現在ここにはデュノア社のブレインと呼べる人間の全てが、緊急招集されていた。

大きなテーブルに大体１３人ほどが椅子に腰掛けており、先程から何事かを大声で言い合っている様子だった。

「だから！これだけでは第三世代型が開発できたとしても他の国に後れを取ってしまう！！」

「ですが、そもそも出所が不明なＩＳデータを信用するとでも言うのですか？」

「キミは何を言っているのかね！？　このデータは間違いなく第三世代を設計するに当たっての基盤足りえるものだ！その上に第四世代型の基本情報まであるのだぞ！！」

「それが信用ならんといっている！！第四世代型など、まだ理論上での話しだ！！」

「それは他国、特に米国を含めた数カ国での話だろう！？　彼らがここまで精巧な基本理論データを作れるのかね！？」

デュノア社社長であり、シャルロットの父でもある男は目の前で醜く言い争う男達を眺め、一度溜息を吐いた後、重々しい様子で口を開く。

「会議になってはおらん、とりあえずはこの第三世代型データを採用した場合のシミュレート結果はどうなっているのかね、開発顧問？」

「はい！この基本設計データを下に開発すれば正味二ヶ月で第三世代型の実用機の開発、製造に漕ぎ付けられる、ハッキリとそういえるデータです」

「では、第三世代に関しては君に一任するとしよう」

「はい！！」

「次に、これに添付される形で送られた第四世代型はどうか？」

「お答えします、第四世代型に関しては……　まずは第三世代型を形にしてからの方が宜しいかと、理由としては一足飛びに第四世代型を開発したとしても、どのような不具合が起こるのか、それが見当も付かないからです」

「そう、か……」

社長の声に応えた開発顧問とは逆の席に座っていた、男性が社長の言葉に答えていた。

だが、ここで、それまで会議を見守っていた一人の男性が口を開く。

「皆さんはずいぶんとお優しいことですねぇ」

「どういう意味だね？」

突然口を開いたのは、この会議に参加していたデュノア社と懇意にしている会社の社長でもある男性で、デュノア社社長とは個人的にも親しい間柄の男性であった。

「私達は、あの娘に正体不明のＩＳと知識を保有する男、五反田弾を篭絡して子供を身篭れ、という指令を出していたはずですが、それはどうなったのです？」

「それについては本人からの報告を受けておる、未だに進行中との報告が先程もあがっていたよ」

卑らしい笑みを浮かべる男性に答えるデュノア社の社長だが、彼の返答を聞いた男性の顔には、余計に卑らしい表情が浮かんでいた。

「篭絡がうまくいっていないのは、彼女が処女、だからではないですか？」

「恐らくはそれもあるだろうな」

「だったら簡単でしょうに、彼女が少女ではなく、女になれば事は簡単に済むはずですよ」

「そうはいうが……」

「では、明日にでも私が日本に行き、彼女を女へと変貌させましょうか、男の味を知れば計画も旨く行くはずですよ」

「全く、本当に貴公と言う奴は……」

そういって立ち上がり会議場から立ち去る男性、それをデュノア社社長は苦笑いとも呆れともいえない、微妙な表情で見送っていた。

舌なめずりをして、ただでさえ卑らしい笑みで歪んだ顔をより卑らしく歪めた男は、突然、足に何かが絡まったことで転倒する。

「ぶっは！」

「なにをしているのだね？こ、これは！？」

「な、なんだ！？」

男性が転んだのを全員が呆れたように見ていたが、自分達も気が付いた。

椅子を中心として、亀甲縛りの形で拘束されていることに。

特にデュノア社長と親しくし、シャルロットを○○プすると言った男は亀甲縛りの上に、荒縄で両足も徹底的に拘束されていた。

「な、なんだ！？　や、やめろぉ！」

その言葉を残して彼は、役員会議室の扉の向こう側へと何者かの手により引き摺られて、消えてしまった。

そして、その後からは。

『あ～ら、弾ちゃんの言った通り、可愛い子じゃない』

『ホン～ト、アタシ達好みじゃないの！』

「な、なんだお前ら！や、やめ！！」

『ほ～ら、抵抗しないの！！』

『そうそう、気持ちよ～くさせて上げるわん、特に、う・し・ろ・の穴をね！☆』

「い、いいい、いやだ、や、やめろ、やめてください！！！アッ――――――――――――――！！！！！」

『オーホホホホホホホホ！！！』

『さあ！もっと良い声でお鳴きなさい！！』

『アアァン！暴れちゃだめぇよぉ！』

日本語で聞こえる野太いオネエ言葉に、男として本能的に後ろの穴を押さえてしまう悲鳴に加えて聞こえてくる高笑い。

この向こうにおぞましく得体の知れないナニカが、ナニカがいる……これを感じた彼らの喉は渇ききり、ゴクリと唾を飲み込んだ瞬間に聞こえてくる笛の音。

作者コメ：没シーンそのニですが、これが没になったのは、実は私自身の記憶から続きのシーンが抜け落ちたと言うか、実はこれを書いた記憶が無いんですよね（核爆）多分、酔っ払った時に書いたと思うのですが、当時のサブタイと共に本編での封印が決定した話です、

何しろサブタイが【第１８話　デュノア社長と変態とモ～〇～と】というモノだったので、一瞬（　д　）。　。となったのは良い思い出です（苦笑）なので没になった次第です、が、無理にでも思い出して、書けばよかったかな、とか考えております。

んで、この下からは、後日談と言うか、そんな感じの話を……
因みに、最初は箒ちゃんサイドでっす。

あれから、弾の奴が暴走して千冬さんに止められて、シャルルがシャルロットだったとか色々あった日から一週間が過ぎた。
私とセシリアに鈴は、あの女【ラウラ・ボーデヴィッヒ】に放課後の屋上に呼び出されていた。

「で、どういったご用件ですの？」

「……　早急に済ませて欲しいのだが？」

私達の目の前にいるのは、いつもの通りの軍人然とした様子を浮かべる彼女である。

ここに着て早十分近くが過ぎていたことで、私とセシリアの声に棘が混じることも致し方ないとは思う。

それだけではなく、あのようなことをした彼女に対して私達全員が思う所もある。

ここで、ようやく彼女は口を開いた。

「先に教官の妹君には謝罪した、だが、貴君らに謝罪していなかったから、今、謝罪させていただく」

「あの時のことか……」

「ふぅん、どうせ弾が手回ししたんでしょ？」

「何も言い訳はしない、あれは完全なる私の落ち度であり、愚かすぎる行いだったのだから」

「では、どういった形で誠意をお見せすると言いますの？」

「それを証明できるのは……　これしかない！」

彼女が言ってきた言葉に全員が棘のある言葉、それも、より棘のある言葉で問いかける。

これを聞いた彼女は、何かを決心した表情をした瞬間。

「申し訳！ありませんでしたぁ！！！」

と言って、見事な【ジャンピング土下座】を披露した。

「「「……」」」

思わず三人がかりで、徹底的にボコってしまったのだが、これは本当に思わずだったと言い分けさせてもらいたい。

何しろ本気で謝っている様に見えなかったんだし。

「ど、どうしてだ!?　日本では致命的直前な相手には、この土下座が大変有効だ!と部下から聞いていたのに!?」

「そんな間違えた知識は今すぐ捨てろぉ!!!」

「んな謝罪の方法なんて、これからも存在する訳ないでしょぉがぁ!!!」

「貴女はこの国の文化を、何か勘違いしてませんこと!?」

喧々囂々、私達の会話はそう表現できるものだったのだが、一夏には普通に土下座して謝罪した、と聞いたものだから、まあ、私は許したのだが……　本当にコイツに間違った知識を植え付けたのはどういう部下なんだろうか?

そう思わずにはいられない状況だった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～番外　ここで私が登場ですね！！あのゴスロリ系魔法少女にしてくださいと言わんばかりのちっぱいを見事な魔法少女にして見せますよー！！～

その日、ラウラはまだ夜が明けない内に弾の部屋へと来ていた。
それも弾が、この日にラウラを呼び出していたからである。

彼女は鍵が空いていた部屋の扉から中に入ると、ベッドの上で少々キモイ寝顔で寝ている弾を視界に捉える。

『もしも、お前さんが、その日に俺の部屋には言った時に俺が寝ていたら……』

『ね、寝ていたら？』

『まあ、優しくかつ、柔らかく叩き起こせ』

『了解！』

まあ、数日前の回想だが、回想のとおりに爆睡している弾をラウラは、注文通りに優しくかつ、柔らかく叩き起こす為に近づいていく。

「う、うーむ……　お、お巡りさん、ご、誤解、誤解なんです……」

「……　お巡りさん？　確か……　この国での警察を表す際の俗称みたいなものだが……　なんで寝言に？」

「お、俺はようじょを誘拐しようとなん」

「まあ、とりあえずは起さんとな、起きろ、起きてくれ」

彼女は一瞬疑問に感じた様子だが、気にしないことにしたらしい。すぐに弾を起こそうと、馬乗りになり、ペチペチと頬を叩いて起こそうとしていた。

それから数秒間叩いた時に、変化が起こると、弾の目が僅かに開く。

「お巡りさんに職質された夢から、素敵な女王様にムチで叩かれた夢を見たお！」

「それは、一体どういう夢だ？」

「あ、ラウラか、こりゃ失敬」

寝惚けているのか、彼の口から出てきた言葉はとんでもないものであるのだが、残念なことにラウラは半分も意味を理解していなかった。

この場に鈴か一夏、もしくは千冬の誰かさえいれば、彼を引っ叩いて夢のことに関して問い詰めたりするのだろう。

だが悲しいかな、ここにツッコミに回れる人材がいなかったことで、ラウラは素直に呆れてしまったので、微妙な雰囲気になっていた。

この雰囲気を払拭するように、弾は一度咳払いをすると、ラウラへと向き直る。

「ゴホン、それでは今日お前さんを呼び出した理由だが……　一夏達に謝って許してもらえたのか？」

「ああ……　許してもらえたが……」

「自分で納得できてないと」

「そうだ、私のやったことは謝罪した所で、到底許されるものではない、特に教官の妹君にしてしまったことは……」

「まあ、そうだろうよ」

弾の問い掛けにラウラは納得が行かないという様子でいた。
彼女の独白と言える言葉を聞いた弾は、直球といえる言葉を言い放ち、ラウラは自身の顔を俯かせる。

「お前さんは目に見える罰が欲しいわけだ」

「ああ、なにか罰を与えて欲しいと教官と妹君にも言ったのだが」

「あの二人は優しいからな、一夏はどうせ二つ返事くらいで許したんだろう？」

「まあな、教官は土下座していた私の頭をグリグリ踏んで、これくらいで許してやる、と言っていた」

「……（やっぱ女王様だわ……　千冬さん）」

それは容易に弾の頭の中に浮かんでいた。

土下座して謝るラウラの頭を踏んでグリグリしている彼女の姿を。

だが、弾の想像の中では何故か千冬がボンテージ衣装になっているのはご愛嬌と言う奴だろう。

「んじゃあ、俺の方からお前さんに罰と言えるものを与えるぞ、俺はまだ許しちゃいないし」

「ああ……　なるべくきついので頼む」

「二言は無いな？」

「無論だ！でないと私の気がすまない！！」

「ニヤリ」

ラウラの強い決意が篭った瞳を見た弾は、見たものに嫌な予感を抱かせる笑みを一瞬浮かべると、目がたくさんある異空間を開いて、そこからファンシーな杖を取り出す。

だが、彼女がこのような超常現象と言うべきものを見ても反応無しだったので、弾は疑問符を浮かべてラウラを見ていた。

「……　お前さん、これを見ての驚かんの？」

「いや、前に似たものを使う女と戦ったことがあるだけだ」

「どんな奴？」

「日傘を差して、紫色のドレスを着た胡散臭い雰囲気を持った金髪の女だったな」

「……（スキマババアじゃん！？　いるのかよこの世界に！？）」

「どうかしたのか？」

「い、いや別に」

驚いた様子の無いラウラに問いかけるのだが、彼女から返ってきたのは弾にとっては驚くべき返答と言えるものだったようだ。

驚愕の表情を浮かべた彼の様子に疑問を持った彼女の問いに、彼はちょっと冷や汗をかいて誤魔化すと、彼女は気にしないことにしたようである。

「それで、罰とは一体なんなのだ？」

「それは、この杖を持って一週間過ごしてもらうことだ！」

「これを持って、か？」

「おう」

弾の言葉を聞いていくうちにラウラの表情は、ちょっと不満げになっていく。

まあ傍から見たら、ただの杖を持って過ごせと言われたようなものであるのだから、不満に感じるのは当たり前の話だった。

だが、弾の表情からは、果たして過ごせるかな？　見たいな色が浮かんでいるので、彼女はおもむろに杖を掴んだ瞬間。

「な、なんだ！！これは！？」

眩い光が部屋を包み込み、ラウラは思わず瞳を閉じていた。

『やっと私の出番あーんど！私の時代が来ましたよ！！さあラウラさん！私と共に魔法少女の道を邁進していきましょう！！！』

なんていう、壮絶に嫌な予感をかき立たせてくれる声を耳にしながら。

「プリズム完了♪魔法少女マジカルラウラただいま参上！！さあ、これからが私達の時代ですよー！！！」

「な、なんだこれは！？」

「何って？　これが罰だけど？」

俺の目の前にはヒラヒラノ魔法少女が着る様な服に変わったラウラがいる。

だが、どうしてだろうか？　ラウラの表情からは台詞に対する恥ずかしさみたいなのはあるんだが、服に対しての恥かしさっぽいのは存在していない気がするんだよなぁ。

「なあ、ラウラ」

「なんだ？」

「服は恥ずかしくないのか？」

「ああ、その事か……」

俺の問い掛けに何処か合点が行ったという様子を見せるラウラ、どういうことだろうか、原作のラウラはこんな服を着ること自体稀というか、絶対に着ることをよしとしない性格だったはず。

それなのに、特に服装に関しては動じていない。

そんな俺の疑問を解消するトンでもない事情が彼女の口から、語られるのであった。

「言っていなかったか、私の普段着はこんな感じの服だ」

「な、なん、だ、と……？」

彼女は懐から（その際にちっπの谷間もどきがチラリと見えたが、やはり最低でもシャルロットクラスはないとなぁ）携帯を取り出して操作すると、一つの写真を見せるのだった。

それは、黒いゴシックロリータドレスに身を包んだラウラの姿だ

ったのだから、イメージとしては【俺の妹がこんなにかわいいわけがない！】の黒猫の服装をイメージしてもらえたら十分だ。
　というか、こっちにもあったんだよな、俺の妹がこんなにかわいいわけがない！って。
　いやいやいやいや、マテマテ、これが普段着だったとすると。

「お前さん、さあ」
「なんだ？」
「もしかしてだが、日本に着てこの服装で出掛けたりしたか？」
「来日した時はこの服装だったが？」
「……！？」

　お、俺の予想を斜め上にぶち抜かれた！！ま、まさかこの服装で来日していただと！？　こいつにこんな事を仕込んだのは誰なんだ？
　それからラウラは無い胸を張って、ちょっと自慢そうにこうなった経緯を語るのであった。

「まあ、上層部からは私が軍属だとはバレないように、との命令が

来たからな、それで副長であるクラリッサに頼んでこの服を製作してもらったのだ」

「頼んだときの理由を聞こうか？」

「うむ、私は情けないことに、こういうことは何もわからないのでな、彼女に聞けば一発だろうと考えたんだ、そうしたらすぐにこれを持ってきてくれたよ、それまでにも何度かこういう服を着たことがあったからな、別に不愉快ではなかったし」

「……」

「だが、久しぶりに会った教官が変な顔をしていたのはどうしてだろうか？」

な、なんてコメントしたら良いかわからねぇ！特にクラリッサってそういうキャラだったか！？　い、いかん思い出せない事がここまで響いてくるとは！！

でも、これを考えるに部隊内での対人関係は円満だった可能性があるし、余計にあんなことをした理由が不可解になったな、まさか、まさかだが、天災かスキマにナニカサレテイタヨウダな状態になっていたのか？

だけど、千冬さんの気持ちは分かると言うか当然だろう、再会した教え子がそんな格好をしていたらコメントに困る、俺だったら正気を疑いそうだ。

まあ、それはほっとこう、とりあえずは再び微妙になった空気を

戻さんと。

「まあ、とりあえずそれは置いておいて、お前さんにはこれからその格好と、その杖によって発せられる最初みたいな台詞連発で過ごしてもらうぞ」

「構わないが、こんなにぬるい罰でよいのか？」

「……　普通ならば、これ以上ないくらいの黒歴史になる出来事なんだがな……」

このラウラは何かが致命的にずれていて、とっくに引き返せない位置に来ているのかもしれない。

あの魔法少女的な台詞を発すると言っても、ぬるい、ぬるいと言われたのだ……　世界ってやつは広いなぁ……

そう教えられたよ。

『こ、これは、これは強敵ですが！燃えます！萌えますよー！！』

「ん？　喋るのか、この杖？」

「また、驚かないのな……　お前」

「ＩＳだって時折言葉に近いことを言ってくるのだから、不自然な所などないだろう、ＩＳの技術を応用していれば」

「……　ソウデスネ」

もう、もう疲れたよ……　パトラ〇〇ュ……　なんて思いながら、ベッドの中に入って二度寝したい俺は部屋を出て行くラウラを見送る。

無論。

「五反田ぁ！！！貴様ラウラになにをしたぁ！！！」

「いやぁ！！思い出させないで！！私の黒歴史を！！」

千冬さんに襲撃受けた上に、教室に行けばマジ泣きしている一夏に胸倉掴れて、ブンブンシェイクされたのはいうまでもない。

もう、語りたくない……　ただ、クラスメイト達はラウラを受け入れて、逆に愛玩動物チックな扱いになったとだけは、言っておこう。

あ、ちゃんと期限が来たらカレイドは回収したよ、どうやら意気投合していたらしいラウラとカレイドに、ブーブーとブーイングを喰らったがな。

……　全力で空回りをした後の虚脱感って、きっとこんな感じなんだろうなぁ。

～番外　没シーンとか番外とか～（後書き）

番外編は指が暴走してしまった……　ゴスロリラウラはすぐに登場予定ｗｗｗ

第２１話　やはり俺の入浴外泊は完全に取り潰すつもりらしい……　オノレまぁ

あの試合が終わりとっくに太陽も沈んでいった時間、俺とシャルロットは食堂にて夕食をとっていた。
食堂備え付けのテレビからは、今回の試合が中止になったこととか、一回戦だけはデータ収集を兼ねて行う、とか言っている。

「ふ～む、やっぱ一回戦は行うみたいだな」

「うん、そうしないと一年生のデータとかの把握が困難になると思うしね、あ、弾、一味取って」

「ほい」

「ありがと」

ついさっきまでは俺とシャルロットは、あんな出来事があった上に当事者でもあったから、教師陣の皆様から事情聴取を受けていたのさ。
特に俺が使った新武装とかでちょいと煩かったんだが、のらりくらりとかわしていたんだが、千冬さんの鶴の一声で何とか解放された。
やっぱグングニールを使ったのは軽率だったかね。

解放されたと思ったら食堂が閉まるギリギリの時間だったからな、ダッシュで食堂に入り、何か話を聞きたそうにしていた女子一同を晩飯食わせて！とあしらって食べている、と言った具合だった。

因みに今日は俺は牛丼特盛りで、シャルロットは月見うどんな。

だが、やっぱ美味い！！お汁が丼の底の方にまでじっくりと染み込んでいて！！やっぱＩＳ学園の厨房を預かる人たちの腕は凄いぜい！

女子ばっかだからな、最初はこのメニュー無かったけど希望と言うかリクエストを出したら通ったんだよな、やっぱ世界で唯一人の男性ＩＳ操縦者だからだろうかね？

「ふぃ～食った食った……　牛丼もたまには良いよなぁ」

「クスクス……　弾、ホッペにおべんと付いてるよ」

「ん？　お、こいつか、サンキュー」

「どう致しまして」

のんびりと会話をしている俺とシャルロットだが、さっきから気になっていることがあった。

周囲にいる女子たちだ、俺とシャルロットが食い終わるのを今か今かとソワソワしていたんだが、テレビがあのお知らせをしたと同時にお葬式とも言うべき沈んだ雰囲気に変わったのだ。

中には涙を流して泣いている娘もいるんだが、はて？
シャルロットも俺と同じ様な感じだから、どうしてこうなったかは知らないらしい。

「……　優勝……　ちゃんすがきえ……」

「……　交際、無効……」

『うわあああぁぁぁぁあぁぁん！！！』

そう言ってダバー！と目の幅一杯の涙を流して女子達は、猛烈な勢いで走り去っていく。

「なんだったんだ？　あれ」

「さ、さあ？」

こんな光景を見た俺とシャルロットは呆気に取られていたのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２１話　やはり俺の入浴外泊は完全に取り潰すつもりらしい…　オノレまやタン！いっそ調教……　エ、エット、ミナサンナニカゴ……～

怒涛の勢いで女子達が去っていくのをボーっと見ていた俺たちだが、そこに取り残されている女子が一人いた。

箒である。

「箒じゃんか、どうかしたのか？」

「う……　だ、だん……」

「そういえば、お前さんと先月に約束していたあれだけど、来月の中頃くらいなら付き合っても良いぞ？」

「ほ、本当か！？」

「おう」

俺の言葉を聞いて嬉しそうな様子を見せる箒と、不満と言うか不機嫌な様子になったシャルロット、シャルロットはと言えば今は男の姿だからか、自重しようと言う様子を見せているのだが、箒の嬉しそうな表情と言えば、凄いものであった。

何しろ瞳を大きくして、キラキラと目に星が入っているのだから……　この娘って、こんな顔をする女の子だったっけ？

なんて考えながらも、俺は気を取り直して答えていくのだった。

「お前さんとも、どっかに出掛けたりしておこうと考えてたしな、ちょうど良かったよ」

「そうか、そうかそうか！！絶対だぞ！」

「ああ、詳しい日時とかはまた連絡するからな」

「ああ！では、またな！」

そういって凄く嬉しそうに食堂を去っていく箒を見送った後、俺は再び着席するのだが、シャルロットの機嫌がすこぶる悪くなっているのに気が付いた。

いつの間にか片付けられた俺の食器の代わりとばかりに、俺の前にドスンと激しい音と共にお茶が置かれる。

「え、ええと、シャルル？」

「弾って、女の子の目の前で他の女の子と出掛ける約束なんてする人なんだね、最低だよ」

「いや、ちょ、あの……　なんて言えば良いのかさえ、分らないんですが……」

「ふん！」

俺が箒と出掛ける約束をしてからと言うもの、かなり機嫌が悪くなりプイッ、とそっぽを向くシャルロットさん、どうしてだろうか？

なんて考えながらも、この仕草ってやばくね？　なんて考えながらも周囲を窺えば既に食事が終わり、閉まる時間に近いのが幸いしていたんだろう、生徒の姿はほとんど見えず。

その生徒達もギリギリでやって来たためか、俺たちを気にする余裕は無い様子で食事をかき込んでいるだけだった。
そのことに俺はふう、と、少々安堵の溜息を漏らした時、食堂内に新たな人間が入って来た。

「五反田くんにデュノアくん！まだここにいてくれたんですね、先程はお疲れ様です」

「いやいや、山田先生もずっと書記担当だったから、お疲れじゃないですかね？」

「いえいえ、私はああいったことが得意なんですので、特に疲れたりとかしないんです。なにせ先生ですから」

そういって豊満な果実を強調するように胸を張る山田先生、フム、やはり眼福っす！！
などと考えていた俺の脇腹に突然鋭い痛みが走る。

「……　ッ！」

「弾の、スケベ……！」

「ご、誤解とはいえませんが、抓るのは勘弁……」

「ふん」

隣に座っているシャルロットが俺の脇腹を抓ったらしい。
悲鳴を上げれば山田先生にばれるから悲鳴を上げれない状況下、俺は必死で我慢していたら、ボソッとシャルロットが呟いてくる。
俺はそんなシャルロットに同じくらいの小さな声で少々抗議したんだが、返って来たのは拗ねたような一声だけですた。

俺たちの会話はあまりにも小さい声だったから、山田先生には聞こえなかったんだろう、不思議そうな顔をして俺たちを見ている。

「？　どうかしたんですか？　二人とも」

「い、いや、なんでもないでっす」

「そうですか、それよりも！二人に朗報ですよ！！」

ニッコリと微笑を浮かべてグッとガッツポーズを取った山田先生、たわわな果実が更に強調されるポーズになった。
うん、ここまで来たら狙ってるんじゃないかとか思えるんだが、実際には狙ってないんだよね、この人は、天然だし。

まあ、そんなことよりも、朗報ってのは一体何かね……　大体想

像は付いてしまうんだがな。

「遂に大浴場の使用が男子も可能になったんですよ！」

「……　そうっすか……」

「どうして嬉しそうじゃないの？　弾」

いやね、大浴場の使用が出来るようになったこと自体は嬉しいと言うか、別にどっちでも良かった。

俺としては、あの月に一、二回程度だったけど、癒しがなくなった事が残念なのだよ。

「それはですね、五反田くんは以前までは外出して公共の浴場で、入浴していたんですけど」

「この学園のことを考えたら、それを選択するのは、まあ、分りますけど」

「飲酒なんていうことをしたので、それは全て取り消しとなりました」

「……　弾、なにやってるんだよ……」

呆れ果てたように俺を見ているシャルロット、だけど！しゃあないやん！前世では俺酒飲んでたのに飲めなくなってストレスたまってたから、つい出来心やったんや！

反省？　なにそれ食えんの？

「……　風呂上りの火照った体に冷たいビールが流れていく喉越し、舌の上を転がる快感！それに加えてついもらしてしまう大きな息！！！貴女にも分るはずですよ！山田先生！？」

「た、確かにそれは……　って違います！！五反田くんにはまだ早いって事なんですよ！？」

「いや、なに開き直ってるの！？　反省しようよ！！」

「反省？　なにそれ食えんの？」

「「……」」

あ、やっべ言っちゃった。

二人が怒ったらしいオーラが漂っている。

山田先生は形の良い眉をぴくぴくとさせて引き攣った笑みを浮かべて、シャルロットも似た様な笑みを浮かべているのは明白だった。

そんでもって場の雰囲気を変えるためであろう、山田先生は咳払いと共に、主に俺を見ながら口を開いていくのだった。

「コホンコホン！そういうわけでですね！本日、二人はこれから入浴してください！」

「うぃっす、分りました、ですけど銭湯外泊は完全に諦めますんで、部屋に風呂を付けてもらえたら非常にありがたいんですが……」

「……　そちらの方が良いかもしれませんね、織斑先生に聞いておきます」

「お願いしやーす」

そう言った後、俺とシャルロットは風呂に入る準備をする為に部屋に戻るのだった。

山田先生の致命的と呼べる勘違いと言うか、知らせていないからこそ起こった喜劇が起ころうとは知るよしも無く。

それから部屋に戻った俺たちは、大浴場の前で鍵をもって待ってると言った山田先生を待たせないために、いそいそと準備をしていたのだが、ここで、ふと、気が付いた。

「そういえばシャルロット」

「なに？」

「山田先生は俺達が男って思ってるんだよな？」

「そうだよね、織斑先生には気付かれてたけど、山田先生は知らないはずだよ」

「そうか……」

「どうかしたの？」

シャルロットは気が付いていないらしい、こいつってやることにそつがないけど、どうしてこう、天然と言うか、ちょっと抜けた面があるのだろうか。

今の言葉を聞けばと言うか、山田先生の様子を見れば分りそうな

ものなんだが。

「多分というか確実にだが、俺とお前さん一緒に風呂にいれらるぞ」

「ふえぇっ！！！？」

「山田先生の口ぶりを考えたら、間違いなくそう考えているぞ」

「えう、あう、あうあうあうぅ」

「……　大丈夫か？」

「だ、だいじょうびゅ！！らいびょうぶだよ！！」

「……」

俺の指摘によってようやく気が付いたらしい、顔を一瞬で真っ赤にさせて、風呂に入ったわけでもないのに彼女の顔からは蒸気が噴出していた。

わけの分らない奇声みたいな言葉を発し始めたので、心配になったのだが、今度は噛み噛みな台詞が返って来る。

流石にちょっと心配になったのでじっと、見ていたら、今度は別の意味で恥ずかしくなったらしい。

彼女は頭を横にブンブンと勢いよく振り、俺を真正面から見ていた。

「と、とりあえず、大浴場に行こうよ」

「そうするかね、ここで下手に具合が悪い、とか言って誤魔化そうとしても部屋に突入してきそうだ」

「あ、ありえそうだよ」

うん、今の山田先生は具合が悪いとか言ってどっちかが来ても、部屋に強襲を掛けそうだな。

何時になく強引な感じがしていたし。

まあ、そんなこんなで俺たちは大浴場へと向かうのだった。

「で、大浴場って、どっち？」

「え！？　ちょ、弾、知らないの！？」

「おう、大浴場に興味なかったし」

「それ、問題発言だよ！！それに、胸を張って言って良いことじゃないよ！」

なんていうやり取りがあったんだが、割愛する。
偶然のほほんさんを見つけて案内してもらったから、問題は無かったけどな。

俺たちは、それから少ししして大浴場にたどり着くと、扉の前で山先生がぽへ～とした様子で待っていた。

「あ、来ましたね二人とも！一番風呂ですよ」

「期待できますな、そりゃ」

「はい！期待しちゃってください！では、ごゆっくりどうぞ～」

俺たちに気が付いた山田先生は、やたらとハイテンションで扉を開けると、俺は脱衣所に入りながらそう答えていた。
シャルロットも俺の隣を歩きながら入って行き、見送りの言葉と同時に、閉められる扉。

正直に言って、なんか別の意味の扉にも見えた、具体的には地獄への扉と言うか、なんと言うか、近い未来を表しているような気がしてならなかった。

「シャルロットさんや」

「ふひゃぃ!?」

脱衣所の先にある大浴場を、先程までとは比較にならないほどに顔を赤くしたシャルロットは、俺の呼びかけに奇声みたいな声を上げて答えてくる。
……な～んか、別のことを期待しているような、それでいて想像している感じじゃないかね？　この娘は。

まあ、良いや。

「五分だ」

「へ、へぅ?」

「俺は五分で入浴を済ませるから、その後にゆっくりと入ると良いぞ、そうすれば二人とも入浴した、という事実はあるからな」

「え、えっと、それじゃあ、弾が」

「別に構わん、男の入浴なんぞ鴉の行水だ、体洗って一度湯船に入れば事足りる」

最初こそ俺は入らんで、シャルロットだけを入浴させよう、なんて考えたんだが、それだと外に出たときの様子で一発でバレるからな。

だから、五分間だけの入浴としておこうかね。

そんで俺は何かを言っているシャルロットから離れると、着替えるのだった。

正直、どうしてシャルロットから目を離したと、言いたくなることだけどな。

俺の姿を見送りながら、何かを決意した表情を浮かべる彼女を見逃したんだし。

キッチリと一分ずつ使い、髪と体を洗った俺は湯船にゆったりと浸かっていた。

「ふぃ～生き返るぅ～……」

恐らく俺の表情は第三者視点から見たら、蕩け切っている事だろう。

んな表情なんぞ、キモイから見たくもないがな！

だが、ここで状況が変化した。

脱衣所の扉が開く音が聞こえたからだ。

「シャルロット、何やってんだ？」

「あ、う、えっとね、お、お邪魔しようと思って……」

「ふむ……　やはり均整のとれたボディラインですなぁ……」

「あ、あまり見ないで！」

俺の正面からシャルロットが近付いてきたので、見やれば一糸纏わぬ彼女がいた。
流石にタオルによって体は隠されていたのだが、彼女の均整の取れた見事な体つきを隠すには不十分であった。
それを思わずガン見してしまったんだが、彼女の方から咎める言葉が聞こえたので、残念に感じつつも視線を外す。

「う、うわぁ……！」

「どした？」

だが、突然彼女から唾を大きく飲み込む音が聞こえる。
俺は流石に疑問に感じたので、問いかけたのだが、彼女からの返事が返ってこない。
まあ、すぐに答えは分った。

「おお、そうだった、ゴメンよ、今隠すから」

「ぼ、ぼぼ、僕！体を洗ってくるね！」

ここで位置関係を説明しよう、俺、脱衣所の扉に体の前面を向けている、シャルロット俺の真正面からやってくる。
後は、分るな！（キリッ！

まあ、シャルロットは見ちゃったわけだ、俺のアレをな。

俺が隠したことで正気に返ったらしい彼女は、慌てた様子で体を洗うスペースに行くと、湯気は出ていないし、冷たそうだから多分冷水のシャワーを浴びているんだろうな。

「な、なにアレ？　おっきすぎるよ……　メガサイズだよ……　ううん、アナコンダだよ……」

「……　刺激が、強かったか？」

「……　入らない、よぅ、あんなおっきいの……」

小声で何かをぼそぼそと言っているシャルロット、流石にこんな感じになった彼女を放置して上がる訳にも行かないからな。
視線は向けずに小声で俺は、呟いていた。

それから数分以上の間彼女はシャワーを浴びて居たんだが、それから思い出したように体を洗っていた。

それから体を洗い終わったシャルロットの注文で、俺は湯船の中央部に移動すると、俺と背中合わせになるように、彼女が座るのが確認できる。

俺に背中を預けるように彼女は体重を僅かにかけてくる。

まるで恋人が甘えるような、娘が父親に甘えるようなそれを俺は、微笑ましい気持ちを感じているのだった。

それから少しの間だけ俺たちの間には、会話が無かったが、それは気まずい沈黙ではなく互いを理解しているからこその、心地よい沈黙ともなっていた。

「あ、あのね、弾」

「どした？」

「お礼を言いたいの」
「何に対してだ？」
「くすっ、決まってるよ」

彼女の言葉に俺は少々意地が悪い問い掛けだったかもしれないことを言ったが、彼女はそれを不快に感じることもなく、愛おしい恋人に向けるような小さな笑い声を少しだけ上げる。

「僕にしてくれた、今までのこと、だよ」
「それについてか」
「うん、僕をここに留めるようにしてくれた本国でのことや、アルテリオンの事、正直に言ってどうやって恩返しをすれば良いのか分らない」
「恩返しなんざする必要はないさ、俺が勝手にやったことだ」
「ずるいな、そういう言葉って」

苦笑いをしているのだろう。
俺が言った言葉を聞いた彼女はちょっとだけ、力ない声でそういい

っていた。

だけど、これは偽らざる俺の本心でもあったから、俺も譲るつもりは無いし、譲らせるつもりも無い。

「でも、そんな弾だから僕は、ね」

「ん？」

「だけど、ここではフェアじゃないし、これ以上は言わないよ」

「そうか」

「そうなの……　みんなとフェアになって、それから弾のこともキチンとしてから、この事については言うね」

「分ったよ」

「うん」

この状況で、尚且つ、彼女が言うだろうここから先の言葉は推測できた。

もしも彼女が言うのだったら、俺は止めるつもりでいたんだが、彼女が言うのを自分から止めただけではなく、何処か強い決意を漲らせた言葉を言っていた。

それに俺は短く返事を返すと、彼女が頷くのが気配で分った。

まあ、それから後は何事もなく入浴を済ませて部屋に戻ったんだが、シャルロットが視線を合わせてくれなかったのが、ちょいと気になる所だ。

一瞬の隙を付いて目を合わせたら、これ以上ない位に顔を真っ赤にしていたがな。

そんで夜は更けていくのだった。

そんで次の日、俺は教室に佐助に身代わりを（どうやったのかは、まあ身代わり人形を操縦させているようなもんだ）させて、ＩＳ学園からの逃亡を図ろうとしていた。

なぜなら、思い出したからだ、今日からシャルロットが【女】として登校し、昨日混浴したことがバレることをな！！！

原作一夏はギリギリで命があったんだが、よく考えてみて欲しい、一夏はＴＳしていて、あの性格だ！だから俺はまず命はないという

のは明白だったのだよ。
だから、今俺は某蛇の如く正門目指してスニーキングを行っているのだった。

「もう少しで正門、ここを越えれば」

「どうなるのかな？」

あと十メートルほどで正門と言う場所で、俺の独り言に応える声が聞こえた。
滅多な事では聞き覚えのないそれ、某魔法少女で魔王とか呼ばれていたそれ、否、これから二度と聞き覚えのある声になりたくないもの、どうして奴がここに？　なんて考えながら俺は、ブリキ細工の人形のごとき動きで後ろを振り向いた。

「げぇ！偽乳天災系痛い女ぁ！！」

「久しぶりだね～だっくん！束さん我慢できなくて来ちゃった！！」

「来なくて良いと言うか、来るんじゃねぇよ！！」

「ひどーいぃ！！束さんを邪魔者扱いしてるぅ！！」

こ、こんな所でこいつと出会うとは！というか、校舎内から禍々しい気配を感じルルルルルルルル！！！！

ヤバイ早く逃げないと！俺はそう考えて、天災の戯言に付き合う気はもうないので、彼女の横を通り抜けようとした瞬間。

「ん、チュ☆！」

「ムグッ！」

唇を奪われた。

な、何を言っているのか分らないが、何をされて唇を奪う体制に持ち込まれたのも分らなかった！！

しかも、この女ぁ！舌まで入れてやがる！！

これからたっぷり数分間、俺の口内を蹂躙している天災、何故逃げないのかって？

人体を効率よく拘束できる弱点部位を抑えられているから、出来るわけないだろ！！横目では玄関から出てきた一夏達が、呆然、と見ているのが分る。

あ、おれつんだ。

と思うのだった。

「ぷっは☆ごちそうサマでした！！それじゃあね！だっくーん！あ、因みに束さんはファーストキスだよー！！」

「……」

ンなことを抜かしてニンジン型ミサイルに乗り込んで去っていく天災、だが、俺はそれ以上にショックだった。

目のハイライトが消えて俺に迫ってくる一夏に鈴とセシリア、そんでもって怒りの形相を浮かべたシャルロットと箒も気にならない。何故か白無垢を着ているラウラもだ。

「ちょ、弾！？　どうしたの！！」

「だ、弾！？」

「弾さん！！」

「何で倒れるの！？」

「どうしたというのだ！？」

なんていう彼女達の騒ぎ声をＢＧＭに俺は死人の形相で、その場に倒れ伏す。

「って、弾の口から魂が抜けていこうとしてるよ！？」

「いけませんわ！か、可愛くない髭面の天使がお迎えに来てますわ！？」

「ちょ、ちょっと、その人を連れてかないでー！！！」

「戻りなさいよ！！弾！！」

「成仏への道が開いているぞ！？」

「衛生兵ー！！」

そんでもって前世で死んだときと同じ様な光と共に俺は、口から魂が抜けていこうとするのだが、鈴に掴れてぐいぐいと押し戻されて、セシリアがどうやらお迎えの天使を蹴散らそうとしている。

そんなバックの騒ぎを最後に、俺は意識を閉じるのだった。

あ、死んだわけじゃないよ？　気絶だよ。

おまけ

ここはＩＳ学園、オトモアイルーのスネークシリーズに身を包んだ小太郎は、コンパクトサイズのビデオカメラを片手にスニーキング撮影ミッションを敢行していた。

……　渋い声で鳴きそうな雰囲気がある。

昨日までは頼れる相方がいたが、今日は主人からの特別任務が与えられたのでいない状況下、彼は単独にて任務を遂行するための戦士となっていた。

「ニャ（目標発見）」

そんな彼の前には廊下を歩く一人の少女、目標である少女を表す水色の髪と赤い瞳、内側に髪が刎ねているのが少々気になるが、目標に違いないと彼は接近していく。

無論のこと、カメラは録画モードである。

「……？」

と、ここで視線を感じたのだろうか、目標である少女がこちらを振り向く。

彼は慌てることもなく廊下の柱の陰に隠れ、壁に張り付いてやり過ごす。

気のせいだったか、と少女は歩き出せば、彼もそれについていくのだが、はて？　と疑問もよぎる。

目標って、メガネしてたっけ？　と。

だが、ここで春の終わりの風の悪戯か、開いている窓から少々強めの風が彼女のスカートをなびかせる。

「キャッ！」

「ニャッ！（ゲット超ローアングル！）」

ニーソかどうかは分らないが、とにかく彼女の黒い素材に包まれたしなやかな足と、そこから上の楽園をカメラに収めて主人に臨時ボーナスをもらうために、彼は飛び出す。

スライディングしながら撮影し、後のことを考えないと言うことがどういう自体を招くのか、それを彼は思い知ることになる。

ガツン！と派手な音を立てて廊下の壁にぶつかったからだ、流石にこの音には彼女も気が付いたらしく、勢い良く振り向く。

「……ね、猫さん……？」

途中から疑問系になるのは致し方ない、と言った所だろう。

珍妙な格好をした猫が、前足で器用に頭を抑えてゴロゴロと苦しんでいるのだから。

「だ……　大丈夫？」

だが、心優しいのか、少女は多少引きつつも猫を抱き上げようとするが、猫は彼女の動きをするりと交わして、窓から飛び降りるのだった。

「ここ…　三階！」

大人しそうな少女としては珍しい大声を上げて、窓の外を見た時には猫の姿はなくなっていた。
彼女は変なものを見た、という様子で去っていくのだった。

因みに、この夜に弾に報告をした彼は、間違っている目標を追跡したと言うことで、大目玉を食らったのは言うまでもない。

無論、スカートの中まで写った動画を弾は一度見た後、全て削除している。

第２１話　やはり俺の入浴外泊は完全に取り潰すつもりらしい……　オノレまお

因みに猫の衣装は弾が設計図と言うか、絵を描いて、それを基に一夏が中学の頃に夜なべして作ったものだったり。

犬のほうにも戦闘服（笑）が存在しますよ。

そっちはまたいずれ……

第２２話　臨【海】学校……　川なら大歓迎だったと言うのに！！

遮光カーテンの向こうから降り注ぐ日差しと、雀の鳴く声が響いてくる。
俺の意識はゆっくりと覚醒に向かうのが分った。

「ぬっぅ……」

まだまどろんでいたい微妙な感覚、だが、ベッドの端に妙なものを確認した俺は一瞬で意識が覚醒する。

そこにいたのは。

「らうらぁ？」

「おはよう……　弾、いえ、旦那様」

寝起きで舌足らずな声をあげながら、俺はそちらを見ればラウラが何故か微笑を浮かべて、白いゴスロリドレスを着てベッドの端に座っていたのだった。
……　どうしてこいつがここに？　つーか、その格好はいったい

？　致命的なツッコミどころがある言葉を言っていたが、それは一体なんだ？

なんていう言葉の数々が俺の脳裏を掠めていくのだが、彼女は俺を放置して更に行動していく。

「朝食を持ってきた、食べられるか？……　それとも、まだ、眠い、か？」

彼女は俺が寝惚けていると思ったらしい、少々こちらを気にする様子を見せていた。

俺は何がなんだか分らない状況だったので、この状況を打破できる人に連絡を行うことを決意する。

「ラウラ俺の携帯とってくれ、机の上で充電してあるから」

「これか？」

「おう、サンキュ」

俺はラウラに頼んで携帯をとってもらい、アドレスに登録している番号をプッシュする。

「もしもし、千冬さん、弾っす、すぐに来てください……　不法侵入です」

その数秒後。

「ラウラぁ！貴様、寮の規則を破るとは良い度胸だ！！」

「き、きき、教官！？　どうしてそのようにお怒りなのですか！？　これは私と旦那様の夫婦」

「何が夫婦だ！バカモノ！！」

怒髪天を衝く、という様子で部屋に突入してきた千冬さんにラウラは連行されていくのだった。

因みにラウラが持ってきた朝食は、トーストに目玉焼きというオーソドックスなものだった、捨てるのはもったいないからきちんと食べたよ。

そんで二度寝したけど、なにか？

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第２２話　臨【海】学校……　川なら大歓迎だったと言うのに！！～

二度寝した俺が起きた直後、予鈴が響いた。
あ、ヤッベ、と思っても既に取り返しの付かない状況となっていたので、俺はＳＨＲと一時間目を諦めることにした。

「部屋でまた寝たら、捕縛されるだろうし……　あそこに行くか！」

俺は制服に着替えると、この前偶然見つけたサボりスポットへと、静かに、尚且つ、迅速に向かっていく。

そう、ここはＩＳ学園正門からそうは離れていない茂みの中、人の目に付きそうで意外に目に付かない上に、隠れるにはうってつけなだけではなく。

心地よい木陰になっている場所があったのだ。

「やっぱここは最高だぁね」

なんて言いながら腕を頭の後ろで組んで仰向けに寝転がる。

それから1時間近くの間、惰眠をむさぼっていたのだが、目を閉じて木陰から漏れる心地よい日差しを浴びている所に、影が出来たことに気が付いた。

疑問に感じた俺が目を開けたと同時に見えたのは、黒いミニスカートのスーツに身を包み、いつもはしているはずのストッキングを何故かしておらず、健康的な色気を放つ生足を晒している千冬さんだった。

だけど頬が少し上気しているから、俺を探してでも居たんだろうか？　どこか息もちょっと荒い気がするな。

「ん、織斑先生？」

「起きた様だな、五反田」

「うっす」

「何か申し開きはあるか？」

剣呑な光を持った瞳と、微笑をかたどった表情をしている織斑先生のお姿。

ありがたいことに申し開きの機会をくれるらしい織斑先生、なのでさっきから気になることを俺は言うことにした。

位置関係を説明しておこうか、俺の頭の所に織斑先生が立っているのだよ、これを言えば分かる人にはわかると思う。

「……　意外ですねぇ」

「何がだ？」

「ピンクでフリル付きなんて、可愛いデザインの下着なんて穿くんですぬぇエエエエエ！！！」

「忘れろぉ！！！」

それを言った瞬間に俺に降り注ぐ出席簿と、千冬さんの蹴りの嵐だった。

ギブアップは認められない状況の中で俺は、真っ赤な顔をしてスカートを抑えて俺に蹴りを放ち続けている、なんか可愛い生き物になっている織斑先生を眺めながら。

意識をブラックアウトさせてしまうのだった。

夢、夢を見ている。

前世での夢、女の子と言える外見をした【男】に唇を奪われて、後ろの貞操を……　された夢を。

あの天災にキスされて、気絶してから疑問を感じていたんだが、この夢を見て、やっと分った。

こいつとあの天災って、外見だけじゃなく、性格までそっくりだったんだ……　俺と同じ様に、こいつも転生とかしてないよね？

あの天災を見る限りというか、能力に問いかけても天災は、こちら側の純正の天然だ、と言う答えが返ってきたし、問題ないかな。

そういえば、俺が死んだ後に見た神様（笑）ってド〇ク〇？のルビスさまな外見をしていたんだけど、どうしてあんな見目醜悪な天使が迎えに来たんだろうか？

前世じゃおっぱいが大きくてちょっとエッチな死神が迎えに来たというのに……

「おっぱいおっきくて、美人な死神だったら喜んで付いて行ったのに……」

「へぇ、それは素敵な夢を見たんだね？　弾」

「うおっ！ビックリした！！」

「それって、どういう意味かな？　かな？」

意識が覚醒すると同時に俺は何かヤバいことを口走ったらしい、目を覚ました俺の目の前には目のハイライトが消えた一夏の顔が、ドーンとドアップで存在していた。

これにビックリした俺は、更にヤバいことを口走り、一夏の目がより危険な色を深めていく。

流石の俺も一夏の様子には、冷や汗をダラダラと流して自分の体と周囲の状態を見れば、どうやら俺の部屋のベッドの上に簀巻きにされているらしく、身動きが取れない状況である。

その上に、鈴の奴もハイライトの消えた瞳でこちらを見ていることから、自分が詰んだ事を現実って奴は知らせてくれた。

「それでさ、弾」

「な、ナンデショウ？　リンサン」

「シャルロットとはどこまでいったの？」

「別に何もしちゃいないけど……」

「「……」」

俺は感情が一切篭っていない鈴の言葉に、正直に答えたはずなんだが、彼女達から返ってきたのは、疑わしいものを見る目つきだけだった。

どうしてだ！俺は清く正しくスケベに過ごしてきたと言うのに！！

「へえ、それにしては変よね」

「な、なにが？」

「クスクスッ、シャルロットってね、弾のってアナコンダクラスだよ、とか言っていたんだよねぇ……　どうしてシャルロットが弾のサイズを知ってるの？」

「そうよねぇ、私……　咥えるのに苦労したし」

一夏からの言葉を聞いた俺は思う、シャルロット！なに口走ってんの！？　と。

今の段階では鈴しか知らない、というか、鈴が致命的な言葉を言った瞬間の一夏の目は、見るんじゃなかった。

そう言ってしまいそうになるので精一杯だった。

……でも、どうして一夏には小さい頃なら兎も角、今のは見せたことないはずなのに、どうして俺のサイズを彼女が知っているんだろうか？

「ねえ、鈴」

「なによ？」

「男の子の味ってどんな感じなの？」

「苦くて濃くて粘っこくて、変な味だったから弾以外のなんて飲みたく……　な、なんでもないわ」

一夏からの問いに、つい自然に答えてしまった。

なんていう雰囲気の鈴、これを聞いた瞬間から一夏の様子は凄まじいものとなって、とてもではないが、お見せと言うか描写できるものではない（注：想像は出来ても描写する勇気のない作者を、どうか、どうか許してください）様子になっていく。

「へエ、じゃあ、リン、ちょっとこっちにきてね」

「ちょ、一夏!?」

「クスクスッ、すぐに終わるからぁ、オハナシ、しよっか」

「ま、まって一夏!!アレはただの失言よ!!言うつもりじゃなかったのよ!」

「……　だったら、モット、よく、聞きたいなぁ」

「い、いやあああああああああ!!!

そう言って一夏に連れ出された鈴は、どこか断末魔の悲鳴を上げているように見えたのは、気のせいではないだろうな。

それに、扉が閉まる瞬間に、セシリアが一夏と一緒に鈴を連れて行く様子が見えたから、鈴にはかなり辛い運命と言うか、状況と言えるものが待っているだろうな。

なんて考えていたりした。

それからすぐに苦笑いをしつつ、一夏達とは入れ違いになってシャルロットが入ってきた。

「あ、あははは……　弾、大変だったね」

「そう思うなら、縄を解いてくれぇ……」

「じゃあ、ちょっと待っててね」

その後ろから箒が入ってくるのだが、何処か不機嫌で、ムスッとしているのは気のせいじゃないだろうな。

「……」

「え、えと、箒、さん？」

「ふむ、まあ、これからだな」

「お、おい？」

「いや、なんでもない、なんでもないぞ、弾、私は負けない、ただそれだけだからな」

「そ、ソウデスカ……」

ムスッ、と俺を見ている箒に腰が引けながら声を掛けたんだが、何かを小声で呟いた後、ニコニコ、ニコニッコと微笑を浮かべて、こちらを見てくる。

だけど、この笑顔が無茶苦茶怖いのはどうしてだろう、それに一瞬、脳裏に白無垢を来た箒と、虚ろな目をしている俺が浮かんだのは、どうしてだ。

アンサートーカーにちょっと問いかけたら、答えを誤魔化されたし……

ま、まあ良いか。

「所で、俺はどうなってたんだ？」

「うーん、覚えてないの？」

「ああ、サボろうとして織斑先生に凹られたのは覚えてるんだが、もう夕方だろ？　だから、ちょいと気になってなぁ」

「いや、サボろうとしないでよ……」

「全くだ、何を考えていたのだ？」

「遅刻しそうだったからだ！！」

「「……　ハアァァ」」

シャルロットの問いに俺は正直に答えていくのだが、事情を聞いた彼女達はと言えば、呆れ果てた雰囲気になっていくのが分る。

箒は呆れながら、こちらに問いかけてくるんだが、逆に胸を張って堂々と答えたら更に呆れたような溜息を吐かれました！

俺の言葉を聞いてシャルロットと箒は、少しの間呆れたようにしていたのだが、気を取り直したらしい。

「まあ、お前は今まで気絶していただけだ」

「なんと、朝から夕方まで沈んでいたとは……　さすが千冬さん」

箒の言葉に俺は感心する以外にない。

やっぱ千冬さんの一撃は重いわ、普通の人間というかプロレスラーに同じ事をされても気絶しない自身があるというのに、こんな俺を丸半日近くの間も沈めるとは。

「というか、暴走したお前を織斑先生以外が止められるか？」

「多分無理だよね……　弾って、凄く頑丈だし」

「一夏と鈴ならコンビを組めば止められるぜぃ、あの迫力で凄まれて動きを止められたところで、鈴の一撃受けたら、多分止まる」

「いや、それは……」

「禁じ手というか、なんと言うかだな……」

確かに俺を止められると言えば千冬さんくらいなもんだろうが、一夏と鈴も負けちゃいないぜぃ、中学の頃に何度二人に武力鎮圧されたことだろうか。

何度女子更衣室を覗こうとして、秘密裏に一夏と鈴に袋叩きにされたのは一度や二度じゃ効かんし。

あまりにも苛烈なお仕置きに女子達が、引くほどのものだったしな。

え？　ＩＳ学園に来てから覗きとかはしてないのかって？　するわけないじゃん、下手にやって【よくも家の娘傷者にしてくれたなゴルァ！！責任とって結婚するなり、おめえが家の国にこいや！】とか言われたりしたらいやだろ。

まあ、そいつは置いといて。

「それにしても、お前という奴は一体何がしたいんだ？」

箒が話題を変えるためだろう、一度咳払いをした後に、そういってくる。

恐らくはサボったことを咎めたいんだろうな。

だが、俺がそのまま答えると思うなよ！

「好きになった（普通の）女の子とＳＥ○したいでっす！！！」

「いきなり何を破廉恥な事を言い出すか貴様ぁー！！！」

「そうだよ、いきなり何を言っているのさ、弾！？」

「うわぁあああああああー！！！！！！」

そういって顔を真っ赤にさせたシャルロットと箒のツープラトン攻撃が炸裂する。

フッ！二人とも甘いな！一夏と鈴ならば（　）に秘められた言葉に気が付いてお仕置きしつつ尋問してくるぞ！！

なんて考えながら、俺を一頻り凹った箒は顔を真っ赤にさせて部屋を飛び出していく。

「刺激、強かったかぁねぇ」

「もう……　本当にいきなりとんでもないことを言い出すから、意表をつかれたよ」

「それが俺だぁ！！」

「胸を張って言わないでよ！！はぁ……　箒も振り回されて可哀想に」

疲れ切ったサラリーマンの如き様子で、シャルロットはそう言っていた。

俺はそれを敢えて無視して、シャルロットに再び声を掛ける。

「お、そうだシャルロット」

「なに？」

「明日、ちょいと買い物に付き合ってくれ」

「え、えっと、それってデートのお誘い？」

「まあ、そうとってくれて構わんが……　予定でもあった「ないよ

!!絶対にない!というか予定があっても開けるよ!!」そ、そうか?」

それまでつかれきったサラリーマンの様子だったシャルロットが、俺の誘いを聞いたと同時に頬を上気させて、嬉しそうに目を輝かせてそういってくる。

が、ちょっと戸惑う様子も見せていたので、予定があったのかね。

なんて考えて彼女に確認するのだが、俺の言葉をハッキリと遮ってそういってくる。

それも予定があれば、ドタキャンしてでも、という様子でだ。

「ふむ、んじゃあ明日の朝、そうだな十時くらいに正門に集合な」

「うん!分ったよ!」

「そんじゃ、そういうことだから、飯でも食いに行くとしようかね」

「え、えっと、一緒に食べても良いかな?」

「おう構わんぜ、というか、ここで俺一人になったりしたら逆に寒いことになる」

「くすっ、そんなことしないのに」

そういって俺たちは、食堂へと向かったのだが、途中で一夏達とも合流したからな、結局はいつものメンバーでの食事になったよ。

ただ、シャルロットの奴が合流していくごとにちょいと不機嫌になったのは、なんでかね？　俺って好き勝手行動してたからな、特にフラグを立てたりとか、してないはずなんだけど……

まさか、一夏と鈴のようにフラグが立ってるとか？　まっさかぁ～～～！と言いたいのに、どうしてだろう、能力は否定してくれないのは。

なんて考えつつも、夕食を済ませるのだった。

あ、因みに今日はビフテキを食ったよ！というか朝にラウラの持ってきた軽いもの以外、何も口にしてなかったからな、ご飯を大盛りにしてもらったのは、言うまでもないぜ！

あ、あと、ラウラの奴は放課後は千冬さんに説教されていたらしいから、俺の部屋にこれなかったんだと、その際に千冬さんはラウラの私服を一般人向けへの矯正を図ったらしいんだが、失敗したらしいな。

第２３話　水着ギャルは良いけど！海はイヤァーーーーー！！！

本日は晴天、昨日までは結構な曇り空で小雨が降っていたんだが、それらが降る気配も全くない、雲一つ無い綺麗な青空が上空には広がっていた。

そんな日に俺は、ＩＳ学園の正門にて待ち人を待っていたりする。

「あっ！五反田くんだ！！」

「おっすー」

「ねえねえ、暇ならさ！私達とどっか出掛けない？」

「あーすまんね、今から約束あるんだ」

「えー、残念！」

シャルロットを待ち始めて十分以上が立っているんだが、こんな感じで声を掛けられるのが数十回なのだが、つくづく思う、普通の共学高校であれば！！と。

そしたら、俺の方ももうチョイ声を掛けたりして楽しんだりするのに……　中学の頃、それを一夏とのデート当日にやって、かなり痛い目を見た覚えもあるが……　過去は振り返らないべきだな！！

うん！！

だけどまあ、流石に断るのも飽きてきたのだが、もうじき十時になろうと言うのに、現れないシャルロットも気に掛かる。

ふむ、あいつは時間に関してはキッチリとしている方だと思うんだが、どうしたんだろうかね。

なんて考えながら、十時をちょいと回って一度連絡とろうかね、と考えた時、玄関方面から大急ぎで走ってくるシャルロットを見つけるのだった。

「ゴメン！！弾！遅刻しちゃって！！」

「いや、そうまで待っちゃいないから大丈夫だが」

俺の目の前で息を整えようと、膝に手を置いて必死で方で息をしているシャルロットの姿を見る。

白いサマードレスに同じ色のブラウスを組み合わせた格好に加えて、顔にはナチュラルメイクも施してあるから、相当に気合が入っているのだろう。

その上に、いつもの髪型ではなく、ポニーテールにしているし結わえているリボンは、なんか、ファンシーなデザインだが、それは全体としてのバランスでは浮いてはおらず、逆に彼女のアクセントとなるようになっていた。

「して、どしたん？　お前さんの気合の入った服を見れば時間が掛かったのは分るんだが……」

「え、えっと、確かにこの服とかに時間が掛かったのは、本当だけど、でも実はメイクとかを気合を入れてしくれたのは、ラウラなんだ」

「え〝!?」

「やっぱり、そういう反応になるよね（うぅ……　僕よりもセンスが良かったなんて、でも、どうしてラウラって普段着があんな感じなんだろ？）」

俺は、シャルロットの言葉を聞いて、驚愕と言う感情に包まれる。

あのラウラが!?　原作では普段着が軍服でこっちではゴスロリやら致命的にズレたあのラウラが!?　なんて考えつつも俺はシャルロットの姿をまじまじと見つめる。

品良く整えられた眉に、薄くではあるが艶やかに引かれたリップ、その上に顔全体にも薄くて下品にならないように尚且つ、汗をかいたりとかの生理現象すらも考慮に入れた完璧、という表現しか思い浮かばない配慮された化粧。

とてもではないが、あのラウラが施したものとは思えない、逆にラウラがこのメイクをシャルロットにして貰って現れたのならば、納得はいくのだがな。

「所で、お前さんはラウラの奴にゴスロリ衣装を進められたりしなかったのか？」

「ううん、意外だけどラウラは、そんなことしなかったよ」

「そりゃまた意外っつーか……」

「僕もそう思ったんだけどね、部隊の人からラウラみたいな小さい身長の人が着れば可愛いけど、僕達みたいな標準的な身長とスタイルを持つ人が着れば、痛い人になるから、勧めちゃいけないって言われてたんだって……」

「……　こういう時はなんて言ったら良いんだ？」

「お願い……　何も言わないで」

彼女とのやり取りをしていく内に、俺は力が抜けていく感覚を味わう。

一体誰だろうか？　彼女にこんな事を仕込み、あまつさえ致命的にナニカがズレてしまい切った人物に仕立て上げたのは。

確か、クラリッサ、だったけ？　原作じゃあ、重度の日本というかジャパニメーションオタクというか、日本が生み出したサブカルオタクの塊。

なんて印象だったんだが、いつかは連絡を取ってみるべきだろうか？　あの衣装【俺の妹がこんなにかわいいわけがない】の衣装を製作した時期がちょいと気になるんでな。

まさか、こいつって転生者とか、言わないよね？　だったら、連絡するの危険だなぁ。

なんて考えるのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２３話　水着ギャルは良いけど！海はイヤァーーーー！！！～

そんでもって俺たちは駅前のショッピングモールである【レゾナンス】にやって来ていた。

このショッピングモールは意外に凄い所で、飯を食いたいのならば和・洋・中と揃った店舗に、服で言えば安物から超一流のブランド品までをバランスよく揃えた店舗が揃っているのだ。

原作で言われてたけど、凄いな、ここは。

中学の頃に一夏や鈴と、出かけたりした際には大変お世話になりました。

何て言ってしまいたくなる所でもあるしな。

思い出深い場所だよ。

「そんじゃシャルロット、お前さんは水着を選ぶんだろ？」

「うん、そうだけどね、弾はどうするの？」

シャルロットに問いかけて返って来たのは、彼女はやはり水着を選びに行くということだった。

なので俺は俺の目的を果たすとしよう。

「俺は、そうだな、明日からは【海】だからな、必要となるものを用意するさ」

「必要になるものって、水着以外にあるの？」

「ああ、俺にとっては必要なんだ」

意外そうな表情でそう言って来るシャルロット、だが、俺には必要な装備と言うのはたくさんあるのだよ！！

普通の人間ならばいらない装備なのは確かだけどな！！

「そいじゃ、２時間後にここに集合な」

「うん。分ったけど……　そんなに買い物に時間使うの？」

「シャルロット……」

「な、なに？　だ、だん……」

シャルロットの疑問も尤もだろう。
何しろ海に行く為に、水着とか他には水中眼鏡とか買ったりとか、オイルを買ったりとかくらいの時間しか考えないのならばな。
だが！男には引けない、いや！引いては行けない時があるのさ。
真剣な表情となり、シャルロットの左肩を握り、右手で彼女の顎を持ち上げるようにして言っている俺に、彼女は頬を上気させて、目を潤ませる。
何かを覚悟したように唇を閉じて、目を閉じようとしている彼女から体を離すと、俺は答える。
「男にゃ引けないものがあるのさ、だから。後でここに来るな」
「あ、え？　えっと、だん？」
「じゃ！」
そう言って、俺は走り去るのだが。
「弾のぉ！バァカァー！！！」

なんていう怒号に似た声が、響いたのは言うまでもないな！
……　一夏達も尾けてるんだろうなぁ、俺がシャルロットの顎を持った瞬間の時なんて……　一瞬首が飛んだ、とか思ったし。

それから俺はキッチリと2時間使い、集合場所に行くのだが。
そこにはムッスゥ～～～～～！！！という表情のシャルロットさんがいらっしゃいました！

手には何も買い物袋とか持っていないから、まだ何も買ってはいないんだろうが、どうしてだろうか？
なんて考えちゃったりしていた。

「ひっじょうーーーに！遅いお着きだよね弾」

「え、えっと、シャルロットさん？　どうして、そんなにお怒りなのでしょうか？」

「知らないよ！自分の胸に聞いてみれば！？」

「い、いや、ええと……」

かな～りお怒りのシャルロットさん、俺はちょっとだけ腰が引けながら彼女に問いかける。

だけど彼女から返って来たのは、辛辣な言葉だった。

「ど、どうすれば、許して、もらえるのでせう？」

「はい！」

彼女の怒りはＭＡＸ状態であり、下手に刺激すれば、間違いなく大爆発を起こすのは間違いない状況下。

俺はなるべく彼女を刺激しないように、尚且つ丁寧に聞くのだった。

そしたら、シャルロットは自分の右手を出してくる。

「手を繋げば、良いのかぃ？」

「それだけじゃないよ、弾」

彼女の手に俺の手を重ねたら、彼女は一夏達にも通じるような素晴らしい笑みを浮かべる。

えっと、原作じゃあ、シャルロットって……　ヤバイ！もう思い出せない！！確か銀の呪怨だったけか？　そいつとの戦いがあったはずなんだが、もはや何も思い出せないとは！！

やっぱ忘れようと努力した原作知識を当てにするのはいかんね、なんて考えていた俺の手をシャルロットは握り潰さんばかりに力を込めてくる。

「イデデデデエェェ！！！！」

「ねぇ、弾、ラウラと戦った時に僕が言ったこと、覚えてる？」

「は、はい……　何かを奢るって話ですよね……」

「うん、そうだよ」

「じ、じゃあ、この近くのレストランでお昼とデザートを奢らせていただきます！」

「うん、それで良いよ」

機嫌を直したらしいシャルロットは、俺の手を握ったまま腕を抱え込むと、女性用水着売り場へとぐいぐいと連れて行くのだった。

「あのーシャルロットさん？　どうして僕まで水着売り場に？」

「選んで」

「え？」

「僕の水着、弾に選んでもらうよ」

それから俺たちは水着売り場に入るのだが、やはり男というのは異物だよなぁ、こういう売り場じゃあ。

俺に向けて視線がビシバシ突き刺さるのだが、シャルロットがいるからか、それは少しずつ和らいでいる様子も見せている。

シャルロットが腕を組んでグイグイと引っ張っているのも、きいているんだろう。

多分回りの人達は彼女の機嫌を直すために言いなりになっている彼氏、くらいにしか感じてないだろうし、女尊男卑の世界はやっぱこういう所が不便だよなぁ。

男は女の言いなりになるべきだ、なんて考えもあるしな。

俺の知ってる２００１年以降に出ていた少年漫画が、打ち切りか読みきりになっていたし。

○玉は存在自体無かったし！Ｎ○Ｒ○Ｔは打ち切り！彼○島にケロ○までなかったなんて！！どうして娯楽までがＩＳ一色に染まってやがるんだぁ！！！！

と言いたいくらいだった。

少女漫画や少女アニメは普通に存在していたのに……　例えばプリ○ュ○とか会長はメ○ド○とか……　だけどまあ、関係ないから置いておこうか、和人がいる世界に行けば読めるだろうし。

「っ！？」

「ん？　どうした、シャルロット」

「静かに！こっちに！！」

「ってちょ！？」

唐突に何かを感じたらしいシャルロットは、俺を試着室に引き摺り込む。

無論のこと、シャルロットも一緒になって、である。

一夏達がこの売り場に大急ぎで入ってきた気配を感じるから、多分邪魔される、とか考えたのかね？

「うぅ……　どうして、ここに一夏や鈴にセシリア達が……」

「俺、出ても良い？」

「だめ」

「……」

試着室の扉というかカーテンをちょこっと開けて、売り場を窺っているシャルロット、俺もちょこっと見れば、恐ろしい笑みを浮かべて水着を選んでいる一夏と鈴にセシリアがいる。

その上に定番となったゴスロリ衣装を着ているラウラも一緒なのだが、トランクを持っているのも気になるが、鈴と一夏に捕縛されているような体勢も気になるな。

一夏とセシリアが、女の子らしい可愛い水着を選んできても、渋い表情を浮かべるラウラになんか、恐ろしい笑みを浮かべて諭している様子も見える。

何時の間に仲がよくなったんだろうか、あいつらは。

なんて考えていたけど、俺がここにいたらリビドーというか、若気の至りを引き起こしかねないので、俺は外に出ようとするのだが、シャルロットは明確な拒否の姿勢を示してくる。

「す、すぐに着替えるから、出ちゃダメだよ！弾」

「……　じゃあ、襲って良い？」

「お、おそっ！！」

その言葉と同時にシャルロットは上半身の服を脱いで、半裸になったのだが、俺は率直な意見を忌憚なく言っていた。

俺の言葉を聞いたシャルロットの顔は、一瞬で蒸気を噴出すほどの赤みを帯びていく。

だけど彼女の表情は大きく何かを期待しているのは気のせいでしょうか？　まるで俺に襲って欲しい、といわんばかりじゃないか？

能力に問いかけるのは怖くて、出来ません！

何故俺がこんなことを言ったのかといえば、それは。

「この声は……」

「どうかしましたか？」

このお方が売り場に入って来たのが分ったからだ、凛としていて、どこか刃物を連想させるような、気配を持っていながら暖かさも持ったお方。

我らが最凶教師千冬さんが来たからなのだよ！と同時に俺が放った言葉もどうやら聞こえていたらしい。

……　ヤバくね？

シャッという音と共に開けられる試着室と、その向こうにいる青筋を立てた千冬さんと、ビックリした様子な山田先生。

次の瞬間、軽いパニックを起こしたらしい山田先生の悲鳴が売り場に木霊すのだった。

時は少しさかのぼり、弾が見つかる数時間前。

レゾナンスを目指して歩いている二人を、物陰から見つめる影三つがあった。

説明の必要はないであろうが、一夏と鈴にセシリアである。

三人とも一様に瞳からハイライトが消えており、かなり不気味な雰囲気を放っている。

通行人も彼女達を必死で避けていることから、この雰囲気はお分かりいただけるだろう。

「ねぇ、シャルロットって……　何時の間に弾と約束してたんだろうね？」

「分りませんわ……」

「さあ、ねぇ、でも……　ずいぶんとなかがよさそうよねぇ」

一夏はかろうじて感情が篭っているのだが、セシリアと鈴に至っては全く感情の篭っていない平淡過ぎる声で答えていた。

だが、レゾナンスに入ってシャルロットとの問題のシーンに差し掛かった瞬間。

「「「ッ！？」」」

ザワリ！と彼女達の髪は生き物のようにウネウネと動き出した上に、空間そのものにも不気味なオーラが作用したのか、歪曲現象というべきものも起きている状況下。

最早誰も近付かないどころか、彼女達をいないものとして扱っている通行人達を無視して、一人の人影が近付いてくる。

「なにをしているのだ？」

「「「！？」」」

突然声を掛けられた三人はビクゥ！！と体を竦ませ、オーラも一瞬で霧散した。

ゆっくりと後ろを振り向けば、そこにはゴスロリ衣装に身を包んだラウラの姿があり、彼女達は今度は逆に鳩が豆鉄砲を食らった、とでも表現できそうな間抜け面でラウラを唖然としてみていた。

「あ、アンタ、その格好は一体なによ？」

「ん？　これは私の外出用の衣装だが？」

「え、ええと、ラウラ、日本じゃそういうのを着ているとって言うか、他の国でもそんなのを着ている人なんていないと思うけど……」

「ふむ、そうだろうが、私が気に入っているのだ、文句はあるまい？」

「そう言い切られると、何もいえませんわ……」

彼女達の心の内は、誰こいつ？　とでも表現すべきだろう。
先月、自分達をひどい目に合わせた後、謝罪して一応は関係が修復されたのだが、今までは思う所があり、疎遠になっていた。

だけど、と彼女達は考える。
この娘って、日本所か一般常識というか、人としての常識というか、そんな感じの一切が致命的にずれてるんじゃないの？　と。
そこまで考えが至ったのだが、ラウラは既に大きなトランクケースを引き摺りながら、水着売り場に入ろうとしていたために、彼女達は慌てて引き止めるのだった。

「って、ちょっと！アンタどこ行こうとしてるのよ！！」

「どこと言われても……　私も水着を選びに来たのだが？」

「どんなのを選ぼうとしてるの？」

「こういう感じの奴を探している」

「「「……じゃあ、ちょっと売り場に入ろう（ね）（りましょう）ラウラ（さん）……」」」

「な、なにをするきさまらーーーー！」

引きとめられた後、不満そうに彼女は鈴たちに返すのだが、一夏の質問に対してラウラはといえば、胸を張り一つの紙を見せる。

それの見た目は、古き良き日本の海女さんスタイルだったのだから。

これを見た彼女達は一様に無言となり、ラウラの右手を一夏が、左手を鈴、体を後ろからセシリアが抱えると、ジタバタと暴れるラウラを抑えながら水着売り場へと入っていくのだった。

彼女に【常識的】な女の子らしい水着を選ばせる為に。

……　今ここに致命的にズレてしまったラウラの趣味を矯正するために、乙女たちが立ち上がった。

後に参加する人数は少々増えるのだが、それは言うまでもない。

因みに、ラウラは部屋に帰った後、クラリッサとの通信でスク水を着ないといったら、凄まじい勢いで怒られたのだが、彼女は結局理由については分らなかったりする。

それから数十分、涙目になった山田先生に怒られた時間だ。

どこから取り出したのか、俺の顔面には出席簿がめり込んでいて、俺の状況も分るだろう。

「水着を買いに来たのは分ります、ですが！！そういうことをするのは、きちんと自立した大人になってからです！二人で試着室に入るだなんて、教育的にも感心できません！」

「す、すみません」

「サーセぶふぉ！！」

「きちんと謝らんか、このバカモノが」

「す、すいませんでしたぁ！

プンプン！とお怒りな山田先生、シャルロットは素直に謝ってるんだけど、俺はといえば出席簿を抜いて、ｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗこんな感じに草を一杯生やして答えようとした瞬間に、織斑先生のフルスイングでの棚に使われている棒での一撃を顔面に受ける。

あ、店員が大きく慌てとる、が、俺が瞬時に復活すると同時に、土下座したのを見てからもっと慌ててるのは、気の所為（弾は自分の回復力が、一般人のそれではないことを忘れかけてます、同様に千冬さんも、というよりもこの程度では、弾の言葉を遮るくらいの効果しかありません、つまり実ダメージは皆無）かね？

んで違う場所を見れば、一夏達がラウラの水着を選んでいるのも見える。
な～んか、鬼気迫る様子も見せているのも気になるが、まあ良いか。

「と、所で山田先生と、織斑先生はどうしてここに？」

「それはですね、先生達も水着を選びに着たんですよ」

怒気を増した千冬さんの怒りというか、話題を逸らそうとしているらしく、シャルロットがそう言っているのだが、効果はあったらしい。
山田先生が食いついてくれたからな、良かった良かった。

なんて思ったら、千冬さんの視線がきつくなった、うん自重しよう……

「山田先生」

「はい、どうしました？　織斑先生」

「こいつの監視を私がしておこう、その間にデュノアの水着も一緒に選んでやると良い」

「はぁ……　分りました、デュノアさんもそれで良いですか？」

「え、そ、それは……　うぅ、分りましたぁ」

「では、行きましょう！！」

千冬さんの言葉に山田先生は軽い疑問を浮かべつつも、シャルロットをつれて離れていくのだが、シャルロットが異議を申し立てようとした瞬間、千冬さんがチラリと見たと同時に彼女はうなだれるようにして、答えるのだった。

それから張り切っている山田先生にシャルロットは連れて行かれて、この場には俺と千冬さんが残される。

「さてと弾、私の水着をお前に選んでもらうぞ」

「ゑ？」

「選んでもらうと言った、一応は決めてあったのだが、決めかねている」

「へ、へゑ……」

そういって千冬さんが取り出したのは、機能性重視な白い水着と、

スポーティーでありながらセクシィーさを醸し出す雰囲気を持った黒い水着の二つだった。

これを見た俺は思う、答えは決まっているぅ！！

「黒っす！！」

「……　正直な奴だ」

苦笑いを浮かべている千冬さんは、それからすぐに会計へと向かうと手早く済ませて、山田先生たちの帰還を待つ体勢に入る。

「所で、弾」

「なんですか？」

「お前は彼女を作ったりせんのか？」

「うーん……」

千冬さんの口から飛び出してきたのは、あまりにも俺の主観では意外すぎる質問だった。

お堅いと思える彼女がこんな質問をしてくるとは、なんて考えながらも、答える為の適切な言葉を探し出そうと俺の灰色の脳みそはフル回転する。

「今は、あんまり考えられないって方が正しいっすね」

「ほぅ？　普段は小娘共の尻を追いかけているのにか？」

「し、辛辣っす……　まあ、いいですがね、俺は今は考えられないってだけで、きちんとみんなのことは考えてます」

「気が付いていたのか？」

「大体の所はってとこですね、ああもハッキリとアプローチされたら、普通は、分るでしょうさ」

「だろうな」

彼女は俺の言葉を真剣に吟味するように聞いていた。

相槌を打ちつつもキツイ言葉を返してくれる千冬さんに、俺は苦笑いを返すと、真剣な表情で更に言葉を重ねていく。

俺の言葉を聞き終えた千冬さんは、顔を上げると。

「だが、それと、恋人を作らないことに何の関係がある？」

「そりゃぁ、今、必死になってるからですよ、意外とあの学園で過ごすのも楽しいですし」

「ふむ、だから彼女達の思いに答えられないと？」

「そうは言っちゃいないですよ、答えるにしろ答えないにしろ、まあ、けじめくらいは付けたらいいなくらいには考えてます」

「きちんとつけるように考えろ……　まったく」

「すいませんね」

やはり、幾らこの人の前だとは言っても気恥ずかしさが大きいな。俺は本心をぼかしつつも、そう言っていたのだけど、彼女から返って来たのは見透かしたような瞳で呆れたような苦笑いを浮かべる表情でした。

……　全部、見抜かれてる？　なんて俺は考えた後からは会話というものはなく。

だけど心地のよい沈黙の空間を持って、山田先生達を待つのだった。

……　シャルロットに奢る時に、一夏達にまで奢

らなくちゃならなくなったのは、痛すぎる出費だった。
俺の輸吉さんがぁ……　まあ、千冬と山田先生が俺にこっそりと欲しかった本をプレゼントしてくれたから、そこは救いかね。

第２３話　水着ギャルは良いけど！海はイヤァーーーーー！！！（後書き）

最後のシーン辺りは指が暴走した……
ちーちゃんをこんなに目立たせる予定は無かったのに……

第２４話　ついに来ちまったよ……　こうなりゃぁ覚悟を決めて！近くの街に大

夜も更けて夜中といえる時間帯、千冬はある場所へと歩いていた。
そこはＩＳ学園学生寮近くの林の中であり、彼女は迷いなく進んで行く。

「待たせたか？　五反田」

「いえ、待ってませんよ」

「そうか、それで何の用だ？」

そこには既に弾の姿があったのだが、千冬はいつもとは違うような、そんな彼の様子に一瞬だけ疑問の色を浮かべる。
それを心の奥へと押しやって、千冬は弾に対して問いかけると、彼は一度頭をガシガシとかいた後、何処か言いにくそうに口を開くのだった。

「まあ、用件というか、お願いですね……」

悲しげとも言える弾の表情を見た千冬の表情に、一瞬だけ驚愕の色が浮かぶのだが、続いて彼が言ってきた言葉に激怒という感情を顕にして、彼の胸倉をつかむのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２４話　ついに来ちまったよ……　こうなりゃぁ覚悟を決めて！近くの街にナンパに繰り出……　エエト、ミナサマナニカゴヨウジデ？～

トンネルを抜けて夏特有の強い日差しが降り注ぐバスの車内には、女子達の歓声が響き渡っていた。
憎たらしいほどの雲ひとつない綺麗な青空、何故だ！台風が来るように神様（笑）にお願いしていたというのに！
海面は穏やかなベタ凪で、陽光を反射して入ればさぞ気持ち良さそうな、見た目だけは良い外見をしている。

ちくせぅ、強風が吹いて波が高ければ遊泳は中止になるから問題ないかと考えて、儀式をしようとしたら何故か一夏や鈴がタイミングよく部屋に来て出来なかった。

「あー、やっぱ海を見るとテンション下がるぅ」

「え、えっと、そう？　僕は普通だけど」

俺の隣にいるのはシャルロットだった。
因みに逆隣には一夏とセシリア、俺の席の後ろにはラウラと箒が座っていたりする。

出発してからどんよりとしている俺の様子がどういうことなのか、一夏は分っているらしく苦笑いを浮かべて見ていて、セシリアやラウラにシャルロットといった、付き合いがまだ短い連中は疑問顔になっているのだった。

「一夏、どうして弾の奴は落ち込んでいるのだ？」

「弾って、実は海が苦手なんだよ」

「そうなんですの？」

「うん、何でも小さい頃に海で溺れたらしいって聞いたよ」

「それは難しい話だな、幼い頃のトラウマというのは、早々簡単に克服できはしまい、旦那様も難儀な所があるようだ」

俺のことで盛り上がっている女子達だが、一夏の言葉に訂正させてもらえば、前世のことなんだよなぁ。

向こう側で小さい頃に保護者と一緒に海に出掛けたんだが、その時に海草が俺の足に絡まって海の中に引き摺り込まれたんだよ。

あの時のことは俺の中にこれ以上となない恐怖として刻まれている、暗くて寒い海の底、呼吸が出来ず酸素が足りなくなっていく感覚、海水のしょっぱさというか苦さというか、そんな感じのものが一勢に襲ってきたことは、間違いなくトラウマとして俺に刻まれることになった。

まあ、後々のことだが淡水、つまり川であれば泳げるように少しは克服できたんだが、未だに海は苦手だ。

幾らチートの補助があるといってもな。

後ろで【ねぇ、ラウラ、旦那様って誰のこと？】【弾に決まっているだろう】【ほぅ、興味深いな、それは】【私も詳しくお聞きしたいものですわね】なんてきゃいきゃい言っている声を無視して、俺は海を見ないように目を閉じるのだった。

「寝ちゃうの？　弾」

「おう、付いたら起こしてくれぃ」

「分ったよ、お休み、弾」

ラウラの尋問というか、はぐらかすラウラを三人が勢い良く追い詰めようとして、交わされる光景にシャルロットは参加しなかったらしい。

俺が寝ようとしたことに気が付いたようで、彼女は微笑みながらそういってくる。

俺はシャルロットに起こすように頼むと、目を閉じるのだった。

何か、額に掌みたいな暖かい感触を感じつつでは、あったがな。

それからすぐ、時間にして三十分もしない内にシャルロットに起こされると、俺たちはバスから降りるのだった。

目の前にあるのはかなり立派な旅館、普通に泊まろうとか考えたらかなりの金額が掛かるのが分る造りだ。

ていうか、高校生の臨海学校とかで使うような宿泊施設じゃないよなぁ。

なんて考えつつも、目の前では美人で大人の女性の色香と雰囲気を放っている女将さんが、織斑先生と話している。

ふむ。

「弾、余計な動きを見せたら、わかってるよね？」

「弾さん、わたくし達はＩＳ学園の代表としてここに来ていますの、お恥ずかしい真似などできないのはお分かり、ですわね？」

「弾、挨拶以外に必要ない動きをとったら、私の木刀の錆びになるかも、しれんぞ？」

「ねえ、弾、動いちゃダメだよ、織斑先生に恥をかかせちゃうし、僕達もちょっと手加減できないかもしれないから」

正直に言おう、女将さんをナンパしようとしたらいつの間にか囲まれていた！！ヤバイ、俺の魂胆バレてる。

これは織斑先生にも同様なようで、挨拶をしている女将さんからは織斑先生は普通に笑っているんだが、俺の方には凄まじい視線を向けている。

目が騙っている【余計なことをしたら、分ってるな？】と、ど、

どうしてだ！女将さんと、夜に男と女のピストン運動をしませんか！？　と誘うつもりなだけなのに！！

ッ！？　更に殺気！？　あ、良く見たら鈴が二組の所からすんげぇ視線で睨んでる……　おれ、あしたのあさひをおがめるのかな？

殺気に囲まれている俺の周囲で、勝手に事態は進行して行き。

織斑先生に促されて、普通、に挨拶をする俺だが、ラウラはといえば。

「浮気は男の甲斐性で仕方の無いもの、とクラリッサは言っていたが、私は嫌だな、だがしかし我慢するべきなのだろうか？」

なんか、何かがズレているというか、おかしいというか、そんなことを呟いているのだった。

それから、旅館の中に入ろうとした時に俺に近付いてくる女子の姿があった。

「ごたち～」

「お、のほほんさんじゃん」

「ごたち～の部屋って、どこかな？　夜に遊びに行くよー」

のほほんさんだ、あれからも友達としてちょいちょいお茶したりデートしたりして、良好な関係を築けていたりする。

彼女の言葉を聞き、周囲にいる女子が聞き耳を立てるのが分るのだが、一夏達はのほほんさんの一部の言葉に反応したらしく、瞳のハイライトが消えようとしていた。

ま、まあそれは置いておくとしようか！

「実は俺も知らんのだよ」

「そーなのー？」

「おう」

本当に知らんのだ、山田先生が俺を他の生徒と同じにするわけには行かない、ということで特別な措置がとられるらしい。
そういう事情は聞いたんだが、海に行くというショックのあまりに聞きに行くのを忘れていたのさ。

まあ、当日まで山田先生が知らせなかったから、多分だけど意図的に黙ってたんだろうな。
情報が漏れたりしたら俺をお国とかの命令とか、色んな都合で狙っている女子達が対策を練ってくるだろう、とかの都合だろうねぃ。

「五反田、お前の部屋はこっちだ、ついてこい」

「うぃっす、ということでじゃな、のほほんさん」

「うん、ま～たねー」

踵を返してさっさと歩いていく千冬さんに、俺は着いていくのだが、のほほんさんに断っておくのも忘れない。
相変わらずのダボダボな袖に包まれた腕を、ブンブン振って俺を見送るのほほんさんに手を振り返すと、俺は織斑先生を追いかけるのだった。

織斑先生の後ろを付いて歩いている時に、旅館を見てみれば凄いこと凄いこと、やっぱこの旅館高いだろうなぁ。

なんて考えるのも仕方がないくらいに廊下は綺麗で、置かれている壷や絵も高そうなものが置かれていても、それが下品に周囲の和を乱す感じではなく、逆に品の良いアクセントとなって空間の綺麗さを引き立たせている風景。

良い旅館だなぁ

なんて何度考えたか分らないくらいだが、暫く歩くと生徒達が宿泊している場所からは少し離れたところにある部屋にて止まった。

隣を見れば教員である織斑先生の名前が書いてあるから、俺はこの部屋なんだろう。

「当初は私と一夏がお前と一緒の部屋になる予定だったのだがな……　一夏の貞操が危険にさらされるということで、私の独断でお前を私の隣の部屋にした」

なんて事を言っている織斑先生だが……　どうしてだろうか、俺の脳裏にはどう考えても俺が一夏に押し倒されるというイメージしか浮かばないのは。

だけど、虎というか竜といえる方が隣にいるからな、侵入しようとするつわものは数はいないだろうし、何より個室ってのが最高だ！

千冬さんに感謝の気持ちがムラムラと浮かんでくる。

こうなったら、これしかない！

「千冬さんＧＪっす！！……　俺の感謝の気持ちをど受け取っグハァアアア！！！！」

「普通に感謝の気持ちを表せんのか貴様ぁー！！！」

「す、すいましぇんでした……」

その言葉を言ったと同時に俺は唇をたらこ唇に変えて、目は興奮のあまり血走った目になり、両方の鼻の穴から鼻息を勢い良く噴出しながら千冬さんに迫った。

イメージはＧＳ美神という漫画に出てきた横島が、彼女となった女性にキスを迫ったシーンがピッタリだろうな。

俺の顔を見た千冬さんは流石に驚いたらしく、目を見開くと顔を真っ赤にして俺の横っ面に出席簿を打ち込んで、行動を阻害していた。

旅館の床にめり込んだ俺は顔を抜いて、千冬さんに謝っていた時に頭上から声が掛かる。

「織斑先生、ちょっとよろしいですか？」

「あ、白」

「へっ！？　ご、五反田く！！」

「教師にセクハラをはたらくな！！バカモノ！」

「ブルゥ！！！」

顔を上げれば桃源郷が見えました！

俺の言葉に足元に俺がいることに気が付いたのだろう、山田先生は今日はちょっと短めのスカートを穿いていたのだが、スカートの裾を押さえながら顔を真っ赤にして後ずさる。「

無論、教師にセクハラを働いた俺に千冬さんの鉄槌が炸裂し、再び旅館の床に沈む。

チラリ、と山田先生を見れば今までに見たことないくらいに顔を赤くして、モジモジトした様子を見せていた。

「え、えっとですね五反田くん私とキミは先生と生徒なんですよだからこういう関係はで、でもでも五反田君がそう望むなら私は」

「山田先生、私達はこれから仕事だ、向かうとしよう」

「あ、お、織斑先生！？　私はきちんと自分で歩けますよ！？　そ、そんなに頭を強く握られたら出ちゃいます！！どうしてそんなにお怒りなんですかぁ～！？」

普段から思うが、どうしてこの人って、こんなに可愛らしいんだ

ろうか……？　二十越えているはずなのになぁ。
大人の女性としての色香というよりも、年頃の娘の可愛らしさが似合う人だよ、本当に。
本人としては甚だ不本意なのだろうがな。

まあ、それは置いといて、山田先生は何かヤバイ事を言おうとした瞬間、阿修羅の表情となった千冬さんにアイアンクローをされて、頭から持ち上げられると、そのままの体勢で彼女は連れて行かれる。
無論のこと悲痛な悲鳴を上げながらである。

南無南無、と山田先生の冥福（死んでいません！！ｂｙ　やまや）を祈った俺は、一瞬だけ部屋でごろ寝か近くの街に出掛けようかと考えたのだが。
携帯がメールの着信を知らせてくる。

『部屋でごろ寝なんて、許さないからね☆必ず来てね！ｂｙ　一夏』

「……　近くの街にナンパにでも出かけたら……　地の果てまで追いかけてきそうだ……」

俺がこんな事を考えた時という、あまりにもタイミングが良すぎるメールに俺は少々戦慄しつつ、部屋に入ると必要な装備一式を持って、更衣室が用意されている別館へといそいそと歩いて向かうのだった。

途中でセシリアと会って、なんかオイルを塗って欲しいとか頼ま

れたから、二つ返事でＯＫを出してしまったんだが、早まったか？

所変わって砂浜では既に多数の女子達が、年頃の娘特有の元気さを発揮していて、華のある光景を展開していた。

「弾の奴、おっそいわねぇ……」

「うーん、弾は海に入ろうとしないから、着替えもしないと思うんだけど……　どうして時間が掛かってるんだろう？」

そういってビーチパラソルの下に惹かれたシートに座り、冷たいお茶を飲んでいるのは一夏と鈴である。

ここで一夏の水着を紹介しておこう、どうやらビキニタイプらしく上下とも白を基調とし、ふちがピンクと赤の中間点の色をして、

リボンが胸の中央にあしらわれているデザインであり、かなり露出があるものである。
　下も同じ配色のビキニだが、青を基調としたパレオに包まれていた。

　鈴の方は原作参照。

「んっ！？」

「どうかしたの？　鈴」

「なんか、重要な所が端折られた気がしただけよ」

「……？」

　鈴の表情が不愉快気に歪んだのを、一夏が気にして問いかけると鈴は変わらない様子で彼女の言葉に答える。
　こうなってはわけが分らないのが一夏だが、彼女は数秒の間小首を傾げていたが、気にしないことに決めたらしい。
　一夏は海の方へと視線を戻して、待ち人である一人の少年を待つ体勢に入るのだった。

「二人ともここに居たのだな」

「箒」

「あら、箒じゃない」

そんな二人に、一夏と似たデザインの水着を着た箒が近づいてくる。

一夏と合わせたと言う訳ではない様だが、趣味が似ているのだろう。

二人と合流した箒は彼女達の近くに座り、持って来ていた飲み物を口にしていた。

「弾の奴はまだ来てないようだな」

「ええ、あいつってさ、私達と海に来たときは専ら荷物番してたからね、着替える必要なんてないと思うんだけど」

「今日は珍しく着替えてるみたいでさ、さっき更衣室によってからビーチに行くって、メールがあったの」

「……　そうか」

そういって黙った箒だが、その次にシャルロットやセシリアにラウラといったいつものメンバーが揃い、談笑していたときに、ソレ

は現れた。

「え、ちょっと、アレなに？」

「ビーチであんな格好をしてる人って、始めてみたけど……」

「て言うか、酸素ボンベを背負って耐圧スーツとかの深海装備一式を装備なんて、誰よ？」

なんていうざわざわとした声が聞こえたと同時に、一夏と鈴の眉が急角度で吊りあがる。

彼女達は思う。

あの野郎、なにやってんだ。と。

全員がそちらを見れば、深海百メートル近くでも余裕で行動出来そうな耐圧スーツに身を包み、大きな酸素ボンベを背中に背負い、両手には非常時に緊急で膨らむと思われる浮き輪を内蔵していると思われる膨らみ。

そんなものを装備した不気味なモノがのっしのっしとビーチを歩いて、こちらへと向かってくる。

女子達は得体の知れない存在に引いているのか、モーゼの如くソレが通る道を開いていくのが見える。

鈴は次の瞬間走り出す。

「こんのぉ！バカ弾！！なにやってんのよあんたわぁーーーーーー！！！！！！」

『よう、鈴、ぶるぅあああああああ！！！』

自分に向けて砂塵を撒き散らして走ってくる鈴に気が付いたらしい。

ソレ、否、弾はプラカードを掲げて会話を試みようとしていたが、鈴の情け容赦など全くないシャイニング・ウィザードをくらう。

だが、プラカードの文字に一瞬にして悲鳴を表す文字が現れたのは、気にしない方が良いであろう。

一夏と鈴を除いた少女達は、呆然としていることから、彼の行動が如何に突飛だったかが分るだろう。

だが、一夏は本当に頭痛を感じているように、頭を抱えているのは、言うまでもない。

第２４話　ついに来ちまったよ……　こうなりゃぁ覚悟を決めて！近くの街に大

因みに、弾はこれらの装備をレゾナンスにてそろえております。

第２５話　な～んか進みが遅い気もするが……　まあ良いか（前書き）

ビーチバレーのシーンは、実はプロットとは大きく違っていたり……
どこかのエセスポ魂漫画みたいな展開になったので、大きく添削し
ての執筆となっております。

第２５話　な～んか進みが遅い気もするが……　まあ良いか

シャイニングウィザード、回し蹴り、正拳突き、掌底。
これらが弾が鈴より受けたコンボの一例である。

他にも色々と格ゲーに出てきそうな技を鈴が放っていたのだが、そこは割愛する。
最終的には２１４ＨＩＴという文字が弾の頭上に躍っていたのだが、それも華麗に全ての人間が流していた。

「なんて格好をしてんのよアンタは！！」

『しゃあないやん！！俺海が苦手なんや！！だから、こんな格好してでもしゃあないやん！！』

「やかましい！皆引いてるし、人によっては怯えてるじゃないの！！」

『でもそんなの関係ねぇー！！！』

「脱ぎなさい！！今すぐに！！」

『お、俺を殺す気なのかー！！』

「こんな遊泳専用海岸で、海に入ったくらいで溺れる訳ないでしょうが！！！」

『イヤー！誰かぁ！誰かぁ！！犯されちゃうぅぅぅ！！！』

「誰が犯すか！！っていうか、アンタはあたしを犯す側でしょうがぁ！！！！」

『ぬ、脱がさないでぇー！！！』

耐圧スーツヘルメットから、ダバーと滝のような涙を流して、プラカードで抗議してくる弾に、鈴は彼の胸倉をつかんで容赦なく前後に揺さぶりながら言っていた。

それと同時に提示される弾のプラカードには、状況に応じて適切な言葉ばかりが書きつられていくのだが、弾が書いている内容を変更した形跡はないというのに、どうしてか内容は勝手に変更されていくのは、もはや完全にそういう仕様としかいえないのだろうか。

そんなプラカードに記載される言葉に対して、一つ一つ鈴は反応を返していくのだが、きちんとプラカード内の言葉を読んでから返している辺り、相当に律儀なのだろう。

「ね、ねえ一夏……　弾のあの格好って一体？」

「お願い、聞かないでシャルロット……」

「う、うん」

「ふむ、流石は私の旦那様だ、苦手なものを克服する為に、重装備となってまで、努力しようとするとは」

「「「……」」」

目の前で弾の耐圧スーツを剥ぎ取っていく鈴を視界に納めたシャルロットは、一夏に対してそう問いかけるのだが、頭痛を堪えるように行っている一夏を見て多少引きながらも、頷いていた。

だが、対照的に何かが間違っていることを言い出した銀色の髪の少女が放った言葉に対しては、流石に全員が沈黙するいがいにはなかった様子であった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２５話　な～んか進みが遅い気もするが……　まあ良いか～

遂に俺は脱がされてしまい、トランクスタイプの水着一枚とされてしまう。

「うう……　俺の生命線が……」

「なにが生命線よ、全く」

「一夏と鈴も、苦労してきたんだろうね……」

「本当よ、弾の奴はいつも突飛な事をしでかすから、本当に読めないのよ」

シクシクと泣いている俺を呆れたように見ている一夏に鈴と、シャルロットの三人だが、甚だ不本意、尚且つ不名誉なことばかり言われている気がするのは、気のせいだろうか。

まあ、砂の城作ったりとか海に入らない遊びをやってりゃ問題ないか、と考えて俺は立ち上がるのだが、周囲にいる女子たちの視線が俺の体に釘付けになっている。

どうしてだろうか？　普通の平均的な男子の体つきをしていると思うんだが。

「ご、五反田君の体って凄い……」

「うん、凄く鍛え上げられてるって感じだよね……」

「腹筋も割れてるし、胸板も凄いよ……　あれで抱きしめられたりしたら堕ちちゃいそう……」

「うん、微妙にしか見えないけど……　あっちも凄そう……」

「ジュル」

「うほ」

なんか、性的な意味で身の危険を感じる視線が多数に、純粋に俺の鍛えられた体に感心する視線も多数感じる。

特に性的な意味で身の危険を感じる方の視線の中には、爬虫類が獲物を狙うような視線と、かなり危険すぎる気配も混じっている気がするんだが、き、きき気のせいだよな？

まあ、それは置いておいてと、この体って本当にチートなんだよなぁ。

小さい頃から鍛えてるんだが、前世とほぼ同じ運動量か、それ以下程度なのに既に腕はちょっと力を込めればいい感じの力瘤は出来るし、腹筋はガチガチで力を込めてなくても割れているしな。

他の部分も筋肉ダルマに見えないようでいて、実際には筋肉の塊という状態だし、出せる力も半端ない。

中学の頃に腕相撲で全学年男子全員抜きの偉業を達成できたのは、流石にビックリしたがな。

あ、無論なんかしらんが俺のペット達も参加して、彼らも俺と同じく全員抜きを達成していたが……　本当にあいつらって犬と猫、なんだろうか？　動物、だよな、新種の動物に進化してました！とか言わないよなぁ。

「コホン！それはそうと、弾さん、わたくしとの約束は覚えてますわよね？」

「ああ、オイルを塗ってくれって奴だろ？」

「「「「「え？」」」」」

場の雰囲気と話題の流れを変えるためか、セシリアが一度大きく咳払いをしたと同時にそういってくる。

まあ、最初はあんな格好をしていたから有耶無耶になる、なんて

考えて安請け合いをしてしまったんだが、やはり早まってしまっていたようだ。

俺の後ろで一夏達の瞳が妖しく光るのが分るし、一夏の瞳は不満そうな色を浮かべている。

「そんじゃあ、塗るが後ろだけで良いんだよな？」

「え、ええと出来れば、前もお願いしたいのですが……」

「フッ望む所だセ「はいはい、セシリア、オイルなら私達が塗ってあげる」え？」

「そうだよ、弾はケダモノだからね、僕達と一緒に塗りあいっこでもしようよ」

「そうだな、私も塗るのを忘れていたからな、一夏達に手伝ってもらうとしよう」

「ちょ、ちょっと皆さん！わたくしが一体何を「クスクス、せしりあ、抜け駆け、なしって言ってたよね？」そ、それは……」

「「「「それは？」」」」

「は、早い者勝ちですわ！！！」

なんて言いながら、セシリアを取り押さえて身動きを取れなくす

るシャルロットと、同じ作業を無言で淡々とこなす鈴、箒もオイルを取り出しながら一夏達という部分を強調してそういっている。
流石に皆のこの行動にはセシリアも仰天したらしく、目を白黒させながら必死の様子で問いかけていたのだが、一夏が見るものに恐怖を与える表情で何かを耳元で囁いたら、一瞬恐怖に包まれたセシリアだが、ドーン！という効果音が適切な様子で叫んでいた。

まあ、その後はセシリアは皆に囲まれて水着を俺からは見えないように剥ぎ取ると、オイルを塗っているらしい。

「ひゃぁん！み、皆さん！せ、せめてオイルは手で温めてから塗ってください！」

「良いから良いから、セシリア次は僕を塗ってもらうから、よろしく」

「その次は私だよ、セシリア」

「ふむ、では次は私をお願いするとしようか」

「んじゃ、ちゃっちゃとやってしまいましょうか」

「あ、い、いゃぁ…　ん、あぅ！」

姿が見えないからか、無茶苦茶エロい！特に最後、どこに誰が触れているのかは分らんが、セシリアが声を堪えているのが余計にエ

ロく感じる。
おっきしちゃいそうだお！って感じになったので、早々に離脱することにしたのだが、三歩ほど後ろに誰かの気配を感じたので振り向いたら、ラウラがいた。

「ラウラ、お前さんはあれに混ざらなかったのか？」

「私は既に塗っていたのでな、何も問題は無い」

「だけど、お前さん」

「なんだ？」

「どうして俺の三歩後ろを歩いてたんだ？　別に隣を歩けば良いだけだろ？」

「妻とは隣ではなく、夫の三歩ほど後ろを歩くべし、とクラリッサに聞いたのでな、それを実践していただけだ」

「……」

俺の問い掛けにラウラは無い胸を張って、堂々と答えているのだが、どうしてただろうか。
無茶苦茶ツッコミを入れてしまいたいのは。だけど、どこにツッコミを入れていいのかもわからねぇ！！

なんて考えて頭を抱えたい衝動に包まれている俺を、ラウラはハテナ顔で見ているのだった。

誰のせいでこうなったと思ってるんだか、このお姫さんはよ。

などと言いたい気持ちも抑えていたけどな。

それから俺とラウラはこれからどうしようか、と頭を悩ませようとしたときに、クラスメイト達が近づいてくるのが分った。

「あ、いたいた！五反田くーん！」

「お、相川さんじゃん、どったの？」

「ねえねえ、ビーチバレーしようよ！」

「ごたちーと対戦！ばきゅんぱきゅん！」

そういって相川さんにのほほんさんと他一名を加えた、いつものメンバーであった。

だけど、のほほんさんの水着（？）は相変わらずピカ〇ュウっぽいんだが、暑くないのかね？

だけど、気になるのはのほほんさんの尻尾と耳だ、さっき動いてなかったか？　この二つって。

まあ、それは置いといて。

「大丈夫だけど、面子はどうする？　一人足りないぞ」

「ならば私も参加するとしよう」

「お、織斑先生！？」

俺の疑問に全く別の第三者が答えていた。

全員がそちらを見れば、俺の選んだ水着に着替えた織斑先生がそこにいて、全員が驚きの表情と共に、女子達は織斑先生のスタイルに目を奪われている様子であった。

「弾、妻の目の前で鼻の下を伸ばすな」

「おっと失礼、というかラウラ、俺は結婚した覚えなんて無いんだが……」

「心が通じ合っていれば問題ない！」

「なんだ、とりあえず良い台詞を言ってみたぜ！！的なそのノリは！？」

「ダメか？」

「もう、いいや」

もはやツッコミ切れねぇ！！ラウラのノリって本当にどこから来てるんだ？　マジで一回クラリッサとは連絡とった方が良いかもな。主に俺たちの精神安定の為と、どうやってこいつをこんな風にできたのか、という所でな。

だが、織斑先生の雰囲気がちょっと怖いのは気の所為か？　なんか自分の彼氏が目の前で別な女とイチャイチャしているのを、見せつけられている彼女とでも言えそうな雰囲気を放っているんだが。

表面上は全く表情に表れてないから、俺の勘違いというか自意識過剰とも言えそうなんだが、なぁ。

怖いから能力に問いかけるのは、やめておこう。

「えーと、まあビーチバレーをやるとして、メンバーはどうします

？」

「では、私と布仏に櫛灘に、そっちは五反田にボーデヴィッヒと相川、これで良いだろう？」

「うっす」

織斑先生の言葉を聞いた俺たちはそれぞれ別れると、ビーチバレーを始めることとなった。

そして訪れる普通の生徒である相川さん達にとっては、地獄とも呼べる時間。

「はぁっ！合わせろラウラ！！」

「フッ！任せろ！これを防げますか！？　教官！」

俺がレシーブで打ち上げたボールをラウラが一瞬でジャンプして、打ち出す。

撃ち出されたボールは、まるで砲弾の如き速度と音を発しながら織斑先生の所へと向かう。

「う、うわわわぁ！！」

「こ、これは凄いー！」

「フッ、甘い！」

これをみた櫛灘さんとのほほんさんは泡を食って逃げ出し、射線上から退避する。

だが、射線上にいるはずの織斑先生は不敵な笑みを浮かべた瞬間、それをレシーブしてこちらへと打ち返してくる。

「もらいましたよ！教官！な！？」

「フッ、まだまだ甘いなボーデヴィッヒ」

「んなのありかよ……」

打ち返されてきたボールをラウラがレシーブし、俺がスパイクをする為に構えた瞬間、ボールはいきなりカーブを描いて、ラウラの横を通っていく。

流石の俺もこれには度肝を抜かれたというか、天然チートの真髄を味合わされた。

クソッ！ここまでの芸当が出来るとは！手加減はやめだ！！全力でいってやる。

「ラウラ」

「どうした？」

「手加減できる相手じゃない、全力で行くぞ」

「ああ！」

「面白いぞ青二才共、私を越えて見せろ！！」

それから始まる少林サッカーやら、トンでもテニス漫画並みの理不尽展開に、技の数々。

だけど、俺と織斑先生は兎も角として、ラウラが普通に付いて来ているのが、謎だ。
どうしてこいつって、付いてこれるんだろうか？　あ、こいつって織斑先生の教導を受けたんだっけ、それだけで納得できるわ。

「これってさ……　普通のビーチバレーだったはず、だよね？」

「なんか、別のお話になっちゃってない？」

「うーん、ごたちーは凄いねぇ～」

「「って、これを見て言う所はそこ！？」」

付いていけてない普通の方々はちょっと引きながら、俺たちの戦いを見守っていたりしていた。

「受けてみろ！ハイエンドクラッシャースパイク！！！」

「なんの！ラウラ！」

「了解！打ち返して見せますよ！教官！ローエンドブレイカー！！」

「フンッその程度か！？」

「それはこっちの台詞です！織斑先生！うなれ！俺の右手ぇ！！」

「お前達では私に勝てん！！」

それからも俺たちと織斑先生の白熱しつつも、何かが激しく間違った戦いは続いていく。

途中から一夏達が、臨時観客席でぼーぜんと見ていたのだが、俺たちはそれも気にならないくらいに戦いに熱中していたのだった。

砂浜に小規模のクレーター的なものを作り始めた所で、山田先生や一夏達に制止されて勝負は中断されるのであった。

多分、ありゃあ、今日一日使っても決着付かなかったから、ちょうど良かったし、ストレス発散になったから凄くすっきりした！

ただ、山田先生の背中がちょっと哀愁を帯びてたのは、ちょこっと申し訳ない気分になった。

それから時間は過ぎて、夕食。
あれからのこと？　まあ、普通に昼飯食って、一夏達と普通にビーチバレーして過ごしたよ。

え、トンでも展開になったんじゃないかって？　一夏は通常時は普通の人間としての運動能力しか持ってないんだぜ？　そこは空気を読んで俺も行動するさ。

まあ、とにかく夕食なんだが、俺の両隣にはセシリアとシャルロットが座っている。

「んっく……　つぅ……　あぅ」

台詞だけを聞けば怪しいコトをしていそうに聞こえるが、そうじゃない。
単純にここは旅館で、尚且つ広間での食事に加えて、俺たちは浴衣を着ているからな、女子は必然的に正座をしないといけないわけだ。
胡坐をかいている姿を見たいという気持ちは、大きくあるから、胡坐をかくのも大歓迎だよ！といいたいが、言った瞬間にしそうな人間が何人もいるから、迂闊には言えないな。

とにかく、セシリアは正座に慣れていないようで、さっきから足を崩したり、また正座に戻して苦しそうになったりしているのだよ。

「大丈夫か？　セシリア」

「だ、大丈夫ですわ」

「辛いのなら、テーブル席に行くと良いぞ、さっきラウラも行ったしな」

「大丈夫です！……　ここを獲得する労力と心労に比べたら、このくらい……」

「？」

「な、なんでも、なんでもないですわ！」

ラウラの奴は食事中の正座は嫌な様で、さっき迷い無くテーブル席の方に行ったから勧めてみたんだが、セシリアから帰ってきたのは、拒否の返事だった。

まあ、ここに座ってしまったし、プライドも高いセシリアのことだから今更、移動したくは無いんだろうがな。

だけど小声で何かを言っていたんだが、俺には聞こえなかったから、聞こうとしたら誤魔化された。

まあ良いか、とりあえず飯だ飯。

「ふぅ～む、昼も思ったが、飯が豪華だよなぁ、わさびは本わさだし、刺身はカワハギに加えて多分近海で取れたてのアジとかもあるし、子鍋は本格的な水炊きときたもんだ」

「ほんわさ？」

「およ？　シャルロットは知らんかったか、本物のわさびをすりおろした奴を本わさって言うのさ」

「でも、学園の刺身定食にもわさびって付いてるよね？」

「あれは練りわさ、まあ、最近の奴は技術が進んだおかげで、練りのほうでも味がかなり良いからな、俺ん家の近くにある寿司屋とかじゃ本わさと練りわさを混ぜたりしてるぞ」

「そうなんだ、あむ」

「ちょ、おま」

シャルロットの疑問に答えていくのだが、彼女はフランス人だし知らないのは無理も無いというか当然だろう。

セシリアも知らなかったしな、以前彼女から行って見たいとの希望を聞いて、俺の定食屋の近くにある寿司屋に連れて行ったんだが、

セシリアって信じられない行動をしたし。

その寿司屋じゃあ、常連さんやら顔見知りには刺身を出したらわさびを一本丸ごと出すのさ、その場ですりおろした方が風味が良いしな。

ちょうど良い大きさにスライスされていて、皿にも乗っているからな、まあ料理に見えなくも無いけど、俺の言葉も誤解を与えたんだろうかね？　これがまた美味いんだとかいったし。

だけどなにを考えたのかセシリアはなんと齧ったのだよ、わさびをな。

しかも俺がわさびを摩り下ろしている横で。

その時の騒ぎは凄かった、顔を真っ赤にしたセシリアの大騒ぎしてが凄まじい騒ぎになったし。

まあ、それは後というか別の話になるからここまでだけどな。

シャルロットもここでセシリアと同じ事をしている。

なんと、一山丸ごと口に入れたのだ。

まあ、どうなるかは分るな！

「ッーーーーーーーー！！！」

「大丈夫かシャルロット！？」

案の定というか、当然の帰結として涙目になって鼻を押さえるシャルロットの姿が降臨することとなる。
セシリアはシャルロットの姿を少々懐かしそうに見ているが、まあ、気にしないことにしよう。

「ら、らいひょうひゅ……　ひゅ、ひゅうみがあってほいしいほ……」

「全く、ほら、お茶を飲んで口直しをしろ」

「う、うん……」

因みに今の騒ぎを箒と一夏も見ていたらしく、離れた席から、うわぁ、という表情で見ている。
箒と一夏は隣同士に座っていて、ニコニコと笑って会話しながら食事をしている様子だった。

「……っ」

と、ここで再びセシリアが苦しそうな声を上げる。
ふむ、また移動しろといっても嫌がるだろうし、食事も進まない

だろうからなぁ、しょうがない。

「辛いのなら、食べさせてやろうか？　セシリア」

「え」

「だから、食べさせてやろうか？　そのままじゃあ飯も食えないだろうし」

「ほ、本当ですの！？」

「ああ」

「では！お願いいたしますわ！せっかくのお料理を残してしまうのは、もったいないですものね！」

見るに見かねてそういったら、最初こそ飲み込めてなかったようで疑問顔だったのだが、すぐに意味を飲み込んだセシリアは嬉しそうに顔を輝かせてそういってくる。

俺もそうするつもりで言っていたので頷くと、より嬉しそうに顔を綻ばせたセシリアは俺に向けて箸を渡してくる。

なんか、シャルロットは怒っているというか、仕方が無いと諦めようとしているか、という微妙な雰囲気なのがちょいと気にはなった。

「んじゃ、どれが良い？」

「では、お刺身から、あ、わさびは少量でお願いします」

「おう」

「……（どきどき、どきどき）」

「んじゃ、アーン」

「アーン」

セシリアの希望を聞いた俺は、わさびをちょこっと付けて、カワハギの刺身をとりセシリアの口へと持っていく。

定番の掛け声？みたいな声と共にセシリアの口へと持っていくのだが、ここが何処かを考えればどうなるかど分るだろう。

「あー！セシリアが五反田くんに食べさせてもらってる！？」

「えー！？　セシリアズルイ！！」

「そうだそうだ！卑怯者！」

「正々堂々と勝負しなさーい！！」

一人に見つかってから連鎖的に全体へと広がっていく不満の声、セシリアはこれに驚いた様子であったのだが、急いで租借して飲み込んでいた。

セシリアが何かを言い訳なのかしようとした瞬間、大広間の外から凄い足音が聞こえてくる。

「お前達は静かに食事をすることが出来んのか!?」

「お、織斑先生……」

「この騒ぎの元凶はお前か、五反田」

「うぃっす」

「余計な騒ぎを起こすな、鎮めるのが面倒だ」

「了解でっす」

それから織斑先生は立ち去っていき、生徒達の間に安堵の声が広がる。

この状況下で更に食べさせようとしたら、次は実力行使だろうかね。

なんて考えた俺は、セシリアにすまなさそうな視線を向けながら箸を膳においていた。

「すまんけどセシリア、これ以上やったら織斑先生が確実に実力行使してくるから、ここまでな」

「むぅぅぅぅーーーーーーっ！！！！」

「いや、だからすまんって、お、そうだ……　その詫びと言っては何だが後で俺の部屋に来いよ、織斑先生の隣の部屋だから」

「……　へ、そ、それは弾さん？　もしかして……」

「そういう意味にとってもらっても構わないなんていったら？」

「～～～～～～っ！！！」

まあ、お詫びにとあることをしようと思ったので部屋に呼んだんだが、この娘、ナニカ勘違いをなさってないかね。

冗談で言った俺の言葉を更に真に受けたような様子だし。

まあ良いか、でも、一夏の不満の現し方が大人しいのが気に掛かる……　こっちをジトーっとした目で見ているだけで、瞳がハイライトを失ってないんだよ。

なんか、巨大台風が来る前の静けさに似ている。

うん！気にしないことにしよう。

第２５話　な～んか進みが遅い気もするが……　まあ良いか（後書き）

次回、いや、その次辺りで銀の福音戦に入れるかな。
とか考えています。

番外というか短編集見たいなもの　改！！（前書き）

これから、気が向いて番外編的なものを書いたら、ここに投下します。
あまりこういうので、話を乱立させても……　と思ったので。

番外というか短編集見たいなもの　改！！

ある日の特訓風景

ここは放課後のアリーナ、今日も特訓が面倒だった俺は、逃げようとした瞬間にシャルロットに抱きつかれて身動き取れなくされた所に、一夏とセシリアによって簀巻きにされて、ラウラによって運ばれたので、楽園を拝めることも無くアリーナに着くのだった。

「何か最近、俺の扱い悪くね？」

「逃げるからだ」

「逃げるからだよ」

「逃げずに普通に付き合って下されば、普通にします」

「逃げちゃダメだと僕は思うよ、弾」

「フム、逃げるのもある一種の戦術ではあるが、こういうときは付き合うのが礼儀だろう？」

にべも無いお言葉の数々、非常にありがたい言葉に涙が出そうだった。

「また逃げようとしたっての？　こりないわね、あんたも」

更に鈴が登場、出入り口に仁王立ちで立っているから完璧に詰んだか、なんて考えていた俺を無視して、少女達は会話を進めていく。

「それで、今日はどういう事をするわけ？」

「そうだね、今日は近接戦闘関連の特訓をしようか」

「それが良いか……　一夏の特訓にもなるからな」

なんて言って今日の特訓内容を決めていく皆様。

俺の意思は、無視っすか？

そう言いたくなる光景ではあったが、俺は一瞬で全身の関節を外して、簀巻きから脱出する。

この光景を偶然目にしたシャルロットの驚いた表情が印象的だった。

「弾ってさ……　本当に人間？」

「失礼な、純度１００％混じり気の無い人間だ！」

簀巻き状態から脱出して、再び間接を一瞬で元に戻した俺に、シャルロットの容赦の無い突込みが炸裂する。

他の連中は見ていなかったが一夏と鈴はシャルロットの問い掛けに気が付いたらしい、呆れたというか理不尽なものを見たときの諦めというか、そんな感じの溜息を吐いていた。

「シャルロット、こいつは一応人間（笑）だから、細かいことは気にするだけ無駄よ」

「そうそう、弾と付きあってると、こういう所が凄く出てくるから、自分の中で折り合いを早くつけないといけないよ」

「うん、そうする……」

「何気に失礼だよな、お前達って……」

一夏と鈴の言い方にはちょっと怒りを覚えないでもないが、自分の中にも、まともな人間としてその動きとかどうよ？　といいたくなる動きとかの心当たりはあるので、強くはいえないのだった。

とここで、変な方向へと流れていった話の流れを元に戻す為に、箒の咳払いの音が聞こえてきた。

「取り合えずだ、今日の近接戦特訓の内容だが、一夏は剣以外で扱える武器とかはあるのか？」

「一応、弾に中学の頃にトンファーの扱い方なら、習ったことがあるね、後は軽い素手での護身術とかだね」

「ふむ、流石は旦那様だ、何でもありというわけか」

箒の問い掛けに一夏は答えていくのだが、素手での護身術は教えておいた方が、もしも誘拐とかされそうになった時に、逃げられるように教えたんだよなぁ。

だけどトンファーはハッキリ言って調子こいてたとしか言えん。

何で俺ってトンファーの扱い方を教えたんだろうか？　メリケン

サックとかの扱い方を教えた方が良いような気もするんだが。
まあ、教えている間、何か一夏は密着してのレクチャーをねだって来て、鈴も邪魔するように参加していたけどな。

そんな俺の目の前には、ＩＳを展開した一夏と箒がおり、トンファーは何故か鈴の奴が持っていたので、それを借りているようだった。

「久しぶりだね……　これを使うのも」

「やはり、扱いには慣れているようだな」

鈴から受け取ったトンファーを一夏は懐かしそうな表情を見せたあと、思い出すように両手に持ったトンファーを様々な構え方や、打ち込みの型を反復するように扱っていた。
関心したような声を上げるラウラと箒にセシリアたち、何かシャルロットだけがちょっと嫌な予感を感じているような表情なのは、気のせいだろうか？

まあ、それは置いておいて、彼女達のテンションは上がっていき、箒は戦士が浮かべる少々獰猛な笑みを浮かべて一夏を見やり、一夏は箒を真正面から見据える。

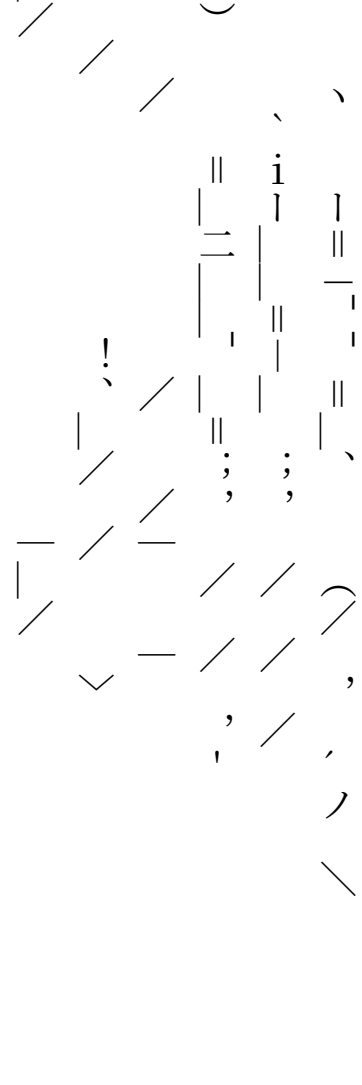
「行くよ！！箒！」

「どこからでも掛かって来い！！一夏！！」

そして、緊張感が最高潮に達したとき、一夏はそういって箒へと向かっていき、攻撃の為に体制を変える。

「トンファ～！キーック！！！」

「は？」



、、
―、

注：ＩＳは着て行います

そう！一夏が繰り出したのは懐かしのトンファーキック！！いや、本当にこれ好きなんだよな。

「いや、ちょ、ええ！！」

「というか、トンファーを使わないんですの！？」

「ふむ、理に叶った戦法だ、トンファーを使うと見せかけて実際にはキックか……　是非とも見習うべき技だな」

「見習う必要ないからね！？　ラウラ！」

「そうですわ！！？」

てっきりトンファーとの打ち合いになると思って構えていた箒は、完全な不意討ちを受けたようなものだった。

無防備なボディに突き刺さる膝蹴り、一夏ってやっぱ千冬さんの妹だからか、ケリとかの鋭さと威力ってとんでもないんだよなぁ。

うわ、痛そう……　なんて考えてしまうのも無理は無い所だろう。

「グッ！ゴホッ！ゴホゴホ！！一夏ぁ……！！！！！」

「え、えっと、ゴメンね箒！こんなに綺麗に決まっちゃうとは思わなくて！！」

「というか、なんだこの攻撃方法はぁー！！！！」

「うわ、うわわわわ！！落ち着いて！箒～！」

「そこになおれぇ！こんな攻撃を行った根性を叩きなおす！！！！」

「うわぁ～ん！！弾、何とかしてぇー！！」

『ゴメ、ムリ』

腹を抑えて咽こんでいる箒は、一夏に対して静かな怒りを称えた目を向ける。

それを真正面から浴びた一夏は、腰がかなり引けながら謝りつつ後退して行く。

箒の怒りが凄まじいことに気が付いたのだろう、というか、箒って実直な性格だからなぁ、それに一夏は元だが箒と同門だったんだから、怒りも二乗されいるだろう。

そして始まる一夏と鬼の形相となった箒の追いかけっこ。

俺はアイコンタクトで一夏にそう答えると、一夏は更に絶望したような声を上げるのだった。
だって、あんな箒を相手にしたくねぇし。

あ、因みに後で俺も箒にぼこられたよ……　ちくせう。

そのニ、とある亡国な機業の憂鬱な日。

ここは戦前から存在するとある巨大非合法組織の秘密造船ドック。
近くに海はあるものの、断崖絶壁な上に、周囲にはドックを設けられそうにない地形なのだが、どうやら地下にドックを設けているらしく、地上からは確認できなかった。

この組織は各国にある最新型のＩＳを強奪し、それを使用していることから各国から捜索をされているのだが、それを掻い潜って未だに各国への強奪行為と、あまつさえこういった秘密の施設を作る

などという力の強大さも見せ付けていた。

今現在ここでは各国から強奪した、ＩＳ運用を円滑にする為の潜水艦の建造が急ピッチで進んでいた。

極秘裏に各国ＩＳを強奪した際の回収や、各国に侵入した工作員の回収が主な任務となるので、この潜水艦はステルス性にかなりの重要性が向けられて設計されていた。

やはり、秘密造船ドックというからには入り口に当たる場所は、警備が厳重であり。

巧妙に自然と同化する様に配置された監視カメラに、熱源探知装置といった類の監視装置類に加えて、偽装して周囲の森に潜んでいる狙撃手に、哨戒部隊の人間達。

とてもではないが、侵入出来そうにないとも思えるここの周囲を、先程から何者かの影達が動き回っていた。

その影達はかなり小柄ではあるのだが、一つや二つといった影ではなく、周囲を４０ほどの数が動き回っていた。

それらの影は一つの場所に集まり、司令官と思しき影が周囲の影に何らかの命令を下す。

どうやら特殊部隊の隊員とも言うべきか、彼らはそれぞれが持っている時計の時刻を司令官のものと合わせている様子だった。

全ての影が時計の時刻合わせを終了させて、一つの影が手に何らかの装置を持って合図を行う。

全員が、それに頷いた瞬間、影はその装置に存在しているボタンをポチっと押す。

その瞬間、造船ドック入り口と内部から大爆発が起こり、爆炎と爆風が辺りを支配する。

一瞬にして大混乱に包まれる施設周辺、それと同時に影達は一斉に施設への突入を開始、それぞれが手に持つスコーピオンサブマシンガン（特種ゴム弾入り）を構え、周囲にいる人間達にスタングレネードとスモークグレネードを投擲、一斉制圧を開始しつつ内部へと向かっていくのだった。

既に施設内は警報が響き渡り作業員などの組織の構成員達が、走り回っていてまさに『おもちゃ箱をひっくり返したような』騒ぎになっていた。

「建造中の潜水艦が動かないだと!?」

「さっきまでは航行システムに問題がなかったのに、急にエラーが出たんだ!!」

「あの爆発の所為か！？」

「しらねえよ！！っ！？　敵グアッ！！」

「リキッド！！う、うぉ……　は、腹が……　グォッ！！」

「ジ、ジョニー！！！」

ここに居たのは四人の男性で、まずは金髪の男と覆面をして額にJと書かれている謎の男が、スモークグレネードの効果なのか、視界の効かない中でゴム製の弾丸の一斉掃射を受けて、一瞬で無効化される。

残る二人は、それぞれ拳銃を構えて応戦の構えを見せるのだが、廊下の向こう側の煙が晴れて襲撃者の姿を見た瞬間、思わず茶色の髪を持つ男性は全ての動きを停止させる。

「避けろ！ソリッドォ！！！」

「ソリダスぅ！？」

動きの停止した男性へと向けて、襲撃者は冷静に、尚且つ、冷酷にサブマシンガンを構えて引き金を引く。

それは届くことはなく、後ろにいた男性がソリッドと呼んだ男性を庇うことで、全てが防御された形になっていた。

それを見たソリッドの瞳に怒りと言う感情が浮かび上がり、銃を構えて撃とうとした瞬間、別の方向からスタングレネードが投げ込まれる。

「ぬぐぁ！！ほ、本部……　襲撃者の正体は……　犬と猫だ！！」

どうやらスタングレネードに気が付いて、ギリギリで防御措置を取れたらしいが、既に体はフラフラになっている状況下、彼の前に悠然と二足歩行で歩いてくるのは、愛らしい姿の犬と猫、である。

まだ気絶していない彼に向けて、所謂【ザ・ボス】装備に身を包んだ犬は冷静にマシンガンを構え、一発のゴム弾を発射して彼の意識を奪うのだった。

「な、何で犬！？」

「こ、こっちには猫だ！？」

「というか、なんなんだよこいつら！？」

各所で上がる悲鳴に怒号、彼らの混乱振りが窺える。

だが、ここで警備に入っている者達も襲撃者達の狙いを知る。

「本部！奴らの狙いは潜水艦だ！至急M、スコール、オータムらの援護をぐあぁぁぁぁ！」

『どうした応答せよ！？　応答せよ！？』

そう、彼らは真っ直ぐにドック内に係留されたままになっている潜水艦を目指していたのだ。

この狙いに気が付いた警備の人間達は、エラーが出ていて動かない潜水艦の接収阻止の為に爆破を行おうとしたのだが、時既に遅く。

襲撃者達は全て、潜水艦にたどり着いていた。

「にゃっ！（全員、乗艦開始！）」

『にゃ！』

『わん！』

司令官の猫の号令の元、桟橋渡り潜水艦の内部に侵入した彼らは、それぞれが予め決められていた持ち場に付いた後、全システムを起動させる。

「にゃぁうにゃにゃにゃう（内通者はうまくやってくれたようだな）」

「わぅん、わんわん（ご主人から聞いていたときは、眉唾だったがな）」

「にゃおん、にゃうにゃにゃにゃお（フッ、ご主人の情報に間違いがあるはずなどないだろう？）」

「わぅ、わんわうわぉん（そうだったな、俺がどうかしていたよ）」

「にゃ（帰ったらご主人に謝れよ）」

「わん（そうするさ）」

一見しただけでは、なんの会話が行われているのかがわからないので、翻訳した内容もお付けいたします。

ニヒルな笑みを浮かべて会話している犬と猫、本当に彼らは動物と言うカテゴリーに入れてよいのだろうか、という疑問が出てくるのだが。

それは本編中で明かされるかも、知れない。

「にゃあぅぅ！！にゃうにゃう！！（出港！前方のドック扉を破壊せよ！！）」

「わぅ！！！わう、わぅわぅ！（了解！！！魚雷発射管、魚雷装填！！！）」

「にゃぅ、にゃうにゃにゃ！！（魚雷装填及び発射管内注水完了、いつでも撃てます！）」

「にゃぁ！！（発射ぁ！！）」

「にゃぁう！！（発射！！）」

それらのやり取りの後に魚雷が発射されて破壊されるドック扉、大量の海水が流れ込むのだが、潜水艦としては小柄なはずの艦体は揺さぶられることもなく、平然と進み始め暫く行った所で潜航を始めて、その先に広がる海原に姿を消すのだった。

ここは先程まで一隻の潜水艦を巡って、熾烈な戦いが行われていた秘密施設。

潜水艦が建造されていたドックには、豊かな金色の髪を持った女性と、１４，５歳くらいの千冬に「似すぎている」少女の姿があり、どうやら、先程の救援要請によって駆けつけた様子を見せていた。

「やられたわね……」

普段であれば美しいといえる女性『スコール』の表情は、忌々しげに歪んでおり、この事態の重要性を物語っていた。

「フッ……　大量の犬と猫……　それも人と同じ様な動きに、思考をする連中か」

「ケッ！そんな理不尽な奴がいるものかよ！どうせ監視カメラの映像は改竄されたものだろうさ」

口元に小さな笑みを浮かべている千冬に似ている少女と、彼女たちの後ろから粗野な口調の女性が姿を現す。

二人は彼女の方を振り向いて、姿を確認すると口を開いた。

「そうでもないわ、オータム」

「どういうことだよ？　スコール」

「貴女は気づかなかった？　一部の作業員の顔には肉球の跡があったことに」

「おい……」

「事実だろう」

「んだと、M」

「落ち着きなさい、オータム、M、貴女も挑発するようなことを言わないで」

「チッ！」

「フッ」

どうやらMと呼ばれる少女と、オータムと呼ばれる女性は仲が悪いというか、スコールはオータムとMの仲裁に入った様子ではあるのだが、オータムには優しい声のトーンで声を掛けているのに対し、Mには少々厳しめで声を掛けていることから、どうやらMとこの二人の仲は基本的に悪い様子である。

スコールに仲裁されて、オータムは渋々と言った様子をありありと浮かべて舌打ちをしたのに対し、Ｍは無表情で鼻を一度鳴らしただけで答えていた。

「強奪された潜水艦は、あちらから姿を見せない限りは分らないでしょうね」

「どうしてだよ、スコール？　探し出してとっととぶっ壊せば良いじゃねーか」

頭が痛いというふうに額を押さえるスコールに対して、オータムは疑問の声を投げかける。

スコールはそんな彼女を一瞥した後、破壊されたドック跡に視線を向けていた。

「あの潜水艦は、これから私達がＩＳを強奪する際の任務を円滑にする為に設計された代物よ」

「ああ、それは聞いているが？」

「だからステルス性においてはＩＳの技術が使われているわ、つまり」

「まさか！一度海に出られたら、捕捉は難しいってことかよ！？」

「そうよ……　全く、各国からＩＳを強奪している私達が、ＩＳを運用する母艦を奪われるなんてね……　とんだしっぺ返しというわけかしらね？」

会話というか確認のようなものを始めた二人を放置して、Ｍは周囲を見渡していた。

（クスッ、どうやらうまく行ったらしいな……　だけど私にここまでさせて、本気にさせたんだから、覚悟を決めて待っていてね……　私の一番愛しい人）

最後に彼女が見たのは、潜水艦が出て行った巨大な施設の開口部、そこをまるで初恋に胸をときめかせる乙女、という様子で眺めているのだった。

「「……」」

後ろでぼーぜん、と見ている二人を完全に無視して。

因みに某所では。

「何で、犬と猫で潜水艦を強奪できる上に、操艦できるんだよ……」

なんていって、頭を抱えている少年がいたとかいないとか。

ＩＳ風バカテスト！　コメント欄：基本的にやまや　たまに千冬

保健体育

第一問　次の野球用語について答えなさい【タッチアップ】

五反田　弾の答え

『フライがあがった時に走者が打球の行方を見守ること、捕球後は進塁できる』

教師のコメント
　正解です。特に言うことはありません。

セシリア・オルコットの答え
『痴漢をする』というかこれはセクハラではないんですの！？

教師のコメント
　ち、違いますよ！？　野球用語を知らなかったらそうなっちゃいますよね……　以後気をつけます。

シャルロット・デュノアの答え
『痴漢をする』野球に興味がなかったので……

教師のコメント
　え、えーとデュノアさんまで……

　第二問　女性の胸のサイズを現すカップという単位の、一番基本となるサイズを答えなさい。

篠ノ之　箒の答え
『Ａカップ』

教師のコメント
　正解ですね。

織斑　一夏の答え
『ラウラ！』

教師のコメント
　コメントは差し控えさせていただきます。

五反田　弾の答え
『中国代表候補生、凰　鈴音の胸のサイズと一緒です』

教師のコメント
　個人的な情報を漏らさないようにしましょう。

世界史
　第一問　１９世紀末ドイツの宰相は世界最初の社会保険制度を制定し、貧困層の救済措置を行ったが、同時に社会主義者鎮圧法を制定した為に『（　　）とムチ』の政策と呼ばれた。
　?この時のドイツの宰相の名前を答えよ
　?（　）に入る言葉を答えなさい。

ラウラ・ボーデヴィッヒの答え
？ビスマルク
？（　アメ　）とムチの政策

教師のコメント
正解です。さすがボーデヴィッヒさんですね。

織斑　一夏の答え
？姉さん
？（　女王様な宰相　）とムチの政策

教師のコメント
ほぉ……　いい度胸だ……　一夏

五反田　弾の答え
？千冬さん
？（　女王教師　）とムチの政策

教師のコメント
貴様もだ！五反田！

第二問　１９４２年にアメリカ大陸を発見した人物を、フルネームで答えなさい。

セシリア・オルコットの答え
『クリストファー・コロンブス』

教師のコメント
　流石ですね。

織斑　一夏の答え
『コロ・ンブス』

教師のコメント
　フルネームを知らなかったようですけど……　何もそこで切らなくても……

篠ノ之　箒の答え
『コロ』

教師のコメント
　か、過去の偉人になんて事を……

国語

第一問　清廉潔白の類義語を答えて、それをもちいた文章を作りなさい。

織斑　一夏の答え
『類義語：品行方正
文章例：その人は品行方正な人なので、不正をするなんてありえない』

教師のコメント
そうですね、清廉潔白とは後ろ暗い所が何もなく、心や行いが清く正しいことを差します、他の類義語としては青天白日などがありますね。

五反田　弾の答え
『類義語：品行方正
文章例：五反田　弾は品行方正で非の打ち所のない生徒だと、誰もが言っている』

教師のコメント
貴様は一度鏡を見て、自分の胸に手を当ててから良く今までの行動を思い返すと良いだろう。

日本史

第一問　江戸幕府の初代将軍を答えなさい。

篠ノ之　箒の答え
『徳川　家康』

教師のコメント
正解です。特にコメントもありません。

織斑　一夏の答え
『徳川　家康』

教師のコメント
やはり基本的過ぎる問題でしたか？

シャルロット・デュノアの答え
『暴れん坊将軍』弾に教えてもらいました

教師のコメント
五反田に後で指導室に来るように伝えろ。

第二問　戦国時代に楽市楽座政策を行った武将を答えなさい。

篠ノ之　箒の答え
『織田　信長』

教師のコメント
　正解です。篠ノ之さんの家系は戦国時代からあるというので、特に分りやすかったでしょうか？

シャルロット・デュノアの答え
『織田　信長』

教師のコメント
　デュノアさんも正解です。どうやら正しい日本の歴史の知識を身につけてくれてるようですね。嬉しいです。

五反田　弾の答え
『織田　信奈』

教師のコメント
　どちら様でしょうか？

番外というか短編集見たいなもの　改！！（後書き）

まず最初は所見殺しのトンファーキック……　実はこれ一夏はちーちゃんとの姉妹喧嘩の際に使用していたりします。
が、一発で見切られてちーちゃんに逆襲されていたりする。
曰く付きの技でもあります、その後、弾は妹に変なことを教えた、ということでちーちゃんにお仕置きされてます。

第２６話　そういえば四組の専用気持ちの娘って、まだ機体が完成してないとか

夕食も終わり生徒達も入浴を終えた時間帯。
セシリアは鼻歌交じりで、イロイロと準備をしていた。

「～♪」

もしもナニかがあったときのために用意していた新品の勝負下着に身を包み、特別に良い香のする香水を下品にならないように尚且つ、品の良さを強調するように付けていく。

「あ～あ……　せっかく五反田くんと一緒に遊ぼうと思って色々と持ってきたのに……」

「織斑先生の隣の部屋じゃね……」

「それに、さっき出て行った斥候の娘は織斑先生の奇襲に合って、そのまま他の先生が指導室に連れていっちゃったし……」

そう、今の弾は一人部屋なのだ、繰り返す、弾の部屋は一人部屋。

幾ら千冬が隣にいるとはいっても、バレなきゃ大丈夫!!とばかりに、既に数人斥候部隊として弾の部屋に突入を試みたのだが、何故か廊下で待ち伏せをしていた千冬の奇襲に合い、全員があえなく御用となる事態となっていた。

「にしてもさ……　織斑先生って、どうして床の下から出てきたんだろうね」

「……　芹沢さんたちは屋根から織斑先生に奇襲されたって、聞いたね……」

『……　今日は侵入するの止めよう！』

言葉の端々から見える千冬の異常性というか、執念の様なものが垣間見れる話題だった。

十代の少女達は一様に沈黙した後、その意見で全てが一致するのだった。

誰しも好き好んで虎ではない、龍が住む場所に行きたがる猛者はいないということだろう。

そんな中、誰もが沈痛な面持ちとなっている中で、ただ一人セシリアだけはご機嫌な様子である為に、全員の注目が行くのも当たり前であった。

「…あ～！！せっしーがえっちぃ下着着けてるぅ～！！」

「ッ！」

「そ、それにこれわぁー！！」

「の、布仏さん！それだけは見ないでぇー！！

何時の間にやら彼女の前に回りこんでいたのほほんさんが、セシリアの下着に気が付いてそう叫ぶ。

その上に気が付いてはいけない、夜に主に男が使うゴムで出来たナニかにまで気が付いていたのほほんさんは、目を輝かせて大喜びしている様子だった。

「なんだと！セシリアを脱がせ～！！」

「身包み剥がせ～！！」

「そして問い詰めろー！！この裏切り者をー！！」

『おおーーーー！！！』

「え！？　ちょ、あの皆さん！？や、やめ！！！」

ここにいるのは、十代の一番華やかなりし女性たちで、ただでさえ女三人寄れば姦しいといわれているというのに、この部屋にいるのは９人近くもの少女達である。

その上に彼女達は、ただ一人の男である弾にアプローチを掛けられないという状況下であるために、暇もエネルギーもリビドーも有り余っているのが現実である。

そこにスキャンダル！ともいえるセシリアの暴挙じみた行動がどういう結果を齎すのか、簡単な結果である。

全員に詰め寄られて脱がされ、ゴムで出来たナニかは没収の後廃棄の運命に合い、彼女に対する尋問に似た問い掛けが始まるのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第２６話　そういえば四組の専用気持ちの娘って、まだ機体が完成してないとか聞いたが……　本人の了解が得られたら、魔改造しても良いかなぁ？今考えているコア連結とかやってみたいし～

「う、うぅう……　酷い目に合いましたわ……」

鼻をスンスンならし、浴衣もかなり着崩れしているセシリア、彼女の身に何が起こったのかは触れないで置いてあげるのが、優しさというものであろう。

エネルギーの有り余った女子一同からの凄まじい問い詰めの後で、この様子なのだから軽く済んで良かった、とでも言ってあげるのも良いかもしれない。

そんな彼女だったのだが、すぐに気を取り直したらしく、顔を輝かせて。

「とにかく、今から弾さんのお部屋に……　そして、わたくしは……　お母様！セシリアは今日ついに大人になります！」

色々とヤバいことを言いまくっていた。
娘がこんな感じに育ったことに、亡くなった彼女の母君も草葉の陰で泣いているかもしてない。

とにもかくにも彼女は弾の部屋を目指して一直線に歩いていく。
ついに弾の部屋を視界に捉えた彼女は、一度深呼吸をする。

「落ち着きなさい、セシリア、わたくしは今からこの学園で、到達したものはいないと言える場所に行くのです！だから弾さんに失礼にならないようにしないと」

やはり頭のネジが何本か纏めて吹き飛んでしまっているらしい。
握りこぶしを作り言っているセシリアであるが、真っ赤になり蒸気を噴出している顔、全身から漂うピンクのオーラ。
とてもではないが、まともに見れた姿ではないだろう。

百年の恋も冷めるような彼女の様子を、誰も見ていないことだけが幸いだった。

それから弾の部屋に到着したセシリアだが、部屋の扉の辺りに先客というか、不審な行動をとっている人間がいることに気が付いた。

「みなさん、なにをなさってますの？」

「シッ！」

一夏や鈴といった少女達が雁首揃えて弾の部屋に耳を押し付けて、中の様子を窺っていたのだ。

セシリアの至極尤もな疑問の声にシャルロットが静かに、というジェスチャーを示して鈴が耳を当てろ、と同様にジェスチャーを行ってくる。

「一体何が？」

「山田先生、初めて、ですか？」

「え、えっと、はい……　五反田くん……」

「山田先生、力を抜くと良い、そうだリラックスしろ、そして五反田に全てを委ねてみると良い……　なに初めは痛くとも、すぐに気持ちよくなる」

「な、なななな、なんですの？　この会話は……！」

中から聞こえてきたのは、怪しさ爆発とも言うべき会話の数々。

引き攣った表情となったセシリアは、瞳からハイライトの消えた一夏が示してきたジェスチャーに従い、自分も耳を押し当てる。

「……　ッ！ぅあ！」

「山田先生、もっと力を抜いてリラックスしてください、奥に……ないですよ？」

「ご、五反田くん……　もっと優しく、優しくしてください」

「山田先生、随分緊張しているようだな？」

「お、織斑先生は緊張しなかったんですか？　こ、こんなにっぅあぅ！」

「クク、山田先生、まだ答える余裕なんてあったんですね？」

「ぅあ……　五反田く、っう、んぁん！」

「な、な、な、な、なぁ……」

会話は怪しさを増していく所か、真耶の声がかなりの勢いで艶を帯びていく。

それと同時にからかいの色を含んだ、千冬の声が響くと反論した真耶の声がより高い喘ぎ声で遮られた所で、かなり意地悪な色をもった弾の言葉が真耶に浴びせられていた。

かなり引き攣った表情と声がセシリアから発せられているなかで、耳を押し付けている者達全員の表情は一様に真っ赤で、蒸気を噴出

しそうなくらいに赤くなっていて、まだまだ少女であることが窺える。

「待て、五反田」

「どうしたんっすか？　織斑先生」

「今は千冬さんで良いと言っただろ？　まあ、それは置いておこう……　おい！そこの小娘共！！！」

だが、ここで状況がいきなり変化した。

千冬が弾に待ったを掛けると同時に、いきなり大声で部屋の外に居るセシリアたちに声を掛けたのだ。

セシリアたちは無論のこと、いきなり声を掛けられたことで驚いてしまい、扉に体重をかけてしまう。

「う、うわわわわぁ！！」

「ちょ！」

「い、いかん！！」

「た、倒れ！」

「くっ！」

「きゃぁ！！」

６人全員で二百キロを越える体重が扉に掛かったのだ、扉とはいっても襖がかなり立派になったバージョンといえるものなので、部屋の中に向かって扉が倒れるのは明白だった。

倒れこむ少女達。

「ムギュゥ！！」

「みぎゅ！！」

一夏と鈴という少女達が上に乗った少女達の下敷きになって、苦しそうな悲鳴を上げる。

だが、彼女たちは負けずに部屋の中でナニが起こっていたのかを、確認する為に顔を上げる。

そこにあったのは。

「セシリアは兎も角、何で皆が？」

「え……　えぇぇぇぇえええー！！！」

うつぶせに寝そべっている真耶の背中に馬乗りになっている弾、彼の指は真耶の背中を押すようにしていることと、体勢から明らかにマッサージか何かをしていた様子だった。

軽くパニックを起こしていそうな真耶に、クックッと笑いを堪える様子を見せる千冬の姿が、彼女たちにとっては印象的とも言える光景であった。

セシリアは兎も角何で他の皆も一緒に居るのかね？　と俺の部屋に倒れこんできた皆を見て思ったのがそれだった。

「何で皆がここに居るんだ？」

「そ、それは……」

「あ、遊びに来たの！」

俺の問い掛けに答えたのは一夏だが、重くないのかね？　ともちょいと考えてしまう。

何しろ一夏と鈴の上には他の連中が丸ごと乗ってるんだし。

とか考えていたのだが、皆はそれぞれ動いてごちゃごちゃになっていた場所からどいていく。

「まあ、立っているのもなんだからなぁ、座れよ」

「う、うん」

俺の誘いを受けて、一夏が頷き返事を返して何故か正座（この時、千冬さんが少女達に向けていた眼光の鋭さは殺人レベルです）して、他の皆もそれを皮切りに同じく正座していく。

さらになぜ？　とか思いながら、俺は山田先生に行っていたマッサージを止める。

「あ……」

「ん？　どうしました？」

「あの、もう少し、続け「山田先生」な、なんでもないですぅ……」

凄く残念そうな声が山田先生から漏れ出てきたので、彼女に問いかけるのだが、山田先生の言葉は、その途中でなんかトンでもない鋭さを持った千冬さんによって遮られる。

まあ、それはそれとして、俺は胡坐をかいて座るのだが、なんか一夏達が顔を赤くして俺の足元に注目しているのは気のせいだろうか？　何か身の危険も感じるのだが。

……　これも気にしないことにしておかないと、間違いなく俺の中の何かが失われるかもしれない。

そう考えて、再び放置することに決める。

「で、あのぉ～先生方は何をしていたんでしょうか？」

俺や皆の様子が一段落した時を見計らって、一夏が千冬さんや山田先生に問いかける。

ニヤリ、千冬さんはそんなちょっと悪どい笑みを浮かべて、一夏

の言葉に答えるために口を開くのを、俺は阻止したい気持ちにかられる。

だが、ここで阻止したりなんてしたら、彼女たちが見る前に如何わしい事をしていたかもしれない！なんていう疑惑をもたれるので、何も口を挿まないことにする。

「なに、ここに夜の街に淫行目的でナンパに繰り出す計画を練っていたバカモノが居たのでな、それの見張りがてら山田先生にこいつの部屋にいてもらっていたのさ」

「ってちょ！？　そいつをバラしますか！？　千冬さん！！」

「フン、ここに魅力的な女達が居るのに、どうして態々街に繰り出そうとしていた？」

「そ、それは……」

『……』

千冬さんが放ってきたのは予想外というか、このタイミングでバラすのか！？　とツッコミを入れたい気分になってしまう。

案の定、冷たくなっていく一夏達の視線に、この場の雰囲気、や、ヤバイ！下手な答えを出したら俺の命がない！！

「夜の街にいるお姉様方が、俺を呼んでいる気がしたからです！！！」

「ほぅ？」

「な、何でもありません……」

ここでコソコソとした答えを言っても絶対に悪い方向にしか進まないから、俺は正直に、尚且つ、堂々と答えたんだが。

千冬さんからは絶対零度の視線が注ぎ込まれる結果になってしまった。

その上に他の皆からも注がれる視線と雰囲気が、既にレッドゾーンに達していることから、かなり危険な答えを言ってしまったんだ、と思ってしまうのは無理もないことだと思う。

だけど分るだろ！ここに居るのは確かに見目麗しい美少女や美女たちだが！！手を出した瞬間に人生の墓場所か、それ以上の場所へと直行してしまいそうなのだ！だから手を出せない俺の気持ち、画面の前の皆は分るだろ！？　目の前に俺を好いてくれるレベルの高い女性が居るというのに手を出せないこの地獄がぁ！！

というわけで、今回も夜の街へと繰り出して、あわよくば慣れた人とかと一夜限りの関係を目指そうと考えたんだが、案の定千冬さんに防がれて俺の見張りに山田先生が着くこととなった。

以上が、これまでの顛末なのだ。

本当に辛いんですよ、手を出せるのに出せないという状況って奴はね。

どこからか、とっとと手を出したらどうだ？　なんて雑音が聞こえたが、聞きたくないなぁ！俺を墓場に持っていく言葉はぁ！

まあ、その後はセシリアにマッサージをしてあげた後、おかしな気配を感じたといって部屋を後にした千冬さんとかの出来事が合ったんだが、気にしない方が良いだろうな。

なんてやり取りを行いながら、夜は更けて、就寝時間になったので全員が部屋に戻るのだった。

それから無事に朝も迎えられたのだが、夜中に時折千冬さんの怒号らしき声と、女子生徒の悲鳴じみた声も聞こえたんだが、気のせ

いだな。
　まあ、そんな事を思い返しつつも今日からは、実習に入って自由時間というものが消え去る日でもあったので、少々憂鬱になりながら旅館の廊下を歩いていく俺。

「ん？」

「……」

　廊下を少し外れた位置に座り込んでいる箒の姿が見えた、彼女が真剣な表情で見ている先には金属製のウサミミが地面から生えていて、嫌な予感しかしなかった俺は、箒に声を掛けることもなく、その場を立ち去る。

　まあ、その後。

「あっはははははは！！！引っ掛かったね！いっちゃん！」

「た、束さん！？」

「相変わらず可愛いねー！！」

なんていう言葉の数々が聞こえてきたんだが、俺はあえて全てシャットアウトして、その場を後にするのだった。

それから朝食を済ませてから始まる合宿二日目の本格的な実習の時間。

「よし、専用機持ちは全員集まったようだな」

織斑先生の言葉通りに、ここに居るのは専用機持ちである俺に一夏や鈴、セシリアとシャルロットとラウラなのだが、ここには箒も居るのだった。

もう既におぼろげとなった原作知識の中でも数少ない覚えている箇所の中の一つである、箒の専用機の譲渡というイベントが行われるのだろう。

だけど、それを知らない他の連中は一様に疑問顔になって箒を見ている。

「織斑先生、箒はまだ専用機を持っていませんけど？」

「それについては「ちーちゃーん！それに！！だっくーん！！！」チッ……！」

至極尤もな鈴の疑問に答えようとした織斑先生の後ろから、響いてくる無茶苦茶嫌な予感をかき立たせて、その上に不快感も覚えるその声。

織斑先生の表情が本当に嫌そうに歪んだから、誰が降りてきているのかが良く分ろうというものだよ。

彼女の後ろにあるがけから勢い良く降りてくる偽乳、アニメ版だったら、確か織斑先生へと向けて飛んできたが、奴は俺の方へと向かってくる。

「フンッ！！！」

「へぶぅ！！！」

「ほ、ほーるいんわん！？」

自分へと振ってくる偽乳を確認した瞬間、俺は新しく作ったＩＳ武装の一つである『鉄バット』を一瞬で召喚し、それをフルスイングで振って、偽乳を再び打ち上げる。

偽乳は女性が上げてはいけない悲鳴を上げて上空へと打ち上げられていく、それから偽乳が織斑先生の後ろにある崖に突き刺さる。

「束、さっさとお前の要件を済ませろ」

「ひ、酷すぎるよ！ちーちゃん！！束さん夫であるだっくんに暴力を振るわれたんだよ！？　ドメスティック・バイオレンスだよ！それに対して言うことあるんじゃないかな！？」

「誰が、誰の夫だと？　良い度胸だ」

「え、えっと……　ちーちゃん？」

崖に突き刺さり、ぶらーん、となっている偽乳を見て織斑先生は一度鼻で笑った後、天災に対して容赦のない一言を投げかける。

うにょーんとまるで海外アニメのようなエフェクトで、顔を抜いた天災は一瞬で織斑先生の前に移動し、猛然と反論している天災だが、織斑先生は天災の何か一言が尺に触ったらしく天才の頭を握り締めて、アイアンクローを行っていた。

「よ、容赦のないアイアンクローすぎるよ！！ちーちゃん、て、手加減！！ぎぶ、ぎぶだよ！！」

よほど痛いのか、天才は必死な様子でタップして織斑先生へと合図を送るのだが、織斑先生はそれを全て無視してより力を込める様子を見せるのだった。

まあ、その後は天災の適当すぎる自己紹介やら、紅椿の説明が行われたんだが、特に興味も無いし、どうでも良いから割愛しよう。

ただ、気になるところはあってな。

「ふむ、ふむふむ」

「え、えっと、何でしょうか？　篠ノ乃博士……」

「君の名前はなんていうのかな？」

「し、シャルロット・デュノアですけど……」

そう、どうしてかシャルロットに天災が興味を抱いた様子なのだ、恐らくはシャルロットが使っているＩＳに本能というか、そんな感じの所で気が付いていたんだろう。

「シャルロット、しゃーちゃんかぁ、キミがあの完全なる正体不明ＩＳの使い手だね」

「！？」

「そういう反応を見せないようにしないとね！」

「……　束、今は篠ノ乃の紅椿を完璧に仕上げろ」

「了解だよ！でも、このことでだっくんに後で質問しても良いかなぁ？」

「本人の了解を得られたら、好きにしろ」

やばいというか、天災のことだから、アルテリオンのコアについても何かを知っているんだろう。
俺に対して全く感情の読めない視線を向けながら、絶対に逃がさないという雰囲気を持って問いかけてくる。

そんな天災の視線に俺はただ黙って、正面から視線を受け止めると、天才は箒のＩＳとなった紅椿の最終調整に入っていた。
だけど、思い出せた部分でもある所と同じ様にどこか有頂天となっているような、そんな箒を見ていて俺は嫌な予感を隠しきれずに居た。

出来うることなら、何事もなく過ぎ去って欲しい。
そう考えている俺を無視するように、旅館のある方向から山田先生が、焦燥という感情を浮かべて走りよってくるのを見て、溜息をつくと同時に前世の最後の一日の間中感じていた、ざらついてネトネトしたような感覚を伴った、不快感とも言うべき気配を俺は背筋に感じているのだった。

第２６話　そういえば四組の専用気持ちの娘って、まだ機体が完成してないとか

次回、嫌な伏線を残しつつ福音戦へ突入……

束がちょっとというか、嫌な奴になりそうな話になりそうです。

第２７話　死ぬのはイヤァ～～～！！！！とか叫んで逃げ出すのは……　なし？

実習は全て中止、専用機持ちと教師陣の全員が全員大広間に集められる。
証明が落とされた薄暗い室内に、展開されている大型の空中投影ディスプレイには一つのＩＳの姿が映し出されていた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動を行っていたアメリカとイスラエル共同開発の第三世代型軍用ＩＳ『銀の福音』が制御下を離れて暴走、監視空域より離脱したとの緊急連絡があった」

いきなりとも言える説明を聞いた一夏と箒の目が白黒しているのが分る。
だけど、他の連中に動じた気配はなく皆真剣な表情で織斑先生の言葉を聞き逃すまいとしていた。

特に現役軍人のラウラの表情は鷹、とも言うべき鋭さとなっており、事態の緊急性、危険性を物語っていた。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ沖の海上を通過することが分った。時間にして五十分後となる、学園上層部の意向により我々でこれの対処にあたることとなる」

淡々と継げている織斑先生、まだ一夏と箒は自体を飲み込めていないらしい、というか普通の人間がこんな事をあっさりと飲み込め、ということの方が無茶だ。
そんな彼女たちの様子を織斑先生は無視して、更に言葉を重ねていく。

「教員は生徒用の訓練機で目標空域及び海域を封鎖、本作戦の要は専用機持ちが行うこととする」

織斑先生の言葉を聞いた一夏は、更に混乱と微妙に恐怖という感情が浮かび、箒は何処か形容しがたい表情を浮かべていた。
なんだ、あの表情は？

そんな俺の疑問など、誰も挟む余地など無い状況下で、織斑先生は更に言葉を続けていく。

「では、これより作戦会議を始める、意見のあるものは挙手しろ」

セシリアが挙手を行い、福音と呼んでいる機体のスペックデータ

が公開されていく中、俺は打ち合わせを行っているのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第２７話　死ぬのはイヤァ～～～！！！！とか叫んで逃げ出すのは……　なし？　デスヨネェー！～

目の前に後悔されている福音の各種スペックデータを見ているが、見れば見るほど思う。

「広域殲滅型の機動と火力特化型かよ……　織斑先生」

「なんだ、五反田？」

「このスペック上の最高速度を見れば推測は出来るんですけど、これは超音速飛行が可能ですか？」

「可能だ」

目の前ではシャルロット達が打ち合わせを行っているんだが、俺はそれに合えて参加せずに織斑先生に問いかける。

疑問はこのＩＳの速度関連だったのだよ、あまりにも速い、現時点でも実用最大速度、時速１８５０キロというものを表示していたんだから。

「ということは、アプローチの回数も制限されますね？」

「ああ、シミュレートの結果、アプローチは一度限りとの結果も出ている」

「一撃必殺の武器で、擦れ違い様の一閃か……　超大火力砲撃によ

る掃討か、これらのどちらかが戦術パターンとしては選ばれるでしょうか？」

「そうだ、だが我々は前者を選択した……　理由としては後者は確かに成功確率が上がるものの、海面に大出力砲撃を行うことによって発生する津波による、周辺の諸島や大陸への被害が天文学単位になること、後々の生態系や自然環境にも悪影響を齎すことが、シミュレートの結果明らかになると分ったからな、多少は確率を落としても周辺の被害を局限することを決定した」

「了解です」

俺と打ち合わせというか質問と応答を行っている様子を、皆が真剣な表情で見ている。

「だとしたら、この作戦の要は一夏よね？」

「ええ、織斑さんの零落白夜、これによる一撃必殺が今回の作戦の一番の要です」

鈴の言葉と同時にこの場の全員が一夏を見る。

彼女は慌てたようにキョロキョロと周囲を見ているのだが、山田先生の言葉を聞いてようやく事態を本当に飲み込めたらしい。

「えっ!?　わ、私!?」

ようやく全てのことが飲み込めた一夏は、表情の奥に恐怖という感情を滲ませて立ち上がる。

恐らくというか、自分が選ばれることは考えていなかったというか、避けようと考えていたんだろう。

仕方が無い。

「一夏、お前は降りろ」

「え?」

「無理強いはしない、織斑、これは実戦だ命の危険がある、覚悟がないならば一番危険な立場になる、ここで降りても誰もお前を責めんし、私が責めさせん」

「……　弾は行くの?」

「……　ああ」

俺の言葉を聞いて、信じられないという様子で俺を見てくる一夏

だが、俺は努めて冷酷に彼女に対して言葉をかけていた。
それは千冬さんも同様で、冷酷さを感じさせながら一夏に声を掛けるのだが、彼女の本心としては降りて欲しいというのが、本当のところだろう。

この世でただ一人残された血を分けた家族、それを失う危険があるのだから。

俺の言葉を聞いた彼女は、覚悟を決めたといえる力強い表情となり、俯かせていた顔を勢い良く上げる。

「やります……！やらせてください！」

「よかろう……　では作戦の具体的な内容に入る！現時点で最も速度の出るＩＳはどれだ？」

「それでしたら私のアルテリオンです、背部スラスターユニットの調整で超音速飛行が可能ですし、ハイパーセンサーも調整後自動で超高感度型に切り替わるようになっています」

「それの調整時間と、お前自身の超音速戦闘訓練時間はどれくらいだ？」

「訓練時間は１８時間ほどで、調整時間は……　弾、どれくらいかかる？」

「１０分もあれば十分だ」

一夏の言葉の後に織斑先生の凛とした声が響き渡って、更に雰囲気は引き締まったものになっていく。
速度の出るＩＳの所でセシリアが何かを言いかけたのだが、シャルロットが全てを遮って立ち上がって発言していた。

あ、向こうで体育座りして拗ねてる。

まあ、それは置いとこう、シャルロットの問い掛けに俺は答えるのだが、いつの間にか周囲の雰囲気がおかしな感じになっている。

「あ、あの、織斑先生？どうして弾の奴が、シャルロットのＩＳの調整なんてのを答えるんですか？」

「言っていなかったか？　デュノアのＩＳは今現在諸事情により五反田が調整している」

「「「「「ええ！！？」」」」」

鈴の質問にあっさりと答える織斑先生だが、勘弁してと言いたい気持ちもある。
だけど、一夏と鈴の驚き方は他の皆ほどじゃなく、驚いていたけどすぐに変な納得のされ方をしているのは気の所為かね？　あいつらの表情は、だって弾だし、なんて顔に書いてあるきがするんだが！

落ち着け、落ち着くんだ弾！！今は重要な会議中！怒っちゃいけない、怒っちゃいけないんだ！

なんて考えて必死で自分自身を抑えていたのだが、織斑先生がこちらをじっと見ていることに気が付いた。

「五反田」

「なんです？」

「お前のＩＳの同時攻撃目標数はどれくらいの数になる？」

「……　命中率百％の状態を維持するとなれば一度には７５が限界ですね」

『！？』

驚きに包まれる室内、織斑先生が聞いたのは間違いなく、福音の同時広範囲型殲滅攻撃に対応した迎撃が可能かどうか、という問い掛けなのだろう。

だけど俺を疑わしげに見ている織斑先生……　実は嘘、本当は【１５８，７７５】が正解だ！

それも全て命中率百％の状態で、だからな……　うん、正直やりすぎた。

なんて後悔したのは、言うまでもない。

まあ、他の連中が驚きに包まれているのも無理はない。

今現時点で最も多数の目標を攻撃できるのはセシリアのＩＳなんだが、百％では間違いなく１０以下しかないし、俺の言った数字なんて机上の空論とも言うべきものだからなぁ。

だが、いつの間にか織斑先生の口元には不敵な笑みが浮かんでおり、バレてーらと考えるのに十分だった。

「これで五反田のＩＳで広範囲攻撃の迎撃が可能ということが分ったな、ではデュノア！」

「は、はい！！」

「直ちに五反田の指揮の下で調整を行え！完了と同時にＩＳを展開、出撃準備を行い待機せよ！」

「了「ちょぉっと待ったぁ～～～！！！！！」え、ええ！？」

ようやく締めに入ろうとした所で現れる天災、厄介なことになった。

そう思わせてくれるのに、十分な展開だった。

天井の板を一つ外して、そこからぶらーんと下がっている天災の姿。

織斑先生はというと、厳しい表情を浮かべて天災を見ているからな、だけどあの感覚をまた感じた。

あの天災に関係しているのか？　この不快感は。けれど俺の不快感など誰も気が付いていないのは当然だから、勝手に事態は進んでいく。

「その作戦ちょっと待ったなんだな！！」

「山田先生、これを室外への強制退去を」

「え、えっと、篠々乃博士、とりあえず降りてくれませんか？」

「とう★」

遠慮がちに言ってくる山田先生の言葉を聞いてか天井から降りてくる天災、空中で一回転して降りてくる。

「ちーちゃんちーちゃん！もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！！」

「作戦は既に決まっている……　出て行け」

頭を押さえている織斑先生、それはそうだろう時間がないこの状況下で、更に時間と労力を掛けさせられる物体が現れたのだから当然といえる。

「聞いて聞いて！いっちゃんがこんな感じに作戦の要の時こそ！紅椿の出番なんだよ！！」

「……」

明らかにイライラしている様子の千冬さん、イヤに興奮しているこれをとめようと思っても止まらんだろうし。

止め様と思えば出来るが、ここに居る皆様にトラウマを押し付けるレベルにもなるからな、そう簡単にはできはしない。

「いっちゃんの零落白夜！これはエネルギーの消耗が大きいってデメリットがあるよね！」

「ああ」

「それをカバーする為に束さんはこれを開発したのだぁー！！ジャジャーン展開装甲を最大稼動させた際に行われる絢爛舞踏！！こいつを使えば白式にエネルギーを供給できるんだよー！！」

「それで？」

「ん？」

「篠ノ乃はきちんとそいつを発動させられるのか？」

「それは箒ちゃん次第だね！☆」

「……　五反田、デュノアの調整を開始しろ」

「了解っす」

天災の最後の言葉を聞いた俺と織斑先生の心の声は一致していただろう、こいつぶっ殺してぇ！！！と、さっきから散々邪魔をされているだけではなく、箒を参加させたいのが丸分りな様子。

最早相手にする気はないのか、織斑先生は俺にシャルロットの調

整の指示を出して、俺はシャルロットに目配せをしてその場を後にするのだった。

それから俺とシャルロットは別室に移動して、既に展開されているアルテリオンの調整作業を開始していた。

「……」

「……」

無言で調整を行う俺たち、シャルロットも超音速戦闘に向けての武装の調整やら、シールドエネルギー関連の調整なんかも行っているので、会話する余裕がないというのが実情かね。

暫くの間カタカタと互いにコンソールを打つ音が響いていたのだが、不意にシャルロットが顔を上げてくる。

「でも、篠ノ乃博士って何を考えているんだろうね？」

「さあな、俺達がアレの考えを理解するなんて、土台無茶な話だろうさ、ああいった手合いは俺たちとは全く違う場所で思考しているからな、理解できるはずもないし、したくない」

「そっか……」

シャルロットの問い掛けに俺は、ちょっとぶっきらぼうに答えていた。

前に前世で同じ様な人格をした奴がいたと言っていたが、その時のそいつもあの天災も俺でさえ理解できない思考パターンをしていたからな。

まともな人間が理解できるはずもないし、出来たら出来であいつらの仲間入りを果たすって事でもある。

そんなのはゴメンだね。

それが顔に出ていたんだろう、シャルロットは苦笑を浮かべて俺を見ていた。

「調整完了だ、これで何時でも超音速飛行がお前さんの意思一つで切り替えできるぞ」

「うん、ありがと」

「調整は終わったようだな」

「織斑先生、どうかしたんですか？」

調整が終わった所を見計らっていたように、織斑先生が入って来るんだが、その表情は苦虫大量に噛み潰したような感じな点で、嫌な予感を感じさせるのに十分な要素になっていた。

「五反田の表情で大体予想が出来ていると思うが……　作戦に変更が生じた」

「あの天災が出てきた以上は分ってましたけど、どういう風に変更になったんです？」

「デュノアを作戦から外して篠ノ乃に変更、奴の言っていた絢爛舞踏と白式の零落白夜を駆使した戦闘になった」

「なっ！？」

「やっぱりっすか……」

織斑先生が言ってきた言葉を聞いた俺は、舌打ちをしたい気分で一杯になる。
あの天災……　本当に災害としかし言えないな。
なんて考えていたら、いきなり織斑先生が頭を下げてきた。

「すまない、五反田」

「いや、貴女の責任じゃないでしょうに……　大方、天災が色々と脅しめいた事とか仄めかして来たんでしょ？」

「……　だが、私は……」

「箒を一人で後から目標空域に向かわせる、だとか今の時点でも色々と考えるのは出来ますしね、本当にそうなった場合の方が厄介ですよ、混乱処の騒ぎじゃない事態になるでしょうし」

「……　私の不手際で、お前に一番厄介な役目を押し付けてしまう……」

実際に織斑先生の憔悴しきった表情と苦虫を噛み潰した雰囲気を見れば、どういうことをアレが言ってきたかなんて容易に想像が付く。

大方、箒が云々とか、一夏のエネルギーが突然切れるかも、とかの脅しの類とか色々だろ。

一夏のＩＳはあの天災の作だ、まず間違いなく何らかの細工をしているのは間違いない、そう考えたら俺もちょいと手を加えたのは失敗だったかもな。

俺が手を入れた部分と、天災が元々作っていた部分の相互干将で、何が起こるのかがわからなくなっちまった。

帰れたらきちんと俺の今の状況を説明して、一夏のＩＳを根本から弄るのが一番良いかもしれないな。

まあ、それも今は関係ないし置いておこう。

「一夏がいる以上、きちんと守りますよ箒もね、箒は恐らくですが調子に乗った天才に煽られるだけ煽られているでしょうし、二人は出来る限り守ります」

「……　それじゃダメだよ、弾」

「シャルロット？」

「弾も二人と一緒に帰ってくるって、約束して……　じゃないと」

俺はシャルロットの言葉を、微笑みながら彼女の頭を撫でることで遮る。

俺の意図を理解してしまったんだろう、彼女の表情には悲しみの色が広がって、織斑先生の表情にも動揺の色が浮かんでいた。

それから俺は彼女たちに何も応える事をせずに、部屋を後にする。

この予感は、間違いようもない……　自分の身に死に近い何かが起こるという予感なんだから。

俺に対して起こるとは言っても、彼女たちに何もないというのは考えられない。

だから、一夏と箒の二人は守って見せる、必ず。

開始時刻になり俺たちは、全員が砂浜に集合していた。

既にＩＳの展開は完了、後は織斑先生からの号令を待つだけの状況下。

「それじゃあ箒、よろしく」

「ああ、お前を完璧に運んで見せるさ、一夏」

「俺もビットを解放して慣性制御を行うからな、その辺でも体勢を考えていてくれ」

「ああ、任せておけ！」

僅かに自身なさそうな一夏は、箒の背中に自分の体を固定させる。
それから俺もビットを6基解放し、ＩＳ本体が未だに抜け出せない慣性の法則をある程度無視できる機動性を確保する。

だが、箒の返答は不安を感じさせてくれるのは十分だった。
それを感じ取ったのだろう、不安そうな一夏の瞳が向けられてくる。

『ねえ、弾……　箒は……』

『俺が出来うる限りのフォローをする、お前は敵に一撃を与えることを考えておけ』

『う、うん……』

浮かれきっているとも言える箒の様子。
プライベートチャンネルで一夏はそう言って来るが、俺は彼女に対して不安を挟ませないように言っていた。

と、ここで、オープン・チャンネルで織斑先生からの通信が入る。

『五反田、織斑、篠ノ乃、聞こえるか？』

険しい表情で俺たちに確認を取る織斑先生、彼女に俺たちは一つ頷いて返事を返すと、説明を始めた。

『今回の作戦は一撃必殺だ、交戦は短時間にて決めるように心がけろ』

「了解っす」

「り、了解です」

「織斑先生、私は状況に応じて二人のサポートに回れば宜しいですか？」

『そうだな、それで大丈夫だが、お前はそのＩＳを手に入れてから、数時間しか経っていない上に実戦経験も皆無だ、一夏の大半のフォローは五反田に任せ、お前は五反田のフォローに専念しろ』

「はい、私の出来る範囲でフォローします」

彼女の言葉は聞いただけでは落ち着いているように見える、だけど、瞳や全体の雰囲気を見れば分るが、落ち着いてなどいない。
喜色満面といった雰囲気に、態度、天災が何を考えているのかなど本当に分らないといえる。

箒が死ぬ可能性だってあるというのに、今、こんな状態の箒を参加させるということがな。
考えていても仕方がない、そう考えていた俺に織斑先生から、プライベートチャンネルが届く。

『五反田』

「うっす、箒はあんな状態ですからね……　何かを仕損じた場合、フォローが出来るように意識しておきます」

『すまない』

「それはもう無しにしときましょうよ、織斑先生らしくありませんぜ？」

『……　ああ』

謝り足りないといった様子の織斑先生、既に作戦は決まったんだから謝っていても仕方が無いし、俺もちょいと今の織斑先生は見た

くないなぁ。
この人はやっぱ何時だって不敵に笑っている方が似合っている。
俺の言葉に気を取り直したのか、いつもの笑みを浮かべる織斑先生、それから彼女は一度頷き。
『では、作戦開始だ！！！』
作戦開始を宣言する。
俺のビットと箒の紅椿による急加速で現場空域へと向かうのだった。

それから目標空域へと僅か数分で到達、俺たちの目の前には土壇場になって思い出せた、原作の通りの姿をしている【銀の福音】が存在している。

「接触は十秒後だ！構えていろ一夏！」

「うん！！」

俺の言葉に力強く答えて零落白夜を握り締める一夏、目の前には急速に距離が詰まっていく目標が写っている。

俺たちの頭の中では、カウントダウンが行われている。

三、ニ、一……！

「やあああああっ！！！」

そう掛け声を上げて向かっていく一夏、瞬時加速まで使った一撃は、俺たち全員にこれで決まったか！と思わせるのはタイミングもスピードも重さも十分な一撃。

「敵機確認、迎撃モードへ移行＜銀の鐘＞起動開始」

「っ！？」

「下へ加速しろ！一夏！」

最高速にあるにも拘らず、銀の福音は一夏の申し分ない一撃をあっさりと回避、不気味な機械音声が当たりに響くと、頭から生えている一対の翼が動き出し、そこから大量の光弾を放ち始める。

俺の言葉を聞いて、無意識に下に加速していく一夏にそれらが降り注ぐのだが、全てまだ使っていないビットが張り巡らせたフィールドが防御する。

一夏に向けたのは3基、さっきまで推進に使っていてまだチャージが終わっていない分が六基、残りの三基で俺と箒に向かってくる光弾を回避しつつ、撃ち落として行く。

「一夏！箒！俺が中央から攻めて奴の気をそらせる！お前達は左右から同時に仕掛けろ！！」

「了解！」

「分ったよ！」

俺は両腕にファルシオンを展開、まだ口撃に使える三基と共に福音へと向かっていく。
三次元機動と時折行うビットの一撃に加えて、猛然と責める箒、だが、嫌な予感ばかりが加速していく。
なんだよ、この感覚!?
この時、俺はこの感覚に気をとられ過ぎていたんだろうな、普段であれば気が付けたものに気が付けなかったのだから。
俺と箒の連携というか突っ込む箒に合わせた攻撃で、奴に一瞬だけ隙が出来た。
「一夏!今だ!」
「りょうかっ!?」
だが、ここでいきなり状況が変化した、一夏が突然海面へと降りて行ったのだ、これには俺も箒も驚いていたが、すぐに気が付いた。
「密漁船か!?」

海域が封鎖されているのに、どうしてここに！と思いながらも流れ弾となっていた光弾の一つを、一夏がギリギリのタイミングで撃ち落とした。
だが、致命的と呼べるこのミス、そして状況が更に悪い方向へと流れていく。

「なにをしているんだ一夏！！そのような犯罪者を庇うなど！」

「箒！どうしちゃったの！？　この人達は民間人なんだよ！！」

「ッ！？」

「力を手に入れちゃったら、力のない人達は気にならなくなっちゃうの！？　そんなの箒らしくないよ！！」

「あ、あ、わ、私は……」

怒る箒にそれ以上の怒りを向ける一夏、この間も俺は福音との戦闘を行い彼女達に攻撃が行かないようにしてた。
だが、突然箒のＩＳが強制解除され、俺は大きく意識をそっちに向けてしまったために、奴の蹴りを受けて吹き飛ばされてしまう。

「ぐぅあ！！」

「だ、弾!?」

「敵機情報更新、最優先抹消ターゲットと認定＜銀の祝福＞起動」

「一夏ぁ!!!筝を守れ!デカイのが来るぞ!!!」

「で、でも弾は!?」

「俺に構うなぁ!」

一対の翼が前面に展開され、そこにエネルギーのチャージが開始される。

空間が歪み始めるほどのそれ、しかも照準が呆然としている筝に絞られている。

一夏に筝を守ることを指示した後、使える全てのビットを解放、俺の一喝で筝の所に着いた一夏達を守るために展開する。

だが、とてもではないが守りきれないのは明白といえる威力を感じた俺は、発射されたビームの奔流に割り込み全てのエネルギーを防御に回すのだった。

弾の一喝を受けて箒を守る為に、抱きしめて目をつぶり衝撃に備えたけど、私達の所に来るはずの衝撃が来ることはなく。
私の頬に暖かい雫が付着した。

「だ、だ……ん？」

「ぶ、無事か……　二人とも……」

目を開けたとき私の目に入ったのは、赤いナニカ、そして、その赤いナニカに包まれた弾の姿。
ビットや全ての防御に使えるものを全て使って私達を守ってくれたのか、彼のＩＳは見るも無残な姿になっていて、周囲に展開されていたはずのビットも消えてなくなっていた。

「だ、ん、ちが、ちがいっぱい、でて、る……　よ？」

「無事みたいだな…　俺はもうこの様だが、お前達二人が態勢を立て直せば、まだ……チャンスがある……」

「弾！」

私の声に応えることもなく、弾は私と箒の安否を確認した後、苦しそうに右手の人差し指で、空中に変な模様を描いていく。
嫌な予感がした私は彼に呼びかけても、彼は答えてはくれず、微笑むだけ。

「シャルロットの……アルテリオンや……　皆と共同して、奴に当たれば、お前達なら勝てる……！」

「弾！やめて！なにをしようとしているの！？」

「ゴメンな……　一夏……」

そしてそれが完成したのか、私達は不思議な暖かさを持った何かに包まれる。
得体の知れないはずだけど、弾の温かさだって分るそれ、でも、私達がここから安全な場所に強制的に行かれるのがどうしてか分った。

ここからいなくなってしまう瞬間、彼の口が動くのを見てしまった。

『さよなら、一夏……』

と。

「いやあぁあああ！！！！！！」

自分が完全に包まれる瞬間、そう悲鳴を上げて弾に手を伸ばしても彼に届くことはなく、目の前で全てが掻き消えてしまった。

その時私の心の中にあったのはなんだろう、絶望？　怒り？　ううん、どれでもない、ただ、悲しさだけだった。

目の前で大粒の涙を流して転移される一夏達を、俺見送った後、どうしてか、今まで黙って見守っていた福音の方を振り向いた。

「さてと、俺がこんな様でほとんど何も出来ないんでね、お前さんにはせめてダメージを受けてもらう！」

そういって残っているスラスターを全開、まだ打てるファルシオンを右手に持った俺は、再び放たれる光弾の合間を縫って福音へと接近。

幾つか被弾を許しながらも、奴へと急速に接近していく。

「うおおおおおおぉぉぉぉー！！！」

「Ｌａ♪」

「ぐ、う！捕まえたぁ！！」

「！？」

俺の特攻じみた行動を見た福音は、特徴的といえる不快な電子音を発して、再び大量の光弾を放ってくる。

直撃を受けて爆発する蒼穹の各部位、それを無視して遂に俺は、奴に抱きつくようにして捕まえることに成功する。

それと同時に俺のイメージインターフェースに、俺自身が直接コードを下して命令を下す。

『自爆プログラム、フェンリル、起動』

そう自爆プログラムだ、ＩＳ本体のみを自爆させて俺とコアは別に抜け出すための算段もあるにはあるが、どうなるかは分らない。
カウントダウンが開始され、福音もここで俺の意図に気が付いたらしく、俺を引きはがそうと必死の抵抗を見せる。

だが、奴のＩＳアーマーの全てに杭の様に俺のＩＳアーマーを打ち込み、逃げられないように固定しているからな。

だけど、こんな状況になって思ってしまった。

「まだ、生きていたかったよ……　一夏や皆と過ごしているのが楽しかった、ただそれだけなのに……」

ここで死ぬとしたら、未練だよなぁ。
そう言うしかない、俺の言葉。

『自爆プログラム、フェンリル、作動』

そして、俺のＩＳのセンサーにそう表示された瞬間、凄まじい衝撃が俺を襲ってくる。

その衝撃を受けた俺は、意識が完全になくなるのが、自分でも分かった。

第２７話　死ぬのはイヤァ～～～！！！！とか叫んで逃げ出すのは……　なし？

弾の安否はどうなのか……　それは次々回辺りに……　次回辺りは
鬱展開が入りそうだぁ……

第２８話　俺がいない話って、何気に初めてじゃね？（前書き）

今回の話は、短編集を読んだほうがちょっと分かりやすいと言うか、とんでもない状況がうかがえます。

第２８話　俺がいない話って、何気に初めてじゃね？

目の前のモニターに映し出されているのは、レーダースクリーンのように映されている戦闘状況の姿、輝点となって４つが踊るように戦闘しているのが見える。
輝点だけなので、どういう状況かは分らないが、それでもかくＩＳの識別とバイタルチェックは出来ていた為に、誰がどういう状態なのかの把握は出来ていた。

「織斑先生！篠ノ之さんが具現維持現界に！！」

「奴が言っていた例のシステムは！？」

「発動していません！！こ、このままでは！？　ぎ、銀の福音から超高エネルギー反応を確認！！」

「ッ！！！」

彼女たちの目の前ではめまぐるしく変化する状況、明らかな窮地といえる事態に千冬の表情は一気に険しさを増して、両手は硬く握り締められる。
血を流しそうなくらいに握り締められているそれ、だが、目の前のスクリーンは無情な現実を映し出す。

「篠ノ之さんに向けて放たれたエネルギー体を、五反田君が！！」

「五反田の状況を報告しろ！」

「は、はい！……　っ！？」

「山田先生」

「あ、ＩＳ損傷度……　レベルＤ……　ほ、ほぼ全部の武装が使用不可に……　五反田君のバイタルサイン……　危険域に到達……！！」

真耶からの報告を聞く千冬の下唇は噛み切らんばかりに噛み締められていて、真耶から行われる報告に声を上げないようにという様子を見せていた。

「なっ！？　お、織斑さんと篠ノ之さんの反応が旅館から２００メートルの地点に出現しました！こ、これは一体！？」

「！？　山田先生！すぐに五反田とのチャンネルを開け！」

「え？　ど、どう「良いから急げ」は、はいぃ！！」

ここで急展開を見せた事態、弾一人を残して目標がいる空域から、一夏と箒が放されたのだ。
何かに気が付いた千冬は真耶に対して、怒鳴りつけるように命令を下したが、その瞬間。

「こ、これは……　五反田君のＩＳ自体からの高エネルギー反応です！！」

「あの……　馬鹿者ぉ！！」

「じ、自爆……　したって、いうんです、か？」

弾のＩＳ本体から放たれる大規模なエネルギー反応、顔を真っ青にしていく真耶と、力なく項垂れる千冬。
そして、スクリーンに表示される文字の全てが一つの事実を突きつける。

「ご、五反田君のＩＳ反応、バイタルサインの全てを……　ろ、ロスト……」

「……　山田先生……　現時点を持って……　五反田をＭＩＡと認定する……　顔を、洗って、くると良い」

「――――――っぅう！」

信じられないという様子で茫然自失で報告する真耶の言葉を聞いた千冬は、俯いて右目から一筋の涙を流しつつ、ようやくといった様子で言葉を搾り出していた。

千冬の言葉を聞いた瞬間、真耶は立ち上がって大粒の涙を流して走り出して部屋を後にした。

部屋に一人残された千冬は、両目から大粒の涙を流して力なく近くの壁に寄りかかると、弱々しい声を漏らしていた。

「お前は……　っう、これを予想していたというのか？　五反田ぁ！！すまない……　防げなくてすまない……」

自分の体を抱きしめて、泣き叫んでそういっている千冬、何に対して謝っているのか、自分が何を言っているのかも分らないのだろう。

彼女は呆然とそう繰り返して言い続けていた。

「うーん、さっすがちーちゃん！泣き顔も激プリティ！☆　いっちゃんの白式に仕掛けしておいて、ちょっとお願いしておいた甲斐が

あったよ～！！！」

そう嬉しそうに言っているのは、天災、こと、束である。
どこで見ていたのかは分らないが、彼女の元には全ての戦闘の映像データが存在しており、彼女が全てを盗み見ていたことが窺える。

だが、束はより表情を狂気といえる感情で歪める。

「でも、だっくん、この【程度】の危機くらいはかる～く乗り越えてね！☆　じゃないと、束さんの旦那様としては失格だよ！」

と、狂いきった愛情というべきか、憎しみというべきか、そんな感情の色に染まった表情で束は嗤い声を上げながら言っているのだった。

先程まで弾や一夏達が戦っていた場所は、弾の自爆の影響か海水が巻き上げられて周囲に豪雨のように降り注いでいた。
その上に爆発時の爆煙によって周囲は薄暗くなっていたために、この状況がより際立っていた。

だが、空間に変化が起こる。
弾が、自爆してまで止めようとしたＩＳ銀の福音が、ほとんど無

傷で海中から姿を現したのだ。

まるで、先程自爆した弾を嘲笑しているかのように。

思えば、あの時に五反田に呼び出されたときには、予兆が見えていたはずだった。

この臨海学校に行く前に水着を買いに言った後、五反田に呼び出された私は、奴にあるものを渡されていた。

『織斑先生』

『なんだ？』

『もしも、今度の臨海学校で俺の身に、万が一、の事があったときには、これをシャルロットに渡してもらえないでしょうか？』

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中は真っ白になったが、すぐに怒りと言う感情が埋め尽くして、奴の胸倉をつかんでいた。

『何をふざけたことを言っている！！万が一だと！そのような事態に等、私が』

『では、もしも、またあの天才が関わりＩＳに関連することであれば、止められますか？』

『クッ！それは……』

『責めているわけじゃないです、奴の性質の悪さは身に染みて知っていますから、こっちが避けようとしてもなんとしてでも関わらせるでしょうし』

『……　お前の受験のときのように、か？』

『ええ』

奴の言っていることの全てが耳が痛いことばかりだった。
私は、あいつを束を止めれたことなど一度としてない、私が関わらないようにすれば、いつの間にか全ての事情を封殺されて関わらざるを得ない状況に持っていかれていたからだ。

普段五反田は私の事をどうも持ち上げてくれているが、本当に性質が悪く、頭の切れる人間には私は勝てない、幾度となく私はそれを思い知らされることになった。
結局は五反田から渡された、昔存在していたMD（ミニディスク）タイプの大き目の情報記録端末を受け取る。

そして今、私はデュノアにそれを渡すために彼女を探している。

「お、織斑先生……　弾は、弾はどうなったんですか！？」

廊下でデュノアとちょうど良く出会えたが、彼女も私を探していたらしい。
空気を読める彼女のことだ、旅館全体を包む異様な緊張感と、緊迫感に気が付いたのだろう。

私は会えて表情を隠しながら、彼女に弾から渡されていたものを差し出していた。

「その質問の答えも、この中にある……　こういった場合に備えて、

お前に渡すように奴に頼まれていた」

「そ、それって……　まさか……？」

「状況は最悪だろうが、奴を信じろ、私から言えるのは、ただそれだけだ」

最初の私の言葉で弾の身に起こったことに見当が付いたのだろう、デュノアの表情は見る見るうちに青くなるが、気丈にも彼女は耐えて私から、それを受け取っていた。

渡した後に言った言葉は、今の正直な心境だ。

奴が自爆した瞬間こそ、悲しみに暮れて涙してしまったが、冷静になれば、あの男が束に謀られたままでくたばるはずはないだろう、という結論に達した。

あいつは確実に何かを裏で仕掛けている、でなければ、あの時に確実にデュノアと二人で出撃していただろうしな。

何かを仕掛けるからこそ、あの作戦を了承した可能性が高い。

そう思えば、いつの間にかデュノアの肩を軽く叩いて、立ち去っている自分がいるのに気が付いた。

「奴を信じてやれ、あいつはこういう状況にこそ、強い男だからな」

「は、はい！！！」

振り向き様にそう言った私の言葉に対して、力強い返事を返すデュノア。

そうだったな、私にはこいつらの前で泣く事等は許されない、だから、心配な連中の面倒を見なくてはな。

そう思って、私はその場を後にするのだった。

一人になれる場所を見つけたシャルロットは、千冬に渡された記録端末の開封作業を終えた。

それが終わった瞬間に空中に投影されるディスプレイと、鼻の下を伸ばしていやらしい表情でエロ本を見ている弾の姿であった。

「……　なにがしたいのさ、弾」

無表情で力なく呟くシャルロット、緊張していた所に出てきたのがこんな映像では、無理もないだろう。
だが、彼女が力なくそう呟いた瞬間、映像の中の弾は驚いた表情となっていた。

『ちょ！待て待て！もう撮ってんのかよ！？』

『にゃぁあああー』

『はぁ！？　これも入れといた方が面白そうだって？　冗談じゃない俺のお宝がバレるじゃないか！一度切れ！』

『にゃぁ』

「へぇ、えっちな本はそこに、かぁ、ブルーレイは、うんうん、分った、帰ったら全部処分しよう」

そう言っていそいそと本を隠し始める弾の姿、何気に弾が積み重ねていた本の間にはブルーレイも混じっており。
目の前の映像でそれらの隠し場所が、全て明らかとなってしまう結果となった。

猫は弾の言葉に了承の返事を返したらしいが、映像は途切れることなく映されている為に、言うことを聞いていないのは明白だった。

そして気を取り直したのか、弾はゲンドウスタイルで着席し、真剣な表情をカメラに向けてくる。

「いや、もう遅いでしょ……」

『この映像を見ているということは、俺の予想の中で最悪に近いことが起きた状態だ、と仮定してメッセージを残しとく』

「……　弾……」

『この情報端末は、アルテリオンに関連したデータが収められていて、これを読み込ませることで一気に全てのビーム兵器が普通に使用可能になるようになっている』

「……　え？」

最初こそ苦笑いを浮かべてみていたシャルロットだが、弾の言葉が進んでいくごとに彼が放っていく言葉の重要性に気が付くと、彼女の表情は真剣なものへと変わって行く。

『後は、そうだなぁ……　防御に関しても特殊システムの封印が解かれると思うから、確認をしてくれな』

「やっぱり、とんでもないね、弾は……　僕の予想をいつも上回っていくよ」

『これの再生が終わったら自動でアルテリオンが読み込みと封印の解除とかはやってくれるからな、それじゃあ、この辺で再生を終わらせるな』

「……　っ、う、っくぅ……」

シャルロットは弾の言葉を聞いている途中から涙を流し始め、終わりごろには声を押し殺して静かに涙を流して、泣いていた。

そして、ゴシゴシと涙を拭った彼女は、目の前に表示されている膨大なデータの処理を行う為に、ディスプレイと向き合うのだった。

ここは昨日まで弾が寝泊りしていた旅館の部屋、自分達も昨日の

夜は部屋で弾と一緒に騒いでいた思いでのある場所。
そこに一夏は無表情に涙を流しながら、弾の制服を抱きしめていた。

「……　だん……　だ、ん……　っうっく……　うぁぁ……！」

不意に彼女は弾が最後に残した言葉、否、口の動きを思い出してしまう。
その瞬間から彼女は感情の爆発とも言うべき様子で、嗚咽を漏らして泣き始める。

「……　だん……　さみしいよ……　かなしいよ……　わたし、わたしぃ、もう……」

精神の均衡が危険な位置にいるのだろう、彼女は最早何を言っているのかも自分で分っていない様子で、呟いてうわ言の様にブツブツと言っていた。

「……　いち、か……」

「……　ほう、き……　こないで」

「わ、わたし、は……」

遠慮がちに開かれる扉、その向こうにいたのは箒であった。
彼女は所在な提げに立って一夏を見ていたが、一夏も入ってきた箒に気が付いたのだが、彼女に向けた視線には一瞬だけハッキリと怒り、という感情が浮かんでいた。

「それ以上近付いたら……　わたし、なにをするか分らないから……　だから、それ以上近付かないで……」

「い、一夏、私はお前に謝り「ねえ、謝る人、違うよね？」っ！？」

「わたしじゃ、ないよね？　謝らなきゃいけない人は、ねえ、箒……　わたしのいってること、何か間違ってる？」

「あ、私は……」

拒絶の意思を向ける一夏に箒が近づきながら、言葉を言った瞬間、一夏の瞳からは全ての色が消えて、とめどなく涙を流しながら箒へと近づいてくる。
箒は一夏の様子に恐怖という感情を僅かに抱いて、後退していく。

一夏も弾の制服を抱きしめたまま箒を追う様にして、壁際に箒を追い詰める。

正面から見据えられる感情というものが抜け切った一夏の不気味な瞳をみて、箒は更に何かの言葉を言おうとしたが、彼女から放たれる威圧感に全て遮られていた。

「あーあ、なにやってんだか……」

「……　なんの、用？　鈴」

「まあ、とりあえず一夏……　歯ぁ食いしばりなさいよ！！」

「キャァ！！」

突然聞こえた第三者の声、一夏は煩わしそうにそちらをみれば、入ってきたのは鈴であり、彼女の瞳には強い怒りの色が浮かんでいた。

鈴は箒を追い詰めている一夏の方を掴んで箒から引き剥がした後、少々強めのビンタを一夏に向けて放った。

一夏は驚いたようで、込められていた力は大きくなかったのだが、彼女は床に倒れこんで鈴を呆然と見上げている様子だった。

そんな様子の一夏に更に怒りを感じた様子の鈴は、彼女に近付いて胸倉を掴んで引き寄せる。

「アンタねぇ！弾はまだ生きている可能性があるのに！こんな所で何をメソメソ泣いてんのよ！！！」

「で、でも！！私は弾の最後の直前までいて、あんな状態の弾を見てるんだよ！？」

「ええ！ええ！それは大変に羨ましい限りだわ！！もしも弾が本当にいなくなってたら、アンタは弾の最後の瞬間の言葉とか、託された思いとか、全部知ってるってことでしょうが！！！」

「……」

「箒も箒よ！無理矢理作戦に参加して、それを失敗させた挙句に言葉を間違えて一夏を怒らせて、更に場を引っ掻き回そうっての！？ふざけてんじゃないわよ！！！」

「ああ、それは全て私に、責がある……」

烈火の如き怒り。

鈴の怒りはおさまることをしらず、一夏と箒を責め立てる。

一夏と箒は鈴の言葉に様々なものを思い出したのか、俯いてただじっと鈴の言葉を受け入れていた。

「弾が言っていた最後の言葉……　私も記録映像を見たから知って

るわ……　アンタ達は弾の思いを託そうとした気持ちを裏切るつもりなの？」

「そんなわけない！」

「じゃあ、どうしてこんな所にいるのよアンタは！一夏、箒！あんた達はもう立ち止まることは許されないわ！分ってるんでしょうね？」

「……　ああ」

「うん……」

「本当に分ってるんだったら、こんな所でウジウジしてないはずよね、それともなに二人とも、戦わないといけない時に戦いたくないって言うような、卑怯者なわけ？」

次々と放たれていく鈴の言葉を一夏と箒は呆然としながら聞いていたが、彼女たちは徐々に瞳に力を取り戻していく。

最後に放たれた鈴の言葉を聞いた瞬間、二人の瞳に怒りと言う名の感情と共に劇的な変化が起こる。

「弾の思いも、言葉も裏切りたくなんてない！私は戦う！！」

「私も同様だ！だが、最早奴の居場所も分らないのにどうやって戦うというのだ！？」

「その点なら心配要らないわよ」

「――――――終わったようだな」

「ええ、待たせたわね、ラウラ」

二人の瞳に力が戻ったときを見計らっていたようにラウラが姿を現す、どうやら部屋の外で待機していたようだった。

「ここから三十キロ程の沖合いの上空で奴を発見した、ステルスモードに入っていたようだが、光学迷彩は使われていなかったようだな、偵察衛星からの目視で確認した」

「さすがドイツ軍の特殊部隊ね、良い仕事だわ」

「それよりもお前の方の準備はどうなのだ？」

「問題ないわ、甲龍の攻撃特化型パッケージのインストールは完了、他の連中は？」

「たった今、全て完了しましたわ」

「僕も準備は全部完了したよ」

ラウラの言葉を聞いて色々と確認を取っていく二人に、一夏と箒は置いてけぼりになっていたが、シャルロットとセシリアも現れて彼女たちも力強い表情をしているのが分る。
そんな彼女たちを見た鈴は、一夏と箒を不敵な笑みと共に見つめる。

「で、アンタ達はどうする？　その顔を見る限り愚問っぽいけど」

「私も戦うよ、弾も必ず見つけて見せる！」

「私もだ、次はもうあんな真似はしない！戦い、必ず勝つ！！」

「上等！それじゃあ、作戦会議といきましょうか！」

そういって少女達は、その場に座ると作戦会議を始めるのだった。

それから少女達は教師たちの制止を振り切って出撃し、今は銀の福音がいる空域へと向けて空を飛んでいた。

だが、その途中で鈴は一隻の潜水艦を発見する。

「あれ、なに？」

「どうして、このような所に潜水艦が？」

鈴の疑問の言葉に、ラウラも首をかしげていたのだが、シャルロットが険しい目を向けていた。

「多分だけど、弾が自爆したって知った何処かの国が蒼穹の残骸を回収しに来たのかもしれないね」

「その可能性が、一番高そうですわね」

「ああ、旦那様のＩＳである蒼穹は、どこの国でも喉から手が出るくらいに欲しがっているからな、腐りきった連中が派遣することなど容易に考えられる」

「まるで死体を漁るハイエナみたいな腐った奴らね……」

怒りと侮蔑の表情を浮かべて、潜水艦を睨みつける少女達、シャルロットの推測は無理のないものであり、尚且つ一番ありえそうなものであった。

だが、一番怒りという感情を浮かべている二人の少女達がいた。

「ふざけるな……」

「箒、落ち着こうよ」

「一夏！だが！あのような……！」

「あの人達は何時でも相手できるよ、でも今は、相手しなくちゃいけないのが、いるよね？」

箒と一夏だった。

彼女たちの目には、弾の死肉を貪るハイエナに見えたのだろう。

感情という色を失った瞳で武装を構えた箒を、意外なことに一夏が止めていた。

それをラウラたちは見て彼女たちに危険なものを感じ取ったのだが、あえて黙って銀の福音がいる場所へと急ぐのであった。

目標がいる上空に到着する直前になって、少女達はそこに妙な光景があることに気が付いた。

「え？　銀の福音と何者かが交戦してるよ！？」

「な！？　どういうことよ！？」

そう、銀の福音が何者かと交戦状態にあったからだ、目の前で福音の特徴的な光弾が大量に放たれると、相手をしているＩＳはそれを華麗に回避すると同時にビームを放つ。

そして、それは全て。

「な！？　ビームが曲がっているだと！？」

「あれは偏光制御射撃!?　どうして!」

「それにセシリアが使っているのと同系統のビットだと!?」

ビームが曲がり福音を追尾しているという状況になっていた。

その間一言も喋っていない一夏だったが、どうやらデータベースにアクセスしている様子だった。

「出たよ!!あれ、イギリスの【サイレント・ゼフィルス】だよ!」

「一夏さん、それは本当ですの!?」

「う、うん!」

この言葉を聞いたセシリアの表情に驚愕という感情が張り付く。

（どうして、強奪されたサイレント・ゼフィルスがここに!?）

そう、このＩＳ【サイレント・ゼフィルス】は過去にイギリスでＢＴ二号機として作られたが、何者かによって強奪された機体だっ

たからだ。
それがいま自分の目の前で、戦いを行っているなど、誰が想像出来るだろうか。

しかもそれの操縦者は、的確な武装の使用により速度が劣っているにも拘らず、ダメージをある程度与えている様子だった。

「奴に加勢する形となるが、各自持ち場に着け！銀の福音に対し攻撃を仕掛ける！！」

『了解！』

「り、了解ですわ！」

呆然としていたラウラだが、すぐに首を横に振って気を取り直すと、全員に対して指示を下して自身も打ち合わせでの持ち場へと移動していく。
セシリアはワンテンポ遅れたものの、銀の福音攻撃の為の位置へと彼女も移動していくのだった。

様々な状況と思惑が交差する中で、少女達は戦いを始める。

第２８話　俺がいない話って、何気に初めてじゃね？（後書き）

弾は、また次回に復帰します。

第２９話　あ゛ー、死ぬかと思った……　けど、シャルロットに渡すように頼んだ

今回は何故か難産でした……　話し自体は頭の中で出来ていたのに、
何故か指が進まないんですよね。

スランプの片鱗って奴を味わった気分です。

第２９話　あ゛ー、死ぬかと思った……　けど、シャルロットに渡すように頼んだ

ここは深度２００近い海底、そこを一隻の潜水艦がゆっくりと進んでいた。
大きさ的には水中排水量１８５０トン、全長６３ｍといった所の比較的小型といえる潜水艦だがセイルの直前には特徴的な構造物が存在していた。

その艦内の指揮指令発令所には６匹ほどの犬と猫達が、それぞれの持ち場について潜水艦を操っているのだった。
ここでどうして動物が潜水艦を動かせるんだ!?　というツッコミを行った方は番外編をご覧いただくと理由が分るだろう。

「ワウワゥ！ワウワゥーワゥ！（ソナーに感あり！目標と思われます！）」

「にゃんにゃにゃ！にゃにゃぁーん！！（探信音を感の有った方向へ打て！）」

「ワゥワゥ！（了解！）」

ソナーの音波を拾っていた測的要員の報告を聞いたリーダーである、猫（ネモ船長の格好をしている）の指示に従い測的の持ち場についている犬は、探信音を発信して先程感知した目標の詳細なデー

タを調べていく。

緊張感に包まれる発令所の中、耳に測的用のヘッドフォンを当てていた犬の表情は嬉しそうなものとなる。

「ワゥワンワワンォ！！（目標を蒼穹およびボス本人と確認、ボスは無事です！）」

「ニャニャ！ニャニニャニャニャーオ！！（そうか！では目標へと急速接近し収容する！！）」

『ニャ！（了解！）』

『ワン！（了解！）』

犬の声を聞いた発令所内には嬉しそうな雰囲気が一様に漂う。

そして、司令官クラスの猫の号令を聞いた操舵手となっている猫が操舵ようのレバーを操作して、目標である弾の元へと艦を誘導していく。

それを確認した司令官に扮している猫は艦内放送用のマイクのスイッチを入れて、乗員へと連絡を行う。

「ニャニャ！ニャニャニャーゥ！！（これよりご主人を収容する！

医療班はカタパルトデッキ手前の区画で待機し整備班は蒼穹の予備部品の準備を行え！！）」

その声と同時に俄かに騒がしくなる艦内、どうやら整備班と医療班とがそれぞれの役割を果たす為に動き出しているようである。

彼らからは見えないが、蒼穹は弾を守る為に自身に搭載されている防御システムを全て使い、彼の周囲に保護する為のフィールドを形成していた。

その様子はまるで女性が瀕死の淵に立たされている、大事な男性を守ろうとするかのようでもあった。

そして、潜水艦は彼らの元に到着してカタパルトデッキを開放、その中に弾と蒼穹を収容すると、艦内環境の整備の為に一度浮上を開始する。

奇しくもこのタイミングは少女達が、この潜水艦を発見するおよそ十分ほど前だったのだから、偶然というのは恐ろしいものである。

無論。

「にゃぁ！？　にゃあにゃにゃ！！（上空の紅椿からロックオンを確認！？　指示をください！！）」

「ワゥワウ！ワゥワゥワゥ！（このままでは！それに武装も強奪した際に使った魚雷が最後ですのでもう武装がありません！！）」

「ニャ、ニャニャニャゥ！（大丈夫だ、今ご主人の第一夫人殿が抑えてくれた！！）」

「ワフゥ……（助かった……）」

彼女たちが見つけて攻撃の意思を示した後には、こんな混乱が一気に炸裂していたのは言うまでもない、中にはパニックを起こして右往左往していた犬や猫もいることから、相当に危険な状況だったのだろう。

本当に偶然というものは怖いものである。

もしかしたら少女達は弾を自分達の手でトドメを刺してしまうという洒落にならない状況になっていたのだから。

まあ、そんな状況にならなくて結果オーライという所でもあるだろう。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第２９話　あ゛ー、死ぬかと思った……　けど、シャルロットに渡すように頼んでたメッセージ関連で、何かを忘れている気がするんだがなぁ……　気の所為かね？～

それぞれが出せる最高速度で接近していくなか、意外なことに最初に攻撃を仕掛けたのはシャルロットであった。
左手にビームバスターライフル【デュランダル】を展開して、更に加速しつつサイレント・ゼフィルスと交戦状態にある福音を補足。
それに気が付いたサイレント・ゼフィルスもそれに合わせて動き、彼女が射撃しやすい位置へとシフトする。

「もらった！！！」

高濃度に圧縮された粒子ビームが数回発射され、オレンジ色の

閃光を撃ち出す。
　それを福音は避けようとするものの、それに合わせて咆撃位置についていたラウラからの支援砲撃と、サイレント・ゼフィルスにより行われた攻撃も回避しなくてはならず、砲戦仕様のラウラとあわせるように動いたサイレント・ゼフィルスの攻撃は対応し避けたのだが、シャルロットの正確な射撃により放たれたビームは福音に突き刺さり大爆発を起こした。

「……　！？」

「なんて威力！？」

「ちょっ、どこの国もあれほどの威力のビームなんて実用できてないはずよ！？」

　デュランダルから放たれたビームの直撃を受けた福音は、直撃した部位から黒煙を上げていた。
　その威力に福音自身がまずは驚愕した様子を浮かべ、セシリアと鈴の驚愕ともどれとも付かない声が響いていた。

「やあぁあぁぁぁ！！！」

「っ！？」

「逃げられると思うな」

ビームの直撃を受けて動きの鈍った福音へと一夏が雪片を展開して、一気に迫っていく。

それを見た福音はギリギリのタイミングでの回避に成功するが、直後にサイレント・ゼフィルスの操縦者が発したと思われるボイスチェンジャーを介しているような、妙に低い声と共にビットのレーザー掃射を受ける。

更に鈍る福音の動きに対応してセシリアのビットと、鈴の衝撃砲の一斉発射が福音を更に追い詰めて、損傷を深めていく。

「うおぉぉぉ！！！」

両手に紅椿の固有武装【雨月】と【空裂】を展開した箒が海中から出現し、超高速近接戦闘に転じて、両手に握る刀を使いつつもそこからビームを放ちながら、自身も速度を増しつつ銀の福音を押し込んでいく。

「一夏！今だ！」

「うん！」

「La……♪」

「ッ！？」

「一夏！避けろ！！」

箒の言葉を合図として、彼女の動きを呼んで福音の位置を予測していた一夏が再び雪片を展開して、福音の背後から突撃する。

だが、福音はそれを確認することも無く箒を蹴りで吹き飛ばして、一夏へと向き直り大量の光弾を発射した。

一夏へと降り注ぐ大量の光弾、彼女は既に福音へ突撃して一撃を行う為にトップスピードに達している状態であり、避けられないのは明白な状況。

驚愕の表情を浮かべる一夏に、悲痛な悲鳴に近い声を上げる箒、だが、彼女と福音の間に無理矢理シャルロットが割り込む。

「アルテリオン！！フィールド全開！！」

「し、シャルロット！？」

「一夏、とりあえず離脱するよ！」

割り込んだシャルロットは一夏を捕まえて慣性の全てを制御して、

彼女を緊急停止させて小脇に抱えた後、オレンジ色の防御フィールドを展開、ほぼ全ての光弾を反射、もしくはかき消しつつ、離脱していく。

「こ、今度は防御用のフィールド……」

「やっぱり、シャルロットのあれは弾のお手製ってわけねぇ！！」

もはや驚愕が通り過ぎて呆れに昇華されたセシリアと、アルテリオンの製作者を的確に言い当てる鈴。

それ以外の者達の間にも、この防御方法についての驚きの色が見えることから、現行のＩＳでは土台不可能なものであるというのは間違いないようである。

「でも、その隙もらった！！」

「わたくし達を忘れてもらっては困りますわ！！」

鈴の衝撃砲、セシリアのビットによる攻撃が、一夏達への攻撃が終了してからギ後硬直とも言うべき状況であった福音へと行われる。

その上に一夏を解放したシャルロットのビームバスターライフルと箒の遠距離攻撃により、福音はシールドエネルギーだけではなく、

外観のＩＳアーマーでさえも削られていく。

「各機！そのまま攻撃を続行しろ！」

『了解！』

既に決着は近いといえる状況下、ラウラの指示に全員が了承の返事を返して、更に攻撃を続行し全員からの、さらなる集中砲火を受けた福音は、スラスターはほぼ全損、防御用のＩＳアーマーも崩壊寸前であった福音は、なす術も泣く全ての砲撃を受けた後、火達磨と化して海中へと落下していった。

福音が海中へと消えて、一夏達全員が安堵に近い溜息を吐くと、それぞれが仲間の元へと集まろうとしていく中で、鈴が最初に気が付く。

「そういえばさ、あのサイレント・ゼフィルスって何時の間にいなくなったのかしら？」

「さあ、先程飛び去っていくのが見えたがな……」

「いなくなった理由も来ていた知りたくもないって言いたいよ、ここにいたって事は福音か、弾の蒼穹か弾自身を確保しにきたって言うのは間違いないだろうし」

素直に疑問の声を上げる鈴に箒が答えているのだが、シャルロットは苛立ちを込めて吐き捨てるようにしてそういっていた。

「でも、これでやっと、弾の捜索ができるね」

「そうね、まあ、アイツのことだしなーんかさ、そこらへんの海から『あ〝ー死ぬかと思った』とか言いながら浮かんできそうじゃない？」

「ありえそう、といえてしまうのが恐ろしい所ですわね……」

微笑を浮かべていっている一夏に全員が、苦笑いとも呆れとも言えない調子で同意していた。

「イカン！！各機回避運動を取れ！！奴はまだ生きている！！」

「なっ！？」

ラウラの言葉が終わるか終わらないかというタイミングで、福音が沈んだ海面の海水が蒸発し、そこからまるで銀色のカーテンに包まれているように蹲る福音が姿を現す。

驚愕の言葉が誰のものなのか、それは分らなかったが、ラウラが各機に指示を下すと同時にレールガンを発射し、己の背筋に感じている不快感と本能が恐怖心を抑えようとしていた。

だが、砲弾はカーテンに阻まれて霧散した直後、福音を包んでいたカーテンは消え去り、それまでとは大きく姿が変わり果てている福音が姿を現した。

「なっ！？　あ、あれは……」

「二次移行、だとでも言うんですの！？」

「だとしても姿が違いすぎるわよ！！！」

鈴の驚愕の色を込めた声、彼女たちの同様は尤もと言うべき所だろう。

先程までは操縦者と思われる女性の手足が露出していた、自分達と同じ様なデザインをしていたというのに、今は完全に手も足も銀色のアーマーで覆われている所謂【全身装甲】へと変化していた。

一夏達によって全て破壊されたはずのスラスターは全て元通りになったどころか、明らかに数を増している上にその大半がエネルギーを中心とした構成でのエネルギー翼となっていた。

頭部にあった特徴的な翼こそ失われたままで、未だに生えていないのだが、銀の福音がラウラを視界に捉える。

「いけない逃げて！ラウラ！！」

「くっ、は、速い！！」

次の瞬間、閃光となった福音が1キロ近くの距離が離れていたというのに、数秒でラウラへと接近、彼女防御用に展開したアーマーを簡単に切り裂いたと同時に、背中から生えているエネルギー翼に包まれ光弾の一斉掃射を浴びてズタズタにされて、その場から吹き飛ばされる。

「よくもっ！！」

「やったわねぇ！！！」

「っ、いかんシャルロット！鈴！今度はこっちに来るぞ！！」

ラウラがやられたことに怒りを見せるシャルロットと鈴、だが、福音は予備動作無しでいきなり鈴に接近する。

いきなり目の前に現れたことで、虚を付かれた格好となった鈴は呆然としたが、それが彼女の命運を分ける。

「きゃあ！！」

「鈴！」

「この！鈴を放せ！」

再び同じ様に展開されるエネルギー翼、これを見たシャルロットは瞬時加速とほぼ同等の速度を発揮しつつ、自分達にも行われる攻撃を回避しながら接近して、福音の注意を逸らそうとする。

それに合わせるように箒も共に動き、一夏は無言でシャルロットの反対から接近、セシリアは今攻撃をすれば自身の腕では味方を巻き添えとしてしまうことに、悔しさを感じながら唇を噛み締めながら、チャンスを待っていた。

「きゃあああああああ！！！」

「鈴！！」

だが、彼女たちの努力も空しく目の前で鈴は光弾が引き起こした大爆炎に包まれて、海中へと堕ちていく。

そして未だに自分へと接近しつつあるシャルロットたちを無視して、今度は参加していなかったセシリアへと接近する。

「っ！この！！やらせはしませんわ！！」

これを見たセシリアは咄嗟の判断でビットを解放、接近してくる福音に対して弾道型を含めて一斉に攻撃を仕掛けるのだが、それらの全てが何らかのフィールドが展開されているように、福音の前で爆発、もしくはかき消されたことで無効とされてしまう。

「くっ！ブルー・ティアーズ！！」

それは無我夢中の叫びだったのだろう、目の前に迫り来る福音、

無効化される攻撃を見たセシリアの顔に焦りと言う色は無く。
ただ、敵を見据える様子しかなかった。

そんなな彼女がビットへと向けて叫んだ瞬間、発射されていた全てのレーザーが【曲がった】のだ、そう、先程まで共に戦う形となっていたサイレント・ゼフィルスが行っていた攻撃と同じ様に。
放物線を描くように曲がったレーザーの全ては、背後から福音へと襲いかかると直撃して爆発を引き起こす。

この状況に一番驚いたのがセシリアで、他の全員も驚いていた様子なのだが、すぐに気を持ち直して福音へと残る全員で近接戦を挑もうとした。
だが、その瞬間に大規模な面制圧を行うようにして放たれた光弾が、全員に襲い掛かる。

「ま、また!?」

「シャルロット!あのフィールドは使えないのか!!?」

「ダメ!チャージがまだ終わってない!!」

「このままでは、ジリ貧ですわ!!」

全員が回避、もしくは防御の体勢に入りながら、箒はシャルロットへと問いかけて、彼女からは悲鳴に近い声が漏れ出てくる。
そして回避を誤ったセシリアがまず落とされた後、続くようにシ

ャルロットも落とされてしまい、残るは一夏と箒の二人だけとなってしまう。

「ねえ、箒」

「なんだ？」

「絢爛舞踏、まだ使えない？」

「ダメだ……　さっきからアクセスしようとしているが、紅椿からは何も答えがない」

「そっか……　このままいくしかないね」

「ああ」

一夏にとって頼みの綱といえるのが、箒の絢爛舞踏と呼ばれる武装だった。

既にエネルギー残量は危険域に到達しており、白式のエネルギー効率の悪さが露呈している形になっていた。

（できて雪片を後一回展開できるだけ、それ以上は確実にエネルギー切れを起こしちゃう……）

険しい表情で一夏はそう考えながら、雪片の柄を握り締める。
束の言っていた絢爛舞踏は白式にエネルギー供給が可能という武装だったのだが、それが未だに使えない以上、頼れないのは明白といえる状況。

「一夏！後ろだ！！」

「えっ？　きゃっ！！」

「一夏を放せぇ！！！」

彼女が考え込んだ一瞬の隙、それを福音は見逃すことはしなかった。
一瞬で一夏の背後に接近し、彼女をエネルギー翼で拘束して自由を奪った後、両手に武装を展開して接近してきた箒に向けて、銀の祝福と移行前は呼ばれていた武装が一瞬で放たれて、彼女は閃光の中に消えて絶対防御が発動した箒も他の者達と同様に海へと落下していく。

「うっ、ぐぁ……」

ギリギリと自分の体を締め付けてくる福音のエネルギー翼、まる

で自分を嬲り殺しにするように先程から光弾が僅かに発射されて、自分に直撃して削られるのが分るアーマーの感触、既に体の数箇所から蜂が流れていて、彼女の髪をサイドポニーに纏めていた髪ゴムも弾け飛んでストレートになっていた。

だが、こんな状況になっても一夏は福音を見据えたまま目を逸らしてなどいなかった。

「まける、もんかぁ……！弾は逃げなかった！貴方から！だから私も逃げない！倒してみせる！！」

彼女の思い、それは目の前であんな姿になっても瞳が輝きを失うことは無く、自分達に対して言葉を残した弾の姿だった。

リフレインする弾の姿はいつもと同じ様に不敵に笑っていて、彼女に勇気というものを与えていたが、目の前でこれ見よがしに行われる祝福のチャージを見た彼女は、泣きそうに顔をゆがめる。

「ここまで……　なのかな……　でも、会いたいよ……　声を聞きたいよ……　弾……！！」

彼女は遂に限界を向かえ、そう叫んだ瞬間、オープンチャンネルから待ちわびていた、一番聞きたかった声が響き渡る。

『良いから顔を伏せろ、そんな泣き言、聞く耳もたん』

「えっ！？」

その声が響いて思わずといった様子で顔を伏せた彼女、その瞬間に殺到する高威力のビームと、それを放ったビットの数々、直撃を受けてよろけた福音はそこへ更に3基のビットがトライアングルの形で接近、中央部にエネルギーを集中させるとそこから更に威力の高いビームを撃ち、一夏から福音を吹き飛ばしていた。

だが、福音も吹き飛ばされつつも反撃を試みて、一夏へと光弾を放つのだが、それらは全てビットが行う防御フィールドにより無効化されていく。

「良く、頑張ったな一夏、それと遅れてゴメンな」

「だ、だん？」

「おう」

「だん、だん、弾、だぁん！！！」

「おいおい……　まあ、感動の再会は後だ、今は離れていろ一夏、海面に潜水艦が浮かんでいるから、そこにいてくれ」

目の前にはいつもの微笑を浮かべて自分の頭を撫でている弾の姿、彼女が一番待ち望んだ光景に愛おしい彼の名前を叫びながら抱きつく。

苦笑いを浮かべながら、弾は下の海面を指差して、彼女が視線を向けた先には自分達が弾のＩＳを回収しに来たと勘違いしていた潜水艦が浮かんでいたのだった。

「にぁあああー！！（四人目フィーッシュ！！）」

「わぅううううん！！（五人目フィーッシュ！！）」

「う、うぁ……」

弾が指差した方向を見れば、箒や鈴達が犬や猫によってカツオの一本釣りのような感じで回収されている光景だった。

流石の彼女からも自分がされていたらと思うと嫌だったらしく、嫌そうな声が漏れ出てくる。

実はこの中で一番マシな扱いなのは、ラウラだったりする。

彼女は陸地で気絶していた為に、ストレッチャーを持った犬や猫達が上陸、彼女をストレッチャーに乗せて艦内に普通に収容していたのだから。

なので、他の人間達が海面でプカプカ浮いているのを良い事に、

彼らは一本釣りの要領での回収を選択したようである。

無論、したくもない貴重な経験といえる、この経験を彼女達がどう捉えるのかは定かではないが、彼らは全員の救助を終えたようで甲板に残ったのは二匹の猫と犬、どうやら佐助と小太郎のようで一夏へと手招きしていることから、急げ、といっている様子である。

「さ、一夏」

「うん……　でも、約束してね、必ず帰ってきてくれるって」

「ああ、約束するよ……　だから待っていてくれ……　一夏」

「うん、信じてるよ……」

彼女は無意識の内の行動だったのだろう、潜水艦を指し示した弾の右腕を再び抱きしめると、不安そうに今にも大粒の涙を流しそうに彼女はそう言っていた。

弾は彼女の頭を一度撫でて、力強くそう言うと潜水艦へと向けて下っていくのだった。

それを福音は阻止しようと行動するのだが、弾のビットが全ての行動を阻害する。

「さてと、第2ラウンドといこうかい？　今度はあの時と同じ様になると思うなよ！」

一夏が小太郎と佐助の誘導で潜水艦の甲板に着艦、艦内に収容されて艦が急速潜航をスタートして、海中へと姿を消したのを確認した弾は、両手にファルシオンを展開する。

それと同時に戦闘準備を済ませた福音も、弾へと向き直り二つの影はぶつかり合うのだった。

第２９話　あ゛ー、死ぬかと思った……　けど、シャルロットに渡すように頼んだ

……　最後のシーン、完成したばかりの生原稿では一夏の唇を奪っていた弾がいました。
なんで、そんなシーンを書いたんだろうか……　そうだ！書いていた時に寝ぼけ眼で、機動戦艦ナデシコの最終回を見ながら欠いていたからだろうか？

友人の指摘で気がつきました『弾の奴、一夏一人に絞ったの？』と言う言葉で。
それと聞き、そんなバナナ（死語）とか思って、これを見た瞬間（？？）あるぇーとなったのは、言うまでもありませんでしたとさ。

今回の完成稿では削除しましたが、またＮＧシーン集でも編集して、そこに載せようかと考えております。

第３０話　思い出したぁー！シャルロットのメッセージ内のアレ消してねぇー！

そして再開される福音との戦い、俺は近距離で奴に光弾を発射させないように戦いながら、ビットでチクチクと削っていた。
何でこんな戦い方をしているのかって？　それはな。

「どっせーいぃぃ！！！」

「！？」

ハリセンを要所要所で使いたいからだ！！
奴への仕返しも兼ねているこのハリセンの一撃、すでにハリセンでの打ち込みは数十にも及んでおり、奴のアーマーは崩壊の兆しを見せていた。

だけど、時々だがなぁ、明らかに内部の操縦者が屈辱に震えているような様子を見せるのは、気の所為かね？
それにだが、この戦いが終わったら……　俺の身に大変なことが何回か起きそうな予感もするのは。

ま、まあ！それは置いておいて今は奴の撃墜が先だよネ！！

「うははははははは！！！！喰らえ！！ハリセン式〇突！！」

「……ッ！！！！！」

だけど奴は俺が一瞬だけ思考に耽ったタイムラグを見逃さずに距離を開けて、光弾による面制圧を行ってくるのだが。

俺は防御を全てビット任せにして瞬時加速を行いながら弾丸のような体勢で接近する。

無論空中に対応した牙〇の形でハリセンを固定して、だからな！！そんでもって振り抜いて福音の反対側に抜けた俺は、一つの切り札を切ることを決意する。

「Ｌａ……　ッ！？」

それは福音の中にいる操縦者にはどういう光景として映っただろうかね、彼女の目の前には【俺がいない】蒼穹本体が現れて、福音の両手と両足を手は普通に蒼穹の腕で、足は蒼穹の足から展開されたビーム状の物体によって拘束されている状況。

その上に蒼穹本体が青緑色の輝きを全身から放ち始めて出力が急激に倍増するという、更に訳の分らない状況だ。

「やっぱ、トラ〇ザム類似のシステム作っといて正解だったな」

そこに俺の声が響き渡る。
福音の頭部が俺を捉えたときには、俺は既にグングニールの射撃体勢に入っており、体を空中に固定する為のスキマワイヤーを展開しているのだった。

そう！これが切り札の一つ！セラ〇ィーの後ろにくっ付いていたセラ〇ィムさんフォルム！！
まあ、簡単に言えば、蒼穹本体と分離して、ＩＳスーツとかの最低限の装備だけで俺一人が武装を展開して戦うっていう状態だな。
あ、この間、蒼穹本体は超高性能無人攻撃機状態になってるから、この状態でしか使えなかった、単一仕様能力を発動させた際の護衛というべき状態にもなってるな。

え、能力はなんだって？　まあ、分かる人はここで分かっちまうような能力だよなぁ、発動した時は俺も引いたというか……　山田先生、あの時は本当にごめんなさい。
でも、自分で名づけておいてなんだが、何か、ダサいような気がするなぁ、まあ考えておくか。

「そいじゃあ、堕ちろぉー！！！」

そんでもって、俺はあっさりと引き金を引いて福音に向けて超高エネルギーの奔流を浴びせて止めを刺していた。

え？　操縦者はどうなったって？　無事だよ直撃の直前に本体が離脱して、全システムが解除されて生身で落下していた操縦者本人も回収済みだからな。

ただ、俺の決着を待っていたように、目の前のハイパーセンサーに一つのメッセージが表示された。

『勝利おめでとう、今回は会えなかったけど、また今度会えたときは、あのアイスクリーム一緒に食べたいな　ｂｙ貴方にドＭとか言われた娘より』

……　誰だけ？　と思ったのだが、まあ良いやと思い蒼穹とドッキングして元に戻ると、戦闘終結が分っていたらしい潜水艦が浮上して鈴達が甲板に出てくるのが見える。

俺は彼女たちに手を振ると彼女たちも、嬉しそうに手を振っているのだった。

でも、俺一人だとこうまで簡単に終わったんだからさぁ……　最初から俺ひとりでいけばよかったよなぁ。

だけど一夏の白式に仕掛けが施されていたのは、能力の答えを見ても明らかだったからなぁ、多分だけど、俺が一人で行ったと同時に一夏を乗っ取って無理矢理白式が出て行くかもしれないな。

それに箒の紅椿も同様の仕掛けはあったみたいだし、あの天災の

思惑はなんなんだろうな？　見る限りじゃあ箒のことも、大切にしていたみたいなんだが。

まあ、それは追々考えていけば良いとしてもだ。

何か一夏関係で重要なフラグをぶっ潰した気がする。

……まあ、良いか！

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第３０話　思い出したぁー！シャルロットのメッセージ内のアレ消してねぇー！ヤバイ今すぐ転移しないと…え？千冬さん？お前がいないと面倒なことになるから却下？かんべあだだぁ！～

弾が決着を付ける前の潜水艦の発令所内部では、大型の空間投影型モニターに弾と福音との戦いが映っており、全員の後頭部に冷や汗が浮かんでいた。

「ねぇ、鈴」

「何よ？　一夏」

「私ね、福音の操縦者に、何となくだけど謝らないといけない気がするんだけど、気のせいかな？」

「……」

とっくに微妙な雰囲気となっている発令所の中、一夏の発した疑問の声に誰も応えることは出来なかった。

「まあ、ね、あんな理不尽な武器でボコボコにされちゃぁね……」

「僕さ、今は本当に福音の立場じゃなくて良かったって本気で思ってるよ……　あんなの見ちゃったらさ」

「だがハリセンとはな……　流石は旦那様だな相手が本当に屈辱だと思う攻撃方法を、適切に選んでいる」

『……』

全員が今や福音に向けて憐憫のまなざしを向けている中で、唯一感心したように、尚且つ熱を持ち恋する乙女の視線でモニターを見ているラウラの姿に、流石に全員がドン引きしていた。

そして、蒼穹が分離して高エネルギーの奔流で撃墜された福音を見た一夏達の瞳に、僅かに同情の涙が浮かんでいたのは、気にしてはいけないところというものだろう。

そんでもって俺たちは旅館へと帰還した。

「作戦完了よくやった、といいたい所だが、女子の専用機持ち共は独断専行の上に命令違反などという、重大な違反を起こした、学園に戻り次第、反省文を提出し私が直々に懲罰用の特別訓練メニューを用意してやるから、覚悟していろ」

『は、はい……』

静かに、尚且つ無茶苦茶怒った織斑先生のご無体なお言葉に、女子一同はシュンと落ち込んでいく。

だが、織斑先生は俺を視界におさめて、表情を崩して微笑を浮かべていた。

同じ様に後ろには感極まったように山田先生が泣いていたけど、やっぱ心配、かけちまったかなぁ。

なんて俺は考えていた。

「それと、良く生きて戻ってきてくれた、五反田」

「いや、まあ、ゴキブリよりもしぶといのが俺の信条ですからね、

でも、ただいま帰りました」

「ああ……　お帰り」

「お帰りなさい！五反田くん！！」

一言一言を発するごとに織斑先生の瞳には嬉し涙であろうか、涙が潤んでいく。

まあ、こんな状況が照れくさかったから、俺は誤魔化すように言ってしまったんだけど織斑先生は気にした様子はなくより微笑を深めて、そういっていた。

だけど、ここで山田先生の緊張の糸というか、そんなのが纏めて弾け飛んでしまったんだろう、大粒の涙を流して俺に抱きついてきた。

おお、おおおおお！！！こ、これはF！？　いや、限りなくGに近いサイズだと！？　ええい、やまやは化け物か！？　なんて考えて鼻の下を伸ばした俺の背筋に死の恐怖感が差し込まれる。

「み、ミナサン……　ド、ドウカナサレタノデ？」

「クスクスクスクス……　山田先生、幾ら弾が帰ってきて嬉しいといっても、抱きつくのはまずいんじゃないんですかぁ？」

「そうだな、山田君、君には教師としての自覚が少し欠如しているようだ」

代表として一夏と千冬さんが言葉を放ったようなんだが、他の連中も顔全体は笑っているのに、目が笑ってねぇ！！

こ、怖すぎる……　怖すぎるぜぇ……　特にシャルロットは右手から陽炎のように武装らしきものがチラチラと見えている気がする。

き、気のせいだと思いたい！！

そんな感じで怯えていたら、千冬さんが山田先生をベリッと引き剥がして、女子達が治療する為に俺は追い出される。

まあ、回復魔法使って傷を治しちゃった俺には治療はいらないから、さっき山田先生に手配されていた医療スタッフに治療はいらない、と答えたんだが、怪我が一つもない事に驚愕されて、人外を見る目で見られたのはちょっとだけ傷ついたよ。

ちょっとだけなんだからね！！

それから、晩飯の時にはシャルロットと一夏がクラスの連中から、何があったのかを問い詰められていたんだが、彼女たちはシャルロットは兎も角、一夏も意外なことに責任感はかなり強いので、一言も今回の事を漏らすこともなくお喋りを終わらせていた。

晩飯も済んで、全員がまったりと過ごしているであろう時間帯に俺は浴衣姿で砂浜に立っていた。

それはある一人の人物を呼び出しを受けたからだ。

暫くの間、俺はぼけーっと満潮を迎えた海を見ていたら、後ろで砂を踏む音が聞こえてそちらを振り向いた。

「待たせてしまったか？　私が呼び出していたのに、すまない」

「そんなに待ってないが、どうしたんだ、こんな時間に？」

「いや、まぁ、その……」

俺を呼び出したのは箒だったのだ、何で呼び出したのかは知らんがな。

だけどちょうど良かったから、箒の誕生日が今日だと一夏に聞いていたし、プレゼントも実は用意してたからそれも一緒に持ってきているんだよな。

まあ、俺が用件を箒に聞いたら何か急に顔を赤くしたり青くしたり、モジモジとしているんだが、はて？

「そ、そのすまない！」

「？」

「私が姉に言われるままにお前達についていき、特に弾には取り返しのつかなくなる寸前の事までしてしまった……」

「……」

「だから、言葉で謝って済む問題だとも思ってない、だけど今は謝らせてほしい、ごめんなさい！」

そのことか、と俺は思うと頭をがしがしとかいていた。

どうしたもんかねぇ、俺はあの時助かる自信があったから、ああしたのであって箒が気に病むのは無理矢理くっ付いてきたこと程度で、良かったと思うんだがなぁ。

「過ぎたことだし、俺はもう気にしてないから許す、なんていってもお前さんは納得しないだろ？」

「当たり前だ！私は自分の愚かさでお前にしてはいけないことをしてしまったんだ！！だから、私に出来ることならばなんでもする！罰を与えてくれ！！」

「ふむ……　んじゃあ罰を与えようかね……」

「ああ、頼む」

「そいじゃあ、箒、目をつぶって歯を食いしばれ」

「ッ！！」

まあ、箒が罰を望んでいるけど、ここで体で償え！とか言ったら本当にしそうだし、何より一夏たちに知られたら俺の命など、血を集ろうとしてパチンと殺される蚊の如き運命な感じで、なくなっちまうだろう。

だから、俺が知りうる中で一番効果的で尚且つ、痛い系の罰を与えることにした。

「うりゃっ」

「いたっ！――――――――ッッッッ！！！！」

気の抜ける声を上げて俺は彼女の額を指で弾く。

所謂デコピンなのだが、ちょっとだけ違うんだな。

前世でやっていたとあるエロゲーに出てきた流派の中に、衝撃か斬撃かを相手の体の内側に徹すという技法があったんだよな。

フッ、前世で再現しようといい歳こいて努力してしまった俺には呆れるが、こっちじゃああっさりと再現出来ちまったのは世の不条理を感じた、今まで使わなかったのは単純に忘れてたんだよな。

まあ、ここで役に立った？　のは良かったのかも、しれんな。

「大丈夫か？」

「は、話しかけないでくれ……　の、脳が揺さぶられているような、そんな感覚がして、脳が痛いとしか思えないんだ」

さっきからうずくまってプルプルと震えている箒の姿に、俺は流石に心配になったから声を掛けたんだが、彼女の顔はよりしかめっ面になってしまっているのだから、まあ状況は分るだろう。

それから暫く経って、ようやく箒は落ち着いたのか立ち上がると、ちょっとだけ苦笑いを交えながらも、清々しさを感じさせる表情をしていた。

「ふぅ……　やっと痛みが引いた」

「やった俺が言うのもなんだが、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ、私が望んだのだ、気にするな」

「そうか」

そういった後、俺と箒の間から会話が消える。

だけど沈黙が広がるこの空間は、気まずいものじゃなくて何処か心地よい感じなっている。

そこで俺は懐から、今日のために用意していたものを取り出すと、箒に向けて差し出した。

「これは？」

「お前さん、今日が誕生日だろ？　プレゼントさ」

「え、いや、これは……」

「受け取ってくれなきゃ困る、ほれ」

「あ、わっ」

疑問顔の箒に俺は簡単に説明したら、彼女はそれまでとは一転し

て困ったような、それでいて嬉しいような複雑な雰囲気を放ち始めていた。
まあ、彼女がこんな雰囲気になるのは簡単に予想できていたからな、だからこそ、俺は無理矢理彼女の手に握らせると手を放す。
箒は俺の突然の行動に驚いたようだけど、すぐにしっかりと握っていた。

「弾、私は……」

「まったく、お前さんは昔気質なのは良い事だけど、俺はお前さんに罰を与えてチャラになったんだ、胸を張って受け取ってくれ」

「……　それも、そうか……　ありがとう、弾」

「いいってことよ」

「……　開けても、良いか」

「おう」

まだ迷っている箒に俺は更に言葉を繋いで、そういっていた。
俺の言葉を聞いた箒は少しだけ嬉しそうに表情を綻ばせ、宝物を扱うように両手の中に収めていた。

それから箒は俺に確認してきたから、俺はそれに頷いて答えると、

箒は包装されているリボンを解いて箱を開けた。

「こ、これは……」

「お前さんの誕生石の紅水晶で作った、誕生花のスイレンをモチーフにした髪飾りだよ」

「た、高かったんじゃないのか！？　こんな、これほどのもの……」

「いや、質がかなり良い原石を持っていったら、安く出加工してくれる隠れた名店的なところを知ってるからな、そんなに掛かっちゃいないぞ……　嬉しくなかったか？」

「そんな訳がないだろう！！大事に、大事に使わせてもらう」

「おう、是非ともそうしてくれい」

見た目は非常に精巧な作りをしている髪飾りを見た箒の顔に、驚愕の色が浮かんだ後、俺に対して不安そうにそういってくる。

これを普通の店で買おうとすれば高くなるだろうが、以前鍛錬で使っていた山で拾った紅水晶の原石を件の店にもって行って加工してもらったのさ。

まあ、一夏達や鈴達の誕生日プレゼントとかでも大変お世話になっているから、既に俺は常連特価として作ってくれるんだよな、なんでも俺が持ち込む原石類は滅多にお目にかかれないほどの質の良

い物だって話しなんだが、俺には自覚がないから分らんね、気が付いたら道端とかで拾うんだよな。

だけど、あそこの店主って前世で一度やったことのあるゲームで見たことがあるのは気のせいだろうか？　何しろ【俺に掛かれば宝石から武器だろうと、防具だろうと作ってやるぜ】なんていったし、メガネかけている白髪のオッサンでベージュ色っぽいスーツ着ているし。

それから俺は箒をもう夜が遅いという風に言いくるめて旅館へと帰したんだが、ちょっとだけ不満そうだったのは気の所為かね。

特に箒にフラグが立つようなことしてないから、俺と一緒に戻れないから不満というわけでもなさそうだし。

「だが、俺は借りはそのままにしておく趣味は無いんでな……　きちんと返すぜ！天災！！！」

そう、俺にはまだ重要なことが残っている！
能力の一つ、アンサートーカーに問いかけたのだ、今回の主犯はだぁれ？　とな、そしたら天災という答えが帰ってきたから俺は、仕返しする気満々だった。

だが、普通に仕返しした所で奴は驚くことも無く、かと言ってトラウマを植えつけられたりする事も、恐怖を感じる事も無いだろう。
だから、普通の手段は使わない！前世でのわが青春のヒーローであった彼に習う！！

「覚悟しろよ……　天災！！フオオオオオオオオオ！！！！」

ニヤリ、と俺の顔が不敵に歪むのがよく分る。
そんな中で俺は自分のありったけのリビドーを発散するように叫び、懐から【罰】と書かれた覆面を取り出す。

そうだ、叫んでいたな、彼は、我がヒーローである変態仮面は！

「クロスアウッ！！！」

日本語で脱衣の意味となる言葉を叫んだ俺は、罰と書かれた覆面と白褌と網タイツに身を包むという、変態極まりない格好となった。
そして、俺は向かう奴の元へ、全ての借りを返すために！！

彼女、篠ノ之　束にとっては全てが予定調和のように終わった出来事となっていた。

今現在、彼女は岬の柵に腰掛けていた。
直下は陸地、それよりも前には海が広がるこの場所、落ちればただではすまないであろうここにいても彼女の様子に変化というものは無かった。

「うーん、紅椿の稼働率は全合計で二十八％か……　もっと行くと思ってたんだけど、いっちゃんの白式も二次移行しなかったし、だっくんが強すぎるのも問題だね」

言葉だけ聞けばご機嫌なように聞こえるが、表情はつまらないものを見ているように無表情なものとなっている束の姿。

「でも、ハリセン一本でこんなにしちゃうなんて、ハリセンも調べた方が良いかなぁ、だっくんの強さも色々と知りたいしね、でも、合格だねだっくん、私のお婿さんに相応しいよ、束さんは本当に嬉しいよ」

弾の戦闘記録映像を呼び出している間、束の口元には狂っているような、それでいて愛おしいものへと向ける笑みが浮かんでおり、今にも狂ったような笑い声を上げそうな様子を見せていた。

それは愛しい男性が自分の元に来てくれた少女の笑みか、それとも狂いきり精神を病んでしまった女性の笑みか。

その正体は分らない。

だが、ここで彼女の後ろで何かが着地したかのような足音が聞こえる。

「ん？……　なんか用なの？　そこの変態」

「篠ノ之　束だな」

「名前を呼ばないでくれる？　不愉快だし、今からここにちーちゃんが来るからさっさと消えてよ、ていうか死んで」

「ククッ、これより、貴様は地獄を味わうこととなる、私はそのための使者だ」

着地した音が彼女の望むものではなかった為に、束の瞳と表情から色というものが全て消え失せて、ソレを目に入れた彼女の口から驚くほどに冷たい言葉が出ていた。

この口調は束自身が【興味のある対象】か【身内】意外の者達に向ける特徴的なものであり、人としての倫理観に常識などが著しく欠如した口調となる。

彼女の辛辣を通り越した言葉を聞いても、目の前の罰と書かれた覆面をかぶっている男に変化というものは無く、淡々としている様子にも束は更に苛立ちを募らせている様子であった。

変態といえる男の言葉を聞いた束は、あからさまに表情を歪めて舌打ちをする。

「どうでも良いけど、とっとと消えるか死ぬかしてよ、変態に用は無いんだけど」

「貴様に無くとも、こちらにはあるのでな、さあ、篠ノ之　束、断罪の時間だ」

「やってみなよ、変態」

後に束は回想する。

この時、こんなこと言わずにさっさと逃げときゃ良かった、と。

地獄の6時間、彼女がそう命名した時間の最中、ナニが起こったのか台詞のみのダイジェストでお届けしよう。

「さあ！私の攻撃を食らうがよい！！」

「い、いやあぁぁぁぁぁぁー！！な、何でそんなふうに動けるの！？」

「ふふふぅははははぁ！！昆布を馬鹿にしてはいかんぞ！私の汗と体液に塗れた昆布と共に果てよ！！！」

「や、やめてぇー！！！そんなものをぶつけようとしないでよ！この変態！！！」

「な、なんで地面と海水でもどちらでもない場所から出てこれるのよ！？」

「私に不可能など無い！さあ、束よもう一度、私のリビドーを受け取るが良い！！」

「ヒィ！！」

ガチで嫌がる束と、それを嬉々として追い詰めていく変態、否、弾。

ナニが起こっているのかは、台詞で御察しいただけるとありがたい。

「ッ！？　それ、それは、それはいやぁ！！！」

「ｗｅｌｃｏｍｅ……　さあ、私のおいなりさんにキスをすることで、君に消えない証というものを残そうではないか！！」

「い、いや、いや、いやいやいやいやぁ！いやぁーーーーーーーーーーーーー！！！」

「ふぅはははははははははは！！！！」

本当に、ほんっとうに嫌そうな絶望に塗れた悲鳴を上げる束と、ほんっとうに嬉しそうな笑い声を上げている弾。

ナニ起こっているのかを、詳しく描写できないことに苛立つ読者もいるかもしれないが、弾がやっているのは紛れも無く、世間一般では変態行為と呼ばれている行為なのだから、描写はなるべく控えさせていただく。

その次の瞬間気絶したらしい束を弾は放置すると、元の格好で旅館へと帰還し清々しい気分で眠りに付くのだった。

因みに次の日に、とある老夫婦に介抱された束が、いなり寿司を見て顔を真っ青にして逃げ出したというエピソードがあるのだが、誠に勝手ながら割愛させていただく。

次の日、ＩＳ学園へと戻る日になり、バスに乗っている俺だが。

「あ゛ー　喉渇いたし、腹減ったなぁ……」

喉の渇きと空腹に悩まされていた。
理由としては、朝起きたら一夏が俺の布団の中にいて、それがお約束のように皆にバレる、命懸けの鬼ごっこスタート、といった要領だ。

千冬さんが出張ってくれて鎮圧してくれたから、被害はあまり無いんだがなぁ、バスの時間ギリギリだったから飲み物を買う時間も無いし、飯を食う時間も無いからバスに押し込められたんだよなぁ。
なんか知らんけど千冬さんも不機嫌だったし。

でも、皆をチラリ、とみれば。

「一番まずく喉もよく渇いてくれるレーションなら有るぞ」

「……　知りませんわ」

「知らないっ……　弾の、ばか」

「両方ともあるけど、あげない」

上から順にラウラ、セシリア、一夏にシャルロットだ。
皆様にべも無いお言葉、ありがたくて涙が出そうだ。

だが、ここで答える言葉がなかった箒を見れば、昨日俺がプレゼントした髪飾りの入った箱を見てはにへらと笑みを浮かべていたので、俺の状況に気が付いているかどうかも怪しいな。

援軍はなし、ということか。

そう考えていたら、いきなり箒を除いた全員が立ち上がる。

「「「「だ、弾!?」」」」

「ん？」

この苦しさを誤魔化そうと思い、寝ようと判断した俺に四人が声を掛けてくるのと同時に、バスの扉が開いて見知らぬ女性が入ってくる。

年の頃は千冬さんと同じくらいだろうか、鮮やかな金髪がまぶしい大人の美女！であり、これまた素晴らしいスタイルをお持ちのお方だった。

「ねえ、五反田　弾くんいるかしら？」

「は～い、俺っす」

「へぇ、きみかぁ……」

「な、なんっすか？」

俺は一番後ろの席に座っていたのだが、彼女が俺を確認して、こちらへと歩いてくる時の表情を見ると、嫌な予感がバリバリだった。

何しろきっつい悪戯を今から仕掛けようとしている人間特有の表情をしていたんだし、俺の言葉がちょいとどもっちまうのも仕方の無いことだよな。

俺に近付いてくるときには箒も元に戻っていた様子だったんだが、あの時のままでいて欲しかったと思った俺は悪くないと思う。

俺の目の前に立つと、俺とキスが出来そうな位置で俺の顔や体を見ていく金髪美女、一夏達の視線がかなりの危険位置になっているのは気のせいだろうか？　や、やばそう……

なんて、俺が考えていたら、金髪美女が口を開いた。

「私の名前は、ナターシャ・ファイルス、銀の福音の操縦者よ……貴方にハリセンで攻撃されてた」

「ＯＨ……」

やばい、この女、俺にハリセンで攻撃されていたことに対して仕返しをする気だ！？　め、目が語っていやがる。

なにをしてくるかは分らないが、俺は体勢をちょっと移動し様と思った瞬間、唇に柔らかい感触があるのに気が付いていた。

「あ、あ、ああ、あああああ、あああーーーーーーーーーー！！！！」

俺自身驚いたが、ナターシャさんにキスされて、一夏が悲鳴じみた声を上げて、他の連中も驚愕と言う感情で行動できない様子。

それから彼女は、たっぷりと数秒間近くもの時間をかけて、じっくりとキスを楽しんだ後、唐突に離れる。

「クスッ、ごちそうさま、それじゃあまたね」

と言って颯爽とバスを後にしていくんだが。

「ねえ、弾、弾ってさ……　どうしてそんなに女の人と仲良くなっちゃうかな？　かな？」

「旦那様の浮気も甲斐性のうちだな、魅力的な旦那様をもてて、私は誇りに思うとしよう」

「本当に行く先々で幸せ一杯のようで、羨ましい限りですわね」

「弾の浮気者！」

「フフッ、流石にあのようなものを見せ付けられたら、私も心中穏やかではいられないな」

そういって迫ってくる夜叉となった少女達、何故か知らんがラウラだけは致命的にずれたことを行っていたんだが、もはや、何も反応出来ない俺へと向けて。

「「「「はい！どうぞ！！！」」」」

５００ｍ？のペットボトルが来襲する。

これらの全てが突き刺さり、俺は座席に沈むと投げてきた皆は足音も荒く席へと戻っていくのだった。

まあ、外では千冬さんとさっきの金髪美女が、何か話してた様子なんだが……　気のせいだろうか、千冬さん、あの金髪美女にアイアンクローをかけてなかったか？

き、気のせい！気のせいだよね！！

なんて事を挿みながら、それからは順調にバスはＩＳ学園へと向かって行ったんだけどな。

第３０話　思い出したぁー！シャルロットのメッセージ内のアレ消してねぇー！

本当にやりたかったと言うか、言わせたかった台詞は『それは、私のおいなりさんだ』というものだったのは、秘密。

本当は詳しく描写する予定だったのですが、プロットを見た友人曰く『これ書いたらノクターンでも受け入れられもらえないかもしれないぜ？』といわれたので、束にナニかを行っているシーンをほぼ丸ごと削除して書いた次第です。

……　いつかは、書こうかな……

第３１話　よっしゃあ！これでＩＳを題材にしている漫画やアニメにゲームから

八月、ＩＳ学園は普通の学校と比べて遅めの夏休みに入る。
そんなＩＳ学園の職員室で、真耶は夏休み特有の書類整理を行っていた。

「や、やっと……　やっと終わりました……」

そういって書類が片付いた机の上にぐでーと倒れこむ真耶、彼女の瞳が気のせいかぐるぐる回っているような気がしてならない。
それもそのはずで先程までは彼女のデスクの上には大量の山となっていた書類があり、それらを一人で処理していたのだから。

そして真耶は熱いお茶を用意して、それを幸せそうな顔で飲んでいく。

「はぁ～　夏はやっぱりエアコンの効いた室内で、熱いお茶を飲むに限りますね」

ほぅ、と息を吐いている真耶は職員室の扉が開く音に出入り口を見る。

「失礼しまーす」

「あら、五反田くんじゃないですか、どうかしたんですか？」

「いやちょいと許可と言うか、そんな感じのものをもらいに来た次第でして」

「はぁ……」

珍しい客であり、訪ねてきたのは弾だった。

真耶は珍しく訪ねてきた弾に少しだけ驚いた様子を見せるのだが、すぐに笑顔を浮かべて弾のほうを見ているのだった。

いつもハッキリとものを言ってはいる弾にしては珍しく、何かをぼかすような言い方に真耶はちょっと呆けてしまう。

それから弾は、真耶の生返事に近い声を聞いた後、彼女を正面から見つめて口を開いた。

「旅行（みたいなの）に行くんで一週間ほどの外泊許可をもらえませんかね？」

「ご旅行、ですか」

「うぃっす」

「非常時の連絡先と旅行に行く行き先さえ言って貰えれば、大丈夫ですよ」

「ちぃーす、非常時の連絡先はこれで、行き先は……　できれば皆には完全に内密にお願いします」

「？　どうしてですか？」

「そりゃぁ、もしも漏れたりすると、マスコミが嗅ぎ付けたりして面倒なことになりそうだからです」

「ああ……」

真剣な表情となった弾に吊られて真剣になる真耶、弾が言ってきたのは行き先を内密にして欲しいというものだったのだから、余計にわけが分らなくなってしまう。

弾の言った理由で一発で真耶は見当が付いた。

弾は【世界で唯一ＩＳを操縦できる男性】と言う肩書きを、それこそ彼が入学する前はマスコミの過熱報道が行われていたのだが、マスコミ各社が彼の自宅に辿り着けないと言うミステリーも発生していたので、彼は存在しないんじゃないか？　などの憶測が流れたのだが。

今は関係ないので割愛しよう。

「そうですね、壁に耳あり、障子に目ありですから、どこから漏れ出すのかなんて分りませんし、漏れ出たとしたらご家族も寛げないでしょうね」

「ええ、そんなわけでして」

「はい、外泊許可には帰省及び旅行の為として、本人希望により行き先は私のみが知るように手配しておきます」

「重ね重ね感謝っす！」

「構いませんよ、皆さんで楽しんできてくださいね」

「うぃっす！！」

手を合わせて拝むように感謝の言葉を言ってくる弾に、真耶は少々照れくさくなりながらも、喜んでいる弾の姿を見て微笑ましい気分となっていた。

「それで、何時に出発する予定なんですか？」

「今日の夕方です」

「ゆっ！夕方ですか！？」

この言葉には流石に真耶は驚いた様子を見せるのだが、すぐに納得する様子もあった。

彼がこれからすぐに発たなければ、どこから情報が漏れるかも分らず、漏れれば待っているのはマスコミによる執拗な追跡、彼女は弾がこれほどまでに警戒して家族との一緒の時間を大切にしたい、なんて考えてしまったようで、感激したようにその両目には涙が浮かんでいた。

「それじゃあ、先生は全力で応援します！ですので、五反田くん！」

「はい」

「ゆっくりと楽しんできてくださいね！」

「ありがとうございまっす！！！それじゃあ、準備もありますんで失礼しまーっす！」

「はい、楽しんできてくださいね、五反田くん」

ガッツポーズを決めて、弾を応援すると言っている真耶、そんな彼女に対して答える弾は、深々と頭を下げてから職員室を後にした。

だが、この時の弾との約束が彼女自身に災厄を齎すことに、彼女

は気が付いていなかった。
今は、まだ。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３１話　よっしゃあ！これでＩＳを題材にしている漫画やアニメにゲームから離れられれぇる！！！俺の心が踊るぜぃ！待っていろよ！ゲーム達ぃ！～

よっす五反田　弾だ！妙にハイテンションだが、上の話を見ていれば、分るな！（キリッ

そうなのだ、外泊許可が下りたのだよ！これで再び行けるあの世界にな！！何しろ。こっちじゃあゲームや漫画にアニメや映画に至るまで、ＩＳが登場しない娯楽作品って存在しないんだよな。

まさか純粋なラブロマンス物や、サスペンス、ホラーに至るまでＩＳがモチーフになって網羅されていたのは逆にビックリ何だが、ハッキリ言って、これらの娯楽に『飽きた』出てくるのは全て、ＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳＩＳ！もう食傷気味で腹も下してんだＹＯＵ！と言いたくなった。

なので、俺は別な世界に一時的に移住する！第１話辺りで言っていたと思うが、和人がいる世界にいって漫画やアニメたちを仕入れたり、読み漁ったりして向こうの時間で半年程度過ごしたいなぁ、なんて考えているのだ。

「それに、処分されてしまったお宝たちも再び仕入れないといけないし……」

本当にあの世界に行きたい理由ってのは、これもある。
何しろ臨海学校から帰った次に日、俺は真の恐怖と言うものを味わった。

学校が終わり、何故か千冬さんにアリーナに呼び出しを喰らった後、遅い夕食を食った俺が部屋に帰ってから目に入ったのは、ジャンルごとに仕分けされたお宝の姿だった！
それに気がついて逃げようとした瞬間に塞がれる全ての退路と、現れる少女達、そ、その後のことは、お、おおおおお、思い出したくない！思い出したくないんだぁ！！

その上に次の日当たりにエロ本の補充の為に、この女尊男卑の世の中で男はエロ本を買うだけで迫害に合う可能性のある世の中、そんな中で偽装して送ってくれるという事で大評判の通販サイトにアクセスしたら、何故かバレてた……　それも千冬さんにな。
後は、分るだろ？　俺がアクセスしようとしたらアク禁になるように設定が弄られてしまったので、もうこの手しかないんだ！

それに、あっちだったら女尊男卑じゃないし、表面上は男女平等だからエロ本とかＡＶとか普通に売ってるんだよね！真のお宝と出会えるチャンスだぜぃ！それに一番のお宝だったナースものは向こう側で見つけたものだったしな。

「俺は行く！漫画たちの待つあの理想郷へ！さあ、俺の目指す世界よ、娯楽品の貯蔵は十分かぁ！！」

そう叫んで部屋へと向かう俺、でもなんで今日、急に出発するんだって？　それはな全員が外出中という奇跡にも等しい状態だからだ！

なので、俺は今日決行する次第なのさ、あ、心配しなくてもこっちじゃあ向こう側に言ったときの話は描写しないらしいから、大丈夫だとの事だぜ！

そして俺は部屋に戻って準備していた。

色々とな、着替えをありったけと、同じく株とかで稼いでいた貯金もありったけ、下ろして持っていく。

まあ、向こう側で結構稼がせてもらうから、こいつは大丈夫だろうけどな。

そして肝心な、世界を渡る方法だが、スキマといろいろな術式を利用した方法で渡るんだけど、アンサートーカーってマジチート、何しろこいつを構築できたのってこれのおかげだったしな。

俺は後ろを振り向くと、そこには。

「にゃぁぅ……」

「わぅぅぅ……」

涙目になっている佐助と小太郎がいた。

こいつらにとっては、一週間程度の別れだろうと、寂しいのだろう。

直立して、悲しそうにしている彼らの頭を撫でて、俺は安心させるように言葉を選んで言っていく。

「お前らが持っているそれ、蒼穹が俺の標になるからな、キッチリと保管しててくれな」

「にゃぅ！（了解！）」

「わぅ！（了解であります！）」

俺の言葉に塚ら強く答える彼ら、俺がこの世界に帰ってくる目標物だからな、きちんと持っててくれないと。

え、何で蒼穹を置いていくのかって？　当たり前だろ、あっちにはないんだからもって行く方が不自然だ。

それにこいつらに預けておけば、潜水艦の艦内には整備班もいるから完璧な状態で維持してくれるしな、こっちの方が都合がいいんだよ。

「それじゃあ、行って来る！」

「わぁおん！！（無事な旅を祈っております！！）」

「にゃぁああん！！（楽しんで無事に帰ってきてくださいねご主人！！）」

「おう！」

そういって俺は、目の前のゲートに飛び込むのだった。

待っていてくれよ！俺が読みたい漫画たちよ！！

その日の夜。
弾が旅立って行き、更に静かになったＩＳ学園、夕食をとるために真耶は食堂に千冬と共に赴いていた。

「あら」

「ん？　オルコットにデュノアたちか……　帰ってきていたようだな」

「あ、先生、こんばんは」

「先生方も、今からお食事ですの？」

「ご一緒にどうですか？　教官」

少々意外な表情をしていたセシリアに、シャルロットとラウラだが、すぐにここは教師も食事をしていると思い出したのか、挨拶をするシャルロット、純粋に言葉を発するセシリアと一緒のテーブルに誘うラウラがいた。

それから彼女たちは更にやって来た一夏と鈴に箒も加えて、結構な大所帯で、尚且つガールズトークに華を咲かせていた。

「そういえば、弾はどうしたんだろうね、織斑先生か山田先生はご存知ありませんか？」

「いや、そういえば……　私は今朝から奴を見ていないな……　山田先生は何か知りませんか？」

「え？　五反田君ですか？　彼本人から今日から家族で旅行に行くといっていたので、外泊許可を取りに来たので、それでかも、しれないですね今日の夕方には出発すると言っていましたし」

「え？」

「え？」

シャルロットの疑問、それは中々姿を見せない弾のことであった。

なんとこの女性陣のほぼ全員が弾が来るのを待っていたらしい。

だが、真耶の言葉を聞いた瞬間、一夏と鈴がかなり驚いた声を上

げていた。

「ええと、どうかしたんですか？」

「山田先生、それって本当ですか？」

真剣で圧力さえ持った表情の一夏と鈴の二人に、真耶は少々たじたじとなっていた。

そして二人は立ち上がり真耶の傍へと近づいていく、他の者達は何の事なのかが分らずに、ポカンとしていたのだが、一夏達の言葉で氷解することとなる。

「今日、私達は弾の実家にいたんですよね、そして厳さん、弾の御祖父さんに旅行とか用事がないかとか、聞いてみたんですよね、そしたら……」

「今年はそんな予定は何もないって言われたんですよね……　あたしも弾の妹に確認を取ったから間違いないですよ」

「え、ええ、えええええーーー！！？（そ、そういえば！五反田くんは家族旅行とは言っていませんでした！？　わ、私良い様に言い包められた！？）」

げに恐ろしきは乙女の勘か、彼女たちはこうなることが何処かで分っていたらしく、弾の実家に今日行っていたのだ。
流石に弾が今日いなくなってしまうことは予想外だったようだが、それでも確認を取っている辺りは流石と言う所だろう。
この様子を見た千冬の表情に一瞬苦いものが走り、シャルロットやセシリアに箒は驚愕を、ラウラに至っては。

（流石は旦那様だ……　素晴らしいまでの情報の秘匿に加えて、出発した後まで誰にもそれを悟らせないとは……　私も見習いたいものだ）

などと考えてしきりに感心していたりしていた。

「山田先生、弾がどういう様子だったのかを、詳しく、教えてください」

「は、はいぃ……」

自分の目の前には怒りのあまり瞳からハイライトの消えた一夏、後ろには威圧感を放ち始めている千冬。

横には他の少女達、彼女にとっての長く、地獄のような時間が、今始まる。

そして、それから1時間ほどした後に開放された真耶は、全身真っ白に燃え尽きたような姿で歩いており。

「あ、十三階段……」

などと、何もない空間を見てはそういっていて、傍目に見ていても危険な様子になってしまっていた。

彼女に幸あらんことを願いたい。

第３１話　よっしゃあ！これでＩＳを題材にしている漫画やアニメにゲームから

こんな理由で世界の壁を越えたバカは、滅多にいないでしょうな。

とりあえず、こちらの方ではバカテスの方は描かれません。
向こうの本編に弾は参加する形になりますからね、次回からはちゃんと帰ってきた後から続きますので、連載が切れることはありませんのでご安心を。
たまに、回想で出てくるくらいです。

ただ、ちょいと登場が早まったりするキャラが入るかも知れません、具体的には盾がないさんの妹とか……

没シーン、その二！！（前書き）

本来なら没シーン集とするべき話でしたが、風邪を引いて執筆が出来なかった上に帰還後の話も書こうとしていたのに、書けなかった……

あちらも投稿し次第こちらの方にも番外を追加しますので、それまで少々の間、お待ちいただけたら幸いです。

没シーン、その二！！

没シーン、その三

彼女は遂に限界を向かえ、そう叫んだ瞬間、オープンチャンネルから待ちわびていた、一番聞きたかった声が響き渡る。

『良いから顔を伏せろ、そんな泣き言、聞く耳もたん』

「えっ！？」

その声が響いて思わずといった様子で顔を伏せた彼女、その瞬間に殺到する高威力のビームと、それを放ったビットの数々、直撃を受けてよろけた福音はそこへ更に3基のビットがトライアングルの形で接近、中央部にエネルギーを集中させるとそこから更に威力の高いビームを撃ち、一夏から福音を吹き飛ばしていた。

だが、福音も吹き飛ばされつつも反撃を試みて、一夏へと光弾を放つのだが、それらは全てビットが行う防御フィールドにより無効化されていく。

「良く、頑張ったな一夏、それと遅れてゴメンな」

「だ、だん？」

「おう」

「だん、だん、弾、だぁん！！！」

「おいおい……　まあ、感動の再会は後だ、今は離れていろ一夏、海面に潜水艦が浮かんでいるから、そこにいてくれ」

目の前にはいつもの微笑を浮かべて自分の頭を撫でている弾の姿、彼女が一番待ち望んだ光景に愛おしい彼の名前を叫びながら抱きつく。

苦笑いを浮かべながら、弾は下の海面を指差して、彼女が視線を向けた先には自分達が弾のＩＳを回収しに来たと勘違いしていた潜水艦が浮かんでいたのだった。

「にぁあああああー！！（四人目フィーッシュ！！）」

「わぅううううん！！（五人目フィーッシュ！！）」

「う、うぁ……」

弾が指差した方向を見れば、箒や鈴達が犬や猫によってカツオの一本釣りのような感じで回収されている光景だった。
流石の彼女からも自分がされていたらと思うと嫌だったらしく、嫌そうな声が漏れ出てくる。

実はこの中で一番マシな扱いなのは、ラウラだったりする。
彼女は陸地で気絶していた為に、ストレッチャーを持った犬や猫達が上陸、彼女をストレッチャーに乗せて艦内に普通に収容していたのだから。
なので、他の人間達が海面でプカプカ浮いているのを良い事に、彼らは一本釣りの要領での回収を選択したようである。

無論、したくもない貴重な経験といえる、この経験を彼女達がどう捉えるのかは定かではないが、彼らは全員の救助を終えたようで甲板に残ったのは二匹の猫と犬、どうやら佐助と小太郎のようで一夏へと手招きしていることから、急げ、といっている様子である。

「さ、一夏」

「うん……　でも、約束してね、必ず帰ってきてくれるっんむぅ！？」

彼女は無意識の内の行動だったのだろう、潜水艦を指し示した弾の右腕を再び抱きしめると、不安そうに今にも大粒の涙を流しそうに言おうとした彼女の唇を、弾は左手で一夏の顎を上げて自分の唇で塞いで遮っていた。

最初こそ驚いたように目を見開いていた彼女だが、すぐに目を閉じて弾に体を預けるようにしていた。

それから暫くの間、弾は一夏と唇を重ね続けていたのだが、どちらとも無く離れる。

それに一夏は残念そうな色の表情を浮かべるのだが、すぐに弾は彼女を抱き寄せて耳元で囁く声を出していた。

「夏休みになったら、この続きをしような」

「ふ、ふぇえ!!?」

弾はやばすぎる言葉を言い、一夏はボン!という効果音と共に顔を真っ赤にさせる。

それから少しの間混乱している様子を見せるのだが、猫や犬達がニャンニャンワンワン騒いで、急げ!!と言ってくる声を聞いて、一夏は正気を取り戻していた。

「じ、じゃあ、私、せ、潜水艦に、行くね」

「ああ」

「えっとね、弾」

「なんだ？」

「私ね、一回もそういう経験無いから、その時が来たら優しく、してね？」

「ああ、分ってる、楽しみにしてろよ」

そういって潜水艦に向かっていく一夏を見送った弾だが、ん？と思う。

今、自分、ナニやった？　と。

そこまで考えが至った瞬間、彼の表情と全身の様子は【ムンクの叫び】の如き様子となる。

（ナニやっての俺ぇぇぇぇ！！！）

なんて考えて戦闘体勢も取らない彼に対して、福音が先程から若干引きながらも攻撃を加えているのだが、彼はそれを無視して何かを叫び続ける体勢をとるのであった。

作者コメント

えーと、これが最初の２９話の最後のシーンだったわけですが、どうして私自身が気が付かなかったのかが分らないシーンです。
というかこのシーン事態、どうも飲み会の後に書いていたようなので、それが影響しているかもしれません、飲み会の最中にこんなことやってる同僚いましたし（同性だったのは秘密です、それがどの性別だったのかも。

友人に指摘されるまですで気が付かず、３０話を公開しているのと同じものを書いていた途中で指摘されたので、慌てて修正したのですが、友人の指摘が間に合って良かったです（苦笑。
でないと、本当の意味で整合性のとれない話の展開ににににに！！！

まあ、こっちの話だと、弾は一夏一本ルートに入っちゃうので、良かったのかなぁ？　なんて考えてしまいますが、時折、夢で弾が一夏に○レイ○される夢を見るので……　一夏本人は納得していないと言うことでしょうか。

第３２話　俺、帰還！これからは女の園で生活か……　男同士でバカをやり続けたい

ここはＩＳ学園のＩＳ整備室、夜中なのか既に人が折らずに閑散とした室内に、一つの魔法陣が現れる。
円の中に正方形を二つ組み合わせた外観を持っているそれは、少しの間ゆっくりと回転していたのだが、次第に激しく回転しだしていきその中から一人の人影が出てきていた。

「俺！帰還！！」

出てきたのは、弾である。
何らかのポーズを真似したのかは分らないが、彼は魔法陣の中から現れた時には決めポーズを取っているのだった。

それから彼はここがどこなのか分かっていないらしく、少しきょろきょろとしていたのだが、すぐにここがどこなのかが分ったらしい。

「ＩＳ学園の整備室か……　女子たちが入浴中の大浴場に出なかっただけマシかね」

なんて言っている事から転移魔法を使って、この世界のどこかから転移を行ったようである。

「だが、お宝を確実に保護するためには一度潜水艦の艦内に世界間転移を行わなきゃならんかったからなぁ……　でも、処分される前よりも遙に質は良くなったから良しとしよう！！！」

なんて一人で叫んでいる阿呆一人、他人が見ていたら間違いなくドン引きの光景と言えるだろう。

それから部屋を後にしようとした彼の目の前に、跪くようにして存在していた一つのＩＳが姿を顕す。

「こいつは……　打鉄弐式だったか？　一夏の白式にハアハア言い出した倉持技研が放り出したＩＳだったよな……　どうしてここに？」

そのＩＳの名は【打鉄弐式】元々は日本が開発していた第三世代の機体であったのだが、一夏の白式を優先させる為に一時的に凍結扱いとなった悲運の機体でもある。

理由が【織斑　千冬の妹が乗るＩＳなのだから、最優先で機体を

くみ上げるべき！】という政府の方針と、技研の方針が重なった上に篠ノ之　束の設計と言うことも、この機体の悲運さに拍車をかける形となっていた。

「ちょっち興味が湧いたな、見ていくか……」

そういって彼が打鉄弐式の前に立って投影したスクリーンに映るのは、この機体の各種状況の姿であった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３２話　俺、帰還！これからは女の園で生活か……　男同士でバカをやり続けられるあの世界は楽しかったなぁ……　あ、冬休みにまた行けば良いんだ、向こうの学校の籍は残してあるし～

帰還してからすぐに俺の目に入って来たのは、打鉄弐式と呼ばれる機体の姿だった。
俺はまだ完成には程遠いと言われているこの機体がちょっち気になったから、各種状況を展開したんだが、まあ、酷いもんだった。

「基本的には七割方は倉持技研で完成してたのな、それを誰かが引き取ってここで組み立てているってところだろうが……　これは酷い」

そう、一言で言えば、これは酷い。
と言う状況だったのだ、何しろ各種駆動系統に使われている部品は、相性があっていないものが普通に使われているわ、他のセンサー類の整備状況もかなり悪いな。

これを作っている奴は素人に怪我はえた程度なのは間違いない、本職であれば間違いなくしない構成が平気で行われているし、何より各種センサー類が駆動系部品にＩＳ本体武装部品と繋がっていな

いからだ。

「カタログデータを見る限り、コイツはマルチトレースミサイルを誘導させる為のマルチロックオンと、荷電粒子砲を主体にした機体みたいだな……　っていうかフリー○ムかよ？　でも、何を考えているんだか……　この調子じゃあ四年近く経っても完成しない可能性が高いぞ」

まあ、なんだ、最初にスペックなどを見た俺の率直な感想は【なにこのフリーダム】だった。

だけどまあ、俺はそんなことを言いつつもカタカタとディスプレイを操作していき、次から次へと必要な情報を引き出していく。

「七割と入ってもフレームの完成度が七割だったのか……　んじゃあ、ちょいと余計なお世話をしておくとしましょうかねぃ！！」

ふふふぅぅうふぉおおおお！！！

み・な・ぎ・っ・て・き・た！！！

「さあお前を魔改造してやろう！！打鉄弐式よお前の準備は万端か

ぁ！！！？」

なんていっているが、流石に魔改造まではしないよ？
すると言ってもあれだね、全システムと各種センサーとの連動を完璧に、及び駆動系統のシステムの効率と部品の交換に加えて、アルテリオン用に作っていた相性がよいと判定できた予備部品の搭載による駆動系の動力改善、マルチロックオンシステムを使用可能にすること、そして、疑似ＩＳコアとコア連結を行えるかどうかの調査だった。

それらを僅か一時間程度で行った俺は、爽やかに汗を拭うと、一つだけ気がかりなのはアンサートーカーに問い掛けて分った作っている者の正体、特撮ヒーロー物が大好きでアノ生徒会長の妹であり、コイツを完成させるために根をつめて日夜作業をしていると言う少女のこと。
まあ、俺や他の連中がどうこう言った所で今は聞きやしないだろうからな、接触はしないで置こう。

だけどまあ、置き土産くらいは良いよね？　なんて考えて向こう側で何となく買っていた昭和仮面ライダー全作品部ブルーレイＢＯＸを打鉄弐式の足元に置くと、俺は部屋を後にするのだった。

いやぁ～　やっぱ楽しいねぇ～　物を弄くるって。
なんて事を考えていたんだが、仮面ライダーのブルーレイＢＯＸって置いて来たらマズかったかねぇ？　こっちじゃあ販売されていないものだったし。

まあ、良いか！俺はダビング終わってたからもういらないと思ってた所だし、楽しんでくれる人にあげよう！
なんて、開き直りを俺は行っていた。

次の日、打鉄弐式の登録操縦者である少女【更識　簪】は先日、待機状態に何故か出来なかった自分のＩＳをとりに整備室へと向かっていた。

「……　どうして昨日は、待機状態に出来なかったんだろ……」

彼女の口からついて出てくる疑問の声、いつもは自分で調整を終わらせてからＩＳを待機状態に戻すのだが、昨日は何故か出来なかったのだ。
それもＩＳ側から拒まれているかのように。

「……　私がだめ、だから……　あの子に拒絶、された？」

簪には目標がある、それは自分の姉と同じ様に未完成のＩＳを独力で組み上げると言うものが。

そうすることで姉の影を踏むくらいはできるだろう、そう考えていたからだ。

自分と言う存在がＩＳに拒絶されたかもしれないと考えた彼女は、一度頭を振ってネガティブな考えを頭の外へと押し出すと、整備室へと辿り付いていた。

目の前にあるのは昨日と同じ状態の自分のＩＳと足元に置かれた仮面ライダーのブルーレイＢＯＸの姿。

「……　？　これ……」

仮面ライダーのブルーレイＢＯＸを持ち上げた彼女は、最初こそこれがなんなのか分らない様子だったが、すぐに分ったらしく彼女の目がキラキラと輝きだしていた。

「こ、これは！？　ど、どうして？」

キラキラとした表情から出てくるのは驚愕と喜びという感情の渦、それはそうだった。

この世界での仮面ライダーはＤＶＤが出て、新しい映像メディアに移される前に女尊男卑の世界となったために、特に昭和の時期に放映された特撮物はＶＨＳ以外では残っていないと言う状況下でもあったからだ。

そこに来て、このブルーレイＢＯＸである彼女が驚愕するのも無理は無かった。

「で、でも、とりあえずこれは部屋に帰ってから、持ち主の人、探さないと……」

そういって大事そうに近くの机の上にブルーレイＢＯＸを置いた簪は、打鉄弐識へと近づいて行きいつものようにディスプレイを起動させた彼女の顔に、それまでとは全く違う驚きが浮かび上がる。

「えっ！？　く、駆動系もセンサー類もマルチロックオンシステムも……　全部が正常に動いてる……？　ど、どうして？」

そう、昨日までは問題が山積みとなっていたはずの機体が全て解決されていたからだ、これを見た簪の中に驚きと形容しがたい感情が浮かび上がる。

「一体、誰が……　あの後はここ施錠されてるから、誰も入れないはずなのに……」

投影されているディスプレイからを話して考え込み始める簪、原因を考えていた彼女の目の前に突然メッセージが浮かび始める。

『あまり根を詰めて作ってても完成は遠のいて行くぜぃ、ちょっとしたお節介と足元にお前さんが楽しめそうな物を置いておいたから、見てくれると嬉しいじぇぃ　五つの田んぼに弾丸を撃ち込むトリガーハッピーより』

「……　誰？」

少しの間だけ呆然とした様子でこのメッセージを見ていた簪は気を取り直した様子で、打鉄弐式を待機状態へと戻すと、ＩＳから流れ込んできた何かに一度驚いた様子を見せる。

「え？　喜んで、る？　この子、私と一緒に戦えるようになったって事……？」

そう、打鉄弐式から伝わってきたのは喜びと言う感情だった。
それまで一度も無かった事態に彼女は流石に驚きを通り越した様子を見せながら、整備室を後にしていた。

「……　とにかく、一度、調べてみよう……」

そして、彼女はいそいそと整備室を出て行くと自分の部屋へと歩いていくのだった。
無論のことブルーレイＢＯＸは小脇に抱えて、である。

セシリアに箒、シャルロットにラウラ、鈴たちは走っていた。
昨日帰ってきた三人から聞いたからだ、自分達の思い人が帰ってきたと言うことを。

「全くあのバカ、散々心配掛けさせて……　一発ぶん殴ってやるんだから！！」

「ああ、全くだ私達に行き先も告げずにいなくなってどれだけ私達を心配させたのを分らせんとな」

「そうですわ！今日は一日わたくし達に付き合っていただきませんと！」

「そうだね、でも、本人を捕まえてから皆で決めようよ」

「そうだな、それが良いだろう」

事の起こりは一週間前、自分達の思い人が突然姿を消したことに端を発する。
それから現在いる位置を特定できたと一夏や先生二人が様子を見に行ったのだが、今度は先生や一夏達も帰ってこない始末。

ハッキリ言って、少女達の我慢は限界に達していた。
送られてくる写メには楽しそうに写る弾と一夏に先生二人とか、現地で出会った友人といっていた人間達も写っていたが、今の位置を絶対に言わないばかりか電話は常に電源が切られている状態で、弾にいたっては全く連絡をしてくることはない始末。

そのためか、彼女たちの表情は一見すれば嬉しそうに笑っていながら、目の奥が全く笑っていなかった。

そして、彼女たちは彼がいると連絡を受けた正門前に到着する。

そこにあった光景は。

「クスクス、お上手ですね弾さん」

「いやいや、そういうチェルシーさんこそ流石です、で、どうっすか？　今から町に出てお茶でも、いい店、知ってますよ」

「あら、それはとても良いお誘いですが、弾さん」

「ん、なんっすか？」

「一度後ろをご覧いただいた方がよろしいかと」

「へっ？……　っうぉ！！！み、皆ぁ！？」

若干一命以外は見覚えの無い、メイドさんをナンパしているバカの姿であった。
結果、五匹の夜叉が降臨、先に機が着いていたメイドさんの指摘で気が付いた弾は後ろを振り向く。

そこにあった光景は、空間が歪みそうなくらいの怒気に包まれた五人の少女達、瘴気さえ発生していそうなそれは彼を驚愕と恐怖のどん底に突き落とすのは十分な効果を持っていたらしい。

「ちょ、ちょっと待てお前ら！どうしてそんなに怒ってるんだ！？」
「さあ？」
「それは」
「一度」
「自分の」
「胸に」
「聞いてみると良いよ！！」
「ちょ、ちょ待て落ち着け、落ち着くんだ！皆！！話せば分る！話し合おうじゃギャアアアアアア！！！」

『問答無用！！！』

その直後に起こった出来事、一言で言えば、阿鼻叫喚。

これしかいえないだろう。

ＩＳでさえも展開して行われる折檻、無論のことチェルシーは安全地帯に避難しているのは言うまでもないことである。

因みに、折檻が終わった後に弾は『あー〝死ぬかと思った』と言いながら【無傷】で部屋に戻り、少女達は先生達からのありがたい説教と、ペナルティが化せられたのだが、これはまた別の話し、ということだろう。

第３２話　俺、帰還！これからは女の園で生活か……　男同士でバカをやり続けたい

帰還の話なんですが……　グダグダに……

第３３話　赤子、英語で言えばベイビー……　未来の俺の子供なんだが母親は誰？

帰還してから数日が経って、皆とは出かけたりして埋め合わせをさせられた。

今日も今日とて俺ＶＳ一夏達六人なんていうなにそのムリゲー！？　的な状況を経験させられちまったよ。

向こう側でも不思議だったんだが、怒りとかそういった感情って人を強くするんだなぁ……　でも、まあ、眠いから寝よう。

なんて考えた俺の目の前に、突然魔法陣が浮かび上がる。

「なに！？　この力を持っているのはこの世界には俺だけのはずだぞ！？　それにこいつは……！」

魔法陣が展開されたことにも驚いたが、一番驚かされたのは【俺と同じ魔力】で魔法陣が構成されていたからだ。

俺は何時でも戦闘体勢が取れるように体を動かして、魔法陣の中から何が出てきても良いように構える。

そして、魔法陣の回転が増していき、向こうにいるものが姿を現す。

「……　お、ここは……　やっぱＩＳ学園の俺の部屋だ！！それにお前は過去の俺だな！うわ～　俺って傍から見たらこんな顔してたのかよ」

はっきり言って、この瞬間に俺の動きは停止していた。
何故ならば、俺をそのまま大人にした外見を持った人間が現れたからだ。
背中には赤子を背負って、ではあるがな。

まさか、こいつ……

「ふむ、俺がいるってことは明久達の所から帰ってきたばかりか、懐かし「おい」ん、なんだ？」

「まさかお前は、俺かよ？」

「おう！まあ、懐かしがるのは後でもできるな」

「頼みでもあるとか言わんよな？」

「ビンゴだ！！」

「……」

はっきり言って頭を抱えたい！これが俺の未来だと言うのならば、頼みたいことは確実に厄介ごとだからだ！！！
何しろ俺と同じ能力を持っている、否、確実にコイツの方が上といえる状態なのに、俺に頼みごとだ。
かなりの厄介ごとが起きていると見て間違いない。

「まあ、聞くだけ聞いてみるから、言ってみろよ」

「ああ、すまないな」

「引き受けるかどうかは内容しだいだ」

「まあ、そうだよな……」

だが、聞くだけ聞かないとこいつは絶対に俺に纏わり付き出すだろう、自分の事だから良く分るし、俺が逆の立場ならどう行動するのかを考えれば簡単だ。
奴は俺の返事を聞いた後、背中に背負っている赤子を俺の方に差し出してくる。

「頼みってのはこの子を明後日まで預かって欲しい」

「貴様は俺に死ねというのか！？」

やっぱり厄介ごとだった！！！！

俺は今日一日ＩＳ学園にいたから親戚の子供とも誤魔化せないし、今のセシリアや箒たちはかなり危険な感情をむき出しにしている。

そこに、これの頼みを引き受けなんぞしたら……　お、おおおおおおおおおお……！俺の命ががががが！！！

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第３３話　赤子、英語で言えばベイビー……　未来の俺の子供なんだが母親は誰だったんだろ？　本当にな、あ、因みに前後編らしいぞ～

俺の言葉を聞いた奴は『あやっべ』という感情を顕にする。
どうやらコイツの居た過去でも同じ様なことがあったような様子だな。

それを考えた奴は一度考え込む様子を見せた後、再び赤子を差し出してくる。

「本当にすまないが、お前にしか頼めないんだ……　預かってもらえないか？　無論、礼はする」

「……　その子の命が狙われている、とでも言うんじゃないだろうな？」

「……　状況としてはかなり近い、それに俺と同じ力を持つお前なら確実にこの子を護ってくれると断言できる、だから頼む！！」

奴の言葉を聞いた俺は、更に頭を抱える。

何故か、それはこいつの言ったことは未来の俺でも時間移動を行って過去の俺に子供を託した状態で、敵と戦わなくてはならないということなのだから。

それを考えれば敵の驚異の度合いも分る。

考え込む俺を前に、奴は土下座までして頼み込んでくる。

父親として必死な様子を見せる俺の姿と、そんなことなどつゆ知らずにスヤスヤと眠る赤子。

「分ったよ……」

「本当か！！？」

「ああ」

正直に言って土下座している未来の俺はどうでも良いが、スヤスヤと穏やかに眠るこの子が厄介ごとに巻き込まれるのは阻まれる。

それがあったからか、俺はいつの間にか赤子を奴の手から受け取ると自分の胸の中に抱いていた。

それを見て嬉しそうな表情を浮かべる未来の俺は、立ち上がると目の前に育児用品（オムツとか哺乳瓶とか）を出してくる。

「じゃあ頼むな、後、これがこの子のオムツとか哺乳瓶とかだ、明後日の朝十時までには必ず迎えに来る！」

「ああ、時間と日にちは護ってくれ、流石にそれ以上は俺も面倒を見切れんし、育児の経験がないからな、明後日までが限界だ」

「だろうな、まあ、今の内にあやし方とかを覚えとくと損はしないぜ」

「そりゃそうだろうがな……　聞きたいことがある」

「なんだ？」

奴との育児のやり取りについてだが、前世と今の世界での親戚とかの子供の面倒を見たくらいだからな、自信なんぞ無いが……　一番重要なことがある。

「母親は……　誰だ？」

「……　さてと、俺も動かないとな」

「こらぁ！！質問に答え「おい、過去の俺」な、何だよ」

「自分の血の雨が降る光景なんぞ俺は見たくない、これを言えば……　分るか？」

「……　正直、スマンかった」

「分れば……　良いんだ……」

そう、最大の疑問点、母親が誰なのか？　ということなのだ。

つまりこの子は未来の俺が女の子と○E○！！をして誕生したということなのだが、未来の俺の伴侶が誰なのかを知りたくなった俺の質問は無理も無いことだと判っていただけると思う！！

だが、俺の質問を聞いた奴の反応といえば、遠い目をする、辛そうに表情が歪む、そして全てを誤魔化そうとする。

という行動にて示されるんだが、辛そうに表情が歪んだときはどうも奥さん死んだとかじゃないっぽいな、あれはどちらかといえば【やんちゃヤッてしまって、認知しなくちゃならなくなった】とでも言おうか……　そんな表情になっていた。

まさか……

「お前さあ、まさか、浮気した「ギクゥッ！！」マジかよ……」

「ま、まままままさかぁ！！俺が浮気するわけ無いじゃん！！一夏一筋な俺が！！！」

「……　冥福は……　祈ってやるよ」

「ち、違うからな！！本当に浮気なんてしてないよ！？　ただちょ

っとかんちゃんや箒達と火遊びしちゃっただけなんだよ!?」

「……　語るに落ちるって言葉……　こんな状況なんだな、後、かんちゃんって誰?」

お、俺って……　こんなにやんちゃするのかよ……　一夏と結婚して浮気だと!?　あ・の!一夏だぞ!?

こいつが過去に来て子供を預けようとしているのってまさか……

今未来の一夏が暴走している（ド派手に暴走しています）とか、言わないよなぁ?

怖くて何も聞けない!!

「と、とにかく俺は一旦戻る!!」

「ああ、お前が死んだら一応は面倒を見てやる、だけどよこの子にとって【本当の】父親はお前だってことは忘れるなよ」

「分っているさ、まあ、頼むな!過去の俺!!」

「任せておけ」

ぐっ!と親指を立てて魔法陣の中に消えていく未来の俺、それを俺は見送ると密かに十字を切り、万が一の事があったときには迷い

無く逝ける様に祈りを捧げるのだった。
それから俺は、目の前の赤子を寝かせる為に今は誰も使っていないベッドの上に寝かせると、奴が置いて行った育児本を読み始めるのだった。

夏休みでほとんどの生徒が帰省して静かな寮内を千冬は、見回りを行っていた。

「異常は無いか……　考えてみれば、奴がここに住んで自分の身の保全に全力を上げている状況下で侵入できる輩は居ないのが当然か……」

そう言って明かりがついて明るい廊下を千冬は歩いていたのだが、

ある一つの部屋に差し掛かったとき、異常に気が付いた。

『びぇぇぇ――――っ！！』

『え、えーとなんで泣いているんだ！？　オムツ！はさっき交換したし、腹が減っているのか？　ちょ、ちょっと待ってろよ！』

「……」

異常に気が付いた瞬間、千冬の眉が急角度を描いて歪む、弾の部屋から響いてくるのは間違いなく赤ちゃんの鳴き声と、慌てふためく弾の声。

彼女は早足で弾の部屋へと近付いていき、ドアを破砕せんばかりの力で一気にこじ開ける。

「五反田！貴様何をやっている！！！？」

「ち、千冬さん！！！？」

「貴様！その子供を「ミルクが出来るまでこの子をあやしてください！！お願いします！！！」な、なに！？　わ、私は子供をあやすなど……」

「お願いします！！！」

「あ、おい！？」

扉を開けた瞬間、彼女の目の前に広がったのは、弾の背中に背負われて泣いている赤ちゃんと、哺乳瓶にミルクを用意している弾の姿だった。

だが、弾は千冬の姿を見つけると同時に背中の赤ちゃんを千冬にいきなり手渡してくる。

千冬は赤ちゃんを受け取ると自分の腕の中で泣いている赤ちゃんを見て、非常に困った様子を見せる。

そんな千冬の様子を弾は無視してミルク作りに入ってしまったため、千冬は全く経験の無い赤子をあやすということを拙い様子でするのだった。

俺の腕の中には嬉しそうに哺乳瓶からミルクを飲む未来の俺の子供の姿だが、そういえば名前を聞いていなかったな。

ベッドに腰掛けて飲ませている俺の隣には、困惑した様子で座っ

ている千冬さん。

「ハァ……　やっと落ち着いた……　お、飲み終わったか、ほれほれげっぷしろよ」

飲み終わった赤子を抱かかえて俺は背中を軽くポンポンと叩くと、かわいらしいげっぷの声が出てくる。

それから赤子は眠くなったらしく、すぐに目をトロンとさせて眠たいという自己表現を行ってきたので、ベッドに寝かせると、それまで黙っていた千冬さんが口を開いた。

「五反田、その子供はどうしたんだ？」

「あー、この子っすよねぇ……」

「ああ、昨日までの貴様には特定の女の気配は無かったはずだ、それに私達と向こう側で過ごした夜も貴様はきちんと避妊していたからな……　未来の貴様の子供か？」

「なんで、分ったんすか……」

「冗談で言ったつもりだったんだが、本当だったとはな」

さ、流石は千冬さん！冗談とは言っても真相を一発で見抜いた！！
え？　千冬さん達と過ごしたって言う夜のことを言えって？　さあ、ナニがあったんだろうね！☆
まあ、事故、だったとは言って置くとしよう。
まあ、とにかく千冬さんの方から見抜いてくれたのはありがたいから、事実をある程度言うとしようか。

「つい二時間くらい前に未来の俺がここに来たんですよ」

「……　その時点で常識というものが消え去っているがな」

「まあ、あいつの説明ではこの子に命の危険が迫っているとの事でしたので、俺が明後日までという期限付きで預かることにしたんですよ」

「なるほどな……　それの具体的な内容は聞かなかったのか？」

「いや、聞く前に未来に戻っちまったんで、聞けなかったってのが正しいですね」

「……　そうか」

俺の言葉を聞いて考え込む千冬さん、それはそうだろう。
向こう側で俺の力が常識を逸脱したレベルにあるという事をはっ

きりと知った彼女だからこそ、真相に辿り付けたんだろう。

まあ、本人は冗談のつもりで言ったみたいだけどな。

「まあ、私がここに居るということは、お前は頼みたいこともあるということだろう？」

「うっす」

「さしずめ、その赤子がここに居てもおかしくない理由作りか……」

「ですね、やっぱそれが一番重要ですね、それになにも無いまま一夏達にバレたら……」

「お前の命は、風前の灯だろう……　ラウラは意外に例外かもしれんがな」

「……　確かに、ですけど相手の女から俺を寝取れば済む話ではないか？　とか言い出しそうで怖いっすけどね」

「……　確かにな……　私の教導が終わった後のアイツに何があったのかを私は知りたい……」

そう、皆に何も言わずに尚且つ、赤子を背負っていたとしたら俺の命など霞と消える自身がある！！

ただ、まあ、ラウラだけは変にポジティブになって手が付けられ

なくなる可能性があるけどな。

ただ、千冬さんはいきなり何処か不満そうな感情を浮かべて、唇を尖らせる。

「それにしてもだ、弾」

「何っすか？」

「二人だけの場合は千冬と呼び捨てで良いと言ったし、敬語もいらんと言っただろ」

「い、いや……」

「ふん、私の処「ストーップ！！！それはここじゃ言ったらダメっすよ！！！千冬さん！！」……」

なんてとんでもないことを言い出すんだこの人は！！

お、思い出してしまう！！あの日、一夏に山田先生に千冬さんを同時に【くっちゃった】という過ちを犯してしまったあの日のことをぉ！！！

状況としては、まあ、事故、見たいなモノだったから付き合うとかはしてないんだけどね。

ただ、ここが何処かを忘れてないかぃこの人！？　変に敬語をや

めて呼び捨てなんてすれば、聞かれてしまうとどんな噂を立てられるか分らないというのに！！
それに、ここにはこの子が居るからな、余計に分らない状況だ！！

「まあ良いだろう、とりあえずは私の方で理由は捏造して、お前の部屋にこの子が滞在できるようにしておく」

「か、感謝しまっす千冬さん！！」

「その代わりだが」

「は、はい？」

「冬休みの期間はお前、また向こう側に行くんだろう？」

「う、うっす」

「それに必ず私も連れて行くことが条件だ」

「わ、分りました……」

正直に言って千冬さんのこの言葉はありがたいというか渡りに船だった！！だが、千冬さんが涙目で顔を赤くしておねだりをしてくる顔で殺気を飛ばすという、あまりにも器用な雰囲気で言ってきた条件は了承するしかなかった。
というか、了承しなかったら、俺は向こう側に永住しなくてはな

らん！！

まあ、こっちには鈴がいるし、一夏達との約束もあるからな。
彼女たちが成人するまでは、こっちを拠点にするのは当然といった所だろう。

「そうか、ならば私も全力を尽くすとしよう」

「ありがとうございまっす！！！」

まあ、それは置いておいて、俺の返事に満足した千冬さんは嬉しそうにいうと、俺は素直に感謝の言葉を言ってた。
それから彼女は部屋を後にしようと扉の所に歩いていくのだが、こちらへとゆっくりと振り向く。

「ああ、言い忘れていたが、弾」

「え、ええと、なんでしょう？」

「私は意外に尽くすタイプだし、一夏と同じだぞ？　覚悟を決めておけ」

「う。ういっす……」

目の前に居るのは、可愛い生き物になっている千冬しゃん、これこそまさにちーちゃんと呼ぶべき存在だ！！
俺は彼女の雰囲気に呑まれて、頷きを返すと満足したように千冬さんは部屋を後にしていった。

だが、俺はといえばそれからは。

「ふっふぇ……！」

「ん？　オムツか？」

なんて感じで赤子の世話におわれていたんだけどな。

だが、俺は次の日にちょいと後悔してしまう事態になってしまう。

「ねえ、弾」

「な、なんでしょう？　イチカサン？」

「この赤ちゃんの母親って、誰なのかなぁ？」

「さ、さぁ？　未来の俺も何も言わなかったから分りません！！！！」

「へェ、未来の弾って、ワタシトケッコンシタノニ、このこの母親って分らないんだぁ？」

……うっかり言ってしまったのさ、一夏と未来の俺の状況をな。

後は、分るだろ？

……おれ、あさってにおれがむかえにくるまでいきのこれるのかな？　そういいたくなるきもちでいっぱいだ。

第３３話　赤子、英語で言えばベイビー……　未来の俺の子供なんだが母親は誰

ここで出てくる赤子の母親……　誰なんでしょうね（核爆。

第３４話　ええ思いしちまってるぜぃぐふっ！あと、まあ、決意というか

今このＩＳ学園内はある一つの噂で持ちきりとなっていた。
それは。

「ねえ箒、あの噂って本当なの？」

「いや、本当かどうかは分らないな……　セシリアはどうだ？」

「そう、ですわね……　どちらにしても本人に確認してみないことには分らないのではなくて？」

「それもそうだな、何しろ噂が噂だ」

「そうよねぇ、まさか弾の部屋から」

「「「「「赤ちゃんの鳴き声が聞こえた……」」」」」

そうなのだ、今現在ＩＳ学園内を席巻している噂【弾の部屋から赤ちゃんの鳴き声と、それに慌てふためく弾の声が聞こえた】というものが流れているからだ。
この食堂内も、そこかしこに女子達のグループが構成されていて、彼女達がどんな話題で会話しているのかを予想するのは簡単だった。

「でもさぁ、一夏、弾の奴って何時の間に赤ちゃんを預かったのかしら？」

「えっ？　弾の隠し子とかじゃないのかな？」

「……　あのねぇ……　アイツが隠し子を作ってこんな所でバレるような、そんなヘマをすると思う？」

「思いませんわね……　確実にバレないように弾さんは行動するでしょうし」

至極まともというかいきなり真相をずばりと言い当てた鈴だが、一夏のあまりにもぶっ飛んだ言葉には流石に頭を抱えていた。

彼女は呆れさえも滲ませながら、弾にもしもそういった存在が居たら彼がどういう行動に出るのか、それを鈴は理解している辺り流石幼馴染という所だろう。

一夏のあれは、弾を愛するあまりに少々（？）ぶっ飛んだ理論になっているのかもしれない。

「まあ、それもあるが……　シャルロットの奴が遅いのではないか？　ラウラはルームメイトだろう、何か知っているのか？」

「ん、シャルロットとは用事があるから先に行ってほしいといわれ

たのでな、別れたんだが、確かに遅いな……」

勘の良いと言うか、いつも読んでくれている読者の方々ならば分るだろうが、まだこの場にはシャルロットが居ないのだ。
未だに現れない弾、そしていつもいるはずの時間に居ないシャルロット。

だが、いきなり食堂の入り口が騒がしくなる。
そう、渦中の人物が現れたのだ。

「それにしてもシャルロットって意外に子守が上手かったんだな」

「初めてだったんだけど、上手くいって良かったよ」

スヤスヤと眠る赤子を抱いているシャルロットに、その隣を歩いている弾の姿。
シャルロットが弾にぴったりと寄り添うようにしているから、まるでも何も初めての子供を初々しく抱いている夫婦、という表現が適切な様子であった。

それから彼らは食券を購入しているのだが、その様子自体も、まさに夫婦の如く以心伝心ともう言うべき雰囲気で購入しており、仲の良さを表しているかのようであった。

「「「「「……」」」」」

そして無言で、尚且つ、不気味な雰囲気で立ち上がる五人の少女達、食堂にいた他の少女達は彼女たちのあまりの雰囲気に気勢を制されて、行動できずに彼女達の行動を見守ることに決めたようだ。

「お、いち、か、に皆……　ど、どうかしたのでせうか？」

弾が注文したらしい鯖の味噌煮定食と、シャルロットの注文らしいカルボナーラを両手に持っている弾は、自分に近付いてくる一夏達を見たと同時に、彼の表情は引き攣って少々恐怖を感じている様子だった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３４話　ええ思いしちまってるぜぃぐふっ！あと、まあ、決意というか～

俺の目の前にはいつものシャルロットを除いた面子の姿があるんだけど、なんか滅茶苦茶怒ってるんですけど！？

「さあ、ねえ……」

「とりあえずさ、弾」

「な、ナンデショウ、イチカサン……」

「ちょっと、オハナシ、聞かせてね？」

「は、はい！」

ハイライトの消えた瞳となった鈴と一夏！危険域をとっくに突破しているだと！？　や、ヤバイ……　こいつは返事を誤ってしまったら一発で堕ちていってしまう。

し、シャルロットはと考えて、彼女の方を見ればラウラとセシリアに追い詰められているんだが、一角にこの場にそぐわないモノがあった。

「ふっ、赤子というのは可愛いものだな」

「きゃへへ！」

「わ～！この子がごたちーが預かったって聞いた子供かあ～　可愛いよぉ～……　でも、誰かに似てるような……」

いつの間にかシャルロットから強奪したのか、赤子を抱いてニコニコしている箒と、これまた何時の間に現れたのか、のほほんさんがにこやかに赤子の頬をプニプニさせたりしているのだった。

それに赤子は嬉しそうにしているから、少なくとも彼女達は嫌われていないんだろうが、どうしてだろうか？　赤子の反応は特にのほほんさんに触られたら嬉しそうにしているのがちょっと気に掛かる。

それに未来の俺が最初に名前を出した女の子の名前も気に掛かる、かんちゃん……　かんちゃん……　なんだろう？　ごく最近に近い名前を目にした覚えがある気がするんだけど……

赤子の頭に僅かに生えている水色の髪……　今の時点で知り合い

の中に特徴を持った女子は居ないよ、なぁ？　唯一思い当たるとすれば、あの生徒会長かね、でも、あの会長ってぶっちゃけタイプじゃないし、未来の俺ってゲテモノ好き（会長本人に聞かれればくびり殺されます）になったんだろうか？　だとしたら、イヤだよなぁ。

「だん？」

「ちょっと、聞いてるの？」

「き、聞いております！は、話します！話しますから！」

俺が二人以外を気にしていることがバレたのだろうが、鈴はちょっと落ち着いているようだ、瞳に光が戻り始めている。
まあ、俺は二人に敬礼をして席に着くと、二人も同じく籍について俺の話を聞く体勢に入っていた。

「で？　あの子って、弾の隠し子なの？」

「……　は？」

「一夏は黙ってなさい！！」

「だ、だってり「やかましいわ！常識的に考えて弾の隠し子はありえないでしょ！弾が誰かと経験したわけ」あ、あう…　あぅぅぅぅ

ううううう……」

「……　ま、まさか、あんた……」

「え、えと、り、りん？」

「いいいいいいいいいちいいいいかぁぁぁぁぁぁぁ！？」

あ、あれ？　あるぇー！！！？　なんか話がおかしい方向に暴走している気がするんですけど！！

最初は、あの赤子に関しての話題だったよな！？　なんで一夜の経験に話題が移っているんだ！？

俺とのあの夜を思い出したのか、顔を真っ赤にして蒸気まで噴出させる一夏……　あの時の一夏って無茶苦茶可愛かったし……　なにより。

「気持ちよかったよなぁ……　一夏や千冬さんや真耶の膣内……」

「「「「「「……」」」」」」

「ハッ！？」

つい思い出してしまう、一夏達のアソコの具合を、まさに名器だ

ったよ!!まさか、慣れていたはずの俺がいれただけでイキそうになるとは思わなかった。
エロゲーの主人公達が童貞喪失時に、まあ、粗相をしてしまう奴の理由が分るくらいの名器具合だったよ。

俺が息子で味わった彼女達の膣の感触を思い出していると、五人の夜叉達が降臨!俺と一夏はあっという間に拘束されて、俺の部屋へと連れて行かれるのだった。

それから俺達は部屋へと連れて行かれて、根掘り葉掘り聞きだされるんだが、一夏は既に羞恥心の限界に来たらしく、目をグルグル回してヘロヘロになっているんだけど、今日は白か……　うん、俺が一番好きな色だよね!……　あ、イカン、イライラムラムラしてきた、こ、今夜辺り一発……
そう考えた俺の視線に気が付いたのか、一夏は顔を真っ赤にしながらコクンと頷いていた……　え?　もしかしなくても、OK?

なんて考えていたら、五人の夜叉たちは何時の間にやら彼女達で円陣を汲んで何かを話し合っている様子だった。

「弾の奴……　一夏に飽きたらず千冬さんや山田先生まで……　私も早く本番を……」

「ですけど、弾さんはエッチに見えて意外に身持ちが固いですわ……　どうすれば」

「直接的な方法じゃダメかも、お酒とかクスリ……それか、併用……」

「だが、それだけでは決定的とは……　やはり……」

「旦那様は意外に直接的な方法に弱いかもしれないかもしれないぞ……　だが、クラリッサに……」

だけど、なんだろうか。

この五人の話し合いを見ているとあの日、一夏達が和人の家の俺の寝室に侵入していて、何時の間にか俺の息子を掴んでいた時と同じ雰囲気を感じるのは……

お、俺の背筋に悪寒がががが！！！それに全員が俺をエモノを見定める狩人の目になっているのも気にかかるんですけど！！！

それから彼女達は全員が何かを話し合いながら出て行くと、俺は一夏へと近付いていく。

「う、あ、だ、弾？」

「……一夏……」

「な、なに？　弾？」

「ちょっと、こっちに」

「へっ！だ、だん！？」

頭を撫でた俺は一夏の腕を掴むと、有無を言わさずに彼女をシャワールームへと連れ込む。

そして展開される認識阻害の結界と、消音の結界、ん、まあ、この後に俺と一夏がナニをしていたのかは、まあ秘密ということで。

ただ、赤子がこんな俺達をじーっと見ていたのはちょいと気になるところだな。

一言言えば、一夏の喘ぎ声はかなり可愛いとだけ言っておくとしよう。

隣にはムスッとしている一夏が座っているんだが、ヤバイちょっとハッスル（死語）しすぎた。
全部なかに四発はうん、ダメだよなぁ。

「……　もうっ、弾って安全な日を分ってるの？」

「いや、そんなことは無いが……」

……　嘘です！実は大体の危険な日とかの予想は立てられるんです！

「一度体を重ねたら、大体の予想はつくぜぃ！！」

「いきなり！何を言ってるのぉ！！！」

「ぬぅおー！！！！！」

しまった！俺の考えていたことが言葉に思いっきり！出ていたらしい。

一夏の右ストレートを受けた俺は、どさり、と倒れるんだけど一夏のパンチは相変わらず切れが良いぞ！

さ、さっきまでは物凄く切なげに俺の名前を呼んでいて、俺の息子を受け入れて気持ち良さそうに顔を歪めていた少女とは思えない！！というか本当に女ってエッチを一回したらかわるんだな。

処女の時のような初々しい一夏はどこに行ってしまったんだ！？

なんて考えていたんだが、一夏はいきなり咳払いをすると、今はスヤスヤと眠る赤子を見ていた。

「でも、さ、弾」

「なんだ？」

「この子って、弾の子供だよね？」

「……　まあ、注釈をつければ、未来の俺の子供だけどな」

「やっぱり」

一夏には大体の予想がついていたらしい、というか赤子の特徴が俺の特徴を強く持っているからか、彼女は大体の所ではあるが父親

については分っていたらしい。
だけど、俺が注釈を付けた瞬間に、彼女の瞳からハイライトが一瞬で消え去っていた。

「でも、どうして弾の子供ならさ、私や姉さんや山田先生の特徴が無いのかなぁ？」

「え〝、い、いや……　そ、それは……」

「それは、何？」

「……　ドウシテデショウ？」

「まさかさ、私と結婚したけど……　浮気してた「ギクゥ！！！」……」

「い、い、いい、いいい、イチカ、サン？」

「へぇ、だんってぇ……　わたしとけっこんしてあんなにもとめてくれたのにぃ、このこのははおやがわからないんだぁ？」

や、やっちまった！！俺は未来の俺の現状を自分の反応で言ってしまった！！
その瞬間、一夏の瞳から、感情というものが全て消え失せ、彼女の表情がヤンデレの女の子特有の反応を示していた。

「い、イチカサン……　アノ、ドウカサレタノデ？」

「クスッ、クスクスクスッ」

それから俺と一夏はというと……　まあ、デスレースに近い状況に発展したと言っておこう！

まあ、母親となった女の子についての情報を未来の俺から聞かなかったことは、良かったな！うん！

というか、もしも聞いて居たりしたら、その娘は今、マジで死んだ方がマシな目に合わされていたかもしれなかったかもしれないのだから。

それから、一夏とのデスレースを何とかして切り抜けた俺は、ス

ヤスヤと眠る赤子の横顔を見ていた。
一夏と俺のデスレース中も誰かが様子を見ていてくれていたらしいのだが、セシリアやシャルロットやら鈴達が出入りした様子がなかったんだが、誰が様子を見ていたんだろうか。
なんて考えていた俺は知らない【未来のこの子の母親】が様子を見ていたことは。

「ふぇえ……！」

「……オムツ？　それともミルクかな？

なんていっていた少女の存在なんて、知らなかったんだけどな。
だけど俺は考えてしまう、自分の今の現状と、未来の俺が本当に俺に預けてしまう状況となったことを。

「……　この子は、俺の子供として生まれたら本当に自分が望む道を選べるのかね……」

そうだ、これが一番最初に考え付いた考えだった。
この世界、ＩＳというものが席巻した世界において、唯一の男性

ＩＳ操縦者となった俺の子供である赤子は、間違いなくこれからの未来を自由には選べないだろう。

父となった未来の俺が、どうしてあれほどまでに必死となっていたのか、やっぱりそれは。

「この子が全ての国からの思惑に巻き込まれから、なんだろうな」

その一つと言えた。

恐らくというか確実に、未来の俺はこの世界に留まっているんだろう。

それっぽい言葉は言っていなかったけど、この子が自分が本当に望む未来を手に入れられるとは思えない。

間違いなくＩＳ乗りとしての英才教育を俺や母親達が望まなくとも、強制的にさせられるのは想像に難くない。

「……　簡単に、軽く考えてたけど……　本当にこの子は自分が望んだ道を歩んでいけるのか？」

それが、今の俺が考えることだった。

本当にこの子供は自分の道を、自分が選択した道を歩んでいける

のかと、俺は考えてしまう。

俺が、自分が望んだわけでもなくＩＳと関わらされてしまう結果になったこと、それを考えればこの子に待つ未来は……

そう考えつつも俺は、時折オムツを交換してやりながらも考えているのだった。

それから明後日の約束の日となって、俺は未来の俺が来るときを待っていた。

「きたな」

目の前に広がるのは転移式を刻んだ魔法陣、その中から現れる俺の姿。

「約束通りだな」

「ああ、その子を迎えに来るんだ、約束は違えないさ」

そういって俺の手から、赤子を受け取る未来の俺だが、やっぱ父親としての顔をしているよな。

「それにしてもお前さん」

「なんだ？　過去の俺」

「……　お前は未来になっても、この世界に留まっているのか？」

「……　まあ、な」

この返事だけで十分だった。

恐らくというか、こいつは一夏達との約束を守るあまりに世界の線引きを間違えてしまったんだろう。

「父親として、お前は、その子に対して何をしてやれるとお前さん

は考えている？」

「せめて、自分で未来を選ばせてやりたいと思っている、それに一夏達とも話し合いは済んでいるしな、俺達の手で、この子には未来を自分の手で選ばせてやりたいと考えている」

「そう、か……」

俺は、後悔と言う感情も何も無い未来のおれの姿を見て、こいつは自分の決断を間違っていないとは考える。

確かに間違っては居ないだろう、一つの未来としてはな。

だけど、俺は違う未来を選ばせて貰う。

「まあ、過去の俺」

「なんだ？」

「お前さんがどういう未来を選び取り、進んでいくのはお前さん次第さ、それにこの時点で既に差異が発生しているようだしな」

「どういう意味だ？」

「明久達の世界に居た時にシャルロットと一夏と箒が来たか？」

「……　俺の場合は千冬さんと山田先生に一夏だったぞ」

「だろ、既にお前さんの居るこの世界は俺の世界の辿った歴史とは、違った時間軸を流れているのさ」

「……」

イロイロと驚くこともあったが、俺は、ただ視線だけで奴に続きを促していた。

「だからだ、お前さんがどういう道を辿ろうが、未来に影響はなくなっているってことさ」

「まあ、な」

「だったらだ、俺がとろうと考えていても取れなかった手段をお前ならば、取れるだろうな」

「ああ」

俺がとろうと考えている一つの方法、それは【疑似ＩＳコア】を利用した世界への混乱だ。

今までは子供はおらず、守るものも居ない俺はただ、これを秘匿すれば良いと考えていからだろうか、同じ様に考えていた未来の俺は全ての機会を逃したのだろう。

「まあ、お前がどういう風に動くのか、それはお前さん次第さ」

「だろうな」

「俺はこの子達を守り通すさ、お前がどういう選択を選んだとしても、俺はこれ以上、この時代に干渉は出来ないからな」

「ああ、分っている、俺は俺の最善と思える選択をとるさ」

その俺の言葉に満足したのか、未来の俺は、フッ、という笑みを浮かべて魔法陣を展開すると、そのまま自分の時代へと還っていくのだった。

だが、俺の心の内には一つの決意が芽生える。

いずれ生まれる子供達には、自分の好きなように行き方を選ばせるような、世界、そこへと移ろうと、どうあっても今の世界では俺は【世界で唯一であり最初の男性ＩＳ操縦者】という肩書きからは、逃れられないだろうし、子供達にまで俺の肩書きや様々な黒い思惑が押し付けられてしまう。

それを考えたら、取れる手段は限られてくる。

「やっぱ、俺の子供達が幸せになるとしたら……　世界を移る以外には無い、ということか……」

だけど、普通に世界を移って移住しようとしても確実に混乱が起こり、祖父さんや蘭達が巻き込まれてしまうだろう。

だったら一つしか答えは、ないか……

「もう一度……　もう一度、混乱してもらうぜ、この世界にはな……」

そう、それを俺は考えているのだった。

第３４話　ええ思いしちまってるぜぃぐふっ！あと、まあ、決意というか（後書

因みに弾は常にナマだったり。

第３５話　新キャラ登場！とか思わせといて違ったでござる！！あ、後、今回ずっとシリアスです

夏休みもお盆を越えてから、段々と朝と夜が涼しくなり始めて、帰省していた連中もぽつぽつと帰って来た時に、俺は一人の少女と寮の廊下ですれ違う。

俺は全く知らない顔だった、金色の髪を持っていることからセシリアやシャルロットと同じく欧州の人間なんだろう、それに均整の取れたプロポーションに堀の深い顔立ちを持つ少女、制服のリボンが二年を示しているから、先輩なんだろうが、どうしてだろうか？

彼女は俺を見たと同時に、それまで無表情という表現が適切な顔から一変、静かな、それでいて激しい怒りを内包したものへと変わる。

ん、なんか俺ってやったっけ？　なんて考えるし、両隣にいて俺と腕を組んでいる一夏と箒も彼女の反応にはちょいと驚いているようだった。

「どうして、アンタはもっと早く、現れてくれなかったの……　もっと早く現れてくれたら、パパは……」

すれ違いざまに俺へと向けて放たれた一言、最後の言葉こそ聞こえなかったけど、その少女が言った言葉は、後で俺にこの世界の歪みってものを再確認させてくれるものだった。

まあ、今の時点で言えるのは。

「弾、あの娘に何をしたの？」

「そうだな、切りきり吐いたほうが身のため、といえるぞ？」

「俺はあの方とは初対面ですよ！？」

ギリギリと音を立てている俺の両腕、や、ヤバすぎるぅ！！！二人の瞳から光が消えてかなりヤバイ雰囲気だ！？

どうやらこの二人、俺があの娘に何かをしたと勘違いしてらっしゃるようです！？　というか、骨が！骨が折れそうですよ！？

なんて考えていた俺を無視して、二人は俺の部屋に連れ込んで尋問を開始するのだった。

隙を見て二人を押し倒して……　ムードを理解しろ！と言われて迎撃されたけど何か？

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３５話　新キャラ登場！とか思わせといて違ったでござる！！
あ、後、今回ギャグはほとんど入らないかも～

それから説教が終わって、ん、まあ一夏と箒の二人と楽しい時間を過ごした俺は今現在、佐助と小太郎達が指揮している潜水艦の中で、昼間にすれ違った少女の事について調べていた。

「名前はリヴィア・エムディア、ドイツ生まれ、生まれてから五年後に母親が病気で死亡、その後は軍に所属していた父によって育て

られる……　が、ＩＳが開発されて俺がＩＳ学園に入学する四年前に生活が一変……」

どうして俺が潜水艦に来てまで彼女のことを調べようと思ったのか、それは簡単だった。

彼女の表情には俺、否、この世界全てに対する憎しみともとれる感情で彼女の瞳は濁っていたからだ。

あの瞳には覚えがあった、イジメに合って辛い日々を送っていた一夏が、あんな瞳をしていたからだ。

世界最強の姉を持ったジレンマに加えて、何も知らない連中から受ける陰湿なイジメを通しての、あの瞳。

まあ、一夏のことは今は置いておこう。

とりあえずは彼女、リヴィア・エムディアについていっておこう。

彼女は生まれてから日本で言えば幼稚園に入るか、というくらいに母親をなくして、それからは軍属の父親が一人で育てていたらしい、当時の記録を呼び出してみる限りは娘の為に出来うる限りのことはしていたようで、帰宅して家事に炊事にと精を出していたようだ。

その上に誕生日には必ず休みをとってお祝いをしてあげて、帰れない時にはバースデーカードを必ず送るといった事もしていたらしい。

病死した妻を深く愛しており、妻の両親からは再婚を勧められるほどに死んだ奥さんを深く愛して操を立てていたようだな。

彼女も、そんな父親に深い信頼と親愛の情を持っており自分で出来る家事や炊事を担当し、父が帰って来た時には出来る限りに父親が寛げるようにしていたみたいだ。

原作の一夏と千冬さんみたいな関係だろうか、ただ、まあ、違いは幾つかあるだろうけど。

「だが、彼女が１４歳の頃に生活は一変、父親は軍の訓練中に事故死、原因は……　ＩＳ部隊からのミサイルの【誤射】による部隊全体が巻き込まれたことが原因……　調査をした結果、父親がいた部隊の位置に原因があり、ＩＳ部隊の人間が誤射を行った際に当たる位置にいたことが原因って……　なんだよ、これ？」

彼女の父親の死因を調べたのが上の資料なんだが、ハッキリ言って、なんだこれ？　それ意外には言えない資料であり、報告書だった。

何しろ、誤射について先に国連が調べて、ＩＳ部隊の位置と射撃訓練内容に問題があると報告されていたにも拘らず、男が調査に加わっていたから信用に値しないとして、自身のＩＳ部隊の報告書のみを取り上げたのだから。

この際に、国連側の報告書を支持する人間の中にラウラの名前があったんだが、当時のラウラは出来損ないの烙印を押されていたことで、信用されていなかったのかもしれないな。

というか、おかしすぎる報告書だろうというか、誤射が起きた際にそこで訓練していた連中に当たったら、そこで訓練していた連中

が悪い。
そう言っているんだから、この当時は完全な女尊男卑の世界になっていたからな、こう言った報告書は良く上げられていたようだ。

何しろ、国によっては離婚した際に夫に対して【女性に対する不名誉税】なんていう莫大な金額を請求する税金を設定し、慰謝料まで莫大な額を要求できる法律を造った国があるんだからな。
それに父親が死んだ後、彼女は相当な苛めを受けたようだ、まあ言わば【片親、それも父親に育てられたゴミのような女】なんていう形の苛めを。

「原作見た時から、疑問には感じてたんだ、これほどの女尊男卑の世界に変わったんなら、父子家庭はどうなってるんだ？　ってな」

そう、俺が原作を読んで感じていたのは、それが一番大きかった。
ただでさえ、父子家庭というのは母子家庭と比べて【何も】保障というか、保護する制度は無い状況だったんだ、もしも母親が病気で亡くなって父親が一人で頑張り、体を壊しても国からの保障の制度は何も無い状況、それも一生働けない体になっても、国は何も保障をしていなかったんだ、それもＩＳが発表される前の表面上は男女平等と謳われていた世界であってもだ。

「この調子だと、たくさんいるだろうな……　似たような状況の人間が、だけど娘なら、まだ良い、息子、だったら……」

その考えに至った俺は、頭を振って考えていたことを追い出していた。
そんな状況だったら、味合わされる屈辱やらを考えたら、簡単に分るからだ。

その人達が辿ってしまう道を……　それに国によっては、女性に対して口答えをしたら多額の税金と慰謝料を払え、という法律やら、女性は偉いのだから男は奴隷となるべき、という理論まで真剣に議論されている国があるんだから、始末に終えないだろう。

まあ、俺はそんなことを調べているのだった。

俺はそれから二時間ほど調べていて、目が疲れて目頭を押さえていると、部屋の扉が開く音が聞こえた。

「にゃぅ！！（失礼します！！）」

「小太郎か……」

敬礼しながら入って来たのは小太郎で、前回俺が言っていたことを実現する為の報告を行いに来たらしい。

「首尾はどうなっている？」

「ニャッ！にゃにゃなぅにゃなぁにゃなにゃぁう！（ハッ！現時点で疑似ＩＳコアは千二百基の量産を完了しております！）」

「やっぱ、本格的に量産しようと考えたら凄まじい、な」

「にゃにゃにゃにゃにゃにゃぅ！！（何しろ使われている材質が材質ですから量産は簡単です！！）」

うん、凄まじいことになった。

俺はそう考えてしまう、指示してから僅かニ週間たらずでこれだ。

しかも猫と犬達が業務の間の片手間に作ってである。

まあ、コア周辺のレアメタルの幾つかを日常生活でも簡単に手に入る金属に変更したりとか、そういったことであっさりと量産でき

るようになったんだが、これを国単位でやればどうなるか……　それもアメリカとかアメリカとか……

「まあ、それはそれとしてだ、疑似ＩＳコア使用型第一世代はどうなっている？」

「にゃ！にゃにゃにゃにゃんにゃにゃにゃなーう！（既に全設計が完了しており、フレームなどの基礎部分も完成しております！）」

「なら引き続き作業を進めておけ」

「にゃ！（了解！）」

「んじゃ、戻ってくれて良いぞ、ありがとな」

「にゃ！にゃにゃう！！（はい！では失礼します！）」

再び敬礼してから立ち去っていく小太郎の姿を見て、つくづく思う。

「あいつらって……　動物のカテゴリーから余計に離れてないか？」

前にも前兆は有ったんだけどな……　今回は流石に、なあ？
コアの製造に加えて潜水艦の整備補修と、ＩＳの設計に製造まで……　幾ら四十近い数が居るとはいっても、それらの作業を平然と平行しながらこなすなんて人間でも不可能だろう。

だが、ここで机の前にある通信用のディスプレイが着信の音を知らせると同時に、艦長席に座る佐助の顔を映し出していた。

「わぅ！わぅわうわぅうわぅぅ！！（ボス！本艦の南東の海上から所属不明のＩＳが接近しています！！）」

「どうやら来たっぽいな、佐助！直ちに艦を浮上させて彼女を迎えいえれる準備を行え！」

「わぅ！わうわうわわわんわぅわぅ！！（了解！ステルス迷彩【霧の要塞】を発動後、彼女に誘導用のビーコンを送ります！）」

「んじゃ、頼むな」

そういって切られる通信と浮上のために海面方向へと向けて、傾斜する艦内の中を俺はカタパルトデッキへと向けて歩いていく。
この潜水艦を強奪できたのも彼女のおかげだ、まあ彼女から連絡を受けた時にはかなり驚いたけどな。

それに、あの日、福音を撃墜した時に現れたメッセージも彼女だろうな。

なんて考えつつも、浮上が終了して開放されているデッキに、犬と猫の誘導でサイレント・ゼフィルスが下りてくる光景を俺は見ているのだった。

着艦後にＩＳが解除されて、どうやら私服らしい黒の可愛いデザインのワンピースを着ている、千冬さん激似の女の子、こと、マドカちゃんが現れた。

彼女は顔に着けていたバイザーも取ると、千冬さんと同じ顔で一夏と同じ雰囲気の可愛らしい笑みを浮かべてくる。

……　耐性無かったら、この時点で撃墜されてしまいそうだ。

「久しぶり、大体「三年と四ヶ月に二十日と四時間ぶりね」……ソウデスネ」

え〝、この娘って、こんな感じのキャラだったっけ？
病み具合は一夏以上の気がするんだけど……　ま、まあ気のせいだよね！？

なんて考えた俺は目の前に来ている彼女を見下ろす。

「？　どうかした？」

身長は百四十センチ台、胸は……　まあこれからに期待という所だ、千冬さんは女性にしては身長が高いし一夏もなにげに百六十台はあるからな、ミニマムな千冬さんって感じの外見をしている。
まあ、出会った当初なんて刃物のような雰囲気と危険な雰囲気だったんだけど、様々なものに嫌気がさして天災に若返りのクスリを作ってもらって若返った千冬さんと勘違いしてから、色んな所に連れ回す内に今みたいな雰囲気に変わっていったんだよなぁ。

まあ、連れ回す内に彼女の体内に無粋なナノマシンとかが入っていたから、それを【ぷちっ】と全部無効化した上に、まだナノマシンが正常に作動していると誤解もさせているけど……　まずかったかね？　彼女の命を一瞬で奪えるものとか、一定の年齢に達したらハニートラップを行う為の精神操作を行うものもあったがな。
俺が潰したいから潰したんだしな、良しとしておこう。

彼女には体内のナノマシンを無効化していることを、まだ言っていないんだけどな。

きょとん、とこちらを可愛らしく見てくるマドカちゃん、と言うか、小首を傾げている姿が似合っているだと！？　千冬さんは微妙だっと言うのに（以前これを考えていることがバレてボコボコニされた経験あり）！？　だけど、彼女が近付いてきてから俺の近くに立った瞬間、彼女の繭が急角度を描く。

「……え？　なんぞ？」

「他の……　女の匂いがするわね」

「えっ？」

「それに、この匂いの付き方は……　どういうことだ？」

「え、えっと、マドカちゃん？」

そう思う間もなく彼女は俺の胸の辺りとか、服をクンクンと鼻を鳴らして匂いを嗅いでいた。

ていうか、犬並みの嗅覚ですか貴女！？　俺はきちんと

「一夏と箒の二人と行為をした後はきちんとシャワーで……　あいっつぁ！！！」

思わず小声で漏れた言葉に彼女は、不満げな表情を浮かべると俺の足を踏み抜いていた。
そして、目の前を見れば頬を膨らませてむぅ～！という雰囲気となっているマドカちゃん。

とにかく俺は落ち着かせようと、彼女へと話しかけることを選択する。

「と、とにかく……　色々とさ話をしたいから俺の部屋に行かないか？」

「うん、私も話したいこともあるし……　あと、お土産も……」

そういって彼女が顔を赤くしながら取り出してきたのは、俺が最後に連れて行ったアイス専門店のアイスだった。
どうやらＩＳの機能を使って冷凍し続けていたようだ。

俺は彼女の手からそれを受け取ると、犬と猫の数匹にお茶を用意するように指示を出して、俺の部屋へと案内するのだった。

俺が彼女を部屋に案内した後、彼女を椅子に座らせると、来客用に設置されていたテーブルを展開して用意されたお茶を飲みながら、俺はマドカちゃんと一緒にアイスを食べていた。

「お、それは俺があの時に言っていた」

「うん、ミントチョコ……　今でもこれがお気に入りだ」

「そうかそうか……　あの時のマドカちゃんは初めてアイスを食ったみたいだったしな」

「みたいじゃなくて初めて、私は今まであいう物を口に出来る環境にはいなかったから」

「そう、か……」

まあ、暫くの間はアイスを食べてのんびりと過ごしたよ。

俺のバニラアイスを彼女に食べさせてあげたり、逆に彼女の方からミントチョコのアイスを食べさせてもらったりしたけどな。

食べ終わった俺達は、本題に入るために雰囲気を改めていた。

「所でマドカちゃん、連絡を入れてきたってことは」

「……　近い内に組織を出たい……　そのために、この潜水艦を派遣してくれないかな、と思ったんだ」

「ふむ……」

彼女が現在所属している組織【某国機業】これについては一夏と千冬さんもかなり深く関わっていると言えるだろう。

アンサートーカーの力で確認は取っていないけど、彼女、マドカちゃんがどうしてあの組織にいて、しかも千冬さんと似すぎているのか。

それを考えると大体の予想はついてくる。

だけど、彼女が組織を抜けると言うのなら、一番良い時期がある。

「組織を抜けたい、か」

「うん」

「……　こいつを使わなくてもより確実な方法で抜けさせてやれる方法がある」

「え？」

それから俺と彼女は話し合う。

彼女を組織から抜けさせる方法と、俺が同時に今考えていることを実現させる為のことを。

それから、夜明けにも近い時間帯、既に水平線には夜明けの兆候が見ている時間帯にマドカちゃんとおれはカタパルトデッキに来ていた。

「それじゃあ、また」

「ああ、それに俺の勘だけどな、来月から世界が動くかもしれない」

「どういうこと？」

「詳細は俺にも分らないさ、でも、その中でマドカちゃんを組織から抜け出させる絶好の機会が訪れるだろうから、その時を待っていて欲しい」

「うん」

俺の言葉に頷いて返事を返してきた彼女は、俺に微笑を浮かべていた。

それから彼女はＩＳを展開し、去っていくのを俺は見送った後、俺に佐助と小太郎の二匹が近づいてきた。

「にゃにゃにゃにゃぅ？（ご主人今すぐに行動を起こさなくて良かったんで？）」

「ああ、来月に奴ら某国機業からの襲撃がある、俺の勘がそう言っている、だから、その時に」

「わぅわわわんわぅう？（第一世代の投入を決意する、と？）」

「そうだ、第一世代に乗った俺以外の【男】をな」

そう、俺の博麗の巫女並の勘が囁いていた、来月に某国機業からの襲撃があると、だから俺は準備を怠らない。
そして、世界に見せ付ける。
俺が開発し、男でも操縦が可能なＩＳの存在を、それこそが。

「この世界からの脱出の第一歩だ」

「わぅ……（ボス……）」

「にゃぅにゃにゃにゃにゃぅ！（我ら四十二匹一同全てボスの指示に従う所存であります！）」

そうして俺は再び艦内に身を翻して入っていくと、艦は閃光と同時にステルス迷彩を展開して、海中へと消えていく。
そんな中で俺は考える。

「最初の男のパイロット、誰にしよう？」

という、一番重要なことをな。

実際に実戦経験が豊富で、男だとはっきりと分る体格に声質に短い期間で乗りこなせそうな人物……　あ、いるじゃん。

なんて考えながら、部屋に戻った俺は再び量産型第一世代の設計を、佐助と小太郎の舎弟の猫や犬達と一緒に行っているのだった。

再び番外！！　そのに追加！！（前書き）

今回の番外編は、前の話に出てきていたお寿司屋での出来事です。時間軸としては、鈴との戦いの後からシャルロットとラウラが転校して来る間の話となります。

そのに、に関しては臨海学校から夏休みに入る間の出来事となってます。

再び番外！！　そのに追加！！

そのいち、セシリアと弾のド・キ・ド・キ☆！な休日。

本日は華の土曜日、俺は入浴外出で行った先の銭湯【アフロ銭湯】での入浴を終えて、のんびりと予め予約していたビジネスホテルへと向かっていた。

その銭湯なんだがなんか、何処かで見たことがある気がするアフロ男が毎回番台に立っているんだけど……　どこで見たんだろうか……　あ、確か前世で見たケロっと鳴く軍曹のアニメだ……　って居るのかよ！？　あの連中が！？

そういえば……　銭湯でたまにまん丸の緑頭やら赤頭やらといった明らかにおかしい人間を何度か見たことがある……　ま、まさかねぇ？

なんてことを頭の置く深くへと押しやって、周囲を見渡せば休日の夕方のこの繁華街には、かなりの人で賑わっている。

周囲の飲み屋のお姉ちゃんがカモといえる男性を店に引き吊り込んだり、酔っ払った人間達の気分の良い笑い声などが響いている中を歩いていたときに後ろから誰かが近付いてくる気配を感じた。

「よぉ！弾坊じゃないか！」

「お、ゴンさんじゃん、久しぶり」

俺の肩を軽く叩いて挨拶をしてきたのは、俺の家の近くでこじんまりとしているが、評判の寿司屋をやっている【魚岸　権助】という男性だった。

見た目は家の祖父さんと同じ様に筋骨隆々としている……　確か、今年で八十五になったとか聞いたんだが、どうして俺の周囲のジジイどもはこう、なんと言うかムキムキで元気一杯過ぎるんだろうかね。

俺も将来はこんな感じになってしまうんだろうか、なんて考えてしまう。

「おう、久しぶりだ！それとお前さんも大変だなぁ！ＩＳ学園だったか？　あんな女の園みたいな所に押し込められてな」

「みたいな、じゃ無くてそのまま女の園だよ、まあ、それはもう慣れたよ、でも今は店の開店時間じゃないの？」

「こまけぇこたぁいいんだよ！！」

「いや、細かいことじゃないと思うんだけど……？」

「がはははははははっ！！！」

そういえばこんな人だった。
俺はそんなことを思いながらも、顔は引き攣った笑みに彩られているのを自覚していた。

この人は寿司職人としての腕は非常に良い、それこそ何処かの富豪に破格の待遇で迎えられようとしたのを断ったとか、断った際のいざこざを００７ばりの活躍をもって解決した、とか嘘か本当か分らない伝説を持っている人だしな。
だけど、致命的に自由人過ぎるんだ、この人がいない時は弟子の人が店を切り盛りしているから問題がないと言えなくも無い、というか、弟子も凄い腕の持ち主だし。

まあ、それはそれとしてゴンさんは豪快な笑みを浮かべて俺の肩を叩いてくる、

つか、痛い……

「明日は暇かぃ？　弾坊」

「まあ、予定は何も無いけど……」

再び豪快な笑い声を上げながら、ゴンさんが言って来るんだが、明日は日曜。

誰とも約束はしていないし、俺自身も実家に顔を出すくらいしか予定が無いから何も無いな。

「じゃあ決まりだ！明日俺の店に来い！最高の寿司を食わせてやるぞぅ！お前さんの高校の入学祝も兼ねてな！」

「お、ラッキー！んじゃ、お邪魔するよ！ゴンさん」

「おう！それにＩＳ学園のべっぴんさんも連れてくるとサービスするかもしれないぜ？」

「ま、それについては考えとくよ」

「そうかそうか、がっはははは！！」

そういって去っていくゴンさんを見送った俺は、とっくに夜の帳が下りている繁華街を歩いてホテルへといそいそと歩いて行くのだった。

それから俺はホテルに着いてから飯を食った後、寮とも自宅とも全く違う本当ののんびりとした時間が過ぎていくこと、それを大きな幸せと同時に噛み締めていた。

ＩＳ学園の寮ではどうしても男子が俺一人しかいないからか、エロい意味での平穏と言うものが遠い上に、同じ部屋だったときは一夏もそれに対抗して俺の目の前で着替えたりとか下着を見せたりとかして来ていたから、ムラムラしてしまうんだが襲ったら間違いなく俺は人生への墓場へと直行してしまう！！

かと言って自宅では蘭がいつの間にかエロい格好で俺の背中に抱きついてきたり、風呂に一緒に入ろうと突撃かましてくる上に、いつの間にかベッドの中に裸で入り込んだりしてくるからなぁ、実質的に俺が本当に寛げる場所と言うのがほとんどないというのが、実情なんだよなぁ。

だからこそだこんな風に一人で、尚且つ本当に何も無い平穏な時間と言うのは、俺の癒しとなっていた。

まあ、アダルトチャンネルを見ながら考えることじゃないかもしれないがな。

「ん、メールか？」

ワザとらしい女優の喘ぎ声と、モザイクだらけで、あまりにも酷い映像にちょいと辟易してしまいそうになる映像を背景にしていたら、俺の携帯が着信を知らせてくる。
その着信音はメールに設定したものであり、俺は携帯を見れ見れば、セシリアからのメールが入っていた。

『こんばんは弾さん、明日は日曜ですけれど……　予定はおありでしょうか？』

「フム……　デートのお誘いかね……　あ、ちょうど良いな、セシリアは知らないはずだし、ゴンさんの店に誘ってみるか」

セシリアは寮に俺がいない時には、こうしてお誘いのメールをたまに送ってくる。
一夏は凄まじい勘でもって察知してくるからなバレれば、俺の命の危険がある……

まあ、とりあえずは返信だな。

『知り合いの寿司屋の店主に招かれてるんだけど一緒にどうだ？一緒に行ってくれる人間居れば連れて来いって言われてるし』

「これでよ、ってはや！？」

メールを送り終わってベッドに置こうとした瞬間に着信通知が送られてくる。

それもセシリアからだ、あまりにも早過ぎるその業に流石の俺もビックリだ！？

『是非お付き合いいたしますわ！』

実際にセシリアに目の前で言われているかの如き迫力も持っていそうな文面、これを見た俺は少々圧倒されつつも返答のメールを打ち込んでいく。

『おう、了解したぞ、んじゃ十一時に駅前のモニュメントに集合な』

それを送った後、俺はごろりとベッドの上に横になっていた。

すぐにセシリアからは了解の返事が届いた後、俺は寝ることを伝えてメールを終わらせると、すぐに心地よい眠気が俺自身を包み込んできたので、それに全てを委ねて意識は深く沈んでいくのだった。

そして次の日、ちょうど良い時間となったのを確認した俺はチェックアウトを済ませると、目的地へと歩いていた。
そんでもって向かう途中のプラモ屋から何処かで見た褐色の肌をもった、どこかの高校の制服姿の女の子と、まん丸頭で緑色の変な人間が姿を現していた。

「やっふー！！旧キットではありますが１００分の１のＺガンダムが手に入ったでありまーす！！」

「良かったですね、おじ様」

「いやぁ、あまり良くないでありますよモア殿、再販は中々されないし、ＭＧも新しいものは全然出ないし、逆にサイアクでありますよ！」

「全くですね、というか諸行無常？」

……なにも見なかった事にしよう。

そして俺は待ち合わせ場所となるモニュメントの前に着いたんだが、ちょいと早く着きすぎたかね、なんて考えていた。
何しろ待ち合わせ時刻の三十分も前だったんだし。

まあ、ちょうど良いかもね。
なんて考えたら後ろに気配を感じた。

「お待たせいたしました、弾さん、でも待たせて、しまいましたか？」

「いや、別に待ってないぞ、実際、今着いたばかりだし」

「そ、そうなんですの？　良かったですわ……」

俺が先に到着していたことにちょっと焦りを見せたように近寄っ

てくるセシリアに、俺は微笑みながらそう返すと安心した様子を見せる彼女。

だけど実際にセシリアはもう少ししないと来ないかも、なんて考えていたからな、俺はその間にゴンさんに電話でもしとこうか、なんて考えていたんだけど行く途中ですれば良いか。

とも思うことにした。

「それにしてもセシリア」

「え、えっと、弾さん？」

「随分と気合が入っているな、それに薄くだけどメイクまでしてきてるし……　綺麗だぞセシリア、一瞬見違えたぞ」

「だ、弾さん！？　あ、ありがとうございます！」

今は初夏で夏の暑さが微妙に近付いてきている季節、今日も既に二十度の後半近くに差し掛かろうという気温だからか、セシリアは白いサマードレスに身を包んで足元も白いミュールといった夏を先取りしたような、そんな涼しげな姿をセシリアはしていた。

まあ、こういうときでの男として当然のマナーでもある、似合っていれば褒めると言うことを行えば、セシリアは思いっきり顔を赤くしてちょっとうろたえている様だった。

はて？　俺って、そんなになるような褒め方したっけな？　なん

て考えながらも自然にセシリアの手を握ると、先導するように歩き出す。

「だ、弾さん!?　あ、あの……」

「ん、ああ、すまんかった」

「い、いえ、イヤではなかったんですけど」

おおう、一夏や鈴のどっちかと出かける時と同じ感覚になっていたらしい。

いや、気づけよといいたくなるんだがセシリアの奴は、意外にも嫌そうにはしていなかった。

それどころか俺が手を放したことでの寂しさみたいなのを感じているらしく、俺がさっきまでセシリアと繋いでいた手をチラチラと見ているから、どうやら手を繋いでほしいのかね。

なんて考えると、俺はセシリアに向けて手を差し出していた。

「ほい」

「え？」

「ゴンさんの店まで、手を繋いでおこうか、はぐれたりしたら大変

だからな」

「は、はい！」

まあ、ちょっと言い訳がましいかね。

なんて考えながら俺は言っていたんだが、セシリアの奴は物凄く嬉しそうにしながら、俺の手に自分の手を重ねてきていた。

そんでもって談笑しながら歩き始める俺達だが、周囲の男供からの嫉妬の視線が凄いこと凄いこと、やっぱセシリアが美人だからかねぇ。

なんて考えるのだった。

寿司屋に向かっていく途中で、セシリアに対して疑問に思っていることを聞くことにした。

というか、確か俺の前世の記憶じゃあ欧米の連中って。

「なあ、セシリア」

「はい、なんでしょうか弾さん？」

「お前って学食で刺身見ても何も反応しないけど、魚を生で食うのって平気なのか？」

「ああ、そのことですのね」

「おう、確か欧米の人間って魚とかを生で食う習慣があまり無いからな、苦手って思ってたんだけど、お前さんはたまにだけど刺身定食とか食ってるし、納豆も平気みたいだからな、なんでかなって思ってさ」

そう、俺の質問と言うか疑問と言うのは欧米の連中がどうして大抵の日本食が平気で食べれるのか、と言うことだ。

原作アニメ版でもセシリアって確か刺身を一夏に食わせてもらってたよな、それを見た時からずっと疑問には感じてたんだ。

どうして普通に刺身を食えるんだろうか？　とな。

まあ、そういう質問なんだけどセシリアってたまに本当にたまにだけど、学食の刺身定食やらたまに付いて来る納豆とかでも普通に食う、というか他の欧米出身と思える女子も普通に食っているからな。

余計に謎が深まったんだ。

なんて考えていた俺の横でセシリアは遠い目をすると、疑問に答えるように口を開き始める。

「弾さんの疑問も尤もですわ、実際にＩＳが発表された当初はそういった食事は信じられないと言うか、苦手という言葉さえ生温い状況でしたし」

「だろうな」

「はい、ですがＩＳの開発者である篠ノ之博士が刺身や納豆と言った日本独特の食材は大好物である、というのが原因です」

「やっぱ、天災は関わってくるか……　それの具体的なことはなんだったんだ？」

「実は我がＥＵの国の一つがＩＳコアを篠ノ之博士から分配される際に彼女の目の前で、博士が好物と言っていた刺身や納豆と言った日本独自の食材をバカにして笑いものにまでしてしまって、その国はＩＳコアの供給だけでなく、基幹部品や知識に至るまでのＩＳに関することの徹底的な制裁が篠ノ之博士によって行われたので、それで後の代表や代表候補生達は日本食が平気になるように訓練されたわけなんですの」

「……　その国の大使と言うか使節ってバカがやっていたのか？」

「そう言われてもしょうがない、と言えますわ、当時の記録映像を

見て見ましたがとても酷いものでしたから」

うん、なんだろう。

セシリアが言っていた国の大使ってバカと言うかなんと言うか…… 普通、開発を行い絶大な力を持った人間を相手に、そんな態度に出る阿呆がどこに居るんだろうか？

「まあ、そういう訳があったのか…… まあ、納得だな今まで残っている風習をそのままにして天災の怒りを買いたくないし、何より奴はなにをするか分からない所があるからな」

「篠ノ之博士が云々というのはわたくしは実際にお会いしたことが無いので、分りませんが理由は弾さんの仰るとおり、博士の怒りを買いたくないと言うのが政府の本音でしょうね」

「そうか、まあ、それは置いておくとしてだ、これから行くゴンさんの店は上手い寿司を出してくれるからな、期待しておけよ？」

「まあ、それは楽しみですわ！わたくし日本のお寿司をちゃんとしたお店で食べるのは初めてなんですの！」

暗いというか、思いと言うか、そんな感じの話題になりかけたから、俺はセシリアに努めて明るくそう言うと彼女も乗ってきてくれて、楽しそうに俺により密着してそういってきていた。

ただ、暑いとかいうと、怒られるよなぁ、やっぱ。
それにセシリアも楽しそうだから、余計に言えないな。

そんでもって着いた俺達だが、セシリアが困惑したような表情を向けてくる。
まあ、始めてきた人間は皆そうなるだろう、何しろ。

「あの、弾さん？」

「ん、どした？」

「ど、どう見ても日本の一家屋にしか見えないんですけど……」

「これがあの人の心情って奴だ」

「は、はあ……」

そう、見た目普通の家にしか見えないからだ、特徴となるような看板も暖簾も無いし、入り口も普通の玄関だからマジで誰かの自宅にしか見えない造りをしている。
その上に開店しても暖簾も何も出さないから、余計に分らない事になっているわけだ。

「心情と言うのは、どういうものなんですの？」

「まあ、簡単に言えば『すぐに分っちまうような店はつまらん！これからの時代は店もスニーキングを行うべきだ！』なんていう話を以前聞いたことがある」

「商売をする気があるのでしょうか？」

「一応はある見たいだぞ、常連とか顔見知りが行くくらいだけど十分すぎる以上に利益は出せているみたいだからな」

もしかして俺が間違えたんじゃないか、と言う趣旨の視線を向けてくるセシリアを無視すると、俺は彼女の手を引いて玄関を開ける。

「ちぃーす！ゴンさんー！来たぞー！！」

「お、らっしゃい！弾坊！お！そっちのがＩＳ学園の生徒さんかい

？」

「おう、俺と同じクラスの奴だ名前は」

「セシリア・オルコットと申しますわ、本日はよろしくお願いいたしますマスター」

「おう、ご丁寧にありがとよ嬢ちゃん、俺は魚岸　権助だしがない寿司屋をやってるよ、だけどよ弾坊、こりゃまた凄いハイカラなべっぴんさんを連れてきたもんだな！厳の奴も孫の心配はいらねぇってか？」

「ま、まご！？」

「ゴンさん不躾過ぎるよ……」

玄関を開けた最初こそ唖然としているセシリア、それはそうだ。なにしろ普通の玄関を開けたら寿司屋のカウンターとテーブルが広がっていたんだし、俺も最初来た時は似たような感じで驚いたもんだよ。

なんて懐かしがっている内にセシリアの事を聞いてきたから、彼女を心持ち前面に出すように体の位置を変えると、彼女も承知していたように前に出て両手でスカートつまんで優雅な自己紹介を行っていた。

それに答えるようにゴンさんも一度礼を返して自己紹介を行うんだけど、その直後に言ってきたことについてはセシリアは顔を真っ赤にさせて、後ずさっていた。

呆れて苦笑いを浮かべていた俺だけど、ゴンさんは豪快な笑い声を上げて俺達を常連、特に中の良い連中を招いた時にだけ使う部屋に連れて行くと、厨房へと戻っていく。

「あ、あぅぅぅ……　ま、孫……　わ、わたくしが……　だんさんのこ、ここ、ここ、こどもを……」

「大丈夫か？　お前」

ここは冬は掘りごたつになる部屋だからか、普通に椅子に座るように座れるから、セシリアの正座とかの心配は要らないんだけどなぁ。

セシリアはさっきからこんな調子で、顔を真っ赤にさせているからちょいと心配になってくる。

俺の言葉にうなづきを返してくるセシリアの姿を見て、俺は彼女が元に戻ったと思いたいんだけど。

「だ、弾さん！」

「お、おう……　どした？」

「日本では一姫二太郎が最高の組み合わせとお聞きします！だからわたくしがんばります！」

「……　大丈夫か？　お前」

「大丈夫ですわ！ええ！大丈夫です！わたくしは至って正常ですわ！」

なんだろう、前にこれと近いやり取りを何処かでした記憶があるな。

まあ良いや、セシリアの奴は腰に手を当てて、胸を張り、そう言っているんだけどちょっとどう反応して良いかわからん。

大きさはそこそこだけど形はバツグンに良いおっぱいをセシリアが軽い混乱と言うか、錯乱と言うかの状況を利用して堂々と凝視して、俺はそう考えるのだった。

まあ、それから料理が運ばれてきた所で、セシリアは正常に、本当にいつも通りに戻った。

運んできたのはゴンさんの弟子の一人でもある男の人だったんだ

が、勝手ながら割愛させてもらおう。

男の紹介とかを描写するのを作者が面倒臭がったわけじゃないんだからね！本当だからね！

それに割愛された真の理由としては……　俺、この人が近付いてきたら、どうしてか尻を守らないと、という強迫観念に囚われるんだ、何でだろう？　他の弟子に聞いてもこの人にソッチの気があるなんて聞いたことが無いし、アンサートーカーに問いかけても『少なくともホ〇とはいえないよ』と言う答えが返ってきたからな。

余計に分らない……　まさか両刀……？　そんなわけ無いよねぇ！！

なんて考えを俺は首を横に振って吹き飛ばすのだった。

「これがお寿司ですのね！はじめてみましたわぁ！」

「お、今日はワサビがあるな」

「わさび？　刺身定食にも付いていますが……　どれですの？」

目の前にあるのはギョクやらマグロの赤身に甘エビやタコにイカといった定番どころだけど、セシリアの方にはタコやイカが入っていないから気を遣ってくれたんだろうな。

それに加えて太刀魚やらエンガワにメジナといったネタの数々、朝早くから市場に行って食材を自分の目で見て仕入れてくるゴンさ

んだから、確実に美味いと言える寿司の数々にセシリアも目を子供のように輝かせてみていた。

俺は本日の寿司の中に、ワサビが一本丸ごとあった事に驚いたんだが、セシリアはどれか分らないらしい。

まあ無理も無い、一見するとセシリアのも俺のも野菜スティックのような形に加工されているからだ。

ゴンさんの仕業だな、これって。

「これだよ、お前さんの奴にもあるだろ？　ゴンさんの店で出されるワサビは特に味が良いんだ」

「どうしてですの？」

「なんでも、質の良いワサビが自生している秘密の所を知っているらしくて、そこから取ってきた奴を店に出すのさ」

「なるほど、全ての食材にこだわりを持って調理に挑む職人といえるお方なのですわね」

「おう、俺も小さい頃は祖父さんやゴンさんみたいな料理人になりたい、とか思ってたもんさ」

ゴンさんがどうしてワサビをこんな風に出すのかを聞いたセシリアは、微笑を浮かべながら細い形に加工されたワサビや寿司を見つ

めていた。
そして俺がワサビを持って摩り下ろそうとした時に、事件が起きる。

「セシリア、コイツはなこうやってすりおろって……　ちょ」

不自然に途切れる俺の言葉、何が起こっているかを説明しよう。
セシリア、野菜スティックをつかむように持つ、それを口に入れてパリパリと齧る、三分の一くらい齧った所で動きが不自然に止まる。

そして。

「おい、大丈夫、か？　んな食い方すると無茶苦茶辛いんじゃ……」

「――――――――――――――――ッッッッッ！！？　☆♪△！▲○▼Γ！！！」

「お、落ち着けセシリア！口直し！口直しに水を飲むんだ！

顔を真っ青から真っ赤にと言う道化師もビックリな顔色の変化をやらかすと、セシリアは涙を浮かべて凄い錯乱状態になっていた。

そりゃそうだ！ワサビを生でかじったらそうなると言うか！詳しい説明をしなかった俺も悪いと言うか、どうして学食の刺身定食のわさびを知っていて齧ったんだ！？　なんていう言葉が脳裏を掠めていくんだが、俺はセシリアに水を飲ませたりして落ち着かせようとしていた。

それから大体数十秒後に落ち着いたセシリアだが、未だに大粒の涙が目にたまっているからか、いつもとは違う可愛らしさも感じる。

「うぅ……　な、なんなんですの、これは……」

四つん這いでｏｒｚ↑こんな感じになって打ちひしがれているセシリア。

このままだと、生わさびに対して激しい誤解を抱いてしまいそうだし、なにより楽しめないよなぁ。

そう考えた俺はセシリアの隣に行くと、彼女の寿司ネタの中からエビをとる。

「セシリア、このワサビはすったやつをこうやってちょっとネタにつけてから食べるんだ」

「そ、そうなんですの？」

「ああ、これを食べてみ？　ほれ、あーん」

「あーん……」

子供みたいに半べそかきながら俺の言葉に答えていくセシリアなんだけど、普通に可愛いな、おい。

なんて考えながら、俺はエビをセシリアの口に入れる。

彼女は暫くの間モグモグと租借して、それを飲み込むと表情を輝かせていた。

「美味しいですわ！お寿司がちょっとピリッとしてご飯とも良くあって、より旨みが引き出されてますわ！」

「だろ？　んじゃ、問題も解決した所で、改めて食べようぜ？」

「はい！」

とまあ、色々とあって食事を開始したんだけど、意外なことにセシリアはタコは大丈夫だったらしい。

なんでもあの天災の好きな寿司ネタの一つにタコがあったらしく、決死の思いで克服したと言うかするように訓練されたそうだ。

それで俺の方にあったタコを食べさせてと言ってきたので、普通

にあげようとしたらさっきみたいにして欲しい、と言われたので渋々とではあったが食べさせてあげたり。
変わりにセシリアが俺にあーんをしてきたりとかあったんだが、まあ、割愛させていただこう。

まあ、それから俺達は街で買い物をしたりとかして学園に帰ったんだけど……

「で、どうしてセシリアと弾は一緒にゴンさんのお店に行っていたのかな？　カナ？」

「ふぅ～ん……　ゴンさんのお店に二人っきりでねぇ……　どういうことよ？　弾」

二匹の夜叉が降臨したとだけは……　言っておく。

千冬さんはニヤニヤと楽しそうに見ているだけで助けてくれなかったし、しかも上手く誤魔化せたと思ったら痛い所を付いて来て、俺を窮地に立たせるもんだからよりピンチになってしまう出来事がががが！！！
この悪魔！とか思ったら出席簿を構えたから、それ以上の思考は自重したりする。

ま、まあ、俺の精神の安定のために、もう思い出さないようにしておこう。
なんていう感じで、今日の休日は過ぎていくのだった。

そのに　俺と鈴とラウラのお出かけ！？

本日は華の日曜日、俺はなくなってしまった入浴外泊を埋めるように、太陽が昇りきっている時間帯だと言うのに惰眠を貪っていた。
普段の日曜であれば箒や一夏達の朝稽古に付き合わされるんだけど、今日は一夏の方は自宅を掃除しに帰宅していて、箒の方はと言うと実家である篠ノ之神社に用があるとかで居ない。

起こしに来る連中が居ない現在、俺はゆっくりと眠れていると言うわけだ。
まあ、いつもの生活習慣というものは厄介なものであり、俺の腹はぐぅ～！と豪快な音と空腹時の不快感を訴えてくる。

「腹が減ってたら眠れるものも眠れないよなぁ」

のそのそと起きた俺はあくびをかみ殺しながら、顔を洗うために

洗面所へと向かって行く。
今日の日替わりなんだろなー　なんて考えながら。

そんで最低限の身だしなみを終えて、Gパンに大き目のTシャツという出で立ちになった俺は学食へと歩いているんだが、珍妙なものが目の前を歩いていることに気が付く。

「……　ん、旦那様か……　おはようございます、今日も良い朝だな」

「お、おう……　おはようラウラ」

俺の視線に気が付いたのか、疑問顔でこちらを振り向く彼女、ラウラ。
だけどツッコミたい！ツッコミを入れたい！どうして奴は白いゴスロリドレスを着て、背中に白い翼をつけているんだよ！？
でも、この格好、どこかで……　あ〝まさか、白猫……　か？

それに手には顔左半分を覆うようなピエロみたいな仮面も持っているから、なぁ。
多分あれをモチーフにしているんだろう。

「で……　一つ聞きたいんだがラウラ」

「なんだ？」

「その格好は一体？」

「これか……　昨夜にクラリッサが送ってきたのだが、似合ってないのだろうか？」

そっちじゃねぇよ！と言いたい気分だ！！流石はクラリッサだラウラの体格に彼女の容姿に似合うように作られた服の構成、間違いなく似合っている。

服の形も大体の基本的な形は白猫・Ｖｅｒを元としているが、ラウラに似合うようにアレンジが加えられているから似合っている。

「いや、普通に似合っているし、可愛いんだが……」

「そ、そうか似合っているし可愛い、可愛いか……　着て見た甲斐があったな」

「まあ、本人が満足そうなら良いか……」

似合っていないと思ったのか、不安そうになって問いかけてくる

ラウラ、あ、なんか泣きそうじゃね？　そう思った俺は慌てて褒めていた。
　というか本当に似合っているし。
　俺が褒めたと同時に頬を染めて、体をクネクネとさせてトリップしているラウラ。
　正直、この格好を含めて原作じゃあ全く想像ができないキャラになってしまっているよな、今更ながらな。

「あ、弾にラウ……　ラ？」

「おっす、おはよう鈴」

「え、ええ、おはよう……　所で、さ、ラウラのこの格好ってなに？」

「いつものことじゃないか？」

「いつもの事にしたくないわよ……」

　どうやら俺達と同じく今から食事なのか鈴が現れるんだが、ラウラの格好とトリップしている彼女を見て目を点にしている。
　物凄く驚いているようだ、まあ無理もないか普段はまだ抑え目のゴスロリドレスなんだが、今日のは完全にはっちゃけた格好だからな。

「まあ、それは置いておいてお前さんも朝食か？」

「そうよ、ちょっと寝坊してさ、でもラウラも朝食？」

「見たいなんだが、さっきからこんな調子だしな……」

「可愛いか……　私が可愛い……」

「……　アンタ、何したのよ」

「別に何もしていないはずなんだが……」

まだ体をクネクネさせてトリップしたままのラウラを見て、俺に対して冷たい視線を向けてくる鈴。

いや、そんな目で見られても心当たりは、服装を褒めた位しかないんだけど。

とりあえずは。

「ほいっと」

「まあ、それしかないか」

体をクネクネとさせているラウラの両脇に腕を入れて持ち上げた後、ずた袋のように肩に担いで持っていくことに決めた。
本当は横抱きで持って行こうとしたんだけどな、体をクネクネさせているから持って行きづらいんだよな。

「弾、女の子をそんな風に運ぶのはどうかと思うけど？」

「仕方がないだろう、実際運びにくかったんだし」

「まあ良いわ……」

なんていって運んでいく俺と、隣をぴったりと歩いている鈴、談笑しながら歩いているんだけど、すれ違った女子達の仰天したような表情が印象的だったなあ。

そんなこんなで今はそれぞれが席について飯を食っている、俺が日替わり定食で内容は白米になめこの味噌汁、味の開きにきゅうりの浅漬けという構成だな。

鈴は俺と同じく日替わり定食だけど、これに納豆がついていたりする。

ラウラはと言えば何故か学食に着く直前で正気に返って来たからな、普通に注文したんだが。

内容が……　野沢菜のお握りに昆布のお握りと鮭お握りやら梅お握りといったお握りのオンパレードなのが気になる。

「ねえラウラ……」

「どうした、鈴？」

小さく可愛らしい口を開けてハグハグとお握りを食べているラウラに、鈴は恐る恐るといった様子で声を掛ける。

リスみたいな食い方をする奴だ……　そう思っていたら、鈴のやつはいきなり近く似合ったナプキンを持ってラウラの顎を持ち彼女の口元を吹き始める。

「な、なにをする！」

「ちょっとじっとしてなさいよ」

「鈴の言う通りにじっとしてろ、」

鈴は本当なら別のことを聞きたかったんだろうが、ラウラの口元には海苔とかの食べかすが付着していたのだ、そっちの方が気になったらしい。

それを拭き取っている鈴と、ちょっと嫌そうに身をよじっているラウラに、微笑ましく見守る俺、そんな俺達の姿を傍から見た人間達の目には、どう映るんだろうか。

『ねぇねぇ、あれって五反田くんたちだよね……』

『なんていうかさ、凰さんと五反田君が夫婦で、ボーデヴィッヒさんが二人の子供みたいだよね』

『う～ん、それにしてもごたち～って、なんかああいう絵が似合うよねぇ～』

声からしてのほほんさんやら相川さんと言ったいつもの面子だろう、俺と鈴が夫婦ねぇ……　鈴が母親、違和感ないのはどうしてだろうか。

まあそんな事をしている内に拭き終わったらしく、鈴がナプキンを丸めている中でラウラは釈然としない様子を浮かべつつも、食事を再開する。

「だけどラウラ、お前さん今日はどうしてお握り尽くしなんだ？」

「昨日クラリッサが勧めて来たアニメを見て、その中で今食べているのが出てきてな、美味そうだったので食べてみることにしたのだ」

「「……」」

やっぱりか……　そう俺は思っていたんだが、鈴も同じ様に感じたらしい。

彼女の方は呆れと言う感情を滲ませて沈黙していた。

「そんなことよりも旦那様に鈴、聞きたいことがある」

「なんだ？」

「なによ？」

「今日は暇か？」

俺と鈴は顔を見合わせる。

ラウラの聞きたいことの意図が分らないからだ。

「まあ、俺は特にないぞ」

「あたしも……　特にないけど、どうしたのよ？」

「ああ二人に付き合って欲しい所があるのだ……」

「「？」」

「実は」

「「実は？」」

いつもハッキリしっかりとものを言うラウラにしては珍しいと言うか、ありえない様子だ。

なにしろ恥ずかしそうに、尚且つ、言いにくそうにモジモジとしているからだ。

俺も鈴も彼女のこんな様子に疑問を浮かべながら顔を見合わせていた。

「秋葉原に行ってみたいんだ！！」

「「……　へ？」」

それから展開される俺と鈴の間抜け面、それはそうだ。
白猫の格好をしたラウラが物凄く恥ずかしそうに言い出した内容が、度肝を抜かれるものだったんだからな。

そんなこんなで俺達は今、秋葉原ではなく隣町の電気街に来ていた。
何で秋葉原じゃないのかって？　遠いからに決まってる。
何しろ電車を乗り継いで片道三時間近く掛かるんだ、とてもじゃないが日帰りでいける場所じゃない。

「何で秋葉原じゃないんだ……　ぶつぶつぶつ……」

「しょうがないでしょ、昨日言われてたら何とかしようもあったけど、今日、それもお昼近くに急に言われても連れて行けないじゃない」

「むぅ……」

俺の両隣には拗ねたようにムスッとした顔で歩くラウラと、彼女を何とかして宥めようとしている鈴、どうしてだろうか。
拗ねている子供と、それを宥める母か姉と言う印象を鈴から受けるのは。

まあ、それはそれとしてだ、この電気街も負けてはいない。
秋葉原にはやはり店の数と言う形では負けるが、品揃えでは匹敵している店は多い。

「だがラウラ、お前さんはどうして秋葉原に行きたいと思ったんだ？」

「クラリッサに頼まれていたしながあってな、それを探したいんだ」

「ふぅん、何を探してるんだ？」

「これだ」

「どれどれ……　ぶっ！！」

「ど、どうし「り、鈴！お前は見るなというか、見ない方が良い！！」何よそれ……」

どうやらクラリッサが探しているのは、ゲーム化何からしいラウラに差し出された紙に書かれているタイトルと、パッケージ画像を

見た同時に俺は思わず噴出してしまう。
鈴が横から覗き込もうとしたが、それを俺は必死でガードする。
不満そうな表情となる鈴だが、一瞬チシャ猫じみた表情となったのを俺は見逃してしまう。

「いただきぃ！」

「しまった！！！？」

「どれどれ、なにが書い……」

奪った紙を見て停止する。
まあ、書いてある内容がないようだからなぁ。

簡単に、尚且つ、オブラートに包んで言ってしまえば【十八歳未満お断りの腐な乙女だけがするゲーム】とでも言おうか。
鈴の顔は一瞬で真っ赤になっており、紙を持つ手もプルプルと震えている。

「ラウラぁ……！」

「な、なんだ？」

「ちょっとこっちに来なさい！！」

「な、なにをするのだ！？　だ、旦那様！た、助けて！！」

停止していた顔から一転、憤怒の表情となった鈴は、最寄の公園へとラウラを連れ込んでいく。

鈴のあまりの怒りっぷりに圧倒されているらしいラウラは、俺に助けて求めて来るんだが、俺はそれに向かって手を合わせると彼女たちを見送るのだった。

まあ、それから。

『そこに正座なさい！！』

『だ、だが下は地面だぞ！？』

『芝生でしょうが！！！』

なんてやり取りと、ガミガミとした説教の声が聞こえてきたからな、これは長くなりそうだ。

そう思った俺は、近くのコンビニに入って二人ブンの飲み物とか買っておいた方が良いかね、なんて思いながら反対側の道路にあるコンビニへと足を向ける。

「あれ？　五反田じゃんどったの？　こんなとこで」

「ん、お前、御手洗じゃないか、久しぶりだな」

コンビニへと向けて歩き出そうとした俺に声を掛けてきたのは、中学のころ同級生であった【御手洗　和瑞】だった。

名前で分ると思うが……　こいつも一夏と同じくＴＳしている。原作での五反田　弾の男友達が俺を除いて全てＴＳしているようなのだ、なので原作での名前持ちの男が俺一人と言う形になってしまっているのだった。

まあそれは兎も角彼女は、普通、という言葉を体現しているような女子である。

日々を平穏無事に過ごせれば何も問題ないし、普通のサラリーマンの男性に貰ってもらえたら満足、と言う考えの持ち主でもある。

「うん、久しぶりだね、でもさ、鈴が公園で説教してるあの外人の女の子って知り合い？」

「おう、今日はここに買い物に来たんだけどな、ちょいとあっちの外人の女の子、ラウラって言うんだけどな、彼女がとんでもない物を欲しがっていたから、それで鈴が怒っちまったって所だな」

「ふぅ～ん、久しぶりに会ったからさ、鈴にも挨拶をとも思ったけど、ありゃ長くなりそうだね」

「だな」

俺と御手洗の視線の先ではやむことなく説教を続けている鈴の姿に、しょぼーんとしているラウラの姿。

とてもではないがすぐには解放されないだろう。

「でも、一夏は元気にしてる？」

「おう、今日は家に帰ってるはずだから、電話か何かしてみたらどうだ？」

「ま、それは考えとくね、あっと、いけない！彼氏との待ち合わせ時間だ！じゃね！五反田！」

「おうじゃあな、御手洗」

そんなやり取りの後、去っていく御手洗を見送って俺は、改めて飲み物などを購入する為にコンビニへと向かうのだった。

飲み物やらを買い終えた俺は、公園へと戻ってきたんだが。
そこにあった光景に驚きのあまりに思考停止してしまう。

『ラウラちゃーん！次こっちに向けてポーズを！！』

「むっ、こうか？」

『そうそう！もっとポーズを決めてー！！』

「なにこの状況？」

滑り台の上をお立ち台に見立てているように、オタクっぽい男女の要望に応えてポーズを決めているラウラが居たからだ。
口が開いたまま停止してしまった俺は悪くない。

呆然とこの状況を見ていたら、疲れ切った表情をした鈴が近づいてくる。

「弾、やっと来てくれたわね……」

「この状況はなんぞ？」

「まあ、ね、説教が終わった位にラウラの格好が珍しいから、写真を撮らせて欲しいっていう男女が現れてから」

「いつの間にか増えていたって所、か？」

「ええ……」

俺は近付いてきた鈴にコーラを渡して、それを鈴は飲みながら説明してきていたんだが、人は増えるどころか逆に増えてきており軽くアイドルの舞台ともなっていっている状況だ。

まあ、それから暫くして満足したらしい人々はラウラに礼を言って解散、ラウラもちょっと満足そうにしていたりする。

その後のこと？　夕方になっていたからすぐに学園に帰ったけどなにか？

でも俺は気が付いていなかった。
冒頭の部分に名前が出ていなかった人々が居ることに。

「うぅ……　良いもん良いもん、僕なんか……　僕なんか……」

「ま、まあまあ、シャルロットさん」

「っていうかさ！僕がラウラの着ていた服を着るべきじゃないのかな！？中の人的に！」

「え、ええと……」

「それに僕が邪気眼的な喋りで、あのドレスを着たら本当に完璧で完全な存在だよ！！うん！中の人的にね！」

「ちょ、それ以上は危険ですわ！！シャルロットさん！！」

「セシリアは良いよ、上の話で専用の番外編を書いて貰ってるし！僕だけだよ！クローズアップされた話がないのは！？」

「えっと……」

「それとも常に、フッ……　貴方が私のところに来るのは前世から

の運命……　創世の神により定められたものなのよ……　とかキャラ作り始めた方が良いかなぁ……」

「それだけはお止めになられた方が……」

なんて部屋で言っている二人組みが居たことなど、俺は知る由もなかった。

再び番外！！　そのに追加！！（後書き）

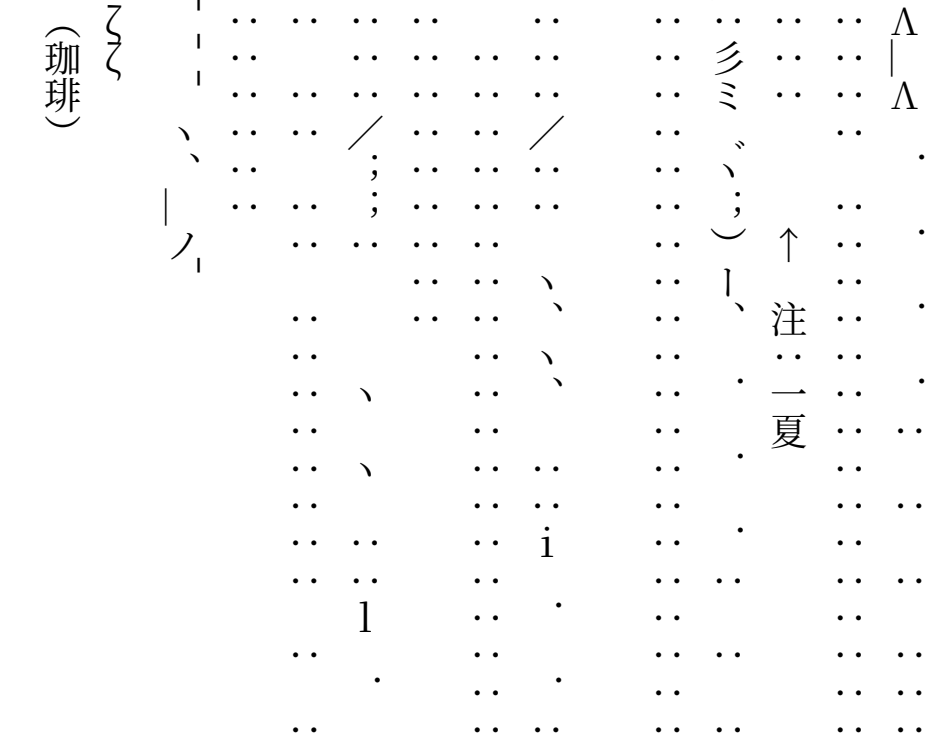
因みに一夏と鈴もゴンさんのお店のことは知ってます。

……　いずれ、シャルロットの邪気眼姿が登場する、かもしれない。

第３６話　ここで一夏の強化フラグを回収か……　あ、ついでに箒の強化フラグも

この前後編でバッキバキに折れていた一夏の強化フラグを修復、回収します。
あとがきに画像が一枚あり、作者の中での一夏はこんな感じで脳内再生されております。

第３６話　ここで一夏の強化フラグを回収か……　あ、ついでに箒の強化フラグも



それは夏休みも後一週間と数日で終わってしまう、ある日の朝食においての席上。

いきなり一夏は冒頭の感じで何かに悩んでいる様子だった。

その上にいつもはしっかりと食べているはずなのに、彼女の前にはコーヒー一杯が置かれているだけなのも気になる。

「一夏の奴はどったの？」

「いや、それがな……」

一夏を苦笑いとも、どうともいえない複雑な表情で見ていた箒に俺は問いかけるのだが、彼女は複雑な表情から呆れとも苦笑いとも取れるような表情へと変化していく。

それから箒から説明されたことをダイジェストで言えば。

一夏、剣の勘を大体取り戻しつつあるが壁に当たって伸び悩み始めている。どうしても強くなれないことに強いジレンマを感じている。そして箒の制止を振り切ってやけ食いという暴挙に出る。体重○?増加　↑今ここ。

「まあ、あまりキツイ言葉はかけてやらないで欲しい、本気で一夏は落ち込んでいるからな」

「……　フム」

まあ、なんと言うか、男と女の違いがここでも現れた形なんだな。

原作一夏が伸び代で悩んでいるとかの描写があったかどうかは分からんが、とにかく訓練の内容をスポンジが水を吸う如く吸収して行った筈だ。

とりあえずは一夏を元に戻さないことには話しにならんか。

「一夏」

「ん……　なに？」

「気にするな体重が〇？増えた所で俺の肩関節から凄まじい痛みがあああぁぁぁ！！！」

「ハァ……」

な、何故だ！？　俺は一夏が太っても気にしないと言おうと思ったら、ハイライトの消えた瞳になった彼女からサブミッションを掛けられたぁ！

サブミッションを掛けられている横で、完全に呆れた様子で溜息をついている箒が印象的だったな。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３６話　ここで一夏の強化フラグを回収か……　あ、ついでに箒の強化フラグも回収しておくか……　また前後編みたいだな～

そんでもって次の日、俺達の姿はＩＳ学園から再び消えていた。

今現在どこに居るのか、それは京都のとある山奥の既に人が来なくなってうち捨てられた寺の境内にいた。

そしてここには気持ち良さそうに道着姿で気持ち良さそうに眠っている箒と一夏、武蔵坊　弁慶風の格好となった俺と千冬さんに山田先生の三人がいた。

「ああ、ああ……　久しぶりの、久しぶりの出番ですぅ～！！！」

「あの、千冬さん……　山田先生はどうしたんすかね？」

「そっとしておいてやってくれ……」

「はぁ……　分りやした」

因みに千冬さん達の仕事は超高速で片付けてきたらしいが、明らかに山田先生の方に負担が行っていそうだな、何しろ山田先生が真っ白になりながら感激の涙を流していると言う、ちょっと不気味な雰囲気になってるし。

まあ、それは兎も角として二人に仕込んだ薬もそろそろ覚める頃か。

「ぅ……　ん？」

「こ、ここ……　は？」

上から順に一箒と一夏だ。

まあ、とりあえずは今現在の説明をしなくてはならんか。

「グッドモーニングだお二人さん！ここは京都の山奥にあるうち捨てられた寺の境内だ！」

「へ？」

「は？」

未だに状況が飲み込めない二人、それはそうだろう。

昨夜は二人とも部屋にてパジャマで就寝していたはずなのに、起きたら山の中でしかも道着姿、頭の回転が追いついてきた彼女たちの顔が一瞬で真っ赤に染まる。

あ、ヤバイと思った瞬間に千冬さんが前に出てきた。

「安心しろ二人とも、部屋から連れ出して着替えさせたのは私と山田君だ」

「え、えっとそれなら」

「大丈夫ですが……　ここは一体どこなんです？」

「ここは京都の鞍馬山です、弾くんからお二人特に織斑さんが悩んでいるとお聞きしたので、織斑先生や弾くん達と一緒にお二人に個人的に鍛錬をしようということになったんです」

「え、えっと、それがどうして鞍馬山になったんですか？」

「故事にあやかろうという結論に三人で達したのでな、連れて来た

のさ」

「義経と天狗の修行伝説、という訳ですか……　千冬さん」

「そうだ、篠ノ之」

二人は近くに落ちていた竹刀を取りながら、俺達の説明を聞いている。

まあ、俺達が彼女たち二人をここに連れてきたのは山田先生の言った通りだな。

特に剣術の修行をする際の故事にあやかるにはぴったりの場所だしな、それに俺も一夏達と出会う前にはたまに来ていた事もあるし。

「それにここは霊山でもある、集中し修行を行うには最適な環境だし、それにここは人も来ないような山奥だ」

「覚悟を決めておけ、二人とも、私たち三人で剣術の修行と遠距離での戦闘時の修行を一週間未満で叩き込むつもりだ」

「なので、これから私が遠距離を指導して、織斑先生は剣術を指南しますので、急ですが大丈夫ですか？」

「ええ、それは大丈夫ですけど……」

「弾は何を教えてくれるの？」

ふっ、俺の表情は不敵に歪んでいることだろう。
彼女たちの表情も嫌な予感を感じているようだしな、フフフフフフフフフフ……

「俺はお前達に実戦形式での訓練を行うさ、特に一夏はスランプという名の壁をぶち壊さなきゃならんからなぁ、覚悟を決めろよ？」

「え、えっと……」

「それにだ一夏、お前さんのためでもある」

「どうして？」

「俺と同じくお前の立場も微妙だからだ、これから俺の目の届かない所でお前が危険な目に合うかもしれない」

「……　弾……」

「だからだ、せめて自衛できる為の力は身につけてもらう！」

「……　そこまで、私の事を考えてくれてたんだ……　弾……　うん、分ったよ！」

これは俺の勘でもあった、一夏達は近い内に必ず強敵とぶつかる。
だからこそ、強敵に遭遇した時に自分が逃げられる程度の力は身につけて欲しい、そんな結論に千冬さんたちと達したんだ。

え？　他の連中はどうだって？　いや、シャルロットもセシリアもラウラも鈴も、この二人よりも強いだろ、だから別にいらないと思ってな。

それに今日は、この四人でラウラの希望にて幕張で開催されている催し物に行くとか言っていたから、元々ＩＳ学園にいなかったし。

まあ、俺の言葉を聞いていた一夏と箒の目には、やる気が満ち溢れていき、どうやら覚悟は決まったらしいな。

「一夏がやる気を出して私がやる気なしと言うわけにも行くまい！千冬さんの修行も山田先生の修行も見事達成してみせる！」

「うん！そうだよ！弾の実戦訓練もノルマを達成して見せるよ！熊でもなんでも掛かって来いって感じ「では！レッツ・トライ！！」え？」

「って、本物の熊！？」

うむ、凄いやる気だ二人とも！俺はそんな二人のやる気を尊重して、俺の隣にいつの間にか居る熊【ぷー吉】を指を鳴らしてけしかける。

千冬さんと山田先生が呆然としているのが印象的だな。

数十秒後、境内の石畳の上にはボロ雑巾みたいになって転がっている一夏と箒、それと。

「プッ！！」

地面に唾を吐き捨てて去っていくぷー吉の姿があった。

ゴメンね、猛者と戦うことが生きがいなお前につまらない戦いをさせて。

「全く、竹刀で熊と真正面からやり合おうとする奴があるか、この猪突猛進娘共」

「いえ弾くん、クロスカウンターとバックドロップにシャイニングウィザードを熊が放っておいて、それは無茶かと……」

「あの熊……　戦ってみたら面白い戦いが出来そうだな……」

呆れている俺と、一夏達の介抱をしながら俺に常識的なことを言っている山田先生、ぷー吉が去っていった方を獰猛な笑みを浮かべてみている千冬さん。

それから気が付いた一夏と箒が俺に猛然と迫ってくる。

「っていうか！いきなり熊と戦って勝てるわけないじゃない！！」

「そうだ！というか！あれは熊ではないだろう！！？　どうして熊がプロレス技を使えるんだ！？」

「気にするな、俺は気にしない」

「私達が気にするよ！！！」

「全くだ！！」

そういってくるんだが、まあ、とりあえずは時間ももったいないし。

修行を開始しないとな、それを千冬さんにアイコンタクトで送れば、千冬さんも頷きを返してくれる。

それから千冬さんは二人の肩を掴むと、二人は嫌な予感を感じている様子だった。

「では、修行を開始しようじゃないか二人とも、この先に滝があるからな、そこで私と共に素振り八万回だ！」

「え゛！ね、姉さ「今は師匠と呼べ！この愚妹が！！」え、ええ～！！！！」

「し、師匠、早速ですか！？」

「そしてその際に私が模擬弾を撃ち込みますので、それも避けてくださいね！」

「「い、イヤアアァァァァ！！！」」

真性のサディストが浮かべる笑みを浮かべた千冬さんと、ニコニコとしているいつも通りの山田先生によって、絶望的な悲鳴を上げながら連れて行かれる二人、

俺の出番は先だしな、とりあえずテントとか、山篭りの際に必要なものを準備しておくか。

なんて考えながら茂みの中に入っていき、周囲の草を刈り取る作

業を開始するのだった。

そんでもってテントを三つ張れるスペースを確保して、近くの川で捕って来た魚を下拵えとかしているうちに日はとっぷりと暮れてしまう。

『イヤアァァァ！！』

『はいはい、避けてくださいね～！』

『ちょ、山田先生、それはシャレなってませんよ！？』

『ふっ！どうした脇の締りが甘くなっているぞ！このバカモノ共！』

『ね、姉さ！あいったぁ！！！』

『師匠と呼べと言っているだろうが！』

「張り切ってるねぇ……」

二人の悲鳴と嬉しそうな声を上げる千冬さんに、山田先生はいつも通りの惚けた声を上げたと同時にパラパラという何かを発射する音も聞こえる。

多分、ガスガンか何かかね？　まあ、火を起こしてその周囲に串に刺した魚と竹筒に水と共に入れた米を並べて、夕食の準備を進めていた。

「うーむ……　一夏にはなんとしても強くなってもらわないとなぁ」

「どうしてかな？」って何時の間に来やがった貴様？」

「じゃじゃあーん！久しぶりだねだっくん！貴方の奥さんの束さんだよ！！」

「帰れ」

「ひどぉーいぃ！！箒ちゃんにはあんなに優しいのに、どうして束さんには冷たいのー！？」

う、うざいのが現れやがった……！これを避けたかったから、極秘裏にＩＳ学園を出てきたと言うのに！！

どこで察知された！？　まあ、良いか……　こいつが去った後に

近づけなくする結界を張れば問題ないか。

とりあえずは。

「その俺の分の米を食ってんじゃねぇ！！って何時の間に俺の岩魚まで！？」

「うんうん、だっくんの料理は美味しいねぇ！！これはちーちゃんといっちゃんたちのかぁ……」

「それには手を出すんじゃねぇよ！」

「しないよぉ」

「あん？」

炊き上がっていた米と、ちょうど良い具合に焼けていた岩魚が食われてしまったからな、これらの敵を討たないといかんか！？

だが、一夏達の分には意外や意外、手を出さないと真顔で言い出す天災。

コイツがこんな顔をするって珍しいな。

「ちーちゃんって、ああ見えて食べ物に関してだけはすごーく「何

の用だ？　束」ち、ちち、ちちちちちちーちゃん？　ど、どうして……　いっちゃんと箒ちゃんの修行をしてたはずじゃ？」

「簡単なことだ、人のものを盗りたがる泥棒ウサギの気配を感じたのでな、山田君に任せているだけだ」

「え、えとちーちゃん？　束さんの頭蓋骨がギリギリと言うかミシミシというか、危険な音を発してるんですけど！？」

「そうかそうか、ではもっと素敵な音を奏でてやろう」

「ち、ちーちゃん！？　お慈悲を！束さんにお慈悲をぉ！！」

「ククククッ、お前はどんな声で鳴いてくれるんだろうなぁ？」

「だ、だっくん！奥さんのピンチだよ！旦那様として助けいだだだだだぁぁぁぁぁぁ！！！」

「誰が、誰の妻で旦那だと？」

千冬さんの過去の何かをバラそうとした天災の後ろには、夜叉がいた。

というか、つい二秒前まで二ｋｍ位先にある滝から千冬さんの声が聞こえてたはずなんだけど……　二ｋｍを二秒で走破したと、いうのか！？

その後ろから状況が飲み込めていない山田先生と、疲労でげっそりとした一夏と箒が現れるんだが、千冬さんは天災を近くの茂みに、

アイアンクローを掛けたまま連れて行く。

「えっと、弾くん、篠ノ之博士はどうしてここにいらしてたんでしょうか」

「さぁ？　とりあえず晩飯にしましょう、準備はもう出来てまっせ」

「わぁ！美味しそうですね、では、いただきます！」

「「はぁはぁはぁはぁはぁ……」」

疑問顔の山田先生にそう答えると、予め洗っておいてあった大きな葉っぱの上に岩魚を乗せ、炊き上がって美味そうな湯気を上げている竹筒の米を三人の前に差し出す。

だが、一夏と箒は答える余裕などないのか、息を荒くしたままでいた。

まあ、それからちょっとして食い始め『アッ――――――――！！』なんていう、天才が上げたと思われる断末魔の悲鳴が聞こえなくなった頃くらいに千冬さんも帰ってきて、飯を食い始めるのだった。

そんなこんなで、修行一日目は過ぎていくのだった。

一夏達が本当に強くなれるのか、それは彼女たちに掛かっているけどな。

第３６話　ここで一夏の強化フラグを回収か……　あ、ついでに箒の強化フラグも

熊のぷー吉くんの説明と、天災がどうなるのかは、次回に！
あと、キャラクターなんとか機というので、一夏の画像を作ってみました。
良ければ見てくださいな。

＞ｉ３１６７１―４０１６＜

まだ慣れてないので、標準的なものですが、慣れたらもうちょい冒険した画像を作ってみようかな。
と思ってます。

第３７話　修行編二日目！え、前後編じゃなかったのかって？　緊急変更で三話

まだ初日目の２０時近い時間帯、飯も食い終わった俺達は今にも倒れて寝てしまいそうな一夏と箒を、千冬さんと真耶が近場の川で体を洗わせると、一夏と箒の二人はテントに入って泥のように眠っていた。

その後に無論のこと俺も水浴びをしているんだが、現在進行形の状況で気に掛かることがある。

（だっくんの水浴び艶姿、いただきまぁ～す♪）

「誰も、いないはずなんだけど……　なぁ？」

服を脱いで全裸になった後くらいから常に全身を執拗に嘗め回すような、爬虫類のような感じの視線の持ち主にガン見されている不快な感覚を感じたのだ。

……　天災か？　だけどこの近くには奴の気配（実際に束は弾のすぐ近くにて潜水していますが、横島なみの隠行術を編み出しているだけ）も電子機器の気配も感じない……　どういうことなんだよ？

なんて考えている内に水浴びを終えた俺は、焚き火の近くで談笑

していた二人の元に戻る。

「お帰りなさい、弾くん、はい、お茶ですよ」

「どうもっす」

「どうした？　何か気になることでもあったのか？」

焚き火にかけていた薬缶で淹れてくれたんだろう、温かい緑茶を渡してくれる真耶に俺の表情から、何かを感じたらしい千冬さんが疑問を浮かべた表情で聞いてくる。

「いや、なんていうか……　二人はずっとここにいたんですよね？」

「はい、私も千冬さんも、ここに居ましたよ？」

「ああ、真耶の言う通りだ、私達はここにいたし、一夏達も眠っているからな……　まさかとは思うが、覗かれたのか？」

俺が質問した内容を疑問に感じながら答えてくれる真耶に千冬さんだが、千冬さんは何かに思い当たったらしく聞いてくる。

それに俺は頷くと、千冬さんと真耶の方を見て口を開く。

「……　多分だとは思うんすけど……　視線は感じても気配は何も感じなかったんですよねぇ」

「ええっ！？　こ、こんな山奥でですか！？」

「どんな視線を感じた？」

「俺の体を執拗に嘗め回すような感じの、爬虫類みたいな視線ですね」

「……」

俺の答えに驚く真耶に怒りと言う感情を浮かべながら問いかけてくる千冬さん、俺の中の答えは男を覗いても意味がないから分らない言う感じなのだが、千冬さんは犯人が分ったのかね。

なんか、無茶苦茶怒ってないか？

「犯人の心当たりがあるんすか？」

「いや、まだだがな……　ちょっと行って来るから真耶」

「は、はい？」

「弾と暫くここに居ると良い」

「わ、分りました！」

「では行って来る」

それから千冬さんは一本の真剣を取り出すと、俺がさっきまで水浴びしていた場所へと向かっていく。

俺達はすぐに談笑をしているんだが、真耶が俺の肩に頭を置いて身を寄せてきた時に、それは聞こえた。

『束！どこに居る！出てこないならば弾の艶姿の写真を渡さないがどうだ？』

『な！ナンダッテー！！それは本当なのちーちゃん！？』

『嘘だ、写真は持っているがな、お前には死んでも渡さんさ』

『ひ、卑怯だちーちゃん！だっくんの勘が鋭すぎるから撮影できなくて、私は一枚も写真を持ってないの『黙れ』ひぅ！！』

『そんな理由で弾の水浴びを覗いていたと言うのか、そうかそうか……』

『え、えと……　ちーちゃん？』

『成敗いいいいい！！』

『ヒィィィ！！！ちーちゃん！何でそんなに怒ってるのぉー！！！』

全くもって聞きたくなかった会話の後に聞こえてくる天災の悲鳴と、千冬さんの暴走エヴァ初号機もかくやといった叫び声。

にしても、千冬さんが言っていた写真の出所って……　まさか、ムッツリ商会（ちーちゃんとやまやは大のお得意さんだった）……

油断した！？　あいつが純粋な男の写真など撮らないと思っていたから油断した！！

そんな俺を慰めるように真耶は俺を自分の豊満な胸に抱きしめてから、頭を撫でてくれていたりする。

……おっぱいの柔らかさ……　すぅんばらすぃ～でっす。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３７話　修行編二日目！え、前後編じゃなかったのかって？
緊急変更で三話構成となったみたいだな！以上～

え？　その後のことって？　普通に戻って来た千冬さんともちょこっと話した後は、普通に寝たよ？　もちろんテントは別だったけどネ。

心地よいまどろみと眠気の中で、俺は自分が夢を見ているのを自覚していた。

目の前には前世の俺に友人達の姿、どうして今更とか思ってたら、前世の俺を含めた全員が唐突にブレイクダンスを踊り始める。

……え？

『俺達はいくんや！あの空の向こう側へ！！！』

『ピキ―ン！ピキーン！電波受信中電波受信中！！！』

『キュピーンキュピーン！悟り電波を受信！我らは今こそ悟る！この電波こそが最上のものだと！！』

『エロイガエッサイムエロイガブッサイク！』

『何がバルスや！ムスカなんておらんかったんや！！』

……なにこれ？

俺の記憶にはこんな光景……　ち、ちちち、超巨大な黒歴史だだだだだだだだだだだだ！！！！

こ、こここここここれ以上再生されたら、精神が死んでしまう！？

そこまで考えが至ったと同時に、俺は飛び起きていた。

「へ、変な夢見た……　というか、あ、あれは……　欝だ、首吊りたい……」

自分の記憶の奥深くに厳重に封印していた黒歴史の記憶は、何故か簡単に封を解かれてしまったようだ。

首を吊っても死ねない今の体が恨めしい。

何しろ俺自身が蘇生魔法関連を重ねがけているからな、首を吊って死んでもすぐに生き返ってしまうわけだ。
前世で死んだ恐怖を感じないように尚且つ、死なないようにした結果がこれだよ!?

もう一度、寝よう……　でも、どうして前世の俺の友人達って全員がハ○ヒとク○ルにスキマババア達を足して二乗したような凄まじい連中だけだったんだろうか？　常識人って俺くらいだったし（実際に前世の弾は、性的な意味で変態ではあったものの、一緒に行動していた友達グループの中で唯一の【一般常識をもった人間】だったと言う設定あり）な。

そんでもって午前三時半になった時に俺の体は自動的に目覚めると、テントの外へと出て行く。

「おはようごぜぇます～」

「起きたか、弾」

「おはようございます、弾くん、はいコーヒーです」

「どもっす、真耶たん」

「え、ええと、たんはいらないんですけど……」

起きた時には既に彼女達は起きていたらしい。
俺よりもおそく彼女達は寝たと思うんだけど、やっぱ教師だからかね。

向こう側でも鉄人やらに鍛えられたみたいだし。

そんなことを考えながら、真耶が渡してきたコーヒーを喉に流し込む。
程よい温かさのコーヒーが舌の上に爽やかな苦味を残して、喉から胃へと流れ込んでいく。

朝はこうでなくちゃな、なんて考えていたら、千冬さんが時計をチラチラと確認しているのが見える。

「あのバカモノ共が……」

「まあまあ、織斑先生、織斑さんも篠ノ之さんもお疲れに「甘いぞ」あぅぅ」

「……　もう起きても良さそうなんですがな……」

何故千冬さんが時計を確認していたのかと言えば、一夏と箒の二人が起きてこないのだよ。

彼女たちにも今日の鍛錬開始時刻を伝えて、携帯のアラーム設定を強制的に弄らせたし、既にアラームが全力全壊で一夏と箒のテントから鳴り響いているから、起きて来ないとおかしいんだけど。

『うるさぃなぁ……』

『もう少しだけ、もう少しだけ……　寝かせてくれ……』

……　あ、二つ同時にアラームが消えて、二人の気持ち良さそうな寝息が再び聞こえてきた。

……　再び、あ、千冬さんの額に青筋浮かんでいるな。

危険なサインだな……　と思ったら既に一夏と箒のテントの中に入っているようだった。

『起きんか！このバカモノ共！！！』

『ひゃわぁあぁあああ！！！』

『ち、千冬さん！？　あ、後三十分近くはあるんです！せめてギリギリまで『やかましい！！』いった！！』

ちょいと驚いた。

一夏がギリギリまで云々言うのならば、まだ分るんだけど箒がまさかこんな事を言うなんてな。

そんなに昨日の鍛錬は辛かったのかね？　なんて考えてしまうのだった。

「うぅ……　朝からひどい目にあったよぉ……」

「さっさと自分で起きんからだ、一夏」

「あうぅぅ……」

なんて会話をしながら千冬さんによって猫みたいな掴み方で、一夏と箒は運び出されてくる。

二人とも目の幅一杯の涙を流していることから、鍛錬の始まりに絶望しているようだ。

「んじゃ、今日の予定はどんな感じなんでしょかね？　千冬さん」

「ふむ……　では、これから六時までの予定は、三十分で二十ｋｍを走破、それから十分ほど休憩を挟んでから、一時間ほどを素振りに当てた後に三十分を実践的な訓練に当てる」

「らじゃっす、んじゃ六時まではそれで行きましょう、それと六時までは俺も参加するとしようかね」

「じゃあ、私は朝食の用意をしておきますね」

「うむ、では頼む」

「よろしく、真耶」

「はい！」

いきなり怒涛と言える厳しい鍛錬を聞いた一夏と箒の顔は、絶句と言う感情で固まってしまう。

そりゃそうだと言う所だろう、何しろこれから三十分程度で二十キロメートルを走破した上に素振りに実戦訓練だ、それも鬼教官と化した千冬さんの指導の下で、である。

食事の準備に意気込む真耶に言葉を掛けると、彼女はとても嬉しそうに返事を返してくれた。

「では、鍛錬を開始するとしよう！一夏！箒！！」

「は、はい！」

「はい！」

「行くぞ！私に続けぇ！！」

「ってはやっ！！」

「そんな速度で二十ｋｍも走るつもりですか！？」

凄まじい迫力を持って言い放った千冬さんは、トンでもない砂埃を巻き上げながら走り出す。

「んじゃ、走るとするかぃ！行くぜ！！」

「ひゃぁ！！」

「って、どこを触っているか！！」

俺は驚いた様子の一夏と箒の尻を叩くと同時に走り出すんだが、背後からは彼女たちの驚いたような声と怒った様な声が聞こえると同時に、走ってくる音が聞こえてくる。
それから俺達は先頭を走る千冬さん、次に俺、最後に一夏と箒による鬼ごっこに近い走り込みを行うのだった。

まあ、二ｋｍを過ぎようとも一夏達のペースが落ちることはなかった。
え、どうしてかって？　それはね。

「ガァァァァァ――――――！！！」

「って！き、昨日の熊！？」

「だ、弾の差し金か！？」

というか、ペースを落としたくても落とせない状況に持ってけば良いんだよ！
なんていうモットーの元にぷー吉に一夏達を追いかけるように先程指示を出してたのさ。

まあ、千冬さんがぷー吉を見たと同時に獰猛な笑みを浮かべていないんだが、先導を怠らないのは流石だし、彼女のペースに一切の乱れもないのも流石だねぇ。
既に千冬さんと並走している（身体強化の類は未使用）俺が言え

るわけじゃないけどネ！

それから二十キロを走破した俺達だが、やっぱり。

「ぜぇぜぇ……　は、はぁはぁ……」

「は、は、は、はぁはぁ……」

「情けないぞ、たかが二十キロを全力で走ったくらいで何を根を上げている？」

（（いや！普通の人間は根を上げますから！！？））

地面に倒れこんでいる一夏と箒。やっぱ一夏と箒は疲れ切っちゃ

うよねぇ？　汗を大量にかいて、乱れた道着から見えている下着……　あ、ちょっとムラムラしてきてぇ！！

「弾、何に対して欲情している？」

「な、何でもないっすよ？」

一夏達を視界に入れないためか、俺の顔面にアイアンクローをかけると、千冬さんは手に力をこめてくる。

俺の顔面から危険な音が鳴るのを自覚しつつも、必死で彼女の腕にタップしてギブアップを申請していた。

だが、それはあえなく却下されて、俺はさらに力を込められると、意識がなくなりそうでいてなくなりそうじゃないギリギリのラインで痛みを味あわされるのだった。

「まあ、この存在そのものがスケベで変態といえるバカは放って置くとして、お前達」

「うぅ……　なに？」

「は、はい……」

「着崩れた道着を着なおせ」

「へ……　っ！？」

千冬さんのアイアンクローから開放された俺は、地面に倒れこむんだが、千冬さんは一夏達に対して俺にとって御無体な言葉をいっていた。

ああ！ああ！あああああああああああああああああああああ！！！！！

千冬さんの言葉を聞いた一夏達が急いで道義を着直している気配を感じるぅ！！それに俺の背中に感じる彼女たちの、背中に突き刺さる視線視線視線！

「まあ、それは置いておくとしよう」

「う、うん」

「はい、わ、分りました」

それから始まる素振りと言う名の鬼訓練。

響き渡る一夏と箒の悲鳴、そして続いて轟く俺とぷー吉の怒号。

これらが響き渡って、かなり賑やかになるのだった。

「うふふふ、皆さん張り切ってますね、美味しいご飯を作らないと！」

なんて言っているやまやがテントを張った拠点に居たんだけど、まあ、誰も気がつくことはなかったりする。

まあ、それから実戦訓練に入った時には、俺とぷー吉に任せてもらうことになった。

なので、俺とぷー吉は近接時における格闘術を指導することに決めた。

「それじゃあ、これからは俺と熊のぷー吉と共にＣＱＣを教えることにする！！」

「がぅ！」

「待て、弾」

「弾、冗談だけは止めてもらえないかな？」

信じられない、そう言いたげな様子で言ってくる一夏と箒だが、まあ無理もない。

だけど、俺にとってはぷー吉はな。

「まあ、近接格闘戦闘術の師匠はぷー吉だからな、冗談じゃないぞ」

「「ゑ？」」

そう！俺は剣術とかについては神様からのチートで技術を貰っていたんだが、どうしても体術に関しては何も知識がない状態だったんだ。

前世じゃ柔道くらいは授業でやっていたから、それの知識があるくらいだったけど本格的な格闘術の技術はなかったわけだ。

そこで指導をしてくれたのが、祖父さんに頼まれたぷー吉だったのさ。

「ほぅ……　弾の師匠と言うわけか、道理で強いわけだ」

「え、えっと……」

「熊がどうして格闘術を会得しているんだ？」

その突っ込みは無意味だ箒！俺の爺自体がツッコミ所満載だからな！祖父さんの紹介で知り合ったぷー吉がまともなわけがないだろう！！

まあ、それは置いておいて、俺が箒を、ぷー吉が一夏を担当することになったんだが、一夏が不満そうと言うか泣きそうな表情で見ていたのが印象的だった。

「くっ！こんな角度で腕を取れるとは！！」

「甘いぞ箒！この程度、実戦でならばメカニックのカッパでもやってくるぞ！！」

「それはありえないだろう！？」

そんなこんなで、戦闘訓練は過ぎていき、俺達は朝食をとると一時間ほどの休憩の後に鍛錬を再開、俺はテントの見張り番に戻り千冬さんと真耶が一夏達の訓練を見ているのだった。

まあ、明日、明後日まではこんな調子だろうな。

なんて考えながら、俺は泳いでいる魚を網で採って、周辺になっている木の実やらきのこを採りながら考えているのだった。

第37話　修行編二日目！え、前後編じゃなかったのかって？　緊急変更で三話構成です。

因みに、前世の弾たちは、こんな感じで踊ってます。

|

＋　　／

｜／｜／｜、｜，

／＾＼ノ

彡三，ノ　｜（　　）｜

＋　　／＾＼ノ

＋　　｜　　．　　｜，／

、（　　｜＼　　｜　　三彡

＋　　｜＼　　｜　　｜　　｜

第３８話　一夏の本当の姿！参上！というか凶悪というかなんと言うか……

修行もいよいよ大詰めの六日目の夜だ！
え？　今までの話はどうしたって？　勿論のことすっとばすに決まっているじゃないか！グダグダになるのは目に見えているしな。
まあ、そんなことは置いておいてだ、ダイジェストで表すとこうなる。

三日目
前日までの疲れとかを根こそぎ取りながら、体の成長を促すクスリ（副作用は無いよ？　本当だよ？　ちょっとえっちぃ気分になるカモだけど……　だけど何も起きなかった、ちくせう…）を二人の食事に混入していたから、二人は元気一杯だった。
だからちょっときつめにメニューを更新、二人は前日以上にヘトヘトになりながらもクリア。

四日目
昨日何もお楽しみがなかったから、えっちぃ気分になる副作用の成分を増量したクスリを混入しようとしたら、千冬さんに阻止される。
そして、通常の薬の混入を言葉ではなく腕力によって指示される。

修行は今日も一夏達はクリア、このころから一夏に天然チート因子らしきモノが見え始める……　具体的には額に電流か何かが走ったように、見える！とか言ってぷー吉の攻撃を避けて、逆に反撃してたし。

その日の夜、一夏と箒が寝静まった後……　まやたんとちーちゃんが俺のテントに入ってきて……　ち、ちょ、まっ！アッ――――――――――！！

というまに一晩かけて一滴残らずじっくりと搾り取られました……

五日目

干からびて地面に倒れている俺と、肌がツヤツヤしている千冬さんと真耶たんの二人を見た一夏と箒の目に怒気という感情が宿る。

嫌な予感を感じながらも修行を開始、本日は箒にまでチート因子が見え始める。

……　まさか、落差二十メートルの滝の水を竹刀で【縦】に真っ二つにするとは、思わなかった。

ていうか、箒の奴は無意識で咸卦法を使ってないか？　箒の体から完全に融合した魔力と気を感じるんだけど……　どうしてぇ？

予備動作なんてなかったし。

まあ……　いいか。

そんでその日は俺も参加して一夏達と模擬戦をしたんだが、やっぱ強くなってるな。

俺が四割近くの力を出して、しかも竹刀に魔力を纏わせて強化しないと、竹刀が折られてた危険が大きかったし、っていうか、どう

して竹刀で大木を切れるようになったんだ！？（自分の所為だとは気が付いていません）俺も出来るけど！だけど、　千冬さんは非常に面白そうな顔をして、真耶はちょっとオロオロしてたのが印象的だ。

今日は……　何もせずにとっとと寝ようと思ったら、一夏と箒が入ってきて……　ちょ、二人とも、落ち着け、落ち着くんだぁ！！

また……　くわれた……

六日目

完全にミイラと化して地面に倒れている俺と、肌をツヤツヤにして嬉しそうな一夏に、今までの少女としての雰囲気から脱却し大人の色気を放ち始めた箒。

やられた、そう言いたげに悔しそうにしている千冬さんに真耶の二人、やれやれだぜ……　とでも言っている様に肩を竦めるぷー吉、これらの姿があり一見すればどういう状況なのかが分らない光景があった。

まあ、その日は午前中に普通に生身で訓練した後は、ＩＳに関する特訓となった。

俺しか相手できる人間はいないからな、必然的に俺が相手をしていたんだが、やっぱ生身が強くなると格段に動きが良くなるなし変わるな。

何しろ箒が絢爛舞踏を発動させて、一夏と自分にエネルギーを供給しながら闘えるようになったんだからな、それに一夏の剣術の冴えも見違えるようになっていて、俺もヤバイ局面が何回かあった。

但し、一夏が何かに苛立っている様子を見せることがあるのが、何となく気になったことではあった。

以上がダイジェストだ！

とりあえずは、一夏は太った分の減量と強さの限界点を一つ越えたし、箒もかねてからの懸案事項だった絢爛舞踏の使用も可能になった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第３８話　一夏の本当の姿！参上！というか凶悪というかなんと言うか……～

今は六日目の特訓が終わって晩飯も食い終わった後、焚き火を全員で囲ってのんびりとしている所だった。
水浴びを全員でしていたんだが、どうして俺は皆が水浴びをしている間、ずっと簀巻きにされていたんだろうか？
前科があるからってひどい！！ひどすぎる！天災を、俺を覗くであろう天災を探して天誅を加えたかったのにぃ！！
なんて考えている俺を無視して、一夏達はきゃっきゃっと焚き火を囲んでガールズトークに華を咲かせていた。

「だが、一夏も箒も強くなったものだ」

「はい、はっきりと自覚できます、今までにないくらいに自分の体に力が漲っているのを感じますし」

「私もだよ！やっと壁を突破できた感じの達成感を感じれたから、私にとっても満足の行く結果だよ！」

「そうですね、織斑さんも篠ノ之さんも随分と上達しました、学園から出てくる時と比べると段違いですよ」

ちょっと物騒なガールズトークではあったがな。
どこの世界に自分達の剣の腕とか、力とか、そんなことを会話する少女がいるんだろうか？

まあ焚き火が途切れないように枝をパキリと折って投げ入れていたんだが、時々一夏の表情に翳が差す事があるのだが、既に全員が気が付いているらしい。

やっぱ昼間に感じた白式を纏った一夏の動き方の違和感かねぇ。

「一夏」

「な、なに？　弾」

「今日の昼間に戦ったときにお前さん、何かに苛立ったようなことがあったな、何でだ？」

「え、えっと気が、付いてたの？」

「当たり前だ、誰の事だと思ってる？　他の人間なら兎も角として、お前の様子くらい目を見れば分る」

「えぁ……　あぅぅ……」

「「「……」」」

一夏に有無を言わさないように問いかけて彼女の言葉に答えたんだけど、一夏の顔はすぐにボン！という音がなりそうな勢いで赤くなって、千冬さんたちの表情は不満そうな色が浮かび上がる。

あ、冷静に考えたら夫が妻に言うような台詞じゃないか？　……

……　とりあえず、気にしないことにしよう。

「あの苛立ちの原因は、白式がお前についてこなくなった、大方そんな所だろう？」

「あ、う、うん……　時々だけど、私が動こうと思ったら白式のほうが遅れて動くことがあって、それでちょっと……」

「ふむ……　反応が遅れたといっている原因は、一夏が強くなったのが原因ということか？　弾」

「そんなところというか、それしか考えられないでしょう、急に一夏が強くなった上に、反応も良くなってしまいましたから、白式の方が戸惑っている状態じゃないっすかね」

「このままで行くならば、学園に戻り次第、再調整が必要というわけか？」

「普通なら、そうっすね」

「やはりな……」

やっぱり血を分けた妹のことが気になるのか、反応云々を聞いた千冬さんは真剣な表情をして俺に問いかけてくる。
それに俺は含みを持たせてから答えると、千冬さんは何かに思いついたようではあるが、ただ静かに顎に手を当てて頷いていた。

「私の紅椿は反応の遅れはなかったが、どういうことなんだ？」

「多分だが、あの天災はお前さんに持ってきた時には、反応速度については余裕を持たせていたんだろうさ」

「ああ、束のことだからな、箒の伸び白を計算して予め反応速度を設計していた可能性が高いだろう」

「そういうこと、というわけですか……」

「ああ間違いないだろう、それに奴が計算していないとは思えん」

「「「「それは確かに……」」」」

あの天災を見ていたら千冬さんの言葉には全員が万感の思いと共に頷いていた。
というか、あの阿呆というか以上とまでいえるくらいの天災が、妹大好きな天災が箒の事を間違えるはずはないだろうし。

どうしてか箒は無茶苦茶嫌そうだったがな。

まあ、その後は時間になったから寝よう、という話になったんだけどな、今日は誰も来なかったから助かった……

なんて思っていたら夜中に。

『今日は一対一でさせてもらいます！！』

『甘いぞ小娘共！今夜は再び私と真耶で楽しませてもらう！！』

『それはこっちの台詞だよ姉さん！今日は私も弾と一対一でしたいんだもん！！』

『私も忘れないで貰いたいですね！！』

なんていう叫び声やら、どっかんどっかんという爆発音が響いていたんだけど……　全力で無視して寝ることにした。

今出て行ったら、確実に巻き込まれる。

なんて考えていたらテントの外では。

『クスクスクス……　いっちゃんもちーちゃんも箒ちゃんもいない

今がちゃ～んす☆！だっくん、今夜は私が相手になるよあーんど！
束さんは今日こそ処〇喪〇『ほぅ』ヒィ！ど、どうしてちーちゃんたちがここに？』

『ねえ箒……　こんな所に泥棒が趣味な悪いウサギさんがいるよ？
ドウシヨウカ？』

『そうだな、トリアエズハ凹ッテオクトシヨウ……』

なんてやり取りが聞こえた後『アッ――――――――――――――――――！！！！！』という心地よく眠らせてくれる悲鳴も聞こえてきた。
まあ、関係ないな！

そんでもって次の日、明日は帰りに使うつもりだからな、今日が実質的に特訓が出来る日だと考えて良いだろう。

俺と千冬さんに真耶の前には、真剣な表情をしている一夏と箒がいる。

真剣な表情をしているのは当たり前だ、何せ今日は。

「今日の特訓は俺と戦ってもらう、全力で、だ」

「「……っ」」

そう、俺と全力一本勝負をするのだから。

既に完全に変わっている俺の雰囲気、剣気とも殺気ともいえる気迫を感じているのか、一夏と箒の二人は一度体を震わせると俺を真剣な表情で見つめてくる。

「私と真耶の二人でお前達がやられた後の介抱はする、弾も含めて重傷は負わないように戦え」

「了解です」

「は、はい！」

「わ、分りました、千冬さん」

真耶が心配そうに見つめながら千冬さんが言った言葉に、二人はより体を一度震わせる。
それはそうだった、彼女の言葉は重傷に至らない怪我であれば負う危険があるといっているようなものなのだから。
そんな千冬さんに彼女たちはドモリつつも勢いよく返事を返すと、千冬さんを満足そうに頷かせる。

「弾」

「はい」

「では、頼んだぞ」

「分りました」

そう言って真耶と一緒に離れて行く千冬さんを見送ると、俺は一瞬で蒼穹を展開、一夏と箒も白式と紅椿を展開を終わらせる。

「行くぞ、二人とも！！」

「ああ、どこからでも掛かって来い！弾！」

「うん！負けないよ！！」

俺はその言葉を言い終わるか終わらないかという内にドラグナーを展開、彼女達へと向かわせる。
それらから降り注ぐビームを彼女たちは避けたり雪片で無効化しつつ、戦いが始まった。

既に戦いの場は空中へと移り、俺達は激しい空中戦を行っていた。

「ハァ！！」

「起動が丸分りだ！箒！！」

「くっ！！両手で別々の位置に射撃だと！？」

箒の空裂と雨月の刀身から行われる遠距離攻撃をギリギリの位置で避けつつ、両手に展開しているファルシオンを左手で持っている

分は避けさせて、右手で持っている方で箒の回避先を先読みして当てていく。
だが、彼女も負けてはいない。
一発程度の直撃で抑えるように回避して、残りを展開装甲にて無力化していく、今日も絢爛舞踏の展開は順調のようであり、金色の粒子が装甲の隙間から出ている。

「やぁぁぁあああ！！！」

「甘い！」

「っくぁ！！」

俺が箒に集中していると判断したのだろう、背後から一夏が雪片を展開して突っ込んでくる。
ドラグナーを四基解放、それらを箒に向かわせてると、一夏へと向き直り雪片を向けてくる彼女の手をとり、無防備となった胴体に膝蹴りを入れる。
苦悶の声と表情を浮かべる一夏、シールドエネルギーも補給が間に合わないくらいに削られたんだろう、彼女の顔には苦い色も浮かんでいた。

「ハァ！！」

「いい判断だけどな、狙いが見え見えだ一夏！！」

「きゃあぁあああ！」

膝蹴りが入って苦しいはずなんだが、彼女はそれに耐えて空中で体制を入れ替えると体当たりをしてくる。

それを俺は複合型近接ブレードを展開し非固定浮遊部位に剣の腹を当てて、地面へと吹き飛ばす。

ちょうど野球のバットの要領だな。

「一夏！！」

一夏の悲鳴と地面に叩きつけられた轟音を聞き、箒が叫び声を上げる。

だが、エネルギー補給に戻ってきたドラグナーは二基だけで後は撃墜されたことを、ドラグナーの戦闘ログが記録していた。

「ち……　やっぱ強くなってるな」

「当たり前だ！そうでなければこの日々の意味がないからな！！」

俺の背中に残るドラグナーはもう七基程度にまで減っていた。
全て一夏と箒によって撃墜されたんだ、まさか最初に展開して二人のコンビネーションで三基を撃墜されるとは、微塵も油断してはいなかったんだが、彼女たちはドラグナーの起動を見切り、要所要所で切り捨てたり撃ち落としていた。

横目で地面を見れば、土埃の中で一夏が弱々しく立ち上がる様子が見える。
苦悶の色を浮かべる一夏に罪悪感を感じるんだが、それを心の奥に押しやるとドラグナーを二基向かわせる。
その直後に複合型ブレードの中から、干将莫耶（Ｆａｔｅのアーチャーが使っていたのと形は同じ奴）を抜き取ると二刀流で箒と戦いを始める。

箒が左手に持つ空裂で切り上げを放ってくると、俺は右手の干将で受け止め弾き飛ばす、そのままの勢いで俺の左手にある莫耶を振り下ろす。
それに箒はギリギリのタイミングで右手に持つ雨月で対応、受け止めると何とか態勢を立て直せた左手の空裂を添えてくる。
俺も干将を上に重ねることで二刀同士の鍔迫り合いを演じる、純粋な力が強いほうが勝つ状況下。

「くっ……」

純粋な力勝負であれば圧倒的に俺に分がある状況下だったからか、彼女の顔は苦いものを含んだ色へと変わる。
だが、いきなり不敵な笑みを箒が浮かべてきた為に、俺はそれに疑問を感じた。

その瞬間。

「ハアアァァア！！！」

「しまった！一夏か！！！」

これは俺の予想外の出来事だった。
一夏がこの短時間のうちにボロボロになりつつもドラグナーニ基を撃墜、俺に雪片を展開しながら迫っているのだから。

咄嗟の判断で箒を吹き飛ばした俺は残っている全ドラグナーを解放、箒に向かわせると雨月を使いビームを連射しながら彼女は迎撃に移っていた。
俺は一夏からの斬撃に当たらないように回避行動を取ると、再び複合型ブレードを展開し合体状態で彼女の雪片を受け止める。

「すっかり一撃が重くなってんな一夏！」

「お、女の子に重いとか言うのはマナー違反なんだよ！？　弾！」
「いや、そういう意味で言ったわけじゃないんだけどな……」
こんな状況でも一夏は一夏だと言う事らしい。
俺の本心からの言葉を言ったと同時に返された言葉に、俺は脱力しそうになるのを堪えると微笑を浮かべてそう言っていた。
「うぁ……！（この状況で、そんな微笑みは卑怯だよ！！）」
「？　どうした？」
「な、何でもないよ！何でも！！」
「そうか」
俺の微笑を見た途端に恥ずかしそうに顔を赤らめる一夏、ちょっと可愛いと思ってしまった俺はダメなんだろうか？
一回関係を結んだ後から千冬さんたちも同じなんだが、ちょっと可愛い仕草とか、そういうのが目に付いて分るようになってしまったんだよなぁ。
こんな状況で思うのはダメだ！ダメだ！と自分を律して俺は、一

夏と正面から剣で打ち合っていく。
まだ直撃こそないが、一夏の持っているのが当たれば間違いなく俺は二発程度で終わってしまう。

だからこそ、細心の中を払いながら捌いていく。
その内にドラグナー三基が箒の一瞬の隙を着いて彼女を拘束、俺は一夏を吹き飛ばすことに成功し、残っていたドラグナー二基で彼女の動きを限定させるとグングニールを展開する。

「まずは一夏！お前からだ！」

「しまっ！！」

「一夏！！避けろぉ！」

俺はアンカー展開の必要がない中出力に調整したグングニールの引き金を引く。
銃口からはビームの奔流が流れ出ると、箒の警告も空しく彼女はビームの奔流に飲み込まれ、爆発とそれに伴う煙と共に姿が掻き消えていた。

エネルギー補給に戻ってきたドラグナー全基が俺の背中に装着され、自由となった箒が向かって来る。

「うおぉぉぉぉぉ！！！」

「ちぃっ！！」

「舌打ちをしたということは、お前にも余裕はほとんどない、ということか！弾！？」

「いや、まだまだいけるさ！」

「今日こそお前の隣で戦えると！お前を逆に守れるくらいに強くなったと！それを証明して見せるぞ！弾！！」

「やってみろ！箒ぃ！！」

そう激しく言い合いながら切り結びあう俺達の間を突然、箒を援護するように一つの桜色のビームが走り抜ける。

私は弾に吹き飛ばされると、彼が解放してきたドラグナーで動きを限定されてから、グングニールの砲撃を受けた。
自分がビームの奔流に飲み込まれているというのに、私は自分で驚くほどに冷静でいることに気が付いた。
普段だったなら、取り乱すか、混乱するかしているのにね。

ただ、私じゃ、弾の隣に立って彼を守ることなんて出来ないのかな？　小学生だったあの時とおんなじように私は彼に助けられて、守られて、背中を見つめることしか出来ないのかな？

そう、自分自身への悔しさとも怒りとも言えないような、言える様な複雑な感情が自分の中を駆け巡っていることに気が付いた。
だんのとなりに、いたいよぉ……　せなかだけじゃなくて、弾といっしょの景色、それを見たい……

唇を噛み締めて、そう思っていた私の目の前、ハイパーセンサーに文字が表示された。

『力を望みますか？』

と、私はそれに頷くと、さらに続けるように、それでいて諭すよ

うな言葉が次々と表示されていく。

『本当に良いのですか？　力を手にしたら今までとは同じではいられない、大切な人を危機に晒す事、そういう事もあると言うのに？』

それでも私は望むよ！弾は望まないかもしれない、ううん。

『一夏、お前は俺が守ってやる、だから安心しろ、ここにはお前の味方しかいないし、それにお前の味方が現れないんなら俺が一生お前の味方でいて、ずっと守ってやるから』

そういってくれた彼の弾の言葉が蘇ってくる。

弾はずっと私を守ってくれて、私は彼に大き過ぎる負担をかけてた！だから！今度は私が彼を守りたい！負担を軽減させてあげたい！

心の内で強く思ったと同時に、メッセージが変化した。

『どうあっても変わらないようですね、分りました……　彼に託されていた機能を解放しましょう、目の前のボタンを押してください』

呆れたようでいて、安心したようなメッセージは私に目の前のボタンを押すように言ってくる。
ちょっとだけ釈然としないものを感じていても、私はそれを迷いなく押した。

だって、私は彼の守られる対象じゃなくて、一緒に歩いていく関係を望んでいるんだから。
弾の子供を身篭ったりしたら、守られる対象じゃダメだからね！

なんて考えたりもしたけど……　どうしてだろう？　弾の子供が出来ないのって。

ビームが来た事により箒と距離を取らされた俺は、攻撃がきた方向を見ると、そこには完全に形を変えた白式をまとう一夏の姿があった。
前世でどこかのサイトで見た白式の二次移行の姿とは違う姿、非

固定浮遊部位にあったはずの荷電粒子砲用の砲口がなく、代わりにフィン状の物体が三つずつあり、右手には形としてはＧＮソード？をモデルにしていそうな、ライフルとソードモードへの切り替えが可能な剣、左手には小さいがフィン状の物体が四つほど付いたシールドを持ったＩＳに変わっていたんだからな。

まあ、この特訓自体が一夏の白式の二次移行が目的だったから、目論見は成功したんだけど、なんだろう、こんな状況になった場合は一つの展開しかないような……

「せ、二次移行（セカンドシフト）……」

「弾、私ね弾の隣に立ちたいって、貴方を私も守りたいって想ってるの……」

「あ、ああ……」

「だからね、私は絶対に貴方の隣に立つんだって、決めたの……」

「……」

箒の言葉通り、一夏のＩＳは完全な二次移行を遂げていた。

だけど一夏が嬉しそうでいて、それでいて儚げという複雑な微笑を浮かべて言った言葉には、俺は正直に頷きを返すというか、言葉を返せなかった。

一夏がこんな決意を固めたのは、銀の福音との戦いの時が最大の原因なのか、それとも何時が原因なのかが分らないから。
それに、正直に言って俺は一夏は安全な場所にいて欲しかった。
唯でさえ彼女は危険な目に合いやすいのに、力を手に入れれば、より険しい道が待っているというのに、それを俺自身が決意させてしまったのか。

そう思っている俺を一夏は分ったのか、誰もを魅了するような微笑を浮かべると自分の下腹部に手を当てる。

「弾、私はね自分の想いで決めたの、もっと力を付けたいって……愛する人を守りたいっていう気持ちは男のこも女の子も違いはないんだよ？」

「それは、分っているけどな、だけど、俺はお前が！！」

「分ってる、弾は私が危険な目にあっても逃げられるくらいの力を付けさせたかったんだよね？」

「ああ、そうだ！お前は俺が「それが嫌なの！」なっ！？」

「私はね……　弾と一緒の所に隣に、いたいの……　だから守られるだけの私が嫌だった」

「俺と一緒の所に居たい、俺の背中も隣も守れるだけの力が欲しい、それがお前の願いになったってわけか……」

「うん……　それにね、前に弾が赤ちゃんを抱いていたときに想ったこともあるから」

「なにを？」

「弾との赤ちゃんを私も守れないと意味ないでしょ♪」

「ゑ？」

流石の俺も最後の言葉には度肝を抜かれたというか、なんと言うかだったが……　まあ、出来てないという事実が分っただけでもホッとしておこう。

出来てたら……　シャレにならん……！！まあ、全部中出しだったけどね！？

「だからね、弾」

「……」

「私にも弾を守らせて、姉さんや山田先生達と比べたら頼りないかもしれない、でも、私のこの想いだけは本当だよ！！」

「なら、掛かって来い一夏！！この場で俺を倒したら、お前を認めてやる！！」

「うん、分ったよ！！箒！」

「ああ！！」

そういって俺に向かってくる一夏と箒、彼女たちを迎え撃つ為に俺はスキマ空間から、ドラグナーを呼び出して撃墜された分を補充すると向かっていくのだった。

まあ、それから始まる本当の戦い、二次移行した一夏と箒の二人と俺との戦い。

展開はほとんど一方的に運んでいた、なぜなら。

「行って！フィン・グレイブ！！」

一夏の非固定浮遊部位に装着されていたのが、アンチビームコーティングを施されたＢＴ兵器だったからだ！だから、俺のドラグナーは撃ち合えばなす術もなく撃墜されて、数を激減していく所に、三角形のフィールドを構成するのみにとどめると。

右手に持つＧＮソード？と同じ形をしたブレードを収納して、ライフルモードで射撃を行ってくる。

これが普通のビームだったらどんなに良かっただろうか……

「っていうか！ライフルモードのビームで雪片のバリア無効化攻撃を標準搭載ってどういう攻撃方法だよ！」

「そういう攻撃なんだよ、弾♪」

「こんな時に可愛らしい声を出すんじゃねぇよ！！」

何しろライフルモードが撃ってくるビームの全てが、雪片と同じ能力を持っているんだから始末に終えない。

つうか、なんてエゲツないＩＳだよ！？　パリーンと割れる俺のフィールド、いや、光の力を研究している研究所のバリアじゃあるまいしなんて考えていた俺だが。

「私は一夏のエネルギー補給のみの役割、か……　だけど、ほとんど消費してないのに、私が補給約に回る必要がどこに……」

なんていっている箒を横目で見ながらも、俺は複合ブレードを展開し向かっていくのだった。

まあ、その結果は俺が負ける結果には終わったけど、圧倒的な敗退ではないよ！？

と言いたくなる気持ちで一杯だった。

因みに、最終日の夜は四人から徹底的に搾られましたが、何か？

冗談抜きで腹上死するところだった……　途中で一人多かったのは、気のせいだな！うん！

そんなこんなで、鍛錬と言うか特訓は終了するのだった。

え、エロい事おおすぎだって？　俺に言うな……

弁解させてもらえば、俺からは襲ってないからネ！？

第３８話　一夏の本当の姿！参上！というか凶悪というかなんと言うか……（後

二次移行を果たした一夏のＩＳスペックデータ、作者の設定したものを見た友人の言葉。

これどこの００ライザーとリボンズガンダム？　と言われました。

……　でも、原作のあいつらよりもえげつない攻撃をしてきますがねｗｗ

39話　本当のバカなら風邪を引いても気付かないんじゃないのかね？　なんて

修行から帰ってきてから夏休み終了まで、後ちょっとという所に迫った日の朝。
俺は凄まじい倦怠感に頭痛と喉の痛みという三連コンボを受けて目を覚ました。

「う〝う〝あ〝……？」

声を上げようとすれば、喉から出る声は言葉にならぬ声であった。
これらの事実から考えられるのは、一つだけだ。

「が、がぜをびいだ……？」

それだけだった。
とりあえず今言えることは、誰か素っ裸で寝ている俺の体を順調に冷やしてくれるエアコンを切ってくれないかなぁ？
ということだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第３９話　本当のバカなら風邪を引いても気付かないんじゃないのかね？　なんて考えた日、あ、今回も前後編っぽい～

「３９度８分、完全に風邪ね」

「う〝あ〝い……」

「全裸でエアコンを全開にして寝てたんですって？　風邪を引いて当たり前よ」

「……」

あれから俺はすぐに内線を使って校内の保険医を呼ぶと診断してもらっていた。

……　一夏や鈴に見つからなくて良かったぁ……　とも想ってしまう。

俺が動けないほどの風邪だった場合、二人は気が動転してから俺を逆に追い詰めてくるからな。

以前風邪を引いて二人の前で倒れたときは、肩を掴れて前後に激しく揺さぶられてから意識が堕ちたしな。

その後、俺の身の安全の確保の為に一週間ほど入院したのは良い思い出だ。

「とりあえず、織斑先生に連絡して処方する薬を運んでもらうから、今日はゆっくりしてなさいな」

「う〝ぃ〜す……」

そして立ち去っていく保険医、俺は襲ってきた眠気に身を任せて眠りに着こうとするんだが。

……　なんだろう？　この拭いきれない嫌な予感は……

夏休みも終わりに差し掛かって普段の賑やかさを取り戻しつつあるＩＳ学園の食堂内、一夏を含めたいつものメンバーは朝食を摂っていた。

「うぅうぅ……　ラウラさんに付き合わされて、先週一週間はヒドイ目に合いましたわ……」

「確かに、ね……　僕は人ごみに抗えずに流され続けちゃったし」

「まあ、あたしと一夏は前に弾の奴に付き合わされたことがあったからね、あたしは平気な方だったけど、セシリアとシャルロットは相当キツかったでしょ？」

「うん」

「ええ」

「あ、あはははは……　やっぱりコミケに行ってたんだ……　あの地獄に……　大変だったね、皆」

「それほどの地獄なのか？」

さめざめと涙を流して嘆いているセシリアにシャルロットに、疲れ切った表情をしている鈴に、ちょっと引きながらもセシリアたちを慰めるような仕草をみせて声を掛けている一夏。

セシリアたちの様子を見て戦慄しながらも問いかける箒、という一種異様な少女達がそこにはあった。

因みに上記の会話の中に出てこなかった唯一の少女はといえば。

「ふっ……　クラリッサからのノルマは達成、私自身も目標としていた物の入手に成功……　完璧「「「やかましい（です）わぁ！！」」」」きゃうん！」

「三人とも、どこから出したの……？　ソレ」

非常に満足そうに箸を巧みに使って朝食の鮭の切り身を食べながら、言っていたラウラの頭にセシリアにシャルロットと鈴からのハリセンがスパーン！という子気味良い音と共に振り下ろされる。

相当にストレスがたまる出来事であったらしい。

一夏と箒はこれを驚いたように見ているから、いつ出されたのかが分らなかったらしい。

「い、いきなり何をするかぁ！！」

「やかましいわぁ！！あんたのお守りであたしがドンだけ苦労したと思ってんのよ！！」

「最後はラウラって、同じ様な格好をした人達の中で一番目立ってたよね……」

「ラウラさんと一緒に居て、最後にはコスプレショーに巻き込まれて、コスプレさせられたわたくしの身にもなってほしいですわぁ……！！」

「「あ、あはははは……」」

涙目になって抗議をするラウラ、そんなラウラに猛然と迫る鈴、苦笑いを浮かべながら懐にハリセンを納めているシャルロット、滂沱の涙を流してｏｒｚ↑こんな感じになっているセシリア。

一夏と箒は苦笑いを浮かべているのだが、彼女たちの心の内は一つ。

（（でも、巻き込まれたセシリアは、どんなコスプレを……））

というものだったのはご愛嬌という奴であろう。
まあ、セシリアがどのようなコスプレをしていたのかは……　彼女の名誉の為に伏せさせていただくとしよう。

ただ、まあ、ちょこっといえば……　ボンテージ【風】である。
あくまでも【風】であるから勘違いを起こさぬように。

だが、ここにきて一夏と鈴が周囲を見渡す様子を見せ始めた。

「どうかしたの？　鈴に一夏」

「いや、ね、あいつがこないなって思ったのよね」

「うん、それに弾は朝をちゃんと食べるから、もう来ないと朝ごはんがなくなっちゃうよね」

それはここに居ない弾のことであった。
シャルロットの疑問の声に返された言葉を聞いた少女達は、それぞれが首を振って食堂内を見渡すが彼の姿は影も形もなかった。

先に朝食を終えたのかもしれない、なんて考えが少しして出始めるのだが、一人の女教師が食堂の注文カウンターにやって来た事で状況が変化する。

『すまないが卵粥を頼みたい』

『おや織斑先生、珍しいじゃないか……　飲みすぎかぃ？』

『いや、これを食べるのは私ではないさ、風邪を引いた馬鹿者がいるのでな』

『なるほど……　ちょっと待っていてくださいな』

『ああ、頼む』

そう、一夏の姉である千冬が現れて卵粥を注文している姿が映ったからだ。

「姉さん？」

「千冬さんがどうして卵粥を？」

「風邪を引いた人がいるって言ってたけど」

「教官が直々に面倒を見ることなんてありえるのか？」

「普通は山田先生だと思うけど……」

「じゃあ、姉さんがあんな感じで新妻みたいに面倒を見そうな生徒って……！」

「一人しかいないじゃない……！！」

「「「「！？」」」」

はてなマークを全開にしている一夏達であるのだが、普通の生徒であれば千冬が面倒を見るなんてありえない。

そこに考えが至った少女達の表情には驚愕と言う感情と、疑問の感情が同時に浮かんでいた。

それに今の状況から推理すれば一人しか該当する人間はいないし、彼女たちは何気にクラスメイト達が食事を済ませて既にいないし、今寮にいる連中は全員がここに来たことも確認済みだった。

「もしも僕達の予想が正しいとしても、弾が風邪なんて引くのかな？」

「アイツなら、引いていても気付かずに食堂に来て倒れるって言うオチが付きそうなんだけどね」

「確かにな……　弾の奴ならありえそうだが、来ていない以上、お前達の予想は外れているだろうな」

「でも、このままじゃ、弾は織斑先生から甲斐甲斐しい看病をされちゃうって、ことじゃ……！」

「「「「！？」」」」

なんていう会話をしている少女達は、シャルロットの言葉により危機感を持った様子を浮かべて動き出す。

恋に恋している一人の少年の下に、但し。

「冷静に考えたら、千冬さんに完全な看病なんて出来るわけないわよね……　山田先生に準備を押し付けているだろうし……　クスッ、ちょっと山田先生と、オハナシ、なんてしてみようかしら……」

なんていって席についている中国の少女を残して、ではある。

さっき千冬さんがやってきて、山田先生に氷嚢とかの準備をさせていると聞いた後に、千冬さんがおかゆを貰ってくるといったので、大人しく寝て待っているんだが。

……　何だろう、アンサーとーかを含めた能力が勝手に起動して【今すぐにこの部屋からどんな手段を講じてでも逃げろ！！】と叫んでいるのは。

よく……　考えてみたら、俺が風邪を引いたなんて絶大な死亡フラグじゃないか！？　や、ヤバイ！に、逃げないと！！

そう思えども俺の体は言うことを聞いてくれず、弱りきった蓑虫以下の動きしか出来なかった。

そのために。

「ぐべらっ！！」

まあ、顔面から床に突っ込んでしまうのは無理も無いことだった。

その時にガチャリ、と扉が開く音が聞こえる。

「ご、五反田くん!?　何をやってるんですか!!」

「や、山田先生……」

「ベッドに入って眠ってないといけません!!」

入ってきたのは山田先生だった。
床に無様に倒れている俺を見た彼女は大きく驚いた様子と、心配する様子を見せている。

「い、いや、何となく俺はこの部屋から逃げないと、と思って……」

「いけません!!熱がまだ下がってないんですよ!!何度あると思ってるんですか!?」

「で、で「でももなにもありません!!」ううぃっす……」

トンでもない剣幕の山田先生に俺はベッドに押し込められると、彼女は用意していた氷水が張られた洗面器にタオルをつけるとそれを絞って、俺の顔に乗せるのだった。

私は舌打ちをしたい思いで一杯だった。
弾の食事を貰いに来た時に、小娘共が居るのを確認せずに貰っていたのが運のつきか。

卵粥が出来るまでにこいつらに捕まって、今は一緒に部屋へと向かっているんだが、凰の姿が無いのが気に掛かる。
まさか、抜け駆けとでも……？

「姉さん、弾はどういう容態なの？」

「ただの風邪だそうだ、熱がちょっと高めらしいがな」

「風邪といってもバカにしていては、旦那様も命取りなるからな、しっかりと看病をせねばなるまい」

「ラウラ、奴が風邪ごときで死ぬはずがあるまい……　それと奴はキサマの旦那ではないぞ」

などなどの会話をしているんだが、やはりこいつらに捕まったのが一番痛いだろうな。
心の内では何度したか分らない舌打ちをしているのだが、こいつらに悟らせないようにするのが、今現在の私のやるべきことだった。

「でも、弾のことですから裸で寝て、しかもエアコンを付けっ放しで寝てたのが理由とかありえそうですけどね」

「鋭いな、デュノア」

「え、ま、まさか、そんな、幾ら弾でも……」

やはりデュノアは鋭いな。
弾が風邪を引いた理由も状況でさえも把握しているようだが、本人は冗談のつもりだったらしい。
今は、冷や汗をかいて引いた様子の笑みを浮かべてもいた。

それから、彼女たちと様々な会話をしながら、奴の部屋を目指していた。

そろそろ山田君が奴の面倒を見ているころだろう。
そう思った私は弾の部屋の扉を開く。

今でも思う、生涯でここまで驚いたのは、この瞬間を除いても他にはない、と。
何故なら、そこにあったのは。

気持ちの良さそうな朝陽が降り注ぐ室内。
よく手入れされているベッド。
肩を僅かに震わせて俯いている山田君。

そして、ベッドの上に力なく横たわり、顔にタオルと思われる白い布がかけられた、弾の、すが、た……

!?!?!?!?　ど、どうして!?　私が出て行く十分も立たないくらい前には風邪を引いていたが元気だったはずだ!?

『だ！弾！？』

私達全員が同じ気持ちだったようで、少し停止していたんだが、すぐに私も含めた全員が動き出す。

彼の元に、本当に彼が動かなくなってしまったのか、それを確認したくて。

「あの～　マヤたん？　こりはちっと違う気がするんだよなぁ……」

「え！？　ち、違うんですかぁ！？」

だあああああぁぁぁぁ！！

効果音をつければそれが適当か、私達は全員がそんな様子で走り出した勢いのままずっこける。

因みに空中に投げ出された卵粥は、いつの間にか現れていた凰の奴がキャッチしていた。

どうやら、俯いて肩を震わせていたのはタオルを絞っていたらしい。

いや！！そんなことよりも！！

『山田ぁ！！！』

「は、はいぃ！？　み、皆さん、ど、どうされたんですか！？」

起き上がった私達は山田君に詰め寄ると、一夏と箒が彼女の両腕を固定、ラウラが背後を固めて、最後に私が前方を固める。

無論のこと、オルコットが彼女が逃げられないようにブルー・ティアーズを展開してくれて、最後の締めを飾ってくれた。

「あ、あの……　皆さん？」

「山田先生、ちょっとダケ、私たちトォ、オハナシシマショウカ？」

「そうだな、山田先生、こちらに……」

「ふ、ふぇ！？」

山田君を私達は連れて行く、彼女が私に助けを求める目を向けるがしらんなぁ！！

私が敵に回っていると知った彼女は、デュノアと凰に助けを求める視線を送るんだが、彼女たちにも華麗にスルーされて、絶望とい

う感情を顔に貼り付けていた。

「ふむ、第四アリーナの使用が許可されたからな……」

「ナイス、だよ、姉さん」

「では、参りましょう教官」

「ちょ、ちょっと皆さん！お、落ち着いてください！！落ち着いてくださいよぉ！？」

私達の腕の中で、必死で助けを求める山田君を無視して私達は部屋を後にする。

「デュノア、凰、お前達に五反田を任せる」

「分りました！」

「わ、分りました、千冬さん！」

敬礼をするんじゃないか、という勢いで返事を返してくる彼女たちを弾の部屋において、私達はアリーナへと歩いていくのだった。

さて、これから、楽しいオハナシのじかんだな……

39話　本当のバカなら風邪を引いても気付かないんじゃないのかね？　なんて

このあとのマヤたんの運命は……　儚く散る、それ以外にナニがある!?

でも、本当に弾がやられていた姿は洒落にならないですよ、私は一度友人のお見舞いに言った際に、友人の母親が同じ状況で同じことをやっていたのを見て、本当に気が動転しましたから。

ええ、本当に。

没シーンその四と番外前編！

没シーンその四

既に時刻は２０時近くになろうと言う時間帯、つい先程、俺も一夏達も風呂がないので水浴びで済ませた後、一夏と箒はテントの中に入って泥のように眠りについていた。

一夏と箒の様子を見てくれていた真耶がテントの中から出てくると、ニコニコと微笑を浮かべていた。

「一夏さんも篠ノ之さんも眠ってます、よく疲れているようですね」

「これでまだ起きている様であれば、明日はもっと扱けたんだがな……」

「千冬さん、それ禁句っす、二人が聞いたら絶望しまっせ」

「むっ……」

微笑を浮かべて寝巻きに着替えてからストールを巻いている真耶の答えに、苦笑いを浮かべながら言っている内容が、あまりにも一夏達にとっては絶望を体現したものとなっていたので、流石にツッコミをいれていた。

まあ、本当に千冬さんの言った通りに今日異常のしごきが明日に待っていると知れば、一夏と箒は逃げ出すのは間違いないしな。

だけど、今現在の一番の問題はと言うと。

「寝るには、ちょいと早い時間帯すっよね」

「そうだな、いつもならば、まだ起きて作業をしている時間だからな、眠気もこんな……」

「ふぅ～っ、ふぅ～っ」

そんな会話をしている俺達の横では、真耶が自分の分の緑茶に息を吹きかけてから、冷まして飲んでいるんだが。

どうしてこの人って、何となく小犬属性と言うか、そんな感じの可愛らしい人なんだろうか？　なんて思うのだった。

俺が考えたことなどつつ抜けらしい、千冬さんの表情が一瞬だけ不満そうになるんだが、それはまあ、置いておくとして。

「暇なんでポーカーでもしませんかぃ？　ちょうどトランプも持って来てますし」

「まあ、良いだろう、明日は四時から二人の鍛錬を再開するんだろ

う？」

「うっす、終わるのは今日と同じくらいですね、三日目くらいから夜も訓練をしようと思ってますけど」

「？　どうして三日目なんですか？　弾くん」

あ、ちょっと口が滑った。

まあ良いか。

「今日と明日の一夏と箒の飯には、身体の疲労回復とかを促進する薬を混ぜるつもりなんです、それが効果を表すのが」

「三日目と言うことか」

「うっす、まあ、効果が現れても筋肉痛とかは普通にありますがね」

「なるほど、その薬を使うことで成長期のお二人の体を痛めることなく、成長を促せる、と言うわけですね」

「そうなんです」

やっぱ、この二人は理解が早いから一を説明しただけで、十近くを理解してくれるから説明しやすいな。

千冬さんは俺の力を元から知っているから、きちんと理解してくれるし、真耶も俺のことを知っているしな、だから、簡単に全ての言葉が通る。

それらを理解した二人は、満足そうに一度頷く様子を見せる。

「では、話も分ったことだ、弾の言う通りに暫くの間はポーカーで時間を潰すとしよう」

「そうですね、そうしましょう。じゃあ弾くんトランプはどこでしょうか？」

「あ、ここっすよ」

俺がポケットからトランプを取り出して、水気などを予め払っておいた草の上に切ったトランプを並べていくときに、真耶が口を開いてくる。

「ここは学園ではありませんから、せっかくですし何か賭けませんか？　例えば、負けたら、これからずっと晩ご飯の当番とか♪」

「良いっすね、じゃあ俺が勝ったらその都度一発ヤらせ「何もなくて良いだろう」……」

「え、ええと、弾くん？　私だったらいつでも言ってくれても良いんですよ？　私はごぶさ「山田先生」あ、あうぅぅぅ……」

「だから、俺が勝ったらその都度い「何もなくて良いだろう」……」

珍しい、真耶がこんな事をいってくるとはな、でも、これは真耶からのアピールか！そう俺は考えて発言したんだけど、それらは全て千冬さんによって否定されていた。

……　負けるものかぁ！俺の今夜の充実した夜のためにぃ！！

「だか「な・に・も・な・く・て・い・い・だ・ろ・う！」……」

うぅ……　ひどい……　ひどいや……　千冬しゃん……

目から出てくる水分は留まることを知らないや……

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第３７話（予定だった話）　修行編二日目！え、前後編じゃなかったのかって？　緊急変更で三話構成となったみたいだな！以上～

それから、俺は真耶と千冬さんの二人と共にポーカーを開始するんだけど。

「ふぅはははははぁ！！！これで三連続のロイヤルストレートフラッシュぅ！！！」

「ひ、引きが良すぎますよぉ！！」

「イカサマをした気配はない、な……　なにも賭けないようにさせて正解だった、と言うわけか……　賭けていたらナニを要求されたか分らんな」

空しさしか残らない結果だ……

これで賭けが成立していれば！成立していれば！今夜の俺は非常に！充実していたはずなのにぃ！

くそう！！なんて考えていたんだが、時計は２１時を回り始めて、

真夏とは言えども既に夜風が少々冷たくなり始めていた。

「っくしゅん！」

「そろそろお開きにしますか？明日も早いですし」（ああ……　○○○……　○○○をヤれるという充実した時間が……）

くしゃみをした真耶を見た後、周囲の風に注意をむければ確かに女性の体には、結構悪そうな冷たい風が吹いていて、俺にそう言わせるには十分な状況だった。

ちょいと千冬さんに向けた言葉のなかに、俺の心の声が入ったのは仕様だ！！

まあ、それは置いておくとして、千冬さんは俺の言葉を聞いて、時計を確認すると一つ頷きを返してくる。

「そうだな、明日は四時から開始するからな、我々も寝るには良い時間だろう」

「うっすではそんじゃ」（ああ……　○○○……　○○○をヤれるという充実した時間が……）

「はい、お休みなさい弾くん」

それぞれが立ち上がり、千冬さんが焚き火の始末をすると同時に、テントの中へと入っていく。
そして用意していた布団の中に入るのだった。

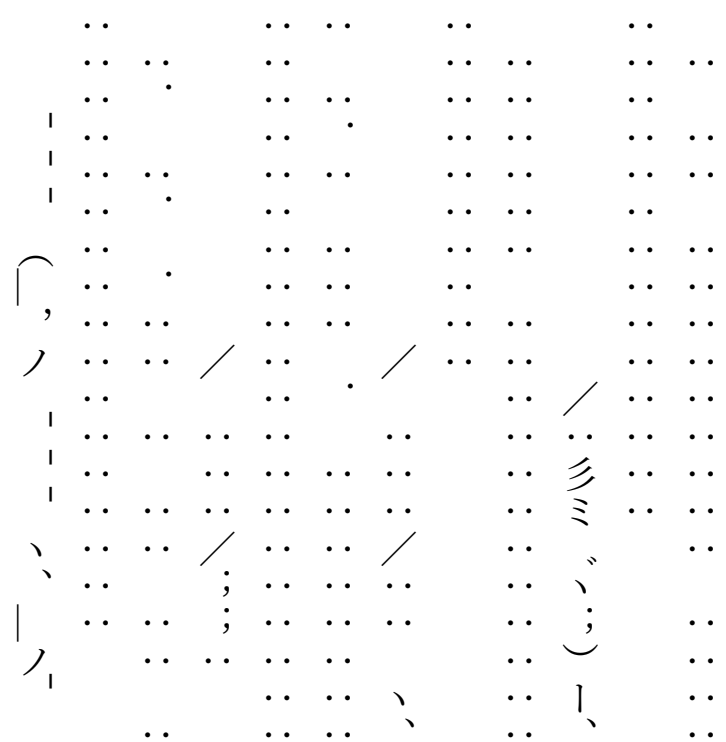
作者のコメント

本来これが37話の冒頭となる【筈】でした。
ですが、どうしてこれが没になったのか……　簡単です。
消去したと思い込んだからです！！私はSSを書く時は別のパソコンで一度書き上げてから投稿するのですが、こいつを書いた後、いつも保存していたフォルダとは全然違う場所に保存してしまい、その際に酔っ払っていたこともあって、そのことに関する全ての記憶も喪失。

全く書いていないと思い込んで、今の話を書き上げた次第なんです。
この話が全く違う場所からサルベージされた際には、かなり驚きましたよ。

……　でも、サブタイが一緒なのは、どうしてだろうか？　サルベージした所でようやく記憶は蘇ったというのに……
因みに、見つけた際の作者の様子はこんな感じ←

Λ＿Λ　．　．　．　．　．　．　．　．　．



あ、下は番外編となっております。
これだけで更新とするのもなんなので……　本当は夏の間に投稿したかった話なのは、秘密です。

番外編　夏休みとちょっとおかしい夏祭り
そのいち

あの世界から帰還して二週間が経った夏休みのある日、俺は実家に帰省していた。
まあ、昼間は一夏達が押しかけてきた上に微妙に騒ぎになったりとかしたんだが、それも過ぎ去って夜の穏やかな時間が俺の部屋には流れていた。

今現在俺の部屋には下着姿に近い姿の蘭がベッドに寝そべりながらファッション通販雑誌を読みふけり、俺はラノベに徹底的に偽装した【プロが教えるエロの極意！】というタイトルの本を読んでいた。
無論のこと、一夏や千冬さんやら皆にバレたら命は無い。
それは向こう側の野球大会の時に思い知ったよ。

まあ、それは置いて置くとしてだ。

「ねえ、お兄、そ・ろ・そ・ろ、じゃない？」

「おう、んじゃ、行くか？　蘭」

「うん！それじゃあ着替えてくるね！」

俺が今日帰省した本当の理由は……　お祭りに参加するためなのだ！

毎年参加しているからな、これは一番の楽しみって奴だ！！

俺の返事を聞いた蘭は嬉しそうに表情を緩めると、着替える為に部屋を出て行くそう【戦闘装束】に身を包む為に。

「さて、とそろそろ俺も行くか……　戦場にな！」

「うん！！」

獰猛な笑みを浮かべた俺に、Ｇパンにサマーセーターに身を包んだ蘭が勢いよく応える。

そして、俺達は階段を下りて既に夜の帳が下りた街中へと身を躍らせる。

そこにあった光景は。

『覚悟ぉー！！』

『うおぉぉぉぉー！！！』

『や、やられたぁー！！』

なんて叫んでいるビニール製の剣や槍を持ち、頭に同じ花をつけた男女を問わない大人達にそれらが交戦している光景だった。

「お兄！今年は兄妹でエントリーしたんだよね？」

「おう！行くぞ蘭！」

「うん！！」

そう叫んだ俺達は一斉に手近な連中へと駆け出していく。

これが俺が参加しようとしていた祭り【暗闇の武闘祭り】だ！！

今現在少女達は不思議な表情である二人の少女達を見ていた。
それは素振りとシャドーボクシングを行って体を温めている様子の一夏と鈴に対してである。

「なにをやっているのだ？　お前達は」

「そうですわ、先程から、なにを？」

いい加減に痺れを切らしたらしいラウラとセシリアが、全員を代表して質問する。
シャルロットも彼女たちの行動の意味が分らずに疑問顔になっていたりする。

「あ、そういえばアンタ達は知らなかったわよね？」

「そういえば、説明してなかったね」

今は終わった後の柔軟を行っている二人は、ラウラたちの質問に合点が言ったという様子で、頷きあっている。
それを見た彼女たちはより疑問を深めているのだった。

「今日はお祭りがあるのよ、それでちょっと準備してたってわけ」

「「「お祭り？」」」

「うん、暗闇の武闘祭りって言うお祭りで、今日だけはケンカの売り買いお咎めなし！って言うお祭りなんだよね！」

嬉しそうな表情で言っている一夏の言葉、これを聞いた三人の反応は以下の通りとなる。

「な、なんていう乱暴なお祭りなんですの……」

「なんか、別の意味に聞こえそうだよ……」

「中々、面白そうなお祭りだな」

慄いている様子のセシリアとシャルロット、面白そうでいて獰猛な笑みを浮かべているラウラ。

これを見た鈴は予め用意していたちょっと冷た目の麦茶を飲んで、一息つくと、彼女たちに対して補足を加えていた。

「まあ、昔は本当に死傷者が続出したらしいんだけどね、今は厳格にルールが定められているから、怪我とかの心配は無いわよ」

「だねルールは、まずこの市が指定したビニール、もしくはエアーソフト製の武具でなくてはならない」

「そんでもって、頭頂に付けられた花が折られたら失格とする」

「そして祭りに参加する者達は、篠ノ之神社の鐘が鳴り終わる午前零時までに境内へと登るべし」

「最後に祭りの間に出会った参加者達は、仲間で無い場合以外は必ず戦うべし」

「っていうのが、ルールだね」

「わかった？」

流石の彼女たち三人も鈴の【昔は死傷者が続出】と言う言葉には顔を顰めるのだが、すぐに厳格に定められているルールを聞く体勢に入っていた。

それから説明されるルールを聞いていく彼女たちの様子は対照的といえるものだった。

シャルロットとセシリアは呆れともどうともいえない表情となり、ラウラはより面白そうな笑みを浮かべていた。

確認を取るように言った言葉に三人とも頷いているのだが、曖昧に頷く者達とハッキリと頷く者と様子がハッキリと分かれる結果になっていた。

「で、お前達は参加するのだな？」

「当たり前じゃない、私も一夏も適正年齢に達した時からずっと参加してるわよ」

「うん、姉さんも毎年キッチリと参加してるしね」

成程、そういって黙るラウラ。

因みにこの祭りの参加適正年齢は男性が十歳、女性が十二歳からである。

これだけは男尊女卑となった世界となってもきっちりと守られている所か、女性達が自分よりも強い男性を見つけるために参加している面もあったりする。

そしてもう一つ、この祭りに関しては男性は適正年齢以後は必ず参加が義務付けられていたりする。何しろ参加しなかったら、その年はずっと【腰抜け野郎】と呼ばれ続けて生活せねばならないのだから。

それも風邪での体調不良は一切考慮されない、男とは家庭を守る戦士とならなければならない者、故に多少の体調不良で戦いを放棄することは許されないという鉄の掟があるのだが、実際には入院とかしていたら参加義務は無くなるのは当然であるのだが、一夏と鈴はあえて説明しては居ない。

というか、この場に居るのは全員が女性なんだしする必要が無い。

そして視点は俺に戻る！って誰に言っているんだよ？　なんて考えながらも俺は迫り来る三つの刃を捌くことに意識を向ける。

『せいやぁ！！貰ったぞ！弾坊！！』

『今だい八百屋さん！！』

『応！』

「甘いぜ！！三人とも！！」

俺と交戦中なのは普段は魚屋に八百屋に肉屋を営んでいる気の良いおっちゃん達である。

だが、今この場では冷酷な戦士だ！だからこそ、俺も手加減なんぞしてはいないんだが、何故か一太刀も浴びせられない。

やっぱこの町の連中は化け物かよ！？

なんて叫びたい気分で心の内は一杯だ！魚屋さんと肉屋さんが俺の背後と真横から迫り、それに対応しようとした俺に接近してきた八百屋さんに致命傷（花を折ることです）を与えようとしても、八百屋さんは回避したと同時に俺に致命傷（花を折るｒｙ）を与える一撃を放ってくるのだ。

くそっ！この祭りを長年経験したこと自体が戦闘経験になっているのかよ！？

『やっぱ強いな弾坊……！』

「いや、おっちゃん達も相変わらずやるじゃねぇかよ！！」

『なんのなんの、やっぱ厳の奴の血筋は立派に引き継がれてるってわけだな！』

「あの爺の血ねぇ、確かに受け継がれているだろうさ！」

『ならば、俺達のやることは唯一つ！行くぞお前らぁ！！』

『『『応！！！』』』

未だに致命傷を俺に与えることが出来ないということに焦れた三人は、俺に対して総攻撃を仕掛けてくる様子を見せる。
俺はそれに応えるべく、身構えて迎撃の体勢を整える。

『『『ジェット〇〇リーム・ア〇〇ク！！！』』』

三人がどこかでみたことのある連携を駆使して、俺に迫ってくる。
それらを俺は、ときには切り捨て、或いは。

『お、俺を踏み台に……！』

『がはぁ！！』

踏み台にしながら、全員の花を折ることに成功していた。
そして、時を同じくして他の町の連中に勝利した蘭と合流すると、篠ノ之神社へと俺達は走って向かうのだった。

没シーンその四と番外前編！（後書き）

番外の元ネタに関しては、わかってしまう方には分かってしまうでしょうね（苦笑。
今となっては懐かしいというか、そんな作品になってしまいましたが私の青春の作品です（い、イカン……　と、歳がバレる……

この祭りの最中に箒が何をしているのか、それはその二にて明らかとなるでしょう。
その上に千冬さんが今現在どうしていのか、それは全て次回にて明らかに！？

なんていう話ですが、お付き合いいただけたら幸いです。

番外編　夏休みとちょっとおかしい夏祭り　そのに

時刻は暗闇の武闘祭りが開始された時間帯、ここは篠々乃神社の境内。
そこには一人の少女が憂いに似た感情を浮かべて、巫女装束に自身の体を包んで立っていた。

「まさか、参加……　できないとは……」

「ダメよ？　箒ちゃん、私達神社の巫女は勝利者を迎えて表彰台に連れて行くっていう役目があるんだからね」

「それは、分ってますけど……」

シュン、という様子が適切か。
どうも彼女もこのお祭りに参加したかったらしい。

隣には妙齢に美女といった女性がいて、彼女が箒に対して宥めるように言った一言には、強く出れないらしく唇を僅かに尖らせているのだった。

そんな少女の名前は【篠ノ之　箒】幼い頃には参加できず、かといって自分が巫女としての役割が無く、参加が出来る歳には転校を

余儀なくされていたのだ。
武闘派と呼べる彼女が、このお祭りに参加できないというのはきついもののようだ。

「それでも、参加したいんでしょう？」

「うぅ……　おばさぁん……」

「うふふふふ……　でも、こうは考えないかしら？」

「なんです？」

意地悪げな笑みと共に言ってきた箒の叔母である雪子である。
彼女の様子にまるで滂沱の涙を流して懇願しそうな雰囲気すら漂わせる箒を見て、より面白そうというか、あらあら、とでも言いそうな笑みを浮かべながら彼女は箒の耳元に口を寄せる。

それに箒は聞く体勢に入る。
小悪魔の囁きを聞く体勢に。

「今ここで参加しちゃうと」

「してしまうと？」

「今朝、楽しそうに話してくれて、お昼にはお出かけしてまで会いに行った愛しの彼が、箒ちゃんに祝福される為に勝利を目指して直向き戦う姿が特等席で見れなくなる上に、彼に一番近い所で彼の勝利をお祝いできなくなるわよ？」

「……　叔母さん」

「何かしら？」

少し長くはなったが、何かを良いそうになった箒の口元を人差し指で抑えながら、彼女は一息にそういっていた。

それを聞いた箒はというと、顔を赤くしながら何かを想像してしまった様だ。

これを見た雪子の顔に【極上の獲物が掛かった】といわんばかりの少々黒い笑みが浮かんでいることに、箒は気が付くことはなかった。

「私は立派に巫女としての勤めを果たし上げて見せます！！」

顔を真っ赤にさせて頭全体から蒸気を噴出させて、ナニかを妄想しつつそういっている箒。

彼女の中で展開されている妄想はどういったものなのだろうか？

現時点でいえそうなのはノクターン行きになりそう。

それだけである。

番外編　夏休みとちょっとおかしい夏祭り

そのに

そして私は鈴と一緒に戦いが始まっている街中を駆け抜ける。

さっきラウラたちも参加するって言っていたから、多分どこかで会うだろうな。

『一夏の嬢ちゃんか！もらったぞ！！』

「甘いよ！駄菓子屋のお爺ちゃん！！」

「私がいるってこと、忘れないでよね！？」

『鈴の嬢ちゃんもいるのかぃ！こりゃあ手は抜けねえな！！』

なんて考えていた私たちに襲い掛かってきた（こう書くとちょっと文章が変になっちゃいそうなのは気のせいだよね）のは、いつもは駄菓子屋を営んでいてニコニコと好々爺の笑みを浮かべて子供達を見守っているお爺ちゃん（御年九十四歳）だった。

私も弾もお世話になったなぁ、それに鈴が来てからも連れて行ったりしたしお爺ちゃんは鈴の事も良く知ってるし。

でも、悲しいけど今は！

「武闘祭りの最中なんだよね！！」

『そういうこった！鈴の嬢ちゃんも手加減するなよ！！』

「そういうことは、あたしたちのコンビネーションを見てから言ってよね！」

『へっ！おもしれぇ！！』

両手に持った小太刀の形をしたエアーソフト製の剣を振るい、私に肉薄してくるお爺ちゃんを私は一刀の構えで持っている太刀といえる大きさの武器で受け止める。
だけど私はすぐに受け流して、横に飛んだと同時にさっきまで私の頭の鼻があった場所をお爺ちゃんの武器が通過していた。

やっぱり油断できないよ、強敵だね。

「やぁ！！」

『甘いぜ鈴の嬢ちゃん！』

武器を振るい切って技後硬直で泊まっているお駄菓子屋の爺ちゃんの頭についている花を狙って、鈴はヌンチャク（どうしてか、鈴は最初からヌンチャクを使うんだよね、どうしてだろ？）を巧みに使い最小限度の動きで横凪に一閃するんだけど、どうしてか一瞬で駄菓子屋のお爺ちゃんは伸び切った腕を戻してしゃがんで回避に成功していた。

やっぱり凄いよね、駄菓子屋のお爺ちゃんも！！

「やあぁぁぁ！！」

『ん！？　こいつはぁ！厳の技！？』

でも、駄菓子屋のお爺ちゃんがしゃがんだ瞬間を狙って私は一瞬で大量の斬撃（弾がこれをみて、散沙雨とかいっていたけど、どういう意味だろ？）を連続で放っていた。

あ、これって厳さんの技なんだ……

『ちぃ！まさかここまで腕を上げているとはな！』

「横に飛びなさい！一夏！！」

「ッ！！？」

そう毒づいて回避と迎撃を同時にこなして私の斬撃は全て意味の無いものに変えられる。

私は最後の斬撃を放とうとした瞬間に、聞こえて来た鈴の言葉に従って横に飛んだ瞬間に、鈴が駄菓子屋のお爺ちゃんへと向けて突っ込んでいく。

「セィ！ハァ！ハイハイハイィィィィ！！！」

『ぬっ！ここで鈴の嬢ちゃんが打って出てくるか！？』

鈴のヌンチャクから放たれる突きに横凪、ヌンチャクが戻る際の動きさえも利用した一撃さえも、駄菓子屋のお爺ちゃんは全て避けていく。

……不意に冷静な私の部分が囁くんだけど、九十歳を過ぎても人ってあんなに動けるものなのかなぁ？

なんて考えてもいた。

鈴の怒涛といえる攻撃、これらを駄菓子屋のお爺ちゃんは時に受け流し、時に避け、時に受け止めたりして全てを回避することに成功していたけど、最後の一撃を弾き飛ばした瞬間、両手が広がって出来た僅かな隙。

これを見逃すような真似は今の私はしないよ！

「やぁぁぁぁ！！」

『しまっ！一夏の嬢ちゃんか！？』

駄菓子屋のお爺ちゃんも気が付いたみたいだけど、遅いよ！！

そして、私は駄菓子屋のお爺ちゃんの花を折ることに成功するのだった。

私の一閃は鋭かったのか、私が振りぬいて少しした時に花は砕けるようにして、散っていた。

『……　強くなったなぁ、嬢ちゃんたち』

「当たり前よ、お爺ちゃん」

「そうだね、私たちも昔のままじゃいられないし」

強くなった孫を嬉しそうに見るお爺ちゃんの様な様子で、私たちを見てくる駄菓子屋のお爺ちゃん。

そんな駄菓子屋のお爺ちゃんに私と鈴は、ニコニコと答えていたんだけど、駄菓子屋のお爺ちゃんは不意にニヤニヤとしながら私と鈴を交互に見ていた。

『だが、厳の奴は安泰だな、弾坊には嬢ちゃんたちっていう嫁さんいるんだしな！ウチの孫も嬢ちゃんたちくらいの可愛げが若い頃からありゃぁなぁ……』

「「あ、あははは……」」

駄菓子屋のお爺ちゃんの言葉には私達は苦笑いを禁じえない、駄菓子屋のお爺ちゃんのお孫さんは四十近い女性なんだよね。

しかも妙に男性に対する理想が高過ぎた所為で婚期を逃してしまって、二回り近くの年下に走っているんだよね、勿論弾も狙われていたんだけど好みのタイプじゃなかったみたいで逃げ回ってたんだよね。

え、もちろん、その女性（ひと）とは……　鈴に蘭ちゃんと私とで念入りに【オハナシ】したけど、それがなにか？

それから駄菓子屋のお爺ちゃんとはニ三くらいの会話をしてから、私達は神社の境内を目指して走っていくのだった。

こういう風に言うと、ちょっと格好良く見えるから不思議だよね？

それから地点は変わり、ここは織斑家の前。

先程エントリーを済ませたラウラにシャルロットとセシリアたちは、三人で共に行動することを決めたらしい。

だが、何故か揉めているし、頭についているはずの花も存在して

いなかった。
理由は。

「やっぱりこういう腹積もりだったんだね！！二人とも！！」

「人のことが言える立場なんですの！？　シャルロットさん！！」

「お前達と私とがまさか同じ目論見だったとは……」

皆まで言わずとも分るというか、これらの言葉で分る。
それから彼女達は更にきゃんきゃんと姦しくけんかをしていた。

だが、これ以上の描写は文字数稼ぎとも取られかねない為、誠に勝手ながら割愛させていただきます。

ここは篠々乃神社の境内、ここには一人の猛者が立っていた。
その漢は気骨隆々とした体が特長的な男性である。
着ているTシャツにくっきりと鍛え上げられて無駄の無い筋肉を主張させてもいた。

十年近くの永きに渡って、覇者としての地位を守り続けるその漢、こと五反田　厳はある人間達を待っていた。

「来たか……　千冬の嬢ちゃん……」

「お久しぶりです……　厳さん」

そこに現れるはＩＳ学園教師という立場であり、一夏の姉である千冬だった。
彼女は今現在普段のスーツ姿とは違い、ジャージ姿に太刀とも呼べるエアーソフト製の武器を持ち、頭には一度も接触を許した痕跡の無い花が付いていた。
但し、千冬の武器には幾多もの兵たちを仕留めて来たと思われる花びらがこびり付いていた。

「ここに来たってぇ事は、今年もお前さんが俺への挑戦者第一号と言うわけかぃ……」

「ええ、弾よりも早くここにこれた事、これこそ僥倖というものです……」

この場の雰囲気を表すならば、どういう言葉が適切か。

厳の周囲には蒼い電撃と思われる何かがバリバリ！という効果音と共に満ちていき、千冬の周囲には紫電が迸っていくのが目視できる状況となる。

「いざ！」

「尋常に！」

「「勝負ぅ！！！！！」」

緊張感と、それぞれの間に迸る電撃が臨界点を迎えた瞬間、彼らはその場の石畳に罅を作り残像を出現させるくらいの勢いで接近。

それぞれの得物をぶつけ合い、激突する。

それはさながら伝説の英雄同士の戦い、そうとも取れるかのごとき戦いのゴングでもあった。

そんでもって視点は俺、こと弾に移るぅ！！

また、何を言っているんだよ？　俺って。

なんて考えながらも、俺は向かってくる兵達を蹴散らしていく。

『くたばれぇー！！この男の敵がぁ』

「誰がじゃあ！！」

『誰か一人くらいこっちによこせぇ！！』

「っざけんな！！」

向かってくるのは若い男ばかりで、大半の連中がいって来る言葉もおかしいのは、気にしない方が良いのだろうか。

そんなこと言っているからお前らはモテないんだよ！この非リア充どもが！！」

『奴をなんとしてでも仕留めろ！！我ら彼女（みな）いない暦＝年齢（し）の辛さと惨めさを思い知らせるのだぁ！！』

『応！！』

「やっべ、思わず言葉に出しちまった」

無論、ワザとだがな！

俺は逆上して襲いかかってくる連中を俺は時に頭の花を叩き潰し、一閃して切り裂いて次々と仕留めて行く。

そのたびに俺を囲んでいる男共の攻勢は激しさを増していくんだが、まあ、気にすることじゃあないなぁ！！

それから大体数分後くらいにはアスファルトの地面に横たわる死屍累々といった風体の人間達が、大量に転がっていた。

合戦の後ってのは、こんな感じなのかねぇ。

なんて考えながら、俺はこれを眺めていた。

「あ、お兄、終わったみたいね」

「蘭、お前……」

「あ、あはははは……　やっき折られちゃったんだ」

それから別の場所で戦っていた蘭が声を掛けてくるんだけど、彼女の頭についていたはずの花は綺麗に折られた姿になっていた。

闘いの最中に折られたらしいな。ま、去年よりかは持った方かね。

何しろ去年は一夏に俺と蘭の三人でチームを組んでいたにも拘らず、彼女達はいきなり同士討ちで自滅したんだし。

「去年の自滅よりはマシか……」

「そ、それは言わないでよお兄！！」

俺の指摘に恥ずかしそうに顔を赤くした蘭は、俺にそういっている。

まあ、アレを見ていたらそういいたくなるのは、俺だけじゃないと思うんだけどなぁ。

それに、何だろう？　今年は俺の顔見知りが別な場所で同士討ちを演じたかも、しれないなんていうピンポイントな予感があるんだが、気のせいだな。

それからの道は邪魔者はいなくなったからな、俺は神社の境内を目指して順調に走るのだった。

篠ノ之神社の境内にたどり着いた一夏と鈴の前に広がっているのは、これはどこの古代の戦士達の決闘現場だろうか？　というべき雰囲気の場であった。

「うおぉぉぉぉ！！！」

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ぁ！！！」

既に残像とも閃光とも取れるくらいの速さで動く手足と、ギリギリで視認出来る両者の攻撃と思われる閃光。

それらの全てが互いの頭上にある花を狙っているものという辺りが、なんとも気の抜けるものとなるようなのだが、如何せん、この現場の雰囲気そのものが穏やかなものとはかけ離れたものとなってしまっている。

無論のこと二人の頭上の花は一ミリたりとも揺らいだりとか、揺れたりとかしていないのは仕様であるのだが、運営から渡された普通の花なのだが、何故揺れたりとか、折れる気配すらないのかはまさに仕様と言う他に無いだろう。

今は更にぶつかり合いは激しくなり、周囲には二人から迸る衝撃波が襲い掛かる。

「きゃっ！」

「っ！やっぱり千冬さんも厳さんも化け物クラスよね……」

「う、うん、私も強くなったつもりだったけど、あんな闘いに割って入れる自信はまったく無いよ……」

二人はどうして気が付かないのだろうか？　そもそも二人が使っているのは金属製ではなく、エアーソフト製の武器だということに、本当ならそんな武器でこんな衝撃波とか火花とか散るはずが無いのに、である。

「一夏、鈴」

「あ、箒！箒も参加してるの？」

「そんな分けないでしょうが、一夏」

「その通りだ、私はこの神社の関係者だからな」

「あ、そっか……　去年までは雪子さんと蓮さんがやってたから、今年もそうかと思ってた」

「……　なぜ、弾のお義母さんが参加していたのだ？」

呆然と立ち尽くす一夏と鈴に声を掛けてきたのは、苦笑いを浮かべている箒だった。

それから会話が進んでいくのだが、どうして去年までは弾の母親が巫女として参加していたのか、それの疑問を聞いた一夏と鈴の二人の顔には呆れに近い笑みが浮かぶ。

こんな彼女達の様子により疑問の色を深める箒、そんな彼女に一夏と鈴は一瞬だけ言いにくそうな様子を浮かべて、それから躊躇する様子を見せた後に口を開く。

「え、えっとさ、まあ、簡単に言えば、参加してくれる十代の若い巫女さんがいなかったからだよね……」

「それに雪子さん一人だと、どうしても手が回らない面もあるし、私達はこっちに参加したかったしね」

「なるほど……　で、そのお義母さんは今日はどこに？」

「「さあ？」」

ここで弾の母親は若くないだろ、とか、いい歳こいて関係者でもないのに巫女とかどうよ？　とかのツッコミを行えるほどに箒の心臓は強く出来てはいなかった。

だけど、箒は目の前の一夏と鈴の後ろについてはツッコミを入れようと思う。

「二人とも、後ろを一度見た方が良いのではないか？」

「え？」

「なによ？」

ツッコミを入れたと同時ににこやかな笑みを浮かべている女性、弾と蘭の母親である【五反田　蓮】は一瞬で彼女達の頭上にある花を摘み取っていた。

「「にゃ　〝あああああー！！」」

「うふふふ、油断はダ・メ・よ、二人とも」

自分の頭にあったはずの花がなくなったことに絶望の悲鳴を上げる二人を、穏やかな笑みを浮かべて眺める連。

それと同時に箒は思う。

（摘み取った瞬間の……　腕の動きが、全く分らなかった……）

そう、蓮は文字通り一瞬で彼女達の頭の花を摘み取っていたのだ。間近で尚且つ、彼女の動き一挙手一投足に全ての神経を張り巡らせていたはずの箒が、である。

それから彼女は見るものに怖気を齎す笑みを浮かべたままに、まだ戦っている千冬と厳の所に近寄っていく。

『ぬっ！蓮か！？　やはり今年は参加するようだな！！』

『ええ、お父さん、あの時の雪辱を晴らすときが来たからね……それと未来の娘になる子の実力も知りたいし』

『良いだろう！嬢ちゃん共々倒してくれる！！』

『私も忘れないで貰いたいものですね！蓮さん』

「「「……」」」

正直に言って【自分達、出るＳＳを間違っちまったのか？】なんて考えるほどに目の前の光景はぶっ飛んでいたといえるだろう。

何しろ獰猛な笑みを浮かべた蓮が厳と千冬に宣戦を布告すると同時に、三つ巴の戦いに発展したのだから。

「ねえ、鈴、箒……」

「なんだ？」

「何よ？」

「私達が今出てるＳＳって、ハーレム系ラブコメＳＳであって、熱血肉弾系バトルＳＳじゃないよね？」

「一夏、メタな発言は控えた方が良いわよ」

「……　それなら私はメインヒロインだから大丈夫！！」

「……　本来その座には私がいたはずなんだが……」

もはや、何がなにやら……

そんな会話を繰り広げる見目麗しい少女達を無視して、あまりにも凄まじい戦いは彼女達の背後で行われていた。

まあ、簡単に言えば電波でも受信して現実逃避でもしてないとやってらんない。

というのが真相であろう。

そして、道に大量にいた兵達を倒してきた俺は遂に篠ノ之神社の境内に辿り付く。

そこにいたのは、ある意味で予想通りの人物であり、予想外でもあった人物だった。

「お袋、か……」

「弾、よく、ここまで来たわね……　ほめてあげる」

そう俺のお袋が境内にて仁王立ちで俺を待ち構えていたんだし。
話だけは聞いたことがあるお袋は二十年近くの間ずっと覇者であった祖父さんを下し、覇者の地位に君臨した、と。

その後は篠ノ之神社の巫女の役割を買って出たから引退に近い扱いになったから、祖父さんが返り咲いたみたいだがな。

以前の覇者として相応しいモノが両手に握られている。
右手には千冬さんが、左腕には祖父さんが、ボロ雑巾みたいになってお袋が無造作に持っているんだし。

「別にいらねぇよ、それよりも二人を倒して俺の前に立ってるって事は……　お袋がラスボスってことで間違いないか？」

「ええ、そうよ」

確認を取るようにしてそういったお袋は、両手に持っていた二人をポイッと投げるんだけど、二人は空中で体制を整えて危なげなく着地していた。

『ぬぅ……　やはり蓮の強さは健在ということか……　弾と蘭を生んでから強くなりやがって……』

『ええ、まさか私が手も足もでないとは……　世界の広さと母の強さを教えられました……』

なんて何かがおかしいことを言っている二人を無視して俺は、お袋に向けて睨む視線を向ける。

「なら、勝負だ！！」

「勝負よ！！」

そういったお袋はいきなり上下のジャージを脱ぎだす。

って！

「な〝ぁぁぁー！！何やってんだお袋！？」

「ウフフフ……　脱げば脱ぐほど強くなる……」

流石の超展開に俺は慌ててお袋に声をかけるんだけど、お袋はただ怪しく笑いレオタードとスパッツという。

あまりにも、そう、あまりにも……

「とし、としをかんがえてくれぇ……」

そういってしまいたくなる格好だ！見た目が若いから【まだ】救われているが！もうあんた四十近いだろ！？　なんて格好になってるんだよ！！

あ、蘭の奴も恥ずかしそうに、尚且つ怒りに似た感情を浮かべているのが分る。

一夏達は俺の前に見てしまったのか、憧れるような目をお袋に向けているんだが……　何に憧れてんだよ？　お前ら……　四十近くとも維持されている肌の艶とかスタイルか？　どうかこれであってくれ！こんな戦い方に、憧れたりとかしてくれるなよ！？

身内だからこそ、恥ずかしいものってあるよなぁ……

「これぞ！！」

お袋は俺やら蘭やら、他の連中やらの様子を完璧に無視して宣言していく。

「裸身！！」

って流派があんのかよ？

「活殺！！拳」

今頃、アニメとか漫画とかだったら。

【永全不動八門一派　裸身流　裸身活殺拳】

見たいに表示されていると思うが……

……　なにも、何も見なかったことにしよう。

それと同時に膨れ上がる闘気と呼べる気配に威圧感、理不尽だが油断とか過信とかを許してもらえる相手じゃないってわけかい！？

右目の所に以前遊びで作ったスカウターもどきが自動でいきなり現れて、お袋の戦闘能力が数値化される。

因みに千冬さんは１万５千で祖父さんが１万８千だったな。

『五反田　蓮：戦闘力８９．８→８万９８００』

「は？　いや、ちょ、ま、お袋……　あんた本当に地球上に存在して良い生物かよ……」

っていうか一万倍に戦闘能力が跳ね上がった！？　強くなるって言っても限度があるだろ！？

なんて考えていたと同時にお袋は俺の眼前に瞬間移動の如き速度で接近、右腕を振りかぶってくる。

「ちぇぇあああああー！！」

「あっぶな！！」

回避された腕の先にはかなりでっかい岩が（誰が置いたか知らんが）あったんだが。

その岩が子気味よい音共に綺麗な断面を見せて真っ二つに割れた。

……は？　岩を素手で割った？

いや、俺も出来るけど、刃物で切ったような断面には出来ないから！なんて奴だよお袋……

「いやいやいやいやいやいや！！！強すぎだろ！！」

「さあ、反撃しなさい！弾！！」

そして恐るべき速度で腕を振るって俺に向かってくるお袋。

それを俺は咄嗟に気で強化した武器受け止めると、いやな音が武器から鳴り響いた。

何で、金属の武器同士がぶつかったような音が鳴るねん。

「やるわね、流石は私の息子ね！」

「って言うか、何でそんなに強いんだよお袋！」

「母は強しって奴よ！！」

答えになってねぇ！！

なんて考えながらも休み無く俺の頭上の花を仕留める為に、お袋の両腕は凶器と化して襲い掛かってくる。

それを俺はいなし、受け流していくんだけど、強化していなかったら武器の方が先に根を上げると思うんだが、気のせいだろうか？

この戦いを見ている周囲の人間からどよめきが出ている。

大方攻防が常識を逸脱しているから、とかだろうな。

「けどな！負けるわけには行かないんだよぉ！！」

俺は振り下ろされてくる右手を弾き飛ばし、突きの要領で出されてくる左手を回避する。

相変わらず手と接触した武器からは、金属音が鳴っているのも当然の状況だ。

だが、勝利の為には狙いは一つ！！

「弾！あんたがこの花を狙っている以上は勝てないわ！」

「ハッ！それはやってみなくちゃ分らないだろ！！」

さっきから攻守が入れ替わり今は俺がお袋を攻め立てていた。
それに対応しているお袋は時に回避、防御などを的確に選択して対応されていくんだが。

これで大体分った、お袋の対応する時の速度とか色々なものがな。
作戦は決まった！！

「どうやら作戦は決まったようね？」

「ああ、この次で戦いを終わらせるさ！」

「面白いわ！やってみなさい！！」

そして俺はお袋へと突っ込んでいく。
お袋はそれに対応する為に体勢を整え、防御と攻撃の両方を同時

に行える構えを取る。

それを見た俺の顔に笑みが浮かび上がり、右手に持っていた武器を投擲する。

「武器を投げてどういうつもりかしら？」

「こうするんだよ！！」

「なっ！」

お袋の意識は一瞬、本当に一瞬だけ投擲された武器に集中される。

その一瞬が俺の狙っていたものだよ！！

俺は投擲と同時に体の姿勢を低くして、お袋の真横へと回りこみ、隠し持っていたもう一つの武器を手にお袋の花を切り捨てることに成功するのだった。

まあ、その後のことをちょっと語ると。

お袋を倒したということが全員が認識したら、全員が大いに盛り上がり俺は箒のエスコートで表彰台へと登る。

俺はそこにてトロフィーとチャンピオンベルトに全国どこでも使える温泉旅館ペア宿泊券を貰ったりとかするのだった。

え？　今はなにをしているのかって？

それはな。

「だ、だん……　どう、だ？　き、気持ちよいか？」

「おお……　随分上手いもんだなぁ箒」

箒に背中を流してもらってます！

え、ノクターン的な展開はって？　ここであるわけ無いじゃん。

「にしても、昔の武闘祭りには変な習慣もあったもんだなぁ」

「……　ま、まぁな、勝者が望めば巫女が了承した形での奉仕をしてもらえる、などというのがあったようだからな」

そう、ついさっき雪子さんから聞いたんだけど昔の武闘祭りには変わった習慣があったみたいなんだよな。

詳しいことは知らんが、これは土地信仰の一種だったらしくて、この年の勝者が守り神みたいな存在な扱いになっていたらしい。

だから本当はいらないらしいんだが、巫女さんの了承をもらえれば今日限りという形で、夜伽とかも全然ＯＫだったらしい。

これを箒が知っているかどうかは知らんが、さっきからお湯の影響は無いのが分るくらいに顔が真っ赤になっているから、知っているんだろうな。

「あ、あの……　だ、弾……」

「なんだ？　箒」

「あ、あがったら……　そ、その、あの……」

モジモジトしながらそういっている箒、うん、言いたいことはわかるんだけど、実は今、俺は猛烈に疲れと睡魔の二つと激戦を繰り広げていたりする。

予想外すぎるくらいの戦いに思った以上に疲弊していたんだよ。

やっぱ、お袋のレオタード姿の羞恥心への精神ダメージが予想外にでかかったらしい。

そのダメージの深さは俺がS○Xしたい！！という欲求が根こそぎ奪われてしまうくらいのものだ、といえば分るだろう。

この性欲の権化たる俺が、だぜ？　シャレにならねえよ。

「本当に悪いが、今日は寝かせて欲しい……」

「や、やはりお義母さんのあの姿がキツかったのか？」

「当たり前だ、箒、天災が四十を過ぎてあんな格好しているのを見たらどうする？」

「切り捨てる」

「だろ？」

俺の言葉に即答というか、怒りを滲ませていっている箒。

まあ、身内としては当然だろうな。

それからはまあすぐに上がると、俺は何故か用意されていた部屋に行くんだが、箒も一緒についてきているのがちょっと気に掛かる。

「ふぃ～　やっと寝れるぅ……」

「弾」

「なんだ？」

やっと寝れるという思いで布団へと近付いていくんだが、突然箒が枕を取ると、そこに正座して膝をポンポンと叩いている。

え？　膝枕、してくれんの？

と、期待を含めた目で見れば彼女は一つ頷いて俺の動きを手で更に促していた。

俺はそれに喜んで彼女の膝を枕にして眠りに付くのだった。

あ、因みに次の日に一夏達に箒の家に泊まったことを問い詰められたのは、言うまでもないが、やましいことなんてナニも無かったからなぁ。

俺は堂々と。

「疲れきってたからえっちな事出来なくて、残念だったＹＯ！」

と答えたら、ホッとしたような、それでいて怒ったような皆に詰め寄られたよ。

番外編　夏休みとちょっとおかしい夏祭り　そのに（後書き）

この話を書き上げた後の、友人からの一言。
この商店街の皆様って、強い奴らが集まるとヒロインズでも相手できないんじゃね？

いえてしまいそうなのが怖い……

第４０話　風邪を引いてもきちんとした奴が看病してくれたら治りは早いと思う

注意！！今回の話では後半部にはシリアスとちょっとというべきか
と言う性的な表現があります！！
なので、苦手な方はバックをお願いします。

第４０話　風邪を引いてもきちんとした奴が看病してくれたら治りは早いと思う

俺の顔にタオルを乗っけたことで、皆さんの怒りをかったマヤたんがアリーナに連れて行かれて、その方向から十字架の形をした爆発が起きた。

……　なにも、なにも見なかった。

うん。

そんな俺が今現在なにをしているのかといえば。

「はい、あーん」

「……　あーん……」

鈴からタマゴ粥を食べさせてもらっていたりする。

いや、最初はね、自分で食おうとしたんだよ？　でもさぁ。

『弾、あーん』

『いや、自分で食えるから』

『あーん』

『いや、あの『あーん』……　あーん』

無言の圧力をかけてきた鈴の前に屈したというわけだ！だってよ、俺が断るごとに無表情に加えて声に感情が篭らなくなっていくんだよ！怖過ぎだって！！

そんなこんなで鈴がお粥を冷まして俺に食わせてくるのは、やっぱ恥ずかしいという所だよ。

シャルロットは不満そうな顔をしているんだが、まさか俺に鈴がやっていることをやりたかったとか言うんじゃあるまいな！？

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第４０話　風邪を引いてもきちんとした奴が看病してくれたら治りは早いと思った～後編だじぇい

食い終わった後、俺は錠剤タイプの風邪薬を飲む。
いや保険の先生グッジョブといいたい、俺って粉薬が苦手なんだよな、あの口の中に残る独特の苦味が気に食わん。

「粉薬じゃなくて良かったわ、本当に」

「どうして？　鈴」

俺が飲んでいる薬を逸早く確認して錠剤と確認して安堵の息を漏らしたのは、当然といえるというか付き合いの長い彼女なら、俺が粉薬を見たらどういう行動に出るのか。
それは分るだろう。

「こいつ粉薬は絶対に飲まないのよ」

「え、弾って粉薬が苦手なんだ、結構子供っぽい所があるんだね」

「まあ、苦手でも飲むんなら良いのよ」

「それって、もしかして飲まないの？」

ふん！粉薬は俺の天敵だ！もしも粉薬だったならば間違いなく俺は。

「このバカは絶対に捨てるから」

「いや、風邪を引いているんだし……　飲もうよ、弾」

「断固として断る！粉薬を飲むくらいなら普通に寝ていた方がマシ！ゲホッゲホゲホゲボ！！」

「風邪引いて喉が辛いのに大声出すからそうなるのよ、寝てなさいよ、これからはアタシとシャルロットで面倒見てあげるから」

「……　うーい……」

苦笑いというか呆れも含んだシャルロットに俺は大声で返すんだけど、唯でさえ喉が辛いのに大声を出せばどうなるか。

当然の帰結として俺は思いっきり咽込んでしまう。

こんな俺にやれやれという様子で鈴が背中をさすってくれていたのだが、シャルロットはまた【出遅れた!!】と言いたそうな表情をしているのはどうしてだろう？

何年か前に風邪を引いたときは、蘭と一夏が張り合って俺が余計に症状が酷くなった時に、鈴が激怒して彼女達を叩き出していたからな。

鈴の奴って描写されていなかったが、原作でもこんな風に面倒見が良い性格だったのかもしれないが……　普段も戦闘時も決めるべき時も基本はダメダメな俺を見て、自分がしっかりしないと。

なんて考えてから変わっていったのかも知れない（大正解）が、まあ、俺的には助かるからな今の鈴は大歓迎と言うか、もう原作の事とかも思い出せないから、この鈴が俺の知る唯一人の鈴の姿だよな。

それから鈴は優しい手付きで俺をベッドに寝かせると、すかさずシャルロットが俺の額に絞ったタオルをちゃんとした形で乗せてくれる。

マヤたんみたいな天然ボケな事はしないから助かる。

「あ～ちべたくて気持ち良い……」

「クスッ、でも、弾がこんな風に弱ってるのも珍しいと言うか、滅多にないよね」

「そうね、こいつが風邪を引いたのって、付き合いの長い私でも一回くらいしか知らないし」

「やっぱりそうなんだね」

俺が乗せられたタオルの冷たさに表情を緩ませると、シャルロットと鈴は優しい笑みを浮かべてから、そう言って来る。

それを俺は心地よい子守唄代わりに聞きながら、薬が効いてきたのか、訪れてきた睡魔に身を委ねるのだった。

それから二時間くらい眠っていたらしい、時計の針を見て判断した俺はちょっとだけ調子が良くなってきたのが分る。

やはり身体能力はチートだな、普通の人間はこんなに早く体調が戻ってくるなんてありえないし。

「あ、起きた？　体調はどんな感じ？」

「ちょっと良くなって来たかね」

「でも、今が一番油断しちゃいけないころだから、横にはなってないとダメだよ」

「おーう」

どうやら俺の額に乗っている氷嚢とタオルの管理はシャルロットがやってくれているらしく、シャルロットの声が聞こえた所からタオルを絞る音が聞こえてくる。

鈴は体温やら布団の位置で俺の体温を調節してくれているらしく、一見すれば小説（文庫カバーをかけていたから何を詠んでいるのかは分らなかった）を読みながらも、僅かに毛布の位置を直してくれているから感謝だな。

これは、チャンスかもしれない、そう俺は思う。

あの時、未来の俺が子供を連れて来た時に決意したことを言うこと、それについてという意味で。

既に一夏や千冬さんに真耶や箒には伝えてある、だけどまだ伝えていないのが、他の連中なんだ。

今までは迷い躊躇いが生じてしまっていたが、言うべきだろう。

そう俺は考えた。

「鈴にシャルロット、話がある」

「いきなり改まってなによ？」

「そうだよ、弾？」

急に真面目な表情になって体を起き上がらせた俺に、疑問と困惑の色を強める二人、まあ、いきなりこんな事を言われたらビックリと言うか疑問に感じるのは無理もない。

だけど、俺はそんな二人を無視して口を開く。

「一夏達からの話は聞いたか？」

「う、うん……　ちょっと信じられなかったけど」

「まあね、あんたのことだから世界を移動するくらいのことは、やってのけるとは思ってたけどね」

俺の言葉に対して対照的な表情を見せる二人、シャルロットは困惑と驚き、鈴は呆れ。

そんな感情を浮かべている二人を真正面から、見据えるように見る。

彼女達は俺が真剣な話しをするという様子を感じ取ったのか、彼女達の様子も困惑の色を強めつつも真剣なものになる。

「以前、俺が赤ちゃんを抱いていたときのことを覚えているか？」

「覚えているに決まっているでしょ、結構強烈な体験だったんだし」

「そうだね、僕も赤ちゃんをあやした経験なんてなかったから、新鮮だったから良く覚えてるよ」

「……　それが、どうしたってのよ」

俺の言葉に何かを感じたのか、表情を険しくする鈴に、こんな鈴が表情を浮かべたことに困惑するシャルロット、だけどそれに構うことなく、俺は口を開くことを優先する。

「あの日、俺は思ったんだよ……　この世界で俺の子供は本当に自分の望む道を選べるのか？　ってな」

「……　そんなこと「ないと言い切れるか？」ッ！？」

「世界で唯一のＩＳを操縦できる男性の子供……　まず無理ね……弾や一夏や私がどう思っても各国の思惑に乗せられて終わり……って事よね？」

「そうだ」

シャルロットは否定しようとする意思を見せるが、俺の言葉を聞いて息を呑む。
鈴は俺の言葉を聞いて大体のところを把握したんだろう、彼女は正確に俺が言いたいことを理解していた。

そう、俺の子供は【今のままの世界もしくは、変わろうとも今の世界】である限り、絶対に利用されて終わる。
それが男の子であろうと女の子であろうともだ。

「だからだ、俺は」

「全く関係ない世界に行くって事、ね」

「……」

「ああ、この際だから言っておく、俺は一夏や千冬さんと真耶に箒を関係を持った」

「一夏から聞いたわ、あんたが関係を持ったってことは、まあ、箒は初耳だけどね」

「えっ！？」

全部を見透かしているような鈴の姿、こいつって昔からこういっ

た姿を見せることが多かったよな。
多分だけど、俺と接している内に考えて推測すると言う能力が高められたのかも、知れないな。

鈴はそれをきいて不敵な笑みを浮かべると、驚いたようなシャルロットを無視して、小説をたたむと俺に近寄ってくる。
それに俺はまだ真剣な表情を向けて、彼女を見ていたら。

「んっ」

「むぅ！？」

「ああー！！」

いきなり鈴が俺にキスしてきた。
というか、鈴の唇を自分の唇で味わうのって久しぶりだよなぁ。

なんて呆然と考えていたんだが、シャルロットは驚きと絶望に彩られた絶叫を上げているから、鈴の行動は誰もが予想外と言えるものだったよ。

それから鈴は数十秒以上俺の口内を舌で蹂躙していた。
その際に卑らしい水音が部屋に鳴り響き、シャルロットは顔を真っ赤にしてガン見していたのを俺は横目で見ていた。

「ぷはっ」

鈴は空き放題に俺にディープキッスをして気が済んだのか、口を放す。
この世界に転生してからのファーストキスの相手が、鈴なのは今思い出したことだよ。

それから鈴は潤んだ瞳を俺に向け、それから俺の顔を抱きしめる。

「り、鈴？」

「全く、あんたが聞きたいのは、私達があんたが決めたことに関してどういう決定をするのか、それを聞きたいんでしょ？」

「ああ……」

「あたしは、決まってる……　あたしはアンタに着いて行く……
お父さんもお母さんも……　もういないから……」

「なっ!?　鈴お前!?「黙っててて!」あ、ああ……」

鈴の言葉に俺は最大の驚きを見せてしまうことになる。
彼女の言葉を聞く限りでは、おじさんとおばさんは、もう……

「お父さんお母さんとが、そうなったって聞いたのは昨日なの……
事故、だってさ……　それも同じ日、同じ場所で……」

「……　まさか……」

「そうは、考えたくない!!絶対に……　だって、あたしはアンタ
以上にソレを優先してしまいそうに、なる、から……!!」

「鈴……」

鈴の話を聞いた瞬間に俺は思わず続きというか、もしかしたら。
という推測を言ってしまいそうになるが、鈴は俺を強く抱きしめ
てくる。

俺の頭に雫が落ちてくるから、彼女は確実に泣いているんだろう。

俺はせめてものと思って、彼女の頭に手を回して撫でると、鈴は涙声を出し始めた。

「ねぇ、あたし達ってさＩＳに関わったら……　さ、こんな目に合わないといけないの？」

「……　鈴」

「シャルロットのこともラウラたちのことも皆のことも聞いたわ、だからこそ思うのＩＳってさ、人の人生以上に重いの？」

「……　国、それ以上の場所を運営する連中にとっては重いんだろうさ、でも、俺はそうは思わないから、こんな世界を離れたい、そう思ったんだ」

俺を抱きしめる鈴の力が強くなったから、彼女は本当に悲しんでいるんだろう。

少しだけ見れたシャルロットの様子も、鈴と同じ様に辛そうな表情を見せていることから、彼女も同じ様に感じているんだろう。

「たった一人の天才の存在だけで、こんなに変わった上にしかも、その変化を容認して変わろうとしないから、弾が変えようとしないのも分るね」

俯いて自分の体を抱くような様子を見せるシャルロットの言葉を聞いて、鈴はついにしゃくり上げるように泣き声を上げ始める。
彼女達がどういう考えを抱き、俺に対してこういった様子を見せるのか、それが大体の所が分ってしまう様子だった。

「僕も……　弾と皆に着いて行くよ、だって僕の居場所は弾の傍にしかないから……」

「……　シャルロット」

「僕は弾にね全部を救ってもらったんだよ、だから、ここでほったらかしにするなんてのは、なし、だよ」

「シャルむぅ！」

「ん、んぅ……」

ゆっくりと俺に近付いてきたシャルロットは、鈴に抱きしめられていても顔は露出していた俺に鈴と同じ様にディープなキスをしてきた。
彼女も俺の口の中を自分の舌でたどたどしく絡ませてくる。

それから離れた俺とシャルロットとの口の間には銀の糸がつぅ、と言う効果音が一番適切な様子で繋がっていて、それが切れたと同

時に彼女からも抱きしめられる。

「ラウラとセシリアも同じ気持ちだよ……　それに弾は……」

「アンタは絶対にＩＳに対抗できるモノ、それを造り終ってるんでしょ？」

「……」

「その沈黙が何よりの答えよ、私達はねアンタに何があっても着いて行く、それが私とシャルロットの答え、よ」

シャルロットと鈴の答えには度肝と言うか、そんな驚きを見せられた。

そして、彼女達は俺を押し倒すと艶やかな笑み浮かべる。

え〝まさか……

「お、おおお、おま……」

「弾、あの時、決断できなかったから、今、貴方に捧げることが出来るわね」

「僕も、鈴と同じだよ弾」

それから俺や鈴達の間にナニが起こったのか、それは秘密とさせていただこう。
というか、描写できるわけないだろうが！！

但し、こんな状況でも息子は元気に反応するんだなぁ、と思ったのは言うまでもないんだよなぁ。

ちなみに、その後、キッチリと鈴とシャルロットは俺から風邪を移されてしまい、俺が看病したのは言うまでもない。
その際に、俺が関わらせてもらえなかったのも言うまでもないがな！

第４０話　風邪を引いてもきちんとした奴が看病してくれたら治りは早いと思う

これで、ラウラとセシリアを除いた面子に弾の決意を説明させました。
なんか、００の１ｓｔの６巻を見ながら執筆したので、最後の辺りでシリアス成分が増大したようにも感じます（苦笑。

これから５巻の部分においてついに、お待たせしていると言うか、アレが登場します。
どういう状況になるのか、ご覧いただければ幸いに思います。

では、今回はこの辺で。

第４１話　いやぁ、若気の至りって本当に怖いよネ！皆にも経験あるんじゃない？

風邪も完全に治って、俺とヤったことで風邪をうつされた鈴とシャルロットの風邪も治った次の日。

俺は一夏が倉持技研の連中から二次移行を済ませた白式、こと粉雪のデータをとっている中で、ＩＳ整備室にいた。

え？　俺はなにをしているんだって？　それはな。

「だから、ここでこの駆動系に使っている部品をちょちょいとこっちに移して調整すれば」（スーハースーハー）

「……　出力が五割増した……？」

「そうそう、そんでもってこいつをここからここに移しつつ、間にこの部品を入れれば」（スーハースーハー）

「強度を維持しながら、運動に使うためのスラスター制御が容易になって、しかも機動性も底上げされてる」

のほほんさん曰くかんちゃん、こと【更識　簪】から打鉄弐式の調整を手伝ってと言うか、のほほんさんにあのメッセージを見せて、俺だとバレたから話聞かせろやコラ。

的な感じで整備室まで連れて来られたのが正解さ！

大人しそうな外見からは想像出来なかったけど、意外に押しが強い性格だったのね。

え？　さっきの俺の台詞の中のスーハーってなにかって？　秘密と言うか、うん、かんちゃんって良い匂いがするからねぇ。

だから自然を装って完全に密着して、思わずやっちゃってるのサ！！

……　鈴達にまで手を出した後から、なんか、性的な意味での自重が出来なくなりつつあるのは、気のせいだろうか？

気のせいだと、思いたいなぁ。うん。

昨日は鈴の同室の女の子を思わず口説いちゃったし……　言い訳できない気がするのは、どうしてだろう。

勿論、皆からドギツイお仕置きされちゃったけどネ！！

「でも、それだけじゃカタログ値を越えて、ここまでの性能の発揮は無理じゃ……」

「ああいや、それはここのこの部品を一個だけ取り除いて、代わりにこいつをここここの制御を兼任させることで、効率化してる」

（スーハースーハー）

「……　なるほど……」

「ここまでの中で疑問は？」（スーハースーハー）

「……　今は大丈夫」

「そうか」（スーハースーハー）

真剣な表情で考え込み始めるかんちゃん。

そんな彼女を俺は匂いをかぎながら真剣にじっくりと、そしてねっとりと眺めていた。

「イデェ！！」

「な、なに！？」

突然俺の頭に激痛が！！！

俺がいきなり悲鳴を上げたからビックリしたんだろう、かんちゃんは目を見開いて声をちょっとだけ大きくして俺のほうを振り向いていた。

その瞬間、俺と今までどういう体勢だったかが分かったらしく、彼女の顔は羞恥と言う感情で真っ赤になっていく。

俺は痛む頭をさすりながら殴って来た狼藉者を確認しようと思い、振り向いた。

「お嬢さま～　せくはらをしていたおバカさんへのお仕置きは完了しました～」

「の、のほほんさん、て、手加減……　手加減して……」

そこにはいつも通りに間延びした声とダボダボの制服を着込んだ女子生徒、のほほんさんがでっかいスパナを持って、額に青筋を浮かべて怒りのオーラを発しながら立っていた。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～第４１話　いやぁ、若気の至りって本当に怖いよネ！皆にも経験あるんじゃないかな、ほら、具体的には黒歴史ノートとか、因みに作者の黒歴史ノートは四十冊くらいだそうだ～

それから、たっぷりと十分くらい経ってようやく頭の痛みが増しになったから、俺は座りなおすんだが。

「ぐるるる……」

顔を真っ赤にした猫ちゃんが俺からちょっと離れた所で、ＩＳの陰に隠れて威嚇しておりましたとさ。

俺からセクハラをされていたと知った彼女は、すぐさま俺から離れると打鉄弐式の後ろに隠れて、俺が復活したときからずっとあんな感じで威嚇していらっしゃる。

それにちょっと不思議なんだが、打鉄弐式が起動している気がするのは、どうしてだろう？　まさか、主にセクハラをした俺へ制裁を下そうと言うのか！？

まあ、分らんがな。

「だっち～は、そのえっちな所を直すともっとも～っと良い男になると思うんだよね～」

「うーむ……　特に直したいとは思ってないんだけどなぁ……」

「そんなんじゃ、いつか苦労するよ～？」

「肝に銘じておきたい、なぁ……」

のほほんさんからの俺の呼び方が変わっていることに、気がついた人間がいるかもしれないが。

うん、俺と彼女の関係というか、なんというかというかだが……

まあ、俺がこの世界で初めて筆を使った相手というか……　なんというか……　何時起こったのかは秘密、と言うことで。

勘の良い方は上の文章を見て速攻で気が付いただろう。

もしも分らない方がいたら、そのままの貴方でいてください！！

まあ、そんな感じの関係なんだが、本人からの希望で特に付き合うとか、そういったことはしていない。

世界を渡ったのも、のほほんさんを襲いそうになる、というのも理由の一つだったし。

「えーと、まあ、かんちゃんよーい……」

「ぐるるるるる……！」

「もうしないから出ておいで」

「いや」

「……　Ｏｈ」

とりあえずも何も話が進まなくなるから、本来の目的の続きをしようと声を掛けるんだけど、威嚇されて終わっちゃいました！
俺はそれに絶望の声を上げるんだけど、彼女は顔を真っ赤にしたままでぷいっ！！とそっぽを向いてしまう。

どうしたものかと悩んでいたんだが、ここで謝っても逆効果になりかねんし、どうしよう。
なんて考えていると、のほほんさんがゆったりとした動きでかんちゃんへと近付いていき、何かをぽそぽそと耳打ちしていた。

「……　うん、分った……　ありがと、本音」

「どういたしまして～」

何を、何を言ったんだろうか？
かんちゃんの顔は代わらずに真っ赤っかではあるものの、打鉄弐式の影から出てこっちへと近付いてくる。
何を言われるのか、はたまたされるのか。
俺は今結構ドキドキしている。
遂にかんちゃんは俺の目の前にたどり着くと、顔を俯かせる。
「わ、私のＩＳ……　ちゃんと仕上げてくれないと、織斑さんたちにさっきのこと、ちょっと脚色して言うから」
「この愚かなわたくしめを好きに使って自分の満足の行くＩＳを作ってください！！」
出てきた言葉は、脅迫でした！！！
これ以上、手を出す女の子を増やしたら承知しないと言っていた皆に、今回の件がバレたら……　お、おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！俺の命がぁ！！！！！
彼女が言葉を全て言い切る前に俺は、ザ・土下座！とも評すべき見事な土下座を披露していたんだが……　気になるのは、のほほんさんだよねぇ。
そう思って彼女をチラリ、とみたら。

「くふふ～」

「……」

意図が分らない、深い、ふかーい笑みを向けられました！！

な、何を要求するんだろうか。

お、俺が叶えられる範囲のものでなら良いんだけどなぁ。

「え、えっと、本音が言っていたけど、ＩＳを改造できるかもしれないって本当？」

「できるか、出来ないかで言えば出来るな、それも完璧に仕上げる自信もある」

「じ、じゃあ、聞かせて……　貴方が私のＩＳをどういう風に弄ろうと考えるのか、それを……」

「おうさ」

なんて考えていた俺におずおずと声を掛けたかんちゃんは、俺にＩＳの改造と言うか仕上げのプランについて訪ねてくるのだった。

これでやっと俺の考えと言うか、暖めてきたプランが実行できるな。

そう考えながら俺は、外装をＩＳの補助動力機関に偽装した疑似ＩＳコアを取り出す。

「こいつはある国の研究所で開発されていた、ＩＳコアの機能さえも補助が出来る動力炉らしい」

「……　そんなものをどこで？」

「織斑先生に言ったらちょっぱるのを手伝ってくれた」

「……」

「流石に冗談だぞ？　ルートはいえないが正式に譲ってもらった品だから安心してくれ」

あ、目を丸くしてる。
当然と言うか当たり前の話だろうが、本当の事を言うわけには行かないし、適当に話を合せつつ言うしかないか。

各国の記録を見たら、実際にこの手の動力機関は開発されていて、しかも、その手の研究所が一つ実際に潰されているんだしな。
いや、犯人は俺達じゃないよ？　本当だよ！？

多分天災だろうとは思う……　ニンジンが研究所が潰れる前に降り立って、潰れた後に飛び去っていくのが偵察衛星から確認できたし……　アレはなにをしていたんだろうかね？

まあ良いか。

「俺が提示するプランは、この動力炉と打鉄弐式のコアを同調させて、保持するエネルギーの増大に加えて、センサー類の演算補助を行おうと考えているのさ」

「言いたい事は分るけど……　上手く行くかなぁ？」

「上手くいくかはなんとも言えんが……　まあ、一度やってみようとは思う」

俺の言葉を聞いたのほほんさんは、流石に整備科志望なのか理解していたんだが、同時に疑問も上げてくる。
それはかんちゃんも同じ様で、表情には疑問の色が強い。

まあ、言葉だけ聞けば胡散臭いのは分る。
だけど、既に俺はこのコアと打鉄弐式のコアが同調できるかどうかは、確認済みだ。

結果は可能、同調してから起動するまでのタイムラグがあるようだが、それも誤差と言うか許容範囲に治まる範囲だ。
まあ、やってみるしかないな。

「そんじゃ今から始めるから」

「私は邪魔にならないようにどいとくね～」

「まあ、良いけどネ……」

俺が始めることを宣言したらさっさと離れていってしまったのほほんさんと、かんちゃん。
俺がヤッちゃった事を考えれば当然の反応なんだけど……　一言くらい、手伝おうか？　とかの一言は欲しかったなぁ（自業自得です）本当に。

まあ、それから半日程度打鉄と向かい合っていたら終わったんだけど、流石に疲れた……

ついさっき工具類を片付けた俺は、用事があるといって別れたかんちゃんをのほほんさんと一緒に見送った後、夕食を食いに食堂へと歩いていっていた。

「一日で終わらせるなんて凄いねぇ～　だっちー」

「すんげぇ疲れたけどな……　コアと別な動力炉の同調なんて初めてやったし」

「でも、それでも凄いよぉ～　普通の人間がやったら半年以上は掛かるだろうし」

「分らんよ、各国の技術者の中にはこういう改造に関してならば右に出るものはいない！とかいうのがいるかも分らんし」

何が嬉しいのか分らないが、俺の横をちょろちょろと嬉しそうに歩くのほほんさん。
彼女がちょっと飛び跳ねるたびに豊満な胸がプルプル揺れて、短いスカートも結構きわどい所まで捲れるから、そこに視線が釘付けになってしまう。

あ、水色……

仕方が無いじゃない！男の子なんだもの！！
エロは男子にとっては一番の興味のある対象なんだよね！！

と、突然のほほんさんは俺の右腕に腕を絡ませてくる。

「え、ええと……　の、のほほんさん？」

「あの日みたいに、本音って呼んでくれないの～？」

「いや、それで呼んだらまずいだろ？」

「何がまずいのかな？」

マズイ。

俺の全能力と本能に体までもが警鐘をならす。
のほほんさんに答えたと同時に聞こえてきた今は出来るならば、聞きたくなかった声。

夜の甘えてくる声なら幾らでも聞きたいなぁ……　なんて現実逃避をしつつも、俺は勇気を持って振り向く。
そこには。

「い、イチカニミナサン……　ボ、ボクニナニカゴヨウジデショウカ？」

はっきりといおう、振り向くんじゃあなかったと！
そこには先生二人を除いた、俺が手を出した方々の姿ががががが！！！！

彼女達の表情は一様に笑みの形を作っているんだが、目が笑っていない&光を映してなんていなかった！
俺の体が恐怖と言う感情で震え始める中、鈴が一歩前に進み出てくる。

こいつの笑みは普通に見えるんだけど、瞳からハイライトが消えているのが怖い！
滅茶苦茶怒ってるよ！？　そりゃぁそうだよなあ……　なんて考える。

「あんた、後はあの二人以外に手を出したらどうなるか……　分ってるでしょうね？」

「うーん、手を出したと言うか……　だっちーが筆を下ろしたのは私だったり～☆」

「「「「！？」」」」

「くふふふ～じゃ～ね～だっちー！みんなー！！」

い、言うだけ言って逃げやがった！！
あ、因みにあの時、のほほんさんも初めてだったよ。
ただ……　今の俺が一番優先に考えないといけないのは……

「ねえ、だん？」

「僕達、さ、全員が」

「お前に聞きたいことと」

「アンタに問い詰めたいことが、あるのよねぇ……」

俺を取り囲みながら、殺気を放ってしかも、逃げられないように体をホールドする女性陣、や、ヤバイ！！逃げるタイミングを逸した！？

そう思った時には既に遅し、俺は自分の部屋に連れて行かれるのだった……　その後の記憶が俺の中からは無くなっているんだが、何があったんだろうか？

思い出そうとすると、今でも体が恐怖で震えて、何も出来なくなるんだけど……

「――――――――――――　以上が五反田　弾の報告になります」

既に真夜中になったＩＳ学園のある一室、そこには三人の女性と

思しき影が集まっていた。
数は三、中央に立っている人物を中心として、彼女の正面に着席している女性二人。
それはさながら忠誠を誓った部下と主の如き様子でもあった。

「ご苦労様。では、そろそろ私も本格的に彼と接触しなくてはならないわね」

「正直に申せば、対応が遅すぎる、とも思いますが……」

「各方面からの苦情も多数ですよぉ……」

主の言葉を聞いて幾分か疲れを滲ませたように同意する声二つ。
中央に立っている人物は、それに苦笑めいた声を漏らす。

「ええ、でも、そろそろ動かないといけない、じゃないと私がここにいる意味もないからね……」

「じゃあ、接触は何時になるんですか？」

「そうね、新学期に入った最初の授業くらいが丁度良いかもしれないわ……」

「はい、じゃあ、こっちも準備をしておきますねー」

「ええ、お願いするわね」

「了解ですお嬢さま」

真剣な様子で言っている声に間延びしたような声が問いかける。

彼女の声に、立っている人物は一度考える様子を見せた後、答えを返していた。

それを聞いた間延びした声を上げる人物は、何らかの意気込みに満ちた声を返し、体全体を使って頷きまで行っていた。

「さてと、五反田くんについてはこのくらいとなるんだけど……やっぱり、掴めなかった？」

「はい、先週末より各国に水面下での何らかの動きがあるようなのですが……　巧妙に偽装しているらしく、その動きがどういったものなのかまではつかめませんでした」

それまでの弛緩した、何処か緩さを含んだ雰囲気が完全に消え去り、まるで氷のような雰囲気へとなる室内。

あるいは、これが本来のあるべき姿なのかもしれない。

冷たい声でいっている、立っている人物の言葉を聞いた、もう一人の女性は立っている人物の声に応える。
それを聞いてより冷たさを増す室内、だが、ここにいる者達には誰一人として動じたりしているものはいなかった。

「……　やるわね……　ここまでやって動きが掴めないなんて……」

悔しげに告げる立っている女性、彼女は口元に何処か楽しげな笑みを浮かべていたが、すぐに雰囲気を改めて二人へと向き直る。

「二人には改めて、この件について探ってもらいます、五反田　弾については私が直接接触を行います」

「「了解」」

「私達の名に賭けて、何かが起きる前に掴むわ……　あなた達にも全力で取り組んでもらうわ、良いわね？」

「はい！」

「りょうかいしました～」

より強い声を秘めていっている彼女、それに答える少女達。
彼女達が行おうとしているのは、果たして……

ただそれは、パンドラの箱を開け兼ねない事になること、それだけである。

第４１話　いやぁ、若気の至りって本当に怖いよネ！皆にも経験あるんじゃない？

最後にいた三人……　原作を見た方には分かっちゃいますよねｗｗｗ
でも、各国が何をやっているのか……　それもお楽しみに（バレバレだとか言わないで……

ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～前編っす（前書き）

友人に言われて、初めてＰＶが３５０万を越えていることに気が付いて、前々から考えてはいたネタを執筆させていただいた形になります。
前後編で、次回で終わりますがお付き合いいただけたら幸いです。

あと、このＳＳをこれほど見ていただき、本当にありがとうございます！！
これからも完結にむけて、執筆の方をがんばらせていただきます！！

ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～前編っす

それはいつもの朝、いつもの目覚めになる【筈】だった。

「ぬっ、ううぅ……」

俺はまだ眠気が覚めぬ中で、いつもと同じ時間に起床する感覚を感じていた。
それと同時に感じる、俺の真横に何者かがいる。

そんな気配を。

……はて？　昨晩は確かにシャルロットと箒に鈴の三人と【楽しんだ】けど、彼女達は部屋に戻ったし、その後に何者かが侵入した気配も警報も俺の能力は教えてくれなかった。
誰だ？　なんて考えながら俺は目を開く。

そこにいたのは。

「ぐむぅん、ぐぅ……」

「……」

千冬さんに良く似た【男】だったが、容姿としては一夏を男にした感じと言うかなんと言うかである。
しかも、俺に腕枕をしている状態で、であった。

これを見たと同時に。

俺は。

こいつを。

勢いよく。

蹴り出した！！！

「おらぁ！！！」

「ぐはぁ！！！」

俺に蹴り出されて床をゴロゴロと転がる謎の男、それと同時に俺は消音と認識阻害の展開を一瞬で構築、俺は男が起き上がるのを待つのだった。

だけどそれと同時に感じるこの部屋の違和感。

なんか、面倒臭そうな出来事の気配を感じて溜息をつくのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～

～ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～前編っす

腕に白いガントレットをしている男は痛みが引いたらしく、俺を

睨みつけるようにして起き上がる。

「って、だ、弾!?　何でお前がここに!?」

「いきなり蹴った事に関しては謝るが、その前に質問だ、お前さんの名前は?」

「はぁ?　何言ってるんだよ?」

「名前は?」

「痴呆でも始まってるのかよ、お前?　織斑、織斑　一夏だよ、忘れたのかよ!?」

「……　マジ?」

「ああ、そうだよ!さっきからわけの分らない質問してきてどういうつもりだよ、弾!!」

俺の目の前にいるこの男、まさかとは思ったが、織斑　一夏、と名乗ったから間違いない、こいつ原作の一夏だ。
だけど不可解な点がある、どうして世界を移動してしまったか、と言う点だ。

確かに俺はこの部屋のベッドに寝た記憶もあるし、三人とたっぷりとニャンニャンした記憶もある。

どういうこった？　俺が寝惚けてここにやってきたのか、それとも何か変な力が作用したのか……　分らない事だらけだが。

とりあえず目の前で怒っている一夏君に説明せんといかんか。

そう俺は考えて、口を開くのだった。

それから一時間弱、これが今現在の俺の状況を一夏君に説明した時間である。

俺の説明を聞いた一夏君は最初こそ信じられない様子だったのだが、こちらの世界にいる弾に連絡を取らせたら、信じるしかない。

と言う様子をありありと顔に貼り付けていたので、信じたと言うか、信じざるをえなかったと言う感じになっているらしい。

「つまり、お前は別の世界の弾、そういうことなのか？」

「まあな、だけど、俺が自分自身でどうしてこの世界にやってきたか、なんてことはわからんから説明しろ、なんて言われても出来んぞ」

「そう、か……」

そういって考え込む一夏君、まだ信じられないのだろう、何かを

ぶつぶつと言っている。
だけど、まだ説明していない部分がある、それは。

一夏君が俺の世界では一夏【ちゃん】ということをだ！！
いや、説明できねぇべ？（いきなり方言）キミ、こっちじゃ男だけど、向こうじゃ女、しかも俺と肉体関係まで持ってるんだよ！！とかな！
まあ、肉体関係持っているとか、そんなことを説明する必要はないかも知れんけど、でも、普通はというか、完璧に信じてもらえないわな。

そして一夏は数回頷いてようやく頭の中で情報を整理できたらしい、ゆっくりと顔を上げる。
本当にイケメンだなこいつ……！向こうで皆と関係持ってなかったら、横島張りの藁人形での呪いを敢行しそう（因みにこの時一夏君は原因不明の寒気を感じたそうです）だ……！！

「まあ、嘘を付いている目じゃないし、こっちの弾が家にいることも確認できたから、お前の言うことを信じておく」

「そうしてもらえると助かるな、一夏君」

「……　その、一夏君っての止めてくれないか？　なんか、その、言われるたびに、気持ち悪いんだ」

「あー、まあ、その理由なんだが……」

き、気持ち悪い。
そこまで言うか、お前……　そう言いたくなる気持ちで一杯だったんだが、ついに来てしまったか、俺がどうしてこっちの一夏を一夏君、と呼んでいたのか、ということを説明せねばならない時が。

俺は一度咳払いをすると、一夏君に説明する為に口を開こうとした瞬間、この部屋の扉がいきなり勢いよく開いて、誰かが凄まじい勢いで入って来る。
その人物は悲しげな表情で大粒の涙を流しながら俺の姿を確認すると、一気にその表情を嬉しそうなものへと満面の笑みを浮かべて俺へとダイブしてくる。

「だぁああん！！！」

「い、一夏！？　どうしてお前がここにいるんだ！？」

「えっ……　はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！？」

俺に抱きついてくる一夏に、俺の言葉を聞いて、呆然→驚愕へと感情を大きく変えて叫び声をあげる一夏君。
表情としては（д）。。↑こんな感じだな。
という状況が出来上がるのだった。

因みに部屋の入り口には。

「これは……　一体どういう状況なんだ？」

なんていっている、こちら側の人間だと思われる箒が呆然と立っているのだった。

それから暫くして、落ち着いた一夏だが、一つ問題が発生する。

あ、因みに箒も俺が一夏をなだめている間に部屋に入ってきて、一夏君から説明を受けている様子だったが、まあ、信じられないと言う感情を浮かべているのは当然と言うべきだったな。

まあ、その問題と言うのは。

「一夏、そろそろ「いや……」ぬぅ……」

落ち着いて泣き止んだ一夏だけど、俺から離れてくれないのだ。
どうも俺から離れると俺がいなくなってしまうかもしれない、と考えているようで、大粒の涙を流して泣きじゃくって酷いことになった顔を俺の胸に押し付けて、俺の言葉を遮って弱々しく首を横に振って嫌がるのだよ。

これを見た一夏はというと、形容しがたい表情を浮かべていた。
表情を読み取れば、女の俺ってあんな感じなのか？　もしかして弾の奴と……？　うわぁ……

とか考えていそうだ。
箒の方はまだ少し混乱している状況に近いようだけど、彼女が先程まで右手に持っていた木刀が気に掛かるが……　もしかして女の子一夏を賊か何かと勘違いして木刀持って追いかけてきたのかね？

だとしたら、今の一夏の状況も頷けるなぁ、まあ、この世界の箒の判断も強ち間違いと言うわけじゃないし、どうとも言えんよなぁ。
普通に考えて、自分の幼馴染が女になって、しかも自分が幼馴染だ、なんて言って信じるわけ無いし。
せめて、向こうの箒も一緒に転移してきてくれたら良かったんだろうけどがねぇ。

「とりあえずは、このままで説明するが、一夏君」

「ああ、俺のことをお前が君付けで呼ぶのは……　そっちの俺が【女】だから、だろ？」

「そういうこった」

「なんて厄介なことになってるんだよ……」

そういって頭を抱える一夏君、それは俺も同様だな。

俺の胸でまだぐずっている一夏の頭を撫でてやりながら、俺は一夏君と一緒に溜息に似た声を漏らす。

「全くだ、こちらに来た原因も不明だよ、昨日、俺は普通に寝た記憶があるからな、何かをした記憶がない」

「ぐすっ、ひっ……　わだ、わだじもぉ……！普通に箒と一緒の部屋で寝たのに、朝、起きたらぁっ、箒は違う箒で私は男だって言われてぇ……！わげ、わがんなぐ……！！」

「安心しろここに俺はいるから、とりあえず、落ち着くまでこのまま暫くはこの体勢でいろ」

「う、う゛ん！」

俺の言葉に続けるように言い始めた一夏だが、また泣き始めてしまう。

最近と言うか、強くなってからは見せなくなってきたんだが、や

っぱり突発的な出来事には変わることなく弱いらしい。

（一夏が少女であれば……　あんなに素直に自分の感情を表せる、のか……　少し、羨ましい、な……）

彼女に俺がいると言うことを知らせるように強く抱きしめて、頭を撫でているんだが、箒は何処か羨望に似た感情を一夏に向けているのは、気のせいだろうか。

まあ、原作の通りの彼女だとすれば、時期にもよるけど感情表現はかなり不器用なはずだから、まだ一夏君に対して素直な行動を取れていないのかもしれないな。

「所で一夏君」

「なんだ？」

「今のこっちじゃあ、臨海学校とかは終わってるか？」

「ああ、今は臨海学校も終わって、夏休みの最中だよ」

もう一つ気になったのは、今の時間軸と言うか時期だ、普通に学校がある時であれば間違いなくヤバイ、俺と一夏の存在が学校内の

生徒達にバレる危険があるし、なによりゆっくりと対策を練れないからだ。
ちょうど夏休みに入っている時期だと聞いて、少しだけ安心したんだが、一人、必ず話を通しておかないといけない人物がいることに俺は気が付いた。

「そういえば一夏君よぃ」

「なんだ？」

「千冬さんに話を通して置いた方が良いんじゃないのか？」

「あ」

忘れてたな、お前。

そういいたくなる気持ちで一杯だ、やっぱ原作を見て感じていた通りに危機感に薄くて、あまり頭が回らない阿呆の可能性が出てきた。
無意識に女性を堕としていく手腕は凄まじいんだが、なぁ？　向こうの千冬さんがハラハラして見守っているのも頷ける。

それから一夏君は携帯で千冬さんに連絡を入れるんだが、何か向こうの様子がおかしいらしく、少しだけ悶着があった後に切れて、すぐに来ると伝えてきた。
割愛された理由だって？　一夏を落ち着かせるために神経使ってたからな、まあ、勘弁してくれ。

「それにしても……あの娘が本当に目の前にいる弾の世界の俺、なのか？」

「おうさ、まあ、お前さんとは女性と男性と言う面での違いが、ちょいちょいあるけどな」

「いや、そりゃあそうだろ」

電話が終わった後、お茶を入れてくれた一夏君は俺に質問をしてくる。
やっぱ違う世界の自分が女性であり、しかも、俺に依存しているような雰囲気なのはちょっと気に掛かるんだろうな。

その一夏だが、事情を察した箒によって俺達の部屋にあるシャワーを浴びている。
いやね？　最初は俺と一緒に入りたいって一夏は言ってきたんだけど、うん、普段なら即ＯＫ！！を出していただけどな。
こんな状況だし、一夏と箒を二人にするには危険だしな、一夏は

シャワールームに放り込んで箒には彼女の服ではあるが、着替えとなる衣服を持ってきてもらっているのさ。

ただ、シャワールームに入る際に一夏が俺を一昔前のＣＭであった、チワワの如き瞳で見てきたのは正直堪えた……　涙目でプルプルさせながら見て来るんだしなぁ。

ついつい俺も『さあ、一緒にシャワーを浴びて楽しい時間を過ごそうか』なんていって自然を装って入ろうとしたら、こちらの箒に止められて一夏君に至っては軽蔑の視線を向けてきたのもちょっと堪えたよ。

ちょっとだけ、なんだからね！！

その一夏君なんだが、本当に、本当に信じられない。

という感情を表情に浮かべながら何かを考え込んでいるようだ。

とりあえずはこのままそっとしておこう、そう思った俺はお茶を飲むんだが……　良い腕をしている。

原作設定じゃ家事が大の得意分野との事だったが、このお茶の淹れかた……　ちょっとした店で出せるレベルだぞ……　姉に尽くす為にドンだけ練習したんだよ？　コイツ。

「度を越したシスコンの情念は家事を上手くする、ということか……」

「しみじみといきなり何を言っていやがる！？」

あ、やっべ、ワザと口に出しちまった。
一夏君は俺の言葉に猛然と反撃をしながらではあるんだが、表情は滅茶苦茶嬉しそうなのは、気のせいだろうか……？
普通の姉弟であればこんなことは言わないんだが、やっぱりこれだけは言って置かなくてはならないな。

「おめぇ、近親相姦だけはするんじゃねぇよ」

「するか！！！」

「とかいって満更でもないんじゃないか～い？」

「ッッッ！！！（こ、この怒り！！どこに！！！）」

俺のからかい混じりの言葉に怒りを顕にする一夏君、こんな反応ばかりするからからかわれることがあるんだよ～い。
なんて考えていると、部屋の扉がノックされる音が聞こえる。

「あいてるからどうぞ」

「失礼する……　五反田、着替えを持ってきたんだが彼女のサイズとかは大丈夫なのか？」

「ああ、多分大丈夫だ、向こうじゃ箒とはほとんどサイズが一緒みたいでな、それぞれの私服を貸し借りしたりしているみたいだったし」

「そうか、ではちょっと届けてくる」

「んじゃ、よろしく」

俺にからかわれてちょっとだけ不機嫌な一夏君が返事をすれば、一夏の着替えと思われるＩＳ学園の制服を持った箒が入ってくる。

まだちょっと堅いが俺とは普通に会話できるようになってくれたみたいで一安心、と言った所かね。

それから彼女は一夏に届ける為にシャワールームへと入って行き、再び俺と一夏君の二人だけの部屋になる。

「……　向こうの箒と俺って随分と関係が違うんだなぁ……」

「いや、当たり前だろ」

「そりゃ、そうだけど、さぁ……　女の子同士だからやっぱり仲の良さもちょっと違うんだな、って思ってさ」

「とりあえずは千冬さん待ちだな、向こうの千冬さんも来てくれてたらありがたいんだけど……　そんなご都合主義が」

「あるわけないって」

興味深そうにそういった一夏の言葉に補足を入れる俺だけど、まあ、当たり前の話だろうさ。

というか、一夏が目の前にいるこいつだったら、俺は……　あんな苦労を……！！

なんていう無駄な思考はさて置いて、俺はついつい思ってしまう。

こっちじゃどうかはしらないが、向こう側じゃ完璧な天然チートと呼べる存在であるあの方、千冬さんも俺や一夏と同じ様にこっちに来てくれてないかな？　なんていうご都合主義的な展開を。

流石の一夏君もこの展開はない、と考えているらしく、俺の言葉と思いに同調するようにいって来るんだが、まあ、思ってしまうよなぁ。

それから着替えて出てきた一夏と箒なのだが、なぜか一夏君が一夏に見惚れたりなんていうヘンテコな展開があったんだが、ちょっと勝手ながら割愛だ。
ちょっとダケのやり取りを入れれば。

「おめぇ、シスコンの次はナルシストか？　属性広いな」

「一夏！！キサマ何を考えている！！目の前の女性は別の世界のお前だぞ！！」

「わ、分ってる、分ってるって！」

「弾、お茶……　貰えるかな？」

「ほいよ」

ドン引きの表情で突っ込んだ俺に、怒髪天をつく勢いで怒る箒、慌てて弁明する一夏君、そんな状況に興味なしの一夏。
というばらばらな反応だったりするが、ここで、再び部屋の扉がノックされる。

「入るぞ一夏」

「失礼する」

今度は一夏君の返事を待たずに扉が開き、千冬さんが、二人、部屋に入って来る。

へ、いや、ちょ、ま……　えええぇぇぇぇ！！？

俺は一瞬で混乱の只中に陥り、なにごとかを言い訳していた一夏君も怒っていた箒も口をポカーンと開けて呆然としていた。

「姉さん！」

「一夏に弾、やはりお前達も来ていたようだな」

いや、まさか本当に？　なんて考えている内に一夏が自分の姉の方の千冬さんに抱きついて、彼女は苦笑を浮かべながら彼女を受け止めている。

それをこちらの千冬さ面倒だな、こっちのは織斑先生で良いか……は微妙な表情で一夏と一夏君を見ているから、既に説明は済んでいるんだろう。

ぼそぼそと、まさか本当だったとは、とか呟いているし、さっきの電話の最中にちょっと様子がおかしそうだったのは、この所為だったんだなぁ。

なんて、のんびりと考えていた。

それから場所はアリーナに移り、一夏君＆箒　ＶＳ　一夏という図式でのＩＳ模擬戦が行われようとしていた。

え？　いきなり過ぎだって？　しょうがないからダイジェストで紹介だ！！

千冬さんと織斑先生（こっちの千冬さんネ）に事情を説明、その後、和気藹々とお茶を楽しんでいたのだが、一夏の持っているＩＳ【粉雪】が一夏君の【雪羅】とは全く違うと言うことが判明。

見せるついでに模擬戦してみてはどうか？　と千冬さん提案、当初は一夏と一夏君の一騎打ちだったのだが、千冬さんが挑発！！晴れて二対一という図式の出来上がり。

といった具合だ。

え、データとか、存在しないＩＳのこととか大丈夫だって？　大丈夫、さっき俺が魔力を使ってちょちょいのちょいと具体的に的には、某赤薔薇さんの方式で今回ここにいる面子以外にはデータお閲覧が出来ないように細工してあるからな、一夏君の口から漏れても

問題ないのさ、というか、漏らしてもデータがここに居る人間以外には見れないから、嘘つき呼ばわりされるぞ。
と言ったら漏らすかよ！！と言いながらも頷いていたし問題ないだろう。

アリーナを借りた理由はまあ、一夏君のＩＳのデータ取りとかでっち上げたらしいし、そこも問題ないだろう。

まあ、時間を戻すと、目の前のモニターには油断なく相手を見ている一夏に、あまりにも形が違うことで驚きの色を隠せない一夏君に箒の姿があった。
あ、因みに箒を名前で呼ぶ許可は貰ったよ。

「弾、お前はどちらが勝つと思う？」

「一夏っしょ」

「私の弟である一夏も箒と組めば良い勝負をすると思うが？」

「安心しろ、貴様の弟なぞすぐに負ける」

「……　なに……？」

千冬さんが俺に質問をしてくるが、まあ、答えなんぞ決まりきっ

ているわな。
　一夏はアノ特訓を乗り越えて殻を自分の手で叩き割って十分な猛者となった少女だ、未だに殻に篭って他人に後押しをして貰わないといけない一夏君とはレベルが違う。

　まあ、織斑先生としては自分の弟に教え子を応援したい気持ちなんだろうが、千冬さんに一瞬で一蹴されてしまい。
　えー今現在、ここは凄い殺気と怒気に包まれて大変なことになっております、俺の胃袋がキリキリといい始めたのは、気のせいじゃないよ、ねぇ？

　その上に織斑先生に見せ付けるように俺と腕を組んで、恋人同士という雰囲気すらも強調する千冬さん、あ、織斑先生からの眼力が強まったぁ！！？

「フン、年下趣味か……」

「年下で何が悪い？　私が自分で選び惚れたのだ、文句は言わせんぞ？」

「……　チッ」

　そんな感じで睨み合う千冬さんに織斑先生とその間に真っ向から挟まれる俺……　か、勘弁してほしいなぁ……
　なんてダラダラと冷や汗を流しながら、考えている間についに模擬戦が始まるのだった。

突然の模擬戦ではあったが、一夏の心は落ち着いていた。
それ所かあんな特訓の後でやれる初めての模擬戦、しかもこちら側の自分と箒と来ている。

予想外の展開だったが、一夏は深呼吸を一度した後、こちらの一夏と箒を見据える。

「先制はもらう！！」

それと同時に宣言して突っ込んでくる箒の雨月と空裂の二刀による斬撃を、危なげなく回避した瞬間に彼女はライフルモードから、発射される雪片参型を突っ込もうとしている一夏へと撃ち込む。

「なっ！？」

「どうした！一夏！！」

「気をつけろ箒！！これは……　雪片そのものを飛び道具にしている！！」

「なん、だと！？」

それを一夏は防御して受け止めるのだが、その瞬間に自身のシールドエネルギーを【貫通】してビームのようなものが、直接装甲へと襲い掛かってきたために驚きの声を漏らす。

彼の驚きの声に雨月のビーム刃を駆使して一夏に攻撃を仕掛けるのだが、時に左腕のシールドで受け流され、時にはシールドが大型のエネルギーフィールドを展開、それを持って全てを無効化したりといった感じで、防御されていた。

時折は避けてはいるので、どうも彼女へのダメージにはなっている様子ではある。

「くっ！！あのライフルから放たれるビームさえ警戒すれば！！」

「甘いよ」

「なっ！！ぐ！」

「箒！！」

一夏が向けた雪片参型ライフルモードの射線から自身の体を外した箒は、次の瞬間に彼女の両肩に浮かぶ非固定浮遊部位に、左右対称で三基ずつ付いているフィン状の物体の一基が稼動して自身に向けてビームを放ってきた事に一瞬の驚きを見せてしまい被弾を許してしまう。

それを見た男一夏の表情に同様が走った瞬間、相対する女一夏の顔はより無表情へと変わる。

「行って、フィン・グレイブ」

「！？　これはセシリアと同じ！！」

「ＢＴ兵器だと！？」

一夏のＩＳ【粉雪】には小型と大型の、それぞれ六基ずつのフィン・グレイブが装備されていて、これが全て解放されて一夏と箒へと向かっていく。

驚愕と言う感情を顔に貼り付けながらも迎撃する一夏と箒ではあるのだが、限界はすぐに訪れて二人仲良く【チューン！！】とでもいいそうなくらいに見事に撃墜されてしまうのだった。

ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～後編っす（前書き）

当初は理不尽側のラウラも登場予定だったのですが……　なんかバカ二人が勝手に動いたらこんな結末に……

専用の話を作ろうかな……　原作ラウラと理不尽仕様ラウラを会わせて見たら、どんな化学反応が起きるのか、自分でも見てみたいと思ったので。

ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～後編っす

つい先程アリーナで行われていた試合は一夏の勝利であっさりと幕切れになったんだが、織斑先生の呆然とした表情は珍しいものだったなぁ。

思わず写メしちゃったのは言うまでもないだろう。

千冬さんに至ってはニヤニヤと織斑先生を見ているからな、真意は読めんが……　妹が勝った事が嬉しいんだとしておこう。

「どうだ？　私の妹のほうが強かっただろう？」

「くっ！！」

か、勘弁……　勘弁してください……

千冬さんが勝ち誇った表情を浮かべて俺により密着すれば、織斑先生からの殺気と怒気が増していく。

こ、こんな所は世界が変わっても変わらないのね。

「おーおー……　怖いものだな、男のいない女の嫉妬と言うものは」

「……　いい度胸だ……　表へ出ろ！！勝負だ！！」

「良いだろう！吠え面をかくなよ！」

千冬さんがこんな言葉を言ったと同時に、織斑先生からブチィ！とナニかが盛大に切れる音が聞こえる。

自分に向けられていたら、あ、ヤバイ……　も、もれ……

と考えて、男の象徴が一気に収縮する感覚も同時に感じるほどの濃密なそれ。

まあ、とにかく、二人は同時に飛び出して一夏と一夏君たちがさっきまで模擬戦をしていたアリーナに向かって走って行くのだった。

俺が止める間もなく、な。

いや、逆に考えるんだ！！これで良かったのかもしれないと！！下手にどっちかの味方に付けば俺に向かって牙が襲い掛かったのは言うまでもないからな。

「だーん♪勝ったよ！」

なんて言いながらにこやかに部屋に入って来る、褒めて褒めて～とでも言いそうな一夏を受け止める。

尻尾とかあれば間違いなくブンブン振ってるな、これは。

なんて考えて、一夏を抱きしめて頭を撫でてやるのだった。

『うわぁぁぁぁぁぁ！！！』
『い、一夏ぁ！！』
『ほ、箒！！逃げるぞ！急いで全力で逃げるぞ！！』
『わ、分った！！』

どっかんどっかんとぶつかり合う二人の織斑　千冬の衝突音と、それから逃げ遅れた一夏君と箒の悲鳴をＢＧＭにしながらな。
え、助けてやらないのかって？　あんな死亡フラグ全開の場所に行けと？　ムリっす。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～後編っす

そして戦いは千冬さんの勝利で終わり、俺達は今現在、一夏君の部屋でお茶会としゃれ込んでいたりする。

因みに戦いが終わった後、織斑先生は負けたと言うことにモノスンゴッく悔しそうにしつつも、大人しく一夏君の淹れたお茶を飲んでいたりする。

「それにしても……　男女の違いでこれほどに実力の差があるのか……」

「ちょっと早い時期に来てたら、弾にフォローしてもらわないと戦えなかっただろうけどね……」

「確かにな、夏休みの終わりに個別特訓した時にやっと壁を破壊できたんだし」

「成程な……　だが、お前は女性の一夏以上に強いとも取れるが、そうなのか？」

「ああ、一夏の近接格闘に射撃戦闘技術を鍛え上げたのは俺も一枚

噛んでるさ」

「むぐむぐ（洋館美味しいな）」

内心では複雑なのだろう、箒はかなり微妙な表情をしながら一夏を見て言っていた。

その一夏は箒からの問い掛けに、ちょっと照れくさそうにしつつも、自分の実力を把握しているようで、そう言っていた。

そんな彼女達の会話に付け足すように俺の言った一言に、箒は納得と更なる疑問をぶつけてくる。

俺は彼女の疑問に答えると、驚きの表情を見せ、一夏君も同じ様な様子を浮かべていた。

だけど、一夏はとっくに興味を失ったのか、羊羹にパクついていた。

こいつって、こんなにフリーダムだったっけ？　それに模擬戦の後から、一夏君に対して妙に冷たいと言うか、辛辣と言うか……なんか変、なんだよなぁ。

「って、じゃあ待てよ、それじゃあ女の俺「まって」な、なんだよ？」

「言っておくけど……　貴方が私だなんて、認めないから」

「なっ！？」

「おい、一夏、どうしたんだ？」

一夏君はなにかしらの疑問を俺達にぶつけてこようとしたんだが、一夏が顔を上げて急に言った一言で場の空気が凍りつくような気配を感じる。

事実織斑先生は一瞬だけ呆然としたが、今は怒気に近い感情を抱いているようだし、千冬さんは妹が急に言った一言には流石に驚いたらしく、目を丸くしている。

箒のやつも同じ様で、先程までは和やかに自分とも会話していた一夏の豹変ともいうべき態度に、驚いているようだった。

俺の言葉を聞いた一夏は、天才が他人を見るアノ瞳と同じ目で一夏君を見ると、俺の問いに答えるために口を開いた。

「どうした？　って言われても、さ、さっきの模擬戦の前のやり取りで、コイツと私は違うなって思って」

「何があった？」

珍しいと言うか、滅多に見られない一夏の様子に俺も驚くんだが。

何をやったのかネ、一夏君……　まさか俺の一夏（おんな）を口説いたとか言うんじゃあるまいな？　だとしたら……

「弾が想像しているのとは違うと思うよ……　まあ、私が言いたいのは箒を守る、とか言っておいて何一つ守るような行動が出来なかったことと」

「……　オイ」

「……　ぐぅ」

「明らかに箒よりも弱いのに、自分が強くなってるって思い込んでるからかな」

「なっ！？　なんだ「黙っていろ、一夏」ち、千冬姉……」

辛辣を通り越して冷酷な一夏の言葉に、流石の女性には異常と言える位に温厚な一夏君もキレたらしい。

憤怒の形相を浮かべて立ち上がろうとした瞬間、織斑先生が凄まじいまでの眼光を光らせ彼を鎮圧する。

すごすごと椅子に座りなおす彼だが、納得していないのは明らかだろう。

まあ、こんなこと言われてはいそうです、なんて納得できる人間なんてこの世にいないしな。

もう既に磨耗してしまっている原作知識の中でも、唯一といって良いくらいに覚えているのが、一夏君の大口と言えて危機感も何も感じない言葉だ。

普段からそんなことを思わない一夏にとっては、不愉快に写ったんだろうな。

「まあ、向こうの一夏が抱いたものも間違いではない、恐らくは一夏の言葉や考え方が原因だろうな」

「やっぱり思ってますかね？」

「当たり前だ、コレの危機管理能力の不足具合にはハラハラとさせられるからな、先程行わせた模擬戦で男と女で、その辺がどう違うのかも見極めるつもりでいた」

「流石だ……　天然チートブラコンは伊達じ「何か言ったか」な、ナンデモアリマセン……」

流石は世界が変わっても織斑　千冬と言う存在だろう。

弟の危険な部分を見極めていて、平衡世界の存在とどう違うのかも見極めようとするとは……

織斑先生にギラリ！とした眼光を向けられて、続きの言葉は言えなかったけどね！

ん、まあ、その後のことは割愛するんだが……　一夏君哀れ……　と言うべき状態になったのは言うまでもない。

別世界の女になった一夏に徹底的に駄目だしされた後、二人の姉からも同様に駄目だしされていたんだし。

その間箒はといえば、何かオロオロしていたからなぁ。

向こう側とは違って人生経験もそんなにつめなかったんだろうな、向こう側の箒ならば、間違いなく嬉々として一夏達の尻馬に乗りつつ、落ち込んでいる相手へのフォローもするだろうしな。

えー今現在、俺の目の前にある壁の所には瘴気すら纏って何かをブツブツ、ブツブツ、と言って体育座りで蹲っている一夏君がいます。

ちょっと聞き耳立ててみれば。

『俺って男だったら存在しちゃいけないくらいの存在なのか？』

『弱い、俺って滅茶苦茶弱かったんだぁ……　あ、あは、ははあ、はあは、あははははは……』

『今の光って何だろう？　彗星かなぁ？　でも彗星だったらもっと

パァッて散るから違うよなぁ』

ヤバイ、精神崩壊を起こし掛けとる。

最悪な事に、ちょっとだけ目に入った蛍光灯の光を見て、彗星とか思う始末……

このままじゃヤバいよなぁ。

そう思った俺は、ちょっとだけ（あくまでちょっとダケ）慌てて一夏君の肩を掴む。

それでようやく正気に返ったのか、一夏君の瞳に色が戻っていく。

「一夏君よぃ」

「何だよ……　噛ってくれよ……　この哀れな負け犬を……」

「重傷だなこりゃぁ……」

光のない瞳（所謂レイプ目）で俺を見て虚ろな言葉でそう言っている一夏君。

ふむ、やっぱりこういう時には気分転換だよね！！

そう思った俺は、更に口を開くのだった。

「一夏君よぃ」

「……　なんだ？」

「気分転換に行こうじゃないか」

「は？」

がっし！と肩を掴む俺に変な気配を感じ取ったのか、一夏君はいやなものを感じる視線を向けて来るんだが、すぐにそれを意識の奥にやる。

そして、俺の言葉を吟味しているようであった。

「まあ、な……　今のままだと、変な方に流れていってしまいそうだしな、行ってみるか」

「よぅし！そうと決まれば出かける準備だ！！ついさっきお前さんの声帯模写で、マヤたんの許可はもらったし行くぜぃ！！」

「お前って奴は何時の間に……　まあ、良いけどな」

ここに来てようやく明るい表情を見せてくれる一夏君、よっし！

んじゃ、夜の街に繰り出すとしようかい！！

と、ばかりに俺達は夜の街へと繰り出すのだった。

無論のこと、俺は認識阻害の魔法を掛けて、ＩＳ学園を出るまでは存在を近くできないようにして、学園の外に出た後は織斑　一夏と五反田　弾と言う人物ではないという結界に変えたけどね。

それから数時間後、とっくに日付は変わり、真夜中と言うか明け方と言うべき時間帯に、俺は一夏君に肩を貸してやって歩いていた。

「飲み過ぎだってぇの、酒は飲んでも飲まれるな、だぞ？」

「うぅ……　す、すまん……」

理由はといえば、気晴らしに最初は居酒屋、続いて向こう側で評判だったキャバレーに、また居酒屋といった具合に数件を梯子していたのだよ。

この際に酒を飲みなれて異な一夏君が、三件目でダウン。

と言った感じだな。

え、お金？　ああ、心配は要らないさ、俺の財布の中にこっちに来る前に予め二十万くらい入っていたから、二人分でしかも三件程度の呑み代なら安いもんさ。

それに、安くできちんとお姉ちゃんに相手してもらえるのみ方ってものが、キャバレーにはあるんでな。

そこも問題は無い。

「で、気は晴れたか？」

「まあ、な、酒を飲んで色々とぶちまけて、ちょっと楽になったか、な……？」

「それは重畳だ、三件目で粗相までした甲斐がないよな？」

「……　言うな、それに粗相はしてない……」

そう、ダウンしたと同時に一夏君は、まあ、その、なんだ？

粗相をしちゃったわけだ、まあ、俺に掛けられたわけじゃなくて、ギリギリでトイレに間に合いはしたんだけどな。

まだ顔色が蒼いけどな。

えーと一夏君が飲んだのは、最初の居酒屋で大ジョッキのビール三杯に、キャバレーでは焼酎のお湯割りニ杯、最後の居酒屋でウーロンハイに梅酒を一杯ずつに、生酒にウィスキーを一瓶ずつ。

うん、普通に呑まれとるな。

まあ、俺も生酒とウイスキーは飲んだけどね。

それに初めてだったから、飲むペースもつかめなかったんだろう。

まあ、これから社会に出たときに今日の経験が役に立つぜぃ、若人よ。

なんて言ってしまいたくなる位に、見事な飲み屋さんでの失敗談になったな。

「こっちの俺とはたまにこんなして遊んでいるのか？」

「まあなでもやっぱり、悩みってのが、違うからさ……」

「確信的なことについては、やっぱ無理だって事か」

「そうだ、どいつも女の園に一人だけって言うのは羨ましすぎる！！っていう奴しかいないからさぁ」

俺の問い掛けに遠い目をして、尚且つ、未だに悪い顔色を無視し

て声を絞り出す一夏君。
俺の場合は、まあ、イロイロと好き勝手にやってきて気晴らしをやってきたんだが、やっぱストレスはたまり放題にたまっていたらしい。

梯子して飲んでいる最中に、かなり凄いことを言っていたしな。
え、それが何かって？　まあ、一夏君の名誉の為に秘匿だな。

そんなこんなで、俺達は一夏君への家（向こう側では一夏の家でもあるが）へと歩いていく。

「そういえば、前に帰ったとか言っていたが何時くらいの話だ？」

「つい一週間くらい前の話だけど、男二人で夏だし、布団出さないで客間でそのまま寝れば良いだろ？」

「だな、こういう時に男ってのは気楽だよな」

「ああ」

そう言って本当に楽しそうにしている一夏君なんだが。
ちょこっと気になるところがある。

どこかって？　肩を貸してさっきからはマシになったんだろうか、血色も良くなったんだけど、密着して来るんだよ。

オイオイ……　まさかたぁ思うが……　前世の掲示板で一時期話題になった噂【織斑　一夏はア――ッ！な趣味だからヒロインの思いに鈍感】って言噂は本当なんじゃあるまいな！？

き、キャバレーとかでお姉ちゃんと飲もうとせずに、俺と一緒に飲もうとしてたのも、もしや……

尻が嫌な緊張感で縮まる思いをしながら、俺達は遂に一夏君の家に辿り付くんだが。

「そんじゃあ鍵を開けるか」

「それにさっき近くのコンビニで酒も買ってきたからな、飲み直そうぜぃ！」

「まだ飲む気なのかよ、弾……　俺はパス、流石に気持ち悪い」

カチリ、と扉が開いて俺と一夏君は家の中へと入っていく。

地獄への一丁目へと招かれているとも知らずに……

次の日、というか意識を取り戻した時、俺はＩＳ学園の自分の部屋に戻ってきていた。
俺の私物があるから、自分の部屋だと分るんだが……
二つほどマジで思ったことと、気がかりなことがある。
それは。

「し、死ぬかと思ったぁ……！！」

目が覚めてまず思ったのはこれだった。
何しろ、あの後に起こったことが事だからだ。
そして、気がかりなことは。

「一夏君は、無事だろうか……？」

そう、一夏君の安否だけだった。
あの後に何が起こったのか、そのことをちょこっとだけ語ろう。

深夜で真っ暗な家の中を進んで行く俺と一夏君。
特に会話らしい会話はなく、俺達は靴を脱いで、リビングへと向かう僅かな距離のなかで、俺達はそれを聞いた。

「なんだ、この音？」

「包丁か何かの刃物を砥いでいる音…？　それも二つ分……　一夏君、織斑先生たちは……」

「出かける前に寮長室で食事をしていたから、ありえないって言いたいけど……」

「逃げるぞ」

「ああ」

そう、包丁か何かを砥いでいると思われる独特の音、少なくとも、こんな暗闇で聞きたくなんぞなかった音だ。
俺と一夏君の表情と言うか、今、俺達の頭の中を埋めている感情

は、恐怖、これ以外にない。

ともすればパニックを起こしそうではあるが、俺も一夏君も、こんな状況でパニックを起こすほどやわじゃないからな。

逃げることを決意、踵を返した瞬間、俺達は千冬さんと織斑先生のアイアンクローで持ち上げられる。

「「イデデデ！！！」」

「随分と」

「楽しんできたようだな……」

「「二人とも」」

無表情で俺達を持ち上げる二人の千冬さんと、持ち上げられる俺達。

っつーか、成人近い男二人を苦もなく持ち上げるってあんたら！？

俺達は必死で拘束を振り解いて、逃げようともがくのだが、先に一夏君の力が抜けていき、後に続くように俺も力が抜けていくのだった。

「ねえ、弾……　シャツの右腕についてる口紅はなに……？」

「ば、バカな!?　全部落としたは「ほぉ、それはそれは、とても面白いことを聞いたなぁ」……　っ!!」

「お前もだぞ、一夏……　首筋のそれはなんだ?」

「そ、そんな!?　俺は気をつけていたはず「随分と面白い言い訳だな、一夏?」っ!?」

そして、リビングの扉が開いて出てくる一夏と箒の姿、今度こそ俺達は恐怖と言う感情に支配されてしまい、ガタガタと震えながら千冬さんの手をタップして、ギブアップ!と言う意味に近い意味のジェスチャーをしていたんだが。

彼女達は無視すると……　っ!!!?

そして、俺は命を拾って戻ってこれたことに安堵しながら、シャワー室の扉を開ける。

そこにある鏡を見たら、某ひぐらしの竜とレの付く方の恐ろしい姿に似た一夏が俺の後ろに立っていた!?

思わず腰を抜かしそうになる自分を叱咤して、一夏を見ているんだが、彼女の右手は背中に隠されていて、全く窺えないことが恐怖を煽ってしまう!?

それから彼女は俺にゆっくりと近付いてくると、背伸びして俺の耳元で妖しく囁く。

「こんど、あんなお店に行ったら……　ワカってる、ヨね?」

と。

その彼女の言葉にはコクコクと勢い良く俺は首を縦に振る以外に道はないのだった。

ＰＶ３５０万記念　原作との邂逅！？～後編っす（後書き）

これを投稿する前にたちの悪い毒電波を受信というか、久しぶりに動画を見ていたら思いついたネタ。

興味のある方はどうぞ。

ただし、ナニを見たとしても当方は責任を負いかねますｗｗ

この物語が迎えるその結末は必然だったのか……

ＩＳ学園内に鳴り響く非常警戒を表すアラーム。

教師部隊に加えて全学年の精鋭で構成された部隊は、今。

たった一つのあるモノによって蹂躙されようとしていた。

「一夏！シャルロット！奴に火線を集中しろ！！」

「了解！織斑先生！！」

「了解です！！」

今や最強の一角に名を連ねることの出来る麗しき二人の美少女。
そんな彼女達が恐怖、と言う感情を顔に貼り付けて迎撃する先にいるのは。

「あ、あぁん！だめよぉん！わ、我輩……　いくぅぅぅぅぅん！！」
「なんなの！これ！？」
「シャルロット！弾の、弾と皆の仇を！！絶対にとるんだからぁ！！」

見るもおぞましいそれに蹂躙される麗しき戦士たち。
既に大量の者達が犠牲となっているらしい。

おぞましいソレの後ろには顔面に紫色のキスマークの付いた生徒達の姿に、教師達の姿が見える。
犠牲となった者の中には愛しき者もいたのか、一人の少女は憤怒の表情を浮かべ、もう一人も怒りと恐怖と言う相反する感情を顔に貼り付けていた。

だが、それからすぐに限界は訪れる。

「あ～ら、貴女も可愛くて、す・て・き！よん★」
「し、しまった！？」
「一夏ぁ！？」

そして、一人の少女は抱きしめられて、必死の抵抗を見せるのだが、それをおぞましいモノは意に介した様子も無い。
彼女の顔を上げて、唇を不気味に尖らせていった。

（も、もうだめなの！？　やだ、やだやだやだやだ！！）

絶望と言う感情で少女の心のうちは埋め尽くされていき、もう少しで唇が重なろうかと言う瞬間。

「あ、あぁぁぁああんんぅ！強烈よぉーん！い、イクゥゥゥ！！！」
「そこまでだ！化け物が！！」
「っ！？　弾！！」

一人のヒーローが現れる。

という毒電波でした。
……　一度病院でカウンセリングでも受けたほうが良いのかもしれない。
これが出てくるアニメとはまったく別の動画を見ていて、思いつ

いたから。

同じキャラが使われているＳＳとか動画じゃ特に受信しなかったと言うのに……

第４２話　生徒会長登場と言うか、本当にあの人ってスタイル以外は残念なお人

夏休みが遂に終わってしまい、新学期初日の朝となってしまう。
そんな状況下、まだまだ登校までには余裕のある時間帯、俺がなにをしているのかといえば。

「ほれほれ、ここか？　ここか？　ここがえ～のんか？」

「に　ゃ、にゃ　ぁぁぁあああ！！」

と言って、疑似ＩＳコアを量産しているなかで、一番功績のあった猫に【ムツゴロウさんの黄金の腕】という、なんかふざけたネーミングの能力でマッサージを施しているのだった。
これを思い出したと言うか、特典に含められていたと気が付いたのは、実は二日前だったりする……

しゃあないやん！！俺が望んだ特典って、ＦＦ７ＡＣのクラウド並みの身体能力とアンサートーカーだけだったんだし！他の魔法とか、イロイロな能力は押し付けられたと言うか、強制的に付与されたものばっかりだったのさ。
あの台本がないと台詞を正しく言えない女神さんを怒らせたのは、まずかったなぁ、おかげで一夏は女にされていて俺と強制的に知り合う結果になるわ、その上に原作からは絶対に逃れられない特典ま

で付くわとサイアクだったし。

まぁ、俺自身でも与えられた能力の全てを把握しているわけじゃないからな。

探すともっと酷いのが出てきそうだ。

探そうと考えて、探したくはないけどね……

例えば某獣戦系の【野生化】とか……　これだけは確信がある。

何しろ、初めての行為の後に一夏が俺がハーレムを築くことを了承したというか、ハーレムを築いてと言ってきたし。

えちぃ事には何か、かなり暴走してしまうからさ……

まあ、そんなこんなで俺は猫を撫でてやるのだった。

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第４２話　生徒会長登場と言うか、本当にあの人ってスタイル以外は残念なお人だと言える。ただ、足元には要注意だな！～

その後、ヤバい系の薬を決められたように身悶えている猫を佐助と小太郎の二匹が迎えに来て渡した。
今日は新学期開始だからか、ちょっと早めの時間であっても食堂の中は生徒で混み合っていた。

「弾！こっち、こっちー！！」

「おう」

すぐに出てきた【豚の生姜焼き定食】を持った俺は、いつものよ

うに集まっている一夏達のいるテーブルへと向かっていく。
既に全員が揃っているらしく、彼女達の朝食は半分ほど消えているから結構時間が経っているようだ。

「今日はちょっと遅かったよね？　どうかしたの」

「ちょっと寝坊してな、まあ、間に合うような時間でもあったから特に慌てることなんてなかったけど」

「そっか、でも、夏休みは終わったんだから起きる時間を調整しないとね」

「そうだな」

いつもよりも遅い時間に現れた俺に対して、疑問顔で問いかけてくるシャルロットの言葉に答えていた。
ふむぅ……　昨日は誰ともそういうことをしてないよ？　まあ、あいつ等からの中間報告もあったしな。

コアも五千を越え、ある連中に渡す予定の量産型第一世代の生産も順調との事だったけど……　本当にあいつらって、犬と猫か？

食堂にはきちんとコックとなっている猫と犬達がいたし、機関室も同様……　耳が良いからか、ソナー主だけは恐らくは人間よりもソナーを使いこなしているだろう。
どこからか調達しているのか野菜も肉類も完璧に食糧子に備蓄さ

れていた上に、何故かというか、いつの間にかマドカちゃんの私室が出来上がっていた。
　たまに来ているらしい、厳しい潜水艦の部屋の壁を彩るようにファンシーな亀のぬいぐるみとか、簡易的な化粧台があったのは……なんか凄いシュールだったよ。

　だけど一ヶ月も期間が開いた後の朝食の場では、再会を喜んだりとかなにをして遊んだのか、とかを姦しく語る女子の姿があちらこちらでちらほら見受けられる。
　そんな連中を横目に軽く見ながら俺は生姜焼きを頬張っていく。

「ふむ、たまには日本の食事も良いものだ」

「ちょ、なんでそれが……？」

「え、っとさ、ラウラがねリクエストしてたんだって、さ……」

　だけど、そんな和やかな風景の中で唯一と言って良いくらいに気になるものがある。
　そう、ラウラが食っているものの存在だ。

　俺の質問には言いにくそうに鈴が答えるんだが、シャルロットやセシリアといった連中は興味津々、と言った様子で眺めている。
　一夏と箒の表情は形容しがたい微妙で複雑なものを浮かべているのが、印象的だ。

そう、それは。

「お子様ランチ……」

お子様ランチだったのだ！！
おわんと言うか山の形に盛られたチキンライスに立てられた旗、
ハンバーグにコーンスープ、ボイルされている野菜に、付けられた
おまけの玩具に付けられたぷっ○んプリン。

完全再現！！とも言うべき感じだった。
因みにおまけの玩具は箱だけの再現だったらしい。
ラウラはどうでも良さそうだったがな。

「それが、この国でのお子様ランチですのね……」

「へぇ、その玩具って普通はどんなのが入っているんだろう？」

「なんでも男の子の場合にはミニカーで、女の子の場合にはコンパクトと言ったものらしいぞ」

「へぇ」

「そうなんですの」

何気に詳しいラウラのお子様ランチの知識。
どうして詳しいんだ、こいつ？

「フッ、日本でのもう一つのミッションの半分を達成だ」

「もう一つって何だよ……」

「旦那様、今度の休みに私と一緒にファミレス行ってほしい」

「大体読めたわ……　あんた、ファミレスのお子様ランチを食べるつもりね？」

「うむ！クラリッサに自慢してやるのだ！私は奴の憧れの日本をきちんと楽しんでいるのだ！と！」

ラウラの体型なら問題なく注文が通るだろうけど、本当に原作の彼女はどこに行ってしまったんだろうか？
原作世界にこのラウラが行ってしまって、向こうのラウラと出会ったら……　激闘が勃発するか、このラウラが向こうのラウラを丸め込んで終わるかのどっちかだな。

なんて考えていた。

「ん、そういえば、クラリッサさんって言えば、彼女、俺達が夏休み中に日本に来るとか一度聞いたが何か合ったのか？」

「ああ、そのことか……　簡単だ、奴が申請していた休暇が突然見つかったテロリストの拠点制圧で潰れてな」

「……　そのままなし崩し的に日本への観光を含めた休暇は全崩壊ってわけか」

「フッ、そうだ、あの時の奴の形相は凄まじいものだった、だが、拠点制圧じゃなくて拠点消滅戦を奴が行ったのはやりすぎだといえるがな」

うわぁ……　と言いたくなるくらいに意地の悪いラウラの表情。

クラリッサさんの悔しさと言うか、そんな感じの表情がよほど凄まじかったのだろう。

無論のこと休暇は合っただろうけど、長期と言えるような、それも日本に旅行に来れるくらいの長さも物は取れなかったはずだ。

日本贔屓で楽しみにしていたであろう休暇を潰された彼女の怒りが降り注いだであろうテロリスト達、普通ではやらないが彼らについては不幸だったな。

なんて感じで本当にちょこっとだけ同情しよう。

「でも、それがどうしてお子様ランチの任務に繋がるのよ？」

「クラリッサも実は食べたがっていたからな、日本のお子様ランチ、と言うものを」

なんて言えば良いんだろう？　原作で本当にクラリッサって、こんな感じキャラだったんだろうか？

一度本気で会って見たいと思うが、叶わない願いかね……　転生者かどうか、確認を取りたかったんだが……

もしかしたら、もう一人俺が元いた世界からの転生者かもしれないし。

それから朝食もＳＨＲも終わって午前中の中頃の授業は、実習が待っていた。

相変わらず広いロッカールームだな。

これを俺一人で使えることについてはちょっと優越感と言うか、

そんな感じのものがあるがね。
とっくに着替え終わった俺は、シャルロットのアルテリオンのスラスターデータを開いて、それをある程度まとめていた。
無論のこと、時間を気にしながらではあったけどな。
でも、やっぱり思う。

「やっぱり、足元に気をつけないとな……」

「え」ガチャン！

俺の後ろに近付いてくる気配が消えきった、ある意味違和感だらけの気配の持ち主。
確実と言うか間違いなく生徒会長だろう。

かんちゃんの気配とは全く違うし、なにより、彼女はかなりの初心さんだったしな。

だ・が！今のこのＩＳ学園は佐助と小太郎に命じて、俺が良く利用する所には【俺の合図一つ】で発動する大量のトラップがあるのだ！！
今のトラップは単純に落とし穴だ！！大体数ｍ落ちて、昆布だらけの海水に浸かるんだ。

まあ、昆布や海水で結構悲惨なことになるのは言うまでもないな。

「お、時間だな」

時計を確認すれば、始業まで後五分を切っていたから、俺はいそいそとロッカールームを出て行った。

その後。

「フ、フフフフフ、フフフフフフフフフ……　この更識家当主を罠に嵌めるなんて、やるわね……　五反田くん」

校庭に出口を作っていたから、そこから出てきた会長が昆布まみれ&海水をポタポタと滴らせながら、怪しすぎる低く昏い笑い声を上げていた事等、俺は知らん。

というか、接触しようと思うんなら普通に来いってんだ。

あんたはエロい方面での接触は天災と同じくノーサンキュ！だけどネ。

そして場所は移り変わり、実習となるんだが、珍しいことに二組と四組の合同授業となっているのも特徴だな。
今日は新学期初日と言うことで、専用機持ちの俺達が一対一の模擬戦を行う、と言う授業内容になっていた。

因みに対戦の相手は千冬さんにしては非常に珍しく、くじ引きで決めさせていた。
何でも、これなら恨みっこ無しの公平な選定となるから、と言っていたんだが、やっぱり意外だったよなぁ。

まあ、それはそれとして。
俺ＶＳセシリア、鈴ＶＳ一夏、シャルロットＶＳラウラ、箒ＶＳ簪と言った具合だ。
これはそのまま対戦の順番になっていて、早速俺とセシリアの戦いが行われる。

「くっ！！（流石は弾さん、射撃も回避も防御も正確に行っていますわ！！）」

開始と同時に俺はビットを四基解放セシリアへと向かわせると同時に、ファルシオンを右腕にのみ展開して粒子ビームを放っていた。
猫や犬達に預けていた間に微妙に強化されていたのには、ちょっとビックリしたが、まあ、些細なことだよな。

ともかく、正確に狙いを定めつつ回避も続行しながら、俺はセシリアへと攻撃を仕掛けて、彼女の反撃の糸口を遮断していっていた。

「お行きなさい！！ブルー・ティアーズ！！」

セシリアはビットと俺の攻撃の最中に僅かに出来た隙を付いて、彼女のビットを弾道型以外の全てを解放して、俺のビットへの攻撃に当てる前までならば、ここで数基を撃墜できただろうが。
ブルー・ティアーズのレーザーはドラグナーに直撃したと同時に、レーザーは無力化される。

「なっ！まさか、アンチコーティング！？」

「そういうこった！！」

「くっ！」

流石のセシリアも、アンチコーティングが施されているビットには驚きを隠せない様子だったんだが……　良かったぁ、アンチコーティングがされている奴に命中して。

え、どうしてって？　決まっているさ！コーティングが間に合ったのが二基しかなかったのＳＡ！

だから残りの十基は、以前と変わらないんだよ。

だが、これでセシリアに疑心暗鬼を齎せることができた。

彼女の中には生まれたはずだ【ビットが全てコーティングされている】というものか、されているかもしれない、という二択の考えが。

そして、彼女の動きは迎撃から回避へと変化していく。

『セシリア！俺にもう一つの武装、そうだな……　複合剣かグングニールでも出させたら、デートでもしようか、お・と・な・の』

「なっ、なななななななぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺の言葉を聞いて一気にボンッ！！！という効果音と同時に顔を真っ赤にさせて行動そのものが停止するセシリア。

え、この言葉だけで真っ赤にというか、行動不能に？　あ、やっべ。

「避けろセシリア！！」

「え、っ！！キャアアアァァァァ！！！」

「セシリアー！！？」

行動が停止したからといって、自立的に行動していた俺のビットが止まる訳はなく。

まあ、なんだ？　あっさりと、ドッカーン！と撃墜されちゃったわけだ。

慌てて俺はＩＳを解除されたセシリアを受け止めると地上へと下りて行った後、一夏や箒たちからセシリアに言った一言でのお仕置き（セシリアの心を戦いのなかで弄ぶな！！的なもの）をされてしまい。

千冬さんにはセシリアへの埋め合わせを必ず行え、と鬼の表情で約束させられましたとさ……　まる

あ、因みに他の戦いは、一夏にラウラと箒が勝ち星を挙げて終わったよ。

一夏と鈴の方は、燃費と性能に武装威力が甲龍とはダンチといえる存在に【化けた】からか、ほとんど勝負にならないで終わった。

その次に行われたシャルロットとラウラの戦いは本当に僅差の戦いで、激闘と言えるくらいだったんだが、アルテリオンのフィール

ドチャージが終わらない内に使おうとすると言う、シャルロットのポカによって決着が付いていたりする。

箒と簪の戦いも一夏達と似た感じだったけど、やっぱり暗部に所属している人間故に、と言う感じで食いつく簪に手を焼く箒と言う図式が繰り広げられたが、まだ安定起動していないツインコアの機能は何も発揮されず、パワーアップした箒の前に簪が敗れ去ってしまう。

だけど、打鉄弐式にもう一つ搭載されていたコアを発見した千冬さんとシャルロットの視線が怖かった……　ちびるかとおもったよ……

でも、やっぱり今夜辺りに話しておくかなぁ……　今の状況って言うか、そんな感じのことを。

なんて事を考えながら、ちょこっとだけ鬱になりそうな俺がいるのであった。

こうかくと、ちょこっとシリアスになりそうなのは気の所為かね？

第４３話　はてさてと……　そろそろイロイロなものが動き出すころかねぃ

今正座した俺の前には、かな～りお怒りのシャルロットと千冬さんがいる。
夕食の後、のんびりまったりとしていた俺を強襲してきた彼女達によって、俺は一瞬で正座させられてしまう。

「何を考えている？」

「……　更識さんって言ったっけ？　あの娘のＩＳにもう一つ使われていたアレって……」

「疑似ＩＳコア、だ」

「やはりな」

「ど、どうして……？」

険しい意表情を壊さずに問いかけてくる千冬さん、一夏のヤミモードと言えるあの表情を髣髴とさせる様子のシャルロット。
な、なんか、下手なことを言ってしまうと、危険なことになってしまいそうになる気配がするのは……

「試して見たいことがあったのと……」

「「あったのと？」」

「彼女のＩＳ、元からちょこっと俺が弄っちゃったから、お詫び代わりに付けちゃった☆！」

「「……」」

「な、なにするだぁー！！」

ゴゴゴゴゴゴ……　と言う効果音が二人から鳴り響く中、俺は堂々と、尚且つ、某東方の饅頭の如き【ウザい笑み】を浮かべ、そう言っていた。

それを聞いたと同時に彼女達の表情は消え去り、俺は二人によって袋叩きの目に合うのだった。

酷い、ひどいやぁ……

～ＩＳ　理不尽な翼～
～第４３話　はてさてと……　そろそろイロイロなものが動き出すころかねぃ～

それから一頻り凹られたんだが、気を取り直しての説明タイムが始った。

「で、冗談は置いておくとしてだ、どうして更識のＩＳにあんなものをつけた？」

「……　そろそろ話したことが動き出すんですがね、その時に彼女と、その姉には目立ってもらわないといけないんです」

「世界の移動のための布石の一つ、と言うことか」

「うっす」

そう、彼女のＩＳ【打鉄弐式】に疑似ＩＳコアを少々偽装して搭載したのは、これが一番の理由だ。

俺達がこの世界を脱する際に必要となる混乱の中で【この世界の純粋なＩＳそのものの強さ】も重要になるのだ。

強いＩＳがある程度居た方がより多くの混乱が起き易い状況を作れるから、と言うのが主な理由になる。

「でもさ、本当に上手くいくのかな……？」

「大丈夫だ、その時が来たら連れて行く予定の全員を空間に落とすから」

「「……」」

混乱が起きて状況が満ちたと同時に、連れて行く連中全員と俺をまとめて転送する為の術式が自動で展開されて、この世界から消えるって寸法だ。

既にある程度の荷物とかは、向こう側に送ってあるからな。

もう行くだけの状況には出来ているってわけだ。

ただし、今の状況で向こう側に行くのは完全にアウトだ。
何しろ、今現在であっても世界最強の女性と妹、中国代表候補生に教師志望のフランス人生徒、天災の妹にＩＳ学園教師、これらの女性と世界で唯一ＩＳを操縦できる男が消えるんだ。
その混乱というものは、言葉では言い表せないくらいのものとなるのは間違いない。

「まあ方法はともかくとして、今の時点で、私達がこの世界から完全にいなくなるのは得策ではないな」

「ですね、気をつけないと弾の家族に危害が及ぶ可能性がありますし」

だから必要になるのが【世界が混乱すること】と言う条件だ。
それもある程度は制御できる混乱だと言うこと、それも絶対的な条件になる。

だが、下手を打てば最終戦争への引き金にもなりかねないと言うリスクも背負っているから、更に物事を運ぶ作業は慎重を期さないといけない。

「弾」

「何っすか？」

「シャルロットのＩＳに使われているコアは、男性も反応すると言っていたな」

「うっす」

「では、それを使うと言うことで間違いはないな？」

千冬さんの言葉にシャルロットも表情を引き締めてこちらを向けてくる。

最初にアルテリオンを出した時に、彼女達に言っているからだ、疑似ＩＳコアは男性にも反応する。

と言うことを、ただ、やはりこれとこれを使用した機体を各国に譲渡するだけでは弱い。

だからこそだ、それならば最初から対抗が不可能なくらいの力にして置けばよいのだ。

「詳しいことは言いませんけど、今現在、コアの数は五千は下らないとだけ言っておきます」

「なっ！？」

「い、何時の間に、そんな数を……」

流石の千冬さんもコアの数を聞いたと同時に絶句していた。
それはシャルロットも同じ様で、凄まじい驚きようを見せているから、彼女の驚きも手に取るように分る。

まあ、普通に驚くよなぁ。
製作を命令した俺がかなり驚いたしな。

もう既にコアの生産を止めさせて機体の生産を開始しているから、近い内に所定の数も揃う。

「まあ、優秀な部下？　と言うか……　なんというか……　そんな感じのがいますので」

「……　あの連中か……」

付き合いの長い千冬さんは俺の言った言葉を聞いて、どういう連中が裏で動いているのかを察知したらしい。
表情が凄い微妙なものに変わっているからな。

過去に唯一、千冬さんのスカートを捲って楽々と逃げ延びたあの二匹、彼女の記憶にも鮮烈に記憶されているのだろう。
え、どうしてあいつらが千冬さんのスカートを捲ったんだって？
簡単さぁ。

俺が命令したからなんだよなぁ……　無論のこと、バレて千冬さ

んに俺も佐助も小太郎も凹られた後、俺だけ一夏と鈴に蘭の三人にお仕置きされたけどね。

「え、えっと、織斑先生、あの連中って？」

「シャルロット、気にしない方が良い」

「は、はぁ……」

微妙な雰囲気となったこの場だが、その後は確認事項を幾つか話してから解散の運びとなるのだった。

まあ、色々と彼女達は問い詰めたかっただろうけどね、千冬さんは寮長としての見回りに戻り。

まだ部屋に残っているシャルロットと俺は……　うん、まあ、なんだ？　夜の運動を張り切って行っているのだった。

次の日、俺は疲労から来る倦怠感を感じながら、全校集会に参加していた。
まあ、内容は今月の中頃から始まる学園祭について、といった所らしい。

あくびと眠気を堪えながらざわざわと姦しい声を聞き流していた。

「それでは、これより生徒会長から説明をしていただきます」

その一言と同時に騒がしかった女子達が、一斉に静かになっていく。
それからかんちゃんと同じ髪の色をして、二年のリボンをした先輩が壇上に姿を現す。

「やあ。みんなおはよう」

「……　ふぁ……」

先輩が姿を現したと同時に俺は、遂に堪え切れなくなりあくびを一つしてしまう。
それと同時に先輩からと思われる一つの強烈な視線、眠気を我慢しながら先輩を見れば、俺をハッキリとしっかりと見ていた。
というか、見据えていた、といった方が正しいかね？

「今年は色々と立て込んでいて挨拶がまだだったね。私は更識　楯無、君達生徒の長よ、以後、よろしく」

生徒全員に微笑を浮かべて挨拶をする彼女だが、相変わらず俺に目を向けるときには、目が笑っていないのは気のせいだろうかね。
ただ単に昆布と海水塗れにしただけだというのに。

俺と目が合うと、彼女は口元にニヤリとした笑みを浮かべる。

いやな、嫌な予感がする。

「毎年、様々な部活動が催し物を行って、投票で一位になった部活動には助成金を出す、と言う仕組みだったけど今年は違うことをすることにしました！！」

逃げた方が良いのかもしれない。

「一位になった部活動には五反田　弾を強制入部させることにしましょう！」

「なにぃ！？」

『うおぉぉぉぉぉぉぉ！！！』

『流石は会長！普通ならできないことをやってのける！』

『そこに憧れたくないし、痺れたくもないのに、憧れて痺れちゃう！』

会長の言葉が発せられたと同時に、狂乱と言う言葉すら生温い状況になる。

ちぃぃぃぃ！！この世界からの逃走とかが原因で忘れていた！俺が提出しようとしていた【男性視覚研究同好会】の申請書を！！

……　提出しようとしても千冬さんに却下を喰らいそうなのは、気のせいじゃないだろうな。

せっかくまやたんを丸め込んで顧問になってもらい、部員は俺一人だけだったんだけど、申請書もきちんと書いていたんだが、夏休みのアレとかこれとか、帰ってきてからのこととかですっかり忘れていた。

そんなことを考えていた俺を放っておいて、狂乱状態の女子達は更なる盛り上がりを見せながら、全校集会は終了するのだった。

それから興奮冷めぬ内に集会は終了し、教室に戻った後は学園祭の出し物についての話し合いが行われていた。

俺はクラスの代表として様々な意見を出していたんだが、俺とツイスターゲーム、とか、俺とポッキーゲームとかとかとかとか、といった残念なものが大量に飛び出してきていた。

残念な意見とかであるが、俺自身としては大変に素晴らしいものばかりである！！なにしろご・う・ほ・う・的におにゃのことキャッキャウフフと触れ合えるのだからっ！！！？

黒板の方を向いている時に、これらを想像してだらしなく表情が緩んだ瞬間、三つの方向から凄まじい気配を感じる。

視線だけ動かして確認したら、まやたんに一夏と箒の三人だった。

セシリアもジトーと見ているから、俺の妄想に気がついてはいるんだろうなぁ。

と、とにかく、撤回させないと……

「な、何か別な意見はないか？　このままじゃ織斑先生は通してくれないと思うぞ」

俺の言葉を聞いたクラスの女子連中は考え始める。

口々に『確かに』とか、言っているから、このままだと千冬さんの怒りが降り注ぐと言うのが分っているのだろう。

どうすれば、なんていう会話が聞こえてくる中で、一人の女子が手を挙げる。

「ラウラ、何かあるのか？」

「ああ、意見なのだが、コスプレ喫茶などどうだ？」

ラウラから出てきたのは予想の斜め上というか、なんと言うかと言う言葉だった。

クラスの連中は一瞬ポカンとするのだが、普段のラウラの奇行を思い出したのか、すぐに復活して内容を聞く体勢に入っていた。

かく言う俺も一瞬だけ呆気に取られたんだが、まあ、気を取り直してラウラを見つめる。

「客受けは良いだろう、コスプレとは言ったが飲食店であれば経費の回収も行えるし、外部の招待客もいることだから、休憩所の需要もあるだろう」

「ほうほう、コスプレは一先ず置いておくとして、皆はどうだ？」

「ラウラのいうことには一理あるね、弾にはとりあえず執事とかのコスプレしてもらうか、厨房を担当してもらえばいいと思うし」

そのシャルロットの言葉を皮切りにクラスの連中は、次々と賛同していくんだが、とある人物の一言が気になる。

「では、コスプレ用の衣装は私が調達するとしよう、この前のイベントの際に伝手が出来たからな」

どことのツテができたと言うのだろうか？

気に掛かるし、聞きたいんだが……　聞きたくない、という相反する感情が俺の中に渦巻いている。

クラリッサが出てくるんならまだしも、まさか、ツテがあるなんてなぁ。

コミケで一体ナニがあったんだろうか？

そんなことを考えながらも、俺は職員室に決まったことの報告などを行いに行くのだった。

面倒なことになりそうな予感を感じながらもではあったがな。

第４３話　はてさてと……　そろそろイロイロなものが動き出すころかねぃ（後）

因みに、冒頭で弾がやったウザい表情はこんな感じ。

```
 |人人人人人人人人人人人人人人人人人人|
 >　　お詫び代わりに付けちゃった☆！　　<
 ｢^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y^Y｣
　／ｐｅｐｐｅｒ＼
　￣￣￣ｌｕｎｃｈ￣￣￣
　　／（　三（　＼
　　／（　〇）三（〇）＼
　　（　（　人　）（　：：：＼
　　￣　　ｒ┼一　　￣
　　＼　　、ﾉ　　／
　　　￣￣￣￣￣￣
```

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2860s/

ＩＳ 理不尽な翼

2011年12月7日03時45分発行